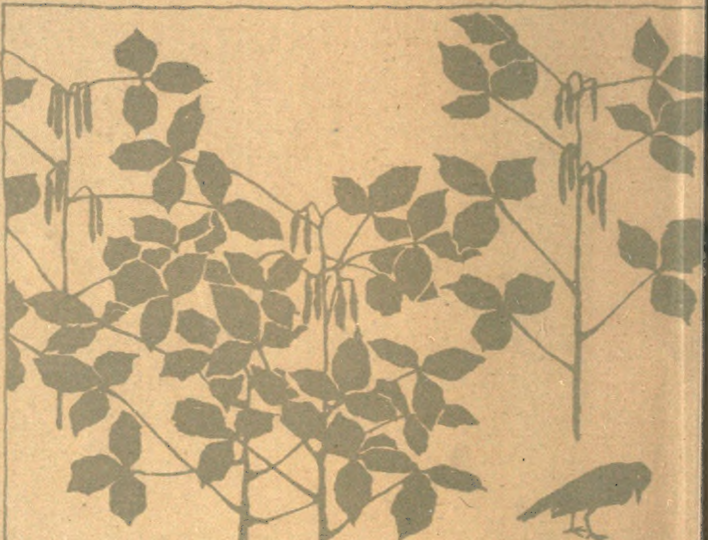
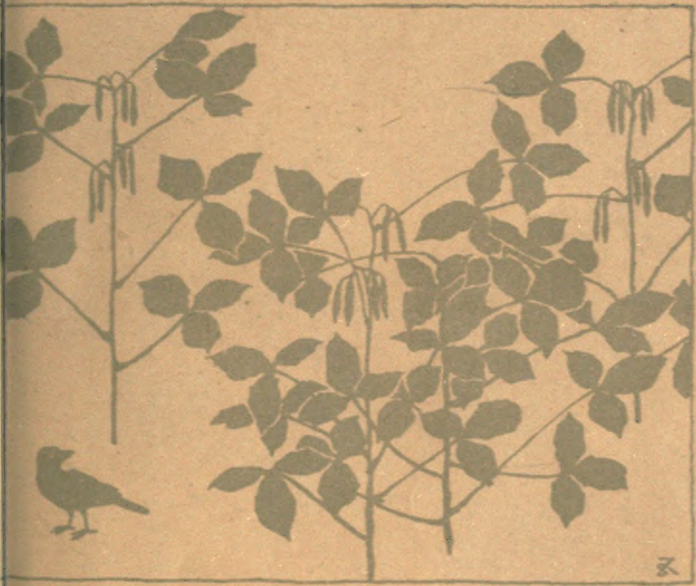




大正四年五月廿五日印刷
大正四年五月廿八日發行

有朋堂文庫
日記紀行集
（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

男子家に在りては未見の書籍を閲んことをおもひ、旅にありては未見の山川に遊ばんことをおもふ。しかれども兩ながらなすことかたし。寛政庚申、予三十四歳、九月中浣、豆相の間に遊歴す。（九月十日發江戸）先づ武州金澤を遊覽し、浦賀の友を訪うて豆州下田に渉る。相模灘三十餘里、一日難風にあうて船岬にかゝる。九月下旬にいたりて、下田の湊に遊ぶこと十日許、歸路連臺寺の溫水に浴し、天城六里の山中を越え、（天城山六里間無人家）修善寺に旅寐し、三嶋沼津の友人を訪うて、相州厚木にいたり、杖を繪嶋鎌倉に曳きて、初冬十五日家に歸る。往來百餘里、始終獨行す。半たのしきことあれば、半苦しめり。當時おもへらく、近年家事ます〳〵繁多、旅行ふたゝびはかりがたしと。しかして今玆ふたゝび西に遊ぶ。文事に百日の得あれば、俗事に一年の損あり。もし命と時とふたつながら得ば、かさねて眞の行脚をなすべし。古人詩あり、こゝに證とす。

人生宇宙間　志願當何如　不行萬里路　即讀萬卷書

享和二年壬戌冬十一月二日　著作堂　馬琴再識

壬戌羇旅漫錄 終

またたふとむべし。しかはあれど、物換り時移り、文明の御代にしあれば、今はた憚るべきことにはあらざるべし。かくて文字を校訂し、世にも示さばやと思ふ折しも、書肆畏三堂のあるじ、こを梓にせんと乞ふにまかせ、やがて三巻の册子とはなしぬ。さればとて、かくはかなき筆のすさびを、世にものゝしうせんとにはあらず、たゞ予が姻族のものにわかち、翁を慕へる人にも見せんとの心しらひよりせしことなれば、翁の素志にたがへりなど、世の誚を得ることあるも、そはいさゝか辭せざるところなり。

○夏の旅は馬に乗るべからず。

夏の馬は蠅にくるしむゆゑ、おのづからあらし。乗人も必ず睡眠をもよほすものなり。故に夏馬にのれば落つる人多し。

○草臥て馬に乗るは大なる損なり。馬にも駕にも朝のうち乗るべし。朝は價も安し。晝より後泊りの驛程ちかければ、足のはこびもおのづからはかどりてすゝむものなり。しかれども朝のうち足をやすませおかざれば、草臥格別にして、翌日ものの用にたちがたし。出立より五六日目にしてはじめてあしのさだまるものぞかし。馬につめて乗れば病氣を生ず。これ乗馬と異にして、鞍上不穩ゆゑなり。

この記世にはゞかるべきすぢなきにしもあらねば、ひめて窓外に出すことなし。さるを近會書肆何がしが強ひて請ふによりて、この内數條を拔萃して三册とし、簑笠雨談と名づけて刊行す。已下はなほ人の見る事を許さず。後もまたかくてあるべし。わが子ども等、板せんと乞ふものありとも、許すことなかれ。

正幹曰。こはわが翁の遊歷の道すがら、かりそめに物せられたる筆記にて、もとより鷄肋のやうなきたぐひなれど、そが中には、當時風俗の美惡、人物の批評など、何くれとなくかいつけたれば、世に憚ることありとて、板行をば許さざりし。翁の用心も

鷄肋―格別役には立たねど捨つるは惜しきものの喩

アトミー跡見、跡を見よの意を佛偈の如くしたるまじなひ語

○連(つれ)なき旅は夜をおかして早く出立つべからず。

朝は早く出でて夕ははやくとまるべし。朝早ければ道もはかのゆくものなり。朝おそきは半日の損なり。

○水をのむべからず。菌(きのこ)、すべて珍らしき食物を食ふべからず。

○旅中は悉く敵地とこゝろえ、少しも油斷すべからず。

おもてに勇氣を見せて、うちは柔和たるべし。夜はすべての物をまめやかにとりしらべ、枕元によせおくべし。いかにすすむるとも、めしもりをかふべからず。第一怠慢を生じ、第二瘡毒のおそれあり。怠慢を生ずれば、路用などうせる事あり。つゝしむべし。

○あしき草鞋(わらぢ)ははやくぬぎかふべし。

わらぢは價ををしまず、ずゐぶんよきわらぢをはくべし。草鞋は旅人の甲冑也、わらぢあしく足いためば、明日一歩もはこびがたし。

○晝の食事を一二杯づつ食ひ、空腹にならばいく度も少しづつ食ふべし。大食をすれば道をゆきがたし。

○小休の時、オンアトミソハカ〳〵と三べんづつ唱へてその席をたつべし。かくすれば物をわすれず。

しかれども宿間屋こみ合ひ、人足は荷をかつぎてかけ出すにおくれじと、こゝろあわてたるときは、そのオンアトミソハカさへわするゝものなり。予も百日の旅中に、きせる二本、手拭一すぢ、笠一がいをうしなひぬ。道はひたすら早からんことをおもはず、たゞおこたらじとゆくべし。かくすればおのづからはやし。

留川—出水等のため渡を禁じたる川

附　録

一旅にてにくむべきもの。

○貪りてあくことしらぬ舟人。

○ひとり旅と聞きてけしきばむ宿引。

○名所を過ぐる日の風雨。

一旅にてこゝろうべき事。

○錢ををしみてみづから川をわたる事。

川越の賃錢甚だ高料といへども、是は病者の藥禮とおなじことたるべし。病癒えて藥代をつぐのふは、無益のごとく思ふ人欲の常なれど、命を全うせしをおもへば、金錢も何かをしむべき。川越の賃も又かくのごとし。只命とつりがへのちん錢とおもひてをしむことなかるべし。ちかごろはこれの三枚ばしにて、わづか十六文の錢を惜みて、ある武家の供足輕忽ち命をうしなひけるよし、はこれね山中の人かたれり。こは八月十八九日の事のよし。

○川留に退屈して密に留川を越ゆべあらず。

○近みちをはかりて猥に船に乘るべからず。

これは陸地にて往來なるべきを、欲にまよひ海上のちか道をはしり、難風にあうて一命を失ふ人往々あり。旅中尤もつゝしむべきなり。

翁は會田氏を娶とりて、一男三女ありき、長女名はさき、此時九才、次女いふ七才、男鎮五郎、後に名は興繼宗伯と稱す五歳、季女くわ三才、季女は卽ち幹等が生母なり

ちわびたり。

さみしさや江戸に隣りて秋一夜

あくれば二十四日、はやく江戸に入りぬ。家居すでにちかづけば、四たりの子どもら、袖にとりつき、門にはしり出でて、よろこびあへり。凡そ百餘日の旅行、家内のもの一日も病まず、予もまた旅中いよ〳〵すこやかなり。

風も引(ひか)ず蟲氣(むしけ)もなくて田舍より江戸へみいりの秋ぞめでたき

右五月九日江戸を立ちて、八月二十四日江戸に歸る。日數百有五日、遊歷の國、武藏、相摸、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江、山城、河內、攝津、都合十二ヶ國也。

享和二壬戌年八月二十四日筆同十一月朔日校合畢

曲亭瀧澤解戲記

百五十四　名馬の足跡此條雨談に出でたれば省く。

百五十五　大磯の戲咲歌

五月十日、大磯に宿せり。八月二十二日歸路にいたりて、又こゝに宿す。

大磯や虎が雨ふるころに來て鴫たつ澤の秋にかへれり

百五十六　遊行忌の群集

八月二十三日、大磯をたちて川崎に泊る。今日藤澤遊行寺開山忌にて、遠近の村夫村婦參詣おびたゞし。寺内に角力あるよしいひしが、晝より雨ふり出しければ、參詣の老若みなぬれながら家にかへる。

遊行忌やこのゆふべよりちる

百五十七　歸庵の祝章

二十三日、川崎に旅寐するに、家路もすでに遠からねば、さすがに秋の夜のあくるをま

虎が雨―陰暦五月二十八日に降る雨
鴫たつ澤―西行「心なき身にも哀は知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」


山霽晴如拭
行人且駐節
新秋天一碧
焼出白芙蓉
坦庵題

瀨姑峯一山平越眺望之
不二山眞景



このかみ—兄

さいの河原にて、

はこね山やまにもさいの川太郎そのいたゞきのさらに水うみ心のとゞまりぬるものは、さいの河原五體の地藏堂なり。このかみのふたりのむすめ、せい、つた、又三歳にて世を早うせられし兄吉次郎、荒之助の事など、何となく思ひ出でられて、しばしたゝずみをれば、をさなきものの來りて、權現へ案内申さん、そくたべといとかしましくいふにぞ、錢五六文なげあたふれば、むらがりてひろひ行くもにくからず、あはれにをかしかりしか。

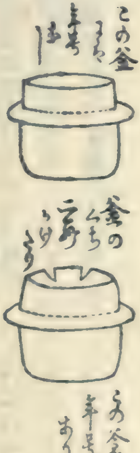
百五十三　平越の富士

五月西遊の日、連日雨天にて、一日もこの山を見ず。八月歸路に到りて、駿州岩淵より原よし原のあひだ、終に全形の不二を見ざるをうらみとす。二十二日はこねを越ゆるの朝、一のやまのたひらより、さいの河原まで三里ばかりの間、不二を左に見て登る。この日快晴、只山腰に一帶の白雲ありて、畫ける如くしかり。山上に旭日映じて高輿言外、暫時行客の足をとゞめたり。

日には予桑名にありしが、桑名名古屋の間、川々は何のさはりなくて越えたり。わづか四五十里を隔てて、天地風雨の變化かくのごとし。

百五十一　箱根東福寺の釜

八月二十二日はこね山を越ゆ。この日三嶋をたちて大磯に至る。山路をかけて十二里の道なり。箱根權現へ詣でんと、道よりかけぬけたるに、社までは程遠くて、供の人足におくれんことの心うければ、二の鳥居より遙拜す。一の鳥居の左の方に釜二つあり、文永五年に造る所にして、東福寺浴室の釜なりっ別當法橋位隆實とあり。一つの釜には年號なし。銘は釜のふちに鑄付けたり。あわたゞしきまゝにうつし來らず。



百五十二　さいの河原の懷舊

そくー足、料金
連臺ー輦臺の義なるべし、板に二本の棒をつけて擔ふ也

去ぬる十九日の夕かた大井川を越えたりしに、十五日の雨に川しばらくつかへて、きのふ十八日に渡しはじめけるといふ。この日も折々雨ふりければ、水高く流けはしく、川ごしの乳のあたりまでひたしぬ。過ぎし五月二十二日にこの川を越えたりし日もかくのごとし。あたへは川ごしひとりに九十四文のそくなりけり。連臺てふものにのり、かつがれながらこゆるに、目くるめきていと心苦しかりき。

大井川これぞ地獄のさかひめも錢はあみだの蓮臺でこす

百五十　喜瀨川の大水

去る十五日雨いたくふりて、次の朝五ツ半頃駿豆の堺なる喜瀨川の橋ながれたり。この橋は過ぎし六月二十九日の大水にながれ、七月十八日にはじめて假橋のわたり初せしに、八月十六日の朝水俄に漲り出でて、かの假橋をおし流し、水は向ふの竹藪をはらへりと、茶店の老翁ものがたれり。予は二十一日にこゝに來ぬるに、川幅わづか二十間に足らぬ川を連臺にてこしぬ。かゝることはいとめづらしきことなり。三嶋の東新町川の橋、箱根三枚橋、その外みな同時に落ちて、五七日百姓わたしあり、悉く連臺ごしなり。十五

かやうの木札をさけおく。尾州にいたりて又一變す。宮七里の海上を隔てて又復一變す。大阪より西はいまだ見ず。江戸より東北猶いかならんかし。京より伊勢までの燧石は、その色大に黒し。水戸より出る石のごとく、燧台なるものさらになし。京の婦女江戸の燧石を見れば大にあやしむ。



百四十八　薩陀山

八月二十日、興津に宿す。すゝき嶋よりはた打邊まで一里の松原を過ぐるに、三保が崎を右に見てゆく〱驛に入りぬ。

　このあたりもみぢめづらし沖津鯛

同二十一日、未明に薩陀山を越ゆるに、雨少しふりて風景を損ず。やゝ明けわたりて、少し雲のきれたる方を見れば、富士の裾半ばあらはれ出でたるもうれし。道のほとり夫婦とおぼしき順禮、ぶす〱とこゞといひながら跡より來れり。

　揩鉢の不二からさつた山の神夫婦喧嘩のあしはすり小木

百四十九　大井川

山城より伊勢遠江邊の冬瓜は、かたちほそながく、かくの如し。丸きもあれどまれなり。かたち甚だ大ならず。とうなすといふもの箱根より西になし。みな東埔塞なり。味ひ尤淡薄にしてくらひがたし。京にてはかぼちやをゆで、青のりをふりかけて酒の口とりなどに出す。いよ〳〵くらぶべからず。

百四十六　濱松の夜雨

八月十八日濱松に宿す。この夜雨いたくふりぬ。明日大井川越えん事おぼつかなし。

ふり流す雨にも物を思ふかな大井川原に水やまさると

百四十七　東海道の噂

東海道小田原までは、人氣家造り等、悉く江戸をまなぶ。刻たばこなどうる店は、江戸の如く障子にたばこの葉を畫けり。箱根を越えて風俗少しくかはれども、猶江戸にちかし。遠州路までは女の髪の風も江戸をまなび、言語も一風ありといへども、東國訛なり。今切の渡を隔てて三河路へ入れば、大に一變す。たばこの看板など京地の如く、

八月十七日藤川より赤坂へ過ぐるに、日くれて並木の蟲の音いとおもしろし。月の出づる頃ながら、空はくもりて道更にくらし。

かげくらき月も並木の松むしにいそぐ驛路の鈴蟲の聲

百四十三　ばせをの發句塚

藤川の驛西より入口南のかたに、今年新にばせをの發句塚を立てたり。

こゝも三河むらさき麥のかきつばた　　ばせを

東海道京までのうち、驛の街頭にばせきの發句塚あるは、こゝと興津のみなり。又杖つき坂にもあり。

百四十四　からころも

橘洲老人、七月十八日に身まかりしよし、名古屋にて聞きぬ。

からころもしでうつ旅の夜はなみだ

唐衣橘洲は小島源之助と稱し、醉竹庵と號す、田安府の小十人なりしといふ。

百四十五　かもうり

宮舟は云々—きれもの、つか、さや、あぶなげ等凡て刀に云ひ掛けたる洒落

桑名の俳諧師は、おしなべて美濃風(みのふう)と稱す。しかれども支考が風調にもあらず。田舍(ゐなか)の俳諧は頑(かたくな)にて、佛者の他宗をまじへざる如し。この日架橋といふ人、船にて佐屋まで送れり。船中の吟、

すゝむ杖もひがしに曠やけふの月　架橋

やたてにうけることの葉の露　馬琴

○佐屋本陣所望の短册(たんざく)

宮舟はきれものぢやとてつかの間もさやへ廻(まは)れば危(あぶな)げはなし

百四十一　名古屋の十五夜

十五日は雨ふりぬ。十六日名古屋三藏樓にて、

名月や蚘蟲(はらのむし)なく草まくら

おやと子がさらに百里をへだて居(ゐ)てひとつ月見る芋(いも)の名月

百四十二　藤川の夜行

一目連は天目一箇命、又天ノ麻比止都禰命、天津比古禰の御子なり。

百三十九　一目連

桑名より三里ばかり西北に多度といふ所あり、多度大神宮たゝせたまふ。相殿に一目連といふ神おはします。宮殿に扉なし、翠簾のみなり。神體は太刀一ふりと幣のみなりといふ。この神甚だ奇瑞をあらはし、折々遊行し給ふことありとて、里人専ら信心す。多度大神宮は桑名より乾の方三里許にあり、祭る神は天津比古禰命なり。

百四十　佐屋廻り

十五日も雨ふりて宮へ舟出ず、ぜひなく小舟に棹さゝせて佐屋へ廻る。

朝顔や今朝は見てたつ雨の宿　　馬琴
侍宵もわかるゝ今朝となりにけり　　工十
　腹に餁のしみる秋寒　　馬琴
暮るゝまで朝がほ見せよ秋の雨　　工十
　杖やすませてくれ竹の春　　馬琴

しかの地に雨三日も逗留せば、珍書も得べきを、わづか一日にして出立しけるまゝ、くはしくさぐりもとむるに及ばず、遺恨甚し。伊勢路は松坂、津、山田邊、廿年來の豊作といふ。但川付の田地は少しく水損あれど、是は僅なり。八月六日の風雨に早稲を倒しぬ。これも愁ふべきにあらずといふ。只神戸領、桑名領、町家川邊大水、田地悉く變じて河原となれり。

百三十七　桑名の歌曲

桑名邊にて大阪のめりやすをうたふ。しかれども風調少しく異なり。又さゝものといふものあり。これは歌浄瑠璃なり。此さゝものに、あれ鼠、田にし、などいふ章歌あり。

百三十八　桑名市中の喪

桑名にて喪ある家には、軒にむしろをかける。江戸にて簾をかけるごとし。大店は筵二枚、小店は一枚なり。則ち暖簾をさげたる如くす。土人の云ふ、この事天武天皇行幸の時の遺風なりと。

百三十五　筆捨山

去る八日に大津より乘船して矢走に著きぬ。しかれどもむなしく船底に潜み居て、湖水を賞するによしなし。九日の朝、鈴鹿山を過ぎて坂の下に出づる。山中に狩野古法眼が筆捨山といふあり。山は高からず、石山にて小松生ひしげれり。武州金澤にも狩野の筆捨松といふあり、又紀州にも同名の松あり。いにしへは畫家もいと拙かりしにや。うつしがたきといふ山にもあらずかし。後人山水に名をまうけること、これらは却つて雅ならず覺ゆ。

すてられて山にもなくかふでつむし

百三十六　桑名の秋雨

八月十三日津をたちて、未明に上野へ過ぐる。

狂句　秋のくも鴈は上野か朝ぼらけ

今夕桑名に泊る。ますけ（丹羽善九右衛門）長成（米屋佐介）などいふ人、いと深切にもてなさる。十四日雨ふりて船出でざりければ逗留。逗留中古書をたづぬるに、珍書はたえてなし。いせにて津の山形屋といふ書肆に元祿已前の草紙類にすこしくをかしきものありしゆゑ、もとめ得たり。も

ふでつむし――きりぎりすの異名

秋の雲――「春の雪鐘は上野か淺草か」

韓天壽―中川氏號は醉晋齋、寛政七年に歿したる書家

伊勢の好事家 附人物の評

勢州追分内日泉村に、岩清水龜六といふ人あり。こゝに謝肇淛が唐紙一枚に書きし三行ものあるよし聞きぬれば、歸路に龜六を訪ふに、留守にて見えず。龜六も頗好事なり。

○四日市に伊達源三郞といふ人あり、至極の好事家なり。その弟馬曹も詩作俳諧など嗜めり。八月三日兩子を訪ふに、馬曹は當春沒し、伊達は留守にてあはず。

○津も伊豫町八幡邊に訪ふべき人あまたありしが、歸路の急がるゝまゝに訪はず。凡そ遊歷の客の道をいそぐは、槌を以て箱を洗ふ如く、空しく手足を費して、詮なきことぞおほかる。

○三州吉田の濱名屋勘七は、みづから扇亭と號す。所藏の扇面數千本あり。これを一覽するに、一日にして猶盡さず。

○伊勢にて人物は、本居宣長、韓天壽、田必器、月仙、久老なり。此内久老はその名いまだ發せず。宣長は伊勢のみに限らず、實に大家なり。（宣長當春物故す）しかれどもみな古人となりぬ。今殘るもの月仙と久老のみ。



かくのごとし。發句は畫へかけて書付けたり。其角の名は薯子といひしにや。按ずるに薯はいもなり、其角畫は下手なれば、みづから芋と卑下せしなるべし。今も下手をいもといふことあり。元祿以前の洒落なるべし。

手迹は大師様の如くみゆ。默々翁は喜六が表號なり。

追書
當時は予いまだ殿村主人と面識ならざりし折也

百三十二　道のべの槿

松坂の殿村三五平は、蕉門の杉風が後なりといふ。こゝにばせを墨迹多し。その内に、

道のべの槿は馬にくはれけり　　ばせを

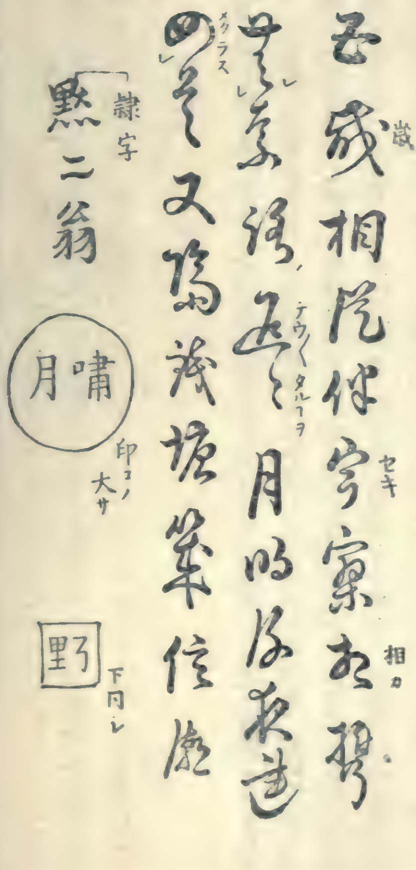
件のかけものあり。諸集は道端とあり。道のべは先按にて、後に道端と一直せしものか。又同人所藏のかけ物に、許六が俳諧三聖の圖に、ばせをの賛あり。三聖は宗祇、宗鑑、守武　前書長文にてあり。以上長井元申話　予歸路をいそぎし故、一見せずしてやみぬ。

追考、後に聞くに、殿村氏は杉風が子孫にあらず、二三代已前の主人俳諧を好みしかば、ばせを以下の墨跡を藏弆しけれど、今はあらずとぞ。かゝればば傳聞のあやまり知るべし。

百三十三　其角が自畫賛の評

長井元申所藏其角が自畫賛あり。唐紙横もの、

松坂の長井元巾は、醫師にて書をよくす。名は揖、字は巾之、一巾と號す。とかく巾好きの人なり。この人好古の癖ありて、多く古書畫を愛す。所藏に坂和田喜六が唐紙一枚にしるしたる三行ものあり。



追書
この書、後に古筆鑒定に、佐川田昌俊にあらず、觀安寺僧易和尙默々これなり、京の大倉好齋の鑒定にも、江戸の古筆浩居了意にも見せしに、皆右の如くに云へりと、桂窓の話なり、此書、松坂人長井嘉左衛門の珍藏なるが、右の鑒定にて珍藏の疵になりしといふ、又これ同人のはなしなり

○山田にては横町を世古といふ。今も大世古、堤世古などいふ名目あり。

○津より山田まで九里の間、食物悉く麁菜なり。宮川のあなた堤世古の松坂屋三右衛門てふ酒店の料理すこしくよし。ゆゑに店上客たゆることなし。松坂より雲出の邊、吹矢からくりある店多し、明星のところてん、夏月は湯製のものなし、此心太湯製を以て珍重す。

百三十　大平が噂

八月十二日松坂の大平を訪ふ。通稱本居三四右衛門この大平は元豆腐屋なりしが、國學にこゝろをよせ、宣長翁の弟子となりてその志厚かりしかば、宣長養子としたり。宣長の跡といふは此大平のみなりといふ。年四十ばかりに見ゆ。至極人品よき人なり。

さやけさの一夜に千夜の秋の月ひとよに千夜の影やこもれる　大平

女郎花さゝ野の露にわけぬれて戀する人の袖とかこたん　大平

このうたを書きておくらる。跡の歌よろしく聞ゆ。

百三十一　坂和田喜六が墨跡

○初會の客も、後朝には丫鬟蒔繪の文箱をもち來り客に呈す。文はのり入に櫻などいろずりにしたるたてぶみなり。京大阪とも妓の文は尋常の半切なるに、伊勢ばかり古風のこりて竪文なるもをかし。扨客逗留すれば、丫鬟始終付きそひ居て、必ず樓上にいざなふ。もしゆかざれば、妓みづから迎ひに來る。その手段いとまめやかなり。

○伊勢の妓樓しかるべきもの、第一古市、第二松坂、第三一身田、第四四日市、第五津、第六神戸、第七桑名なり。この內桑名は少しおとれり。桑名の美濃屋といふ樓少しく趣あり。凡そ此七ヶ所の妓つねに交代す。年中その月によりてその地に盛衰あり。故に時時交代して、久しく一所に居ず。（吉田をか崎又此內にあり。）よりて此七ヶ所の妓その趣みな相似たり。

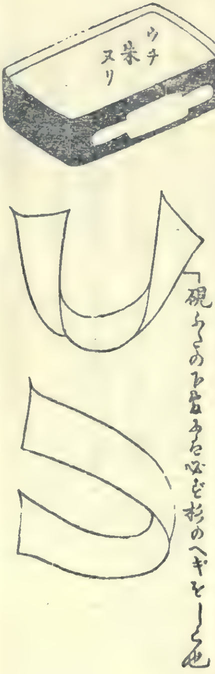
百二十九　古市芝居の噂　附一身田及堤世古の噂

古市に芝居二軒あり、春と秋興行す。近年春一度興行すといふ。一身田も至極繁昌なる地にて、こゝにも芝居あり。八月初旬大阪より片岡仁左衞門などくだりて、芝居ありといへり。

○古市の外山田に賤妓あり、夜はかけ行燈をともし、甚だにぎはへり。

やけるといふを（世話にいふやきもち也）「にえるわいなんし」來たことを「來たわんし」下されといふを「ちやちやもつて來てくだん」「そこたてゝくだん」などといふ。くだんせといふべきを、せの字は言中（こゑのうち）にふくみていふゆゑ、くだんといふが如し。すべて京大阪いせの女子は、茶を必ず茶々とかさねていふ、つねの事なり。

○古市（ふるいち）にて地竝（ちなみ）といふは、一夕方金一顆なり。旅人は二十四匁。（是金壹分貳朱にあたる。いせにははがきといふものあり。則紙札なり。壹匁札六十四枚を以て小判壹兩に換ふ、ゆゑに六十四匁にて壹兩なり。名古屋はこれを米札といふ。）夜食は床に入りて後、夜半頃に出（いだ）す。菓子は坐付（ざつき）に出すなり。（地竝は席上行燈にて燭臺なし、その外の食物等萬事畧せり。）



○古市、松坂、四日市、桑名までの妓樓の硯ぶた、いづれも圖の如し。飯鉢（めしばち）の臺（だい）の長きが如し。

人ばかりなり。扨盃出でて酒もりはじまれば、衆妓酒の相手になり、一人毎に客に盃をさす。その内二人三絃を鳴らし、衆妓同音にうたふ。その内にて客の目にとまりし妓を定むれば、その妓つとたちて客の傍に居る。衆妓は猶席にありて興を添ふ。このうち追々客あれば、妓五六人わかれてその客をもてなす。閨房に入るの時にいたりて、衆妓はじめて散ず。それまではほしいまゝに貪り食うてあそぶなり。

○古市もいまは伊勢おんど大におとろへて、大阪歌或は江戸のめりやす、潮來ぶし、似て非なるものをうたふ。佳木でふをとこ聲たへに、おんどをうたひ聞せたり。妓はかへりてこれにおよばず。妓もいせのようだの一トをどりといふことを謠へど、おんどにはあらず。音頭のみぞ長くこの地にあらまほしけれ。その餘の歌はなくもがなとぞおもはる。

○妓は京大阪より野鄙なり。髪は鬢も髱もみぢかく、四方丸し。圖は前に見えたり。嶋田の髷のうしろと、髱と引付くなり。前髪は京風の如くきりて前へたてる。衣服は絞り縮緬の單物、或は絽縮の帷子、帶は蒲繻子ねづみ繻子等なり。中々祇園嶋の内などに及ばず。繩手坂町の妓に對すべし。

○言語は京談に似ていせ訛なり。

髱―「つと」「たぼ」共に原本のまゝ

うたひめの手振あはれにひく糸もかしこき世々におひの山本

間の山の片かげにあやしき小屋がけして、木綿のふり袖にもやうあるものなど著て、かほはげるばかりに粧ひたる乞女、三絃を鳴し錢を乞ふ。されどその三絃の曲節もいとさわがしきものにて、今江戸の芝居にてする相の山の章歌には似ず。老婆は小屋の前にて草履を作りこれを賣る。（參宮には雪踏をゆるさず、故に旅人もはくはこれをかうてはけり。）又七八歳の兒女は、さゝらをすりて錢をもとむ。（一尺ばかりの木にきざをつけ、これをさゝらにてする。左右の手を前へ出し、首をふり腰をかゞめ、ハアー〳〵といふてさゝらをならす、舞ふにあらずをどるにあらず、いとふつゝかなるさまなり。）その外の乞女は、手に笊をもちて、往來の旅人につき、日々の活計をなす者多し。（間の山の乞兒、木綿の袖なし羽織を著、簓をすりてはやすもの、殿中ぢやはりひぢぢやといふてはやす、殿中は袖なし羽織のことなり、是古語なるよし、或人いへり。）

百二十八　古市の總評

古市はいづれも大樓なり。見せは暖簾二重にかけてあり。軒はつねののうれんの如し。奥行一間の土間ありて、そのあがり口に又長暖簾をかける。見せの隅にちひさき曲突にから茶がま一つかけてあり。是は茶店の名目なればなり。

○古市にて客あれば、家内のおやま殘らず出でて、次第よくならぶ。大かた十五六人廿

百二十七　山田の客舍 附間の山

十日に山田妙見町小倉屋甚右衞門てふ旅店に宿る。この地の友人佳木（通稱山原七左衞門）來りて、いと深切にもてなさる。久老ぬしを訪ふに、信州遊歷の留守にてあはず。月仙老人は訪ふべかりしが、これも歸路のいそがるゝまゝ見えずしてやみぬ。されど人にことづけて畫の事たのみつかはせり。

櫛田川にて、

　さしてゆく櫛田の川邊一筋におくれはせじなかみの都路

○十一日參宮、

　わけ入るやたけの都の竹の春

めうがあらせたま〳〵參る神垣に富貴と申すもはゞかりの事

○歸路のいそがるゝまゝに、二見あさまへはゆかずしてやみぬ。

○間の山にて、

　重箱のふたみのうらにゆかでかへる東の家ぞほだしなりける

久老―姓は荒木田、内宮權禰宜たりし國學者

月仙老人―畫僧、初め應擧の門に入り、後雪舟の筆意を傳ふ、山田宗照寺に住せり

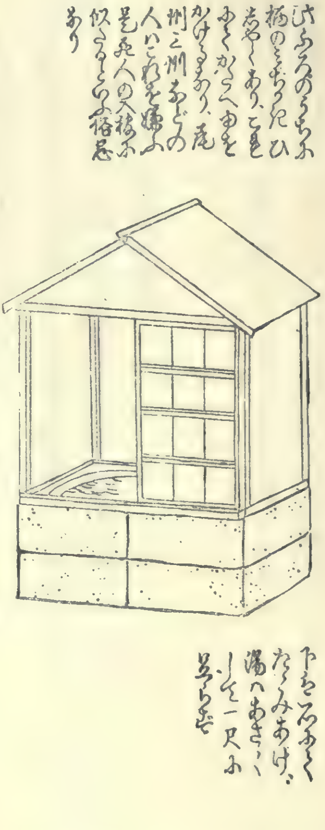
追書　たけの都は神都の事にあらず、これはいまだ考へたらずしてあやまりしなり

はふがた—搏風型にて、上部の屋根をいふなるべし

るゆゑに、甚だ繁昌せり。

百二十六　伊勢路の居風爐　是より伊勢及歸路の話をしるす

伊勢路の居風爐は大かた戸棚なり。そのかたち圖のごとし。上ははふがたなくして箱の如きもあり。



もののかたち所によりてかはるなり江戸の戸棚はいせの居風爐

しよし、箕山が大鏡に見ゆ。

百二十五　伏見の夜泊

八月五日、七ッ時ごろ大阪を出立ち、船にて伏見へ登る。今日浪華の友人盧橘、國瑞、菁坊、さゝ山和尚、雨窓、蜀人、大野木等、送行の盃をかたむく。今夜風雨、淀にて、

　舟子等がむねかきあはす簑のうへにふりそゝぐ雨の綱手くるしも

六日、朝五ッ時ごろに船伏見に著きぬ。今朝ます〳〵大風雨、六月の洪水にこりて大津へ出でず、直に京にゆきて晴をまつ。八日に京を立ちて水口に泊る。今日大津邊所々洪水の跡を見て駭然たり。

○八月六日の大風雨に、伏見より大阪の間又々出水。近日築直せし堤をおし流し、八軒屋邊、六月廿九日の水よりも水高きこと一倍すといふ。（この日大阪の小橋三ツばかりおちたり。）よりて五六日大阪へ舟往來なし。予は幸に五日に大阪をたちける故、路次の愁なし。此節石薬師庄野の間またまた大水、はし落ちて五七日往來なし。予は關より伊勢街道を經て、九日の夜津に泊る。津に兵丹屋といふ旅宿あり。參宮の旅人津にとまる者は、かならずこの兵丹屋に來

月初旬にいたりて、道頓堀角の芝居に看板あがる。淺尾爲十郎、藤川八藏、大谷友右衞門、中山一德、友吉などみえたり。八月十五日ごろ初日ならんといへり。

○道頓堀の芝居にては、江戸にて川こしと稱するもの、みな茶屋の下女なり。見物の人と見れば、走りよりて、コレ一ト幕見さんせんかといふて袖をひく。

○すべて上方の芝居は、幕の間の太鼓に半鐘をまぜてうつなり。口上いひは幕際より三尺ばかり外、花道へ出て役割をよみ上る。尤ものろく聞きにくし。口上をはりても幕はしばらく明けず、この間大に拍子ぬけのしたるものなり。

○大阪はわけて棧敷の高料なる所にて、あたり芝居に至りては增といふことあり。たとへば二貫二百文の棧敷へ、四貫文の增をかけて、都合六貫二百文とる。京にも增あれども大阪程にはあらず。その餘は京も大阪もかはることなし。妓と雜劇と食物は、江戸尤も下直なり。

○大阪の中芝居の役者に限りて、返詞をするに、ハイ〱といふ。故に素人にてもハイハイと返詞をするものを、小芝居出といふて笑ふなり。

○遊女の短尺、すべての書物に、紋所の印をおすこと、尊子八千代はじめてこれをなせ

一個の才覺―自分一人の了簡

一日の辛勞を忘れんために、妓樓に至りて酒もり遊べり。商家の奉公人も、自分一個の商ひにて得たる所の金錢を費し、敢て主人の財をかすめるにあらざれば、主人も強ひてこれをいましめず。故に妓樓おのづから繁昌なり。京はしからず、呉服物など商ふもの、こと〴〵く女なり。これを牙婆といふ。この牙婆反物をせおひて旅舘へ來り商ひをなす。女子は反物をとり扱ふにも、手先和らかにして反物損ずることなく、言語しとかやかにして、價を論ずるに至りても一個の才覺なく、萬事主人の意をうけてこれをうる故、却て客の買ふべからざるものも賣ることあり。又金銀をとり扱ふにおよんで私すくなし。男子は出商ひをするもの、必ず私多し。是れ十字街頭悉く妓樓ある故なり。こゝをもて、出商ひをなすものは悉く女子なり。京と大阪の商家、こゝろを用ふるの才覺、大小あることかくの如し。

百二十四　道頓堀の芝居

大阪は洪水後にして、芝居いまだはじまらず。道頓堀の大芝居は間口京の芝居よりもひろし。その中芝居なども、大芝居のごときものあり。あやつりと中芝居は興行せり。八

飯す。

百二十二　妾奉公人引札の噂

大阪にて先年めかけ奉公人の引札をせしものありと聞きし故、これを大阪の人にたづぬるに、その砌官より御しかりを請けて、そのことやみぬ、わづかの間なれば、今はその引札をもちたるものもなしといへり。かやうのものを後に見れば、何となくをかしきものなり。

百二十三　京大阪商家の評

京も大阪も、妓樓の夜具は甚だ麁末なり。太夫、天神、伯人といへども、郡内縞の蒲團一つに過ぎず。是夜具はみなその茶屋より出す故なり。伊勢古市邊またかくの如し。大阪は京ほど遊歴の旅客なし。しかれども街頭悉く妓樓にて、又悉く繁昌す。大阪は一體金銀ゆづうよき地にて、商家の小厮といへども、自分のはたらきを以て商ひの利を得ることあり。晝は業用にゆだんなく、寸暇あるものなし。夜は五ッより後、商家の主從みな徒然なり。ゆゑに

かゝる徒に風流あるものを見ざりし。

百二十　總嫁

總嫁は、今道村の田のくろに出づるものは、紅粉をほどこさず、さながら素人のごとくみゆ。いづれも醜婦なり。しかれども病疲の者にはあらず。又西横堀の材木のかげに出づるものは、いづれもよそほひて美なるものあり。かしく六三がくびれし所、かの材木のある所なりと、ある夜夜行のかへりに、友人指さしてかたれり。大阪の總嫁は小屋なし、大かた江戸のごとし。

百二十一　とぎやらう

大阪にて舟まんぢうを伽やらうといふ。土地の俗はぴんしよとよびなせり。毎夜船を前だれ島、その外元船のかゝり居るあたりにこぎありき、伽やらうとよぶなり。則ち元船へよび入れて船頭のあそびものとなすとぞ。とぎやらうとは、閨の伽をやるべしといふの義なり。元船の舟人これをよび入れて見る時、かのぴんしよ立膝をし、前をあらはにして客に見せしむ。是その陰中瘡毒なきをしめすの意なりといふ。予これを聞て暫時噴

出入—もめごとの意に掛けたる也

なにはがたなに波雀に宿かしてねよけなるべし里の川竹

又同所に亦助といふ牽頭あり。元は加賀の人なるよし。この亦助畫をよくす。吾雀よびむかへて予に調せしめ、席畫をなさしむ。亦助席上に筆をとる、筆意甚だ妙なり。予に贊をこふ。吾雀も又これに贊す。この亦助至極柔和にして、幇間のごとくならず。みづから足齋衛之と號す。但文事はなき人と見ゆ。亦助みづから新町橋のもとに俠者のたゞずみ居るかたを畫いて、予に贊をこひければ、

ちよとそこへ橋詰までは來てたもれ雲の出入の秋の月影

芋の畫に、

煮しめてはしほみつ玉や皿の芋

太夫の畫に、

おもくおくころもの裾も夜寒かな　吾雀

すゝきの畫に、

化もののはなしは消えて野分かな　同

大阪の妓院中、この者二人と、南ののぶと、音八のみ、少しく風流ありてみゆ。京にて

わらはれて夜をひた晞くや蛬す　の　ぶ

かくしたゝめて出しぬ。手跡も又拙からず。のぶ予に扇面を請ふこといと深切なり。則ち狂文一篇と狂歌一首をしるしてとらせぬ。諸客興に入つて、席中の歌妓帮間みな卽興の發句を作る。又予に文をこひ歌を請ふもの多し。四更にしてはじめてやむ。

ひらく手のおくやゆかしき女郎花　歌妓ふ　さ

聞きたまへ鶺非かめるも千々の秋　同　し　げ

一ふしに蟲の音しんとふけにける　帮間音　八

この外席上の嫖客、雨窓、國瑞、盧橘等卽興の發句あり、略す。

百十九　吾雀が噂　附帮間亦助が噂

大阪新町ひやうたん町の茶屋、松雄屋伊右衛門は、吾雀と號し、俳諧をよくせり。手迹も又拙からず。元は醫家の子にて、後に帮間をなしけるが、近ごろなりいでて茶屋となりぬ。茶屋は揚屋につぐものなり。吾雀妓院中の人に似ず、至極見識あるものなり。予一夕盧橘にいざなはれて吾雀を訪ふ。主人大によろこびて、長夜の飲をなす。予に歌をこひければ、

吉男―原本「よしを」と振假名せり

人のみものとなるにいたりては共におなじ、又俳優もむかしは禁裏にめされ、公儀の上覧を經たることあれば、由緒を論ずるにいたりて更に高下なし、吾も又身にかへてものぶをかへさじといふ。こゝに於て爭論止まず。のぶおもへらく、究竟家父角力中にあればこそ、かゝるよからぬことも出來ぬ、殊に父年老いたり、隱居せしめんにはとて、京にてしかるべき家をもとめ、ゆたかに老を養はしむ。爰において御所櫻角力を辭して隱居す。よつてあらそひ頓に解けぬ。その後雛助病死して、のぶ寡となれり。歌妓をなすこと元のごとし。程經て俳優文七（吉男）におもはれ、遂に文七が妻となる。いく程なく文七病にかゝりて危く、治療しるしなし。のぶ夫の爲に立願して、みづから髮をきりて讃岐國金毘羅へ參詣す。のぶいまだ歸らず、文七家に病死す。（其頃浪花人の諺に、家に千金をつむとも首になるゝ事なかれ、もし座を破らざれば必ず命を落す。）是より後のぶ又ふたゝび嫁せず、大阪島の内に出でて、歌妓をなす。今に全盛なり。のぶすこし和歌をよみ、又俳諧の連歌を嗜めり。予大阪に遊びし日、一夕道頓堀の竹亭にのぶと會す。のぶ來りて席に著くと、そのまゝ予が名を呼びて、言語舊知の如し。餘の歌妓幇間等先へ來れるものも、いまだ予をしらざるものあり。のぶ問はずしてはやくその名を知る。あやしむべし。席上の嫖客のぶに發句をもとむ。のぶ再三辭して後、

管等商議して、密にのぶにいへらく、そこの實情十三年の苦勞、餘の婦人の及ぶ所にあらず、しかれども其許のことにあらん限りは、諸親の憤り解けず、主人ふたゝび世をひろくすることあたはず、しかれども主人はそこの深情にひかれ、寵おとろふるの日なければ、みづから放ちやることあたはず、もし主君をおもふ實情あらば、みづから請うて京へ歸れといふ。のぶ主君の爲に敢て爭はず、遂に京に歸らんことを請ふ。諸親密によろこび、種々の手道具をあたへ、路費を用意して京にかへらしむ。のぶ京に歸りて手道具を賣り拂ひ、七十餘金を以て櫛笄等をとゝのへ、別に衣服を製して、ふたゝび祇園に出でて歌妓をなすに、全盛むかしにまされり。そののち俳優嵐雛助（後嵐小六と改む江戸にて死したる雛助が父なり。）密にのぶに通じて、情好尤も厚し。世上評判只この一事にあり。こゝに角力とり五七聟（御所櫻が弟子なり）商議して、御所櫻が家に到りていへらく、ほのかにきく、師の女雛助が妾となれりと、師いかなれば女を俳優の妾となし、利欲の爲に身をけがさしめ給ふぞ、もし如ㇾ此ならば吾儕師弟の約をかへすべしといふ。御所櫻これを聞いて大に迷惑し、この事をのぶにかたりて離別せよといふ。のぶ又これを雛助に告ぐ。雛助云ふ、角力と俳優と尊卑何程かおとれる、渠みづから浪人をたつるものといへども、元錢をとりて

本居—宣長

百十八　首信が傳

大阪嶋の内に信といふ藝子あり。人渾名して首のぶといふ。いふこゝろは、顔色絶麗、その首艶美なるを以てなり。今婦人の品定に首がよい首がわるいといふも、このゝぶよりはじまれりとぞ。行年四拾餘歳。（大阪雨柳の話に、のぶ寶暦十一巳年にうまれ、今享和二壬戌にいたりて、四十三歳なりといふ。）しかれども猶二十五六歳に見ゆ。實に人妖なり。その朝開に、紅粉をほどこさゞる顔色却て美なり。父は御所櫻長兵衛といひし角力とかにて、後角力年寄になれり。のぶ安永のはじめげい子となりて京祇園にあり。全盛類なし。豪富の人これが爲に金錢を投げうつこと夥し。こゝに豪富三井氏みそかにのぶに懸想して、數萬金を費せり。（世にはのぶに十萬兩の金を費せしといふ。）こゝに於て、三井の親戚及主管等大に驚き、忽ち主人を伊勢松坂の店に蟄居せしめ、年中の雜費、僅百金を限りてこれを合力し、親戚悉く義絶す。この時のぶは京にとゞまるべかりしを、自おもへらく、富める日は樂を共にし、その窮するに至りて離別せんは義にあらずと、強ひて松坂に至り、情郎に給仕すること十三年なり。のぶよくつかへ、且松坂にあるの間、本居の弟子となり、をり／＼源氏など聞き、また機織ることを學び得たり。或日主

一席—同席

大阪にて、歌妓などもつぱらうたふうたを、めりやすといふ。京にてもこれをうたへど、大阪に及ばず。節は江戸の河東に琴歌をまじへたるようなるものにて、煩手にあらず、節甚だゆるやかなり。秋雨　秋雨のをりしもわきてうれしきは、ぬれいろそふる秋の花、遠くにつれのからころも、つまこふ鹿の一こゑ、ふるもなごりの後いりに、ことさらにはのしづけさ。　大かたこのてにはにて、章も雅なり。折々新めりやすのひろめあり。尾州三州にてはこれを大阪うたと稱す。又三十一もじの歌に、節をつけてうたふこともあり。すべて一篇ならざるものをばうたといふ。又別にさわぎうたあり。是は曲も煩手なり。しかれども江戸のさわぎには似ず。

百十七ノ下　幇間　京もならべ許す

京も大阪も幇間は、一席するに堪へざるものなり。幇間は羽織を著ず。嶋の内の幇間に、音八といふものあり。これは狂文發句など少しくできるなり。又新町に亦助といふ幇間あり。畫をよくす。その外は無藝大食、甚だいやなるものなり。　京の茶頭は、四條河原などに網をはりゐて、客を引くなり。かくせざればたえて客なしといふ。茶頭の出る見世は茶頭ばかりなり。祇園はべして茶頭もちゐこなはれず。また男げいしやといふものなし。皆悉く幇間なり。

京も大阪も女は丸顔多し。京は痩がたちにて、大阪は少し骨ぶとなり。顔色の美悪にいたりては、京まされり。

百十五　堀江の藝子

ほり江は元げい子のよき所なりといふ。今はしからず。三絃箱のかたち、その外大かた京のごとし。但大阪にてはろぬりの三絃箱もあり。堀江のげい子、三絃箱のうらに歌しるしてよといひければ、

音にきく君が名こその瀧つせにひくや三筋のいとゞおもしろ

百十六　妓樓混雜劇

大阪にて芝居と妓樓と打混じたる所は、道頓堀と、難波堀江と、北の新地なり。この内道頓堀尤にぎはへり。

百十七ノ上　浪速のめりやす

あないち―穴市京阪の穴打といふが正しき也、三四尺離れて半圓形に掘りたる穴にむくろじ及びきやしごを投げ入れて勝負する也

京におなじ。

○嶋の内、曾根崎、難波堀江、難波新地、坂町、せうまん、尼寺等、おの〱高下あれど、おもむきは大かたおなじ。但し新町の外はみな私窠なり。

百十三　大阪妓院の方言

妓の言語は、京も大阪も大同小異なり。大阪は言語すこし京よりさつぱりとしたる方なり。などいふことと、いつかうといふことを京ほどはいはず。來たことを、「おでましなされた」すこしを、「ちつくり」客のかへる時に、其「ようおこしなされました」などいふは、京とは異なり。又江戸にて、武左といふを、大阪にてはもさといふ。廓の牽頭を判官といふ。略してぐわんとばかりもいふ。おか場所の牽頭を、辨慶といふ。女のかたより情をよせて男をひくを、おき錢といふ。きづをろくどといふ。あないちを、あなうちといふ。人の妻をごつさんといふ。この外いくらもあるべし。大かた京に似たる言語おほし。

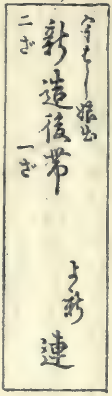
百十四　女子の評

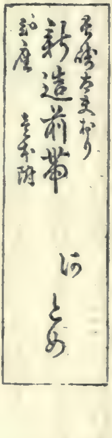
甚だにぎはへり。大かた京の二條新地に似たり。いづれも賤妓なり。

百十二　難波堀江　附堀江さし紙

難波ほり江の妓樓は、坂町に似て新地にはおとれり。（坂町には見世付あり。）さし紙は、いづれも京の祇園のごとし。但圏點(けんてん)山がたはなし。

堀江さし紙





せんこう一本を六分と定め、四本よりて花一ツ……これを一座といふ、四ツと定り、花のさだめあり、新色ある妓をさだめの外せんこう一本半づけ……あり、一本附といふ、又時妓は一座切の客へは出ず、……二座ときめたるなり、などのよ新河などかきしは……なり、下は妓の名なり、新造とは年少にて……はじめてその地に出づるをいふ

○新町は一わり引き、揚屋はろうそく一挺壹匁五分、その餘は二わり引きなり。大かた

にのるといふ。或は私窠ゆゑ公をはゞかるともいへり。その道僅三四町の間を、妓の駕にのりて歸ること又めづらし。京にてもかゝることはなし。

○道頓堀の茶屋にも高卑ありて、大樓へは島の内の妓もよび、小樓へは坂町の妓をよぶなり。但し小樓へは島の内の妓を呼ばれぬといふにはあらねど、大かたはかくのごとし。是客の尊卑による故にや。

百十　俳優作ㇾ街

大阪にては、役者もけい子おやまを抱へおき、これを他の茶屋へ預けおき、その花を得て活計とするもの多し。兵太郎などいふ役者は、とみのといふ妓をかゝへおき、坂町へ出しおくなり。しれるものは兵太郎が抱の富野と名ざしてやるとぞ。是芝居と妓樓と軒をならべ居る故なるべし。

百十一　難波新地

難波新地は、左右六筋の街悉く妓樓なり。數百軒あるべし。夜はかけ行燈を軒に出し、

伯人―又白人と書く、もと黑人に對してしろとの賣女の義に出づといへば白の字然るべし、島の内と北の新地の妓に限る名也

○太夫天神は夏も小袖うちかけなり。繻子或は綾などの縫あるうちかけ、二ツ三ツ著て出る。帶は金襴天鵞絨おの〳〵差あり。天神は江戸吉原の座敷もち位のものなり。中には縮緬の襠したるもあり。又顏色も一樣にはあらず。呼びむかへて座鋪に來れば、直に客のうしろに坐す。床に入るまで丫鬟付きそひ居て、或はあふぎ或はたばこをつけ、左右の用事を悉くなす。（江戸の妓は客のむかふへすわれど、この里の妓は客のうしろへすわる、ゆゑに席上にて顏色をみることなし。）扨閨房に入れば、件の衣服を著かへ、越後ちゞみ、或はちりめんの單物など、夏の衣服になりて臥す。凡そ房中しごきの帶をしめて寐るもの、太夫と天神のみ。（しごきは淺黄ちりめんしんあり。）その餘伯人といへども房中帶なし。賤妓は丸裸にして臥す。是衣服をいとふ故なり。いと興さめておぼゆ。

百九ノ下　伯人の評

島の内の伯人は、太夫ほどにはあらねど頗美なり。衣服はすきやちゞみなどなり。繻袢を著ず。帶は妓も歌妓も黑天鵞絨が多し。大かた京の祇園に似たり。

○島の内の伯人、道頓堀の茶屋などに來りて客と臥し、翌朝歸るには、必むかひの駕來て、この駕にのりて歸る。是は朝開には寐起のまゝ歸る姿を人に見せじとて、いづれも駕

に附屬して一切の取捌をなし傍ら色を鬻ぐ也

席の正面に坐す。末社は左右に列す。扨赤前垂の仲居のこゝろきゝたるもの一人、盃臺に盃をのせ、座しきの入口より一二間あなたにひかへ居る。又その向ふに一人硯と紙をもちてひかへ居る。（是は太夫天神の名をしるすなり）さて太夫にても天神にても、おの〳〵座敷の障子の外に彳む時、かの禿誰さんかへと妓の名をよぶ。その時仲居かしておくれといふ。（いづれも一調子聲高し）時に太夫しと〳〵と立出で、盃臺の前にたち、（臺につきあたるほどなり。）うちかけの中程を、右の方帶の結目の下へかいこみ居りながら、左の裾を折りて左の方へ一尺ばかり寄つてはすにすわる。このとき仲居かの盃臺を太夫の前へつとおしつけ、何屋の誰さんと高聲によぶなり。その時太夫しとやかに盃をとりあげ、客の方を見て、持ちたる盃をばつたりと臺の上へおく。仲居その盃臺を一尺ばかりつと客の方へおしやり、又高聲に誰さんと妓の名をよび、臺をもとの所へおく時、太夫つとたちてかへる。その所作至つてしとやかなるものなり。何人にても所作みな同じ。天神もまたかくのごとし。但太夫と天神と一所にはかりず。天神をかりてみる時は天神ばかりなり。扨かりたる太夫、一旦のこらず歸りて後、書留めたる名前を見て、よぶべき太夫を名ざしてやれば、客あるものは來らず、客なければ程なく來るなり。

鹿子位―又鹿戀と書く、訓蒙圖彙に「鹿戀は十六匁四々の十六をいふ九々よりかこひといひそめしとかや、萬づ天神樣より一際麁相にをがまれ給ふなり」

澪標は大阪新町の細見記なり、寛政十年再版す

引舟女郎―江戸にて番新といふと同意なりとぞ、上等の遊女

大阪の妓樓は、新町と、島の內、曾根崎、よろしく見ゆ。島の內は見せ付なし。新町は見せ付あり。太夫天神は見せをはらず、鹿子位と稱するものはみな見せをはる。天神にも見せ天神とて、見せをはるものあれど、是は下品なり。見せの格子も麁末にて、間口三四間にすぎず。妓も十人よりは多からず。見せをはる妓は、ちひさき蒲團を敷いて居る。又すこし腰かけをして、居せいを高く見せるもあり。衣類は絽のもやうが多し。帶はひちりめんのしごきなり。店先に老婆、或は丫鬟つき居て客の袖をひく。天神のある見せは、天神見せとて別なり。

○凡そ揚屋の廣く綺麗なること、大阪にしくものなし。揚屋は九軒に限る。その餘は茶屋と呼屋なり。澪標にくはしければ、こゝに略せり。新町は三方に口ありて往來ゆきぬけなり。

百九ノ上　太夫天神のかし借り

太夫天神は夏も小袖なり。帶は如レ此横に長く結ぶなり。つまは右の方へきりゝと廻してとるなり。新町にて太夫天神をかりて見るといふことあり。京の島原又おなじ。揚屋よりかりにやれば、客ある妓も必ず來る。太夫には引舟女郎のつきてくるもあり。天神には禿の十二三歳ばかりなるが、麁服のまゝにて、おの〳〵一人に一人づつ付きそひ來る。客は

舟まんぢう—小船に乘りて海泊の船に往きて賣色する土妓の類、下の百二十一條に詳也

氣がさなる—氣の張りたる

たゞしく舟にのり、ながれに泝れば船おそし。左右の岸邊に鈴蟲のすだく聲々聞きながら、こがれゆくも、又一佳興なり。前だれ島にて伽やらうの船にあひぬ。前内裏島なるを、俗は前だれ島といふ。伽やらうは舟まんぢうなり。土地の人はびんしよといふ。その夜九ツごろに、船心齋橋につきぬ。この日船中秋暑をわすれ、いと興ありて覺えぬ。

百七　松明の施行

大阪はつねに河水を飲水とする所なるに、近日近江の大水に河水濁りて飲むにたへず。故に大阪のもの、今道村増井の清水、その外天王寺邊の井戸の水を汲みにゆくもの、夕方より引きもきらず、今道邊の人家の前に、夜は大挑灯を出し、田の畔には松明をともし、夜中水を汲むものの助けとす。すべて大阪は氣がさなる所にて、まけじだましひの商賈等、大水にて落ちたる小橋は、官府へねがうて、自身一個の入用にて、假橋をかけ、無錢と書し、挑灯など出しおく。かやうのこと何によらず、人々きそひてなすことあり。

百八　浪華妓院の噂

淺澤の杜若、車がへしの櫻、はなは無けれどその跡をたづね、御田の稻は青みていまだ花をむすばず。神宮寺奥の天神悉く拜し畢りて、酒樓伊丹屋に酒食をとゝのふ。

よの中を何かうらみん難波がたこゝ住よしの岸にあそべば

此邊に竹本住太夫が出でしといふ家、伊丹屋の二三軒手前にあり。夫より難波屋の松見にゆきけり。社より西の方三町ばかりにあり。茶店の庭木なり。つくり木ながら、四方二十軒ばかりまんまるに笠の如く茂生す。木の高き一丈といへど、見れば五六尺あるごとくひきくみゆ。へりに至りては三尺、或は二尺餘はなれたる所あり。こゝにてあづき餅を賣り、又松のかたちを紙にすりて賣るなり。

○とゝやせんべいは、江戸にていふふきよせなり。かるやきの猶あはきものなり。此邊ころ〳〵やといふ見せにて、このせんべいと竹馬とを賣る。本家のとゝやは堺にあり。

○社前の西北の角に、小町茶屋といふあり。尋常の茶店なり。この茶店にかぎり、長き柄杓のうへに茶碗をのせて茶を出すなり。

小町茶屋誰がうらみより秋の雨

歸路も船なりければ、天下茶屋へはゆかず。この日ふりみ降らずみして日くれぬ。あわ

甚だ珍書なり。大阪にて見たり。予も名古屋にて、諸買物三合集覧といふ小本を得たり。元祿五年の版なり。そのおもむき難波雀に似たり。

○西鶴沒後、信友團水京師より來り、七年その庵を守る。西鶴名殘の友（合本五冊）西鶴草稿のまゝ出板す。その事團水が序文に見ゆ。俳諧師の傳ををかしく書きたるものなり。田宮氏所藏なりしを予におくらる。

○長堀銅吹所いづみや所望卽席、

又たぐひよにあらがねの吹革もてふくてふ富貴を家に傳へよ

百六　住　吉　附難波屋の松小町茶屋

八月三日、夜前より雨ふりけるが、晝よりやみぬ。いざや住吉へ詣でんとて、書肆大野木氏やかた船を用意して、（大阪にてやかた船と稱するもの江戸のやかたぶねに異なり。）予をいざなひ、心齋橋より乘出して、住吉明神へ參詣す。はるかに住吉の濱より見れば、武庫山右に遠く聳え、淡路島むかふにかすみ、一の谷などはるかに見ゆ。岸の姫松は數百本千とせの緑をあらはし、四社の御神上久て尊く、社前のそり橋、角柱の石の鳥居、同石の舞臺、誕生石、その外攝社を巡拜す。

の太鼓を聞いて段々にうつ故、遠き町は次第に時がおくれるなり。新町は夜九ツよりうつ。是は大太鼓なり。江戸吉原にてひけ四ツといふを、新町にては太鼓まで、太鼓より後などといふ。但し新町の九ツは世間の八ツなり。

○天王寺の地中に、雁金文七が奉納の繪馬（八しま合戰の圖）あるよし聞きしゆゑ、人にたづぬるに、去年天王寺の燒失の時紛失して、今はなしといふ。盧橘が話に、實は文七が奉納の繪馬にあらず、名前別にて、餘人の奉納せしものなりといへり。

百五　難波雀の抄書　附西鶴名殘の友

難波雀（延寶七己未陽月下旬 吉備國水雲子著少本一冊）俳諧師所付の部に、

一天滿碁盤屋町　西山梅花翁　一鎗屋町　井原西鶴

歌學者の部に、

一江戸堀　下河邊長流

又屋敷名代の部に、

一細川越中守殿　しあんはしはま 名代　天野屋利兵衞

追書
盧橘が著述、度度書肆に損をさせたれば、後には絶えて行はれず、京にうつり住み、又大阪口繩坂にて賣卜せしが、文化辛未、ゆくへしれずなりぬといふ

れなきのみ、第一の好景なり。大阪の穢多村は江戸淺草の新町よりも大なり。家作りいづれも立派に見ゆ。しかれども左右の棟をひとしくすることあたはず、一方は一尺ぐらゐづつひくし。凡十三里、川にかゝり居る大船つねに八九艘、これみな穢多村交易の商船なりといふ。

○大阪の人氣は、京都四分江戸六分なり。儉なることは京を學び、活なることは江戸にならふ。しかれども實氣あることは、京にまされり。一體人氣のよく一致するところなり。これは土地のせまきゆゑなるべし。

○大阪は今人物なし。蒹葭堂一人のみ。是もこの春古人となりぬ。玉山が畫は書肆のみ珍重して、雅人はこれを譏れり。又祖仙は猿の寫生をよくす。その外畫工などいくらもあれど京に及ばず。盧橘といふ人は、筆耕と戲作をして、家内五人を養ふ。是も筆耕に作者をかねて渡世にする人、大阪に盧橘一人なり。この人予逗留中大に深切にもてなさる。戲作のみをもて妻子を養ふこと、廣き江戸にさへなければ、大阪は書肆の富める地なることと、これにてしるべし。

○大阪は賣藥店多し。首より上の妙藥、腰より下の妙藥などいふ招牌を出しおく見世、いくらもあり。

○大阪は時を太鼓にてうつなり。所によりて夜の五ツは五ツ半頃にうつなり。是は御城

飲水—振假名原本のまゝ

○一體大阪はちまたせまく俗地にて、見べき所もなし。京の市中に木戸なし。大阪は一町一町に木戸ありて、木戸の柱にふだをうちつけ、是へ町名をしるしおく。橋々にも札ありて、はしの名をしるしたり。（橋に名をしるすことはふるし、木戸に町名をしるすことは近ごろのことなりといふ。）

○大阪にてしかるべき神社は、座摩、生玉、天滿、高津、等なり。天王と稻荷は所々にあり。稻荷も又神社しかるべくみゆるもの多し。只天王寺と住吉のみ懐古の地なり。それも天王寺は去年の火災に礎のみ殘れり。

○大阪にてよきもの三ツ、良賈、海魚、石塔。あしきもの三ツ、飲水、鰻鱺、料理。うなぎは小串のみにて、京の若狹うなぎにおとれり。大庄といふ店、鰻鱺をうることおびたゞしかりしよし。今年故ありて店をしまひぬ。その外料理店數軒あれど、江戸人の口にはあはず。うかむ瀬も鹽梅名ほどは高からず。

○大阪の市中犬猫すくなし。是は穢多主なき犬猫をつれゆき、皮を剝ぐゆゑなり。犬子をうめば、一兩月たちて穢多これをつれゆく。老犬は穢多をしりて、これを見れば大に吼えかゝりて、屠兒の手にのらず。故に小犬のうちつれゆくなり。主ある犬は捕ることをゆるさず。京にも犬猫すくなけれど、大阪はいよ／＼すくなし。只夜行に犬糞のおそ

出し、橋の上を眞半分にして、一つは商人のやたいにてふさげ、往來甚だ混雜すれども、惡言をいふものもなく、口論もなし。（大阪の市人、つねに風體に釜などかけ、或は扇などふきて、萬事高上に見すること、この地の一風なり。）

○順慶町の夜見世こそめさむるわざなれ。暮より四ツ時までは、十町餘兩側みな商人なり。故にかひ物には夜出づる人多し。

○京も大阪も、夜は筵の上に古き手道具、すべていろ〳〵の古器等を出し、ちひさき行燈を横にして、前へうつむけ火を點ず。夜中にかゝる見せいくらもあれど、喧嘩爭論なきゆゑに、賊の愁もなきにや。これを夜見せといふ。（京は大和橋邊夜見せ多し。）

○新町の格子先にて、古物見せをならべ、妓樓の見せ先にて、櫛かんざしなどいろ〳〵の商人出づること、江戸人にはめづらし。

○大阪は食物の外、店うりといふことすくなし。故に商人の店など、晝も障子をたてゝおく店多し。みなおろし商ひ多き故なり。

○雪踏をうるものは穢多にて、橋詰々々に祇店あり。素人の店に雪踏なし。皮のつかざる女のうち附草履と、下駄足駄をうる見せは所々にあり。（京もこれに同じ。）

○堂島の朝市、これ又勢ひありてめざまし。

す、永祿元年五十三にて沒す、茶道を利休に傳ふと云ふ

大阪は眉毛なき女も、髪は多く嶋田なり。又嶋田にあらざるものは、かた髷兩わけなり。かつ山はまれなり。（髪の圖前に見えたり。）

○大阪の市中茶店なし。渇する人は途中茶にこまるなり。夜行するにも、いこふべき茶店なきゆゑ、格別草臥るなり。川筋は船を岸に繋ぎおき、こゝにて酒肴を鬻ぐ。京の河原の涼にはおとれり。夜店は大かた提灯を出す。京はかけ行燈なり。

○七月二十八日、大阪御城の大手先を徘徊し、天滿天神に詣す。近日の大水に天滿橋天神ばし落ちて、難波橋より往來す。

⊙同日座摩の社に詣す。社地に見せ物、芝居、茶店等あり。

○天王寺は大門のみ殘りて、一圓燒土のみ殘れり。天王寺の傍新清水より、遙に西海を眺望すれば、左にかづらき山、金剛山、二丈が嶽、むかふに聳え、淡路島山はるかに見ゆるなり。

○男子の髪の風は、えびじり髷多し。（圖は前に見えたり。）羽織は京よりも短し。

○新町橋の大さは、江戸のおやぢ橋ほどもあるべし。この橋の上、半分は商人にて、或は房藥をうる見せ、或は煮つけ肴、水菓子のたぐひをうるもの、おの〳〵やたい見せを

俳諧狂歌に名高し、享保十九八月十五日没す、年八十一

出雲守忠朝は、忠勝が二男なり、元和元年大阪夏陣に、從者二十餘人と天王寺口に向ひて戰死す、年三十四

紹鷗は堺の人、姓源氏、武田信光の後なり、「たねまきて同じ武田の末なればあれてぞ今は野となりにける」と詠じ、自ら氏を武野と改む、禪に參じ、和歌を好み、茶を嗜む、一閑居士と號

百一　元和戰死の古墳

七月晦日生玉明神、高津の社に詣す。夫より一心寺にいたり、本多忠朝朝臣の墓に謁す。墓の三方に從者討死のもの十三四輩の墓あり。外は板にて構ひて、猥に人を入れず。この寺に元和討死の石塔あまたあり。茶臼山の御陣跡、一心寺のかたはらにあり。小松おひしげれり。

百二　紹鷗が墓　附千家の墓の噂

泉州堺、南周寺に紹鷗の墓あり。鑰代百錢を寺僧に與ふれば、則ち墓に謁せしむ。詣人墓前にむかへば、土中おのづから茶をたつる聲ありといふ。是は墓の後に凹なる所ありて、それへ自然と風の吹入るゝなり。この寺に利休をはじめ千家代々の墓あり。

百三　鬼貫が傳　附評　此條簔笠雨談に載せたれば省く。

百四　大阪市中の總評

契沖字は空心、性は下川氏、父名は元全善兵衛と稱す、攝州尼崎城主青山幸利に仕ふ、寛永庚辰契沖尼崎に生る、元祿十四年、正月寂す、年六十二、年山紀聞卷尾に契沖行實あり

貞柳は大阪の人、油煙齋と號す、八幡山の信海の門人にて、

壬戌羇旅漫錄　卷の下

九十九　契沖阿奢梨墓誌

契沖師の墓は、大阪餌さし町圓珠庵にあり。碑面に、

圓珠庵契沖阿奢梨之墓

とのみありて、年月略傳等なし。傍に碑ありて、是は後に水戸の安藤爲章の建てし所なり。傳記大かた年山紀聞にしるす所に同じ。故にうつし來らず。

百　家隆卿の碑　附貞柳碑の噂

家隆卿の碑は、大阪新淸水のかたはら、田の畔少し高き所に松あり、その下にあり。近年安井の門主建てたまふ所なり。

同所新淸水の下に、鯛屋貞柳の碑あり。これも二十五回忌のとき門人のたてしものなり。いづれも後人の作ゆゑめづらしからず。よりてうつし來らず。

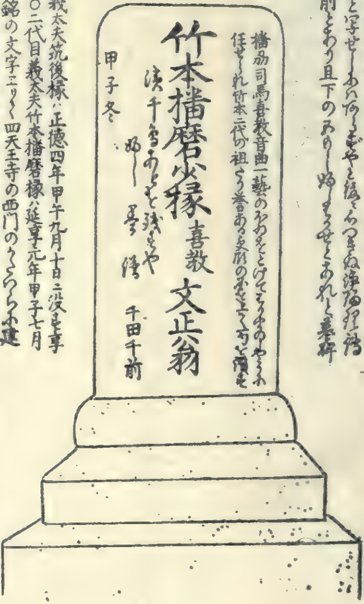
を、井上播磨掾、清水の徳屋利兵衛、京の宇治加賀に受け、その後一個の工夫を以て、はじめて一家の音曲をひらく。世に義太夫節と號す。（これより末に二代目義太夫が傳あり。）碑面文中元祖義太夫が没年なし。をしいかな。この墓の南の方に、並木正三が墓あり。碑面に（南無参寶）正三之墓とあり。これも高名の墓なり。

再考
二代目義太夫は延享元年七月廿五日没す、甲子は則延享元年なり

又按に、義太夫節傳記によりて思ふに二代目義太夫が亡骸は當時天王寺の西門邊に葬り、其後法善寺へも右の碑を建てたるなるべし

に建つる所なり。

追考千田千前ハ竹田出雲なり竹田とかくしを五口事かなく
えらるゝ千田と写せしものかゝるやと後てかつる浄瑠璃作
にハ竹田千前とあり且下のありし竹田もせとあれど墓碑
のさゝとささ
しとさく



追考元祖竹本義太夫筑後掾ハ正德四年甲午九月十日ニ没ス享年六十四歳なり○二代目義太夫竹本播磨掾ハ延享元年甲子七月二十五日没ス碑銘の文字ニりく四天王寺の西門のかたはらに建てありし義太夫節浄瑠理傳記よ見えたり、

石碑の三方に、片假名にて略傳をしるせり。長ければうつし來らず。その文中に元祖義太夫が傳を少しのせたり。

○元祖竹本義太夫は、天王寺傍村の人、名は博教、字は五郎兵衛號ス道喜。淨瑠璃の音曲

生涯さけをこのめり。



九十八　二代目義太夫が墓　附元祖義太夫畧傳

同所法善寺に竹本義太夫が墓あり。これははじめ政太夫といふ、二代目の義太夫なり。元祖義太夫が墓はその所を失す。二代目義太夫は寛延三年庚午九月没す。この墓三回忌

めんつう―乞食の食を請けて入るるもの

九十七　乞丐女六が墓　附評

千日寺の前往來のかたはらには、種々の墓あり。河豚をくらひて死したる四人のものの墓は、下に石にて大なる河豚のかたちを彫刻し、その上に棹石を建てて、四人の戒名をしるしたり。これらは一時の戯に似たれど、後人口腹を貪るのいましめにもなるべし。或は博徒の墓などに獅子を刻し、上に棹石を建たる大造なる墓あり。その外異形の墓あること、江戸の回向院の如し。大阪は一體石に富みたる所なるゆゑ、石碑いづれも立派なり。

○同所に乞食女六といふものの墓あり。寶暦年中のことなり。此六といふ乞食は、頗る見識あるものにて、奇人なりしとぞ。死後大阪の俠者あはれみて、墓を建てやりしなり。その墓敷石二壇にて、中壇に戒名あり。上には石にて六がかたちを刻し、めんつうをもち、酒樽のうへに立てり。胸より上はかけて見えず。この六臨終に偈を殘したるよし。一體心願ありて風狂人となれり。甚だ奇人なりけるよし、大阪の人かたれり。安達が原の淨瑠璃本に、六といふ乞食女酒をのむことあり。この六が事を書きしもののよし。六

九十三　美濃屋三勝が墓　此條幷に夕霧が墓の事雨談にくはしければ省きぬ。

九十四　遊女夕霧が墓

九十五　紙屋治兵衛が噂

紙屋治兵衛が墓は、大阪網島大長寺にあり。近日の大水に、この大長寺決口にあたり、墓所混亂して、或はおし流し、或は崩れたり。故に治兵衛が墓は見にゆかずしてやみぬ。治兵衛が家は今猶連續して大阪にありといふ。大阪今橋に、今猶紙屋治兵衛といふ紙問屋あり、豪家なり。世に今橋のねぢがねやしきといふ。

九十六　淀屋辰五郎奉納手水鉢の噂

淀屋辰五郎が奉納の手水鉢、天滿天神の華表の傍にあるよし、雨柳の話なり。予天滿へ參りし日はこの事をしらず、大阪出立の日に聞きぬ。故に終にうつし來らず。椀久が墓と辰五郎が奉納の手水鉢を見ざること、旅中の遺恨なり。この手水鉢のこと、その後大阪木津屋政五郎に消息して穿鑿せしに、絕えてなしといへり。木津屋は天滿の人にて、神人としたしく交れば、聞きもらせしにはあるべからず。

とろめん—兜羅綿、舶來せる毛布の名、後には和製なるあり

椀久が家は、京橋筋（一說に大手筋）にありしといふ。今その迹不レ詳。泉屋雨柳の話に、椀久が墓は大阪八丁目寺町實相寺本堂東南の方にあり、（墓誌）宗達之墓（かくのごとし）延寶年中に沒しぬ。墓の傍に松ありといふ。予このことを大阪出立の朝きゝぬ。ゆゑに實相寺にたづねゆきてうつし來ることを得ず。尤もうらみとす。（椀久はもと伊勢の人なり、彼地にも椀久が墓ありと云ふ。）

追考、曲三味線に云ふ、（卷之三六張目）「墨羽織の兩脇に翼ありて、足は馬のごとくなる人々、駕より出でて一列に竝居し中に、少し勿體めきたる人は、天和年中に女護の島へ渡りしと聞えし一代男世之助と見えたり。右は此津に名をのこせし椀久、むかしの姿そのまゝ、むしやくしや天窓に立島の布子、丸ぐけのひとへ帶、革巾著のあきから懐に伊勢天目吸口なしのきせる、とろめんの沓足袋、細緒の奈良ざうり、かはらぬものは扇車の紋所、今とても智恵のなささうな顔して坐せり。（下略）」これにて椀久が紋所しれたり○元日金歲越といふ義太夫本に、椀久とひやうたんかしくと、玉屋庄七が事を混合して作れり。又小歌につくりし椀久物狂は、ひやうたんかしくが事なり。

杏花翁―俳人、高林氏にして羽生庵といへり

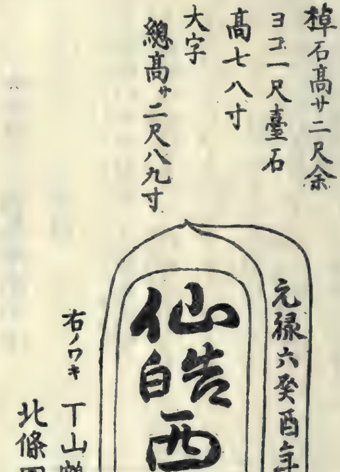
追考　難波鶴に云ふ、西鶴は井原氏、庵は錢屋町にあり。

九十二　椀久奉納の手水鉢

椀久が奉納の手水鉢は、大阪東門跡かけしよ書院の庭にあり。所縁あらざるものは見がたし。大阪の人もしらざるもの多かりしに、去年杏花翁はじめて見出さる。これよりして人これをしりぬ。今書院普請最中なり。庭あれて手水鉢叢の中にあり。則ちこれを搨るに、石面あらいしなれば墨つかず。もんじおほろげなり。もつともうらむべし。

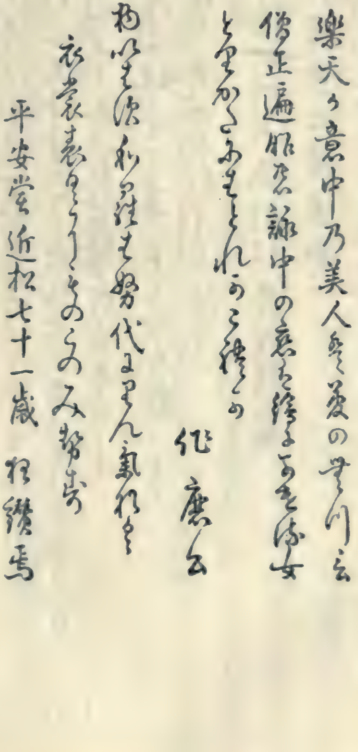


同道にて古墓をたづぬ。はからず西鶴が墓に謁す。寺僧もこれをしらざりし様子なり。花筒に花あり。寺の男に何ものが手向たると問ふに、無縁の墓へは寺より折々花をたつるといふ。



團水は西鶴が信友なり。西鶴没して後、團水京より來り、七年その舊廬を守れり。そのこと西鶴名殘の友といふ草紙の序に見えたり。

又同人所藏美人の讃　紙中竪二尺、横一尺許、書は土佐畫のごとくみゆ。



これも文字は肉筆のごとし。近松が肉筆は大阪中に只この二幅のみなりといへり。

九十一　西鶴が墓誌

西鶴が墓は、大阪八町目寺町誓願寺本堂西のうら手南向にあり。三側目中程　七月晦日盧橘と

甲冑の家に生れて武林にあそびしに槐九卿に服えし
はた庵に寸爵なく市中に住居して商賈にもあらず
候く隠にもあらず賢にも似て賢ならず世の中に住む人の
神釋儒道和歌有職弓馬郢曲あり舞踏雅なるも
事とせざるは一生我心にひたすらし今はの際にいたりて
其の一大事業をもなさずして傍観至愚の甚しきは人の
知るところなりあゝ我世に辞るよし
然るに辞世せざるもその名に数多あり
然るを桜のちれしに似たり

近松門左衛門杉森姓信盛

号平安堂巣林子

阿耨院穆矣日一具足居士

國字―和文

近松寺にありしいにしへをわすれざる微意にや。（文中採レ要）愚云ふ、この說によれば、かの三井寺門前近松寺破戒の僧のうちなりといふ說はたがへるにや。二代目義太夫が墓は千日寺にあり。則國字を以て略傳をしるせり。文中に元祖義太夫が傳も少しのせたり。（末に出す）元祖義太夫が墓はしる人なし。予正三を訪うて近松が墓所を問ふに、正三もしらず。久久智の廣濟寺の過去帳に戒名あるよしをかたれり。よて正三が耳底簿をかりてこれをうつす。久々智は神崎の隣村なり。

久々智廣濟寺過去帳

阿耨院穆矣日一具足居士　　俗名近松門左衞門

享保九年甲辰十一月廿二日

阿耨院の法號は近松みづからつけおきしなり。そは辭世の詠草中に見ゆ。

○大阪金屋ばし銅吹所熊野屋彦九郎所藏、近松門左衞門辭世の詠草。（紙中竪一尺許、横一尺許、手迹は御家流の如くみゆ文字は肉筆の通りにこれをうつせり。）

戯材錄—狂言作者の口傳祕事を記したるもの

有職—式典故實

九十　近松門左衞門が傳　附墨跡

近松門左衞門は、越前の產とも又三州の產ともいへり。今の並木正三が戯材錄に云ふ、肥前近松寺の僧の話に云ふ、近松門左衞門は、元肥前唐津近松禪寺の小僧なり。古澗と號す。積學に依つて住僧となり、義門と改む。徒弟あまたありしが、所詮一寺の主となりては、衆生化度の利益うすしと大悟し、遂に行脚に出でぬ。そのころ肉緣の舍弟、岡本一抱子といふ儒醫、京にありければ、これに寄宿し、還俗して堂上家に奉公し、有職の事も大かた記憶せり。後浪人して京都淨瑠璃芝居宇治加賀掾、井上播磨掾岡本久彌、角太夫抔の淨瑠璃狂言を著述せしが、そののち竹本義太夫にたのまれ、出世景淸といふ新戯文を書けり。是近松が義太夫本戯作のはじめなり。是よりして數十部の作あり。すべて近松が作は、勸善懲惡をむねとし、衆生化度の方便を戯文中にこめたり。是近松還俗の日發願のおもむきによるかといへり。義太夫が作者となりて、近松氏を名乘ること、

して扇面を乞ひしに、こゝろよくうけひきて、詩一篇と連歌の發句とを書けり。手迹甚だ美事なり。

金城春色映丹霞　活氣和風到萬家　潰笑宴然樓上興
捲簾先見園中花

早春　三好氏婆　正慶草

又

月落ちて松かぜ寒き野寺かな　丁女丁　正慶

詩も正慶草とあれば自作とみゆ。言語おのづから俠氣ありて、みづからいふ、老婆が忌みきらふもの、酒客と猫なりと。好事のものたま〱これを愛す。前年蒹葭堂みづからの用墨のかたにこの正慶に畫かしめ、蒹葭堂みづからこれに題書す。蒹葭堂形の墨とて、いまなほ大阪にあり。正慶は畫もできるなり。しかれども畫はいよ〱人のもとめに應ぜず。大阪の人もその名をよばず、只奴の小まんとのみよべり。推するに、奴の小まんといふ女俠、元祿の頃にあり、それに似たれば、正慶が諢號とするなるべし。

蒹葭堂―木村巽齋、大阪の人名は孔恭、多藝にして書畫を、よくせり

りかをしらず。こゝに柳里恭（柳澤権大夫）ひそかにゆきをかたらうて、かの惡黨をさがさしむ。ゆき程なくかの惡黨をとらへて官府に出せり。かゝることより芝居狂言に、奴の小まんとて作りしなり。秋成が書けるものに、ゆきがみそか男を柳里恭なりと記せしは、甚非なりといへり。

按ずるに、柳里恭の事年代相當せず。これは元祿年間大阪に奴の小まんといふ女俠あり、それを混じていふなるべし。正慶は享保七年にうまれ、享和二年に至つて七十四歳とぞ。

八月二日、予難波村にたづね行きて正慶尼を訪ふ。（正慶尼は奴の小まんが法名）この日盧橘同道、則同村の醫師鎌田氏に就て謁を請ふ。正慶木津に家ありしが、居をしめては人の往來わづらはしとて、その家を木津の菩提所に寄附し、難波村に來り、人の家に寓居すといへども、つねにその所をさだめず。鎌田氏人をはしらせ、しばらくにしてたづねあひぬ。みづからいふ年七十四と。顏色既に老衰すといへども、猶いにしへの餘波見ゆ。歩行動搖いまだすこやかなり。一體世をいとふこゝろあるをもて、人書をのぞめども猥に書ず。予對話

被官―附屬の官、省の下なる寮司などの稱

奴の小まんは、本名をゆきといへり。三好氏。今尼となりて正慶と號し、難波村に隱居す。大阪長堀木津屋といふ豪家のむすめなり。今長堀銅吹處いづみやの隣に大なる明屋敷あり。此所正慶が家なりしといふ。難波人の話に、ゆき十七八歳の時より、みづから誓うて嫁せず、夫をむかへず、そのころの世話に、ゆきまことに男をきらふにはあらず、是は故ありておのれがおもふ男にそはれぬ故に、男きらひなりといひしとぞ。ゆき俠氣ありて、又書をよみ手迹をよくす。つねに大阪中を往來するに、顏に墨をぬり、そのうへに白粉を施し、異形のかたちに扮ちてありきしとなり。（是その男子にまみえざるこころざしをしめすなり。）ゆゑにそのあざ一日は頰にあり。又一日は額にあり。こゝをもて世の人やつこ〳〵と呼べり。程經て京都堂上家の被官浪人し、大阪に來りてありしを扶助し、これを男めかけにして難波新地の邊に住ましめおき、折々かよひてたのしめり。後かの男義にたがふことありければ、ゆき怒りて忽ち追出し、是より又ふたゝび男になれず。そのころ惡黨無頼の某といふもの、法をおかすことあり。このもの大阪にかくれ居るといへども、そのあ

再按ずるに、南嶺は多田兵部、後に桂秋齋と改名せし、えせ國學者の事なるべし。

蔦のから丸—寛政中通油町なる書肆重三郎の狂名、狂歌草雙紙洒落本等其名を錄するより皆他人の代作といふ

は、國學にくはしき人にて、其碩などが及ぶところにあらず。この南嶺も老後に戯作をして、自笑が作とし出せしが、是はわづかの間なり。又自笑も少しく才あり、戯作のできぬといふ人にはあらず。其碩と絶交して後は、自笑がみづから書きしもあれど、大かたは諸方の合力にて高名になりし人なり。此說おもしろし。しかれども南嶺は其碩などが及ぶところにあらずといふ說はうけがたし。今も南嶺作としるせし草紙たまさか見ることあれど、中々其碩が右にいづるものにあらず。この說のごとくならば、其碩は一個の戯作家也。大阪にて其碩が沒年等しる人なし。京の大佛餅その迹といへども、これも今は株を他人にゆづりしにや、京にてきかざりしかば、大阪にてはしる人たえてなし。八文字屋自笑は藤原姓にて安藤氏なり。自笑は京二條寺町本覺寺に葬れり。今の八左衛門に至りて四代なり。自笑は延享二年丑十一月十一日に沒す。年八十餘 先年京都にて類燒して後、今の八左衛門は大阪心齋橋筋安堂寺町に住みて、かすかなるくらしに見ゆ。予かの家にたづね行きて、自笑が傳記等をたづぬるに、別にいひ傳へたることもなしといふ。當時の役者評判記は八左衛門自作なり。江戸の卷は本町の大橋氏えらめり。元祖自笑が說、近ごろ江戸の蔦のから丸が高名になりし趣とよく似たり。元祖自笑、その子瑞笑、是よりまた自笑と稱するのみにて作文なし。今の八左衛門は年五十有餘に見ゆ。是又戯作などできる人物にあらず。しかれども當時の役者評判は自作にすといふ。宜なるかな近年評判記のおとろへたることを、これらをもておもふに、元祖自笑が說よく符合せり。

八十九　奴の小萬が傳

確執―仲たがひ
一作―一人の作

いろの戯作をあらはし、自笑作として出板しけり。自笑といふ名も、この南嶺がつけてやりしなり。外にまた一人作者あり。その名をわすれたり。（其碩か）この作もまた自笑作としるして出せり。故に自笑作とあるもの、實に自笑が作にはあらず。自笑は戯作など出來る人にあらず。そのころは八文じ屋繁昌して、業用尤もせわし。只射利の俗人なり。かゝる例をおうて、俳優の評判記等、今も猶自笑作としるせり。不文の俗人にして高名となること、此人の幸なり。（橋本經亮のはなし。）

大阪の盧橘は元京の人なり。かの人の話にいはく、其碩は京都大佛もちの元祖なり。この餅世に賞翫せられて家富みけり。其碩才學ありて、よく戯作をあらはし、これを自笑にあたへ、自笑作として出板しけるに、その本大に世に行はれ、自笑利を射ることしばしばなり。其碩も密に後悔し、且名利をもとむるこゝろやありけん。のちには自笑其碩兩作のおもむきにして出板しけるが、その後故ありて自笑其碩確執に及びぬ。よつて其碩その子に江嶋屋市郎右衛門（其碩實名）の名をゆづり、これに書林をさせて、其碩が自作の草紙を多くほりしに、甚だ不幸の人にて、其碩一作として出せし本は更にうれず、大に損をしたり。はじめ自笑が代作は、この其碩がしたりしことは相違なし。又南嶺といひし人

ふ者の舟下流にありてこれをとる。かくのごときもの一夕數十艘あり。
○凡そ伏見より淀まで、河水決口に入るを以て流れず。或は砂礫一所にあつまりて洲となる。こゝを以て舟自由ならず。淀より枚方の間、木津の水おちあうて急流日頃に倍せり。點野より八軒家に至りて、水又淺く流れず。故に舟人河中に入りて舟を押す。旅人もちからあるものは、共に河中に入りてこれをたすく。
○枚方の河中にて酒食をうる船は、餅くらはんか、酒くらはんかといふ。しかれども今は大に罵らず。この邊すべて言語尤も野鄙なり。
○伏見撞木町の妓樓、今は大におとろへて、廓はむなしく菜園となれり。吾妻屋とかいへる妓樓只一軒のこれり。是さへいにしへのさまにはあらざめれど、僅にその遺跡を見るのみ。撞木町の妓樓にて、赤穗義士のふみを墨本にして出すよし聞きぬるまゝ、人にたづぬるに、今にかゝることを聞かずといふ。撞木町かくまでおとろへたれば、その妓樓も今はいづち行きけん、伏見にしる人なければ、くはしくたづねもとめずして過ぎぬ。

八十八　八文字屋自笑が噂　附其碩　これより大阪の話をしるす

八文字屋自笑は、不文の俗人にてありしが、そのころ京都に南嶺といふ人ありて、いろ

發して—ひらいて

連り、一面湖となりぬ。點野は既に河内に屬す。この邊川高く陸卑し。故に水勢退くことなく、今に至りて濁水丈餘、はじめ水至る時、樓屋梁を沒し、樹木梢を洗ふ。村民丘陵に登り、或は隄防に集る。四方悉く怒波、兒女號哭の聲天に遍し。民屋水面に泛び、その中尙燈火熒々たるものあり。亦老幼五六人大木に攀ぢ、その根拔けて流るゝ者あり。亦その子を畚の中におき、樹の上にかけたるものあり。幸に遁れて一命を全うする者十が一二のみ。こゝに於て官命あり、舟人をしてこれを拯しむ。しかれども水勢暴漲、舟至りがたき者あり。官京橋の側に數十間の假屋を作り、又は道頓堀の雜劇（五ケ所あり、一は當時その破損を修理して）あり。中に流氓を入れおかる。氓集るもの四千人、則倉を發してこれに資給し給ふ。浪華の富商も又貯財を出してこれに施行す。大小一ならず。大阪八軒家邊水床に及び、天滿天神橋その餘の小橋損ずるもの三ッなり。二十日ばかりにして水やうやく減ず。氓故地にかへる。しかれども決口より水入りて、田地濁水中にあり。或は砂礫畊すべからず。點野より西數十町、堤に竹を柱とし、藁を屋根とし、僅に雨露をふせぐもの數百人、伏見大阪の客船往來するものあれば、十三四歲の童、小舟に棹さし來り、桶をふねの中へ投入れて錢を乞ふ。旅客泣然として袖を濕し、則錢をその桶にいれてこれを流す。乞

はなひる―くさめする、くさめは陰にて他人が己の噂しそしる故との俗説による

かへし
噂してそしらるゝともあすよりははなひるたびに君を思はん　解

○京にて見たりし澤庵和尚遊女の賛

佛は法をうり、祖師は佛をうり、末世の僧は祖師をうる。汝は五尺の身を賣つて、一切衆生煩惱をすくふ。色界是空、空界是色、柳はみどり、花はくれなる。

水の面によな／＼かよふ月なればこゝろもとめず影も殘らず

是はよく人のしる所なれど、しばらくこゝにしるしおきぬ。

同　淀の洪水　撞木町の噂

七月二十四日京を發し、午時伏見より船に乗りて大阪へ下る。泉屋麥雨同行、今夜五ツ半時頃大阪へ著岸。その間所々洪水の跡を見て駭然たり。淀八幡邊所々の堤崩れて、今專ら杌をふり、土を運びて普請す。淀の城の塀は屋根際にまで水つきたりと見ゆ。淀ばしは柱二本ながれて、橋桁二所まで落ちこみぬ。水車は流れてその跡僅に殘る。高槻の城又かくのごとしといふ。枚方より二里ばかりあなた、點野仁知の間、堤大に切れて水突流し、南、平野村にいたり、東、駒が嶺の麓に及び、西、城際にいたり、北、澱河に

く約してかへりぬ。友人おもへらく、文次虚談の會初には何をいふやらん、聞かずんばあらじと、本日各打連れてその家にいたりて案内をこふに、妻はしり出でて云ふ、文次は今朝より他行と。衆絶倒す。西村定雅話、文次今猶高倉にあり。

八十七　應擧が臥猪　此條雨談に出でたれば省く

同　京の浮世繪　附澤庵畫贊

祇園にセイビといふ畫工あり。おやま藝子の似がほを畫いてこれをうれり。妓及び戲子の似がほを錦繪にして、多くすり出すこと近年の新製なり。しかれども江戸のにしきゑに及ばず。

○予が旅宿せし泉屋麥雨が妻、歌妓の圖を畫いて贊を乞ひければ、

かねかすむ春の夜遊にうたひめのちりかゝるとき花も數そふ

自注にいはく、花とはあげ代なり、四寸ばかりのせんかう三本たてゝ、花一ツとす。晝夜にて花三十、朝六ツより暮六ツまで花十二なり。夜も又おなじ。

○京をたちける時

もろともにかもの川べにすゞみとる都の手ぶりわするなよ君　經亮

もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」西行「心なき身にも哀は知られけり鴫立澤の秋の夕暮」寂蓮「寂しさは其色としもなかりけり槇立山の秋の夕暮」

あやめ―殺傷し

いふまでは、海邊のこゝろなかりければ腰折なり、もし見わたせば花ももみぢもなに波津とし給はゞ、なきをなにはにかけて浦とつゞき、海邊のこゝろ上の句にふくませて拔群ならんといへり。これら今いひもてつたへて賞しぬ。

八十六　嘘譚の名人

齋藤文次（元御所官人日向介、四條高倉に住す。）といふ人、虚談をもてよく人をわらはしむ。去年七月高槻の町にて、色情の遺恨をはらさんため、盆をどりにて群集せし夜、七十人ばかり人をあやめたることのあり。そのころ京にて此話まち〳〵なり。文次友人のもとへゆきてかたりて云く、高槻に通家あり、きのふゆきて喧嘩のことをきくに、疵つくもの僅に三人なりと。是實説なりといふ。人おもへらく、七十人はあまりに多し、この話のみ文次其實を得たりと。明日高槻より人來る。則喧嘩のことをきくに、疵つくものじつに七十人。衆絶倒す。

文次嘗て友人を訪うて云ふ、時初春にして世上詩歌管絃の會初あり、僕も叉啌のつき初をすべし、來る十一日午時より、おの〳〵打ちつれて、拙家へ來臨し給ふべしと、かた

しかれども是と說話するに、三ツのうち二ツは甘心しがたきこと多し。夫都會の人氣おのづからみなかくのごとしといへども、京師尤も甚し。文人多くは風狂放蕩、是またこの地の一癖のみ。京の人に滑稽なし、自笑其碩と、近年胴脈とのみ。むべなるかな、ばせをも蕎麥と俳諧は京の地にあはずといへり。

○京にありし日、へだたることありて人のもとへよみてつかはしける。

契おきしその言の葉もあだし野やかれゆく人のふみも通はじ

○今上方にて人口に膾炙する歌、

みののくに熊坂物見の松かれたりければよめる　秋成

くまさかの物見の松もかれにけり何いたづらにとしを盜まん

おなじこゝろを　杏花園

風さわぐ綠のはやし根をたちて戸ざさぬ御代にあをはかの宿

韓信が市人のまたをくゞるかたかけるに　秋成

末つひに海となるべき谷水もしばしはくゞる松の下かげ

この歌蘆庵なりともいへり。未ㇾ詳。蒿蹊云、この歌は、伏見中書島の隱士學丹が歌にて、しばし木の葉のしたくゞるなりといふ下の句を蘆庵が添削したるなり。

○本居宣長、三夕の中定家卿の歌を難じて云ふ、見わたせば花ももみぢもなかりけりと

みどりの林—綠林、盜賊をいふ

三夕—定家「見渡せば花も紅葉

をかしき—趣ある
上田餘齋—秋成
蘆庵—歌人小澤蘆庵

ぶり、腮の所にて結ぶ。いよ〳〵見ぐるし。京にて三十以上の女は淺黄帽子、四十以上は藤色の帽子、老女は紫或は黑、是京の風俗なり。凡そ女子の帽子をつけることいにしへの遺風なり。見ぐるしといへども、江戸の女子の素面にて他行するにはまされり。

八十四　粟田の陶器

京都の陶は、粟田口よろし。淸水はおとれり。白川橋に松風亭といふ店あり、大阪蒹葭堂このみのこんろ急須等を製す。又一軒旭峯といふ店あり、宇治の通圓が店にてひさぐ茶碗を製す。この二軒器物をかしきもの多し。

八十五　京師の人物

京にて今の人物は皆川文藏と上田餘齋のみ。（餘齋は浪花の人なり、京に隱居す。）しかれども文藏は德行ならざるよし聞ゆ。秋成は世をいとうて人とまじはらず。蘆庵は故人となりぬ。畫は月溪と雅樂介のみ。蘆庵應擧尤もをしむべし。

凡そ京師の文人、見識甚だ高上、情才に過ぎたり。文學の事、京師の外みな村學と稱す。

太鼓(たいこ)を鳴らし、法師兩三人棺の先にたちてこれを導く。身分よろしきものならずともかくのごとし。是土地の風俗なるべし。

○伏見の桃山にて、

名のしれぬきのこ見て行く山路かな

八十二　女兒の立小便

京の家々(いへ〳〵)廁(かはや)の前に小便擔桶(せうべんたご)ありて、女もそれへ小便をする。故に富家の女房も小便は悉く立つて居てするなり。但良賤とも紙を用ひず、妓女ばかりふところがみをもちて便所へゆくなり。（月々六齋ほどづつこの小便桶をくみに來るなり。）或は供二三人つれたる女、道ばたの小便たごへ、立ちながら尻(しり)の方をむけて小便をするに、恥づるいろなく笑ふ人なし。

八十三　女子のばうし 附伊勢尾張

京大阪伊勢にて、女子他へ出づるには、必ず帽子をおく。尤も帽子かたち少しづつかはれり。（圖は前に出づ）京大阪の綿帽子は結ばず。そのさまくらげの化物(ばけもの)のごとし。名古屋は綿をか

坂本山王へ詣づるに便よければ、秋暑甚しく歩行にたへず。から崎より遙に山王の宮居を拜し、舟にのりて三井寺へ參る。これより石山へ二里半あり。終にゆかずして京へかへりぬ。

八十 かし家の札

京にてかし家の札は、必ず子供にかゝせて、札を横に戸へはりつけおく。かくすればその家はやくふさがるといふ。何ゆゑなることをしらず。



かくのごとし。

八十一 京市中の喪 附名古屋伏見

京にて忌中には店上に黑き暖簾をかける。江戸にて簾をかける類ながら、黑は喪服の色なれば簾にまされり。忌中の札なし、無地の暖簾をかくれば、人かならず喪あることをしつて、みだりにいらず。名古屋にて市中の葬禮に棺槨を禁ず。駕に白布をはるなり。伏見にては棺甚だ立派なり。棺を擔ふ者に至るまで、悉く袿衵を著す。四方に紙の天蓋幡等をたて、上下を著たるものこれを捧げて持ちあるき、鉦

八景やとほく見るほど秋のいろ

凡そ湖水はこれまで予が目にふる所の佳景なり。就レ中白川の峠よりこれをのぞみ見れば、左に若州の諸峯遙にそびえ、むかふに伊勢、近江の山々波濤のごとく、足下にから崎を見おろし、左に三井、大津、粟津、石山等見ゆ。矢走、片田の邊、晴れたる日はかすかに浮御堂も見るべし。畫くとも筆に及びがたく、述ぶるとも詞に盡すことあたはず。湖は浪しづかにして、席を布けるがごとく、船は帆をあげて一葉水に浮ぶがごとし。山水の奇絶こゝに於てむなしく口を閉づ。

○から崎の松は北より南にさす枝、凡そ三十間ばかり、東より西にいたり廿間餘、みきは三かゝへにあまり、木の丈け高からず、まん丸に茂生す。是亦天下の名木、實に一奇觀といふべし。

傳に云ふ、から崎の松かれたりしを、明智光秀植ゑかへたりし時「わが外にたれかうゑけん一つ松こゝろしてふけ志賀の浦風」その後これも枯れたりしかば、長嘯子またうゑらる、これも又かれて、今の松は大阪加番の諸侯某氏うゑられし所なりといふ。松のめぐりの岸に石垣をして、いと嚴重なり、近年松枝しだいに蔓茂するを以て、石垣をつき出すことたび〳〵なりといふ。是みな公儀御入用にて修理し給ふ。松の前面に辛崎明神の社あり。小社なり。或人の云ふ、前の說ことごとく非なり。から崎の松は已に四百年におよぶか、そのこと叡山の記錄にありといふ。いかさま木だちのさま百年來のものにはあらず、傳記など考ふべし。

三十番神し法華經守護の番神にて、伊勢明神より貴船明神に至る三十神を毎月三十日に現し、日々の法華經守護の任に當るといふ

○高臺寺の萩は、大阪より歸路京に來りし時見たり。

○近年京にてはやり神は、赤山明神と、深砂大王なり。赤山は叡山の麓きらゝ越の丑寅三四町にあり、深砂は上醍醐にあり。此神去年開帳已來のはやり神なりといふ。神體鬼形畫幅なり。是三十番神のその一なりといふ。祇園のおやまけい子奉納の挑灯あまたあり。

○七月十二日小倉山に遊べり。楓もいまだ青みがちにてありき。一木ふた木梢の少し色づきたるをやう／＼手をりて、笠につけたりしに、道にておとしてうしなひぬ。すべて京都の神社古迹等は古人もこれを抄出し、又近ごろ都名所圖會といふものに圖說くはしければこゝにしるさず。只おのれがこゝろによしとおもふことのみ、少しく書付けおくのみ。

○近江の三上山は出來のわるき小富士なり。かくのごとし。比良はかたちかくごとし。叡山愛宕尤もたかく見ゆ。

○七月廿一日未明に木屋町の旅宿を出でて、から崎の松見にゆきけり。吉田の神社を道すがら拜し、白川越にかゝり、峠にて湖水を眺望す。白川の山中所々にて石をきり出す、世にいふ白川石これなり。

鳥部山―古へ人を火葬したる所

耳塚―舊名鼻塚　豐國神社の西路傍にあり、征韓の役戰捷の印に切りたる敵の耳鼻を埋めし塚

繼信忠信―義經に仕へて節に殉じたる兄弟

諺―「京の三十三間堂に佛の數が三萬三千三百三十三體ござる」

○鳥部山は今もあはれなり。此邊袖乞多し。御廟野もいとさみし。東西の大谷甚だ立派なり。

○しる谷越は、いつも山水山路に流れ出でて名の如し。

○妙心寺の松は甚だよし。四方へ枝をうつこと十四五間、しかれどもから崎の松におよばず。

○鹿苑寺の金閣は甚だ古雅なり。義滿の像生けるが如く威あり。よき石あまたあり。瀧はわろし。金閣拜見の者、一人より十人までは銀二匁なり。これを寺僧に投ずれば、則ち庵の門をひらく。東山銀閣寺もまたかくのごとし。

○智恩院の傘は今猶骨ばかりになりて、本堂の右の方の軒下にあり。

○大佛の鐘も大きけれど、智恩院のかねまされり。かたちひらたくて雅ならず。鐘の響よきは祇園是第一なり。

○大佛の燒跡、その大きさを見んこと、柱のかなものと礎と佛の臺坐のみ。耳塚を見ては昔をおどろき、太閤の廟を見ては昔をしのばれ侍る。この邊町家のうしろにある繼信忠信が塔、苔むしていとあはれなり。

○三十三間堂の觀音、諺のごとく數多し。

落柹舍は、俳人去來が住みし草庵なり、この人名は兼時といふ。長崎の人向井元升が二男にして、若かりしより、洛に住し、芭蕉翁の風流を學びて、俳諧に名あり、寶永元年九月没すといふ

つるめそ―祇園會の役を勤むる犬神人の稱

○さがの落柹舍は、二尊院より四五町間道藪の中にあり、土人もしらず。今は守る人もなくて、その地主も農民の得となる。座敷二疊、勝手一疊、甚だくづれたり。

柹の樹や月ばかりもる秋の庵

○見てうれしきもの、八瀨大原の黑木うり、鞍馬のつるめそ。大原女のさかさ脚半は、むかふずねの方にて脚半をあはせはくなり。女の牛馬を牽きてゆきゝするさま、まためづらし。

○見ておどろかれぬるものは、東西の門跡なり。綺麗莊觀言語同斷、誠に美盡して世界の金銀もこゝにあつまるかとうたがはる。しかれども黃檗の雅にしてさびたるにはおとれり。

○見て尊きもの、禁中はさらにも云はず、上下加茂の社、公卿の參內。

○見てやさしきもの、かつぎ著たる女。

○見てすゞしきもの、たゞすの御洗井、かも川の流れ。

○虫きゝには、眞葛が原よし。嵯峨は野々宮邊尤もよけれど、道遠ければわづらはし。

○河鹿はあらし山の麓大堰川にてなくよし。いまだ時候はやければ聞きにえ行かず。

人に見せなば、遠きあづま人もいよ〻信をまさんことうたがひなければ、此よしを神につけ奉りて、これを手折れり。

　手折るとも神やゆるさん久方のひらぎかざして歸るあつさに

○七月九日、宇治へゆきけり。今日上醍醐、下醍醐邊、稻荷山、ふじの森、深草、東福寺、黄檗など、道すがら一見す。八幡山崎邊洪水にていまだ道甚だ荒たり。宇治橋は三段に切れて落ち、通圓が茶店は床上四五尺も水つきしと見ゆ。興聖寺、平等院、洪水おし入りて、路難儀なり。離宮は高き故水難なし。橋姫の宮は流れて跡なし。

○和泉式部が稻荷山にて古歌をずしたりといふもみぢは、山上七八町おくの谷間にあり、古木なり。地理を思ふに、田中の社のかへるさとあれば、昔の木にはあらざるべし。

○七月十一日、嵐山に遊び侍り。渡月橋も近日の洪水におちて、川上七八町まはりて渡舟あり。大井川の石、及び紙屋川の石など、すこし拾うてかへりぬ。秋暑にたへざれば、終に佳品を得ず。この邊の石細長くして文鎭となすべき物あり。

○嵯峨にてうれしきもの、廣澤の池とあらし山なり。廣澤は佳景なり、嵐山は絶景にて侍る。

もつこく—木斛

京にて客ありて振舞をするには、丸山、生洲、或は祇園二軒茶屋、南禪寺の酒店などに、一人に價何匁と定め、家內せましと稱して、家內せましと稱して、その酒店へ伴ひ行く。是別段に客をもてなすの儀にあらず、家にて調理すれば、萬事に費あり、その上やゝもすれば器物をうち破るの愁あり、故にかくのごとくす。京の人の狡なること是にて知るべし。

七十九　洛外の古迹　附近江八景

七月七日、むらさきの、上賀茂、北野まゐれり。北野にて、

思ふことかみにうつしてねぎまつる松の葉の筆梅が枝の軸

歸路千本にて、雷したゝかなりて、夕だちぬれば、づぶぬれにぬれてかへりぬ。

○下賀茂柊明神には、柊の木多し。志願成就の人は必ずこの社頭へ柊をたてまつる。たとへ餘の木をもてきて植うるといへども、程なく化して柊となる。予七月八日賀茂に遊びけるに請うてもつこくの半柊に化したるを一枝手折りてかへりぬ。その外南天つゝじの柊に化したるもありしが、或は枯れ、或はのこらず柊に化したる故手折らず。かゝる神木をいたづらに折らんこと、おそれなきにしもあらねど、携へかへりてその奇瑞を

すべて京の茶店は、四方一間位づつにしきり、左右にすだれをさげたり。名古屋の七ッ寺の酒店もこれをまなべり。

○祇園に孔雀茶屋あり、もろ〳〵の名鳥多し。名古屋の若宮八幡前近年孔雀茶屋を出せり。

○大佛餅は江戸の羽二重もちに似て、餡をうちにつゝめり。味ひ甚だ佳なり。うゐろうちまきといふものは、黒砂糖製にてよからず。その外安ものは、挽米のやきもちなり。上菓子はよしといへども價大に貴し。

七十七　河原のすゞみ

納涼は四條二條の河原よし。四條には義太夫或は見せもの等いろ〳〵あり。二條河原には大弓楊弓見せ物もあれど、四條尤もにぎはへり。然れども河原は晝の炎暑に石やけて、ほてりいまださめず、流れに水みちて、人すくなければ、かへりて二條四條にまされり。糺にも茶屋酒店等川に床几を出し、種々の料理をひさぐ、四條二條は茶店のみなり。納涼の人辨當をもち來りて、河原にてひらく、すべて京師の人は、遊山にかならず辨當をもちゆくなり。貧しきものは竹の皮に握りめしをつゝみてもちゆき、店物はくらはず、只店上のものをくらふものは、旅客と祇園の嫖客のみ。ゆゑに物みな價貴し。茶店の茶いづれもわるし。すべて一人三四錢の茶代をつくなふゆゑなり。清水智恩院邊の茶店は、素湯に香煎なり○糺のすゞみは晝なり、夜は茶店なし。是遠き故なるべし。

七十八　京都の節儉

鯉のこくせう―今專ら鯉こくといふ、鯉の味噌吸物

あわ雪―あわ雪どうふ、豆腐の特にきめこまかく軟きもの

にも出店あり。松源近年客多し。こゝにて鰻鱺、あらひ鯉、名物といふ。魚類は若狭より來る鹽小鯛、鹽あはび、近江よりもてくる鯉、鮒、大阪より來る魚類、なつは多く腐敗す。鰻鱺は若狭より來るもの多し。しかれども油つよく、江戸前にはおとれり。鮎鮠は加茂川にてとるもの疲て骨こはし。鮠はよし。若狭の燒鮎よしといへども、岐阜ながら川の年魚などくうたる所の口にては、中々味なし。鯉のこくせうも白味噌なり。赤味噌はなし。白味噌といふもの、鹽氣うすく甘ッたるくしてくらふべからず。田樂へもこの白味噌をつけるゆゑ、江戸人の口には食ひがたし。鰻鱺は大平などへもる。小串は燒きて玉子とぢにもせり。大魚の燒物は必ず片身なり。皿の下になる方の身はそぎてとり、外の料理につかふこと、大阪も又かくのごとし。京は魚類に乏しき土地なればさもあるべし、大阪にて片身の濱燒など出すことといかにぞや。是おのづから費をはぶく人氣のしからしむるもの歟。京にて味よきもの、麩、湯皮、芋、水菜、うどんのみ、その餘は江戸人の口にあはず。

○祇園豆腐は眞崎の田樂に及ばず、南禪寺豆腐は江戸のあわ雪にもおとれり。しかれども店上廣くして、いく間にもしきり、その綺麗なることは江戸の及ぶところにあらず。

喈々堂、名は謙字は貞吉、池大雅堂の門人にして、書を能くし、又畫をもなして、頗る風流の人なりといふ

七十六　京地の酒樓

喈々が家は今猶東山にあり。今の主人も茶など嗜むよし。門柱の聯は片竹を以てつくり、「我酒妙々天下妙。伊丹雙白價不レ渝」の數箇字を記したり。その外のものは板面泯滅してよめず。こゝにてこんにやくの田樂名物なり。麩もよし。喈々が時はこんにやく一種なりける由。今はこのめば外の料理もするなり。○祇園の梶子が茶店今は跡なし。○大雅堂は、東山雙林寺中長喜庵の向ひにあり。是は七八年前に建てし所なりとぞ。料理をして鬻ぐ。瓦には大雅堂の三字を篆して、家の作りも甚だ俗なれば、案に相違して人に問ふに、むかしの大雅堂は祇園のかたはらにありしが類燒せり、今のあるじは歌妓なるよし、空しく大雅堂の名をおかすといふ。いかさま家作二階等の物數寄、其俗なること丸山の料理茶屋におとれり。

○丸山の料理茶屋のあるじは、法師にて肉食妻帶なり。いづれも何阿彌と稱す。座敷庭綺麗なり。料理もよし。浮瀨はおとろへて僅に一軒あり。大阪の浮瀨は猶繁昌せり。

○生洲は高瀨川をまへにあてたれば、夏はすゞし。柏屋松源などはやる。柏屋は先斗町

けづり掛の神事｜けづり掛は祝木ともいひて新年の祝儀に用ふるもの、本朝俗談志に「京祇園に十二月晦の夜削懸の神事あり、此夜参詣人貴賤通りちがひに互に悪口雑言を吐き大きに罵る也、闇中誰相手といふ事なく尤も刃棒千切木の沙汰なくたゞ言葉戦ひばかりなり」

二星を祭るの挑灯、七日の夜ながさずして、六日にながすものは、京の風俗なり。すべて京は五節供の諸拂等、晝の内にかたづけ、とりに來らざるかけは持ちゆきて勘定し、當日夕方は俗事のこらず片付けて、夫より遊ぶなり。歳暮も富めるものは廿四五日、まづしきものは廿七八日までに悉く家事をいとなみ、正月のことなど大かた設けおきて、大晦日は閑暇にして、今夜祇園けづり掛の神事などへまゐるよし。是土地せまく事少きゆゑに、萬事手廻しよし。これにならひて、七夕の挑灯も六日にながして、七日は朝より遊ぶこと、小童のわざくれごとも、おのづから手まはしよきことかくのごとし。

七十五　地藏まつり

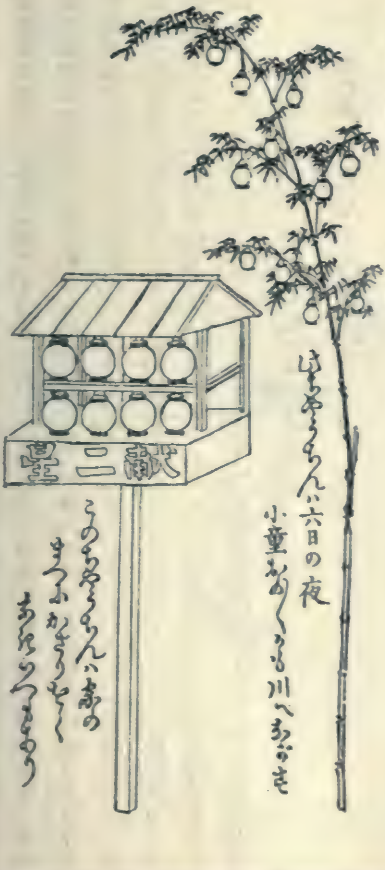
七月廿二日より廿四日にいたり、京の町々地藏祭あり。一町一組家主年寄の家に幕を張り、地藏井を安置し、いろ〳〵の備へ物をかざり、前には燈明挑灯を出し、家の前には手すりをつけ、佛像の前に通夜して酒もりあそべり。活花、扇かけ、その外器物をあつめて種々の品をつくり、家毎に飾りおく町もあり。年中町内のいひ合せもこの日にするといふ。そのありさま江戸の天王まつりの假宮の如し。伏見邊大阪にいたりてまたこれにおなじ。

かごもじ—二重文字、中が穴虚なるよりの稱

冊へ歌を書いて笹へつくることもあれど、いづれも挑灯を附けざるはなし。又は七月二日三日ごろより家のまへに燈籠を出し、これに獻二星などの字をかごもじにかき、上に小なる挑灯を十四五つけて出したるあり。

そのかたち、

そのかたち。



手迹の師—手習の師匠

て、親王家攝家の名をしるし、又女中方とあるもあり。づれもさゝげものと見ゆ。翌十六日それ〴〵へ下さるゝとなり。（東西の本願寺も今日とうろうを諸人に見せしむ。）日の御門、この日八ッ時ごろにひらき、七ッごろに閉づる。七ッ過ぎては拜見を許されず。七月十七日橋本肥後守經亮より消息して、禁裏御所御燈籠の造り花（きくなり）四五本おくりこされたり。誠に一度叡覽をへたる品なれば、おそれ尊むべし。京の町にてもよく〳〵所緣あるものならねば拜受することあたはずとて、みなうらやみけり。京の俗の說に、これを家におけば賊入らずといふ。

七十二　りうたう太　雨談に出でたれば省く

七十三　せんず萬歲　これも同じ

七十四　京の七夕祭

京にて七夕の星の手向には、ちひさき鬼灯挑灯をいくつともなく笹のうらへつけ、小童六日の夕かたこれを長き竿のうらに結びつけ、その手迹の師の家の前にもちゆき、暮れて加茂川へもち出でこれを流す。三條五條の橋の邊へは流すことを禁ず。故に二條四條の河原へ數十人件の挑灯をともしつれたるありさま、さながら星の飛びかふごとし。短

七月十五日禁裡(きんり)の御燈籠(おとうろう)を拜見にまゐれり。この日は諸人ゆるされて禁中へまゐるなり。清涼殿の廂(ひさし)に御燈籠をならべて、前後警固の役人付きそひて、一二間こなたより拜さしむ。この日は紫宸殿の御門もひらきてあり。(是南門なり、炎上後別に南門なしといふ。)諸人うちを拜して、賽錢(さいせん)を投ぐるものあり。日の御門(諸人はこゝよりうちへいる)の外に茶店あり。檜垣(ひがき)の茶屋(ちやや)と號す。又公家門の前の茶店も檜垣(ひがき)と稱す。こゝは江城の下馬先(げばさき)のごとし。茶店は甚むさくろしけれど、その名はおのづから雅(みやび)なり。



御燈籠はいろ〲の人形造り花などくさ〲あり。下の臺(だい)は四角なる燈籠にて、白きかみをはり、上に赤と青との紙をつけ、是を四方にさげたり。火は下にともすなり。燈籠にはおの〲下札(さげふだ)し

囉齋弱法師―囉齋は三味線に合せてうたふ一種のふし、弱法師は盲法師にて謡曲よろぼふしの趣より出でたるものなるべし

七十　京の盆祭

京にても盆まつりといふことあれど、江戸のごとくにはあらず。魂棚も机やうのものを設け、甚だ麁略なり。さゝげもののもろく〳〵せぬ樣子に見ゆ。十三日にぼたもちをこしらへる家あり。それも稀なり。盆中囉齋弱法師のたぐひ、すべて物もらひ來らず。但六齋念佛は大勢ありしなり。（六齋念佛は洛外の農民等太鼓をならし、大人小兒打まじり、あやしき唱歌をうたひ、市中をありく。すげ笠などわざとやぶれたるをきたるもあり。）京にて女兒の盆をどりといふとあるよし聞きぬ。今年近國洪水ゆゑにや沙汰なし。街道の女兒五六歲より十一二歲まで、大ぜい手を引きあひ、源氏目錄の長うたなどうたひてありくこと、江戸の盆々うたのごとし。是小町をどりなり。

すべて京は五節句なども、中人以下市中にいたりては、式というて膳部を設けることはなし。正月も市中松かざりをせず。餅はつけども、元日只一日汁雜煮をいはひ、鏡餅は江戸の二十四文備へほどのすわり只一つとるよし。萬事の費をいとふこと、儉節に過ぎたりといふべし。

七十一　內裡の御燈籠

凡そ精靈の迎火送火は、皆加茂川へ出でて麻柄に火を點ず。それ宗旨に依て日限の遲速あり。盆中家々に挑灯燈籠を出す事江戸の如し。東山諸寺の高燈籠は星の如く然り。

六十八　六道の槇うり

七月九日六波羅及六道の槇うり。江戸人にはめづらし。槇は高野槇にてかくのごとし。參詣の人必ず一枝づつ買うて持佛の花いけへさす。江戸のごとく盆の草市といふものはなし。



六十九　しらいと

七月十日清水の四萬六千日いとにぎはへり。此邊すべてしらいと餅を賣る。これは挽餅にて、白と黄あり。形かくのごとくねぢれり。音羽の瀧のしら糸のとある、謠曲よりなづけたるにや。



點のうたれぬ―非、難のしやうなき、大字に點なきよりの洒落
ほの〴〵と―「明石の浦の朝なぎに島がくれ行く船をしぞ思ふのもじり」
横川―振假名原本のまゝ

狂歌 かくばかり火をともす山の大の字は點のうたれぬ眺なりけり

おなじをりに船かたの火、

　ほの〴〵とあかしをともす夕暮に山かくれなき船をしぞ思ふ

畑橘洲子（法印醫學院畑柳安男　通稱柳泰好㆓詩文㆒）の話に、東山大文字の火は、延德元年七月十七日、將軍義輝追悼の爲はじめてこれをなす。これ冥土光明の故なり。義輝前年正月十六日に薨ず。故に今年初めてこの事あり。大文字の筆畫は慈船庵の筆也。そのこと今出川相國寺の傳記にくはし。世に弘法の筆、或は横川の筆と云ふものみな誤なり。相國寺日件錄にある所のものは、抄書せるにやこの事みえず。今現に相國寺庫藏中の日件錄にはこのことありといへり。甚だ珍說なり。予先年著述せし俳諧歲時記には、横川和尙の筆と記しぬ。今に至りて遺恨すくなからざりしに、よく日又橘洲子より文通のつひでに、「大文字火の事慈船庵は存し違にて御座候。相國寺小補軒横川和尙へ足利將軍命ぜられしなり。小補軒當時荒廢、遺趾而已也（下略）」かく申參りたれば、世間普通の說にてめづらしからず。大に興をうしなひぬ。（大文字火は十六日夕方より同時に火を點ず、誠に一時の壯觀なり。はじめに妙法の火、次に左り文字の大字次に大文字なり。十六日晝より雨ふり、黄昏に雨やみぬ。しかれども今夕大文字は火をともさず、十七日の夕火を點ぜり。その餘はみな十六日にてありし。晝より薪をつみおき、夕がた一時に火を點ず。當時は農民の山まつりなり。火を點ずればみなあらそうて山を下る。もし久しく山にあるものはかならず病むといふ。陰鬼のおのづから集るにや。）

大文字——東山の山腹に大字形に火を點ずる行事

夕つよた、

旅の盆こゝろに神の來る夜かな

おなじゆふべ、東山へさそはれ侍り。道よりにげかへりて申しつかはしける。

古郷の名にあふ山の東さへものおもふ夜はねられざりけり

かへし

草枕旅にしあればなきたまもゆるし給はんいざゆきてねよ　經亮

つまや子に見せまほしきは殊更に都のちまた里の名どころ　解

水鳥のかものの川べに旅ねしてかつきもあへぬころも涼しき

旅にしてうれしきものは古郷の妹が玉づさへだてなき友

七月十四日の夕よめる。

あすのよはことづけやらん古郷のあづまのそらを出づる月影

十五日の朝ほらけによみし。

入る月に妹がむかひて旅の空にわがめさめぬるころと思はん

十六日大文字の火を見てよめる。

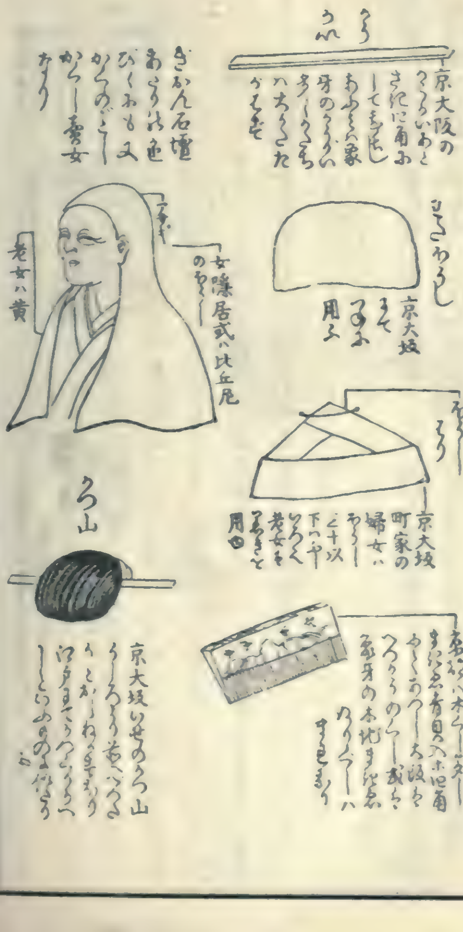
子を思ふやみのかたにぞてらすなる東の山のもじのほかげは



婦人のまくら
一寸斗ま
きりく
まくらうき
あてる
とつく
志ゆまぐ
大坂ゆく
三十前後の
婦人の
志ゆまぐ
まげ
うさとげ
大坂
まで
今のかもじ
婦人の
中ゆふ
ふくろ入レ
あまの
ちりめん
そのを
まく巻
上をゐる
しめて
ぬる
ビン
タボ
京大坂
いせ近
江あたりや
へんしかし
とことも
用ゆ
尾州
勢州
辺眉
毛ぬれ
女の志ゆまぐ
まげ
ウシロ
京
ぎかん
のあまぐ
あぶらを
つけるさき
れいとねあり
あまげ
これも
上ゐ
同じ
○すべてはせうあげせう
ありのあたりぶらぶんとあるし
いせ津の辺女児のおとし
ひさいロぶろまふもて
ありぶら
しへ白し
こまとて
ひなか
ばうし
とのよ
尾州あたりの
こもかうし
おなの頭て
むすぶ
あり

六十七　旅の盆　附大文字の火

文月の便さへ、遠き古郷のことおもひながら、魂まつる頃、なほ京にありし。十三日の



きんかん元結―最も細き元結の稱

〔次の二面の女子頭髪の挿畫は本文の終り六十六の前に入るべきもの、組版の都合上少しく前後せり〕

らず。醫師は總髪、畫工は髪なきもの多し。髪は海老尻髷。



ねをゆるくして、はけのあひだをすかす、えびの尻をまげたるがごとし。きんかん元結一ツかけてねをゆふ。このかみのふう、もと大阪より流行す。京はかみゆひいづれも下手なり、大阪におよばず。又醫師の惣髪は髷なし。かづら下地のごとくす。女子は他行にかならず帽子をかぶる。衣服その外女子は赤きをよしとす。

六十六　太秦の草紙

太秦の草紙は、室町家の時の戯作春畫なり。原本は今出川相國寺にありといふ。その寫し一卷、橋本經亮かたより、もとめよとておこしたりけるが、文面首尾せざりければかくすとてよめる。

太秦のこなたにかけし紙屋川のはしたものこそうらみなりけれ

返し

君ならで誰かかふべき木にもあらず草にもあらぬはした物をば　經亮

たしなき―乏しき

ぼてへふり―棒に賣物をかたげて持ちありく行商人

輕子―輕籠にて物を運搬する人足

俠者―男伊達

十六年、今年はじめて京師に遊んで、暫時俗腸をあらひぬ。

京によきもの三ツ。女子、加茂川の水、寺社。あしきもの三ッ、人氣の吝嗇、料理、舟便。たしなきもの五ッ、魚類、物もらひ、よきせんじ茶、よきたばこ、實ある妓女。

京にては雨天も合羽を著ず。合羽を著れば人必ず遠行するとおもへり。これ雨の横にふらず、まつ直に降るゆゑなり。ぼてへふりの商人甲掛脚袢をつけ、帶を後にてしめる。「はじかみや〳〵」「なんばんや〳〵（たうがらし也。）」などよびありく。これもしをらし。車は牛にひかす。人引くことあれば、一人先にすゝみ、繩を輪にしく、　にさし入れ是をひく。後より押すもの又聲をたてず。（名古屋いせ又かくのごとし。）雨中傘をさして駕をかつぐものあり。予伏見より京に入る時雨ふれり。予が荷を持ちし人足傘をさせり。凡そ八九貫目の雨がけをかつぎながら、傘をさして三里の道をゆくこと、江戸人の目にはめづらし。京の輕子は甲かけ脚絆をつけ、帶をしめ、三尺手拭をしめる。俠者も額をぬかず、月代の毛を長くせず、身に花繡したるもの一人もなし。（大阪は髮結などにはりものあり。）せつた直しは笊を持たず箱なり。或は一人二つの箱を擔ひ、一人なほし〳〵とよびありくものあり。大阪も又かくのごとし。男子の羽織二尺に過ぎず。（大阪は羽織のさかり袖とすりはらひなり。）夏に白張の日傘をさす。菅笠はかぶ

追書 伏見にあらず高槻喧嘩をとり組たる狂言なり、この狂言を高槻騒動と云ふなり

うつてがへ—交代に

上國—都の地方

は、女形たてもの市川團之助圓藏子女がた等にて、繪本太閤記の狂言なり。切狂言に伏見の喧嘩をとりくみし新狂言三幕にて、嵐吉三郎足輕里見伊助の役評判尤よし。大入なり。予は八月七日大阪より歸りがけに見物す。京大阪芝居はじまる以前、先づ板に役者の名を書きつけて、是を木戸に出す。江戸のあやつり芝居の如し。是は一ト芝居々々々に役者入れかはるゆゑなり。近年京も四條に二軒の芝居一所には出來ず、うつてがへに興行す。或は京のあたり狂言を、役者道具建ともに大阪へもちゆきて、又興行することあり。大阪にても又如此。すべて近年三都とも芝居少しくおとろへたること、これにて知るべし。役者は多く大阪に住居す。いづれも家作よろしく見ゆ。この外いなば藥師、御靈邊、所々に小芝居あれど、大阪の中ノ芝居には及ばず、葭簀張多し。

六十五　京都の評 附風俗の圖說

夫皇城の豐饒なる、三條橋上より頭をめぐらして四方をのぞみ見れば、綠山高く聳えて尖らず、加茂川長く流れて、水きよらかなり。人物亦柔和にして、路をゆくもの爭論せず、家にあるもの人を罵らず。上國の風俗、事々物々自然に備はる。予江戸に生れて三



なり。雨天の日は茶屋の下女草履を持來て客にわたしおき、大切に又下駄を持つて迎ひに來る。また客の貧富によらず、一幕々々に下女來りて用をたす。芝居のうちに廁はあり。見物のもの外へ出るにおよばず。又鬪評の愁もなし。棧鋪には、かくのごとき挑灯を棧敷のおもての方のまん中へ書よりかけておくなり。これは朝棧敷がわたれば、直にその茶屋々々よりかけると見えたり。凡そ芝居の辨當に燒飯提りめしはなし。京も大阪も雜劇と妙院と打混じて居るゆゑ、芝居の仕出しも多くは祇園の茶屋より仕出す。芝居茶屋といふもゝの別になし。初日より四五日までのうち、げい子おやま等あらそうて見物す。一日もはやく見るものを全盛とする故に、當分は棧敷のうち悉くけい子おやま多し。妓は必ず客をねだる。歌妓は十人廿人講をむすびて、自分にて見るもあれど、是も多くは客をねだるなり。すべて舞臺のしかけと、役者の衣服は、江戸より立派なり。その外は替ることとなし。予京にありし時、七月廿四日より四條北の芝居はじまる。團藏、嵐吉、（嵐吉三郎なり。このもの當時のたてものにて、上手なり。）淺尾工左衞門、嵐三五郎、嵐猪三郎、（嵐吉兄）市川團三郎、（前髮をとれり）淺尾國五郎、尾上新七、（鯉三郎子）澤村國太郎、（甚老年）中村金藏、芳澤いろ

四條の芝居二軒（江戸木挽町の芝居ほどもあるべし）看板は江戸の人形芝居のごとく、尤も綺麗なり。芝居のうちに廁あり。花道は眞すぐにつけて、つきあたりに切幕あり。又舞臺の左の方にも切まくありて、役者こゝよりも出入す。切落のうへに簀子天井なし。切落は土間なり。大入なればこの所も棧敷並になる。上下の棧鋪は江戸よりも廣く、一ト側九間にすぎず。棧鋪の向ふづら、くり形等ありて、江戸よりは立派なり。棧鋪の柱には桐の聯をかける。是は祇園のげい子おやまよりおくりし物なり。



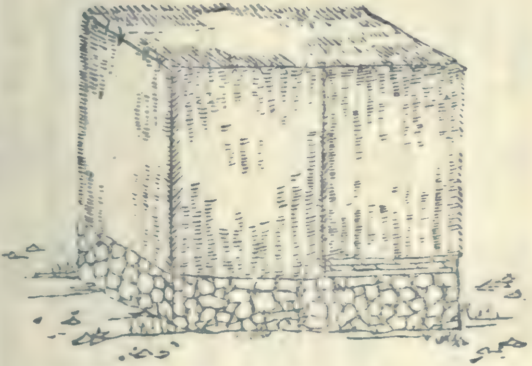
桐の木地の板へ
[illegible]
さゝーゐの画あり
下へけいこおやま
の名をしるせし

幕は横布なり。水引は四方に張てあり。二階さじきの上にも水引あり。花道は十五六年以前までは土にて築きあけなりしよし、今は江戸のごとく板にてはれり。辨當は如此ろぬりのべんたうばこへ入れ、これへ椀をそへて持つて來る。茶、くわし、番附等うるものは、皆十四五歳の童



太鼓にあらず、てん〳〵からく〳〵となるものなり。（芝居はじまれば、朝やぐらにてこの太鼓をうつ。）太鼓の先に、棹（さを）に紙をはりつけ、役わりを書きしるして、これを荷ひありく。そのかたち圖のごとし。

惣嫁の小屋



河原の水なき所に石を高くし、そのうへにむしろかこひ（三尺に一間）をするなり。ひろはとりくづして、又夜は小屋をかける。惣嫁は川ばたにたゝずみ居て、往来の人をひく。



總嫁―夜鷹の類にて最も賤しき娼婦

六十二　つくしわた

先斗町につくしわたと稱する私窠あり。わたばうしとも名づく。むかしわたばうしやよりこの妓を出せしといふ。今猶先斗町の北角に綿帽子屋あり。此綿帽子は旅宿へもまねく。又かし座鋪へ一月雇にもするなり。價いやしき醜婦ながら、その名は雅にきこゆ。すべて旅人逗留中、一ヶ月に金二分を費せば、一月雇の妾あり。この者飲食に給仕し、又縫刺のことをなし、夜は枕席をすゝむといふ。是は素人なり。この地尤荒淫なり。太夫天神の外は房中帶なし。これ衣服をいとふゆゑなり。太夫天神のみちりめんのしごきしんありをしめる。大阪又かくのごとし。

六十三　總嫁

總嫁は二條より十條までのかはらへいづる。河原にむしろかこひして、こゝにて夜合す。

六十四　四條の芝居

京にて芝居初日の前日には、小路〳〵へ太鼓を廻すこと、江戸の角力の如し。太鼓は大

の称

ねんなうーヤスナヤスと、狂言の常套語

めりやすー長唄の一種

「かにどの／＼どこへゆかしやるぞいの。さるがしまへおやのかたきをうちにゆき候。おこしのものはなんでござる。これかこりや日本一のきみだんご。ひとつくだされ御とも申さう。合はさみのばけもののたんばくり、石うすにはり、このものどもがつきそひて、さるがしまへおしわたり、エイヤアねんなうおやのかたきをうちおふせ、みなさんいかいおせわといちれいし、もとのあなへぞいりにける。

これらはみなさわぎなり。めりやすは琴歌に河東を加味したるやうなるものにて甚雅なり。大阪尤よし。京は大阪をまなべり。又江戸の大こく舞のふしにて、もん句は残らず島原の事に直してうたふなり。江戸の長うたは音聲うつらず、聞きにくし。

六十一　御所うら

京にて見世付ある妓樓を、縄手、二條新地、北野、内野、御所うら等なり。これらいづれも見世をはる。いづれも賤妓にして、見世はうちつけ格子、疊わづかに三四疊を敷くべし。二條新地尤多し。御所裏はむかし御所の下主女、夜行して色をうりしよし。今はかゝることはなしといふ。五條坂等も見せ付あり。

くてー食ひて
つゑつきののじ
ー「乃」字を假名
として用ふる時

「ほうえいまつりは見事なことよ、たれも見にゆき、ゆきなばどつこい、人みなこのよのうさはらしに、上戸のおもひはこれなんめり、だん〳〵げいこをひきつれゆきなば、おすなさわぐな、かたよりゆけ、すげがさおつとりもつて、しどけないのがさんさ見事ゑ。

いたこぶし　ちかごろ江戸より流行す。

「孫兵衞ごけ〳〵、これをあはせてむまごへいごけ。ヤレ〳〵。
「孫兵衞ごけ、むまごへいごけ〳〵、これをあはせて十三孫兵衞ごけ。ヤレ〳〵。
「となりのゐろりもくろぬりくろゐろり、こちのゐろりもくろぬりくろゐろり。ヤレ〳〵。
「となりのちやがまはからかねちやがま、こちのちやがまもからかねからちやがま。ヤレ〳〵。
「なげしにかけたる大なぎなた、だれがなぎたぞおてゝみや。ヤレ〳〵。
「むさし坊べんけい大なぎなた、たけも八尺みも八尺。ヤレ〳〵。

むかし〳〵　今歌妓かならずこれをうたふ。

「むかし〳〵山のあなたにあつたげな、ぢゝいは山へしばかりに、ばさまは川へせんたくに、るすにすゞめがたなもとの、のりをのこらずくてしまひ、ばさまはみるよりはらをたて、したきりすゞめでおひはなつ。合ぢさまかはいや、つゑつきののじで、のりをくたすゞめどのはこゝらぢやござらぬか。チヨツ〳〵のこゑ、やまこえさと〳〵こえてゆたといの。

もろこ—小さき川魚の名

「鎌くらの、サアヨウ〳〵ヤレ、かちうの娘が、月には九たんの、サアヤレ、月には九たんのはたをおります。サアヨウ。

「そのはたを、サアヨウ〳〵ヤレ、ついてさらしてこうやをたのんで、サアヤレ、こうやをたのんでそめにやります。サアヨウ。

「かた先は、サアヨウ〳〵ヤレ、むめのをりえだ、三月さくらの、サアヤレ、三月さくらのさいたところを。サアヨウ。

「上まへは、サアヨウ〳〵ヤレ、しかのやつぶし、うさぎのちよんちよと、サアヤレ、うさぎのちよんちよとはねるところを。サアヨウ。

「下まへは、サアヨウ〳〵ヤレ、わしとおまへと、おまへさんとわしと、サアヤレ、だいてころんでねたるところを。サアヨウ。

同手びやうし　扇はなし、これは三くにふし也、ひとつふたつしるす。

「をさななじみにわかるゝときは、あゆやもろこの水はなれ。

「さまは五月ののぼりかしやうぶか、わしはおまへにのぼりさを。

同扇びやうし　これは新製にあらず。

な」「なんのいな、いつかうようでけたわいな」「えらうあぶらをいうてぢやいわな」又めだかをそろといふ、この魚そろひてありくゆゑなり。かくやのかうの物をせんたく香の物、しぎやきをなすびのでんがく、此類多し。大かたかくのごとし。江戸にてはいつかうといふことは、わるき事にのみそへていへど、京にてはよきこともいつかうよい、いつかうえらいといふ。又茶屋の嬶(かゝ)をごつさんといふ。江戸吉原にては茶屋の亭主(ていしゆ)をごつさんといへば、男女のたがひあり。「さかい」といふ詞は、ゆゑにといふにおなじ。江戸はからといふ。歌にもふくからにとはよめど、ふくさかいにとはよまず。これらをや京なまりとはいふべき。

文(ふみ)ははじめてこすにも、旦那ねと書く。いせは御客ねとかく書出しはいつでもおゝそれながら通り句也。げい子の禮文(れいぶん)は、御ひいきねがひ上候、ばんほども御しらせなどと書く。茶屋のかゝよりこすふみは、二御禮かたぐ〜が通り句なり。

六十　祇園の歌曲(かきよく)

今祇園にてもつぱらうたへる小唄(こうた)を、人のうたひてきかせしまゝにしるす。

扇手びやうし　二上り、これは江戸にてうたひしもつまをどりのふしに似たり。

相對死―情死

段目の道具建の如し。燭臺は木にてろぬりなり。大樓は燭臺四ツ五ツ、蠟燭は六寸ばかりあり、半分たゞざるうちとりかへる。そのたび〳〵に必ず客の顏の色が變る。蠟燭一挺八分づつなればなり。すべて茶屋に刀かけいくつもありて、脇差は枕上の床の間へかざりおく。大阪も又かくのごとし。（大阪しん町あげやは、らうそく一挺一匁五分。）是相對死などいふこと、たえてなき故なり。古市は近年油屋騒動このかた、客の脇差を内所へあづかること江戸のごとし。

五十九　祇園の方言

祇園町の方言に、江戸にてつやをいふ、せじをいふといふことを、あぶらをいふといふ。ふだん來る、じやうぢう來る、などといふことを、いつしくにおいでるといふ。まゐるを參じる、よいことはゑらい、又かいなといふことあり。一人「これはかうかういふわけぢや」答「かいなァ」さやうかいなを略せり。これらはしをらし。この外いくつもあるべし。すべて女になといふことをそへていふ。

「わしがけふな、かみあらうてな、とんとおちんさかい、いま〳〵しうてな、いろいろしたぢやけれどな、おちこぢれたさかい、見ておくれ、かみもいつかうぢやわい

すべて大阪、名古屋、伊勢、いづれもこのたぐひにて、大同小異なり。大阪も水髪なれど、髷へばかり多く油をつける。いせは丸く、名古屋は似て非なるもの多し。京都は地の女も髪の風、妓とかはることなし。これは商人と妓と、うち混じて居る故なり。化粧はいづれもあつげしやうなり。櫛は厚き高蒔絵のぬり櫛なり。（大阪はべつかふが多し）笄は鼈甲なり。數本さしけるが、今年制禁ありて、三本の外はさゝず。髷結のしぼりばなしのちりめんも今年禁制せらる。よりて紙をもみてちりめんのごとく染めたる髷結を用ふ。以前は髪の上、數十金を費せしといふ。

妓は紙入に紙いつぱいの鏡をつけ、白粉をちひさなるあさの袋に入れ、席上にてたびたびけはひをするなり。げい子は巾著をつけ、これを帯のうちへかくし入れおく、この袋の中に化粧道具あり。これも席上にてたび〱臉を摸す。鏡を懐中すること歌妓も又同じ。

五十八　祇園大樓の噂

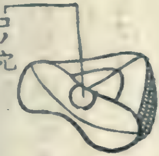
井筒、扇九、一力など、座敷廣し。客あれば庭へ打水し、釣燈籠へ火を點す。忠臣藏七

伯人―大阪島の内の遊女の稱、後に詳なり

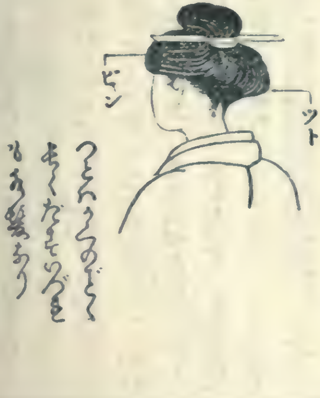
圓、茶屋によりて木綿夜具をも用ふ。太夫も伯人も夜具は皆かくのごとし。

五十七　京の女兒風俗

京の女の風俗、髪は油をすこしつけ、鬢を上へかつぎ上げ、髱を甚だながく出す。わげはひらたく、かつ山はべつたりと前へたふしかけ、島田はしんを入れず。ばらりとして草たばねにす。髱いれは太きはりがねを紙にて巻き、うるしにてぬりたるを用ふ。







岡場所―官許の遊廓外にある遊里の稱

五十五　妓の衣服

衣服は、妓は紫の絽の袷帷子、もよ色の裾うら、すそもやう、或は上布のかたびら、（じゆばんを著ず）縞ちりめん等なり。（うらえりを半ぶんほど前へ引きかへしておく）帯は赤きが多し。ゆもじは緋ぢりめん、○げい子は上布、すきやちゞみ、紫の絽、（すそもやうもあり）これも繻半を著ず。帯はねずみ繻子多し。ゆもじはいたじめのちりめん。（いたじめのゆもじまためづらし）緋ぢりめんは稀なり。京も大阪も、廓の外は、みな左の手にてつまをとる。これを左づまといふ。是は岡場所のしるしなり。そのつまは高くむねのあたりにてとる。甚だ派手なり。（ぎをん町、五月晦日より七月十八日まで、そろひといふを著る。この時帯はひぢりめんにぬひなどしたるをしめる。これは暑中汗にてよごるゝゆゑ、妓も歌妓もみなひぢりめんの帯を用ふ。そろひのうちも、ひじゆすの帯などしたるもまれにあり。）

五十六　妓樓の夜具

客のゆかたは茶屋にてかすなり。妓はぶんこに著がへをいれてもち來り、閨中は江戸染のゆかたなどを著る。扇はぬりぼねの銀扇、うちははろぬりのふか草團扇をもつ。廓の揚屋、祇園町も、夜具は郡内縞のうすきふとん一ツなり。（大阪も又同じ）祇園新地はふと織の蒲

追書
桂意云ふ、ふろしきにあらず層（あはひ）とて二所にちりめんの紐をつけたるものと聞きにき

は十兩十五兩、いたつてあしきは五兩三兩なり。三兩より下なるはなし。はじめに件の金をやりて、（たとへば二十兩のまくら金には、はじめ十兩わたし、通じて後又十兩わたす。）やくそくし、ひそかに茶屋へよびてあふなり。但あふたび〳〵に花は別にはらふ。これを枕金の相場といふ。仲居或は茶屋の娘、舞子も同様なり。

五十三　舞子の評

舞子は十歳ばかりより十八九までなり。歌曲も雅にして、三絃も煩手ならず、しとやかにたち舞ふさまいとしをらし。むかし白拍子が、朗詠などにあはせて舞うたりし遺風ありとぞおもはる。

五十四　三絃筥

けい子の三絃筥は、木地の桐の箱なり。風呂敷に包む。三絃はいづれもつぎ棹なり。故に箱は四角にて横少し長し。撥袋は撥のかたちにしたる盒の黒ぬりを用ふ。琴はふろしきに包み、鼓はしらべをかけて携へ出づる。

京は現金の客をきらふとぞ。かけは五節句拂なり。それも身分よろしき方へは、勘定もゆるやかなり。夫ゆゑわれしらず遣ひ過ぐることありといふ。それにても損をすることは稀なるよし。但勘定はよくする所なり。

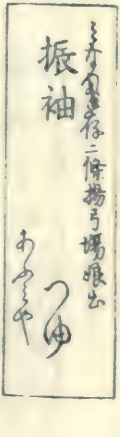
五十一　きがへの譯

祇園の客、茶屋へゆきて酒をのまず。期よりおやまをよび、直にぬるを、きがへにゆくといふ。期とは夜九ツなり。期ならずとも、すぐにぬるをきがへといふ。げい子おやま共に、やくそくといふは、晝は朝より暮まで、夜はくれより夜明までかうてやるなり。もの日の仕舞といふことはなし。このやくそくをねだられることあり。大阪も又おなじ。

五十二　藝子の枕金

げい子にまくら金といふことあり。是はげい子の誰に通ぜんとおもふ人、茶屋へゆきてそのことをたのめば、茶屋その名を聞き、あの子の相場は何程ならんといふ。相場とは、たとへば顏色すぐれてうつくしく名ある歌妓は、まくら金二十兩、或は三十兩、その次



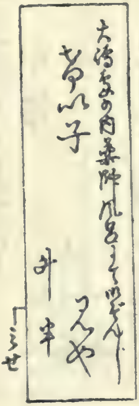


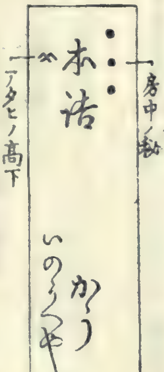
本詰とは、本どしま眉毛なし。中詰とは、中どしまなり。げい子はとしの長少に拘はらずみなげい子と云ふ 祇園町のげい子はうつくしく、おやまはおとれり。げい子に勢ありて、おやまの上坐をする。初會の客に盃ごとなし。すぐに客のかたはらへ來てすわる。いづれもかくのごとし。

五十　嫖客の噂

京は女郎とはいはず、女中といふ。おやまといふことは、目下の人よりはいはず。けいしやといはずして、げいことといふ。夜五ツ或は四ツ時ごろよりゆきて、花いくつと仕切るを、相場をきくといふ。花入用とも二割引なり。宿屋より引きつけたる旅人は、二わり半引かせて、半は宿屋へとる。銀相場は六十三匁通用なれども、地の人は六十五六匁にて勘定する。

祇園に、祇園さし紙といふものあり。是は祇園町へはじめていづるおやま、げい子、ひろめと稱し、のり入のかみを、たてに四つ許に切り、札とし、これへげい子誰、おやま誰、などくはしくしるして、茶屋々々へ配るなり。茶屋の勝手元、或ははしごの上り口に、いくつともなく張付けてあり。おやまも藝子も、見世とうちとは別なり。見世とは江戸にていふ見場なり。扇九、一カ、井筒など茶屋をたれは何屋と定めおくなり。抱のげい子もあり。又じまへのげい子は、別に家ありて住むもあれど、客あれば必ずその見世へいうてやる。子ども屋は別にあり。是は祇園町中廿七軒に限りて御免なり。これも通じて見世といふ。又はじめてつとめに出づる者を、腰元おり、てかけおりといふ。江戸にて何あがりといふが如し。又はみな樣御ぞんじ何屋の仲居おり、などともかくなり。





四十八　京師の妓院

京にて島原の外御免の遊女町は、五條坂、北野、内野なり。五條坂はあこや株と稱す。又近年あらたに免許ありしは祇園、同新地、二條新地、七條河原等なり。その外西石垣、上宮川町、東石垣、下宮川町、古宮川町、六波羅野、御影堂うら、都市町、平居町、一ノ宮町、三ノ宮町、膳所うら、富永町、末よし町、新ばし、なはて、川ばた、先斗町、壬生、五ばん町、七番町、三ッ石町、六間町、寺の前、下ノ森、上七軒、しら女の辻、御靈うら、杉本町、野川町、大文寺町、先斗町川ばた、難波町、若竹町、新車屋町、丸田町、檀王うら、等皆私窠なり。凡そ洛中半は皆妓院なり。京の節險なる人氣にて、かく多き遊のそれ〳〵に世わたりすること、第一のふしぎなり。客は春他國の人三分二、地の人三分一なり。秋より冬のうちは、地の人三分二、旅人三分一なりと云ふ。故に秋冬はさみしし。

四十九　祇園さし紙

一眼千軒は島原の細見記なり

四十七　島原の噂

島原の廓、今は大におとろへて、曲輪の土塀なども壞れ倒れ、揚屋町の外は、家もちまたも甚だきたなし。太夫の顏色萬事祇園にはおとれり。しかれども人氣の溫和古雅なるところは、中々祇園の及ぶところにあらず。京都の人は島原へゆかず。道遠くして往來わづらはしきゆゑなり。ゆゑに多くは旅人をも祇園へ誘引す。角屋德右衞門が座鋪庭等最よし。この庭の松甚よろし。松のかたちを紙にすり、求むる人あればあたへ侍る。その外露臺などある揚屋もあり。一眼千軒にくはしければ略す。

島原にて、太夫をかりて見るといふ事あり。客ある妓も必ず來る。大かた大阪におなじ。くはしくは大阪の話にしるす。

島原の燈籠七月にあらず、八月初旬よりともすなり。予大阪より又京へ來りしは八月六日なり。昨日より島原に燈籠ありといふ。一兩日大雨、終に一覽せずして京をたちぬ。

島原に鹿子位といふ妓あり。これは江戸よし原のはし女郎におなじ（半夜五匁　一夜十一匁五分）

の島もこし、なかなかになき魂ならば云々といふ二歌に異同あれど、をさをいふものなし、考ふべし

箕山は通稱を藤本了因と云ふ、貞徳門人にて、兩巳尼言好色大鑑などあらはしたる人なり

云々。



追考、嶋原の廓は、寛永十八年六條柳の馬場より、今の三筋町へ引けたり。よし野は寛永八年に沒す。しかればそのころは猶六條のくるわにて侍り。箕山が色道大鏡に、よし野が傳あるよし、大阪盧橘かたれり。予大阪逗留の日數纔なるをもて、寛文式二巻を閲したるのみ。もし序あらば併せ勘ふべし。

追書
解按ずるに、紹益がにぎはへ草に載せたる轍書記の、なか〳〵に見ぬもろこし

家に入りて雨舍りす。うちには爐に釜をかけてあり。主人は留守と見えて、女房のいとうるはしきが、こなたへと請じ、うす茶たてゝ出しぬ。その爪はづれ茶の手まへまで、所に見なれざるまゝ、いとふしぎに思ひながら立ちかへりて、次の日しか〴〵のよし人にかたるに、それこそ子息紹益が妾なれ、その家は紹益のかくれ家なりと告ぐ。父はじめてさとり得て、その奇遇を感悟し、遂に紹益が勘當をゆるし、よし野を引きとりめあはせしとぞ。程遠からぬ下京に、その子の忍び居るをもしらざるは、豪富なりしことしるべしといへり。

友人盧橘は京師の人なり。近曾よし野が墓を圖しておくれり。

○吉野塚は洛北鷹が峯、日蓮宗檀場學堂の後にあり。

吉野は京師大佛馬町松田氏といふ浪士の女兒なり。元和四戊午の年出生、行年三十六、畸人傳といふものに載せたるもこれに同じ。いまだいづれが是なるをしらず。

又洛の立入氏賀樂老人より告來る。吉野沒する時、紹益三十歳なり。八年にては二十歳なり。然れば十七八歳にてよし野を購ひたるか。法名前文の通なり。壇上の三門は吉野建てたり。後に火に燒けて改め建てたるよし、寺僧語れり。榮庵が說は心得ちがひなり。

いよ歌の四の句、山の中にもと誤り給ふが、かへりて山中の色紙と云ひ傳へて名物となりたるを贈り給ふ、はたして是は二なくよろこびけるとなり、云々

紋所の印は如レ此一つ巴のうちにさくらの花なり。手跡も又見事なり。山中の色紙、廣東の横、蟹の盃は、よし野花街にありし日、薩州侯よりたまはりしものなりとぞ。

榮庵又云ふ、紹益が菩提寺は、内野新地立本寺にあり。日蓮宗この寺そのころは今出川町にありしが、そののち御用地となり、今の地所に引けたりし時、墓も建てかへしゝにや詳ならず。石面は紹益と吉野と戒名二行にほりつけてあり。紹益は八十一歳にて沒しぬ。

古繼院紹益　文祿四年十一月十二日

本融院妙供　寛永八年六月二十二日

これをもて考ふるに、吉野沒年は紹益二十歳の夏なり。しかればよし野紹益が婦となりて程なく、いとわかくて身まかりしものなるべし。うべなり紹益が玉をうしなへるの恨、前の歌を吟じてもしるべし。

榮庵に紹益が歌のことを問ひしに相違なし。紹益は貞德と友としよかりしとぞ。

畫工成瀨正胤の話に、紹益よし野をうけ出せし時、父に勘當せられ、しばらく下京にすみ家もとめて、夫婦住みけり。父他へゆきしかへるさ、雨ふり出しければ、かたはらの

橋本肥後守經亮は香菓園と號す、京師梅の宮祠官なり、皇朝の典故にくはし、文化二乙丑六月五十余歳にて歿す、著すところ梅窓筆記二卷、世に刊布す

畸人傳に、ある諸侯いかなるついでにか、よしの野にまみえ給ひて、いかにもこれがよろこぶべきものをあたへばやと案じたまひて、小倉色紙のうちに俊成卿の歌、世の中よ道こそなけれと

これその時述懐の歌なり。或人云ふ、吉野が屍は火葬して、紹益みづからこれを喰ひ盡しけり、紹益がよし野に愛著せることかくの如し。是よりして灰屋の家おとろへたりといふ。（經亮話）

七月十七日橋本經亮とともに、榮庵を訪うて面會し、吉野が傳を問ふ。榮庵は佐野氏、京都兩替町二條下ル所に住居し、醫を業とす。この榮庵よし野が夫紹益の孫なり。今おとろへて寒家となりぬ。榮庵云ふ、祖父灰屋紹益が家は、智恵ノ小路上立賣にありし。紹益は和歌をたしみ、蹴鞠茶の湯などせり。尾州紀州の兩公へ召れて、度々出でけるよし承り傳ふ。吉野沒してはるか後、浪華の小堀氏より妻を迎へたり。これにも子なく、七十三歳の時、妾に男子出生す。今の榮庵の父紹圓是なり。紹圓五十餘歳の時榮庵出生す。榮庵も六十歳ばかりに見ゆ。紹圓も鞠をこのみしとぞ。この家によしの川の裂、山中の色紙、蟹の盃あり。いづれも吉野より傳來の器物なり。榮庵にいたりてます〳〵窮するをもて、よしの裁は（よしの裁よしの漢東これなり。）人にうりあたへぬ。山中の色紙は雲州侯へたてまつり、今家にあるもの蟹の盃のみ。又よし野紹益が書きしもののいろ〳〵ありしが、度々の類燒にうしなひ、又は人にのぞまれて今はなしといふ。二代目よし野が文ありしを見せたり。

よし野の傳は雨談に出でたれども、漏せし所もあれば錄しぬ、蟹の盃圖說のごときは雨談に悉しければ、就いて見るべし

四十三　六條廓の全盛

板倉侯洛中通行の日、攝家の女中乘物にあふ時は、毎度斟酌せらる。或日また例の女中乘物に行きあひぬ。侯馬をとゞめ、いづれの北の方にやと問はしむ。從者おそれて、是は太夫にて候と答ふ。侯大に怒り、すべて遊里を洛中の中央におく故にかゝることはあるぞとて、上に請うて、廓を片隅へうつされたり。六條のころ、遊女の全盛、これにてしるべし。橋本經亮話

四十四　傾城局の劵書　此條雨談に載せたれば省く

四十五　烟火城書畫展覽目錄　上に同じ

四十六　遊女よし野が傳　附蟹の盃

吉野沒年は寬永八年、六月二十二日なり。よし野は佐野紹益に請出さる。紹益は灰屋と號す豪富なり。吉野は紹益に先だちて死す。

都をば花なき里となしにけり吉野を死出の山にうつして　紹益

權大納言正二位光廣卿は准大臣光宣公の男なり、慶長四年藏人頭正四位に敍す、和歌を細川幽齋に學んで出群の譽あり、寛永十五年七月薨ず、年六十、法雲院と號す

板倉周防守重宗は勝重の男なり、元和六年父がすゝめによつて京職に補せられ、在職三十四年、明暦二年十二月卒す年七十

壬戌羇旅漫錄　巻の中

四十一　光廣卿の寛活

烏丸光廣卿の宅は、烏丸中立賣にあり。そのころ牛飼ども、公卿の家に牛を牽きゆき、御用なきやと問ふ。用あればとゞめ、用なければかへす。光廣卿は毎度この牛を雇うて、花街にかよひたまひぬ。車の上に氈を敷き、その上に酒肴を設け、自若としてかよひ給ひしとぞ。（松波播磨守光興話）江戸にてむかし馬をやとうてよし原へかよひしこと、おもひ合されたり。

四十二　板倉侯の大量

板倉侯所司代の時、すべて公家衆花街へかよひ給はんには、夏は下に白かたびら、冬は白無垢を著用あるべし、しからざれば制度の害になるよし、かたくふれられたり。その頃までは、政もゆるやかに侍り。（同人話、この二條橋本經晃來りてかたれり、）

子、幼くして智恩院に入らせたまひ、元和元年、德川家康猶子として、同じき五年剃髪、名を良純と改め給ふ、寛永二十年、甲州天目山に配流せられしとき「ふるゆきもこの山里はこゝろせよ竹の園生のすゑたわむ世に」萬治二年歸洛し給ひ、還俗して以心庵と號し、北野に住みわび給ひ、寛文九年八月御年六十六にして薨じ給ふ

その頃の所司代板倉侯、屢諫言すといへども、もちひたまはず。板倉止むことを得ず、若干金を以て八千代を身うけし、これを八の宮に獻じ、しかして後八の宮を配流せらる。則ち八千代もともに配所に至らしむ。こゝをもて八千代が名、よし野より高し。橋本肥後守經亮話

追考、甲州一國は夏ほとゝぎす啼かず。かの國の人の說に、八の宮甲州にましましたるとき、「なけばきくきけば都のなつかしき此里すぎよ山ほとゝぎす」これより杜鵑なかずといふ。家兄羅文の話程へて八の宮歸洛したまひぬ。

浮屠―僧

直輔親王は、後陽成帝第八の皇

ことを司る、湖水に漁りたる大鮒を、年々京都將軍に獻ず、その漁獵の頭人たるによりて、魚の名によび來たれり。

三十七　三上山 附百足山 雨談にくはしければ省く

三十八　三井の古鐘

三井寺の鐘は古くみゆ。浮屠の説は信ずるに足らず。辨慶が叡山に引上げたりし時、すれて鐘のいぼとれたりしといふ跡あり。おもふにこの鐘久しく水中に埋れありしものにて、自然とすれ損じたるにやあらむ。又大門のうちに辨慶が陣鋳といふものあり。凡そ湖水の眺望三井の山上よし。しかれども志賀越の眼下に見おろすにはおよばず。

三十九　奴茶屋 雨談に載せたれば省く

四十　遊女八千代が噂 是より京の話をしるす

八の宮は、遊女八千代にふかく契りたまへり。日夜をかぎらず放蕩その度に過ぎたれば、

殺風景―もと李義山が語に出て凡て情景を損するものにいふ

ひにゆかずなりぬ。萬事の殺風景これのみにあらず。

三十四　粟津の義仲寺

江州粟津義仲寺のばせを塚は碑の銘なし。義仲の墓ははるか後に建てたるものと見ゆ。

世の秋のさいはひはこの翁かな

三十五　瀬田蜆

瀬田の蜆汁は、醤油のすまし吸物なり。鹽梅またくらふべからず。

三十六　鏡山 附源五郎鮒

近江の鏡山は、石部のこなた、平松川邊より右に高く見ゆ。山色斑々として白銀の如きものあり、雪の消え殘りたるがごとし。

鏡山うつる日影も旅くしげふた月へだつ東路の家

近江の源五郎鮒は、一説に、佐々木家一國の主たりし時、錦織源五郎といふ人、漁獵の

はりしをいふなるべし、門は未央宮にあり、傍に銅馬あるよりの稱

翁の伯兄名は興旨、豪右衛門と稱し、東岡舍羅文と號す。仲兄名は興春、初右衛門と稱し、克己亭雜忠と號す。

なきを第一の興とす。つねにものおもへば、何のたのしみかあらん。子なき人のいふをきけば、遊興歡樂にあるの日は、妻子のことも忘るゝといふ。妻の事は忘れても忘れなん、忘れがたきは子の事なり。美味をくらへば子をおもひ、美服をみれば子をおもふ。我人愛情のつねなるべし。

　つまや子は衣服といへど旅ごろも遠くきて猶おもふ古さと

　旅ごろもほころびにけり古鄕のいと戀しさにつまもかさねず

家兄世にいまぞかりし日は、常に往來して風流の夜話にふけりしも、今はみるもの聞くもの、かへり來てたれにか語らん、これも旅中袖をうるほすの一つなり。おのれ九歳の春父におくれ、十八歳の夏母なくなりたまひ、十九の秋兄をうしなひ、只家伯なりける人、近きわたりの藩中におはしければ、これを父とも兄ともかしづきて、兄弟そのこのむ所もたがはず、兄は誹諧をこのみて、才器ははるかおのれにまされり。これさへ寛政十年の八月、四十の秋の月を見殘し、黃泉の客となりたまひぬ。殘れるものは妹ふたりのみ。これらは詞がたきとなるべきものにあらず。おのれ元より佛の道にうとしといへども、紀の國高野山にまうづべき志かねてありぬるを、この洪水にへだてられて、つ

三秋のごとし―思慕の切なるにいふ常套語、詩經「彼采蕭兮、一日不見如三秋兮」に出づ

金馬門―東方朔が漢武帝に召され金馬門に詔を待ちて顧問に備

又近來水損の農民は、馬喰町の明地へ小屋がけして、これへ入れおかれ、上より施行ありしよし、（是は程へて申し來る。）

予は古郷の事覺束なく、又江戸にても道中出水の事を聞及びなば、さぞ案じ惱るならめと、京へ著くとそのまゝ狀したゝめ、引つゞけて三度出しけるが、川留にて速にはとゞかず。やう／＼七月十五日に、四日出の狀とゞきしよし。又江戸より出したる狀は、八月三日の朝大阪へとゞきぬ。この間の心痛なか／＼筆につくしがたし。さらぬだに旅はものうきものなるに、獨行と云ひ、かゝる天變にあひぬれば、只日夜腸を斷つのみ、行かんとするに道なく、かへらんとするにちまたなし。家にをさなきものを殘して、長く旅中にあれば、一日も猶三秋のごとし。晨に夜に忘るゝひまなく、こゝろにかゝらざる時もなし。行脚頭陀は一身のうへの風流なり。それも君につかへて遠行し、或は軍旅にしたがうて遠征する身にしあらば、思ひかふべき事もあらん。我只風流の爲に長旅を歷んこと、そも誰が爲ぞや。世に子と云ふものもたざる人は、この情をしりがたし。古人世を金馬門に避けて、風流は俗塵中にもあるべし。老いたる親いときなき兒のあらん人、あへて山川の遊歷をねがふべからず。すべて遊といふことは、こゝろにかゝる隈も

り。只聞きしよりまされるものは、大阪の施行のみ。宇治邊大洪水、宇治ばしは落ちて、橋姫の社流れ、興聖寺、平等院大に荒れたり。八はた山崎邊は水十八九日ひかず。

七月十日頃、大阪より京へ東の洪水を告來る。その文に云ふ。

六月廿七日、八日、大風雨、忍領熊谷土手二百間許一ヶ所切込み、又一ヶ所八十間餘切込み、夫より東の方、幸手、栗橋近在方關宿、權現堂切込み、奥州海道、中山道、今五日迄往來留、所々家流れ水死人あり。江戸本所北川筋、三圍秋葉邊出水、往來凡そ五尺程、相州戸塚邊近在方大水、六鄕川二十八日より二日朝まで留る。馬入川二十八日より四日まで、箱根三枚橋落ち、大井川二十八日より八日巳の刻まで留り、鈴鹿山崩れて馬荷通らず。二十八日大雨、二十九日大風雨、辰巳の風つよく、八王寺、青梅邊、甲州海道往來留、所々洪水のよし申來候。

又同狀に、六月二十五日大雷にて大風雨ふり出し、二十八日大風雨大水、兩國橋殘り、永代橋、大橋、新大はし落つる。朔日天氣に候得共、上州下總常陸相摸邊通路一向無御座、江戸本所邊、昨日の內段々水まし、床上三四尺四五尺も附き申候。葛西領二鄕半領上州桐生邊家流れ、千住通奥州海道いまだ通路無レ之相知レ不レ申候七月五日の註進狀

通路―交通
水見聞―水見分
治定しがたし―明瞭にかうと定めがたし

く損じてあり。逢坂山は山中大に崩ゑたるよしなれど、街道は山少し崩れて、一兩日馬を通さず。

あふさかのせきとめかねつ秋の水

三日夜、京都木屋町の旅宿へたどりつきてみるに、京は水難なしといへども、三條五條の橋の外、かり橋はみなおし流し、河原茶店の腰かけ等みな流したれば、涼みもなく寂寥たり。さて五七日は大阪への通路もなく、只攝州河州洪水の風聞まち〳〵なり。四日の朝、角倉家中森氏の話に云ふ、余きのふ伏見へ水見聞にまかりしに、伏見豐後橋中書嶋等はみな二階より船にのりて逃げしとぞ、淀の城は塀の屋根少し見ゆ、大阪天滿橋、天神橋、その外橋五ケ所落ちたりといへど、いまだ通路なければ治定しがたしといへり。今日淸水にのぼりて、伏見のかたを眺望するに、八はた、山崎邊、水一面にして只眞白に見ゆ。四五日經てやう〳〵大阪の通路あり。しめ野堤きれて、河内へ水おし入り、水損の農民は道頓堀の芝居へいれおかれ、大阪中の豪家、或は一町々々に組合ひて施行を出す。或は米五十俵、錢百五十貫文、或は單物五百、襦袢千枚、身上の分限によりて差あり。凡そ攝河の水損百二十餘ケ村なりといふ。十人これを語れば、十人大同小異な

梁の惠王の仁―孟子に「王坐於堂上、有牽牛過堂下者、王見之曰、牛何之、對曰、將以釁鐘、王曰舍之、吾不忍其觳觫若無罪而就死地」

ゑち川―近江愛知川、正しくはえの假名也

胴勢―同勢

水いまだひかずして、牛に飼ふべきものなし、故に石部の在にしる人あれば、牛をしばらく預けん爲に來りしといふ。予この牛を見て、梁の惠王の仁をおもふのみ。程なく石部にゆきてきくに、草津驛洪水にて家流れ人死す、故に昨今往來なしといふ。よりて今日石部に泊る。明日徑あることを聞き出し、案内をやとうて石部をたつ。草津までの間、堤崩れ家流れて、ます〳〵駭然たり。草津の驛の入口には、膳所より役人詰居て、人を通さず。よりて近在へ水見廻にゆく體にもてなし、驛の入口より左へきれて、田の中を行くこと十五町ばかり、水高もゝをひたし、長き竿を杖とし、一歩はたかく一歩はひきく、互に聲をかけ、からうじてうばが餅の前へ出でたり。是よりは陸地なり。問屋より表通の家八九軒おし流し、うら通は人家多くながれ、四五十人も溺死す。死骸は積みて累々たり。これのみならず。森山、彦根、又大水、家流れ人死したりといふ。予が荷を持ちたる人足も、庇にとりつきて、十町ばかり流れたりしが、しれる人の家の二階へ流れつき、すぐに二階に這ひあがりて、一命をたすかりしといふ。阿波侯この時ゑち川に居たまひしが、守山の洪水によりて、胴勢食物乏しく、難儀したまひぬとぞ。只囂々として東西この話のみなり。大津も驛の入口はすこし水つきたりと見え、石橋など少し

澤蟹の云々―蟹は横這ひの洒落

ば、ぜひなく晝頃又水口へ引きかへせり。餘の旅人は横田川の川端いづみといふ所の建場茶屋へ泊るやうすなれど、予は人足の都合あしければ泊らず。その夜大水、水口田町へは床上四五尺水つく。驛のうら手の田畑一面に水おし來り、見るうち五六人溺死す。予は驛の中程鈴鹿屋といふ旅店にあり。この所は高みにて水難なし。いづみは十二軒ながれたり。もし今日いづみの建場茶屋へ泊りなば、むなしく水中の鬼となるべきを、運つよくして一命をひろひぬ。（いづみに泊りし旅人七八人みえざるよし。土地の人は、うちに大藪あり、この竹にとりつきてたすかりしといふ。）これによりて一兩日水口に逗留す。七月三日の晝頃、水口をたちて石部に至る。此間所々の堤崩れて田畑をおし崩し、街道は古松倒れ、碌々として足を入るゝの地なし。横田川にて、

　ころんでもたゞはおきじとおもふなり大事の命まづ拾ひつゝ

　澤蟹のあゆみて渡る横田川あなとほく來ぬふるさとの空

洪水に家を流されたるもの、道路に號哭し、或は太鼓をならして人足をかりあつめ、堤を修覆し、水死の骸をたづぬ。みるもの感哀して魂をいためしめずといふことなし。横田川をわたりて二十町ばかりゆくに、牛を牽きて田畔より來るものあり。この牛脊の上に泥つきて、腹は細くその聲悲し。その人の云ふ、是はてばといふ所のものなるが、洪

萬度ー、まんど、萬燈の訛言、木匡に紙を張り萬度の祓箱の如く作り祭禮などに火を點ずるもの

忠臣藏夜討の體にいでたちてならび居る。のぞきからくりの俄なり。警固のものは上下を著てのこらず庇にならべり。この外毎夜さまぐ\の俳優をなす。晝は崩したる所をつくろひ、夜はくれよりしくみにかゝる。その體甚だいそがし。又七月盆中、名古屋の市中、小兒ちひさなる萬度を作り、太鼓にてはやしありく。これを梵天と名づく。大人もうちまじりて、種々の俳優をなすといふ。名古屋の天王祭、宵宮に家々温飩を製すること恆例なり。此地うどんはなはだよし。

三十一　津島の挑灯船　此條雨談にくはしければ省く

三十二　藪に香の物　右に同じ

三十三　江州の大水　附攝河大水の噂

六月三日より雨ふらずして暑氣甚し。廿五日に至りて雨少しくふれり。近在みな雩す。予はこの時名古屋にありき。廿七日の朝、桑名、四日市邊、朝四ツ時頃まで雨ふりけるよしなれど、宮はすこしふりぬ。宮と島見に一兩年前よりめしもりをおくことをゆるさる、吉田、をか崎には似ず、いづれも醜婦なり。名古屋人、これをおかめと渾名せり。妓樓あれど、旅人はその旅店へもよぶよし。廿七日に宮より乘船、この夕石藥師泊り。明朝より大雨。廿八日水口に泊る。この夜ますく\大風雨。廿九日の朝、横田川水口より二里餘までいたりしかど、水まして渡なけれ

はせてさま〴〵の機關(からくり)あり。笛、太鼓、つゞみ、しやんぎりにて拍(はや)す。祇園ばやしなり。警固は上下(かみしも)を著(き)ず、袴羽織なり。船鉾は京のうつしなりといふ。伯樂天(はくらくてん)同上 陵王(りようわう)、布袋(ほてい)、から子人形のをどりあり。壽老人、同上 布袋の車樂は、から子の人形前に立ち、筆をとりて文字をかくからくりにて、甚だ手際(てぎは)なるものなり。凡そ車樂七ツばかりもあるべし。十五日の夜試樂、十六日未明より城中へ引込み、日暮れてかへる。車樂に挑灯數十張をつけていとはなやかなり。四月十七日東照宮の御祭禮あり、その禮嚴重なりと云ふ。名古屋堀川の向ひは蔦のもの多く居る所なり。此所にてわかきものども、六月天王祭のまへ十一二日頃より、まい夜いろ〳〵の俄(にはか)をする。或は大なるはんぎりの桶をおき、そら豆一升廿八文と書きたる札を出し、その側に筵(むしろ)を敷き、數十人丸裸(まるはだか)になり、尻の方を上にむけ、うつぶけになり居て、そら豆のかたちに似せて、人をわらはせるなり。宵(よひ)より五ッ過(すぎ)まで、かやうにかゞまりゐる。又は人家數十軒をうちぬき、門毎に大なる桶を横にふせ、底をぬきて目がねの如くし、庇(ひさし)には山川草木をあやしく造りなして、その上に七八人さま〴〵にいでたちて、あやつり看板(かんばん)の人形のごとく見せる。これも五ッ過(すぎ)までは、身うごかしもせず。さて桶の穴より内を見れば、向ひは隣堺の垣など引はらひ、廁物置(かはやものおき)も脇へ引いて野原のごとくし、曠々たる所に、數十人

米三が無間の鐘評判尤よし。米三は始終評判よし。八月に至りて兵太郎、歌右衛門、叶、眠獅（雛介弟女形なり）などくだれり。（はじめ橘町にて興行。八月は大洲の芝居なり。）二階桟敷なし。又辨當は椀膳にて運ぶことを禁ず。故に食物を七寸位の重箱に入れて運ぶなり。豪家見物の前には、重箱をつみあげて、見るにわづらはし。又茶菓子などうるものは、悉く十四五歳の童なり。茶いらんか、菓子いらんかといふ。（すべて名古屋在津島邊言語甚だ野鄙なり。）木戸に繪看板なし。板に俳優の名を書きつけたると、幟のみなり。名古屋の町人ひいきの俳優へ、あらそうて水引をやるなり。桃色の木綿に、墨にて進上某丈の文字をぶつ付書にしたる出來合の水引もあり。

水引―舞臺の上に振る細長き幕

三十　名古屋の天王祭

名古屋天王祭の車樂は、車二輪を組みあはせて上に山を飾る。鉾なし。車は大なる地車なり。大八にはあらず、牛をつけず、大なる綱二筋つけて、數十人これをひく。車樂の欄干はろぬりにして、かな物又立派なり。四方に猩々緋、或は天鵞絨に金絲のぬひものしたるきれをさげて、甚だ奇麗なり。上にはいろ〱の人形をおく。その人形拍子にあ

よりて借覽せまほしきよしをいひつかはしければ、うけひて郵附し、庚寅三月二十一日右の書全四十回十冊島屋よりとゞけ來る。佐五平は篠齋と號す、松坂の豪富にて、本居宣長の門人、和歌を嗜み、又和漢の稗史を好む。百十里外に在て書を貸す友は多く得がたし

水滸後傳二本あり。一本は四才子傳の評をせし天花翁の作なりといふ。予いまだこれを見ず。

馬琴按ずるに、寛永年間、山田仁左衛門といふもの、暹羅國に渡りて登用せられ、大國あまた領せしことあり。その事、智原五郎八が暹羅記事にくはし。しかれば水滸後傳の作者、粗山田仁左衛門が事を傳へ聞きて、李俊がことに撮合せしにや。近属本社回祿の時、かの仁左衛門が暹羅國より奉納の繪馬、駿府の淺間の社にありしが、近属本社回祿の時、かの繪馬も燒けたり。其寫し神職の家にありといふ。

再按ずるに、山田仁左衛門が事は、唐山にて水滸後傳の作ありしより少し後なり。かの書に撮合せしにはあらざるなり。余が考別記にあり、今亦贅せず。

二十九　名古屋の芝居

名古屋の芝居は、橘町と大洲にあり。しばらく中絶して、又近年免さる。竹田からくり名代なり。俳優は九人の外を免されず。予が見たりし時は、藤川八藏、中山一德、松本よね三、中山文五郎、市川甚之助、國藏弟子中之居たてもの等にて、釜が淵の狂言なりき。切狂言に、

コヽヲ以テ李俊勢サカンニシテ、日本ノ兵ヲ敗ル。關白ノ兵船、大風ニアフテ、ソノ終ヲシラズ。文中關白トノミシルシテ、ソノ姓氏ヲシルサズ。コノ作者明末ノ人ナルベシ。故ニ關白ノ名ヲ聞クコト久シ。依テ大將ヲ關白トス。胡蘆スルニ堪へタリ○柴進ヲ丞相トスル條下ノ評ニ云、進ハ宰相ノオニアラズ、然レドモコノ人名家ノ子孫ニシテ、又德行アリ、故ニ衆人オシテ相トスト云々。

宋安平　宋清ノ子　呼延鈺　灼力子　徐晟　金鎗手徐寧ノ子　宋清　凌振　安道全　金大堅　童威　童猛　費保　高靑　猊雲　狄成　孫新　顧大嫂　皇甫端　蔡慶　武松　武行者ハ、「シヤムロニ至ラズ、最期ニ群雄ノ忠義ヲ論ジ、宿大尉ニ請フテ、李俊ヲシヤムロ國王ニ封ズ。

以上四十七人

この書倉卒(さうそつ)にしてこれをよめり。故にその目錄を抄出して後勘(こうかん)に備ふ。水滸後傳もと二本あり。共に今世にまれなり。大阪の國瑞(こくずゐ)の話に、予崎陽(ながさき)にありし日、水滸後傳を得たり、そのころは小說にこゝろなかりければ、價二十目ばかりにかへて人にやりぬ、今おもへばをしむに堪へたりといへり。大阪逗留中、書肆に水滸後傳のことをきくに、その名をだにしらぬ書肆多し。江戶にてもたえてこの書をみることなし。

追書
伊勢松坂の友人殿村佐五平、近ごろ京師にて水滸後傳を購得たりといふ。享和中予尾張名古屋の客舍にて、一閱せしかども、倉卒の際にして多く忘れたり、

第四十回　荐故歡燈同宴樂　賦詩演戯大團圓

以上四十回目錄畢

卷中ノ人民〇印ハ星外ノ英雄、△ハ星中英士ノ子孫、□印ハ李俊ト同盟ノ人、前傳ニ小集義ト云フニアル人ナリ。∞印ハ暹羅國ニ止ラヌ人ナリ、無印ハ星中ノ豪傑ナリ。

李俊シャムロノ王トナル　柴進シャムロノ丞相トナル　∞公孫勝辭シテ山ヘカル　李應　蕭讓　燕青　樂和　蔣敬　〇王進　〇欒廷玉扈家庄軍法ノ師　朱武　樊瑞　關勝　孫立　呼延灼　朱仝　黃信　扈成一丈青ノ兄ナリ　阮文七　裴宣　戴宗　鄒潤　穆春　杜興　楊林　聞煥章コノ女ヲ立テ俊ノ后トス　花逢春花榮ノ子ナリ。シャムロ國王ノ女ニ戀シテ附馬トナル。初メ逢春シャムロヲ伐シトキ、公主樓ヨリ逢春カ美少年ナルヲ見テ密ニ是ヲ戀フ。李俊シャムロ王ノ爲ニ、共濤等ヲ亡シテ後、國ヲ逢春ニ讓ラント云フ。逢春シタガハズ。衆ヲシテ俊ヲ王トシ、逢春ヲ附馬トス。コレ俊シャムロ王ノ爲ニ、逆賊ヲ亡シタル功アルヲ以ナリ。〇ハジメ共濤、企叛シテシャムロ王ヲコロシ、位ヲ簒ノトキ、李俊一人シャムロニアリ。依レ之俊兒兵トタヽカフ。共濤日本國ヘ救ヲ乞フ。日本關白、三萬ノ兵ヲ發シテ來リ救フ。コノ囘ノ評ニ云、關白ハ官爵ナリ、關氏ノ人ニアラズ云々。關白ノ兵來ラザル以前、共濤等首ヲ授ク。

又名古屋廣小路秤座守隨の藏書に、水滸後傳十卷あり。主人をしみて人に見せず。予柳下亭に就きて、その目錄をうつしたり。

○水滸後傳　古宋遺民雁宕山樵編輯　金陵憨客野雲主人評定

追書
福富のさうしは京にて橋本經亮の所藏を見たり。そをうつさせしが、京傳子懇望によりおくりあたへたり。雀松原作者勾當内侍の事後に伊勢松坂の一友人、小津桂窓云、この勾當内侍は、おそらく四後土御門院の時四辻季春妹にて、新撰菟玖波集の作者の内才女なりしが筆なるべし・この前後勾當内侍に才女ありしを聞かずと云へり

一すゞめ松ばら　繪卷物一卷　名古屋 山崎良民所藏

勾當の内侍の作といふ。雀の死したるを、諸鳥のとむらふなり。いにしへの戲作なるべし。いづれの時の内侍にや、詳ならず。

一福有（イニ富）のさかし　繪卷物寫一卷　名古屋 鈴木甚五左衞門所藏

京にありし日、おなじ雙紙のうつしを見たり。橋本氏の所藏なり。今兒童の夜語に、花咲ぢょといふもの、よくこの福有長者のことに似たり。是より出でたる話にや。

一花鳥風月　繪卷物一卷　名古屋 柳下亭所藏

一天狗の内裏　繪卷物

これは先年名古屋の道具屋にありけるよし、いづれの旅人かもとめ行きけん、次の日問ふに、うれたりといひしとぞ。名古屋人もをしみあへり。

一國姓爺後日　義太夫本近松作大字繪入

一美本繪入三國志演義　柳下亭所藏

これらはいづれもをかしきものなり。予も逗留中、珍書といふほどにはあらねど、古本をすこし購ひ得たり。

にてしるべし。名古屋にて針妙と稱するもの、三州あたりの街妻に同じ。これも今は稀なり。呉服屋は水口屋繁昌なり。煎餅は岡山姿見などいふ家よし。狂言踊衣裳はまく屋、鼓太鼓は春田屋、浮世繪は駒新、唐繪は月峯、紅白粉は鏡屋、造り花は吹田屋、書肆は風月堂永樂屋、貸本は湖月堂、菓子は寶屋、鮎は岐阜より來るをよしとす。狂歌は田鶴丸、誹諧は士朗、この外いくらもあるべし。春日遊山の地は、門跡のかけ所、若宮八幡、七ツ寺、熱田櫻の天神等なり。天神の別當を岳靈院といふ、禪宗數品の古瓦をあつめて瓦礫舍といふ、風流の筵會はこゝにて興行す。又夏日納涼の地は廣小路藥師前なり。柳の藥師の別當を正傳寺といふ、瓦礫傳の實弟なり。奇石をあつめて多くもてり。柳下亭と號す。この兄弟風流の人なり。數十軒の出茶屋、見せ物、芝居等ありて、はなはだにぎはへり。柳の藥師より廣小路の景色、江戸兩國藥研堀に髣髴たり。納涼の地は琵琶島よしといへども道遠し。故に水邊にあらずといへども、廣小路最も繁昌せり。

二十七　甚目寺の鐘　此條も雨談に載せたれば省く

二十八　繪卷物　附水滸後傳目錄

名古屋にて見たりし繪卷物

二十五　名古屋の風俗

名古屋は男女の風俗、もつぱら大阪をまなぶなり。ゐびしりわけ（男子の髪の風）おほこづと（女子の髪の風）などあり。（圖は末に出づ）人氣の活達なるは江戸にならふなり。吝嗇は京をまなべり。故に江戸の戯作狂文も名古屋まではよく通ずるなり。（大阪は通ぜずといへどもこれをよろこぶ、京の人には一向通ぜず、）名古屋の女子顔色の美なるも、腰は大に太し。一人として細腰なるはなし。これ風土によるにや。男子夏は編笠を蒙りて歩行す。日傘をさしたるもあり。但藩中の女子のみ、萬事江戸の風俗に異なることなし。

二十六　名古屋の評判

名古屋は魚肉に富みたる所なり。魚町七ツ寺など、よき酒樓あり。蒲燒屋と稱するもの一種にあらず、種々の料理をもするなり。蒲燒の風味、京江戸にはおとれり。硯蓋にも蒲燒をつむなり。凡そ劇場の外、三絃停止なり。見世物なども太鼓のみなり。凡そ酒樓中客二階にあれば、男子出でて酌をとる。女子は二階へ上らず。國禁の甚しきことこれ

り。

二十四　名古屋訛(なまり)

名古屋人は、するといふをせるといふ。「カウおつせる」「どうせる」「何いはつせる」のたぐひなり。また人とはいはず、仁(じん)といふ。「かの仁がきさつせる」「よい仁でや」などなり。よい人とはたえていはぬなり。又きんとしたトいふ。りつぱのかたち、又きつとしたといふことにも通(かよ)ふなり。

なごやなまり

きんによふ（昨日）のばんね（ニノ轉語）。いかずと（當ニ行ナリ）。文いこし（ふみヨコシノ訛）。おれ（我ナリ）をたらかし（謂ノ義ナレ𪜈コヽニハ人ヲ賺スヿヲ云）ちやうらかし。ひなたは（汝ナリソナタノ訛）。どこのごつさまと（人ノ家婦ヲ云）。（人の家婦ニ間婬スルコト他邦ニモアリトイヘドモコノ地最甚シ、コレ娼家ヲ禁ズル故ナルベシ）どこのどやば（出會ノ宿所ヲ云キヌ〳〵ノカゴトナリ）でねつふかれ。よん（不）べついづい（敢テノ意）。こざらずね（不來ナリ）。ようまちほけにあはさした。いま〳〵しいが。ひ（不）よいとまた（圖ナリヒヨットニ同ジ）。よみぞこなひ（コヽロヘソコナフナリ）もあらアずと（當ニ有）。じやうねさ（ホンニト云ニ同ジ）。よつぴて（終夜）くりかへし。やけをお（オ）こいて（コシテ）。ねたはひなんし（腹立ノ貌又放逸ノ貌）。○又どうでどやけぢやなどといふもはらだちのかたちなり

言語同斷—同は道の誤、いふにいはれぬ

南村輟耕錄卷の十五、

平江虎丘閣版上有一竅、當日色清朗時、以掌大白紙承其影、則一寺之形勝、悉於此見之、但頂反居下耳、此固有象可寓、非幻出者、松江城中有四塔、夏監運家乃在四塔之東、而小室內却有四塔影、長五寸許、倒懸于西壁之上、不知從何來、然不常有、或時見之耳、是又不可曉也

り、天色は天色にうつる。尤いづれもさかさまにうつるなり。予が見しときは、池に杜若あり、竹あり、柳あり、庭に小兒の手習草紙ほしてありしが、表紙のもん字年月まであざやかによめたり。雲の追々にあつまり、又ちりゆき、竹やなぎの風に戰ぎ、池に漣のたつなど、言語同斷の景色、理外の機關なり。主人こゝろみに庭に小兒を出して見せしむるに、眼鼻衣服の模樣までよくうつれり。わづか



是ばかりの戸のふし穴より、美濃紙一枚の內へ、方十八間の山水、明細にうつること、蘭畫びいどろかゞみといふものに似たり。（戸をたてこめて內はうすくらうして、外より影をとるなり）また京大宮どほり百姓丹羽又左衛門が納戸のふし穴に紙をさしかざせば、東寺の塔あざやかにうつる。（これもさかさまにうつるなり。）また信州上の諏訪藥師堂のうらの羽目のふし穴よりも、塔影のうつるといふことはかねて聞きしが、いまだ目前に見ず。京と三河の事は、予遊歷の序まのあたりに見たり。おもふに日ざしの自然としからしむるものなるべし。日中はうつること尤もあざやかなり。世間にかゝることまゝあるべけれども、幸にその方にふし穴なく、または人のつねにいたらぬところなどにて、氣のつかぬなるべし。今按ずるに輟耕錄に塔影のこととあり。又西陽雜俎にもこれに似たることとあり。かゝれば異國にもむかしよりありし事と見えた

不都合—辻褄合はず

しもり、少しく顔色美なり。ひやうばん價よりたかし。

矢矧橋長さ二百八間、やはぎ川、やはぎの里のひがしにあり。水源木曾の山溪より落ちて、末は鷲塚川といふ。西尾にいたりて二流海に入る。矢はぎ、男川、とよ川の三大河あるをもて、國を三河と名づく。

二十二　をか崎の夏芝居

をか崎六地藏といふところにて、土用芝居を見たり。よし簀張にして、二階棧鋪なし。中山來助、その外中芝居の俳優なり。（九人の外ゆるさず）客ある妓も、客と同席にて見物することあたはず。狂言ははざま合戰と五人切にてありし。萬事不都合絶倒すること多し。

二十三　五綵の山水

三州新堀（をかざきより西一里半在）深見莊兵衛（木綿問屋豪家なり。）といふ人あり。子息は左太郎といふ。狂名を朝倉三笑といへり。この家の納戸の緣頬戸のふし穴に、紙を一尺ばかり手前におしあてれば、十間ばかり先の泉水草木悉く紙中にうつる。その鮮明畫けるが如し。五色は五色にうつ

出女―娼婦

はれて―公然

めしもり―旅店にありて客の給仕し兼て枕席に侍する者

二十　岡崎の出女

をか崎の妓は、歯を染むることならざりしが、近年ゆるされて歯を染むるなり。芝居などへも見物にゆくことならざりしが、これも今はゆるされたり。妓の風俗よし田に異なることなし。妓夜行する時は、夏はふるき浴衣(ゆかた)、冬は布子(ぬのこ)などをはをりてありくなり。もと絹布を著べきものならぬゆゑかくのごとし。但諸候の旅舘に參る時のみ、はれて美服にて夜行す。

二十一　よし田をか崎の妓樓　附矢矧ばし

よし田、をか崎、四日市など、みなめしもりをかりにやり、こと〴〵くよびよせて見たてるなり。客あるものも必ず來る。妓は一軒に一人をゆるさる。一軒二人ある家あり。三人迄ふることをゆるさず。妓なき旅店は妓ある家より月々資料をおくるといふ。ゆゑに大様は妓二人をおくなり。よし田をかざき、一驛の妓百餘人あり。こんやは都合がわるいといふことを、つもりがわるいといふ。よし田岡ざきより西、伊勢の妓樓みなおなじ。京都祇園にては誰さんはなりませぬといふ。大阪新町にては、誰さんはあけでござりますといふ。をかざきちようじ屋の八重(やへ)といふめ

わたしを經て西は、人物その外、江戸にあらず、京にあらず、中國の風姿こゝに於て見るべし。土地の婦人はかならずしも美ならず、商家の衒妻などを見れば、黒暗天女の如し。



はやしーはやし方
あらゐ、はし本、鹽見坂―何れも濱名湖より三州路に入る名所
今切のわたしー濱名湖の渡し

緋のはかま、馬上これにしたがふ。また十六人の殿原とて、柿の素袍にかけ烏帽子これにしたがふ。城内にて走馬あり。中に重忠と名告るものあり。此左右にあみ笠浴衣を被たるもの二人、まんぢうを數百ふくろに入れ、これを笹にゆひつけてこれにしたがふ。かの重忠は騎射笠錦の陣羽織、背に幣をさし、領主の棧鋪の前にゐたり、馬上にて禮をなして、ふくろのまんぢうを投る。これにあたるを吉事とす。また笹をどりといふあり。大太鼓一人、小太鼓二人、同衣裳にぬりがさをいたゞき、覆面し、にしきの陣羽織小手脚當なり。はやしはあみがさゆかたを著し、さゝに挑ちんをつけて同音にうたふ。「天には何佛にてましＩます、日本一のあら神、あらゐ、はし本、鹽見坂、名所々々のはなを見さいな」これをくりかへしうたふなり。

十九　吉田の飯盛　附衒妻

よし田のめし盛、夏は越後ちゞみにおなじ縞の前垂をかけ、手に團扇をもちて夜行す。よし田岡崎とも、妓はことぐ〳〵く伊勢より來たるものなり。ゆゑに妓ばかり伊勢訛なり。妓席上にて三絃を鳴すに、かむろだちなど謠ふことあり。絶倒するに堪へたり。今切の

吉田—今の豊橋

十八　吉田の花火

三州吉田の天王まつりは六月十五日、今夜の花火天下第一と稱す。大筒と稱するもの（立物ともいふ）二本、筒の周圍數十尺、たかく櫓を組みてこれを居う。その外種々の花火あり。（大筒の資料は例年城主よりこれを出さる。）おの〳〵棧敷をかまへてこれを見る。又近國よりも見物に來るものあり。鍛冶町のうら通りには杉の木をうゑ、囃子神樂あり。花火は市中にてあげるなり。この夜屋上或は簀子の下に、火こぼれかゝりたりとも、火難のうれひなし。是氏神の加護によるといひつたへたり。

牛頭天王の社、神明、八幡、ともに吉田城内にあり。六月十五日天王まつり、前夜十四日花火あり。本町、上傳馬町の兩町にて揚げる。高さ十三間、巾三間、これを立物といふ。これ過ぎて大花火あり。火のうつらぬやうに、大釜を覆ひにす。これに火をうつす時は、その火屋上にむらがり下る。見物の人々はぬれ筵をかつぐ。その外町々の花火數百あり。十五日よし田五ヶの寺院より飾山を出す。至つてさとびて古雅なり。十四五の童頼朝に扮ちて、金の立烏帽子直垂太刀を佩く。馬上なり。頼朝の乳母といふ者あり。綿帽子

京―ン、丁、尼、井、京とていろはの最後とするよりいつ京都に著くならんとの意を以て戯れたる也

麥の秋―舊暦四月

蟬のしぐれ―蟬時雨、蟬の諸聲に鳴き立つるをいふ、歳時記六月の部に出でたり

半元服―眉毛を落さず髪を丸髷にゆひたるのみなるを稱するが普通なれど、茲は眉毛を落さず齒のみ染めたることとか、又は齒のみ染めて髪は娘の姿なる事と聞ゆ

つくり、江戸の王子の社邊に似たる所あり。駿州より尾州までは、驛の十字街、或は街道、みな悉く秋葉の常夜燈あり。この社近年もつとも繁昌なり。

いろはにほへとほつあふみや假名の數四十八瀨も越えていつ京

夏ながら麥の秋葉も過ぎがてに山路は蟬のしぐれそめにき

十六　戸守の鍾馗

遠州より三州のあひだ、人家の戸守はことごとく鍾馗なり。かたはらに山伏某と名をしるしたるもあり。鍾馗のこと愚按あり、ここに載せず。

十七　遠州訛

遠州より西は、半元服の娘多し。白齒のむすめはたえてなし。行くべきを行かず、くらふべきをくはずなど、ずの字をそへていふこと、駿州より尾州のあひだみなしかり。就中遠州人ずが多し。

守驛—又「森」の字を書く、今專ら然り

いぬゐ—犬居地、名也

こと數百張、又よく客に待す。所藏の書畫中に、堂上方の寄合書、國學和歌者流の寄合書、儒者詩人書家畫工のより合書等あり。いづれも名家のみをあつめたり。古人の墨跡は猶もとめやすし、僅の扇面へ大家數十人のより合書などは、尤も志をはこぶこと厚からざれば得がたし。その弟を蘭陵といふ。（通稱忠藏、書をよくす）この人を京江戸大阪伊勢へいだして書畫をもとめしむ。（一國逗留半年に及べりとぞ）およそ三年にしていまだ盡さずといふ。田舍にはめづらしき人物なり。

十五　秋葉の山

秋葉山は掛川より麓まで九里あり。五十町一里なり。山中又五十町あり。參詣の道、守驛より兩路あり、一は山越にして甚だ難處なり。一は平地なりといへども川多し。四十八瀬といふ。予ひとつ〳〵かぞへたるに二十七瀬あり。霖雨の後は五十瀬にもなるといふ。夏日は橋なし。故にこの川をこと〴〵く歩わたりにす。又道中食物乏し。いぬゐの旅店いまは大に衰へて、麓に數軒の旅店あり。甚だ奇麗なり。山中にもかゝる旅店あるやと、目をおどろかすばかりなり。秋葉山中一町々々にしるしの塚あり。杉の木立、宮の

妹がゆふ島田の驛にとめられてかみへゆきゝのとゞかぬぞうき

十一　小夜の中山

遠州小夜の中山夜泣の石は、日坂より十七八町ばかりひがし、山の往還にあり。無間山は街道より一里半なり。掛川の驛はづれより右のかたにみゆ。こゝより見ればはなはだたかし。

新坂蕨糕兒育飴　由來傳世夜啼碑　鯨音斷絕無間事大士方便垂大慈

子育觀音、小夜の峠久圓寺にあり。淡ゲ嶽阿波手の神社、無間山觀音寺にあり。

十二　紅毛人の墓　雨談に出でたれば省く

十三　來舶人の歌曲　上に同じ

十四　掛川の好事家

掛川下俣町の大場氏通稱大助松風亭と號すは、遠州第一の好事家なり。近來名家の書畫をたくはふる

ササ—ササ菩薩とて二字の草冠のみを取りて合せたる佛家の略字也

うつゝにも目の—「駿河なる宇都の山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり」

九　宇都の山

宇都の山の十團子は、豆粒ほどの餌を、麻糸もて十づつつらぬき、五連を一トかけとす。土人の説に、峠に地藏井のたゝせ給ふ、このみほとけの夢想によりて、十團子を製し、小兒に服さしむれば、萬病癒ゆといふ（團子のかたち數珠に擬するにや、その製もまたふるし。）

旅籠にのればつぶりをうつの山うつゝにも目のあはぬなりけり

十　島田の川留

連日の雨に大井川往來なければ、岡部より島田の間に、諸侯みち〳〵て、いとにぎはへり。予は二十日の夕島田に入る。予がしれる因幡屋てふ家も森侯の本陣となりぬ。この家旅店にあらねど、富めるものなればかくの如し。よりて因幡屋の向ひ、何がし源六とかいへる商人の家に逗留す。時々の飲食は因幡屋より持來りて饗應しぬ。夜中驛中の繁昌、小人の小うたなど、しばらく江戸に在るが如し。川は十五日より二十二日にいたりてはじめて明きぬ。

絶倒する一聞く者顔をかゝへて笑ふ

てたり。嫖客暖簾をあけて、ほしいまゝに内に入り、籬のかたより見たてるなり。ゆゑに妓みなまがきの方を正面に居る。（これをヨコミセといふ）楼上もせまくまたむさくろし。ざしき持、部屋もちと稱するもの、江戸よし原のにし河岸におとれり。客一人あればその友あとよりゆきてそのざしきに入りて、ほしいまゝにあそぶに妓をまねかず。九ツをかぎりにこの人々はかへるなり。これをつけにゆくといふ。妓の詞何しなんし、おいでなんし、などいふ言葉をつかへど、多くは駿府なまりをまじへたれば、絶倒すること多し。妓の詞に文といはず手がみといふなり。こんや手がみ一本かゝアずなどいふ。かゝアずは書くべしといふなり。妓「何さんちつくりおいでなんしよ」客「今にいかず〳〵」いかずは行くべしなり。硯蓋などむさくろし。藝子もあれど、是亦似て非なるものなり。牽頭は廓中の米屋酒屋のわかいもの、又は廓の門番などの孩兒なり。故に酒長（酒屋の手代）門忠（門ばんのむすこ）などの名あり。この者夜は奉公のいとまあるをもて、幇間をして、酒のみ小遣銭をもとむるの計をなす。（幇間は羽織をきず）言語形態、胡盧するに堪たり。甚だいやなるものなり。（二丁町の細見記は安永九年の春、よしのや酒樂といふものはじめてえらみて発行す。そののち終に行れず、前後一版なり。予一本を得てたづさへかへれり。）

宮城野しのぶ—碁太平記白石噺中の人物として俗間に膾炙せるもの

神祖—徳川家康

駿府寺町菩提寺墓門右のかたに、由井正雪が墓あり。又彌勒寺に十三佛あり。（府中より西廿町許）今は地名となりて、彌勒の十三佛と喚ぶ。これも正雪が菩提の爲に、宮城野しのぶが建てしといふ、土人の說なり。こゝにも正雪が墓あり、尋常の石碑のごとし。（宮城の信夫は未生の人なり、この女はらからの事うたがふべし。）

六　梅屋勘兵衛が舊跡（此條雨談に出でたれば省く）

七　義元の畫像

駿州阿部郡、大岩村臨濟寺（賤機山の向風の森の近地）に今川義元の畫像あり。（束帶持笏）五月十九日（義元忌日）諸人に拜さしむ。此日雨ふりければ予參らず。

八　駿府二丁街

駿河府中の妓院は二丁町とよびなす。本名は阿倍川町なり。神祖御在城の日、免許の遊女町なり。今は大におとろへたり。見世はよこ見せにはる。故に格子の方には障子を建

にのせたものは悉くこれを省きぬ

凡士峯の眺望天下第一と稱するもの、駿州有渡郡大野村府中より三里龍華寺の本堂より、富士を正面に見る、最絶景なり。清見寺にまされりといふ。連日雨ふりければ、ゆかずしてやみぬ。

五　正雪が墳　附十三佛





此條は先板蓑笠雨談に出でたれば省くべかりしを、翁富日の吟にちなみて圖さへ追加して許せてこゝに載するもの也以下雨談

十二日のあした、藐姑峯をこゆ。今朝雨ふれり。

箱根八里上流汗　騎馬越來行路安　却懼昨今皐月雨
明朝大井水漫漫

三　雨中の不二

十日の夜より雨ふりて、三嶋、沼津、原、よし原、岩淵、薩陀山の間、一日も富士を見ず。府中逗留の間も、また士峯を賞するによしなし。

われに句なし山に不二なし五月雨

四　農男　附龍華寺

駿府の人の說に、富士にて四五月のころ、だん／＼雪のきえのこりたるが、寶永山の方、凹ところに、人の形のごとく雪ののこることあり。これを農男と稱す。この殘雪見ゆるとしもあり、さま見えざるとしもあり。田子の土人いふ、農男見ゆる年は必ず五穀熟す。

壬戌羇旅漫録

蓑笠漁隱遺稿
坦庵居士正幹校

巻の上

京傳名は醒字は酉星、岩瀬氏、通稱を傳藏と云へり、京橋のほとりに住するをもて自から京傳と號す、翁と莫逆の友なりしゆゑ神奈川まで送りしならん、京傳は文化丙子九月、五十六歳にてみまかりぬ

一　大磯の懐古

五月十日大磯の驛に泊る。きのふ用事ありて僕をば品川よりかへし、今朝京傳子には神奈川にて別る。こゝろいまだ旅になれず、このゆふべ甚だ寂寥。鴫立澤もむかしの地にあらず、虎が石、またよく人のしるところなればしるさず。

祐成全盛大磯傳　千里高名虎御前　可嘆衣裳群乳鳥
只今有出女如鳶

二　藐姑峯の雨

總目錄畢

巻の下

巻の中

卷の上

目録

〇一條より三十九條までの話(ものがたり)は、東海道大磯より大津までのことを記す。名古屋新堀(にひぼり)又この中にあり。

〇四十條より八十七條に至つて、京師の話をしるす。類をもてならべ評するに至つては、大阪の話もこれを混(こん)ず。近江も亦この中にあり。

〇八十八條より百二十五條に至つて、大阪の話をしるす。京の話を雙評(ならべひやう)すること前のごとし。

〇百二十六條より百五十七條にいたりて、伊勢及び歸路の話をしるす。

るにわづらはしき故なり。旅中漫戯の詩歌は、その所を得てよみ出せるものこれを載す。是みづから後勘に備へん爲にして、いとをさなきことのみおほかり。

一此書人に見せん爲にもせず、又みづから長夜の友としもあらねど、老後茶話の記憶に、しばらく駄賃帳のしりへにしるせり。机上の鷄肋かゝること猶おほかるべし。

崖言

一遊歷中おのが目に珍らしとおもへるもの、悉く是をしるす。古人の略傳○墓誌○珍書○風俗の異體○方言○妓院○雜劇○年中行事の異同○名所古迹○古人の墨跡等なり。序を得ず一覽せずといへども、その處を探得たる古墳等はしるせるもあり。

一岐阜長良川の鵜船、愛宕、高尾、四明山石川翁の舊跡石山寺、二見、朝隈、三保等は、必ず見るべき所といへども、或は道遠く、或は山高くして、炎暑にたへず、或は案內の友人當日故障ありて、もだせるもありて遊覽せず。故にしるすことあたはず。遺恨甚し。就中ながら川の鵜、十八樓、四明山を見殘せること、尤うらむべし。

一南都は歸路必ず遊覽すべきを、出水に日數おくれて、歸心あわたゞしく、且路あれて獨行の覺束なさに、ゆかでやみぬ。播州高砂、紀州高野、攝州須磨赤石等、僅の道を隔ながらゆかず。是洪水に路次の序を失ふ故なり。西は住吉を限れり。

一遊歷中人の需に應じて作れる狂文等數稿ありといへども、こゝに載せずして別本とす。見

る、夜中大雨、六日の朝伏見に着岸、今日も風雨甚し、先の大水にこりて大津へ出でず、又京へ行て晴をまつ、　○八日水口泊今朝京を出立、○九日津泊○十日松坂泊○十一日參宮今夕松坂までかへりてこゝに泊る、　○十二日津泊○十三日桑名泊十四日雨ふりて舟出ず、桑名人にとゞめられて一兩日逗留す、　○十六日名古屋今朝乘船、佐屋へまはる、桑名の架橋佐屋まで送らる、佐屋の本陣丁寧にもてなさる、故にしばらく逗留、今夜名古屋に至る、　○十七日赤坂今朝名古屋を出立、歸心甚あわたゞし、故に是より一日に十二三里の道をはしる○十八日濱松泊○十九日島田泊○二十日興津泊○二十一日三島泊○二十二日大磯泊○二十三日川崎泊○二十四日江戸今朝巳の刻品川へ来る、道に僕にあへり、家内の無事を聞きて道をいそがず未の刻家に歸る、

凡道中百有五日、五月九日より八月二十四日に至る。

逗留の日數

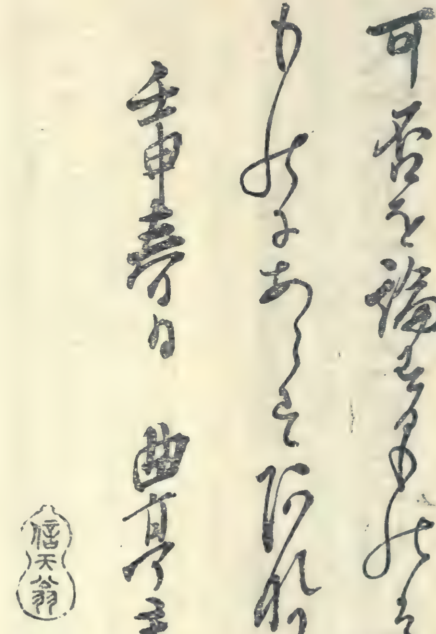
塔の澤二日　府中六日　島田二日　掛川五日半　吉田七日　新堀一日　名古屋前後十七日

水口三日　石部一日　京都前後二十四日　大阪十日　伊勢妙見町一日

都合逗留七十五日半

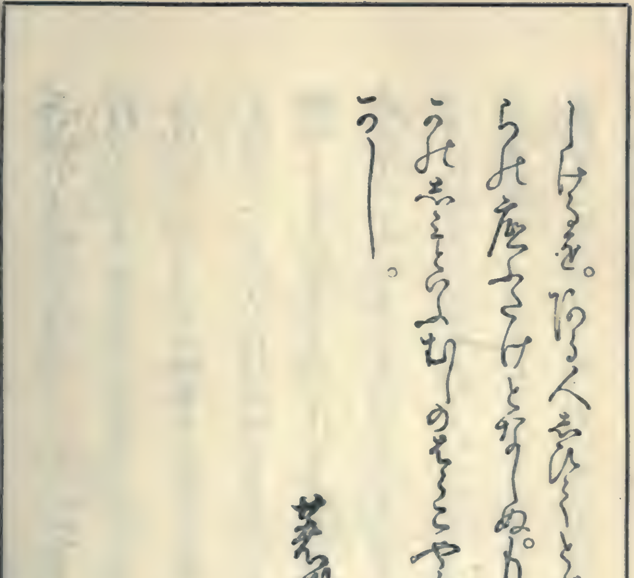
旅泊槩略

〇享和二年壬戌、夏五月九日巳の刻、江戸出立、今夜神奈川泊、この處まで京傳子送る、明朝袂を分つ、〇十日大礒泊〇十一日箱根塔の澤 今日雨ふる、元湯猶五兵衛を訪ふに、此節川越の城主入湯ましますをもて、塔の澤の湯屋寸地も人を入るゝの席なし、故に酒樓中村屋東五郎が家に逗留す、今夕僕又助江戸より來れり、十二日猶雨ふるを以て逗留す、〇十三日 今朝雨少しくふる、晝より晴れたり、箱根を越ゆ、沼津泊〇十四日江尻泊〇十五日府中 駿河人にとめられて、二十日まで逗留す、〇二十日島田泊 この節霖雨にして大井川猶あかず、因幡屋何某丁寧にもてなさる、〇二十二日金谷泊 今夕川を越えたり、故に僅にして泊る、〇二十三日掛川泊 二十五日早朝秋葉へ出立、二十六日の夜又かけ川へ歸る、二十八日まで逗留、〇二十八日袋井泊 今日午時掛川を立て、袋井の完醉を訪ふに留守なり、すぐに過るべかりしを、妻女ねんごろにとめらるゝを以て、やむことを得ずして一宿す、掛川の雪松氏この所まで送り來り、今夕袂を分てり、掛川に遊べる時、二十五日の朝僕又助をばその故鄕舞坂の在へやりぬ、故に一兩日獨行す、〇晦日吉田 今日僕かへり來れり、これと濱松にてあふ、〇六月七日岡崎泊 今朝吉田を出立、御油の外成といふ人にとゞめられしばらく休息、この夕岡崎へ至る、〇十一日新堀泊 にひ堀はをか崎より一里半ばかり西の方の在なり、〇十二日名古屋泊 今朝新堀を立て名古屋に至り、同二十六日まで逗留、この間十四日津島の友を訪うて津島祭を見る、おなじく十六日午時又名古屋へ歸る、昨日僕又助を江戸へ歸す、是より獨行、供あれば逗留中萬事わづらはしきゆゑなり、〇二十六日宮泊 今晩名古屋を出立、名古屋の友人大勢送り來る、又宮の雅人一兩輩來會し終夜飲醼す、明朝乘船これと袂をわかつ、〇二十七日石藥師泊 今日大に雨ふる、〇二十八日水口泊 出水につき、七日朔日まで空しく逗留。〇七月二日石部泊 草津大水、道あれて通行なし、故に石部に泊る。〇三日京都 今日間道を經て大津に出づ、この間甚難澁、おなじく二十四日まで京にあり。〇二十四日夜大阪 今日京を立て伏見より乘船、戌の刻道頓堀へ著岸、〇八月六日京都 昨夜大阪を出立、友人舟場まで送ら


曲亭主人書
信天翁

かくやにきりけれは物をかなしともてみる
はえとしつゝのきこえのたなむら
わしく物しらし　そのよの涙を
おもひすてゝほふかりさえんと思ひつ
又此ほかの人親のなれなりけり

賢なるへきことしれたりもし
識あしゝ先くゝみつゝの識とゐで　亦復
そのおちのり此にやすらをむび
せしを世つゝきつ右おりぬ人
醉一ねとをめくゝ余つ訂るが包の



なほども。さやくまゆつくけふだい世代。よにまつきていれく
羇旅。菊月なかばより朝(あさの日)の記録をしたゞめつきぬ。
こびしは何ぞと百日ばかりにめぐらしみえらくまきたるを蓄やかた
うるほひらけれど。陸のまよひく。なかりけり。されどさえ
物く其ぐれてはれぞ。其のものこしく其のうとも。
人をさえまよくへざるべく。おはりあるふみ代をきそ。
よみはなびらのくれとなりく。これるとめけれバ。のうし
とふめくりどのかざるあへきべきをしつもなめしやうで紙屑(カミクズ)
籠そうしきみそう例へ入れく。ほどこうのふ飛よりゝ入れてく

なつみは人にまつこと多れこころいそぐ。御かへのよそほひゆめに
こゞせ濱つ。ふしあれのこなみあれやさめて。二條なかなき河の
なかくまへ。ほなみあれさむさる。秋風に昔ともの見し。月とし出で
照りまさりて。堀江の尽れ。被をまとのつ。ゆふべさしあけて
や。いせぢよりゆきをつるとさて。うけの浪のこゝやしろを拝して。山田
松ざこのれ。玉ざの関よめつりし。津の郎のながきこよとどう
をこめりしたる。紀伊くん廻もりそうをみて。鶴のまづれを
まゆめつて。舞さんれ。宮のまへまゐりて。神へぞみつくる友
人とどかれ。二百あまり。風のまぎて。宮ふざかまさかれ

これ竹乃世事婦人に杖ざかをとりてもさへの神にや
誰れ人。のとの世代伊勢の宮居をさして参る人と。さみだれて杖に笠
あやしうさうしまつ。まゐるの路や、ふ二の世のあいにらあじうして、とそつ
何のうに旅やどかしく。すぐ夜なかり秋みえ山にながらの月見。
ふる人まてうがん。なつの名のまへのさへ年どし二。何もよう田
地の路や。むかし麦の杜若にゆかなるせし。さし月をまつし。むかしの
尾張のくにより旅ねをすのぐさめ。早やり月ちそうど人より
こゝこに寺ずし枝をとゞめて。旅くはりさる何も河にちら流し。
ひがし山の夕ゆかしく。あの名さんに寺まへがれもみくうく旅ど。

たゞならず——一通りならず別れ惜し

みな人の家より、むかへの人々なンど來あひたる、うちつれて、暮れはてぬる程にぞかへりつきける。かくてたひらかに物しつるは、いとうれしき物から、今はとてときすつる旅のよそひも、ひごろのなごりはたゞならず。

ぬぐもをし吉野のはなの下風にふかれきにけるすげのを笠は

よしや匂のとまらずとも、後しのばん形見にも、その名をだにと、せめてかきとゞめて、菅笠の日記。

本居宣長

菅笠日記終

御嶽―大和金峯山、御嶽精進とて此山に詣でて精進する事ありし也

にまうづる道は、こゝよりかの櫃坂といふをこえて、南へゆくを、今はその道ゆかんは遠ければ、堀坂をこえてかへらんとするを、そのかたは旅人の物する道ならねば、くひ物なンどもなしと聞けばなりけり。又しもかの寺の前を通り、下多氣にかゝりて、山をこえ、小川、柚の原なンどいふ山里を過ぎて、伊福田寺にまうづ。こゝはすこし北の山陰へ廻る所にて、道のゆくてにはあらねど、御嶽になずらへて、精進なンどしつゝ、國人のまうづる所にて、かねて聞きわたりつるを、よきついでなれば、廻りてまうづるなりけり。山は淺けれど、いと大きなる岩はなンど有りて、谷水もいさぎよく、世ばなれたる所のさまなり。さて與原といふ里にいでて、寺に立ち入りてしばし休みて、堀坂をのぼる。こはいと高き山なるを、今はその半までのぼりて、峯は南になほいとはるかに見あげつつ、あなたへうち越ゆる道なり。このたむけよりは、南の島々、尾張、三河の山まで見えたり。日ごろはたゞ山をのみ見なれつるに、海めづらしく見渡したるは、ことに目さむる心地す。わがすむ里の梢も、手にとるばかりちかく見附けたるは、まづ物なンどもいはまほしき迄ぞおぼゆるや。さてくだり道、いと遠くて、伊勢寺すぐるほどは、はや入相になりにけり。いぶたにまはりし所より、供のをのこをば、さきだてゝ遣りつれば、

いひこそいでね—口にこそいはずとも

おこなふ—取扱ふ、治める

さては—それから又

ぞう—族、一族子孫

さるは—その譯は

さばかりいかめしき御おほえにて、榮え給ひし昔の御代の事、思ひやり奉りて、いとかなし。

君まさでふりぬる池の心にもいひこそいでねむかしこふらん

この上のかたの山を霧が峯とかいひて、御城の有りし跡ものこれりとぞ。されど高き山なれば、えのぼりては見ず。さてむかしの事どもかきとゞめたる物なンどやあると、此寺のほうしに尋ねけるに、此比あるじのほうし物へまかりて、なきほどなれば、さる物も、この里の事おこなふ者の所にあづかりをるよしいらへけるは、留守なンめり。さてその物見に、また里にかへりて、かの家たづねてしかじかのよし請ひけるに、とり出でて見せける物は、この所のむかしの繪圖一ひら、殿より始めて、つかへし人々の家、あるは谷々の寺ども、町屋なンどまで、つぶさに寫しあらはしたり。さてはつかへし人々の名どもしるしあつめたる書一巻あり。拔きて見もてゆくに、かねて聞きわたる人々、又は今もこゝかしこにそのぞうとて殘るがせんぞなンど、これかれと多かる中に、己が先祖の名本居宗助も見えたり。かの繪圖に、その家も有りやと、心とゞめてたづね見けれど、そは見あたらざりき。かくて此家にかたらひて、くひ物のまうけなどして行く。さるは伊勢

もたれば—持ちたれば
つゞらをり—九折、曲折したるけはしき坂
こゝもと—すぐ手近か
つかうまつり—仕へ奉り

もしらぬを、みな人の、とばかりゆきては、息つき立ちやすらひつゝのぼるを見るにぞ、くるしさ思ひやられぬる。とものをのこは、荷もたればにや、はるかにおくれて、やう〳〵に登りくるも、つゞらをりのほどは、いとまぢかく、たゞこゝもとに見くだされたり。さてたむけなる茶屋にしばしやすみて、此坂をくだれば、やがて多氣の里なり。こゝはおのが遠祖たちの、世々につかうまつり給ひし北畠の君の、御代々經てすみ給ひにし所なりければ、故郷のこゝちして、すゞろになつかしく覺ゆ。此度も、多くは此御跡をたづね奉らんの心にて、此道にはきつるぞかし。所のさま、山たちめぐりて、いとしも廣からねど、きのふ來し里々にくらぶれば、こよなううちはれて、ひろう長き谷なりけり。かの殿の跡は、里より四五町ばかりはなれて、北の山もとに、眞院善とてわづかなる小寺のある、里人は今も國司とぞいふなる。そこに北畠の八幡宮とておはするは、具教大納言（國司一世號ニ寂光院不智ト）の御靈をいはひまつれる御社とぞ。先祖の事思ひて、ねんごろに伏しをがみ奉る。をりしも雨いさゝか降りけるに、

　下草の末葉もぬれて春雨にかれにしきみのめぐみをぞ思ふ

堂のまへに、そのかみの御庭の池、山、たて石なゞども、さながらのこれるを見るにも

ようせずは―惡くすると
聞ゆる―有名なる
うちはへ―ずつと引續きて
かちより―徒歩

の山路のほどいかならんと、今よりいとわびし。この道より、室生は程ちかしと聞けど、雨ふりまさりて、道もいとあしければ、えまうでず。田口といふ宿まで、はいばらより三里半とかや。まづ石わり坂なンどいふをこえて、道のほどいと遠し。田口より、又山どもあまたこえ行きて、桃の俣といふへ二里、又山こえて二里ゆけば、菅野の里なり。こゝより多氣へ四里ありとぞ。此あひだになん、大和と伊勢の國ざかひは有りける。さて今日は、多氣まで物すべかりけるを、雨いみじうふり、風はげしくて、山のうへ行くほどなンどは、みの笠を吹きはなちつゝ、ようせずは、谷の底にもまろびおちぬべう、ふきまどはすに、猶ゆくさき、聞ゆるかひ坂もあンなるを、かくてはえ越えやらじとて、石な原といふ所にとまりぬ。今日ははいばらよりこなた、いづこも〳〵たゞ同じやうなる山中にて、何の見どころもなかりしを、櫻はところ〴〵にあまた見えて、なほさかりなりき。されど日もいとあしく、うちはへ心地さへなやましかりければ、何事もおぼえで過來つれば、歌なンどもえよまずなりにきかし。

十四日、雨はやみぬれど、なほこゝちあしければ、例のあやしきかごといふ物にのりて、飼坂をのぼる。けにいとけはしき山路なりけり。されどおのれはかちよりならねば、さ

二本のすぎつる道にかへりきてふる川のべを又もあひ見つ

古今「はつせ川ふる川のべに二本ある杉年をへて又もあひ見む二本あるすぎ」こよひも又萩原の里の、ありし家にやどる。これよりかへるさは、道かへて、まだ見ぬ赤羽根ごえとかいふかたに物せんといひあはせて、ともなるをのこに、かう〳〵なんといへば、頭うちふりて、あなおそろし、かの道と申すは、すべてけはしき山をのみ、いくへともなくこえ侍る中にも、かひ坂、ひつ坂なンど申して、よにいみじき坂どもの侍るに、明日は雨もふりぬべきけしきなるを、いとゞしく道さへあしう侍らんには、おまへたちのいかでかかやすくは越え給はんとする、さらに〳〵ふようなンめりといふを聞けば、又いかゞせましと、みな人心よわく思ひたゆたはるゝを、戒言大徳ひとり、いなとよ、さばかりおそろしき道ならんには、絶えてゆく人もあらじを、人もみな行くめれば、なにばかりの事かあらん、足だにもあらば、いとよう越えてんと、つゆ聞きおぢたるけしきもなく、はげましいはるゝにぞ、さは御心なンなりとて居りぬ。

十三日、雨そぼふるに、まだ夜をこめて、かのおそろしくいひつる道に出でたつ。そはこの里中より、右のかたへぞわかれゆく。けさはいさゝか心地もあしければ、ゆくさき

ありし—以前宿りし
道かへて—西行「吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん」の歌句にとる
かやすく—たやすく
ふよう—つまらぬ事
思ひたゆたはるゝを—躊躇せらるゝを
大徳—僧の敬稱
さは云々—それでは御氣隨になさるがよいと案内の者いひて止みたり

ことどころ―他の所
はやくも―以前にも

塔なゝども有りて、堂は十一面觀音にて、三輪の若宮と申す神も、同じ堂のうち、左のわきにおはします。さてもとの道をなほ一町ばかり入りて、石の階をいさゝかのぼりて、社の御門あり。このわたりに、いと神さび大きなる杉の木の、こゝかしこにたてる、ことどころよりは目とまる。はやくもまうでし事なゝど思ひ出でて、

杉の門またすぎがてにたづねきてかはらぬ色をみわの山本

古今「わがやどは三輪の山もと戀しくはとぶらひきませ杉たてる門」 神の御殿はなくて、おくなる木しげき山ををがみ奉る。拜殿といふは、いといかめしくめでたきに、ねぎかんなぎなゝどやうの人々なみゐて、うちふる鈴の聲なゝども、所からはまして神々しく聞ゆ。さて本の道には歸らで、初瀨のかたへたゞにいづる細道あり。山のそはづたひを行きて、金屋といふ所にいづ。こはならよりはつせへ通ふ大道なり。これよりはつせ川の川べをゆく。欽明天皇ノ京 しき島の宮の跡は、このわたりとぞ聞きし。かのとかま山といひし山も、此道よりは、物にもまぎれず、ゆくさきに高く見えたり。さて櫻井のかたよりくる道とひとつにあふ所を、追分とぞいふなる。さきには此わたりより別れて、たむのみねの方におもむきしぞかし。又はつせの里をとほりて、川のはしを渡るとて、

その社—天神の社

蠶兒—三人の男に戀せられ何れに定めんすべも無くて遂に身を耳なしの池に投ず

道とは—道に比しては

は雄々しく、かぐ山は女しき山のすがたにぞ有りける。此みゝなし山、今は天神山ともいひて、その社ありとぞ。

さもこそはねぎことききかぬ神ならめ耳なし山にやしろ定めて

かの蠶兒が身なげけん、耳成の池も、此わたりにや有りけん。今も道のべに池はあれど、

古へのそれかあらぬか耳なしの池はとふともしらじとぞ思ふ

さて三輪の社にまうでんとすれば、やゝ行きて、きのふ別れし地藏の堂あるちまたより、北の道にをれ行くほど、奈良のかたを思ひて、ながめやりたるそなたの里の梢に、櫻の一木まじりて咲けりけるを見て、

思ひやる空はかすみの八重ざくらならの都もいまや咲くらん

さて行き〳〵て、はつせ川はみわの里のうしろをなん流れたる。橋を渡りて、かの御社の鳥居の前にゆきつきぬ。こゝはゆききの旅人しげくて、この日ごろの道とはこよなくにぎはゝしく見ゆ。此鳥居より、なみ木の松かげの道を三町ばかり山本へ入りて、左のかたに、だいごりんじとて、文字はやがて大御輪でらとかく寺あり。二王門、三こしの

やむごとなき—止むを得ざる

のきて—退きて、離れて

いにしへ云々—「かぐ山はうねびををしと耳なしと相あらそひき」云々の長歌

空をのみ見つゝ來しを、やう〳〵に雲も晴れゆきて、うねび山めぐりし程より、又よき日になりぬれば、たれも〳〵いとこゝちよし。當麻、龍田、奈良なンどへゆかんには、こゝより物すべきを、いかゞせんといひあはすに、よき序なればとて、ゆかまほしがる人おほかれど、かの所々はまた〳〵も來つべし、このたびはわれらはやむごとなき事しあれば、一日もとく歸りぬべきなりといふ人もあるにひかれて、みなえ行かずなりぬ。さるは旅のならひとて、たれも故里いそぐ心は有りながら、なほいと口惜しくなん。八木を東へいでて、四五町ゆけば、耳成山は道より二町ばかり北なり。畝火山と香山と此山とは、國中にはなれ出でて、あひむかひたる、いづれもこと山へはつゞかぬを、かの二つはなほほとりの山にもやゝ近く見ゆるに、此山はことに遠くのきて、こと山にはいさゝかも續きたる所なんなき。さて三つの山いづれも、いとしも高くはあらぬ中に、此山はやゝ高く、香山はことにひきくて、うねびぞ中には、高かりける。又そのあひだをくらべ見るに、此山よりうねびは近く、次にはかぐ山ちかくて、うねびとかぐ山の間ぞ、中には遠かりける。いにしへ（萬葉一）この三つ山の妻あらそひとて、うねびと耳成は男山にて、香山の女山なるを、あらそひ聘ひける古事の有りしは、今見るにも、まことに二つの山

さはり―差支

ちりばかり―少しも

へつるにや。さ思ふゆゑは、まづこの山のほとりなる御陵どもは、いづれもうねび山のそこの陵とあゝなれば、この綏靖の御も、今いふ所ならば、必ずさあるべきを、いづれの書にも、これはたゞ桃花鳥田丘上とのみあるは、この山のあたりにはあらで、神名帳に、調田坐神社とある地なるべきか。それは葛下郡なるを、この御陵は高市郡と見えたれば、たがへるやうなれど、この郡どもはならびたれば、さかひちかき所々は、古への書どもにも、郡のかはれる例おほかればさはりなし。されどこれは、このつきだといふ所をよく尋ねて後に、さだむべき事なり。又神武の御は、山の東北と、畝火山東北陵日本紀にも延喜式にもあるを、かのするゐぜい塚は西北にしもあゝなれば、うたがひ無きにあらねども、古事記には山の北のかたと見え、またかの御陰井上の御陵は、山の西なるを、日本紀には南といへるたがひもあれば、必ず東北とあるになづむべきにもあらざらんか。後の人なほよくたづねて定めてよ。さてこの四條村より二三町ゆけば、今井とて大きなる里なり。この今井の町中をとほりて、すこしはなれ行きて、八木にいたる。こゝにしばしやすみて物くふ。このごろは日いとよく晴れて、ちりばかり心にかゝる雲もなかりしに、よべよりうちくもりて、今朝は雨もふりぬべきけしきなりければ、宿をいでても、

もはら―專ら、全く

御―御陵

さてよし田村をいでて、北ざまに物して、大谷村といふを過ぎ、慈明寺村に入らんとする所の右のかた、山もとに寺ある、まへの岡のうへに、大きなる塚のかたちの見えたるは、綏靖天皇の御陵にて、里人はするぜい塚とぞいふなる。畝火山のいぬゐの麓につきて、これも高き岡なる、例ののぼりて見れば、御陵のさまも吉田なるともはら同じ事なり。東のかたのふもとに、山本村といふ見ゆ。慈明寺村はこの岡の北につゞけり。ややはなれて又北のかたに、四條村といふあり。この四條村の一町ばかり東、うねび山よりは五六町もはなれて、丑寅のかたにあたれる田の中に、松一もと櫻ひと本おひて、わづかに三四尺ばかりの高さなる、ちひさき塚のあるを、神武天皇の御陵と申しつたへたり。されどこれは更にみさゝぎのさまとはみえず、又かの御陵は、かしの尾上と古事記（畝火山北方白檮尾上）にあるを、こゝははるかに山をば離れて、さいふべき所にもあらぬうへに、綏靖安寧などの御は、さばかり高く大きなるに、これのみ斯くかりそめなるべきにもあらず、かたがた心得がたし。それにつきてつら〳〵思ふに、かの綏靖天皇の御と申すぞ、まことには神武天皇の御なるべきを、成務天皇と神功皇后の御陵の、まがひつるためしなど、いにしへだになきにしもあらざれば、これもてたがへて、昔より綏靖とは申しつた

あなた―以前

ものぐるほしき―氣狂じみたる

これ―陵

見るめし―見るべき點も、しは強辭

なンどの侍るもあるは、うへの土のくづれ落ちて、なかなるかまへのあらはれたるなり、とかたるを聞くに、かの安倍(あべ)のおくなりし岩屋のさまなンど、げにと思ひあはせぬ。かの口より奥(おく)へやゝ入るほどは、このまへに長く築(つき)たる所なりけり。又いづれにも、昔(むかし)はめぐりにから堀(ほり)の有りつる、七十年ばかりあなた迄は、これにも侍りしなり、といふを見るに、今はめぐりは畠(はたけ)又は篁(たかむら)なンどになりて、さるさまもさらに見えず。此たかむらなんそのなごりと、このおきなは言(い)ひけり。御山は今も全(まった)くて、有りしまゝと見えたり。

そも〳〵御陵の御事(おほんこと)をしも、などかくものぐるほしき迄たづねまどひありきて、くはしうは書(か)き記(しる)せるぞと、とがめん人もありなめど、末(すゑ)の代(よ)まで、いと〳〵上(あが)りての代(よ)の物の、まさしくこれよとて残れるは、これよりほかに有りなんや。ことにこのうねび山なるどもは、あるが中にもふるく、それとたしかにはたあンなれば、としごろ心にかけつつ、いかでくはしくまうでて見奉らんと、ゆかしく思ひわたりつる物をや。されどいづこなるもたゞ同じさまにて、珍(めづら)しげもなく、何の見るめしなき所々なれば、たゞおのがやうに、古(いにしへ)をしのぶ世のひがものならでは、わざとたづねて見ん物とも思ふまじければ、あなあぢきなの物あつかひやと、世の人のおもふらんも、さりぬべき事なりかし。

がうけをのみ云云—楽家を笠にきて
しるし—利益
からき—つらき
けぢめ—他の里との區別
やむごとなき—貴き

人どもは、心もなく、それにつけてもたゞがうけをのみさきに立つゝ、うちふるまふ故に、御陵のある里はことなる民のわづらひ多くて、そのしるしとてはつゆ無ければ、いづこにも是をからき事にして、たしかに有るを殊更にかくして、此里にはすべてさる所侍らず、とやうに申しなす類もありとぞ。さてはいよ〳〵うづもれ行くめれば、なかなかに御陵の御ためにも、いと心うきわざにて、たづねさせ給ふ本の御心ざしにもいたく背ける事ならずや。いさゝかにてもその里にはけぢめを見せて、御めぐみのすぢあらんにこそ、民どもも悦びて、いよ〳〵やむごとなき物に、守り奉るやうはありぬべきわざなゝめれ。又かの並河がたづね奉りしをりの事をもかたりき。さて此里中の道のほとりに、御陰井といふ今もあり。かたのごと水も有りて、たゞよのつねの小き井なり。御陵は此井より一町あまりいぬゐの方にて、すなはち畝火山の西のふもとにつきたる高き岡にて、松なゝどまばらに生ひたり。かしこけれど登りて見るに、こゝにをさめ奉りつらんと思はるゝ所は、圓に大きなる丘にて、又その前とおぼしき方へ、いと長く築き出したる所あり。そこはやゝ降りて、細くなんある。かの翁こゝまであないし來りて、かたりけるは、すべていづこのも、古のみさゝきは皆かうやうに作りし物なるを、岩屋

ことある事—格別の事

かしこみ—畏れ多く思ひ

る。又此ほとりの里人は、御峯山といひて、いかなるよしにか、峯に神功皇后の御社のおはするとか。かのじんにくんが語りしは、此御事なりけり。さてそこへは此うねび村よりのぼる道ありて、五町ばかりと聞けば、いざのぼらんといへど、日ごろの山路に困じたる人々は、いでやことなる事もなかゝめる物から、足つからさんも益なしとて、すすまねば、えしひても誘はずなりぬ。かくて此村を西へとほり、山の南の尾をこえて下れば、あなたは吉田村なり。此あひだの道の左に、まなご山まさごの池なゝどいふ名、今もありて、池は水あせて、そのかたのみ残れりとぞ。かの懿徳天皇の御陵は、そのわたりなるべきを、知られぬこそいとくちをしけれ。さて吉田村にて、例の翁かたらひ出でて、御陰井上御陵（安寧天皇）をたづぬるに、このおきなは、あるが中にもなべての御陵の御事をよく知りをりて、こまかにかたる。近き世に江戸より御陵どもたづねさせ給ふ事はじまりて後、大方二十年ばかりに一度は、かならずかの仰事にて、京よりその人々あまた下り來て、その里々にとゞまりゐて、くはしく尋ねしたゝめつゝ、しるしの札たてさせ、めぐりに垣ゆはせなゝどせらるゝ事ありとなん。ふりにし御跡のうせ行きなん事をかしこみ給ひて、さばかりたづね奉り給ふは、いともありがたき御おきてなるを、下ざまなる

久米寺のありし當時

おしあてに―凡その推測にて

ありし跡なりと、法師はいひつ。うねび山、北の方にまぢかく見ゆ。ふる言思ひ出でられて、

玉だすきうねびの山はみづ山と今もやまとに山さびいます

萬葉一長歌に「うねびの此みづ山は日のよこの大御門にみづ山と山さびいます」云々　此山のかたへつきたる道を、おしあてにゆきて、すこし西へまがれば、畝火村あり。すなはち山のたつみの麓なり。此むらに入らんとするところの、半町ばかり右の方に、ちひさき森有りて、中に社もたてるは、懿徳天皇の御陵といふなれど、そは此山の南、まなごの谷の上とあるにあはず、又御陵のさまにもあらねば、かた〴〵いぶかしさに、村の翁にそのよしいひて、くはしくたづねければ、げにさる事なれど、まことのみさゞきはさだかに知れざる故に、今はかの森をさ申すなりとぞ答へける。橿原宮は畝火山の東南橿原宮は神武天皇の都　このわたりにぞ有りつらんと思ひて、

うねび山見ればかしこしかしばらの聖の御世の大宮どころ

今かしばらてふ名は残らぬかと問へば、さいふ村はこれより一里あまりにしみなみの方にこそはべれ、このちかき所には聞き侍らずといふ。さて此山を、今は慈明寺山といふとかや。されどうねび山ともいはぬにはあらず。それもなべてひ文字を清てなんいふめ

むべ〳〵しうもてなしつゝ—尤もらしく取りつくろひて
古跡—振假名原本による
ねんじ—我慢しこちへ
ほころびて—こちへ兼ねてどつと
つけて—渾名をつけて
くさはひ—種
そのかみ—古へ

鬚がちに顔悪さげなるが、面もち聲づかひむべ〳〵しうもてなしつゝ、いでこのわたりの名所古跡はと、いひ出づるよりまづをかしきに、わかき人々はえたへずほゝゑみぬ。この東なる山に塚穴とてあるは、いかなる跡にかと問へば、かれは聖徳太子の御時に、弘法大師のつくらせ給ふとかたるには、たれもえ堪へねど、なほ何事かいふらんと、さすがにゆかしければ、いみじうねんじて、さはいみじき所にも侍るかな、深さはいくらばかりかと問へば、おくはかぎりも侍らず、奈良の寒さの池まで通りてこそ侍れといふ。そもその池はいづこばかりにあるぞと問へば、興福寺の門前に、さばかり名高くて侍る物を、しらぬ人もおはしけりといふにぞ、心得てみな人ほころび笑ふ。さて畝火山の事かたるついでに、神功皇后の御事を申すとて、じんにくんといへるこそ、よろづよりもをかしかりしか。それより此あるじをばじんにくんとつけて、物わらひのくさはひになんしたりける。こゝには神の御社やなにやと、たづねまほしき所々多かれど、かゝるには何事か問はれん、いとくちをしくこそ。

十二日、三瀬をいでて、北へすこし行きて、左の方へ三町ばかりいれば、久米の里にて、久米寺あり。今もよろしき寺なり。されど古の所はこの西にて、こゝはそのかみ塔の

堅—昔

よろしき—相當に見苦しからぬ

をさ〳〵—とんと

さはいかゞせんなは—それでは仕方なしやはり

ひと里—里中全體

村といふ所なるを、牟佐坐神ノ社も、今かの村に有りときけば、身狹は此わたりと思はれ、又坂上とあるに、所のさまもかなへればなり。それにつきて猶思へば、今みせといふ名も、身狹と書ける文字を、しかよみなせる物か、又さらずとも聲かよへばおのづから訛りつるにや。かくて西へすこしくだりて、かの三瀬村にいづ。こゝは八木より土佐へゆく大道とぞいふなる。日もはや夕暮に成りぬるを、此里はよろしき家どもたちつゞきて、ひろき所なれど、旅人やどす家はをさ〳〵無きよしきけば、なほ八木までや行かまし、岡へや歸らましといへど、さては日暮れはてぬべし、足もうごかれずと、みな人わぶめれば、さはいかゞせん、なほ此里にとまりぬべきを、あやしくとも一夜あかすべき家あらば、猶たづねよといふに、ともなるをのこ、ひと里のうちとひありきて、からうじて宿はとりぬ。

思ふどち袖ふりはへて旅ごろも春日くれぬるけふの山ぶみ

道の程はなにばかりもあらざンめれど、そこかしこと行きめぐりつゝ、日一日たどりありきつれば、げにいといたくくるしくて、何事も覺えぬにも、猶このちかき邊のことども問ひきかまほしくて、まづ此宿のあるじよび出でたる、年のほど五十あまりと見えて、

かひ―峡　あひだ
うちかたぶく―頭を傾けて考へる
おいさり〱―
あゝさう〱
かの天皇―孝元天皇

村といふあり。そこよりすこしのぼりて、山のかひを西へうちこゆれば、劒の池、道の左にあり。東南も北も低き山にて、池はたてもよこも二町ばかりの廣さなる、中にちひさき山有りて御陵なり。南西北と池めぐりて、東のみ後の山につゞけり。さて池の西の堤のしたは、やがて石川村なり。此御陵はまがふべくもあらねど、猶さだかに聞かんと思ひて、例の里のおいびとたづねて問へば、第十八代のみかどのみさゞき、御名は何とかやのとて、しば〱うちかたぶくを、いな十八代にはあらず、八代孝元天皇よといへば、おいさり〱とうなづく。物とはんとして、かへりてこなたより敎へつるもをかし。此村をいでて、あなたは程なく大輕村、是はかの天皇（輕堺原宮）の都の跡なり。かるの市なンどいひしも、こゝなるべし。輕をはなれて、猶西へ行けば、やゝ高き所なる、道の南に、なほ高く圓に見ゆる岡あり。その南のつらに、塚穴といふいはや有りと聞きつれば、細き道をたどり行きて見るに、口はいとせばきを、のぞきて見れば、内はやゝひろくて、おくも深くは見ゆれど、闇ければさだかならず。下には水たまりて、奥のかたにその水の流れいづる音聞ゆ。これは何の塚ぞととへど、しるべのをのこもしらぬよしいへり。もし宣化天皇の身狭桃花鳥坂上御陵なンどにはあらぬにや。其故は、此岡の下はやがて三瀬

佛の御像を云々—欽明天皇の十三年佛法傳來の當初にも、又敏達天皇の十四年にもあり

神なみ山の云々—「春されば花さきををり秋づけば丹の穂にもみぢ」云々といふ長歌中の句

雷之上—「大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも」

事なりき。のぼりて見やれば、南の方に、飛鳥川西北ざまへながれて、長く見ゆ。此岡の南に、かみひだといふ里あり。文字は神の膝とかくよし。そこよりすこし行きて、かの見えしあすか川をわたる。このあたりにてはやゝ廣き川なり。此川の南のそひをゆく道は、八木より岡へ通ふ道なり。その道を田中村なゝどといふを通りて、十町ばかり川上の方へゆけば、豐浦の里、豐浦寺のあとは、わづかに藥師の堂あり。今も向原寺といふ。（日本紀に向原）ふるき石ずゑものこれり。榎葉井はいづこぞとたづぬれど、知れる人もなし。難波堀江の跡とて、ちひさき池のあるは、いともうけがたし。かの佛の御像をすてられしは、津國の堀江にこそありけれ。さてこの里は飛鳥川の西のそひにて、川のむかひはすなはち雷村なり。いにしへ飛鳥神社のたゝせ給ひて、神なみ山とも、神岳ともいひしは、この所ぞかし。今來て見るに、さいふべき山有りて、（萬葉十三）神なみ山の帶にせるあすかの川、とよめるにもよくかなひて、川はやがて此山のすそをなん流るゝ。このわたりまでも、飛鳥と古いひしは、もとよりのことにて、今も飛鳥の里よりわづかに五六町なるをや。又人まろが歌にも、（萬葉三）雷之上とよめれば、今の里の名もふるき事なり。いはせの森なゝどいひしも、このわたりなりけんかし。又豐浦を通り、西ざまに行きて、和田

もだしぬ—其儘にして止めたり

うきたる—根據なき

はいづれの寺なりけん。すべてかうやうのところ〴〵も、後にふるき書どもかむがへあはせなば、その跡とさだかに知らるゝやうもありぬべけれど、さまで物せんも、旅路の日記にはくだ〳〵しければ、例のもだしぬ。又此里のたかむらの中に、神代のふることをいひつたへたる石あり。そのほとり七八尺ばかりは、垣なゝどゆひめぐらしたり。その中に生ふる竹に、あやしき事ありとてかたりしは、後に書むと思ひてわすれき。又里を西へいでて、道のほとりの田の中に、湯篠やぶとて、一丈ばかりの所に、細き竹一むらおひたるもあり。さて西へ行きて、別所村といふに、大宮と申す御社あり。高市社はこれなりと聞きおきしかば、たづねて詣づ。香山のすこし西なり。今はこの北なる高殿村といふ所の神なりとぞ。この御社の西の方にも池あり、持統天皇の藤原の宮と申せしは、このわたりにぞありけん。今高殿なゝどいふ里の名も、さるよしにやあらん。さて埴安の池も、かならずこのわたりと聞えたるを、今たえ〴〵に所々つゞきて、低き岡のいくつもあるは、かの堤のくづれのこりたるなゝどにはあらじや。ふるき歌どもにも見えて、名高き堤なりしはや。又その西に、ひざつき山とて、かたつかたには松しげくおひて、ひきく長き岡あり。これにも神代のふる事とて、かたりし事あれど、例のうきたる

とりよろふ—萬葉長歌に見えたる語、缺くる事なく足り整へる意

よみ—書

近く見えたるなゞど、すべて〳〵よも山のながめまで、

　とりよろふあめのかぐ山萬代に見ともあかめやあめのかぐ山

といふを聞きて、なぞけふの歌のふるめかしきはと、人のとがめけるに、

　いにしへの深きこゝろを尋ねずば見るかひあらじ天のかぐ山

といへばとがめずなりぬ。今はとて立ちなんとするにも、

　わかるとも天のかぐ山ふみ見つゝ心はつねにおもひおこせん

なゞどいひつゝ、せめてわかれを慰めて、この度は南の方へくだりゆく。坂のなからに、上の宮とて、ちひさきほこらあり。麓はやがて南浦といふ里にて、日向寺といふ寺もあり。その堂のまへにも、大きなる松のかれたるあり。このわたりに下の宮といふもあり。すべて此山には、いにしへ名ある神の御社ども、かれこれとおはせる、今はいづれかいづれとも、しる人なければ、此ほこらどもなゞども、もしさるなごりにもやと、目とまる。此里の東のはしに、御鏡の池といふあり。埴安の池はこれなりといひし人もあれど、信じがたし。此池のほとりに、香來山の文殊とて寺あり。かく山村はこの東にありとぞ。又この南浦村の三町ばかり南に、金堂講堂のあととて、石ずゑ三十六のこれりとぞ。こ

寺―金剛山寺、役行者開基といふ

文字のこゑ―漢字の音

さへられて―さまたげられて

けり。まづ西のかたにうねび山、物にもつゞかず、一つはなれてちかう見ゆ。こゝより一里ありといへど、さばかりもへだたらじとぞ思ふ。なほ西には金剛山、いとたかくはるかに見ゆ。その北にならびて、同じほどなる山の、いさゝか低きをなん、葛城山と今はいふなれど、いにしへはこのふたつながら葛城山にて有りけんを、金剛山とは寺たててのちにぞつけつらん。すべて山もなにも、後の世にはからめきたる名をのみいひならひて、古のは失せゆきつゝ、人もしらず成りぬるこそくちをしけれ。されど又いにしへの名どもの、寺にしものこれるが多きは、いとよしかし。又その北にやゝくだたりて、二がみ山、峯ふたつならびて見ゆ。これも今は二上がだけと、例の文字のこゑにいひなせるこそにくけれ。伊駒山も雲はかくさず、「きのふけふ雲の立ちまひかくろふは花のはやしをうしとなるべし」いぬるの方にかすかに見えたるに、吉野の山のみぞ、ちかきにさへられて、こゝよりは見えぬ。さては東も南も、此國の山々、のこるなく見やられたり。又くになかは、疊を敷きならべたらんやうに平にて、其里かの森なンど、むら／＼わかれて見えたる、北のかたは殊にはる／＼と、末は霞にまがひて、めも及ばず、山のはも見えぬに、耳成山のみぞ、西北といはんには北によりて、物うちおきたらんやうに、たゞひとつ、これはうねび山よりもすこし

しもと―和名抄に「麓 和名之毛止、木田技也」
つゆ―露かも

さしあたりては―今眼前に眺めては

博士―先生

もの二三人、そのあたりあさりありくも見ゆ。山はすべてわか木のしもとはらにて、年ふりたる木なンどは、をさ〳〵見えず。峯はうちはれて、つゆさはる所もなく、いづかたもいづかたもいとよく見わたさるゝ中に、東の方は畝尾長くつゞきて、木立もしげければ、すこしさはりて、異方のやうにはあらず。この峯に、龍王の社とて小きほこらのあるまへに、いと大きなる松の木の、かれて朽のこれるが立てる下に、しばしやすみて、かれいひなンど食ひつゝ、よもの山々里々をうち見やりたるけしき、いはんかたなくおもしろきに、「のぼりたち國見をすれば國原は」なンど（萬葉一長歌「とりよろふ天のかぐ山のぼりたち國見をすれば國原はけぶり立ちこめうなばらは」云々）聲をかしうて、わかき人々のうち誦したる、さしあたりては、まして古しのばしく、見ぬ世のおもかげさへ立ち添ふこゝちして、

もゝしきの大宮人の遊びけむかぐ山見ればいにしへおもほゆ

かの酒のみゐたりし里人どもも、こゝに來て、國はいづくにかおはするなンど問ひつゝ、此山のふることどもなンどかたりいづる、いとゆかしくて、耳とゞめてきけば、大かたこゝによしなき神代のことのみにて、さもと覺ゆるふしもまじらねば、なほざりに聞きすごしぬ。されど見えわたるところ〴〵を、そこかしこと問ひきくには、よき博士なり

うたてある—荒くして祟ある

心もとなかりつる—そこに來るのが待遠なりし

なごり—跡

過ぎて、膳夫村の南のかたはらに、森のあるを問へば、荒神の社といふ。北にむかへり。むかしは南むきなりしを、いとうたてある神にて、御前を馬にのりて通るものあれば、かならずおちなンどせしほどに、わづらはしくて、北むきには爲し奉りしとぞ。此社は今物する道のすこし北にて、此わたり天の香具山の北のふもとなり。此山いとちひさくひくき山なれど、古より名はいみじう高く聞えて、天の下にしらぬものなく、まして古をしのぶともがらは、書見るたびにも思ひおこせつゝ、年ごろゆかしう思ひわたりし所なりければ、此度はいかでとくのぼりて見んと、心もとなかりつるを、いとうれしくて、

いつしかと思ひかけしを久かたの天のかぐ山けふぞわけいる

みな人も同じ心にいそぎのぼる。坂路にかゝりて左のかたに、一町ばかりの池あり。いにしへの埴安の池思ひ出でらる。されどそのなごりなンどいふべき所のさまにはあらず。いとしもたかゝらぬ山は、程もなくのぼりはてゝ、峯にやゝたひらなる所もあるに、此ちかきあたりのものどもと見ゆる五六人、芝の上にまとゐして、酒なンどのみをるは、わざとのぼりて見る人も又有りけり。さては蕨とるとて、里のむすめ、おんな（媼）なンどやうの

いかゞあらん—當にはならね

芹つみし昔の人—綺語抄に、賤しき男懸ひたる姫の芹食むをかいまみ、常に之を食みて心を慰めし事見え、童蒙抄に「芹つみし昔の人もわが如や心に物の叶はざりけん」の歌あり、枕草紙に「我身に芹つみしなど覺ゆることこそなけれ」といへり。

天皇ををさめ奉りし所、みやこ塚といひて、これもそのつかのうへに、大きなる岩の角、すこしあらはれて見え侍るなりとなん語りける。この御陵ども事はいかゞあらん、坂田も島もふるき所にしあれば、里の名ゆかしく覺ゆ。さてもとこし道を、文殊の寺までかへりて、あべの里をとほりて、田の中にあべの仲まろのつか、又家の跡といふもあれど、もはら信じがたし。大かた此わたりに、仲まろ晴明の事をいふは、ところの名によりてつくりし事とぞ聞ゆる。又せりつみの后の七つ井とて、いさゝかなるたまり水の、ところ／＼にあるは、芹つみし昔の人といふ事のあるにつけていふにや。こゝろえぬ事どもなり。それより戒重といふ所にいづ。こゝは、八木といふ所より櫻井へかよふ大道なり。横内なンどいふ里を過ぎて、大福村なンどいふも、右の方にみゆ。すこし行きて、ちまたなる所に、地藏の堂あり。たゞざまにゆけば八木、北へわかるれば三輪へゆく道、南は吉備村にて、香山の方へゆく道なりけり。今はその道につきて、吉備村にいる。村のなか道のかたはらに塚ありて、五輪の石たてるは、吉備大臣のはかとぞいふ。石はふるくも見えず。又死人をやく所とてあるに、鳥居のたてるがあやしくて問へば、此國はなべてさなりといへり。村をはなれ、南へすこし行きて、西にをれて、池尻村といふを

安倍晴明—平安朝道長時代にありし有名なる占術者

うきたる—無根

あがれる代—古代

たかき—高貴な

おほとこ—棺のそとがこひをいふ

はふれ—散ばり

のかぎり—だけ

けたる跡のあるより、手をさし入れてさぐりみれば、物もさはらず、内はすべて空になん有りける。こはむかし安倍晴明が、たから物どもを藏めおきつるを、後にぬす人の入りて、角をうちかきてぬすみ取りしなりと、里人はいふなれど、こは例のうきたる事にて、誠はかの文殊の寺なる二つのいはやも、これも、みないと〳〵あがれる代に、たかき人をはふりし墓とこそ思はるれ。そのゆゑは、すべていはやの樣御陵のかまへにて、中なる石の屋は、すなはちおほとこと思はるればなり。そのかまへ、いと大きなる石を方につくり、なかをゑりぬきて、棺ををさめて、上におほへる石を、屋根のさまにはつくれる物なり。さて土輪なンどいひけんたぐひの物は、此めぐりにぞ立てけんを、こゝらの世々を經ては、さる物もみなはふれ失せ、又ぬすびとなンどの、大とこをもうちかきて、中にをさめし物どもは、ぬすみもていにけるなるべし。かの寺なる二つは、その大とこも、みなかけうせて、たゞ外なる岩構へのかぎり、殘れるものならんかし。さてこゝのいはやのついでに、しるべする男が語りけるは、岡より五六町たつみのかたに、島の庄といふ所には、推古天皇の御陵とて、つかのうへに岩屋あり。内は疊八枚ばかりしかるゝ廣さに侍る。又岡より十町ばかり、これも同じ方に、坂田村と申すには、用明

やつり川—「水底絶えず行く水のつぎてぞ戀ふるこの年頃は」

をさ／＼—殆んど

しりへ—後方

へ出づる道に、上やとり村といふあり。文字には八釣とかけば、顯宗天皇の近飛鳥八釣宮の所なるべし。里のまへに細谷川のながるゝは、萬葉十二やつり川にこそ。やゝ行きてひろき道にいづ。こは飛鳥のかたより、たゞに安倍へかよふ道なり。山田村、このわたりに栢の木に栗のなる山ありとぞ。荻田村といふを過ぎて、安倍にいたる。岡より一里なり。此里におはする文殊は、世に名高き佛なり。その寺に岩屋のある、内は高さもひろさも七尺ばかりにて、奥へは三丈四五尺ばかりもあらんか。又奥院といふにも、同じさまなるいはやの、二丈ばかりの深さなるありて、内に清水もあり。さて此國をはなれて、四五町ばかりおくの高き所に又岩屋あり。こゝはをさ／＼見にくる人もなき所なれば、道しるべするものだに、さだかには知らで、そのあたりの田つくる男などに問ひ聞きつつ行きて見るに、これも同じ程の大きさにかまへたるいはやなる、三丈四五尺が程入りて、おくは上も横もやゝ廣きに、石して屋のかたちにつくりたる物、中にたてり。そは高さも横も六尺ばかり、奥へは九尺ばかり有りて、屋根などのかたも造りたるが、明さし入りて、ほのかに見ゆ。うしろのかたは、めぐりて見れども、くらくて見えわかず。さて口とおぼしき所は、前にもしりへにもなきを、うしろの方のすみに、一尺あまり缺

そは―岨、山腹の道

うけられず―信じ難し

萬葉の歌―卷一「藤原宮御井歌」と題する長歌

に、さる名は有るなるべし。さて此御山の南のそはを、二町ばかりゆきて、道のほとりの森の中に、大きなる石どもをたてめぐらしたる所あり。中はすこしくぼまりて、廣さ一丈あまり、横は六七尺も有りぬべし。こは誠の飛鳥井の跡なンどにはあらぬにや。世に鎌足の大臣の生れ給ひしところぞといふなるは、いとうけられず。此やがてちかき所に、大原寺といふ有り。藤原寺ともいふよし。ちひさき寺なれど、いときよらに造りみがきて、めにたつ所なれば、入りて見るに、堂なンどはなくて、たゞきらゝかに作りたる御社あり。大原明神と申して、かのかまたりの大臣の御母をまつれる神なりとかや。又此寺は、持統天皇の藤原の宮の跡なるよし、こゝの法師はかたりけり。大原の里は、此南の山ぞひに、まぢかく見えたり。藤原といふも、すなはちこの大原の事なりといふは、さも有りぬべし。されど持統天皇の藤原の宮と申すは、こゝにあらず。そは香山のあたりなりし事、萬葉の歌どもにて知られたり。かねてはこの大原といふ里、かぐ山のちかき所に有りて、藤原の宮もそこならんとこそ思ひしか。今來て見れば、かぐ山とは遙かにへだたりて、思ひしにたがへれば、いと〳〵おほつかなけれど、なほ藤原の里は、この大原の事にて、宮の藤原は別にかの香山のあたりにぞありけんかし。これより安倍

丈六―一丈六尺

あせて―褪れて

門なンどもなくて、たゞかりそめなる堂に、大佛と申して、大きなる佛のおはするは、丈六の釋迦にて、すなはちいにしへの本尊なりといふ。げにいとふるめかしく、たふとく見ゆ。かたへに聖徳太子のみかたもおはすれど、これはいと近き世の物と見ゆ。又いにしへの堂の瓦とてあるを見れば、三四寸ばかりのあつさにて、げにいとふるし。此寺のあたりの田のあぜに、入鹿が塚とて、五輪なる石、半はうづもれてたてり。されどさばかり古き物とはみえず。飛鳥の神社は、里の東の高き岡のうへに立たせ給ふ。麓なる鳥居のもとに、飛鳥井の跡とて、水はあせて、たゞ其かたのみ殘れる、これも誠しからずこそ。石の階をのぼりて、御社は四座、今はひとつかり殿におはします。此御社、もとは甘南備山といふに立せ給ひしを、淳和のみかどの御世、天長六年に神のさとし給ひしまゝに、鳥形山といふにうつし奉り給へりしよし、日本後紀に見えたり。されば古、飛鳥の神なみ山とも、神岳ともいひしは、こゝの事にはあらず。そこはこゝより五六町西のかたに、今いかづち村といふ所なり。かくて今の御社は、かの鳥形山といふ所なり。さればこそ、かの飛鳥寺をも鳥形山とはなづけけめ。今もわづかに一町ばかりへだたれば、いにしへ寺の大きなりけん時は、今すこし近くて、此御山のほとり迄も有りつる故

其詠歌に「けさ見れば露岡寺の庭のこけさながら瑠璃の光なるらん」

たゞざまに―まつすぐに

きて、右の方の高きところへ、一町ばかりのぼりたる野中に、あやしき大石あり。長さ一丈二三尺、よこはひろき所七尺ばかりにて、硯をおきたらんやうして、いと平なる、中の程にまろに長くゑりたる所あり。五六寸ばかりのふかさにて、庭もたひらなり。又そのかしらといふべきかたに、同じさまに小さくまろにゑりたる所三つある、中なるは中に大きにて、はしなる二つは、又ちひさし。さてそのかしらの方の中にゑりたる所より、下ざまへほそき溝を三すぢゑりたる、中なるは、かの廣くゑりたる所へ、たゞざまにつゞきて、又石の下といふべき方のはし迄とほり、はしなる二すぢは、なゝめにさがりて、石の左右のはしへ通り、又そのはしなるみぞに、おの〳〵枝ありて、左右にちひさくゑれる所へもかよはしたり。かくて大かたの石のなりは、四すみいづこも角なくまろにて、かしらのかた廣く、下はやゝ細れり。そも〳〵此石、いづれの世にいかなるよしにて斯くつくれるにか、いと心得がたき物のさまなり。里人はむかしの長者の酒ぶねといひつたへて、このわたりの畠の名をも、やがてさかぶねといふとかや。此石むかしは猶大きなりしを、高取の城きづきしをりに、かたはらをば多くかきとりもていにしとぞ。すこし行きて、飛鳥の里にいたる。飛鳥寺は里のかたはしに、わづかにのこりて、

よろしきほどなる―かなり立派なる
おひずり―巡禮の羽織る白き袖なし樣のもの
こみて―雜沓して
ゆすりみちて―聲のおびたゞしき形容
露をかでら―岡寺は三十三番第七の札所にて、

て、道より程もちかきぞかし。つぎに橘寺にまうづ。川原寺よりむかひに見えて、一町ばかりなり。此寺は今もやゝひろくて、よろしきほどなる堂もありて、古の石ずゑはた殘れり。橘といふ里も、やがて此寺のほとりなり。日くれぬれば、岡の里にとまる。かの寺よりちかし。此あひだに土橋をわたせる川あり。飛鳥川はこれなりとかや。いまの岡といふ所は、すなはち日本紀に飛鳥岡とある所にや。さらば岡本宮も（舒明天皇、皇極天皇、齊明天皇三代の京）その傍とあれば、遠からじとぞ思ふ。又清御原宮はその南とあゝなれば、その跡もちかきあたりなるべし。

十一日、朝まだきにやどりをたちて、岡寺にまうづ。里より三町ばかり東のやまへのほりて、二王門あり。額に龍蓋寺とあり。この門よりまへの道の左のかたに、八幡とて社もあり。さて御堂には、觀音の寺々をがみめぐるものども、おひずりとかいふあやしげなる物をうち著たる、男女おいたるわかき、數もしらずまうでこみて、すきまもなくゐなみて、御詠歌とかやいふ歌を、大聲どもしほりあげつゝ、一堂のうちゆすりみちてこたふなるは、いとみゝかしかましく、大かた何事ともわかぬ中に、露をかでらの庭の苔なゝどいふこと、ほの〴〵きこゆ。又岡の里にかへり、三四町ばかりも北へはなれ行

宗永、誠所と號す伊藤仁齋に學び後江戸にて教授の業に從へり

おぼろげならず―なみ一通りならず

たゞに―まつすぐに

さながらも―原形のまゝそつくりも

所を、こまかにめぐりありきて、かゝる事もいと〳〵ねんごろに尋ね奉りし事、此わたりの里人も、年おいたるはおぼえゐて、そのをりしか〴〵など語るなり。げにかの書には、何のあとはその里のそこにあり、その村に今は何といふ塚なん、その御陵なるなどやうに、いともさだかに記したるは、なにをしるしに定めつるにか。むげにちかき事なれど、その世まではなほ里人もよくわきまへしり居て、かたりけるにや。又おしあてにも定めつるにやと、うたがはしき事はた多かるを、此度かくこゝかしこと、かつがつも尋ぬるに、とかくさだかならぬにつけては、さまでも詳かには、いかにして尋ねえけんと、いさをの程はおぼろげならず思ひしらる。此みさゞきよりすこし行きて、程なく廣き道にいでぬ。こは土佐より岡へたゞにゆく道なりけり。やゝゆきて左のかたに見ゆる里を、川原村といふ。このさとの東のはしに、弘福寺とてちひさき寺あり。いにしへの川原寺にて、がらんの石ずゑ、今も堂のあたりには、さながらも、又まへの田の中などにちりぼひても、あまた殘れり。その中に、もろこしより渡りまうでこし瑪瑙石なりとて、眞白に透くやうなるが一つ、堂のわきなる屋のかべの下に、なかばかくれて見ゆるは、げにめづらしきいしずゑなり。尋ねてみるべし。里人は觀音堂といふ所に

ふたのやうにおほひたり。そのうしろにつゞきたる所、一丈四五尺がほど、やゝたひらにて、中のくほみたるは、ちかき世に高取の城きづくとて、大石どもほりとりしあとなりといへり。みだれたる世に、物の心をしらぬ、むくつけきものゝふのしわざとはいひながら、いともかしこき帝の御陵をしも、さやうにほりちらし奉りけん事の心うさよ。そこに藁火などたきすてたる跡の見ゆるは、あやしき乞兒なんどのすみかにしつるなめり、と思ひしもしるく、やがて此御山の下に、さるものども多くあつまりゐたりき。これを武烈天皇の御陵なりと申すなるは、所たがひて覺えし故に、そのわたりにて、これかれに問ふに、みなさいへるは、いかなることにか。すべてこの檜隈に御陵と申すは、延喜の式にのせられたるを見るに、檜隈坂合陵は、磯城島宮に天下しろしめしゝ天皇、同じき大内の陵は飛鳥淨御原宮に　御　宇　天皇、又藤原の宮に　御　宇　天皇、同じき安古の岡の陵は、同じ宮にあめの下しろしめしゝ文武天皇にておはします。このうち、いづれかいづれにおはしますらん、今はさだかにわきまへがたし。こゝなるを武烈としも申すやうなるひが事しあれば、里人のつたへも、もはらたのみがたくこそ。さいつころ並河のなにがしが、五畿内志といふ書をつくるとて、公にも申して、その國々所

高取の城―高取城はもと南北爭亂の際吉野方の防備を起せしに初まり、後越智、本多兩氏を經て寛永十七年植村氏之に代り世襲して近時に至れり

あやしき―賤しき

思ひしもしるく―思ひしが果してその通り.

いづれか云々―どれがどの天皇の御陵なりやといふ事は今明確に知り難し

ひが事し―僻事さへ、しは強辭

並河のなにがし―名は永、字は

聞きわたる—永らく話に聞き居たる、わたるは川の縁語

かまへ—構へ、作り

きたがへたるふしなゝども有るべければ、ひがことどももまじりたらんを、後によくかむがへたゞさむことも、物うくうるさくて、さておきつるを、後みん人、みだりなりとな怪みそ。これはかならずこゝにいふべき事にもあらねど、思ひ出でつるまゝになん。

檜隈川といふべき川は見えざれば、

聞きわたるひの隈川はたえぬともしばし尋ねよ跡をだに見ん

古今集に「さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見ん」

人々もろ共に、こゝかしことたづねありきけるに、たゞいささかなる流れは、一つ二つ見ゆれど、これなんそれと、たしかには里人もしらずなん有りける。さてをしへしまゝに、平田といふ里にいたりて、御陵をたづぬるに、野中の小高き所に、松三もと四本おひて、かたつ方くづれたるやうなる塚あり。これなん文武天皇のみさゞきと申す。そこを過ぎて、又野口といふ里にて、こゝかしこ尋ねつゝ、田のあぜづたひの道をたどり行きて、一つの御陵ある所にいたる。こはやゝ高くのぼる岡のうへに、いと大きなる石してかまへたる所あり。みなみむきに、横もたても二尺あまりなる口のあるより、のぞきて見れば、窟のやうにて、内はせばく、下は土にうづもれて、わづかにはひ入るばかりなり。うへにはたてよこ一丈あまりの平なる大石を、物の

檜隈廬入野宮—ヒノクマノイホリノノミヤと訓ず

やがて—即ち

なにがし—某、それがし

むげに—全く

こればかり—自分の寺の名だけ

あはつけさには—淡々しく情趣なき心にしては

りそめなる庵のある、あるじのほうしに、この塔の事たづねしかば、宣化天皇の都のあとに（檜隈廬入野宮　宣化天皇の都）寺たてられて、いみじき伽藍の有りつるが、やけたりし跡なり、このあたりにその瓦ども、今もかけのこりて多くあり、と教ふるにつきて見れば、げに此庵のまへにも、道のほとりにも、すべてふる瓦のかけたる、数もしらず、つちにまじりてあるを、一つ二つひろひとりて見れば、いづれも布目なんどつきて、古代のものと見えたり。此庵はやがてかの伽藍のなごりといへば、そも今は何寺と申すぞと問へば、だうくわうじといふよしこたふ。もじはいかにかき侍ると又とへば、此ほうしかしらうちふりて、なにがし物かゝねば、そのもじまでは知り侍らずといふにぞ、なほ問はまほしき事も、ゆかしささめつる心地して、とはずなりぬ。わがすむ寺の名のもじだにしらぬほうしも、世には有る物なりけり。むげに物かゝずとも、こればかりはしか〳〵と人に聞きおきても知りをれかし。さばかりのあはつけさには、いかで古の事をしも、ほの〴〵聞きおきてかたりけむとをかし。後に異里人にきけば、道の光とかくよしなり。されどそれもいかゞあらん、知らずかし。大かた此日記よ、たゞ物の心もしらぬ里人なんどのいふを、きけるまゝにしるせる事し多ければ、かたりひがめたる事もありぬべし、又聞

城―高取城、下文四五六頁の頭註參照

かけて―一體に

めらひをるに、やゝ待つ程へて、人々はかへり來て、有りつるやうかたるを聞けば、誠にあやしき物なりけり。こゝより右へ谷の道を十町ばかりくだり行きて、清水谷といふ里にいづ。此里は、國中よりあしはらたうげといふを越えて吉野へいる道なり。一町ばかりはなれてあなたは、土佐といふ所、町屋つゞけり。高取山の麓にて、この町なかより、山のうへなる城ちかく見あげらる。大かた此城は、たかき山の峯なれば、いづかたよりもよく見ゆる所なりけり。檜隈は此わたりと、かねて聞きしかば、たづねて行く。この土佐のまちをはなるゝ所より、右へ三町ばかり細道をゆきて、かの里なり。例の翁たづねいでて、いにしへの事ども問へど、さだかには知らず。都のあととは聞きつたふるよし、又御陵どもは、この近き平田野口なンどいふ里にあンなる、いにしへはそのわたりかけて、ひのくまとなんいひしと語る。さて里の神の社なりとて、森のあるつゞきなる所に、高さ二丈ばかりなる、十三重の石の塔の、いとふるきが立てる、めぐりを見れば、いと大きなる石ずゑありて、塔なンどの跡と見ゆ。ちかきころ、この石をおのが庭にすゑんとて、あるものの掘らせつれど、あまりに大きにて、掘りかねてやみぬる、程もなく疾みふして死にけるは、このたゝりにて有りけりとなんいふなる。その前にか

そばきり―蕎麥切、普通に所謂そば也

たむけをかぎり―峠がおしまひ

なべたる―竝べたる

あやしき―不思議の

國へかよふ道と、北よりよし野へいる道とのちまたなる驛なり。六田より一里といへどちかゝりき。こゝにてそばきりといふ物をくふ。家もうつは物も、いとあやしくきたなけなれど、椎の葉よりはと思ひなぐさめて食ひつ。（萬葉に「家にあればけにもるいひを草枕旅にしあればしひの葉にもる」）これよりつほ坂の觀音にまうでんとす。たひらなる道をやゝゆきて、右の方に分れて、山ぞひの道にいり、畑屋なんどいふ里を過ぎて、のぼりゆく山路より、吉野の里も山々も、よくかへり見らるゝ所あり。

かへりみるよそめも今をかぎりにて又もわかるゝみ吉野の里

よしの郡も此たむけをかぎりなりとぞ。くだる方に成りては、大和の國中よく見わたさる。比叡の山、愛宕山なンども見ゆる所なりといへど、今は霞ふかくて、さる遠きところ迄は見えず。さてくだりたる所、やがて壺坂寺なり。此寺は高取山の南の谷陰にて、土田より來し道は五十町とかや。二王門有りて、普門觀とかける額かゝれり。觀音のおはする堂には、南法華寺とぞある。三層の塔も堂のむかひにたてり。奥の院といふはやや深く入る所にて、佛のみかたどもあまたつくりなべたるあやしき岩ありとて、みな人はまうづるを、われはいさゝか心地なやましくて、え物せず、まへなる茶屋に入りてた

つき—築き
かたへ—一部分
かゝる—掛る、斯る

れば、かの義經なンどとはやうかはりて、あはれと見る。又塔尾の御陵と申して、此堂のうしろの山へすこしのぼりて、木深き蔭に、かの帝のみさゝぎのあるに、まうでて見奉れば、こだかくつきたるをかの、木どもおひしげり、つくりめぐらしたる石の御垣も、かたへはうちゆがみ、かけそこなはれなンど、さびしく物あはれなる所なり。そのかみ新待賢門院のまうでさせ給ひて、

新葉集　九重の玉のうてなも夢なれや苔の下にし君を思へば

とよませ給へる御歌なンど、思ひ出で奉りて、

苔の露かゝるみ山のしたにても玉のうてなはわすれしもせじ

と思ひやり奉るも、いとかしこし。本のやどりにかへり、しばしやすみて、此度は六田の方へくだらんとて出でたつ。里をはなれて、山の背をゆき〳〵て、坂をくだりはてたる所なん、六田の里なりける。今は里人はむだとぞいふめる。よし野の川づらにて、古柳をおほくよめりける所なれば、今もありやと見まはせど、

有りとしもみえぬむつだの川柳春のかすみやへだてはつらん

舟さし渡りて、かなたの川べをやゝくだりゆきて、土田といふ所は、上市の方よりきの

菅笠日記 下の巻

十日、けふは吉野をたつ。きのふのかへるさに、如意輪寺にまうづべかりけるを、日暮れて殘しおきしかば、けさ殊更にまうづ。此寺は、勝手の社のまへより谷へくだりて、むかひの山なり。谷川の橋をわたりて、入りもて行く道、さくら多し。寺は山の腹に、いと物ふりてたてる、堂のかたはらに寶藏あり、藏王權現の御像をすゑたり。この御づしのとびらのうらなる繪は、巨勢金岡がかけるといふを見るに、げにいと古く見どころある物なりけり。それに後醍醐のみかどの、御みづからこの繪の心をつくりて書かせ給へる御詩とておしたり。わきにこのみかどの御像もおはします。これはた御てづからきざませ給へりとぞ。其外かゝせ給へる物、又御手ならし給ひし御硯やなにやと、とうでて見せたり。又楠正行が軍にいでたつとき、矢のさきして塔のとびらに、

かへらじとかねて思へば梓弓なきかずにいる名をぞとゞむる

といふ歌をゑりおきたるも、此くらに殘れり。みかどの御ためにまめやかなりける人な

巨勢金岡―清和、陽成、光孝、宇多、醍醐五朝に仕へし有名なる畫工

とうでて―取出して

まめやか―忠誠

をしけたれて―壓迫せられて
まことや―さういへばほんに
流れての世―後世、水の緣語

此木をきる事をいみじくいましむるは、神のをしみ給ふ故なりとこそいふなるに、今は杉をのみいづこにも多くうゑ生したるが、たちのびて茂りゆくほどに、櫻はその影におしけたれて、おほくは枯れもし、又さらぬもかじけ行きて、枝くちをれなゝどのみすめるを、神はいかゞおぼすらん。まろが心には、かく杉植うるこそ、伐るよりも櫻のためはこゝろうきわざとおぼゆれ。かくて暮れはてゝぞ、やどりにかへりつきぬる。まことや大瀧の歌、かへるさの道にて、からうじてひねり出でたる。

流れての世には絶えけるみ吉野の瀧のみやこにのこる瀧つ瀬

宮瀧のも、

いにしへの跡はふりにし宮たきに里の名しのぶ袖ぞぬれける

おぼろけならねば―なみ大抵の事ならねば

象の小川―「昔見し象の小川を今見ればよゝにさやけくなりにけるかも」

象山―「み吉野の象山際の木ぬれにはこゝだも騒ぐ鳥の聲かも」

かのにくき名―前に一目千本の事を評して、「たれてふをこの者かさる賤しげなる名はつけけん」といへり

も、すべて三度迄とぶなりとぞ。大かた此わざは、こゝらの年をへて、ならひうる事にて、おほろけならねば、一里のうちにも、わづかに一二人ならではし得るものなしとぞ、このをのこはいひける。これよりかへるさの道のほどは、一里にたらずとはいふなれど、日も山の端ちかく成りぬれば、今はとてやどりにおもむく。川邊をはなれて、左の谷陰にいり、四五町もゆきて、道のほとりに、櫻木の宮と申すあり。御前なる谷川の橋をわたりてまうづ。さて川邊をのぼり、喜佐谷村といふを過ぎて、山路にかゝる。すこしのぼりて、高瀧といふ瀧あり。よろしき程の瀧なるを、一つゞきにはあらで、つぎ〳〵にきざまれ落つる樣、又いとおもしろし。象の小川といふは、此瀧のながれにて、今過來し道より、かの櫻木の宮のまへを經て、大川におつる川なり。象山といふも、此わたりの事なるべし。櫻いと多かる、今はなべて青葉なるなかに、おのづから散りのこれるも所々に見ゆ。大かた此よし野のうちにも、ことに櫻の多きは、かのにくき名つきたる所、さては此わたりと見えたり。瀧を右の方に見つゝ、なほ坂をのぼり行きて、あなたへ下る道は、なだらかなり。其ほどにも櫻はあまた見ゆ。されどいにしへにくらべば、いづこもいづこも、今はこよなう少なくなりたらんとぞ思はるゝ。さるは此山のならひとて、

岩のかぎり—岩ばかり

ならはぬ—斯る事にはなれざる

うるはしく—端然と

ひたつゞきにつゞきて、大かた川原は岩のかぎりなり。此岩どもにつきても、例の義經がふる事とて、何くれとえもいはぬことどもを語りなせども、うるさくて聞きもとゞめず。此わたり川のさま、さるいはほの間にせまりて、水はいと深かれど、のどやかに流れて、早瀬にはあらず。さて岩より岩へわたせる橋、三丈ばかりもあらんか。宮瀧の柴橋といひて、柴してあみたる、渡ればゆるぎて、ならはぬ心地にはあやふし。又こゝにもかの岩飛するもの有り。かたらひ來てとばす。とぶ所はやがて此橋の下なる、こなたかなた岸はみな岩にて、屛風などを立てたらんやうにて、水ぎはより二丈四五尺ばかりの高さなるを、かなたの岩岸の上よりとぶを、こなたの岸より見るなりけり。その男、まづ著物を皆ぬぎて、はだかに成りて、手をばたれて、ひしと脇につけて、目をふたぎ、うるはしく立ちたるまゝにて、水の中へつぶりととびいるさま、めづらしき物から、いとおそろしくて、まづ見る人の心ぞきえ入りぬべき。此比は水高ければ、深さも二丈五尺ばかり有りとなん。しばし有りて、やゝ下へうかびいでて、きしの岩にとりかゝりてあがりきて、苦しげなるけしきもなく、なほ飛びてんやといへど、おそろしさに、又はとばせで止みぬ。さるは始のごとして、うしろざまに向ても、かしらを下にさかさまに

こよなく—非常に

けし—故

あはひなる—間なる

だりこし山路にかゝる。今朝はさしもあらざりしを、のぼるはこよなく苦しくて、同じ道とも思はれず。さてのぼりはてて、右につきたる道へわかれて、又しものぼる山は、佛が峯とかいひて、いみじうけはしき坂なり。さてくだる道はなだらかなれど、あしつかれたるけにや、猶いとくるしくて、茶屋の有る所にしばしとてやすむ。こゝにて鹿鹽神社の御事をたづねたれば、そは樫尾西河大瀧と、三村の神にて、西河と樫尾とのあはひなる山中に、今は大藏明神と申しておはするよし語る。この道よりはほど遠しと聞けば、えまうでず、なほ坂路をくだりゆくほど、右のかたを見おろせば、山のこしをめぐりて、吉野川ながれたり。國栖夏箕なンども川べにそひて、こゝよりはちかく見ゆ。さて下りはてたる所の里を樋口といひ、そのむかひの山本なる里は宮瀧にて、よし野の川は此ふた里のあひだをなん流れたる。西河よりこゝ迄は一里あまりも有りぬべし。かの國栖なつみなンどは、此すこし川上なり。しもは上市へも程ちかしとぞ。此わたりも、いにしへ御かり宮ありて、おはしましつゝ、逍遙し給ひし所なるべし。宮瀧といふ里の名も、さるよしにやあらん。こゝの川邊のいはほ、又いとあやしく珍かなり。かの大瀧のあたりなるは、なべて稜なくなだらかなるを、こゝのはかどありて、みなするどきが、

さかしらにぞ―生六ケ敷誤りて
かよひ―似通ひ

萬よりもあやしきは―何よりも不思議なる事には

さりげ―そんな樣子

を、後に淸明とはさかしらにぞいひなしつらん。いま瀧のさまを見るに、上はほそくて、やう〳〵に下ざまのひろきは、蟬のかたちにいとよう似たるに、鳴音はたかれが聲にかよひたゝなれば、さも名づけつべきわざぞかし。又その蟬のたきは、これにはあらず異瀧なりともいへど、里人はすなはち此瀧のことなりとぞいひける。そはとまれかくまれ、かの蟲の蜻蜓は、ひが事なるべし。かげろふの小野とは、かの蜻蛉野をあやまりたる名にて、もとよりさる所はなきうへに、そのあきつ野はた、此わたりにはあらじ物をや。さて此瀧のながれを音無川といひて、萬よりもあやしきは、月毎のはじめ半月は、上津瀬に水といふものなく、後の半月は、又下津瀬に水なしとかや。さて上より來る水は、いづちへいかにして流れゆくぞといふに、石のはざま砂の下なゝどへ、やう〳〵にしみ入りつゝ、なくなりては、遙かに下にいたりて、又やう〳〵にわき出でつゝ、流れゆくなりといふは、さる事も有りぬべけれど、ころをしも違へで、上つせと下つ瀬と、たがひにしかかはらん事は、猶いとあやしきわざなりかし。されど今はたゞ世の常の川にて、さりげも見えぬは、此ごろ水のおほき故なりとぞいふ。すなはちかの板橋のかゝれるも此川にて、しもはにじかうの里中をなん流れ行くめる。かの里にかへりて、また今朝く

とよみて――鳴動して

たりたれば、上下を見あげ見おろす。上はせばきが、やう〳〵に一丈あまりにもひろごりておちゆく。末はこなたかなたよりみ山木どもおひかゝりて、をぐらき谷の底なれば、穴なゝどをのぞくやうなる所へ、山もとよみておちたぎるけしき、けおそろしく、そゞろさむし。かたはらに小さき堂のたてる前より、岩根をよぢ、つたかづらにかゝりつゝ、すこしのぼりて、瀧のうへを見れば、水はなほ上より落來て、岩淵に入る。この淵二丈ばかりのわたりにて、程はせばけれど、深く見ゆ。瀧はやがてこの淵の水のあまりて落つるなりけり。こゝに里人の岩飛といふ事して見するよし、かねて聞きしかば、さきに西河にてさるわざする者やあると尋ねしかど、此ごろは長雨のなごりにて、水いとおほければ、あやふしとてするものなかりき。さるはこのかたへなるいはのうへより、淵の底へとび入りて、うかび出づる事をして、錢をとるなるを、水おほくて、はげしき時には、浮みいづるきはに、もしおしながされて、銚子の口にかゝりぬれば、命堪へずとなんいふなる。銚子の口とは、淵より瀧へおちんとする際をいふなりけり。そも〳〵此瀧を清明が瀧としもいふは、蜻蛉の小野によりたる名にて、蟲の蜻螟ならんと云ひし人もあれど、さにはあらじかし。里人は蟬の瀧ともいふなれば、はじめはなべてさいひけむ

て
瀧のみやこ―「幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作」と題する歌の末句「岩ばしる瀧のみやこは見れど飽かぬかも」
蜻蛉―原本凡てあきづと濁りたれど、慣例に從ひて清音に改む
瀧のうへの御舟の山―「に居る雲の常に有らむと我が思はなくに」萬葉
かへり見る方―後方
なべて―凡て

の宮と申して、みかどのしば／＼おはしましゝところ、柿本人麿主の、御供にさぶらひて、瀧のみやことよみけるも、この大瀧によれる所なりけんかし。そのをり／＼の歌どもにあはせて思ふに、蜻蛉の小野なンどいひしも、また瀧のうへの御舟の山も、かならず此わたりなりけんこと、うたがひもなければ、今もさいふべきさましたる山やあると、心をつけて見まはすに、この川づらより左の、すこしかへり見る方に、さもいひつべき山あり。船にしていはんには、前後たひらに長くて、中央ばかりに一きは高く、屋形といひつべき所ある山なり。これやさならんとは思ひよれど、いかにあらん、おぼつかなし。そは瀧の所よりは、すこし下ざまにしあンなれば、たきのうへといへるには聊かたがへるやうにもあれど、なべて此わたりならん山は、などかさいはざらん。古忍ばん人、また／＼もこゝに來まさば、必ずこゝろみ給へ。やがて此里の上なる山ぞかし。かくて又里の中を通りて、西河のかたへかへり、此度は、さきの板橋をわたりて、石の階を一町ばかりものぼり、こしげき谷かげを分け入りて、所謂せいめいが瀧を見る。これはかの大瀧とはやうかはりて、しげ山の岩のつらより、十丈ばかりが程、ひた下りに落つる瀧なり。この見る所は、かたはらよりさし出でたる岸のうへにて、近う瀧の半にあ

いかで―何卒
物か―物かな、かは詠歎の助辭
とぢめ―終り
いたはりもなく―何の苦もなく
盃のながれ云々―盃を廻す方は忘れ果てたり
平瀬―平かなる流れ
引きはへ―引き延べ
ふたがりて―塞りて
うちかたぶきつ―頭をひねつ

來むいかだもがな、いかで此早瀬くだすさま見むといひつゝ、かれいひくひ、酒なンどのみをる程に、みなかみはるかにこの筏くだしくる物か。やう〳〵ちかづき來て、此瀧のきはになりぬれば、のりたる者どもは、左右の岩の上にとびうつりて、先なる一人、綱をひかへて、みな流れにそひてはしりゆくに、筏の早く下るさまは、矢なンどのゆくやうなり。さて岩のとぢめの所にて、人ども皆筏へかへる。そこは殊に水の勢はげしくて、ほどばしりあがる浪にゆられて、うきしづむ丸木の上へ、いたはりもなくとびうつる樣、いと〳〵あやふき物から、めづらかにおもしろきこと、たぐひなし。みな人此筏に見入りて、盃のながれはいづちならんとも問はずなりぬ。さて此筏、瀧をはなれて平瀬にくだりたるをよく見れば、一丈二三尺ばかりの長さなる榑を、三つ四つづつくみならべて、つぎ〳〵に十六つなぎつゞけたるは、いと〳〵長く引きはへたり。人は四人なんのれりける。川瀬は此瀧の下にて、あなたへをれて、むかひの山あひに流れいる。右も左も物をつき立てたるやうなる岩岸の下に、さるいかだをしも下しゆくけしき、たゞ繪に書けらんやうに見ゆ。かゝる所にては、中々に口ふたがりて、歌もいでこぬを、わざとうちかたぶきつゝ、思ひめぐらさんも、さまあしければ、さてやみぬ。いにしへ吉野

ことなる事―格別面白き事
貝原翁―益軒
せめて―努めて
なか〳〵おろかに―却って實景に疎く

ゆかしくて、足もやすめがてら立ち入りて見るに、一ひらづつすき上げては、重ね〳〵するさま、いとめづらかにて、たつ事もわすれつ。さて右の方へ三町ばかり里をはなれ行きて、谷川にわたせる板橋のもとよりわかれて、左へいさゝかのぼり、山のかひをあなたへうち越ゆれば、すなはち大瀧村なり。此間は五町ばかりもあらんか。此大瀧の里のあなたのはづれは、すなはちよし野川の川のべにて、瀧といふもやがて川づらなる家のまへより見やらるゝ早瀬にて、上より直ざまにおつる瀧にはあらず。此瀧は、遠くてはことなる事もなし、ちかくよりて見よと、貝原翁がをしへおきつる事もあれば、岩のうへをとかく傳ひゆきて、せめてまぢかくのぞき見るに、そのわたりすべてえもいはず大きなるいはほどもの、こゝら立ちかさなれるあひだを、さしも大きなる川水の、はしりおつるさま、岩にふれてくだけあがる白波のけしきなど、おもしろしともおそろしとも、いはんは中々おろかに成りぬべし。むかしは筏も此瀬を直にくだしけるを、あまりに水のはげしくて、度毎にくだしわづらひし故に、いはほのやゝなだらかなる所をきり通して、今はかしこをなんくだすなると、をしふる方を見れば、あなたざまに一みち分れておちゆく水、げにこなたの瀬よりすこしはのどやかに見えたり。あはれ今くだし

うかぶ―思ひ立さるゝ意、水の縁語

物に似ず―喩ふべき物なし

花見つゝすみし昔のあととへばこけの清水にうかぶおもかげ

このちかきころ、或法師ちみとせばかりこゝにこもりゐけるとぞ。京にて高野槇といふ木を、こゝの人はたゞにまきとぞいふ。これを思へば、いにしへ檜のほかにまきといひしは、この木なるべし。これはこゝに必ずいふべき事にもあらねど、此わたりの山に、此木のおほかるにつきて、人のたづねけるに、いらへつることばを聞きて、ふと思ひよれるゆゑ、筆のついでにかきつけつるぞ。本の道を安禪寺のまへの茶屋迄かへりて、御嶽へまうづる道にかゝり、三町あまりも來つらんと思ふ所に、しるべのいしぶみたてる道を、左へ分れゆく。みたけの道へは、これより女はのぼらずとぞ。かの見えし青根が峯は、すなはち此山なりけり。すこし行きて、東のかたの谷の底はるかに、夏箕の里見ゆ。ゆき〳〵て又東北の谷に見くださるゝ里をとへば、國栖とぞいふ。此わたり、うちはれたる山の背をつたひ行くほど、いと遠し。さてくだる坂路のけはしさ、物に似ず。されど上るやうに、くるしくあらず。此坂をくだりはつれば、西河の里なり。安禪寺より一里といひしかど、いとゝほく覺えき。山の中につゝまれて、いづかたも見はるかす所もなき里なるを、家毎に紙をすきて、門におほくほせる、こはいまだ見ぬわざなれば、

まねびいふ―案内者が陳べ立つる

高根より程もはるかの谷かけて立ちつゞきたる花のしら雲

なほ行きて、大きなるあけの鳥居あり。二の鳥居又修行門ともなづくとかや。金御峯神社（神名式）、いまは金精大明神と申して、此山しろしめす神なりとぞ。このおまへをすこし左へ下りて、けぬけの塔とて、ふるめかしき塔のあるは、むかし源義經がかたきに追れて、この中にかくれたりしを、さがし出されたるとき、屋根をけはなちて逃げいにける跡などいひて見せけれど、ずべてさることはゆかしからねば、目とゞめても見ずなりぬ。なほ深く分け入りて、茶屋あるところにいたる。その前を、右へいさゝかくだれば、安禪寺なり。藏王堂、大阪の右大臣（秀頼公）のたて給へるとぞ。東の方に木しげき山は、青根が峯なりとて、此だうのまへよりむかひに近く見えたり。二三町おくに、何とかや事事しき名つきたる堂あり。そのうしろへ、木の下道を二丁ばかりくだりたる谷陰に、苔清水とて、岩間より水のしたゞり落つる所あり、西行法師が歌とて、まねびいふをきくに、さらにかの法師が口つきにあらず、むげにいやしきえせ歌なり。なほ一町ばかり分け行きて、かのすめりし跡といふは、すこしたひらなる所にて、一丈ばかりなるかりそめのいほり今もあり。櫻もこゝかしこに見ゆ。

むつかしき—むさくるしき

道しるべ—案内者

ひたつゞきの—ひとつゞきて切れ目なき

はれたる—廣々としたる

り作りあげて、三階の屋になんありければ、いづれの家も見わたしの景色よし。さるは容やどし、又物賣りなんどするは、上の屋にて、道より直に入る所なり。次に家人のすまひは中の屋にて、その下なれば、戸口より階をくだりてなん入るめる。今一つはしを下りて、又下なる屋は、ゆかなんどもなくて、たゞ土のうへに物うちおきなんど、みだりがはしくむつかしきに、湯あむる所、厠なんどは、そこにしもあんなれば、日ひとひあるき困じたる旅人の足は、八重山越えゆくこゝちして、此階ども上り下るなん、いとくるしかりける。されど所のさまのいひしらず面白きには、さる事は物のかずならず。花ちりなばと、まつらん人をもうち忘れて、（新古今西行「吉野山やがていでじと思ふ身を花散りなばと人やまつらん」）やがてとゞまりても住みなばやとさへぞ思はるゝ。今日は瀧ども見にものせんとて、例の道しるべさきにたて、かれいひ酒なんどもたせて出でたつ。かの竹林院なんどいふわたりまでは、いかめしき僧坊どもなんど、立ちまじりて、ひたつゞきの町屋なるを、末はやうやうまばらになりもてゆきて、子守のみやしろより奥は、人の家もなく、たゞ杉のおひしげりたる中をぞ分け行く。さてやゝうちはれたる所にいでて、左にはるかの谷となづけたるところ、またいと櫻おほくて盛なり。

これ―常方

餌袋―旅行などの時食物を入れて携ふるもの

茶すこし―傍註に折句とある如く、此五文字を各句の頭に置きて前の契あれやの歌をよめる也

このめもはる―木の芽も盛に萌え出づる春の義古來の慣用語也

はひわたる程―非常に近く見ゆる形容

さりげなく―何の變りたる樣子もなく

りければ、

みよし野の山より深きなさけをや花のかへさの家づとにせん

これよりは、餌袋に有りあひたるまゝに、伊勢の川上茶といふをやるとて、つゝみたる紙に、

契あれや山路分け來てすぎがての木の下蔭にしばしあひしも

（折句）茶すこしとは、聞知りなんや。このほか人々の歌どもも、これかれ書きつけてやりつ。

京にいそぐ事あれば、明日はとくたちて上るべきよし、いひおこせたるに、

たびごろも袖こそぬるれよしの川花よりはやき人のわかれに

九日、とくおき出でて、はしちかく見いだせば、空はちりばかりもくもりなく、はれ渡りたるに、朝日のはなやかにさし出でたるほど、木々のこのめもはるふかき山々のけしき、霞だにけさはかゝらで、物あざやかに見わたされたり。吉水院はたゞはひわたる程にて、ゆきかふ人のけはひ迄、まぢかくめのまへに見ゆ。大かた此里は、かの水分のみねより片下りにつゞきて、細き尾の上になん有めれば、左右に立ちなみたる民の家居ども、前よりこそさりげなくたゞ世の常の屋のさまに見いれらるれ、うしろはみな谷よ

具したる―引連れたるが
さだすぎにたれど云々―としまではあれどまんざらの女とは見えず
かたらひつきて―話しかけて親しくなり
よさり―夜分

も花見にきつるよし、から歌このむ人にて、名もからめきたる、なにとかやわすれにき。その妻は、やまと言の葉をなん物するよし、それも具したる、やゝさだすぎにたれど、けしうはあらず見ゆ。さるはをとつ日、いがの名張にやすめる所にて見し人なりけり。きのふたむのみねにも詣であひつるを、けふ又竹林るんなる所にもゆきあひて、かの男なん、小泉にかたらひつきて、詩つくりかはしなゞどしつゝ、おのれらが事をも、くはしう問ひ聞きなゞどせしとかや。さる事しらざりしを、又しもこゝに來あひたる、しか〴〵のよしいひ出でて、物語などする程に、春の日も入相のかねの音して、心あわたゞしければ、立ちわかるゝこの本にて、

今は又きみがことばの花も見んよし野の山はわけくらしけり

ゆくさきは明日のついでと殘し置きて、けふはこれより宿に歸りぬ。そのよさり、かの尾張人の宿より、うたふたつかきて、見せおこせたる、かのさだすぎ人のなるべし。けふの花のおもしろかりしよしありければ、かへし、

よしの山ひる見し花のおもかげもにほひをそへてかすむ月影

かくよめるは、かの歌ぬしの名、霞月とありければぞかし。くだものなゞどそへておく

一つ—同じ事
花のたより—花見の序で
さりとも—同じく心淺き樣なりとはいひながらも
心もとなく—氣掛りに
さなりけり—それに違ひなし
ふるき歌—「神さぶる磐根こゞしきみ吉野の水分山を見れば悲しも」

ぎこしに、三十年を經て、今年又四十三にてかくまうでつるも、契あさからず、年ごろの本意かなひつるこゝちして、いとうれしきにも、おちそふなみだは一つなり。そも花のたよりは、すこし心あさきやうなれど、異事のついでならんよりは、さりとも神もおぼしゆるして、うけ引き給ふらんと、猶たのもしくこそ。かゝる深きよしあれば、此神の御事は、ことによそならず覺え奉りて、としごろ書を見るにも、萬に心をつけて尋ね奉りしに、吉野の水分神社と申せしぞ、この御事ならんと、はやく思ひよりたりしを、續日本紀に水分峯神ともあるは、まことにさいふべき所にやと、地のさまも見さだめまほしく、としごろ心もとなく思ひしを、今來て見れば、げにこのわたりの山の峯にて、いづこよりも高く見ゆる所なれば、うたがひもなくさなりけりと思ひなりぬ。ふるき歌に（萬葉七）、みくまり山とよめるも、この所なるを、その文字をみづわけとひがよみして、こと所の山にしもさる名をおふせたるは、例のいかにぞや。又みくまりをよこなまりて、中頃には、御子守の神と申し（六帖枕冊子）、今はたゞに子守と申して、子孫の榮えをいのる神と成り給へり。さて我父も、こゝにはいのり給ひしなりけり。この御門のまへに櫻おほかる、いま盛なり。木の下なる茶屋に立ちよりて休めるに、尾張の國の人とて、これ

さるは—その譯は
ねぎごと—願掛け
たゞならずなり—姙娠し
かつ〴〵—まづ以て
さて—如此にして、さうした結果として
かへりまうし—報賽、お禮參り
のたまひわたり—永らくの間仰せ暮し
その人—母
そのかみ—其當時の意に神を掛く
むげに—非常に
おろか—おろそか
ふりはへても—わざ〳〵も

奉る。さるはむかし我父なりける人、子もたらぬ事を深くなげき給ひて、はる〴〵とこの神にしもねぎごとし給ひける、しるしありて、程もなく母なりし人たゞならずなり給ひしかば、かつ〴〵願かなひぬと、いみじう悦びて、同じくは男子えさせ給へとなん、いよ〳〵深くねんじ奉り給ひける。われはさてうまれつる身ぞかし。十三になりなば、かならずみづから率てまうでて、かへりまうしはせさせんと、のたまひわたりつる物を、今すこしえ堪へ給はで、わが十一といふになん、父はうせ給ひぬると、母なんものの序毎にはのたまひいでて、涙おとし給ひし。かくて其としにも成りしかば、父の願はたさせんとて、かひ〴〵しう出でたゝせて、まうでさせ給ひしを、今はその人さへなくなり給ひにしかば、さながら夢のやうに、

　思ひ出づるそのかみ垣にたむけして麻よりしげくちる涙かな

袖もしぼりあへずなん。かの度はむげに稚くて、まだ何事も覺えぬほどなりしを、やうやうひととなりて、物の心もわきまへしるにつけては、むかしの物語を聞きて、神の御めぐみの、おろかならざりし事をし思へば、心にかけて、朝ごとには此方にむきてをがみつゝ、又ふりはへてもまうでまほしく思ひわたりし事なれど、何くれとまぎれつゝ過

霞のまより見えたるなゝど、すべてえもいはず、おもしろき所のさまなり。

花とのみ思ひ入りぬる吉野山よものながめもたぐひやはある

時うつる迄ぞ見をる。ゆくさきなほ見どころはおほきに、日くれぬべし、とおどろかせど、耳にも聞きいれず。くれなばなげの（古今集「いざけふは春の山べにまじりなん暮れなばなげの花の蔭かは」）なゝどうち誦して、

あかなくに一よはねなんみよし野の竹のはやしの花のこの本

かくはいへど、ゆくさきの所々もさすがにゆかしければ、そこにたてる櫻の枝に、この歌はむすびおきて立ちぬ。さてゆく道のほとりに、何するにかあらん、櫻のやどり木といふ物を多くほしたるを見て、

うらやまし我もこひしき花の枝をいかに契りて宿りそめけむ

ゆき〳〵て、聲ちがへの觀音なゝどいふあり。道のゆくてに、布引の櫻とて、なみ立てる所もあゝなれど、今は染めかへて、青葉のかげにしあれば、旅ごろもたちとまりても見ず。かの吉水院より見おこせし、瀧櫻、くもゐざくらも、此近きあたりなりけり。世尊寺、ふるめかしき寺にて、大きなるふるき鐘なゝど有り。なほのぼりて、藏王堂より十八町といふに、子守の神まします。此御社は、よろづの所よりも心いれてしづかに拜み

おどろかせど—はたの者が注意すれど

旅ごろも—たちに係る枕詞

そのかみ—其當時
こゝろにくき—奥ゆかしき
こと所—外の所
物より—何よりも
はるに—遙かに

くだれる谷なり。されどかのよし水院よりは、やゝ程ひろし。この所は、かりそめながら五十年あまりの春秋をへて、三代の帝（後醍醐天皇、後村上天皇、後亀山天皇）のすませ給ひし、御行宮の跡なりと申すはいかゞあらん、事たがへるやうなれど、をり〳〵おはしましなゝどせし所にてはありぬべし。今は堂も何もつくりあらためて、そのかみの名残ならねど、尚めでたく、こゝろにくきさま、こと所には似ず。此寺を出でて、もとの道に歸り、櫻本坊なゝどいふを見て、勝手の社は、この近き年燒けぬるよし、いまはたゞいさゝかなるかりやにおはしますを、をがみて過ぎ行く。此やしろのとなりに、袖振山とて、こだかき所にちひさき森の有りしも、同じをりにやけたりとぞ。御影山といふもこの續きにて、木しげきもりなり。竹林院、堂のまへにめづらしき竹あり。一つふし毎に、四方に枝さし出でたり。うしろの方におもしろき作庭あり。そこよりすこし高き所へあがりて、よもの山々見わたしたるけしきよ、まづ北の方にざわう堂、町屋の末につゞきて、物より高く目にかゝれり。なほ遠くは、多武の山、高とり山、それにつゞきてうしとらのかたに、龍門の嶽なゝど見ゆ。東と西とは、谷のあなたにまぢかき山々あひつゞきて、かの子守の御社の山は、南に高く見あげられ、いぬゐのかたに、葛城山はいと〳〵はるに

ふりにき―時代が立ちて古くなりたり
御像―藏王の像也、藏王は金剛藏王の略、金峯山に現はれ、役の行者の感見せる菩薩にて、釋迦如來の變化身といふ
けぢめ―差別
前のかぎり―前の方だけすつかり

此花を御覽じて、

新葉集　こゝにても雲ゐのさくら咲きにけり唯かりそめの宿と思ふに

とよませ給ひしも、

世々をへてむかひの山の花の名に殘るくもゐの跡はふりにき

さて藏王堂にまうづ。御とばりかゝげさせて見奉れば、いとも〳〵大きなる御像の、いかれるみ顏して、かた御足さゝげて、いみじうおそろしきさまして立ち給へる、三はしらおはする、たゞ同じ御やうにて、けぢめ見え給はず。堂はみなみむきにて、たても横も十丈あまりありとぞ。作りざまいとふるく見ゆ。まへに櫻を四隅にうゑたる所あり。四本櫻といふとかや。そのかたつかたに、くろがねのいと大きなる物の、鍋などいふものの樣して、かけそこなはれたるが、うちおかれたるを、何ぞと問へば、昔塔の九輪のやけ落ちたるが、かくて殘るなりといふ。口のわたり六七尺ばかりと見ゆ。その塔の大きなりけんほど、おしはかられぬ。堂のかたはらより西へ、石の階をすこしくだれば、すなはち實城寺なり。本尊のひだりのかたに後醍醐天皇、右に後村上院の御位牌と申す物たゝせ給へり。此寺も、前のかぎり藏王堂のかたにつゞきて、後も左も右も、みなやゝ

こけれど―口に掛けて申上げんは畏多けれど
さゝやかなる―小さき
煙ふきつゝ―煙草をすひながら
ひまなく―すきまなく
あくよ―飽く時

れど、

　いにしへの心をくみてよし水のふかきあはれに袖はぬれけり

かのみかどの御像、後村上帝の、御てづからきざみ奉り給へるとて、おはしますを拜み奉るにも、

　あはれ君この吉水にうつり來てのこる御影を見るもかしこし

又そのかみのふるき御たから物ども、あまたありて見けれど、ことゞゝくはえしも覺えず。此寺の内に、さゝやかなる屋の、まへうちはれて、見わたしのけしきいとよきがあるに、たち入りて、煙ふきつゝ見わたせば、子守の御社の山、むかひに高く見やられて、其山にも、かたへの谷なゝどにも、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は青葉がちなるぞ、かへすがへすくちをしき。さはいへどおくある花は、さかりと見ゆるも猶あまたにて、

　みよし野の花は日數もかぎりなし青葉のおくも猶さかりにて

瀧櫻といふも、かしこにありと教ふ。

　咲きにほふ花のよそめはたちよりて見るにもまさる瀧の白糸

くるゝ迄見るとも、あくよあるまじうこそ。又雲る櫻といふもあり。後醍醐のみかどの、

瀧のうへの御船の山―「に居る雲の常にあらむとて我が思はなくに」
なき名―虚名
吉水院―又キッスヰヰンとも讀めり、其草創は大寶年中役小角山上修行の時姑息の庵室たりといふ
たゝずまひ―様子
かけまくはかし

えたり。萬葉に「瀧のうへの御船の山」されどその山は、瀧のうへのとよみたれば、此ちかき所なンどにあるべくも覺えず。これも例のなき名なるべし。こゝはよし野の里にいる口にて、これよりは、町屋たちつゞけり。二三町ばかりゆきて、石の階をすこしのぼりたる所に、いと大きなる銅の鳥居たてり。發心門としるせる額は、弘法大師の手なりとぞ。又二町ばかりありて、石の階のうへに、二王のたてる門あり。此わたりにも櫻有りて、さかりなるもおほく見ゆ。かのみふね山、こゝよりは向にちかく見えたり。まづやどりをとらんとて、藏王堂にはまゐらですぎゆく。堂はあなたにむかひたれば、かの門はうしろの方にぞたてりける。そのあたりに、きよげなる家たづねて、宿をさだめて、まづしばしうちやすみ、物くひなンどして、けふ明日の事どもかたらひ、道しるべすべきものやとひて、まづちかき所々を見めぐらんとて出でたつ。この借りつるやどは、箱やの何がしとかいふものの家にて、吉水院ちかき所なりければ、まづまうづ。この院は、道より左へいさゝか下りて、又すこしのぼる所、はなれたる一ッの岡にて、めぐりは谷なり。後醍醐のみかどの、しばしがほどおはしましゝ所とて、有りしまゝにのこれるを、入りてみれば、げに物ふりたる殿のうちのたゝずまひ、よのつねの所とは見えず。かけまくはかしこけ

たれてふをこの者―何といふ馬鹿者
心づきなし―氣にくはず
わが國人―伊勢の人
うかゞひつけて云々―ねらひて出掛けたるだけありて
かけても思ひよらざりし―全く思ひも掛けざりし
けにや―故にやあらん
うつろひ―うつりの延、散り
ぬるさ―暖かさ
かねては―前以てよりは

ふなる。げにさも有りぬべく見ゆる所なるを、たれてふをこの者か、さるいやしげなる名はつけけんと、いと心づきなし。花は大かた盛すぎて、今は散り殘りたる梢どもぞ、むらぎえたる雪のおもかげして、所々に見えたる。そも〳〵此山の花は、春立てる日より、六十五日にあたるころほひなん、いづれの年もさかりなると、世にはいふめれど、又わが國人の、きて見つるどもに問ひしには、かのあたりのさかりの程を見て、こゝに物すれば、よき程ぞと、これもかれもいひしまゝに、其程うかゞひつけて、いで立ちしもしるく、道すがらとひつゝ來しにも、よきほどならんと、多くはいひつる中に、まだしからんとこそ、いひし人も有りしか、かくさかり過ぎたらんとは、かけても思ひよらざりしぞかし。なほこゝにてくはしく問ひきけば、この二月のつごもりがた、いとあたゝかなりしけにや、例の年のほどよりも、今年はいとはやく咲出で侍りつるを、いにし三日四日ばかりや、さかりとはまうすべかりけん、そも雨しげく、風ふきなゞどせし程に、まことに盛と申しつべきころも侍らぬ樣にてなん、うつろひ侍りにし、と語るをきけば、其とし〴〵の寒さぬるさにしたがひて、おそくも疾くもあることにて、かならずそのほどと、かねては此里人もえ定めぬわざにぞ有りける。うしとらの方に、御舟山といふ山見

中におつる―「わかれてもいもせの山の中におつる吉野の川のよしや世の中」

なべて―凡て、概して

かぎり―頂上

よし野川、ひまもなくうかべるいかだをおし分けて、こなたのきしに船さしよす。夕暮ならねば、渡守は早ともいはねど、（いせ物語に「渡し守はや船にのれ日もくれぬといふに、云々」）みないそぎ乗りぬ。いもせ山はいづれぞとゝへば、河上のかたにながれをへだてゝ、あひむかひてまぢかく見ゆる山を、東なるは妹山、にしなるは背山とをしふ。されどまことに此名をおへる山は、きの國にありて、うたがひもなきを、（古今戀五）かの中におつるよし野の川に思ひおぼれて、必ずこゝとさだめしは、世のすきもののしわざなるべし。されど、

妹背山なき名もよしやよしの川よに流れてはそれとこそ見め

あなたの岸は、飯貝といふ里なり。さて川べにそひつゝ、すこし西に行きて、丹治といふ所より、よし野の山口にかゝる。やゝ深く入りもてゆきて、杉むらの中に、四手掛の明神と申すがおはするは、（神名帳）吉野の山口神社なンどにあらぬにや。されどさいふばかりの社とも見えず、此森より下にも上にも、此わたりなべて櫻のいとおほかる中を、のぼりのぼりて、登りはてたる所、六田のかたより登る道とのゆきあひにて、茶屋あり。しばしやすむ。此屋は、過ぎこし坂路より、いと高く見やられし所なり。こゝより見わたすところを、一目千本とかいひて、大かたよし野のうちにも、櫻のおほかるかぎりとぞい

本の國―紀伊
あやしき―不思議なる
あかり―あかるくなり
心ゆく―氣が進む

こへ一里あまり有りて、又上市へは一里侍ればといふ。此瀧かねて見まほしく思ひしゆゑ、けふ多武の峯より物せんと思ひしを、道しるべせし者の、さてはいたく遠くて、道もけはしきよしいひしかば、えまからざりしを、今きくが如くば、かしこより物せんには、ましてさばかり遠くもあらじ物をと、いとくちをし。されどよしの花さかり過ぎぬなゝどいふを聞くに、いとゞ心のいそがるれば、明日ゆきて見んといふ人もなし。そもこの龍門といふところは、いせより高見山こえて、吉野へも木の國へも物する道なる。瀧は道より八町ばかり入るところに有りとなん。いとあやしきたきにて、日のいみじう旱るをり、雨をこふわざするに、かならずしるし有りて、鰻ののぼれば、やがて雨はふるなりとぞ。

立ちよらでよそに聞きつゝ過ぐるかな心にかけし瀧の白いと

八日、きのふ初瀬の後雨ふらで、よもの山のはもやう〳〵あかりゆきつゝ、多武のみねのあたりにては、なごりもなく晴れたりしを、今日も亦いとよき日にて、吉野もちかづきぬれば、けさはいとゞ足かろく、みな人の心ゆく道なればにや、ほどもなく上市に出でぬ。此あひだは、一里とこそいひしか、いと近くて、半里にだにも足らじとぞ覺ゆる。

なから—中ば

南淵の細川山—「に立つまゆみ弓づかまくまで人にしらえじ」

手向—峠

かつ〴〵—纔に

夢路や云々—道が四方に分れたる事を意味せる巷の里に宿りし故故郷へ通ふ夢も迷ふならんとの戯

にくだりゆけば、飛鳥の岡へ五十町の道とかや。その道のなからばかりに、細川といふ里の有りと聞くは、南淵の細川山とよめる所にやあらん。又そこに此たむの山よりながれゆく川もあるにや。萬葉九に「うちたをりたむの山霧しげきかも細川の瀬に浪のさわげる」たづね見まほしけれどえ行かず。吉野へは、この門のもとより左にをれて別れゆく。はるかに山路をのぼりゆきて、手向に茶屋あり。やまとの國中見えわたる所なり。なほ同じやうなる山路をゆき〳〵て、又たむけにいたる。こゝよりぞよし野の山々、雲居はるかにみやられて、あけくれ心にかゝりし花の白雲、かつ〴〵みつけたる、いとうれし。さてくだりゆく谷かげ、いはゞしる山川のけしき、世ばなれていさぎよし。たむのみねより一里半といふに、瀧の畑といふ山里あり、誠に瀧川のほとりなり。又山ひとつこえての谷陰にて、岡より上市へこゆる道とゆきあふ。今日は吉野までいきつくべく思ひまうけしかど、とかくせしほどに、春の日もいととく暮れぬれば、千俣といふ山ぶところなる里にとまりぬ。こよひは、

ふる里に通ふ夢路やたどらましちまたの里に旅寐しつれば

此宿にて、龍門のたきのあない尋ねしに、あるじのかたりけるは、こゝより上市へ直にゆけば一里なるを、かしこへめぐりては二里あまりぞ侍らん、そはまづ此さとよりかし

たみ―並び

みあらか―宮殿

山中に―山中たるにも係らず

一やうならず―同一種類のみにてなく

のぼりもて行くまゝに、いと木ぶかき谷陰になりて、ひだり右より谷川のおちあふ所にいたる。瀧つ瀬のけしきいとおもしろし。そこの橋をわたれば、すなはち茶屋あり。こここはや多武の峯の口なりとぞいふ。さて二三町がほど、家たちつゞきて、又うるはしき橋あるを渡り、すこし行きて惣門にいる。左右に僧坊どもこゝらなみたてり。御廟の御前はやゝうちはれて、山のはらに南むきにたち給へる、いといかめしく、きら〳〵しくつくりみがかれたる有様、めもかゞやくばかりなり。十三重の塔、又惣社なゝど申すも、西の方に立ち給へり。すべて此所、みあらかのあたりはさらにもいはず、僧坊のかたはら、道のくま〳〵まで、さる山中に、おち葉のひとつだになく、いと〳〵きらゝかに、はききよめたる事、又たぐひあらじと見ゆ。櫻は今をさかりにて、こゝもかしこも白たへに咲きみちたる花の梢、ところがらはましておもしろき事いはんかたなし。さるはみなうつしうゑたる木どもにやあらん、一やうならず、くさ〳〵見ゆ。そも此山に、かばかり花のおほかる事、かねては聞かざりきかし。

　谷ふかく分けいるたむの山ざくらかひある花の色を見るかな

鳥居のたてるまへを、西ざまにゆきこして、あなたにも又惣門あり。そのまへを直ざま

ふるき歌—萬葉「くら橋の山を高みかよごもりに出で來る月の光ともしき」
そ—それ
をさめ—葬り
御—御陵の略
やうある—何か由緒のある
はかられて—推測し得て

羽山といひつる山、こゝより東にあたりて、いと高く見ゆ。倉梯山は、（萬葉）ふるき歌どもによめるを見るに、いとたかき山と聞えたれば、これやそならんと覺ゆ。さてこの里を出でて、五丁ばかり行きて、土橋をわたりて右の方に下居といふ村あり。その上の山に、こだかき森の見ゆるは、用明天皇ををさめ奉りし所なりと、かの家あるじの教へしは、所たがひて覺ゆれど、猶あるやう有るべしと思ひて、のぼりて見るに、その森の中に、春日の社とてほこらあり。そのすこしくだる所に、山寺の有りけるに立ちよりて、たづぬれば、あるじのほうし、かれは御陵にあらず、用明の御は、長門村といふ所にこそあなれといふに、さりや、かの教へしは、はやくひが事なりけりと、思ひさだめぬ。されど此森も、やうある所とは見えたり。ふるき書に、（文徳實錄九 又神名帳）椋橋下居神とあるも、此里にこそおはすらめ。かの土橋を渡りては、くら橋川を左になして、ながれにそひつゝのぼりゆく。此川はたむの峯よりいでて、くらはしの里中を北へながれ行く川なり。此道に、櫻井のかたよりはじまりて、たむのみね迄、瓔珞經の五十二位といふ事を、一町ごとにわかちて、ゐりしるしたる石ぶみ立ちたり。すべてかよふものは、來しかた行くさきのほどはかられて、道ゆくたよりとなるわざなり。なほ同じ川ぎしを、やうやうに

倉椅柴垣の宮—大和磯城郡櫻井村大字下居（オリヰ）
このおはしける道—あの通つて御出でになりたる道
ごまだう—護摩堂、護摩は眞言にて火をたきてなす祈禱の法
むげに—非常に
つま—資料

にて、例の都のあとを尋ぬれば、崇峻天皇の都倉椅（クラハシノ）柴垣の宮あるじ、この里中に金福寺と申す寺ぞて、その御跡には侍る、このおはしける道なる物をとて、子にやあらん、十二三ばかりなるわらはをいだして、案内せさす。これにつきて行きて見る。二三町ばかりも立ちかへりて、かの寺といひしは、門なゝどもなくて、いとかりそめなる庵になんありける。猶くはしきこともきかまほしくて、あるじの法師をとぶらひしかど、なきほどなりけり。まへにごまだうとて、かやぶきなるちひさき堂のあるを、さしのぞきて見れば、不動尊のわきに、聖徳太子崇峻天皇とならべ奉りて、かきつけたる物たてり。されどむげに今やうのさまにて、さらに古しのぶつまとなりぬべきものにはあらず。くらはし川は、やがて此いほりのうしろをながれたり。すべてこゝは山も川も名ある所ぞかし。さきの家にかへりて、また御陵倉梯（クラハシノ）岡ノ陵崇峻天皇はいづこぞととへば、そは忍坂と申す村より五丁ばかりたつみの方に、みさゞき山とて木繁き森の侍るなかに、洞の三つ侍る、ふかさは五六十間も侍るべし、こゝより程はとほけれど、そのあたり迄も、なほくらはしの地には侍るなりといふ。いでその忍坂は、來しかたの道なりしに、さる事もしらで過ぎこし事よと、いとくちをし。こゝよりは二十町あまりもありといへば、え行かでやみぬ。かの音

おふせ—附け

忍坂—和名抄「恩坂」に作る。萬葉の長歌に「こもりくの長谷の山青ばたの忍坂の山は走出のよろしき山」といへり

し見えたる、今はとかま山となんいふとぞ。まことの高圓山は、春日にこそあンなるを、こゝにしも其名をおふせつるは、もとよりとかまといふが似たるによりてか、又は高圓山とつけたるを、里人のもてひがめて、かくはいふか、いづれならん。脇本、慈恩寺なンどいふ里をゆく。こゝよりはかのとかま山、ちかくてよく見ゆ。此里の末を追分とかいひて、三輪の方へも、櫻井のかたへもゆく道のちまたなり。今はそのすこしこなたより、左へわかれ、橋をわたりて、多武の峯へゆく細道にかゝる。此橋ははつせ川のながれにわたせる橋なりけり。そも〳〵たむの峯へは、櫻井よりゆくぞ正しき道にはありける。とび村なンどいふも、その道なりといふなれば、それも名ある所にて、たづね見まほしき事どもはあれど、みな人ほどの遠きをものうがりて、今の道には物するなりけり。東の方にいと高き山を問へば、音羽山とぞいふ。音羽の里といふも、その麓にありとぞ。忍坂村は道の左の山あひにて、やがて此むらのかたはらを通りゆく。こゝもふるき歌に見え、神の御社なンどおはすなれど、ゆくさきいそがれて、さまではえ尋ねず。なほ山のそはづたひを行き〳〵て、倉梯の里にいでぬ。こゝはかのさくら井よりくる道なりけり。はつせより來し程は二里、たむの峯までは、なほ一里ありとぞ。しばしやすめる家

檜原―巻向山の麓を檜原といひ、萬葉の歌に「巻向の檜原に立てる春霞」など詠めり、下文の意は檜の原とて有名なれど其檜は見えずと也

きよく―すつかり

よろしき程なる―かなりの高さ

るぞかし。此わたりすべてこぶかきしげ山にて、杉などは多かれど、名にたてる檜原は見えず。此川かみには檜の木もおほしと、しるべのをのこはいへりき。かくて此山のうちめぐりはてゝ、里におりける程、又雨ふり出でぬ。けふは朝より空はれそめて、やうやう青雲も見ゆるばかりに成りしかば、今はふようなゝめりとて、とく取りをさめつる雨衣、又しもにはかにとりいでてうち著るもいとわびし。

ぬぎつれど又もふりきて雨ごろもかへす〲も袖ぬらすかな

されどしばしにて、里はなるゝ程は、きよく止みぬ。あなたよりいる口に、いと大きなる赤の鳥居たてり。さて出ではなれて、出雲村、黒崎村などいふ所をすぐ。此あたりは朝倉宮、列木宮（長谷の朝倉の宮は雄略天皇の都　長谷の列木の宮は武烈天皇の都）などの跡と聞きこしかば、いとゆかし。此くろざきに、家毎に饅頭といふ物をつくりてうるなれば、かのふりにし宮どもの事たづねがてら、あるじの年おいたるがみゆる家見つけて、食ひに立ちよる。さてくひつゝ問ふに、ふるき都のあととばかりは承はれど、これなんそれとたしかに傳へたるしるしの所も侍らずとぞいふ。高圓山はいづこぞととふに、そはこのうしろになん侍るとて、をしふるを見れば、此里よりは南にあたりて、よろしき程なる山の、いたゞきばかりすこ

二本の杉―古今集「初瀬川古川のべに二本ある杉年を經てまたもあひ見む二本ある杉」

うけられず―信用し難し

玉葛の君―源氏物語中の人物

なきほど―不在中

かまへ―拵へ

なべて―凡て

のいほりのほとりに、二本の杉の跡とて、ちひさき杉あり。又すこしくだりて、定家の中納言の塔なりといふ五輪なる石たてり。此ごろやうの物にて、いとしもうけられず。八鹽の岡といふ所もあり。なほくだりて、川邊にいでて、橋をわたりて、あなたのきしに、玉葛の君の跡とて庵あり、墓もありといへど、けふはあるじの尼、物へまかりてなきほどなれば、門さしたり。すべて此はつせに、そのあとかの跡とてあまたある、みな誠しからぬ中にも、この玉葛こそ、いとも／＼をかしけれ。かの源氏の物語はなべてそらごとぞともわきまへで、誠にありけん人と思ひて、かゝる所をもかまへ出でたるにや。このやゝおくまりたるところに、家隆の二位の塔とて、石の十三重なるあり。こはやゝ古く見ゆ。そこに大きなる杉の二またなるもたてり。又牛頭天王の社、そのかたはらに、苔の下水といふもあり。こゝまではみな山のかたそはにて、川にちかき所なり。それよりかのよきの天神にまうづ。社は山のはらに、やゝたひらなる所にたゝせ給へり。長谷山口坐神の社（神名式）と申せるはこれなンどにもやおはすらん。されど今は、なべてさる事しれる人しなければ、わづらはしさにたづねも問はず。大かたいにしへ名ありける御社ども、いづくのも今の世にはすべて八幡天神、さては牛頭天王なンどにのみ來り給へ

清少納言が云々―枕草紙に「ただ傍に貝をいと高く俄に吹き出したるこそおどろかるれ」

聞きこし云々―話に聞きし音を今實際に聞きたり

今やうならぬ―當世風ならざる古風の

なにその―如何なる

しるべ―案内

かたつかたへ―片方の方へ

大とこ―僧の敬稱

われもふしをがむ。さてこゝかしこ見めぐるに、此山の花、大かたのさかりはやゝ過ぎにたれど、なほさかりなるも、ところ〴〵に多かりけり。巳の時とて、貝ふき鐘つくなり。むかし清少納言がまうでし時も、俄にこの貝を吹きいでつるに、おどろきたるよし、かきおける、思ひ出られて、そのかみの面影も、見るやうなり。鐘はやがてみだうのかたはら、今のぼり來しくれはしの上なる樓になんかゝれりける。

名も高くはつせの寺のかねてより聞きこし音を今ぞ聞きける

ふるき歌どもにもあまたよみける、いにしへの同じ鐘にやと、いとなつかし。かゝる所がらは、ことなる事なき物にも、見きくにつけて、心のとまるは、すべて古をしたふ心のくせなりかし。猶そのわたりたゝずみありく程に、御堂のかたに、今やうならぬ、みやびたる物の音の聞ゆる、かれはなにそのわざするにかと、しるべするをのこに問へば、此寺はじめ給ひし上人の御忌月にて、このごろ千部の讀經の侍る、日ごとのおこなひのはじめに侍る樂の聲なりといふに、いときかまほしくていそぎまゐるを、まだいきつかぬ程に、はやく聲やみぬるこそ、あかずくちをしけれ。又みだうのうちを通りて、かのつらゆきの梅のまへより、かたつかたへすこしくだりて、がくもんする大とこたち

うちつけに―卒爾に、只もう見るといきなり
さがしき―險しき
あざ〳〵と―はつきりと
山ぶところ―山腹、山に圍れたる間の道
あらぬ―此世にあらぬ、別天地の
かたかけたる―かたよせ掛けたる
くれはし―榑橋、荒木の橋
ひぢをるゝ―折れ曲る

ふる里びとなンどのあへらん心地して、うちつけにむつまじく覺ゆ。けはひ坂とて、さがしき坂をすこしくだる。此坂路より、はつせの寺も里も、目のまへにちかく、あざあざと見わたされたるけしき、えもいはず。大かたこゝ迄の道は、山ぶところにて、ことなる見るめもなかりしに、さしもいかめしき僧坊御堂のたちつらなりたるを、にはかに見つけたるは、あらぬ世界に來たらんこゝちす。よきの天神と申す御社のまへにくだりつきて、そこに板ばしわたせる流ぞ、はつせ川なりける。むかひはすなはち初瀬の里なれば、人やどす家に立入りて、物くひなんどしてやすむ。うしろは川ぎしにかたかけたる屋なれば、波の音たゞ床のもとにとゞろきたり。

はつせ川はやくの世より流れきて名にたちわたる瀬々の岩波

さて御堂にまゐらんとていでたつ。まづ門を入りて、くれはしをのぼらんとする所に、たが事かはしらねど、だうみやうの塔とて、右の方にあり。やゝのぼりて、ひぢをるゝ所に、貫之の軒端の梅といふもあり。又藏王堂産靈の神のほこらなンど、ならびたてり。こゝより上を、雲爲坂といふとかや。かくて御堂にまゐりつきたるに、をりしも御帳かかげたるほどにて、いと大きなる本尊の、きら〳〵しうて見え給へる、人もをがめば、

みじろく—身動きす

こよなく—非常に

萬葉歌に云々—「但馬皇女薨後穂積皇子遥望御墓悲傷歌、ふる雪はあはにな降りそ吉隱の猪養の岡のせきならなくに」

へせばくて、うちみじろくべくもあらず。尻いたきに、朝寒き谷風さへはしたなう吹入りて、いとわびしけれど、ゆき困じたる旅ごこちには、いとようしのばれて、歩ゆくよりはこよなくまさりて覺ゆるも、あやしくなん。もとよりあひともなふ人は、覺さうゐんの戒言ほうし、小泉の何がし、いながけの棟隆、その子の茂穂、中里の常雄と、あはせて六人、同じ物にのりつれたる、前後よびかはしては、物語なンどもし、やゝ後れ先だちなンどもしつゝゆく。西たうげ、角柄なンどいふ山里どもを過ぎて、吉隱にいたる。こゝはふるき書どもにも見えたる所にしあれば、心とゞめて見つゝゆく。猪養の岡、又御陵なンどの事、（萬葉歌に吉隱のゐかひの岡、式に吉隱の陵、光仁天皇の御母也）かごかけるをのこに問へどしらず。里人にたづぬるにも、すべて知らぬこそくちをしけれ。又この吉隱を、萬葉集に、ふなばりといふ訓をしもつけたるこそ、いとこゝろえね。文字もさはよみがたく、又今の里人も、ただよなばりといふなる物をや。そも旅路の日記に、かゝるさかしらはうるさきやうなれど、筆のついでに聊か書きつけつるなり。なほ山のそはぢを行き〳〵て、初瀬ちかくなりぬれば、むかひの山あひより、かづらき山、うねび山なンどはるかに見えそめたり。よその國ながら、かゝる名どころは、明くれ書にも見なれ、歌にもよみなれてしあれば、

いしぶみのしるべ―道の方向を示したる碑
をりたがへたる―季節違ひなる
夜一夜―夜が夜中
聞きふせりて―臥して居てそれを聞きて
うら―占ひ
山路にはた―将（ハタ）山路にと語を上下して見るべし

有りて、いしぶみのしるべなくば、必ずまよひぬべき所なり。けふはかならず長谷まで物すべかりけるを、雨ふり道あしくなゝどして、足もいたくつかれたれば、さもえ行かで、はいばらといふ所にとまりぬ。此里の名、萩原と書けるを見れば、何とかやなつかしくて、秋ならましかば、かりねのたもとにも、

うつしてもゆかまし物を咲く花のをりたがへたる萩はらの里

とぞ思ひつゞけられたる。こよひ雨いたくふり、風はげしきに、故郷のそらはさしおかれて、まづ花の梢やいかになるらんと、吉野の山のみ、夜一夜やすからず思ひやられて、いとゞ目もあはぬに、此やどのあるじにやあらん、よなかにおき出でて、さもいみじき雨風かな、かくて明日はかならず霽れなんとぞいふなる。聞きふせりて、いかでさもあらなんと、ねんじをり。

七日、あけがたより雨やみて、おき出でて見れば、雲もやう／＼うすらぎつゝ、はれぬべき空のけしきなるに、家あるじの心のうらは、まさしかりけりと、いとうれし。日頃の雨に、ゆくさき道いとあしく、山路にはたあゝなりときけば、今朝はたれもたれもみな、かごといふ物にのりてなん出でたつ。さるはいと賤しげに、むつかしき物の、程さ

覺え―似より

かた―像

おりゐのみかど―上皇、下文は承元三年後鳥羽太上皇の御幸ありしをいふなるべし

のうへへ一丈ばかりさし出でたる岩あり。そのしたゆく程は、頭のうへにも落ちかゝりぬべくて、いと／＼あやふし。すこし行き過ぎて、つら／＼かへりみれば、いとあやしき見物になん有りける。獅子舞岩とぞ、このわたりの人は云ひける。げに獅子といふ物の、かしらさし出せらんさまに、いとよう覺えたり。さていさゝか山をのぼりて、くだらんとする所に、石の地藏あり。伊賀と大和のさかひなり。なばりより、一里半ばかりぞあらん。そのさきに、三本松といふ宿までは、二里なりとぞ。大野寺といふてらのほとりに、又あやしき岩あり。道より二三町左に見えたり。こは名高くて、旅ゆく人もおほく立ちよる所なりといへば、ゆきて見るに、げにことさらに作りてたてたらんやうなるいはほのおもてに、彌勒ぼさちの御かたとてゑりつけたる、ほのかに見ゆ。その佛の長、五丈あまり有りといふを、岩の上つ方は、猶あまりて高くたてる、うしろは山にて、谷川のきしなるを、こなたよりぞ見る。そも／＼こゝは、むかしおりゐのみかどの御ゆきも有りしこと、物にしるしたるを見しこと、ほの／＼覺ゆるを、いづれの帝にかおはしましけむ、今ふとえおもひ出でず。さて其川にそひて、すこしのぼりて、山あひの細き道をたどり行きてなん、本の大道には出ける。其間に、室生に詣づる道なンども

引きはへ―引きのばし

しる―領し治むる

物する―通り行く

事はかたか―地名に事は難しの意を兼ぬ

そは―岨、がけ道

岩ぎしの云々―岸額に他の物より離れ孤立して

このごろの雨にあらひてめづらしくけふはほしたる布引の山

この山は、ふるさとのかたよりも、明くれ見わたさるゝ山なるを、こゝより見るも、たゞ同じさまにて、誠に布なゝどを引きはへたらんやうしたり。すこし坂をくだりて、山本なる里をとへば、倉持となんいふなる。こゝよりは、山をはなれて、たひらなる道を半里ばかり行きて、名張にいたる。阿保よりは三里とかや。町中に、此わたりしる藤堂の何がしぬしの家あり、その門の前を過ぎて、町屋のはづれに、川のながれあふ所に、板橋を二ッわたせり。なばり川やなせ川とぞいふ。いにしへ（天武紀）なばりの横川といひけんは、これなゝめりかし。ゆき〳〵て山川あり。かたへの山にも川にも、なべていとめづらかなるいはほども多かり。名張より又しも雨ふり出でて、此わたりを物する程は、ことに雨衣もとほるばかり、いみじくふる。かたかといふ所にて、

きのふ今日ふりみ降らずみ雲はるゝ事はかたかの春の雨かな

すこし行きて、山のそはより、川なかまでつらなりいでたる岩が根の、いと〳〵大きなるうへを、つたひゆく所、右の方なる山より、足もとに瀧おちなゝどして、えもいはずおもしろきけしきなり。又いと高く見あぐる、岩ぎしのひたひに、物よりはなれて、道

糸櫻―しだれ櫻
くるしき―繰る、苦しき
はやきかぎり―早き種類だけ
心ぐるしう―お氣の毒に
こし方はるかに―過ぎ來りし遥か後方に

といふ所にて、又同じ川の板ばしを渡る。こゝにてははね川とぞいふなる。すこし行きて、四五丁ばかり坂路をのぼる。この坂のたむけより、阿保の七村を見おろす故に、七見たうげといふよし、里人いへり。されどけふは雲霧ふかくて、よくも見わたされず。かくのみ今日も空はれやらねど、雨はふらでこゝちよし。なみ木の松原なンど過ぎて、阿保より一里といふに、新田といふ所あり。此里の末に、かりそめなるいほりのまへなる庭に、池なンど有りて、糸櫻いとおもしろく咲きたる所あり。

糸櫻くるしき旅もわすれけり立ちよりて見る花の木かげに

大かた此國は、花もまだ咲かず、たゞこのいとざくら、あるはひがん櫻なンどやうの、はやきかぎりぞ、所々に見えたる。是よりなだらかなる松山の道にて、けしきよし。此わたりより名張のこほりなり。いにしへいせの國に、みかどのみゆきせさせ給ひし御供に、つかうまつりける人の北の方の、やまとのみやこにとゞまりて、男君の旅路を、心ぐるしう思ひやりて、「なばりの山をけふか越ゆらん」とよめりしは、（萬葉一に「わがせこはいづくゆくらんおきつものなばりの山をけふかこゆらん」）此山路の事なるべし。やうやう空はれて、布引の山も、こし方はるかにかへり見らる。

と所くいへる也、「ぐ」「ず」凡て原本のまゝ
たむけ―手向、峠也
わりなく―理なくの義、無茶苦茶にとも解すべく、心進まぬながらせんかたなくとも解すべからん
あやし―不思議なる形也

ゆくさきは、伊賀の國伊賀の郡なり。おほかた此山路(やまぢ)は、かの過ぎこし垣内(かいと)より、伊勢(いせ)地(ち)といふ所まで、三里がほどつゞきて、ゆけど〳〵はてなきに、雨もいみじうふりまさり、日さへ暮れはてゝ、いとくらきに、しらぬ山路をわりなくたどりつゝゆくほど、からでも有りぬべき物を、なにに來(き)つらんとまで、いとわびし。からうじて伊勢地の宿にゆきつきたる、うれしさも又いはん方(かた)なし。そこに松本のなにがしといふものの家にやどりぬ。

六日、けさは明けはてゝやどりをいづ。十町ばかり行きて、道の左に、中山(なかやま)といふ山のいはほ、いとあやし。

河づらの伊賀の中山なか〳〵に見れば過ぎうき岸(きし)のいはむら

かくいふは、きのふ越えしあほ山よりいづる阿保川のほとりなり。朝川(あさかは)わたりて、其河べをつたひゆく。岡田別府(べつふ)なンどいふ里を過ぎて、左にちかく、阿保の大森明神と申す神おはしますは、（式ニ伊賀郡）大村の神社なンどをあやまりて、かくまうすにはあらじや。なほ川にそひつゝゆき〳〵て、阿保の宿の入口にて又わたる。昨日の雨に水まさりて、橋もなければ、衣かゝげてかちわたりす。水いと寒し。いせぢより此驛(うまや)まで一里なり。さてはね

とまりにし―跡に留りて一所に來らざりし

なみ―竝び

とこをとめ―萬年新造、永久に少女にてありたしと也

縣居の大人―賀茂眞淵

うくひず―鶯く鳴ず、下に註せる古今の物名によりて鶯をわざ

まで道すがら、ところ〴〵櫻の花ざかりなり。立ちやすらひては見つゝゆく。

しばしとてたちとまりてもとまりにし友こひ忍ぶ花のこの本

大のき川、大きなる川なり。雲出川のかはかみとぞいふ。此川のあなたも、猶同じ里にて、家ども立ちなみたり。さて川邊をのぼりゆくあたりのけしきいとよし。大きなるいはほども、山にも道のほとりにも、川の中にもいと多くて、所々に岩淵なンどのあるを、見くだしたる、いとおそろし。かの吹黄刀自がよめりし、波多の横山のいはほといふは、けにさもあらんかし。鈴鹿にしも、かの跡とてあゝなるは、はやくいつはりなりけり。此わたりゆく程は、萬葉に「川上のゆつ岩村にこけむさずつねにもがもなとこをとめにて」此わたりならんと、縣居の大人のいはれしは、雨もやみぬ。小倭の二本木といふ宿にて、物なンどくひて、しばしやすむ。八太よりこゝまで二里半なりとぞ。そこを過ぎて、垣内といふ宿へ一里半、そのかいとをはなれて、阿保の山路にかゝるほど、又雨ふりいでて、いとわびし。をりしも鶯のなきけるを聞きて、

旅衣たもととほりてうぐひずとわれこそなかめ春雨のそら

古今名物うぐひす「心から花のしづくにそぼちつゝうくひずとのみ鳥のなくらん」

ゆき〳〵てたむけにいたる。こゝまでは壹志郡、こゝより

ること
頓宮―假宮

ゆかしくて―見たく思ひて
ふりはへても―わざ〳〵ても

させる―格別これといふ

さて―そのまゝにして

天花寺の城―伊勢壹志郡中川村大字宮古の南數町にあり、寺は天平年間僧賢憬の草創、城址は往昔藤大納言榮城、源實朝の時久我三郎の居りし所と傳ふ

べていつきのみこの京にかへりのぼらせ給ふとき、此わたりなる壹志の頓宮より、二道に別れてなん、御供の女房たちはのぼりければ、わかれ行くみやこのかたとは、そのをり此里の名によせてこそはよめりけめ。なほさもと思ひよる事どもおほかれば、年ごろゆかしくて、ふりはへても尋ね見まほしかりつるに、今日よき序なれば、立ちよりてたづね見るに、まことに古き井あり、昔よりいみじきひでりにもかれずなンどして、めでたき清水なりとぞ。されどさせるふるき傳へ事もなきよし、里人もいひ、又たしかにかのわすれ井なるべきさまとも見えず、いと疑しくこそ。なほくはしくもとひきかまほしけれど、此度はゆくさきのいそがるれば、さて過ぎぬ。此わたりの山に、天花寺の城のあと、又かの寺の伽藍の跡なンどのこれりとかや。又かの小川村の神とて、此里に社のあゝなるは、神名帳に見えたる、小川の神の社にやおはすらん。さて三渡より二里といふに、八太といふ驛あり。八太川、これも板橋なり。雨なほやまずふる。かくてはよし野の花いかゞあらんと、ゆく〳〵友どちいひかはして、

　春雨にほさぬ袖よりこのたびはしをれむ花の色をこそおもへ

田尻村といふ所より、やう〳〵山路にかゝりて、谷戸大仰なンどいふ里を過ぎゆく。こゝ

そひ―沿、そば

よべ―昨夜

うちつけに―率爾に、只もう何の心構へもなくなどの意

いつきの宮―齋宮、伊勢奉祀の女王

あらぬ―間違ひたる

群行―齋宮の伊勢へ下向せらる

りにて、夜は明けはてにけり。さてゆく道は、三渡りの橋の、もとより、右にわかれて、川のそひをやゝのぼりて、板橋をわたる。此わたり迄は、事にふれつゝ、をり〳〵物する所なれば、めづらしげもなきを、このわかれゆくかたは、阿保ごえとかやいひて、伊賀の國をへて、はつせにいづる道になん有ける。此道も、むかし一度二度は物せしかど、年へにければ、みなわすれて、今はじめたらんやうに、いとめづらしく覺ゆるを、よべより空うちくもりて、をり〳〵雨ふりつゝ、よものながめもはれ〴〵しからず、旅衣の袖ぬれて、うちつけにかこちがほなるも、かつはをかし。津屋庄といふ里を過ぎて、はるばると遠き野原を分け行きて、小川村にいたる。

雨ふればけふはを川の名にしおひて清水ながるゝ里の中道

この村をはなれて、みやこ川といふ川、せばき板橋を渡りて、都の里あり。むかしいつきの宮の女房の、言の葉をのこせる、忘井といふ清水は、（千載集旅に齋宮の甲斐「わかれゆく都の方のこひしきにいざむすび見んわすれ井の水」）今その跡とて、かたをつくりて、石ぶみなンど立てたる所の、外にあンなれど、そはあらぬ所にて、まことのは此里になんあると、近きころわがさと人の、たづねいでたる事あり。げにかの歌、千載集には、群行のときとしるされたれど、ふるき書を見るに、す

あらまし―豫定
さのみやは―さうさう遲延すべきにあらず
いそぎ―用意、支度

菅笠日記

上の巻

本居宣長

ことし明和の九年といふとし、いかなるよき年にかあるらむ、よき人のよく見て、よしといひおきける、吉野の花見にと思ひたつ。萬葉一に「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」そも〳〵この山分衣のあらましは、二十年ばかりにも成りぬるを、春ごとにさはりのみして、いたづらに心のうちにふりにしを、さのみやはと、あながちに思ひおこして、出でたつになん有りける。さるは何ばかり久しかるべき旅にもあらねば、そのいそぎとて、殊にするわざもなけれど、心はいそがはし。明日たゝんとての日は、まだつとめてより麻きざみそそくりなゝど、いとまもなし。その袋にかきつけける歌、

　うけよなほ花のにしきにあく神も心くだきし春のたむけは

ころは三月のはじめ、五日の曉、まだ夜をこめて立出でける。市場の庄なゝどいふわた

もよほし―催促

まかりまうし―暇乞ひ

なく〳〵も云々―泣く泣く別れしが最後の別れにて今や別るべき親のなきが悲し

文永、乾元―龜山、後二條兩帝の年號

つれば、心ならねど、川水鳥といふ題を、

あはれまた今年も冬の山河にいつしか來つゝうかぶ水鳥

かくて覺えず日かず經ぬれば、東よりもよほしての文しきりなれば、二十日あまりに立ちなんとす。例の妻子など名殘をしむ。後の親といふもいと老いたれば、むねのみふたがりて日をおくる。母の御墓にまかりまうしにまうでて、こゝろのうちに、

なく〳〵も別れしときをわかれにて別るゝ親のなきぞ悲しき

とおもひつゞけらる。いとしもかなしく、え立ちさるべからねば、やゝ久しくうづくまりをるを、日くれぬと從者のいふに、かへり見がちにてさりぬ。此みはかは、岡部村の顯海寺といふ寺の山になんあなる。この所今は伊場とぞいふなる。むかし文永乾元などの綸旨にも、そののち東よりの御しるしなどにも、遠江國敷智郡岡部鄕とぞありける。

後の岡部日記　終

いと―暇
宿世―前世よりの因縁
五社―濱松にある神社
此身―喪中の身

くはしく聞えよなどあれば、ふるき書どもとうでて、それに筆くはへなどして、やむごとなき御かた〴〵へ參らするに、よるひるいとなくて、む月はすぎぬ。さるをかゝる事を聞きて、くやしなどいふもかぎりなし。もゝをつかみあしずりして泣くもあやなきわざかな。かくては何事をかはせむとて、うち籠りをるを、枝直通泰など來りて、よし今はかひなし、母君もとより佛の御事をこそたふとみ給ひつれ、御八講の事まうすは、おのづからなる宿世なるべし、此事きはめておろそかにしたまふまじきなり、喪のうちのおこなひに叶ふべしとすゝむれば、かた手はなみだながら、猶筆とりて、書きはてゝ奉りぬ。その後はいそぎのぼりてもなにのかひかあらんとて籠りをるに、この九月におもひ立ちぬるなり。

二十六日は五社の遷宮あり、神主民部少輔はもとよりのちぎりふかゝればまゐるべきを、此身にしあればうちこもりをりぬ。されど祝詞の案はせよかしとあるに、げにもかりの御うつろひの時もまゐりあひて書きつればとて、こたびには似つかねど書きぬ。少輔はもとより此道の人ながら、此をりしもいと〳〵事しげければ、もとむるなりけり。

十月十日、阿波守國滿が家に人々集りて歌よむ。此たびはたはむれ歌はいはじとおもひ

くいのやちたび—あまたゝび後悔すること
とみ—至急
やをら—靜に
おふな／＼—身の程を盡して
物まゐる—食事する
やむごとなき事—止むを得ざる事
御八講—法華八巻を講ずる式

る。去年の冬まゐりこざりしおこたりを、くいのやちたびおもふもかひなし。御はかにまうでて

野べの霜消えせぬほどにとはざりしわが身の罪ぞおき所なき

とまうすを、たゞ松の秋風のこたふるこゑをのみ聞きてさりぬ。さるはことし二月の三日になん、とみの事とて文の來れるを、おどろきて見れば、早く正月二十三日の朝、くちつねならずとて、すこしふし給ひしに、やをらおきて手水めし、人々をよびて、一人をうしろにおきてかゝへしめ、佛のかたにむきて、あみだほとけをとなへ給ふこゑ、二こゑ三こゑのうちに、ねむりたまへばすなはちたえ給ひぬるを、かたへの人々もねむり給ふにやとおもふやうにて、何のくるしさも見え給はず、そこらの人々、さても珍らかにこそ終とり給ひにけれ、としごろ神佛をたふとみ、すべて人をもおふな／＼いたづき、まづしき者をばあはれみ、ものこふかたゐなどの來れる聲を聞きては、みづから物まゐるを食ひさして、あたへしめなどし給ふめる報になんといひあへりとぞ。去年の冬いたるべきを、やむごとなき事ありて、正月にといひかはしをるほどに、此三月なん東に御八講行はせ給ふに、東にはまれなれば、さるべきつかさ／＼にも、其事しり給はぬに、

さやは—そんなに何も
あをだら—あんだ、箯輿、らはなどの意
亥二つ—十時半
もよほして—人を催し傭ひて
妹ならねど—萬葉「あぶりほす人もあれやもぬれぎぬをいへにはやらせ旅のしるしに」などを思ひて書けるにや
けに—尚一層
心いられこそせめ—じれつたく思ふなるべし
かぞいろのしるし—父母の位牌
しろくて—新しくて

ためしのあれば、うまやにいそぎて、うまあをだら調ぜさせて、雨にきほひていでぬ。嶋田(しまだ)のうまやまでいたりしは、亥二(ゐふた)つばかりなりけり。大かた人もねたるを、しひてもよとしてわたりぬ。こよひは十三夜なれば、あづまの友だちは猶(なほ)月めですらんを、此くるしきに歌もなし。金谷(かなや)にやどりして、妹ならねどぬれたる物あぶりほす。こゝろ落居(おちゐ)つれば、すこしをかしさも出できぬ。さるあひだに、風さへ大いに吹きいでぬ。まことによくこそわたりつれとて、従者(ずさ)もよろこびあへり。明日(あす)なん古郷(ふるさと)にいたるべきを、かなたにて此川の渡瀬(わたるせ)いでこんをまたば、たなばたよりけに心いられこそせめと、うれしき事またなし。この道はすべてしかなり、すこしもいそぐほどの事ならば、いよ〳〵いそぎて川をばわたりぬべき事にこそあれ。十四日空晴(そらは)れて、懸川(かけがは)まで來(く)るに、はら川といふ河の橋おちたりとて、しる人あるかたに入りてやどりて、十五日につきぬ。人々うれしと思ひて、いかでけふしもおはしけん、川はいかに侍りけんと、その夜にわたりたる事をば思ひかけずいぶかるなりけり。さて岡部(をかべ)の家にゆきて、かぞいろのしるしをがむに、ことし睦月廿三日になん母はうせ給ひにければ、まだおはさぬものとも覺えぬを、そなへものの具(ぐ)どもしろくてあるを見るも、いはんすべなく、泪(なみだ)のみすゝみてよゝと泣(な)か

さては―其結果
田どころ―田地
やしなひぐさ―肥料
よこざまに―邪に、誤りて
まだしき―まだ早き
あふ人も云々―伊勢物語に山伏にあひたる記事あるによりて書けり
うつゝのやみ―現實ながら現實とも思へぬ心迷ひ

のにひばりをのみなすめり。およそ草木のある野山には、おほかたの雨ふりたるには、つちにしみ入りて、ながるゝ水はすくなきを、かの山もやぶも、にひばりになれゝば、溝をかまへて水をひとつに流すめれば、つちにしまぬのみかは、にごりさへうち添ひて、いきほひます〱つよく、おしくだして末にながれ集りては、いかなる堤もたふべくもあらず、さてはかゝる事こそいでくめれ。田どころといふ物は、もとよりある所をよくやしなひたてゝこそよろしき物を、ともすれば租税の多かるとて、にひばりにのみ民の心をうつして、よきやしなひぐさをもかしこにはこび物すれば、かれはしばらくよろしきに似たれども、もとの田どころいよ〱うすくなりて、おのがなりはひのたのみだに、自然にすくなくなりもてゆくぞかし。やむごとなきあたりにしろしめさす事にはあらぬを、しもによこざまに申すことなどやあるらん、なげかしき事にこそ。けふ未の時ばかりより、村雨さゝとふりて、うつの山雲むして、くらう道も見えぬは、むかしおほゆれど、つたのもみぢもまだしきに、あふ人もけふはなし。うつゝのやみにて越えぬ。藤枝のうまやにいたれば、日くれて雨はいよ〱うつが如し。大井川はいかにぞと問はするに、さのみたはやすくは水のいで侍らねば、さやはいそぎ給ふべきなどいへど、さき〲も

燒津—靜岡の西方三里餘、山を距てたる海岸にてこの海邊とはいふべからず
音—評判
かつ〴〵—纔に
くが—陸上
なり所—田庄
かたゐ—乞食
人ぐさ—人民
にひばり—新墾

この海べに燒津といふ所今もあなり。國府をすぎて阿部川のこなたをさわたりといふ。今年五月のころ、あべ川の上つ瀬に、水はふれ堤きれて、行きかひもたえにきと、むさしまで音はやく聞えし所なり。今はその水口のうへに、よこざまに石こめたる籠を多くさしいだしてければ、水はむかふざまによりてながるれば、こなたへはかつ〴〵落つるなり。それがみさかりに、瀧もげに落ちけんあとも見えて、はゞ八町ばかり、長さは六十町ほどにて、やがて海にいたれりといへり。いくそばくの里の草木はみくづとなり、人は魚とこそなりけめ。そのをりのことを聞くに、或は家ながら流れ行くに、老いたるもわかきも、たすけ給へとこゑをかぎり呼べど、くがに見る人いかで〳〵と手かく物からすべなく、あるは命をばからくのがれしも、なり所も家もあらず、老いたるは子をうしなひ、わかきは親にはなれて、かなしみあへりとぞ。今もさるたぐひの人のかたゐとなりて、そこら道にふしてなげくなど、路行く人のこゝろぐるしと思はぬはなし。すべてちかき年頃、いづこにても水のわづらひぞおほかめる。これをおもふに、かくのみ御世の治りにたれば、おのづから人ぐさも多く、またはよく心得ぬ人は、にひばりの田のいで來れば、ほどにつけつゝ物ゆたかになりぬとのみおもふ故に、こゝにかしこに多く

そこはかとなく—どこといふ事なしに
たぎ—たぐり
をこづり入る—ひきづり込む
ふと—ぶつつりと
のうらぎ—和漢三才圖會の說によれば又さいらともいひ大さは八九寸
うたへ—官に訴へ
國府—靜岡

してうちいるれば、くひてそこはかとなく沖にもてゆくを、行くまに〳〵ゆるしやれば、つひには必ずまたこなたざまにかへり來るを、またかへり來るまに〳〵引きたぎつゝ、ほど〳〵舟ちかくよせたる時、うちのぎとて、木の先によこざまに釘をいだしたる物を手ごとにもちて、かれが頭にうちつけて、うめきて舟にをこづり入るなり。はじめに沖ざまにゆく時、さかひて引けば、いかにある綱も、ふとくひきるめるによりて、ゆくまにまにやるなめれば、いとながき綱なりけり。またもりといふほこして、舟よりつくありとぞ。めづらしくもあるかな、むかしの書はまことなりけりと、いよ〳〵思ひしらる。又のうらぎ、にべなどいふ魚は、とり〴〵に大なる物にて、のうらぎはしびの如くにて、うろこあり、にべは石もちといふ魚のおほきになりたるなりともいへり。頭のうちに石ありといふなり。さて此魚のかしらの腦を煮たるもて、弓は作るなりけり。かれ市にもて來れば、うたへまうして皆めさるめり。かしらはとゞめられ、身をば賜ふとなむ。十三日駿河の國府にいたりぬ。萬葉集に、

燒津べにわが行きしかば駿河なるあべの市路にあへるこらはも

とよみたるは、こゝの事なりけり。此國府は、すなはちむかしのあべの市なるべし。こ

後の岡部日記

賀茂眞淵

むゆかなんふべきー六日路也

にてをーにて行かん、をはよと同じき強辭

いくそばくー幾何

ゆふー結ぶ、ゆはへる

九月十日、にはかにおもひたちて遠江にまかる。此道大かたにむゆかなんふべきを、いかにぞや雲風もけしきだちて、たゞならねば、川ども水のこゝろをおそりて、にはかに五日にてをとおもひなりてげり。戸塚と藤澤とのうまやのあはひ行くほど、しびてふ魚を、馬に二つ三つなどおふせつゝ、いくらともなくこなたざまに來。さるにてもいくそばくぞと問ふに、七十まりの馬の數なりといへり。これは大磯小磯などにてつりにけるになん。古事記などの歌には、おほをよししびつくあまとも、萬葉集には、しびつるともあるよ、いかにぞとて、そこのものに問ふに、およそ七月のころよりとしぐ〳〵つるめり。舟どももおのが浦々こぎいでて、かれがあるあたりによせつゝ、ふとさは馬の荷ゆふらんばかりの苧綱の、長さはいく千ひろともなきが、そのさきにかれがこのめる小魚を鉤にさ

うくたからー舟をいふ

大君のとほのみやこの八十(やそ)のつにところせきまでうくたからかもふるびにたるかな、家持(やかもち)が集にやいれましとて、人々(ひとびと)からふ。

岡部日記終

聲きく時ぞ―「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき」

すゞろ―鈴に坐ろ即ち何ともいへずの意を兼ぬ

ゆはだ―纐纈、しぼり染

ふし―見るべき趣

入るべき―都へ

舟よりかちより―或は舟にて或は徒歩にて

路をのぼる。

たれかしる古鄕へだつ山々を月にながむる夜のあはれは

分け入るまゝに、身に入りかへる深山の秋風、鹿の音ながらうち吹くめるを、聲きく時ぞとはかゝるをりこそと覺ゆ。此山をしも越えば、古鄕は空さへ見えじとおもふに、更に名殘おぼゆる明方なり。たうげの宿をすぎゆけば、杉村のをぐらきに霧立ちこめたる袖のしめりもたゞならず。

古鄕のそらさへ見えぬ箱根山こゆる驛のすゞろにぞうき

山々のもみぢは、いろ〳〵のゆはだをたちまじへたらんが如く、世にはそむべくもあらぬ梢ども、草の葉さへしぐれあり。いかで旅ならで見ばやとぞおもふ。下りてよりは何のふしもなし。藤澤の他阿上人ははやくむつましきわたりなれば、立寄らまくおもへど、あすははやく入るべきにて過ぎぬ。戸塚の宿にやどれり。おもひつゞけつる事も、つかれにければ、筆ならで枕をぞとる。十七日のひるつかた品川わたりにいたる。はるばるとのぞめば、舟よりかちよりつどふ物の多かるに、かしこき御いきほひのあふがれて、旅のつかれもおぼえず。

なかなかにて—書きつけん事も却つて煩はしければ
海賦—海部の義ともいふ、大波にみるも貝など摺りたる模様
よそは云々—他の暮れはてて物見えずなりたる目を移せば富士の夕日に輝きて見ゆるに驚くと也
八聲の鳥—鷄
ちりもゐず—少しもかゝらず
ちりひぢより云云—富士は八朶芙蓉と形容せらる、蓮は泥中より出づれば斯く詠ぜり
によび—苦吟し

はすそごにもかよひて、よにたとしへなき心地するが、見る〳〵暮れはつるもをかしきを、ふじのねはひとり猶夕日のいろ雪にはえて、中空にかゞやきたるは、よそはくれはてにけるめうつしにおどろかる。

山々はくれぬる雲のそらに猶夕日をのこすふじのしら雪

くれはてゝ由井の宿にやどる。今夜ばかりはまたもあらじ、夜ふかく月に濱づたひせんとて立ちいづ。月は海ごしの山のはちかくなりて、波の上は鏡の如く平らかにあきらかなれば、三保が崎、伊豆の山々、残りなく見わたさる。入江のむらの八聲の鳥も耳なれぬこゝちせらる。

しどろなる里のわらやの數みえて明けゆく月に鳥がねぞする

明けゆくまゝに、今日は富士のねに雲のちりもゐず、ゆく〳〵見むとて、馬にてぞ過ぐる。

いつの世のちりひぢよりかなり出て富士は蓮の花とみゆらん

いにしへになぞらふる長歌よまんとて、馬の上にによびつれど、ねむたさにさだかにもつづけられねば、又こそとおもひて、なかばにてやみぬ。三島にやどりぬ。夜をこめて箱根

がれする身とは知らずや」古來蚊火の字を充てたり
朝霞云々—萬葉「朝霞かびやが下に鳴くかはづ聲だにきかばわれこひめやも」この歌かびやにあらずかひやにて蠶室なりとの說あり
葛天氏の民—支那太古の王に葛天氏あり其民純朴粗野なりし也
白氏文集三十六不出門の詩及び陶淵明五柳先生傳等に見ゆ
そば〳〵し—角立ちて圓滑ならぬこと
和泉式部がことば—古今著聞に和泉式部が童のあを(襖の一種)をかりし事見ゆ、そのあをに青を掛けていへる也

立ちのぼる烟に、朝霞かびやが下おもひしられて、いと興あるあけぼのなり。うつの山のむかしの道はと、山畑にそば刈るをのこにとはするに、しらずとのみなさけなげにいらふ。にくむ人もあれど、しらざるぞ誠ならんかし。世の中にあらんとする人は、おもてをよくし、ことばをたくみにするに、そのまゝに心うる事のたがはざるぞすくなきなどいへば、葛天氏の民も、山の中にはあるぞかしとてわらふ。

世の人の心や賤が山ばたのそば〳〵しきぞ誠なるらん

ねむたかりつるめもさめぬるに見れば、つたかへでの紅葉いとことなり。和泉式部がことばもおもはれてをかし。

あをかりしうつの山路は夢ならしさむる現に紅葉をぞ見る

今宵は十三夜なるに、清見が關にこそやどらめとおもへど、日高し、契るばかりの日數もはべるはなど、人々のいふに、わりなくて過ぎぬ。歌もよみつれど、なか〳〵にてもらしぬ。くら澤などいふ坂をくだるほど、伊豆の山にやあらん、海よりあなたの峯に月はいでたり。海の面は夕日の色のまだかすかににほへる、波の上に月の光のほの〴〵とかさなりたるは、紅のきぬに海賦のうすものの裳のひかれたらんと見ゆ。島のかげなど

ん
とりあつめたる—何もかも一つになりたる
そがひ—後方
さかさま—うしろ向
思ひの霧—心の苦しさに打曇ること
深山もさやに—萬葉「笹の葉はみ山もさやにさやげども吾は妹思ふ別れ來ぬれば」
まで—詣で
木ぐれ—木の暗き處
山田の云々—新古今「あしねかく山田のくろに置くかびの下こ

りにしたひ來たる人々に物もえいはず、朝ぼらけのそがひの梢なつかしく、さかさまにも乘らまくて、かへり見がちに行くに、思ひの霧はふたがれど、空いと晴れて、風もしづかなれば、天龍川におりたちて、いとてさしわたすもあやにくなりや。けふは懸川の宿の鈴木のなにがしがもとにゆかり有りてやどりぬ。政名などいふ人もまちうけにたりとて、とく來て物がたりするに、夜いたく更けにければふしぬ。たれもみな歌よみつれど、あだしことにまぎれてかへしせず。さやの中山の朝霧分くるほど、風たちていとわびし。深山もさやにとひとりごたれて、猶横ほれるさまの、おもふ方のため今の間にうかるべしと思へば、足もいそがれず。菊川の里にいたりぬ。

　咲きにけり今越えくれば菊川のさとうちかをる山の下かぜ

名におひて菊いとおほかり。大井の社行手にをがみて、藤枝の宿にやどる。青島の何がしくすしなどまで來て、物語などしばらくして歸りぬ。曉ふかく出でて岡邊わたりをゆくに、山もとの木ぐれに、所々ほかげの見ゆるを、夜ふかく出できたる里人にとへば、鹿火なりといふ。山田のくろにおくかび是なりけり。山賤の思ひめぐらさでいひなれたる詞こそまことなりけれ。猶谷かけ行手の田面に、うすく霧わたれるが中に、むらく

康をいふ
露霜の—消に掛る枕詞、つゆしもにあらずつゆじもにて露の如く消え易き霜の意
みとしろ—御戸代、神社所屬の田地
あがち—分ち
ことあげす—言に擧けてのべ立つ
身ながら心に—我身なら我心に
つぶ〳〵と—只率直に
たゞことに—ただごと歌の體に言葉を飾らず
またも云々—又も來まじとはどうも思はれぬやはり又來たし
たちのいそぎに—旅立ちのごたごたに紛れて
ことには—口では
さからん—離れ

け　いたゞきまつる　此神の　みいきほひある　しるしとて　神のみとしろ　またさらに　あがちたまひて　氏人は　いまもつたへつ　もろびとの　數ならねども　まれに來て　われもことあげす、岡のべの　神代のことは　松ぞしるらむ

かぎりあればあすは立ちなんとするに、妻子のまどひ來て、くれ〴〵となごりをしむに、身ながら心にまかせねば、人やりならぬわかれ路こそわりなくかなしけれ。つまなる者の、手ならひのやうに書きつけたるをとりて見れば、

あふからに別れむことも忘られてうれしかりしぞ今はくやしき

とおもふ心をつぶ〳〵とつゞけたるも、なか〳〵にて、われもたゞことに、

あふからに別るゝうさはありながら又も來じとはえこそ思はね

濱松の名をたのめば、こりずまの海ならでと書きさしぬ。此外にもありつれど、たちのいそぎにもらしつ。十一日曉にたちいづ。こん年また歸らむことをいひて、

こむ年とことにはやすくちぎれども思へばとほき月日なりけり

海山をだにいくへともなくこえさからん悲しさ、老人のかなしみ給ふにそへて、妻子はらからの名殘、とりあつめたるわが心のうちいはん方なきに、胸つとふたがりて、おく

みけ—御食饌
いほまち—五百町
いのちへ—祈りの延
わぎへ—我家
夕附日—さすの枕詞
なぎさ—無し、渚
しく〳〵—しげく起る
赤駒の—はらの枕詞
はたまち—二十町
たづき—手段
ひつぢほの—刈りし跡に生えたる稲の穂
たのみ—田の實、頼み
うからやから—同一族
たてなめて—楯をならべて
軍の君—德川家

其瑞籬(みづがき)の　影うつし　いはひこし世は　皇(すめろぎ)の　神のみことの　おほみやの　つぼねのかずに　つかへつる　そのしるよしに　はらからの　人につたへて　すべ神のみけにそなふる　いほまちの　なはしろ水の　たえやらず　任(まか)せ給ひし　文永(ぶんえい)き年の名におふ　御しるしを　うけつぐまゝに　久かたの　乾(あめ)の元(はじめ)の　としにさへしるしたまへる　みことのり　うけかさね來て　君が世を　千世萬世(ちよよろづよ)と　いのちへば　わぎへの氏(うぢ)も　おのづから　世々につたへて　みしるしの　ありとはいへど夕附日(ゆふづくひ)　さすがに時世　うつろへば　かひもなぎさの　波風の　しくめるまゝに赤駒の　はらばふ田居(たゐ)の　畔(あ)をはなち　みぞさへわかず　いほまちの　名のみのこりて　はたまちも　あらずなりぬる　ことをしも　思ひなげけど　せんすべの　たづきもしらず　ひつぢほの　たのみもあらず　しかれども　うからやからの　多ければ　神にもつかへ　ものゝふの　道をもふみて　おのがじし　時にあふひを松がえの　猶世をへつつ　梓弓(あづさゆみ)　引馬(ひくま)の里(さと)に　たてなめて　軍(いくさ)の君(きみ)の　はた雲のおこり給ひし　引馬野(ひくまの)に　くさむすかばね　露霜(つゆしも)の　消(け)なば消(け)ぬべく　負征矢(おひそや)の雪とみだれて　あらましき　あらしの風を　ふせぎつる　かひしありとて　物かづ

あとゝひ—法事

そのをりばかり—生きて居る當時の程に

かけまくも—口に掛けて申さんも

ふち—敷智、淵の意に掛く

あふれて、通ひたえにたりといへば、いたづらにながめくらさんよりはとて、國滿の家などにて、ふること物語など講ず。或日雨中蟲といふ事をもろともによみける。

雨の夜の長きうらみをつねよりもしめやかになく蟲の聲かな

人々のは事しげければもらしつ。おもひのほかにとゞまりて、九月四日にもなりぬ。この日はさきの妻のうせにし日なれば、はやく住みける家にて、あとゝひなどして、墓にもまうでたるに、いつしか十七年にこそなりにけれ。あはれなる事、そのをりばかりおぼえて、しほたれをるに、雁の鳴きければ、

ふりにける常世をしたふ雁のみは廻り來てこそ鳴き渡りけれ

わが氏の神は岡部の賀茂なり。ある時東麻呂大人みやこにかへるに、濱松によしありてしばらくいこへるまゝに、詣でよみける歌、

みづ垣やその神山の影うつす岡部の松はいく世へぬらむ

とぞありし。今おのれほどもなく立ちかへりなんとするに、まうでて奉りける長歌、

其かみの　事をしとへば　かけまくも　あやにかしこし　遠つ神　遠つあふみに　はかりなき　惠もふちの　郡なる　岡部の里に　山代の　賀茂の宮居の　新宮の

したしきかぎり―親しき人々一同

おほかなり―多くあるなり

此ごろこそ侍れ―此頃こそ見所多く侍れ

きり―霧の動詞きりがかゝりて

しなるべし。今濱松の北に、京へのぼる道を、引馬坂ともいひ來れり。おもふにこの野の北南は、やがて三河にちかければ、此行幸の官人の隣國にいたれる事ありてよめるなるべし。

二十日ばかり、京よりしたしきかぎり文おこせたり。親盛が返しに、

そこまでのぼりたりと、一條わたりにも聞しめしつるを、などて過し給ふべき事かは。近き年頃考へ給ひし古歌の註などもおほかなりときくを、東の海べたに拾ふべきあまの子もあらじかし。波のそこならんも、あまりにうもれにたり。殿わたりにも奉れ給はんかし。雲の上の月も此ごろこそ侍れ。

など、こまやかにて、

都へと出でこし月の中ぞらにいかなる山かきりへだつらん

さやの中山はまことに心なけなりなど有り。立ちかへり、

おもひやれ月のみやこにへだてある身をうき霧のさやの中山

なか〳〵にゆきとまるべきにあらねば、吹く風にことづてよのみあらむとぞ思ふ。月のほどもいつしか過ぎて、八月の末つかたより、雨ふりつゞきぬれば、東路の川てふかは

おつけと相向ひて近き如く

あらたまの―「きへの林に名を立てゆきかつましもいをさきだたに」萬葉

阿佛尼―十六夜日記の作者

似てかひなきよしをいへり。とりわきてくにぶりの歌は、詞のひなびたれど、こゝろはいたりたるなり。これをさきもりの歌なることをわすれて、遠江にぬへしろといふ里のあるにおもひよせたるひがこともあなり。あり玉といふ里あり。これはかのあらたまのきべの林とよめる、此所なるべし。きべといふ名、今はなし。或人のおもへらく、貴平村といふぞ此ちかくにあなる、伎倍のかなに通ひたれば、それにやといへり。さこそあるべし。さて麁玉郡は和名抄に四郷にて小郡なり。和名に覇多郷あり。今此所にはたや村あり、これなるべし。又あり玉川有り。文徳の御時、此川に三百餘丈堤かけたりなど史にあり。今は袖つくばかりの水なり。其村の西なる坂をのぼれば、三方が原なり。西東は三里ばかり、北南は一里あまりぞある。此南に犀がけといふ有り。さて此野を引馬野といふに疑なきにはあらず。萬葉集に、天皇三河國にいでます時とて、

引馬野ににほふ萩原入りみだり衣にほはせ旅のしるしに

とあり。さらば三河にこそといふべきを、阿佛尼の、「こよひは引馬の宿にやどる、此ところすべての名は濱松といふ」と書き、關東紀行、富士紀行、また東鑑に、建長四年宗尊親王のくだらせ給ふにも、引馬の宿にやどりたまふこと見えて、むかしは疑ひなかり

月にのりて―月に乘じて
しづ心なくて―心せわしくして
しるは―志留波、今白羽御前崎といふ邊也
かしこし―可畏
何か思はん―略解本其他概ね「こともかゆはむ」に作る
さゝれ―指向けられ
いとのきたる―遠く相距りたる
をし物の云々―食膳のむかずと

たれるよし、老いたるものの物語に殘れり。舞澤を今は舞坂といふはよこなまれり。承久三年六月七日、北條實時舞澤の松原に宿ると東鑑に有り。かゝる事物語らふ程、盃とり〳〵に醉ひて、から歌などいひつゝ、夜ふかく月にのりて歸りぬ。名だたる所々もとはばやと思へども、東にかへる日數過ぎなんと思ふにしづ心なくて、思ひ殘す事こそ多けれ。大の浦、長濱は、天龍川の東に大の江と云へる所の濱邊なり。しるはの礒もまた其東南にて、横須賀といへる所にちかし。むかしゆきて見たりしに、あら海の中に巖のはる〳〵と礒よりならびいでて、しほのひぬれば、馬の背のごとくつゞきて、數々見ゆ。里人は七十五匹のこまかたといひならはし、其所の神をこまかたの明神とぞいふなる。かの遠江なだとて、舟人の手向し、かしこしとするは、此巖にあたる波のあらきによりてなり。萬葉集に、

　とへたほみしるはの礒とにへの浦とあひてしあらば何か思はん

とよみしは、筑紫へさゝれたる此國の防人の歌にて、筑紫と遠江といとのきたるさかひなれば、古郷しのぶおもひのたへがたきを、かのつくしに有るにへの浦と、此しるはの礒は、をし物のにへと汁とむかひてちかきが如くあらば、物はおもはじを、名のみは相

むかへて―對して

妹脊山―大和吉野川を中にして相對立せる山

水の上の―下句「打消つ波もよりこざりけん」

黑木―きり出したるまゝにて削らぬ丸木

なゐ―地震

し。さてあらゐは今は濱松の庄にて敷智郡なり。湖の京ちかくあるにむかへて、此國をば遠つあふみと名づけ、あふみによりて、此あたりを淵の郡ともいふべければ、あらゐももとは濱名郡にて、橋をもさいふか。さらでも六條わたりにても、賀茂川といひ、妹脊山の中にながるゝ下にてもよし野の川といふが如く、濱名川の末にかけたれば、さもいふなるべし。橋は三代實錄に、

元慶八年九月朔。遠江國濱名橋。長五十六丈。廣一丈三尺。高一丈六尺。貞觀四年修造。歷二十餘年既破壞。勅以彼國正稅稻一萬二千六百三十束改作焉。

とあり。しかるに重之家集に、「實方朝臣のもとに、みちの國へ行くに、いつしか濱名の橋わたらんとて來るに、はやう燒けにければ」とて、「水の上の濱名の橋もやけにけり」などよめり。又增基法師遠江道記に、濱名の橋くづれたるを見たるよしあり。又更級の日記に、「濱名のはし、下りし時黑木をわたりし、此たびは跡だに見えねば、舟にてぞ渡る」と書けり。此頃一度絕えて、又後につくられしや。詳に知りがたし。其後應永三年八月十日、波高くして橋かけたりしほとり打破られ、永正七年八月二十日、なゐふりて松原をふりくづしければ、湖大海ひとつになりぬ。それより所のもの今切のわたりとよびき

夕ゐる—夕方とまり居る

波をわけたる—波の間に立ちたる

澤の松原一筋、海と湖のへだてに西へさしいでて、橋本の宿と松原とのあはひ少しある所を、北の湖の水のながれいづる口に橋はかけたるなるべし。されば高師は濱名郡にて、白須賀と荒居との間、大道より北なる山をいふ。

高師山夕こえくれてふもとなる濱名の橋に月をみるかな

又、

高師やま松に夕ゐるかさゝぎの橋本かけて月わたるみゆ

といふ歌にて、高師山を越え過ぎて此橋本ある事をしれり。又、

高師山こえ來て見れば一筋の松原とほき浦の入海

とよめるは、舞澤よりさし出でたる松原なり。松原の北は湖、南は海なりけり。

たれうゐて海と川とをへだつらん波をわけたる松のむらだち

又東福寺虎關禪師紀行のこの所の詩に、「左海右湖同一碧。長虹合含雨波瀾」ともつくりたれば、そのへだての松ばらに道ありて、天の橋立のやうならんに、その松ばらのはてと、宿とのあはひに橋をかけたるなりけり。文德實錄に、「濱名郡角避比古社の前、湖一口ありて開塞る事有り、ふさがれば民のわづらひとなれり」と見えたるも、こゝなるべ

ー世話しとゝのへて
ゆほびかー幽雅
舞澤ー今の舞坂、下文に其辨あり
はらゝにーちらほらと、そこここに
氣賀ー傍訓原本のまゝ今「ケガ」と呼べり
遠江歌ー遠つあふみ引佐細江のみをつくしなれを頼めてあさましものを
たどるー不明確にて何處ならんと疑ふ

雄踏などいふ村右に見てさしわたす。この所はむかしの湖にて、遠つ淡海とよびしもこれによれらんを、今はうしほうち入りて、ゆほびかなる入海なり。西は高師山たかく雲間に見え、左は舞澤の松さながら波のうへにたてり。其西はかの濱名の橋かけたりけん所にて、今は大海にうちつゞきて、大船小ぶねはらゝに行きかひたり。右のかたはいく里ともなく、入江はる〴〵と見わたさる。其入江のおくぞ引佐細江なりける。されば其所の山の名を、大いなさ小いなさといひて、其あたり引佐郡にて、引佐村もあり。あらゐの渡り波風あらきをりは、濱松の城の北より道ありて、氣賀の關こえてゆけば、此入江まぢかく見えて、けしきえもいはずおもしろし。これは萬葉集の遠江歌に、いなさ細江のみをつくしとよみしより、名だたる所なり。其比かのわたりの任にてすめる人か、あるは郡司などの歌なるべし。後の人は今の大道のほとりならでは、みやこ人などのゆきかふ道あらじと思ふより、舞澤より濱松へすぐる道の右の方なる蓮ある池の長きを、それにやといふもののあるは、むかしの樣をしらぬなめり。また濱名の橋かけたりけん所もたどる人多し。此所西は今のあら井の驛の西南につゞきて、橋本の村といふあり。これいにしへの驛なり。されどこれよりいと南へおしいでたる洲のありしなり。東は舞

とむらひ―弔問し

くさ―種

のたまひつれど―折角の仰なりしかども

こよなく―此上もなく

まだきなる物から―この色の紙を用ふるには早き時候なれども

うけ―泛べ

とりまかなひて

その妻まさきは東萬侶大人の姪なり。なげきのほどおもひやられて、とむらひけるに、目もなきはらしながらたどりいでて、あはれなること物語するついでに、東にてさるべきことのはもあるらん、思ひなぐさみぬべきくさともなりなん、いとまには訪ひ來てかたり給へかしなどあれば、二日三日すぎて文つかはす。

のたまひつれど、さはる事のみありて、まうでも聞えなぐさめまゐらすべくも侍らず、これは野を分け侍るに折りつる花なり。

　此秋は露のかゝらぬこと草をいづこに得てかなぐさめにせん

うすにびの紙に書きて、草の花をさまざまあつめておくりけり。かへし、

いとゞ露けき秋に、うちしをれくらし侍るに、よみ給へる歌どものおもしろきを聞き侍らば、こよなく心なぐさみてまし。猶ひまもとめてとひ來給へかし。

　いづこをか更にもとめん珍らしき人のことばの花ならずして

枯野いろめきたる紙に書きたるは、まだきなる物から似つかはしきや。

月のさかりは、水の面こそ物よりもわかね、濱名の橋の程遠くも近くも、月に舟うけたらんぞこよなかるべきとて、人々小舟とりまかなひて、入野の村の入江よりさしいでて、

身まかり—死に

聲のみや—墓の主の聲は聞くべくもあらねばと意を含めて見るべし

めかるれば—あひ見ずに離れて居れば

むごとなきあたりあしからず申入れ給ひねと、非藏人親盛などに文つかはす。

八月十日ばかり、民部少輔暉昌の家に歌よまんとするに、東にて、わがあらぬほどに、月前遠情といふことを人々よめりといひおこせつれば、すなはちその題を人々とともに、

いく千里月にむかひておもひやる心のはてや白川の關

おなじむしろに題をさぐりて、曉更荻風といふことを、

いかでたゞ夕のものと聞きつらんうきはねざめの荻の葉風を

藤原龍萬呂、ことしむ月ばかり身まかれりけるに、そのはかに高松山といふ所にまうでて、花など手向けて、松の茂れる中にたゝずむに、秋風のいと身にしむ心地すれば、

松たかき山のあらしの聲のみやそこはかとなく聞きて歸らん

その繼母なるもうせて、墓の竝びてあるに、同じく手むけつ。哀さいはんかたなし。

手向する心や野べにかよふらん折る花ごとに露こぼれつゝ

又藤原のくにあきらも此夏身まかりにたりと、東にて聞きて、おどろきてよみける歌のあるを、國滿のもとにつかはす。

めかるれば疎ならひを思ふまに永きわかれとなりにけるかな

あは―あれは何山ぞ

うれしき瀬云々―うれし涙に袖を濡すると也

門により―母が他國に在る子の歸るを待ちわぶるをいふ、戰國策に、王孫賈の母が賈に向つて「汝朝に出でて晩に來れば吾則ち門に倚りて望む云々」といへる故事

髪のよもぎ―老いたる我が蓬髪

およづけ―およすけの誤、成人し

まことのいたれる―親子の至情

まで―詣で

こたみ―今度

かたはるかに秀でたるはあはがだけなり。

　空たかくたつ白雲のあはが嶽あはととがめて見ぬ人ぞなき

懸川の宿わたり、ゆかりあるかた〴〵おとづれて過ぎぬ。夕つけて天龍川わたる。むかしの歌には、あまの中川とぞよみたる。人々むかへにとて來つゝ、おい人の事なきよしまづいひて、いとめづらしとおもひたるけしきどもうれしくて、

　まれに渡る天の中川なか〳〵にうれしき瀬にも袖ぬらしけり

くれ過ぐるほど、岡部の家にいたる。まことに門によりてまちうけ給ふ。いときなき姪どもなど、はせ來れども、見しらぬかほなればにやあらん、とみにもむつれず、なれしばかりの人々は、髪のよもぎは似ずなりぬめれど、くにぶりの詞のみやしるかりけん、いづれの所よりとは問はざりける。つまなる人はたはやすく來べからぬ故あれば、先子をおこせたるに、年比へて見るに、およづけにたるぞうれしき。まことのいたれることとて、なつかしく嬉しとおもへるけはひもあはれなり。常はしたしからぬさへ訪ひ來て、日に〳〵かたらふに、庭のよもぎも露かわくひまのありけなり。こゝにまで來たりにければ、京にもと思ひぬれど、東にちぎりつる日數しあれば、こたみはえまうでぬを、や

新坂―振假名原本のまゝ、今「につさか」と通稱せり

記―枕草紙

むかへ―參照して

相摸―大江相摸守公資の妻、有名なる歌人にて其歌後拾遺以下の勅撰集に見ゆ

ねぎごと―願ひ事

新古今集忠岑が歌に、

東路のさやの中山さやかにも見ぬ人ゆゑに戀ひやわたらん

といへり、古はかゝる語勢多し。さればさやの中山といふにて、郡をさや郡といふべきをしり、さや郡といふによりて、さよの中山といふ誤をもたゞすべし。下れば新坂の宿なり。すくのはてなる社を、今の世には八幡の社なりといふ。こは延喜式に佐夜郡己等の麻知神社とあるなるべし。はやく文徳の御時、從五位下の神位になし給へるには、任事社としるされたり。淸少納言が記にも、ことのまゝの明神、いとたのもし、さのみ聞きけんとやいはれんと思ふぞいとをかしき、とかきたるにむかへ見れば、ことのまちとあるぞおぼつかなき。さて鴨長明も、さやの中山のくちにあるなることのまゝの社、とかければ、其頃まではうたがひなかりけむ。和名抄に、此郡に山口といふ鄕ありて、今もあれば、よくかなへり。是を此國の一宮なりといふものもあれど、周智郡小國社をこそ、古く一宮とはいひつれ。相摸のよみけむ歌の詞書にも、ことゝありしやらん。とまれかくまれ、此やしろねぎごと聞き給ふとて、人々のうちこぞりてたふとみまうづれば、ことのまゝなる社とこそいふべければ、行く手にをがみて過ぐるもたのもし。右の

日野云々—此一條太平記の趣によれり

關東紀行—本集の中に既出せる東關紀行をいへる也

山名郡—遠江の一郡、明治に及びて磐田郡と合併す

かひがねを云々—古今集東歌也

月十三日こゝにやどり給ひし事、物に見えたり。また日野右少辨俊基二たび東にくだりける時、かれいひすゝむとて輿を此宿の庭にとゞむるに、轅をたゝきて、まもりの士をよびて、所の名を問ふに、菊川と申すといひければ、承久のいくさのをり、院宣書ける罪によりて、光親の卿を鎌倉に下しけるに、此宿にてうしなひけるを、「昔南陽縣菊水、汲二下流一而延レ齡、今東海道菊川、宿二西岸一而終レ命」と書きたりける、遠き時の筆の跡、今はわが身の上にやとて、

いにしへもかゝるためしをきく川の同じ流に身をやしづめん

とよみて、宿のはしらに書き付けられしとぞ。關東紀行といふ物には、中御門中納言宗行卿なりとあり。いづれかまことゝならんとも思ひわかねど、あはれなるむかしがたりをえ思ひすぐさで、人のしれる事ながらしるすなり。さやの中山はさや郡にあればなり。今の世此郡をさよといふはよこなまれり。續日本紀養老六年に、遠江國佐益郡八鄕を割きて、始めて山名郡をおくと見え、延喜式に佐夜郡と書く。またかひがねをさやにもみしがといひて、末にさやの中山といひ、古く六帖に、

東路のさやの中山さやかにも見えぬ雲ゐに世をやつくさん

ずして止みたり

あまのまてがた―後撰集に「伊勢の海のあまのまてがたいとまなみながらへにける身をぞうらむる」夫木抄にも用例見ゆ

すゐさう―水晶

清少納言が詞―枕草紙「牛の歩むまゝに水晶などのわれたるやうに水の散りたるこそをかしけれ」

かちより―徒歩にて

に、あまのまてがたといふ事、こゝにてぞ心得られしと、東萬侶大人のかたられしを思ひ出でぬ。げにもたごといふ物を、繩して朸のかなたこなたにかけて、おのが肩ににないながら、うちつくる波にさかひて、左右の手を繩にそへて かたをうごかして汲むなり。古語にひだり右ふたつの手をまてといへり。又くみ來てはすなごにうちそゝぎて、又なぎさにおりたちてくむ、見るめもくるしく暇なし。古語よく意得たらん人に、猶くちづからいふべし。清見潟はなか〳〵言の葉もなし。夕つけてあべ川わたる。うすく霧わたれる夕日の、さゞ波にかげろひて、駒のあがきにちり碎くる水の、するさうなどのわれたるやうにみゆるは、清少納言が詞おもひいでられて興あり。うつの山はいとさかしかれど、むかしの道にあらずといふぞ口をしきや。和名抄に、此郡に内屋といふ郷あり。今もさいへり。霧立ちていとくらし。

夕霧に行く先くらきうつの山うつゝのやみにこえまどひつゝ

くれ過ぎて島田の宿にやどる。あすはふる鄉なりけりと心いそがれて、夜ふかくいでて大井川わたるほど、ほの〴〵と明け行く。さやの中山は朝霧わけんも珍らしかりなんとて、かちよりこゆ。菊川の里、むかしは驛亭にやありけん、右大將賴朝卿建久元年十一

ちゝのみなきぞ—郷里に母のみにて父なきを此地にちゝのみといふ木の實なきに掛けていふ
いぬ—午後八時
令—大寶令
今の五里—古は支那の里程にならひて六町一里とす
たより—便利
からめいたる—唐風の
たゝずまひ—樣子
もだしぬ—作ら

古郷のはゝその蔭はとひゆけどちゝのみなきぞ悲しかりける

けふは雲まよひて富士も見えず。原の宿わたりより雨ふらんとす。富士川は明日こそわたるべきを、水嵩やまさりなむ、夜をかけてだに蒲原の宿までいかでゆかんとて、夕つかたより立ちまよふ雲のあしとともにいそぎつゝ行くに、空晴れて、おもはざるに月さやかにいでにけり。

夜舟こぐふじの川とに霧はれて高ねにいづる月を見るかな

夕の雲のいざなはざらまじかば、かゝる所の月はみざらましを、心ありけりなどいひあへり。いぬのはじめばかり蒲原の宿にいたる。此驛は貞觀七年に富士川の東の野にうつされたるよし、史に見ゆるを、一とせ川水いたくあふれて、驛みなながれければ、今の所におかれたるなり。いにしへ令の時の驛は、阻嶮ならぬ所には、三十里ごとに一つをおくといへり。これ凡そ今の五里ばかりなり。今はさる所すくなし。かゝることにてうつしかへける故なるべし。遞送も五里にてはあまりにたよりあしかるべし。十一日さつた山をこゆ。なにがしの湖みるらんけしきおほえて、からめいたる入江のたゝずまひなり。詩作らましを、年頃いはざりければ、なか〳〵にてもだしぬ。おきつの濱すぐる

いき—蒸汽
何がしのだけ—淺間嶽
さりあへぬ—途もよけきれぬ
荷前の云々—萬葉「あづまどの荷前の箱の荷の緒にも妹が心に乘りにけるかも」
雨ばかり—雨ぐちる
人面より起る—李白「山從人面起、雲傍馬頭生」
山人—仙人

士の烟の絶えしは、延暦のころよりたび〳〵燒けし故なるべし。凡そ高き山には、水あり火ありて相うつ故に、鳴澤もありけんを、火終に大に起りて、岩をとばし土をちらし、水をたくはふるいきほひなければなるべし。山は火あるのみにては烟たゝざるか、寶永の比もやけにけれど、其前つかたに烟たちし事をきかず。水の火あるいはほにふれてたてるいきなるべし。何がしのだけもしかなりといへり。今はたゝずといへるをおもひ合すれば、貞觀の時にたえたるにやあらん。けふは何がしの國より貢物おくるとて、さりあへぬまで行きかひたり。荷前の箱の荷の緒にもなど誦してくだるに、ふりさけ見らるる海山の興あるにも、過ぎし比雨にこえし折おもひ出でらる。すべてみ山は雨ばかりあはれなるはなし。こゝかしこくゆりいづる雲の、うすき濃きに、山々はおもかげばかりぞみゆる。人面より起ると吟じてこえつる、苦しからぬにしもあらねど、あなをかしとみしはといふに、人々は例のひがこゝろにこそ、いぶせかるべき物ごのみなめり、龍にのるらん山人にやあつらへましなどわらふ。からうじて三島の驛に至る。ふるき歌にちちの實の父とつゞけしは、木の實にて、此國にありといふ人のありしかば、問ひもとむれど見しれる人もなし。

ふるまひ—模樣
つとめて—翌朝早く
夕つけて—夕方にかゝりて
聞きあかされて—耳につきて睡らずに夜を明し
かひ—峽、はざま
三巴—支那蜀にあり、水東南流し曲三轉巴字に似たるよりの名
蠶叢—支那蜀の地、李白「見說蠶叢路、崎嶇不易行」
ふたがれり—ふさがれり

もいたく降りにけるなりけり。大山は今もふりぬべき雲のふるまひなり。此山ぞあふりの神にておはします。

藤澤や野澤にごりて水上のあふりの山に雲かゝるなり

つとめて驛をたつ。夜の雨に道いとあしくて、從者わぶめり。大磯小磯といふわたりは、よろぎがいそなるべし。夕つけて箱根山にかゝる。關まではくるしとて、畑といふ所にやどる。いとはや夜さむなれば、ねもいらぬに、瀧の音、鹿の聲、うちこめたる山の秋風、聞きあかされて立出でぬ。ほの〴〵と明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧しろくたちわたれるは、海を見ん心地す。關こゆるほど、日さしのぼりて、湖の面のどかに見わたさる。かなたこなた山をめぐれる水の面は、三巴といふや似つらん。蠶叢に擬したる人はたれればかりなるや。其後いくそばくの人かのぞみ見けむ。此湖にさせる聞えなきぞあやなき。延曆十一年に富士の山やけて、石など飛びちりければ、足柄の道ふたがれりとて、初めて此道はひらかる。されども又の年、もとのあしがらにかへされける事は、書に見ゆるを、後又こなたをこゆる事になれるは、いつばかりよりならん。貞觀六年七年にもやけて、甲斐駿河の池など埋れしこととあれば、其ころよりの事なるべし。富

日記─更科日記
しもつふさ─下總
まつち山云々─萬葉、下句「すみだ河原に獨かもねん」
紀路にいりたつ─萬葉卷四笠朝臣金村の長歌の一句
しるし─明か也
うちぎき─打聽、人より聞きたる事を記録し置くもの
つと─土産
雨づつみ─雨やどり
山もと─山の根

らん。菅原孝標が女の日記に、在五中將のいざこととはんとよみける所は、むさしさがみの堺の川なるやうにぞある。されども武藏としもつふさのあはひにすみだ川のあるよし、古き物にはみな見えたるを、所の人の教へたるがたがへるまゝに、日記には書けるなるべし。凡そすみだ川といふ所こそ多けれ。古今六帖に、いづはなるあをとが關のすみだ川、と詠みしは、出羽の國にあるべし。辨基がまつち山夕越えくれて庵崎の、とよみけるは、きの國にある事、紀路にいりたつまつち山とあるにてもしるし。後の人はふるき書をよくも見ざるにや。すみだ川はむさしと下總のあはひにのみとおもひて、辨基が歌をもそこにつらね、今はそこに庵崎といふ名の村さへありといへり。ゆふこえくれてといはんほどの山もあらぬものを、こと好むものの、ともすればいつはり事をかまへて、古事をばうしなふものぞかし。かくの如き事は、うちぎきめきたれど、人に見すべきものともかまへざれば、旅のなぐさめがてら、ともなふ人にかたるを、古郷のつとにもやと書き付くるなり。ほどがやの宿すぐるほど、空くもりみ晴れみたゞならねば、雨づつみするに、しばらくして氣色やみにけり。藤澤のうまやにやどるらんとて行くに、しなの坂といふ坂をくだれば、田の上山もとなどに、濁りたる水いと高きは、こゝにし

こと物―別の物
なごり―別るゝ心殘り
ちぎりおく―いつつは歸ると約し置く
いたし―つらし
ゆほびか―閑雅
あをだ―あんだ、籃輿
ときあらひぎぬ―解洗衣、萬葉「ゆふされば秋風さむし我妹子が解洗ごろも行きてはや着ん」
關吹きこゆる―新古今「秋風の關吹き越ゆるたび毎に聲うち添ふる須磨の浦波」
故鄕人は云々―我は常に富士をながめて故鄕を偲び、故鄕の人は又これを見て此方を思ふと也、故鄕は遠州

なごりなきにしもあらねど、ちぎりおく日數いくばくならねば、先すゝまるゝ心にはいたしともおもほえず。品川の驛わたりは、海の面ゆほびかなり。夜の雨晴れて、白雲おほく海の空にかゝれるは、伊豆のみ崎と安房の大山となり。此所は袖の浦とぞいふなど、あをだかく奴のみだりにいふはをかしき物から、いづくにまれときあらひぎぬきん日までは、其名のゆかしきや。あさかぜいとゞしく身にしむに、

旅人は衣手さむししばし猶こゝろして吹け浦の秋風

關吹きこゆるなどよみけん思ひいでらる。富士の山はひつじさるの空にみゆ。是ぞおのがながむる方なるに、故鄕人はこなたをこそと思ふもこたびはうれし。をちつとし東に來にけるほどに、

東路にありと聞つるふじのねを夕日の空にかへりみるかな

とながめて、かぎりなく遠くも來にけりとわびつるにはかはれり。六鄕の渡は玉川にぞあるらん。和名抄に、此國に六座鄕あり、同じ所にはあらずや。此水上に多婆川といふ里ありといへり。ことばのすみにごりにつけて、ふるき名なる事猶あきらかなり。さがみ川は今はばにふといふ。古の道はいと北の方なめれば、此水上やむさし相摸のさかひな

都—京都
あからさま—かりそめ
年のはに—年毎に
たはやすく—たやすく
とみの事—急の事
人やりならぬ—人にせしめらるるにあらず我心からの意
さが—習はし
うつたへに—一概に
ゆきかひ—往復
後の七月—閏七月
つとめて—早朝
あらまし—豫定

岡部日記（或は東歸といへり）

賀茂眞淵

あはれ都にありつる程は、あからさまながら年のはに故郷に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里の遠に老いたるたらちねを置きまつりて、とみの事ありともいかでかしらん、しるとも如何でかとみにゆきいたらん、今やいかなる事かあらん、いかなる心にかますらんなど、人やりならぬ胸さわがれつること日ごとにありしを、世のさがはあはれなる物にて、うつたへに忘るとはあらねども、友がきもいで來て、高きいやしきゆきかひしけるに、二つなき心のまぎれやすくて過しぬ。此秋はいざなふ人さへあれば、いでや母をもをがみ、つま子はらからにも逢はゞやとて、後の七月八日つとめてたちいづ。此あらましいふころ、人々別れをしむとて、からやまとの歌、一百ばかりもあらんかし。そはこと物にしるしつ。友がきの

寶飫郡―今「寶飯郡」

人わらへ―人に笑はるゝこと

うはものすそになどもよめり。又男は袴のうへに褶を著くるが故に、俗にははかまのひらみといへり。或説に、褶をうはもとよむとあるは、男のひらみにまがひたるなるべし。みやぢは此國寶飫郡の宮道を、和名抄に美也知とよみたり。かのみやぢ山もそこなるべし。さて此女この郷に住みける故にさいふか、他にありて通ふ道にても有るべし。矢作川は加茂郡のころものさとを經て、其上はさなぎ山の麓をながれ來めり。此川邊に豐川といふ里もあり。和名抄に、寶飫郡にいだせり。さなぎは、延喜式に、挾投神社とあり。今は景行天皇をいはひまつれりといへり。

遠江濱名の橋は今の新居のわたりの所なり。今もはしもとの里有り。されど今のわたりの所よりは南によりて、いと海のきはなるべし。これは書くべきもれ、有るまじきも書きまじへて、こともつゞかず、いとくだ〳〵しかれど、たびのなぐさのみにしあれば、人わらへをいとはずなむ。

旅のなぐさ　終

行まほしき云々―桐壺の巻に「限りとて別るゝ道の悲しきにいかまほしきは命なりけり」かねて―掛けて

此うちに―同じく催馬樂の中にの意、催馬樂は本文庫古代歌謠集中に收めたり

だつ物―の樣なるもの

づけ、源氏物語に、行まほしき生まほしきとかねていへるたぐひ多し。さて是は男のいふ詞にて、しかばかり我をうるはしと思ふからは、行きかよふ料に、市にてくつかはんとなり。三段くつかはどちかいのほそしきをかへさしはきてみやぢかよはん、是は女のいふなり。ちかいは、和名抄に、線鞋を漢語抄を引きて、千開の久都とある千開にて、せんかいといふべきを、千かいと書きしを、ちかいとよみ誤れるなるべし。せんかい音なれども、此うちにとばり張をとも、大領のまなむすめともいへる例なり。又同和名に、絁綫兼用男女通著とあれば、女の料にちひさく作りたるもあるべければ、細しきをかへと、男の料なれども、女のこゝろにて細くやさしきを好みていふにや。又さきのは、男の通はんとて沓かはんといふを、女のわれもかよはんの心にて、女の料のくつかへといふにや。うはも取り著ては男と女のわかちあり、こゝのやう女のことばなれば、沓も女の料なるをいふなるべし。さてうはもは裙をいふ。下裳は褶をいふ。褶を衣服令の集解に、枚帶とあるは、ひらみといふに同じ。ひらおびとひらみとはことば通へり。是を後にしびらともいふ。源氏物語に、しびらだつ物けしきばかり引きかけてといふは、夕貌の宿のしのびたること故に、上裳をばそぎて、下裳ばかり引きかけたるなり。此下にも、

二段、おやさくるつまはましてるはしも、しかしあらばやはぎの市にくつかひにかん。

三段、くつかはどちかいのほそしきをかへ、さしはきてうはもとりきてみやぢかよはん、

ぬき川は美濃國(みののくに)にいづぬき川ありと、ある物に見えたれど、美濃の國なるをとりいでていふべき歌のさまにあらねば、三河にさる名の川あるなるべし。せどのやはらはひぢりこなり。やはら手枕といはん料(れう)にて、あつぶすまなごやが下にといはん如く、やはらかにぬる夜はなくとなり。おやさくるつまとは、萬葉に、さのの船(ふな)はしとりはなし親(おや)はさくれどといふに同じ。是は女のいふなり。つまは夫(をつと)をさす。二段おやさくるつまはましてるはしもとは、おやのさくればあふ事もまれなれば、ましてうるはしく、其夫(そのをつと)をおもふとなり。るはしもは、うを上略せるなり。ひとつの本にてる日はしもとあやまれるもあり。さてこれらも女のいふなり。しかしあらばやはぎの市にくつかひにかんとは、しかしのしは助字にて、しかあらばなり。矢作(やはぎ)の市は、三河の岡崎(をかざき)といふところなり。かひにかんは、かひにいかんを、にの字を引きていへば、いの音のある故に、はぶきいふいにしへの例(ためし)なり。又ゆかんをいかんといふは、拾遺集に、かめ山にゆくをいく藥とつ

ひぢりこ—泥、軟きものなるより手枕やはらかにの緣に用ひたる也

さのふなはし—「上つけぬさぬの船はしとり放し親はさくれどわはさかれがへ」

拾遺集に云々—「亀山にいく藥のみありければ止むる方もなき別れかな」

はうしー拍子

眞名に云々ー眞字伊勢物語二巻、此書の眞僞、作者の如何につきて古來諸說あり、宣長は後世の僞書と斷ぜり、寛永二十年刊行す

たかぐ〵ー方方、あちらこちち

さすもにて上のごとし。はうしありて謠ふ物は、すべて音便にてさる事の多きなり。物語に八橋のことをいふに、水ゆく川のくもでなれば、橋を八わたせりとあるをも、いかに心得てかいぶかしとする人もなし。眞名にかける此物語を見れば、水堰川の蜘手なればとあるを、水ゆく川とはよみがたければ、水ゐで川とよめる人もあり。堰をゐでとよむはさる事ながら、かくつゞけて水ゐで川といふ例もなく、詞の様もいかにぞやおぼゆれば、よく考へ見るに、せとゆと少し字の様の似たるに、筆消などせばまがひぬべし。されば水せく川とよむべし。凡川水を堰くは、苗代などに引きかけむため也。水行く川をせきたちて、其せきの上つかたにて、右左へ四づつ八つの溝をなして、横ざまに水をやれば、蜘の手の四づつふたつにて、八つあるが如くなれば、さてこそ水せく川のくもでなればといふなれ。其川ぞひの道の兩方にあらんには、橋も四づつ八つわたすべし。かゝることとゐなかにはかたぐ〵にあれど、一所に八つまでわたしたらんは、まためづらしければ、おのづから所の名ともなりにけんかし。

催馬樂のぬき川のうたに、

ぬき川のせゞのやはらたまくら、やはらかにぬる夜はなくておやさくるつま、

あはひ―間、境
むかへ見て―併せ勘へて

我せこに云々―萬葉にあり、此下に「梅の花それとも見えず雪の降れば」
あらぬ―あるまじき、間違ひたる

鳴海のあはひなどの海邊にて、さくら田もそこの田をいふべく、かれこれをむかへ見て、此國の所の名なる事を知れり。その舟ちゞめとは、知と止と音のかよへば、其舟とゞめなり。あゆちがたなどに、さくら人の舟こぎ行くらんを、その舟とゞめよ、のりて島に千町つくりおきたる田を見てこんとなり。そよやは拍子のことばなり。さすかへり來んは、あすかへりこんなり。ことをこそ明日とはいはめとは、ことばにこそは明日とはいはめなり。ことにこそといふべきを、いにしへの詞はかゝるたぐひ有り。古事記に、ことをこそ菅とはいはめ。日本紀に、ことをこそたゝみとはいはめなどあり。をちかたに妻さるせなればとは、彼方に妻しある君なればなり。さるはしあのかへり左なれば、つづめていへり。せなは人をあがめていふ、いにしへのことばなり。君をも父兄夫をもすべていふなり。後の人はいもせといふことのみをおぼえて、せとは夫婦にいふとて、赤人の、我せこに見せむと思ひしといふ歌をも、あらぬことに引くめり。萬葉に、家持と池主とかたみにわがせことよみかはしたる歌などを見て、あがめていふ事なるを知るべし。こゝにせなといふなは、そへたる詞なり。ふるくは兄をなせ、姉をなね、妹をなにもと、なの語を上にそへたり。さねこじは實不來なり。しやすもは、志也のかへりは左なり、

一つら―一連、
同一個所
後撰集に云々―前に物語に云々といへると同一の歌にて「いとどしく過ぎ行く方の戀しきに羨しくも歸る波かな」といふ歌也

るまじきを、さりとてあだし所によしなく出すべからねば、こゝにならべのせたるにや。

此物語には、同じほどの歌とおぼしきを、こと所にも出し、こと時のをも一つらに書きたる樣のこと多ければなり。後撰集に、あづまにくだるに、過ぎぬるかた戀しく思ひけるに、川のほとりを行くに、波のたちにければとあれば、此物語に、伊勢尾張のあはひの海づらと書きたるは、例の作りかへたる物なれば、さるたぐひもとり〴〵多きなめり。

催馬樂に

櫻人、その舟ちゞめ、しまつだを、十まちつくれる、見てかへりこんや、そよや、さす歸りこんや、そよや、

ことをこそ、明日とはいはめ、をちかたに、妻さるせなれば、あすもさてこじや、そよや、しやすもさてこじや、そよや、

此櫻人をことなる說どものあれど、これはさくらといふ所の人をいふにて、難波人、須磨人といふたぐひなり。萬葉集に、

櫻田へたづ鳴き渡るあゆち潟しほひにけらしたづ鳴きわたる

とあり。和名抄に、尾張の愛智郡に厚田、作良、成海の鄕などつゞきて見ゆれば、熱田、

いもにこひあかの松原—見渡せば潮干のかたにたづ鳴きわたる

たまかづら—萬葉「人はいさ思ひやむとも玉葛かげに見えつゝわすらえぬかも」掛け影との掛詞也

物語—伊勢物語

とり〴〵に云々—區々に論ずれども

ぬを、人の口のはにかけて興にそなへんとの心にて、物語とはいふめるを、實錄のやうにさへおもひて、ことの證據にも引きなどせるは、いとこゝろ得ぬ事なめり。この事はこゝに用なきに似たれども、何事にもあしきいひならはしのありて、ふるき事いふに、これがために明らかならぬことのあれば、わらはべのためにいふなり。

あさけ川といふ川あり、是は朝明郡なるべし。萬葉にも、いもにこひあかの松原と、聖武天皇のよませ給へる所は、三重の郡にて、朝明にちかきよし、右のおほみ歌の左にしるせり。此行幸は天平十二年十月なり。おほみ旅寐の夜を、妹にこひあかすといふ心につゞけさせ給へり。むかしは吾をわれとはいはで、あれとも、あがとも、あともいひたれば、吾は明のこゝろにいひかけ給へり。いひかけの詞には、すみにごりを厭はざる事にて、たまかづら影に見えつゝなどのたぐひなり。

物語に、伊勢尾張のあはひの海づらにたつ波を見てとあるに、同じつゞきに、信濃なるあさまのだけの歌あるを、とり〴〵にあげつらへど、淺間の山の烟の美濃路より見ゆべきにあらず、はた伊勢尾張の海づらを行きて、美濃路にかゝるべくもおほえず、たとひ業平此くだられしたびはおなじくとも、此尾張いせを過ぐる道行きぶりのことにてはあ

たこなたの一方ならぬ物語をいへり、神代に鈿目命、猿田天彦大神に問うて曰、汝何處に到りなさんや、對て曰、天神の御子は則ち當に筑紫日向の高千穗槵觸峯にいたりますべし、吾は則ち伊勢の狹長田五十鈴川上に到るべし、是より起る諺也」
をこのことー馬鹿氣たる事
かくろへごとーかくれたる祕密の事
似つかはしくー尤もらしく
心をことになしー意味を變へ

さて此物語は、伊勢の御の書きて七條后に奉れりなどいふ事のあるにや。いと〳〵こゝろ得ぬことなり。二條后は七條后の御をばにましまして、七條后は延喜の七年にかくれ給ひ、二條后はおなじ十年にかくれ給ひければ、みなおなじ御時にましますを、ことに御姪の后に、そのましますほどの御をばの后のみそかごとを書きあらはして奉るをこの事やあらん。そのころ昭宣公のいきほひなどをもなどか憚らざらむ。むかしの事をいふには、咎なきに心安くて、心にまかせていひなすめり。時世のありさまをよく考へ知りてこそいふべき事なれ。又業平のみづから書けるなりなどいふも、いかにぞや。おふけなき事をも、其外にも道ならぬことをもなして、それしかりとみづからしるしおきてたれに傳へむとすらん。又心のうちのかくろへごとをば、あだし人のしるべからねばなどあるも、いかゞあらん。ふみつくるものの常として、有りけんことよりも、ふかくも似つかはしくも書きなすぞかし。又物がたりのやうをよく見しらぬ時世には、古今集より先なる物と思へる誤さへあるなり。此つくりざまは、あらぬ歌をもて贈答ともし、或は一ことと二ことをかへて心をことにし、時世つかさ位などもこと〴〵くたがへて、その人にして其人のことならぬやうになせし物なり。およそ物語といふは、實錄にはあら

伊勢人は—山家集に見ゆ

齋宮の云々—伊勢物語「君や來し我や行きけんおもほえず夢かうつゝか寢てかさめてか」の條をいふ

伊勢や日向のものがたり—諺草に「俗諺にあな

とよみたるいづみ野はこゝといへり。此國にはいかなるにかひがことゝいふことのあるらん。淸輔朝臣の書ける物に、いせ物語のことをいふとて、ひが事を構ふる故のよしにて、いせ物語といふ、伊勢は僻といふ故なりとあり。げにも此物語のことによくかなへる說なりけり。堀河院百首の池といふ題にて、藤原忠房朝臣、

いせならばひが事ぞとも思はまし大和なるてふみまさかの池

とよまれたり。此ことちかきほどの諺などならば、題詠の歌にはとり出づべくもあらねば、いとふるくよりいひ來れることとなるべし。西行法師の歌にや有りけむ、

伊勢人はひが事しけりさゞぐりの篠にはならで柴にこそなれ

ともよめり。今より考ふべきたよりもあらねども、しひていはゞ、二つの說あるべし。一つにはかの齋宮の犯され給ふことのまことにて、京わらはべのわざ歌に、それとはささで、いせ人はひがことしけりとうたひけるが、後までも諺に傳へしにや。又伊勢や日向の物がたりとて、これらの國人の一所にねたりけるが、魂のうつかりかはりてければ、伊勢人は日向に、日向人はいせに行きたりといふ事のあれば、そのことをやひがことといふらん。此二つのうち、齋宮の御事は、物がたりにあれば、似つかはしき所もあらんか。

しばらくさる事—まゐ兎に角尤もの事

あがりたる世—上代

伊勢人はひがことしけり—夫木抄に見ゆ

こゝろ得ず、すゞか川とあらば、此川は瀨の多ければ、五十瀨といふ國の名にいひかけたるのみともいふべきをなどぞ答へたりける。今おもふに、海にもをといふ事のあるにや、なるをといふ所もあり、水脉といふ詞もあれば、猶かうがへば、より所も有りなむや。

神風の伊勢といふことは、崇神天皇の御時、天照大御神をこゝにいはひまつれるよりのことのやうに、顯昭などはいひつれども、此ことばは神武天皇のおほん歌にはじめて見えたれば、かの風土記に、伊勢津彥の八風を起し給ひしよりのこととあるぞ、しばらくさる事と覺ゆるに、是又神武天皇の前いくほどもなき事と見ゆれば、やがて神武天皇の冠言葉におきてよませ給はんもおぼつかなし。とにかくにいとふるく神代よりのことばにて、伊勢の國にのみいふべきならねど、神武の初めていせとつゞけさせ給へれば、其例によりて、後々は此國にのみいふにや。いとあがりたる世のかうぶりことばは、たゞ一ことにつゞけたる多し。猶いふことの多かれど、こゝには殘せり。

庄野の宿過ぎて幾里ばかりにかあるらん、泉川といふあり。鴨長明が、

伊勢人はひがことしけり津島よりかひ川ゆけば和泉野の原

さゝ波の―下の句「荒れたる都見れば悲しも」

しぐれもいたく―「白露も時雨もいたくもる山の下葉のこらず色づきにけり」古今集

鈴鹿山―後撰、下の句「しほなれけりと人や見るらん」

書く事もありけるなり。それにつきて、萬葉に、さゝ波のくにつみ神のうらさびてとあるを、或物に、日吉の御神大物主にましませる故とあれどもおほつかなし。此山を御神といふは、國つ神のましませる所なれば、その鄕をもみかみといひ、その浦をもさはいふべきにこそ。此海のかたへに爾保の鄕あれば、其方ならでも、にほの海といふごとく、志賀の大津の方にても、ことによりてはみかみのうらといふにこそ。

もる山は、草津の驛の美濃路にかゝる所をもり山といへば、貫之のぬしの、しぐれもいたくとよみけむは、それならんと思ふに、同じぬしの集に、竹生島にまうづるに、もる山といふ所にてとて、歌のあるをおもへば、右のもり山は、京より此島にかよふ行く手にあらねば、いづこにかあらむ、猶考へていふべし。

鈴鹿山いせをのあまのすて衣といふ歌、過ぎにし比、やんごとなきわたりにても、ある家に問ひ給ふに、明らかに答ふることあらざりき。東萬呂うしに、ある人の問へりしに、きはめてしれざる事なり、しかれどもしひていはゞ、これは伊尹朝臣の歌にて、女のもとにきぬを脫ぎおきてとりにつかはすとてはし書のあれば、みづからをたとへて、やがて男の海人といふにやあらん、さても猶、すゞか山とていせをのあまといはんつゞけも

うちかへして―反對にひつくりかへして

懷風藻云々―懷風藻は奈良朝の漢詩集にして我國最初の詩集也其中なる麻田連陽春の一首に「近江惟帝里、裨叡寔神山、山靜俗塵寂、谷間眞理等、於穆我先考、獨悟闡芳縁、寶殿臨空構、梵鐘入風傳」の句あり

ちによみくだせるあり、句をへだてゝ心をかよはせるあり、上下にわかちてことをおけるあり、うちかへして心得べきあり、よくそれにしたがひてとくべきなり。右の歌は、一の句と五の句にかけ、二の句は四の句につらねてこゝろ得、三の句はまた五の句へかけて見べきなり。三十一字にて思ふ事をさま〴〵にいはんとすれば、いつもたゞちにのみは、句のおきがたきなめり。

比叡の山は、傳敎大師のひらかれにたりと人の思へども、懷風藻をみれば、いと早くより寺はありけり。日えの社を日よしといふはあやまれり。ふるきふみに日枝と書きたり。しかも古は、よしをばえしといひて、吉の字をばえとよみけるなり。古事記の歌に、みえしぬのえしぬと有るを、後にはみよしののよしのといへり。住吉をもふるきものにはすみのえとのみ有るを、吉の字をよしとのみよみならへる人は、いとことざまにやおもはん。ふるき物をみて知るべし。ひえの山のふもとにます御神なれば、ひえの神といはんぞことわりなりける。

あふみのみかみ山は、和名抄に、此國の野洲郡に三上、爾保、篠原の鄕などあり。延喜式には此神社を御神と書かれたり。和名抄に三上と有るは、ことばの同じことなれば、さも

そらがき―暗書

てにをは―助辭

木路―紀伊路

かれもこれも云云―契沖は諸事に通曉せる僧なるが會者定離の說は初めと終との句意に叶はずして採らずとの意

人のそらがきしてあやまれるにこそ。素性集はおぼつかなき物ながら、もとより別れつつと有りけんより所とはなれり。相坂はまぢかく都に出入るところなれば、行きかひしげきを、行くものも歸るものも、知るも知らぬも、別れつゝ逢ひつゝするは、是や此あふ坂の關なりといふを、關の名によせて、知るも知らぬもあふといひかけ、さてつゝは上におきて、下の逢ふといふ詞にもくばりて心得る古の句の例にて、わかれつゝあひつゝといふてにをはなり。いとふるき歌の此たぐひをかうがへ合せて知るべきなり。又此五文字を心得かぬる人もあるとかや。萬葉に、越ニ勢能山ニ時阿閉皇女御作歌、（河閉皇女は元明天皇にましまして、總給ふ御夫は日並皇子尊なり。）

これやこの倭にしては我こふる木路にありとふ名におふせの山

これらを思ひ合すべし。また蟬まろの歌は會者定離の心なりなどいふを、契沖といふ法師は、かれもこれもしれる法師なるが、はじめと終との句の意にたがひもとれりとてとらずなむ。末の世にはことの心をばよくもしらで、佛の道のみ崇めるが故に、みだりなることをのみいひよせぬるを、定家卿の書き給へる物には、歌ははかなくのみよむこととぞ、やゝもすればのたまひける。まことにしかなり。凡そ歌の作りざまには、たゞ

あがまへ—あがめの延言

あふさかの—下の句「行方知らねば侘びつゝぞぬる」

えぎ—延喜

つとめて—翌朝

かなしの宮—悲し、四の宮

腰の句—第三句

もてあそぶ本—小倉百人一首の類

あふ坂の關路に年はへぬれどもけふのしみづや名をば流さん

と有るなどは、より所めきたり。又延喜第四の皇子なりといふは、いと〳〵あらぬことなめり。皇子にましまさば、いかに出家し給ふとも、蟬丸とのみはかくべき。さらば朱雀天皇の御爲にも、村上天皇の御ためにも、御兄皇子なるを、後撰集にあがまへても書かざるをも思ふべし。歌のさまも延喜より前のものと聞ゆるをや。又或説に、古今集にある、あふさかの嵐の風はさむけれどなどいふ歌を、此作れるといふつけそへごとを誠として、えぎの御よはひのほどをおして、御子にあらずといふは、道ゆく人に問ひて境を爭ふたぐひなり。又逢坂に四の宮あることは、延喜よりまへのことなるべし。小町家集に、四のみこうせ給ふつとめて風吹くに、

今朝よりはかなしの宮の秋風やまたあふ坂もあらじと思へば

是は今の四の宮川の事と聞ゆといへる說はよし。又、

これやこの行くも歸るも別れつゝ知るもしらぬもあふ坂の關

といふ歌を、よくとき得たる物のなきにや、此腰の句を、後撰にも素性集にも、わかれつゝとあるを、わらはべのもてあそぶ本どもには、わかれてはとあなり。歌よく心得ぬ

玉鉾の―枕詞
ひきもの神―下文の說の如くひきもは裙（引裳か）にて、裙を投げ捨て給へる時に成れる神の意なるべし
あはきが原―檍原
かの人の歌―次に引せる「これやこの」の歌
よにあやしげなる―非常に見すぼらしき
長明―鴨長明

　　行くけふも歸らん時も玉鉾のひきもの神をいのれとぞおもふ

といふ歌あり。此ひきもの神も道の神とはおもはるれど、後には聞えぬ御名なり。古今集に、下の帶の道はかた〴〵別るともと有るを、顯昭律師の說もあしからねども、或人のいはく、いざなぎの大御神あはきが原にて御帶をなげすて給ふ時に、なれる神の御名を、道のながちはの神といふ、これぞ道のかみにて、そのものだねは御帶なるがゆゑに、下帶の道とはつゞけたるならんといへり。此ことより所あめり。同じ御神御褌をなげすて給ふに、なれる神の御名をちまたの神といふ、此はかまをひきもともいふにやとおもへば、ことの次にいふになん。

こゝに蟬丸の社とてあり。めつぶれたる人なりといへるはひがことなり。後撰集のかの人の歌に、あふさかの關に庵室作りて住みけるに、行きかふ人を見てとはし書あればなり。さて宇治物語に、博雅の三位といひける人は、木幡とかやに目つぶれたる法師の、よにあやしげなるに琵琶はならひけりと有るは、別人なるべし。又良少將の和琴ならひに通はれけるよし、長明無名抄に見え、淸正集に、ある所にて琴など彈きて遊ぶに、夜更けて月も入りぬ、うちの人々も入りぬる音しけるに、琴をしらべていだしたるに、

つた事
浪風しく—浪風しきりに起る、世の亂るゝをいふ
さること—如何にも然あるべき事

體—體言

連聲—音便

らぬことをも申すにや。つかさ位のひくきいにしへの歌よみ人の、たゞしきふみにも見えぬなどを、さま〴〵にいひさわぐなるも、げにうべなりけり。やゝもすれば世の浪風しくめるが、治りて後いでたる人のさかしらするぞかし。

相坂山に手向することは、さることにて、こゝをすなはち手向山ともいひけん、萬葉に

見二近江海一晩頭還來作歌

ゆふだたみ手向の山をけふ越えていづれの野べに庵せむ子等

とあり。是は昔ならの都より近江にかよふには、宇治川を渡りてあごねの原といふ原より、山科のいはたのもりなど過ぎて、相坂を越ゆるよし、萬葉の長歌に見えたり。また萬葉に「齋禮」とも「祈」とも書きて「たむけ」とよめるは、今手向することなるを、すなはち體にいひなして、其神ともするが故に、貫之のぬしは、手向をいのりともかゝれしなるべし。又或人は、俗に山のたうげといふは、國のさかひのみね、あるはあら山のいたゞきなど通る人の、そこにかならず手向する事なれば、そこをやがてたむけといふを、連聲にてたうげといふなるべしといへり。さもあるべし。又貫之家集に、あひしりたる人の物へ行くにぬさやるとて、

額田王の御歌—萬葉巻二「從山科御陵退散之額田王作歌一首」とある長歌
やまとぶみ—日本紀
日嗣のみこ—皇太子
おきてゝ—掟て、命じ定めて
かぎり云々—墓側に奉仕すべき期間も經過して各自分散する時の
ひがこと—僻事、間違
あらぬこと—飛んでもない間違

に此みさゞきあるよしは、額田王の御歌にぞあなる。うべも圓なる山のかたちなれば、さは名づけたるにや。さて此すべらきは、御馬にのりていでましゝに、行きませる所をしらず、沓の落ちたる處を御さゞきとせりなど、紹運錄といふものに書けり。すべて此ふみはあとなしごとのみ多きぞかし。やまとぶみに此みやまひあつしくませる時、おほとののうちに日嗣のみこをめして、後の御事をのたまひおきてゝ、かみあがり給へることと見え、萬葉集に、御やまひしたまへる時の大后のみやの御歌も、かみあがり給ひて後のもあり。かのみさゞきに御墓仕せるつかさ〲の人、そのかぎりはてゝあがるゝ時の、ぬかだの王の御歌もあれば、近江大津の宮にかみあがりまして、此山にをさめ奉り給ひしこと疑なし。又ざうょろくには、田原の天皇とも申し奉るとあるよ、それは此すべらきの七柱にあたれるみこを、志貴のみこと申せしが、光仁天皇の御父にましましゝかば、追崇みて春日の宮の天皇と御謚奉り給ひ、田原といふ所に御陵のあれば、田原のすべらぎとも申し奉りしを、正しき史をもうかゞはで、ひがことしけるなり。さて天智天皇は後の御世の法をさだめさせ給ひなどして、あるが中に尊ければ、七陵のうちにて、たえず御つかひの立ちぬべきことなど、物にもみゆるを、世くだりぬれば、さるあ

都—京都
あからさまに—かりそめに、つひ一寸
まかりまうして—お暇乞ひして
道行ぶりに—旅行の途上に
なほざり—通り一遍
ことわり物し—辨じ
行く手云々—旅ならずとも考へ得べき事なるべければど
なぐさ—なぐさめ

旅のなぐさ 或は西歸といへり

賀茂眞淵

久しくもなりにけるかな、都の誰彼いとむつまじくなりにたるにつけて、おもへども猶こひしきものは、故郷にぞあなる。いでやあからさまにゆきて來なんとて、やむごとなき御わたり〳〵、まかりまうして、卯月の末にたちぬ。稻荷の神づかさなる、非藏人なる、其ほか一人二人、關までとて送る。此たびは道行きぶりに見えたらん所々書きつめて、やむごとなき御わたりにも奉れかし、なほざりならんは何のめづらしき事かあらん、ふるき名所などのよこなまりいふなどを、ことわり物したらんや、わろからじとあるに、げにも古きことは、行く手ならでもかうがへつべかめれど、旅のなぐさに心ゆかん時書きつけんずるは、ねぶりさますわざならんとて。

山科に御廟野といふ野あり、その所の山ぞ天智天皇のみさゞきなめる。山しなの鏡の山

賀茂のぬし―眞淵
はうし―拍子
道ゆきづと―道中のみやげ
袖のまよひ―袖のころび、和名抄に「紕萬與布縫欲壞也」
つゝましう―恥しう
にほどりの―枕詞
つめ―集め
物から―物ながらも

人々笑ふ。今は明日ばかり歸りつきなんと云ふを聞くに、物あらたなる心地せられて、道ゆきづとも思ふばかりはなかるをなど思ふも、今更めきたり。紅の花多く見ゆる里あり、

紅のすゑつみはやし染むるとも袖のまよひは隱れしもせじ

とのみ覺えて、見知れる人めつゝましうなりぬ。にほどりの葛飾わたりには、ゆかり有る人侍れば、今宵は其處にとて行くに、其邊なる松原の見ゆる程、いはん方なく嬉しきも、故鄕に變らぬ松風のおとづれも、此處には有りぬべう思へばなり。さるははかなういひ思ひし事を、かく書きつめたるは、人笑へなる業ながら、己が物から、後見んには心慰む物とぞ聞きしゆゑ。

伊香保の道行きぶり　終

鳴く一聲に―古今「夏の夜の臥すかとすれば時鳥鳴く一聲に明くるしのゝめ」
さまことに―樣子變りて
さるかたにさうぞき―田植は田植だけに其向にそれ〴〵洒落こみて
鳥いよ〳〵白し―杜甫「江碧鳥逾白、山青花欲然、今春看又過、何年是歸年」
よご―草の名に夜子の意を掛く
ゑぐ―千陰の說に「東國にてはこといひ土佐人はゑぐといへり、葉は蘭に似て小さく、根は白く小さき芋ありて味少しゑぐし」
かみつふさ―上總

浦波に濡れにをぬれし袖よりもあまがほしけん衣からばや

とぞおもほゆ。鳴く一聲に明行くも、なか〳〵樣かはれるところのあさけをかしう見ゆ。やがて追風よしとて漕出づ。沖行く船どもの眞帆を引きて、舟子どもうたひつれつゝ、いみじう心地よげなり。今は陸にしなり行けば、何時の程もなくさまことに見えて、さなへとり〴〵うゝるは、里もとゞろに賑ひて、おのがじしさるかたにさうぞき、ならべる笠どもの白きが、青きなへの中に見ゆるも涼しきを、鳥いよ〳〵白しなど、男どちはずしあへり。田歌を聞けば、

よごをひろふと晝田は植ゑずあだし男の夜田をはふ

とうたふを、皆人打はやしつゝ行く程に、萬葉にゑぐとるとよみしとかやは、ゑぐはへの事にて、田などに多きものなり、かみつふさ人は、よごといへるぞと、賀茂のぬしの云ひたふびし事、ふと思ひあはせられて、只なるよりは興あり。又おほかた謠ふものは、五つ七つのことばして物するを、此田うたは、本を七つ七つ、するを七つ五つと云ひとぢむるよ、こも一つのはうしなるべし。夕つかた一むら里のかきほに、卯の花のいと多く咲きつゞきたりけるを、又も波のたち來る心地するはと云ふに、こよなの物ごりやとて、

足がり小舟―足輕(アシガル)小舟なるべし、輕くして疾き小舟の稱といふ

程にを―程に早く取らん、をは強勢の助辭

うきめ―憂目に海布を掛けて刈ると續けたり

松―たい松、

みるめならで―あまの縁にていへる洒落

居なみ―居竝び

なし。明けぬればやがて舟立して、向ひなるいきすの浦は、海士の子供の磯傳ふも近く見ゆれど、足がり小舟ならねばや、巳の時ばかりに寄せたり。海士の住む宿もけしきばかり見えて、青海原は遙に秋の木の葉を浮べらんやうに、百舟漕渡りつゝ、心ゆくあたりなり。宮居もいと神さびて、昔べの故ある事とかや聞きつれば、くはしう問ひも見もせばやと思ふを、風たゝぬ程にをなど急ぐには、所をしも見置かば、後にもこそとてなん。又香取へ行くほどの舟にて見れば、ほのかなる沖の小島に、白き鳥どもの立ちゐるは、波かあらぬとぞあやまたる。この舟寄する程に、波いと高う立ちて、舟こぞりて濡れつ。宮居拜みて、又漕ぎづるは怖しかれど如何はせん。

　夏ごろも香取の浦のおきつ波かゝるうきめもかるやあま人

とぞいはる、宿るべき處まではえゆかで、松ともすべう闇くなりゆくはすべもなし。かぢ枕して明さんも、立ちこん波の心うしろめたしとて、あやしうすゝけにたるあまが屋に、みるめならで宿を借る。哀にわびしき事かぎりなし。程なき處なれば、皆居なみつゝ、袂のしほれなどあし火して乾すも、いとやつれゆきて、ともに海士人の姿に異らぬにやと思へば、

とほはた―十日、二十日
をよび―指
歸らまく―歸らまほしく、歸りたく
おだしくて―氣も落ちつきて
復や來ん―また來られやうもなければ、序にゆつくり見物せん
しをゝにて―びつしよりと濡れて
枕がみなれば―枕もとに打ちひびくなれば

は幾日ぞと云ふに、早うとをはたと云ふも餘れるに、今更に驚かれて、すゞろなる事にも有るか、人は如何にをよびを折りて待ち給ふらんものと思へば、俄に立歸らまくなりぬれど、母のぐし給ふには、よろづおだしくて、猶復や來んなどぞ思ふ。あはの大神の社と云ふ有るわたりより舟に乘りて、鹿島へとて行く。風立ちて波かしこう打寄せたるに、浮島とか云ふ岸に著きたり。雨さへそゝげば、苫の雫に袖もしをゝにて、如何にせんいかにせんとのみ云ひあへり。

世の中はかしこき波を過ぎ來ても身の浮島に猶ぞよりける

とぞ云るゝ。やう〳〵そらの氣色やみつれば、舵取喘ぎつゝ漕ぐに、申の時過ぐる程に鹿島に著く。世に云ふめる要石、高天原のまなし川など教ふる物から、さる事は目も留らぬが、たゞ大かたの樣ぞ、實にふりにたるあたりとおぼしくて、見どころ多かれど、彼波風に魂失ぬるけにや、しるさんも物うくて、たゞ、

鹿島なる浦の荒磯神さびて波の白木綿かけぬまぞなき

とぞ云ひたる。此處は入海にて、長閑なるべう覺しきに、終夜波はたゞ枕がみなれば、目もあはすべきよしなし。耳馴れぬ音のかしがましきには、寐ぬ物から思ひやる事も

ねのそがひに見ゆるあしほ山あしかるともがさね見えなくに」
あげまき―角髪の子供
昔の言の葉―慈鎮和尚四季の今様に、「花橘もにほふなり、軒のあやめもかをるなり、夕ぐれざまの五月雨に、山郭公なのりして」
ちはひ―さきはひ、我に幸を授け
たゝずまひ―様子
筑波根云々―「筑波根のこのも彼のもに影はあれど君がみ影にます影はなし」「筑波山は山しげ山茂けれど思ひ入るにはさはらざりけり」二歌による

いつ聞きしよりも哀と覺ゆるを、歌よむべき心地もせず。かく更けたる夜に、しらぬさかひなるをと思ふも、心細さやるかたなくて入りぬ。此峯には、女神男神なんおはしける。神もちはひ給ふにや、今日はいと晴れて侍れど、岩のたゝずまひなど怖しげに見ゆれば、峯までは登らずなりぬ。母刀自、

餘所にのみ見てや過ぎなん筑波根の神のみ前にたてる白雲

とぞある。我も伏し拜みて、

筑波山やまの雫に立ち濡れてあふぐに高き峯の姫神

おとに聞えしみなの川は尾上より落るを、年有、

みなの川岩に碎くる白波は峯より落つる花かとぞみる

とて、男は高根も何も立越えて、ほこりかにて歸りぬ。さて幾日かも此峯を見つゝ來にけんとて、同じ人、

筑波根をこのも彼面に見つゝ來ては山しげ山今日ぞ分けぬる

となん。其夜も此近き里に宿りて、ほのぼのと明くる頃出でて、かへりみすれば、峯は白雲ところどころにゐて、朝日にほへるけはひ、似なうきよらなり。ふと或人故郷出でて今日

頭なる」うるまの島は琉球にて言葉の通せざるにいふ
えねんじかねてー我慢がしきれなくなりて
だいー臺、食膳
夜のものー寢具
物ごりに云々ー前に話の通ぜざりしにこりて二度と會ひもせぬ故所につけて問ふべき事も問ふ能はずして明したり
したゐまるゝーつひこつそりと笑を催さるゝ
きるーかすむ、くらむ
しりへ手にいぬるーどん〳〵後方に走り行く、舟の速きさま
そがひーうしろの方
そがひに見ゆるー萬葉「つくば

を、物ごりに二度とだにたいめもせねば、處につけて問ふべき節をも、すべなくてあかしぬ。此處はさのみ名殘惜むべきよしはあらず、只彼うるまの島ぞしたゐまるゝ。かゝるもはた旅の心やりなめり。そこの川より、やがて舟漕ぎづるに、水いと〳〵早くて、目もきるやうなれば、うつし心もうせぬ。岸の上行く人、松の木立もしりへ手にいぬるかと見ゆるが、空の雲さへぞそがひに流るめり。からうじてさるべき處よりのぼりて行くも、猶浮きたる心地せり。人々も心まどひやしけん、道まどひたり。徒に小松の生ひたる野原を遠々に過ぎつれば、筑波の山を遙に見つけたり。さて櫻川に到りぬ。是はみなの川に流れ會ふめり。とばのあふみは何地などといへど、しる人にあはねば口惜し。筑波ね近うなりぬ。そがひに見ゆるとよみけんあしほ山も實に見ゆ。山のみこそ世に昔より今も變らぬ物と思ふに、何とはなくて哀とみやらる。ま草苅りて歸るあげまきどものあるに、しるべさせて、麓の里に宿れり。終夜寐もいらねば、峯より落つらん水の音松風にたぐふに、花たちばなの香も折々通ふは、昔の言の葉覺えて哀なり。かゝる時郭公はいかで訪はぬにやあらん、たゞなるよりは思ひ殘す心地せられて、やをらおきてむかふに、月は朧なるが、二つの峯は見えて、何となく心細き程、遙になのる聲するは、

はるけぬる―晴らしたる
いはけなき―幼けなき
なりはためけば―ごろ〳〵とはげしくなれば
さめ―うすらぎ
そこらよろぼひたる―澤山見すぼらしく立ちたる
むね〳〵しう―重立ちたるらしく
ゆゑはゝげ―ゆゑありげ
あるじゆかしう―主人の人柄も奥ゆかしく
けさう―化粧
おほどか―おほやうにこせつかず
あなづり―あなどり
くゝだち―莖の大根の時の一條
人わるからん―きまり惡からん
うるまのしまの―千載―おぼつかなうるまの島の人なれや我かたらふを知らず

振り分けの黒髪山のほとゝぎすまだいはけなき初音なくらし

とおぼゆ。雨降出でて、此度はおどろ〳〵しくなりはためけば、集へる人々濡れそぼちつゝ、足を空にて亂行くは、物見る心もさめにけん、室の八島はえ尋ねずなりぬ。衣川てふ邊に宿り求む。そこらよろぼひたる家どもの中につけては、少しむね〳〵しう見えて、庭の木立、遣水の心ばへなど、ゆゑはゝげなれば、入立ちてむかひ居るに、あるじゆかしう覺えらる。刀自もさや有りけん、せうそこいひ入れたり。三十ばかりの年ならんと覺しき女あるじの、けさうしつゝおほどかにて立出づるは、田舍びてもあらず、あなづり難うはづかしげに思ふに、過にし佐野のくゝだち思ひ出でて、かくても心の情や如何ならんとうち思はる。靜まりてとりなし云ひたるに、愛敬づきたる口つきよりは、言葉こそ得も聞きわき給へ難かりけれ。如何にせんと思ひ煩へど、人わろからんと思ふ給へらるゝに、刀自はよういらへし給ふが、此方の事をしも知らぬ顔なるは、うるまのしまのとおぼゆるを、彼方もえねんじかねて逃げていぬ。如何に思ふらんと、我さへはしたなう、いとかたはらいたき業なりけり。今宵は同じだいも淸らに、夜の物も、程經給ふ旅の料は珍らしからじとて、ようしたるをかしなどしつゝ、情ある人には侍るもの

重々しく由緒ありげなる
すめらぎのおほん使—勅使
武藏の大城云々—將軍家よりの上使
みあらか—御社
かゞやかし—氣まり惡し
我かと行きて—古今集「秋の野に人まつ蟲の聲すなり我かと行きていざとぶらはむ」
聲—郭公の鳴く聲
いさや—否然らず
をぐらかす—心をかきくらさしむ
木ぐれ—木の下闇
神—雷鳴
むくつけき—きびの惡き

なく床しげにて、はたすめらぎのおほん使の、又武藏の大城よりとておはせしなど、さるあら山中に、紫も赤も緑も、みあらかの玉に黄金にきらめきあひたる、いと尊くかたじけなし。近きわたりの人々物見んとて、かぎりしらず立ちわたる中に、旅の窶かゞやかしかれどいかゞはせん。夕づけて淸たきてふほとりを行くに、松に掛れる藤の散りがたになりてをかしきを、をらばやとてある人の、

たれをかもまつにかゝれる藤の花思はぬ風のとはゞあやなし

我かと行きてなど云ひ居たる程、五月待つ間の聲ほのかなりつるは、僻耳にやと、其處なる人に問へど、さなりと云ふも、又いさやなど答ふるも侍るめれば、如何ならんと辿られて、

やよやまて深山出づなる郭公この初音しもをぐらかすべき

と詫びぬれど甲斐なし。今はとて立歸る山の木ぐれの夕ばえに、神とゞろとなり出でて、すゞろに心細う覺ゆるを、葉隱に二聲なんふりでたるは、いとむくつけきもの紛しの忍び音よとは思ふ物から、さすがに聞得にけるに、先の覺束なきをさへはるけぬる心地すめり。此處は黑髪山とも云ふと人の語りければ、

せな―夫
ゆくりなき―突然こゝに來りたるにて別の緣もゆかりもなき
道のつらに云々―つらは面、道中の疲れにて心屈したればその勇氣も出でずして
つとめて―翌朝
さればよ―それ御覽遊ばせ、蛙の鳴くは雨を呼ぶなりといふ我言の的中をほこる也
たけきわざかは―えらい事ならんや
ふたら―二荒、日光山をいふ
のたふびし―宣ひし
まねびやらん―形容すべき
さうぞく―裝束
ゆゑ〳〵しき―

にたるは、せななりといふに、見驚くばかり似げなくぞ侍るは、いかなりける事にか。さるべき人の時失へるならんと思ふに、悲しうさへ覺えられて、ゆくりなき道行き人といへど、一夜の宿もさるべきにこそと思へば、問ひ慰めばやなど思ふ物から、道のつらに心くしにたれば、甲斐なくて靜りぬ。つとめて急ぎ立つにも、よに名殘多くて、又こそ尋ねきこえなん世もあらめ、彼所へも立出で給へかし、何てふ所尋ねて、必ず宿り給へよなど云ひて分れつるが、人していはせつ。

この宿に心はとめつ郭公つれなくすぐと思はざらなん

とて行く〳〵猶如何なるにか斯く迄は思ふらんとあやし。道のつらの小田どもに、蛙の聲々なくも、何となく哀に聞きなさるゝを、こは雨を呼ぶなりなど、供なる人のいふを聞くには憎くなりぬ。頓て降り來れば、さればよといふ。何のたけきわざかは、よきさが言合せたらんをりは、如何ばかりほこりかならましなど、人々苦しき物から笑ふ。かくしつゝ過ぐる中にも、ふたらのお山こそあれ、今は二荒てふ字のこゑをもて、日光の宮とまうすとかや、古事しれる人ののたふびしなり。此お前はまねびやらん言葉もなし。年毎のおほん祭のさうぞくとて、事々しきさまにしもあらず、ゆゑ〳〵しき淨衣姿何と

酒、さかなといふ「な」はあれど今一つの物はなからんとなり

あなかま—あゝかしまし、しいッと云ふに同じく他の言を制する言葉

みゝなし山かは—先きの人はつんぼならんや、聞えぬべきをとの洒落

酒ほしみたる—酒をほしがりたる「今一つの物」といひたる

だに—下に「示させ給へ」など補ふべし

立ちて、娘なるぞさかし人なりける。傍に古びたる草紙引き散らしてあるを、徒然なるまゝに取りて見るたるに、如何にをかしき御心ばへもあらんと思ふたまへらるゝを、かきやり給ふらん御手ならひを見聞えばやなど、小き男の童して云ひ出せるを聞くに、彼酒ほしみたる男、にはかに口閉ぎなどするもをかしかりき。さるは誰が云ふならんと覚束なくて、鄙の長路の窶に、さるべき心ばへどもも、袂の下りとともに迷ひ果ててなん侍る、御もとにこそおはさめ、旅の心も慰めんに、こよなかるべし、かたはしをだになど答へやりつれば、暫く有りて同じ童、小き紙に書きたるをもたり。見れば雨のうちに郭公を聞くてふ題にて、

五月雨は事とふ人もあらざるにつれなく過ぐる山郭公

又戀とて、

思ひきや霜夜のとこに松蟲の音をのみ鳴きて歸るべしとは

となん。此松蟲は蟋蟀をふと書き損へるにもやなどいふ人もあり。とまれかく情ありけなる人ありけりと、怪しうて問へば、此童のはらからなりけり。思ひかけず、人ゆかしう覚えて見やりたるに、いたくきたなげなるものを著て、何にかあらん彼姉と囁いてい

やうかへて―趣異なりて。

ぬばたまの―黒の枕詞、烏は黒きより其枕詞として用ひたる也

ほど／＼しう―はかなしからずしてじれつたく

わはさからじと―我はかけ絶れじと

くゝだち―莖立、大根の莖などの類、菜をいふなるべし

今一つの物―

とのみぞ覺ゆる。辛じて八日に立出づ。そこらの家どもの軒に、みな藤の花を挿したり。此里にはいつも斯く習はしたりと云ふ。實にやうかへて、郭公も聲洩しぬべきものなりけり。今朝の空氣色よからず。

浮雲のかなたこなたに立ち迷ひおぼつかなくも何地行くらん

と云はれたるを、誰もさ思ひわぶる程にて人々哀れがりけり。斯て行くに、ぬば玉のからす川を渡る。よに早き水に逆ひてのぼる舟どもは、棹もさしあへぬにや、下り立ちて引くなる綱手のくるしげなり。野田のわたりも水の速きに、舟の得耐へず下るめれば、引渡したる綱を手操にくりつゝ渡すを見るは、ほど／＼しうなんある。しもつけ野の佐野の舟橋は名のみ残りて、其川だに何れならんといふ。

たが中の佐野の舟橋さのみなどかけ絶ゆるまで取り放しけん

わはさからじと云ひつるこそおふけなきなめれかし。佐野の何がしが家居とや、繁き木の間に深う見ゆ。岩舟出づるなど云ふ尊き寺を拜み廻りて、夕つかたに宿とりぬ。實によきくゝだちなど調じたるを、なはあれど今一つの物のありげにもあらざめりなど云ひて、男どもは笑ふを、おなかま、みゝなし山かはなど云ふ人もあり。此家の刀自は此頃旅

ごほ〳〵—雷の音の形容

今しも—今頃の時候にても、しもは強辭

まさぐり物にして—手でおもちやにしながら

むべ語りするは云々—尤もらしく話をするはいやなものなれど

あらぬ響—とんでもなき響、雷鳴をいふ

くし—屈し、氣がめいり

つま—端

さればよ晝つかたまたごほ〳〵となり出づ。かくてはとて、家長の住む所へ皆うつろふめるにも、すべて生きたる心地やはする。申の時過ぐる程には止みつれど、名殘なほけ畏しうて、起居ん心地もせずなん。今しも寒き所なれば、大きなる平ゐろりに、榾とて枯れたる木の太らかなるが、長さ三尺ばかりあるを三つ四つ打ちくべたるが、暖に火のおこりて、烟も無ければ、人々そこに圓座してあめり。主の翁髭をまさぐり物にして、むべ語りするはうたてあれど、かゝる時には頼もしき心地もせられて聞きをるに、此湯の水上は、此處より見ゆる高嶺より落つる水の、火石と云ひて岩二つあるに觸れて、かく湯となるぞ、いと怪し〳〵などいふのみぞ耳留られたる。夕つかた空も晴たれば、もとの所へ歸るに、かの櫻はいと哀れに亂れたり。

　伊香保風吹く日吹かぬ日しのぎ來てあらぬ響に散れる櫻か

とぞ獨りごたるゝ。今はくし果てわびしかれば、湯あむわざさへ物うくて、されたるおばしまのつまのいはの上におりて、つく〴〵と眺め居たるに、楓の木の若葉色深くて立てるは、

　なつ衣かへて程なき旅ながら憂きめに秋の花をこそ見れ

た降らんには甲斐無らましやなど、いひしろひつゝぞ行く。此かたへにある寺は、ゆあみする人を守ります御佛のおはすと云へば、參りたり。御前に短册に書きたるものはとて、取りて見れば、

秋ふかき山の紅葉を手折つゝ手向けんとすれば幣とこそ散れ

となんある。おもほえず珍らしければ書きつ。ゆくりなく雨の降り出でつるに、あわただしくて立帰へる程止みたり。今は衣更ふべき時にもなりぬれど、猶ありしまゝなり。

今日ぞとて更へなばさすがつらからん花の香しめし旅の衣を

しるしになど覺ゆるも、さすがに旅のなさけなりけり。或夜さり雨風烈しう物騒しき心地するに、神さへおどろ／＼しうなり出でたるぞ、思ひ掛けねば打驚きて、堪へねばふとうつ伏したる儘に、頭の上とも何とも思ひ敢へず、ひし／＼としつるは、魂今ぞ失せぬると思へり。偖暫く暇有るにきけば、只此すいがいのあなたに落ちたりけりと云ふに、おそろしなどは云ふも更なり。世の常にだにもあらず、かうしも人少なかれば、夜はすがらに、心ぎもの消えうする事數多度なり。朝けに、氣色やみたり、見よと云へば、はしに出て見るに、かなたの嶺は墨を磨りかけたる樣にて、雲のまよふこそ物おそろしけれ。

人丸「富士のねに降りつむ雪はみなづきのもちに消えては其夜降りつゝ」の歌による
しろひ—騒ぎ
ゆくりなく—思ひ掛けず
衣更ふべき時—四月一日の衣更へ
しるし—記念
ひし／＼と—落雷のはげしき音を形容したる也
すいがい—透垣
夜はすがらに—夜通し

やみのうつゝ—くらやみの中の物事又は心亂れたる時の現象の意にいふ、こゝは所謂輾轉反側の意なるべし
花より外に—金葉集「諸共に哀と思へ山櫻花より外に知る人もなし」
しもと—つゑ
いはけなきこ云云—幼き子の花を散すは恨むまじ、こは子と木とを掛く
半まり—餘り
花よりのちの—花散りて後までもなほ消え殘りたる
六月の望云々—十五夜、萬葉集

り。よべわびしくて、やみのうつゝにて明せしかば、今はと打やすめたるものは、身じろきもせず。日たけて起出でて見るに、葎の青うおひなりて、しどろなる垣根のなかば隠せるも、折にふれてあはれなり。外面の梢どもの中に、櫻の一木まだ散らでたてるを、皆人花より外になど云ひでまもる。年有が、

　伊香保風加何なる人の教へてかこの花ばかり吹き殘しけん

あはれなど言ふ程に、木のもとにわらはべ數多より來て、長きしもとどもをもて打散すめるは、帳のかたびらおほはまくし給ひけんをさなごもおはせしぞかしなどいひて、人人にくむ。

　吹く風のさそはんよりもいはけなきこの下に散る花は恨みじ

とたはれごとは云へど、心はゆくよしもあらねば、二人三人立ちいでて山邊を行くに、昨日見つる花は半まり散り過ぎて、綠深くなりぬるは、春も暮れはてぬめりとて見やるに、遠方の峯のいと白きは、花にだにしもあらで、雪なりけり。

　奥山は花よりのちの雪もあれば雪より後の花も見てまし

ふと思ふ事を歌の様に云ひなせるを聞きて、或人、六月の望迄待ちつけつとも、其夜ま

ける」

うしろめたし—不安心なり

如何にぞや—如何も宿泊め申す譯には參りすまい

さゝ枕—笹枕、或いはに寝ぬる意にて旅寝の事にいふ

いもねられず—熟睡もなし得ず

しのゝめの云々—夜の明くるも待ち兼ねて出發せり

かちゆのぼる—徒歩にて登る

によび—呻吟し

いづこ云々—どこ邊から御越しでござるか

何がしが嶽—淺間山

わたり—あたり、邊

そ—それ、伊香保の沼

と覺ゆるまゝに、つか短き筆をとうでて、そこの石に書きたるを、刀自も其かたへに、

よしさらばちりかひ曇れ櫻花やつるゝ袖のいろにほふまで

道もたど／＼しかるを、思ふ花によりては恨みやらで、やゝ里になりぬる程、雨少し降り出でて、行先うしろめたしとて、そこなる伏屋に、如何にぞやなどいなめど、しひて留りぬ。ましばのかきほもなにも、やれくつがへりて、影あらはなるに、軒さへもりていとわびし。更行くまゝに、玉水あはれに音するを、ならはぬさゝ枕はいもねられず、いとゞ袖の暇なき心地して、まことにうしと思へば、しのゝめの空もまちあへずて出づ。あきまの里てふあたりは、夢の樣にて過ぐ。榛名の山はいと神さびにたり。指を立てたらん如き巖多くて、峯のよそめなど、繪にしもまだ見知らぬさまなり。かゝる所はとて、おりてかちゆのほるに、えもたへねば、傍に寄りて憩ひゐたるを、三人四人によびつゝのほる女の、あな心うや、いづこばかりよりぞなど問ふがしたしまるゝは、足柄の關の山路ぞ覺ゆる。何がしが嶽は霞みて烟も見えわかず。伊香保の沼と聞ゆるは此わたりとかやいへど、知るべもなし。此大神の御手洗とて、いとゞ大きなる沼のあるやそならんなど、人々おしはかりに言ふめり。かくてゆあむべき所に至りて、兎角する程に更過た

ことにも出でず—口に出してはいはず
千鳥の云々—よろめく貌
おひずり—笈摺巡禮者などの背に著る一種の薄布のそでなし
むづかしかれば—うるさくあれば
わたる瀬川—渡瀬川、今は「わたらせ」と讀めり
きね—女みこ
雨づつみ—雨を避けて家に籠り居ること
足曳の—山の枕詞、直ちに山を指していへり
空に知られぬ—新古今集「櫻散る木の下風はさむからで空に知られぬ雪ぞ降り

と覺ゆれど、かの耳ときがうるさくて、ことにも出でず、おほかたに物して立ちぬ。きく水寺と云ふらむあたり、平かなるにも、皆人なやましうて、足は山邊なれど千鳥のあとふむらん樣にてぞ行く。水泳てふ寺に、おひずりてふもの納むるとて、よに田舍めいたる女の、ひとつ所に寄り居てさへづるが、かしがましうむづかしかれば、此處もさるべき程にていでつ。わたる瀬川てふ川は、武藏と上つけ野のあはひにぞあなる。をちかたの雲にまがひて見ゆるは、信濃なる淺間の嶽と、この心ざすなる伊香保嶺なりとなんいふ。いづこともなく遠きさかひの名所とのみ聞きつるを、かく見やるぞあはれなる。來と來て妙義の御山に參る。きねが鼓音あやしう、少女子が打ふる袖もゆゑよし有りげには見えねど、さすがにをかし。立出でなんとするに、今も降りぬべき雲のけはひすれば、雨づつみしなど人々のゝしり聞えて行くに、いづこともなく風のさそへるは、如何にやなど云ひて、ふと見やるに、足曳の遠き近き、雪と覺しきまでの櫻なりけり。里吹く風に亂るゝは、空に知られぬなど云はれて、過ぎもやられぬを、人は暮れぬめりと云ふ。さかし葛城の雲かは、いかでなど云ひしらふ。

散る花を衣手ごとにつゝみもてかゝる山路の思ひ出にせん

たづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」
日數とともに―日數が重なると共に
ほど〳〵しき―へこたれてしまひさうになる
あらはに拜まれ―開帳なるべし
たのもし人にて―力にして
かげもり―影森、大宮の西南一里、武甲山の下
望の夜―十五夜
さゝやきたる―私語したる
つぶ〳〵と―ありありと

ぶの寺に籠りぬ。日數とともに尊き御寺どもを行きめぐるが、峯高く谷深ければ、心がまへすれど、路の狭き程は、あまたゝびほど〳〵しきにも、經の聲々山彦も答へあひて、いとこそ物の悲しう覺ゆる折なれ。此度は此寺々の御佛のあらはに拜まれ給ふとて、あるとある人、老たるも若きも、杖をたのもし人にて縋りたる、よそめもいと苦しきや。暮れゆく程、しものかげもりに宿りなんとす。妙見山と云ふ峯より、望の夜の月のさし登りたるは、此世の物とも覺えず、母刀自、

　春の夜の花ににほへる月影の妙なる光いまこそは見れ

年有、

　嶺高き霞のひまに影もりの里の名しるき春の夜の月

行き〳〵てさゝのと云ふ寺にもなりぬ。此御佛は、つかうまつりつる殿にむかへいれ奉れ給ひてしよなど、覺えつるまゝにさゝやきたるを、そこなる法師のとく聞きて、さらばとて彼の姫君の御ために奉れたまひし、御はたや何やと取う出てけるは、いみじう哀れにて、有りつる御さま、つぶ〳〵と思ひ出づるも胸ふたがりぬ。

　露深き笹野の奥に分入りて今日はた袖をぬらしつるかな

をこになりて―はか〴〵しくなりて

雲のまよひ―雲の立つに途を迷ひて、新古今「一聲は思ひぞあへぬ郭公たそがれ時の雲のまよひに」

むすび―掬ひ上げ

遠近人―遠くの人近くの人、誰彼

そこはかとなく―どこといふ事なく

人來―鶯の鳴き聲、古今集誹諧歌「梅の花見にこそ來つれ鶯のひとく〳〵といとひしも居る」

よしなしごとはすれど―つまらぬ口はたゝけど

たづきも知らぬ―「をちこちの

　　惜むともたゞん嵐は如何にせん散る花ごとに手をやさへまし

と覺ゆるも、何時の程にか路行き人の心にはなりにけん。入間の川を渡り行くに、山寺の鐘の音聞えて、哀なる雲のまよひに、いかで遲れけん、ほのかに聞ゆる鴈がねを、人人あはれがる。

　　わかれには田のもの鴈もわびぬめり心よりにし三吉野のさと

となん云ひて、さかもとてふ所の山の尾上に、山吹のいみじう咲渡りて、岩間行く水の音なひも、こよなう心行くけしきしたれば、人々よりてむすびなどす。猶かくてやはとて行くに、元より道知れる人しもなくて惑ひたりけり。遠近人の行交もあらず、山人のつま木のみこゝ彼處にこりすてたるが、すゞろに覺束なく心細し。たゞ鶯のそこはかとなく木の深き方に鳴くを、かゝるをりは呼子鳥こそたより有る心地せめと人の云ふに、實に人來と厭ふはことの外の心にも有るかななど、よしなしごとはすれど、たづきも知らぬとのみ唱へられつゝ、それが中に、年有が、

　　こしかたもこの行末のおく山の奥にも春のうぐひすぞ鳴く

いたくなわびそなど云ひつゝ、男どちは事ともせず、辿り惑ひて里に出づ。今宵はしま

母子の草―原野に自生する草、ひきよもぎともいひて三月三日の餅の中に交へ搗くもの、母と子との旅寐に掛けたる事いふまでなし
みかのもちひ―三月三日の草餅
立ちの急ぎに―旅立ちの仕度に取紛れて、むら鳥には立ちに掛る枕詞
いとによる―古今集「糸による物ならなくに別路の心細くもおもほゆるかな」
おろそけ―おろそか、粗末
一夜寐ぬべし―萬葉「菫の野に菫摘みにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」
公より云々―驛鈴をいふ

野邊はまだ夜はの春風さむからし母子の草の枕からすなと侍り。實にみかのもちひも時過ぎつれば、今は假寐の枕にやと思ふもをかし。人々心ばへあるも多かりけれど、むら鳥の立ちの急ぎに、はかなき跡をも留めずなりぬるはわろかりき。父のみのさりげなうもてなし給ふがさらなれば、いとによる物ならなくに、そがひに心ひかれつゝ、かへり見すれば、梢ほのかになりにたるを、たゞことに、

父にわかれ母にしそへる心をばゆくとやいはん歸るとかせん

と云ふ程に、何時しかも田舍だつ家居の、おろそけなる竹垣もめづらしう、武藏野は菫の色濃きところなりけり。見はやしつゝ行くに、おのがじし一夜寐ぬべしなどはいへど、茲は過ぎて、大井てふ驛に宿りぬ。朝けの駒の鈴の音して行くは、我も勇む心地せり。昔公より賜ひたるをならしつらんがうつりて、さらぬ馬どもの頭に、小くてかくるにやと、知らぬ事を云ひ定むるもをかし。空少し明りたるほど、春の野の朝露に、淺緑なる梢どものほの〳〵と霞み渡れるは、たとふべきものなんなき。人めなげなる垣ほの櫻の、わび顏にうつろふがをかしうて、守りゐたるを、主と覺しくて、手なふれそといふべき氣色してあめるを、をこになりて、

けはひ—氣色、樣子
霞むものから—霞めどもなほ
振りはへつゝ—古今集「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ」
菅の根の—長きの枕詞
物おだしう—心がおつとりとして
あやなの—あやなき、つまらぬ
出湯—溫泉

伊香保の道行きぶり

倭文子

うら〳〵と明くる朝よりしもよ、物のけはひ改りて、大路も遙かに霞むものから、淸う見渡さるゝに、振りはへつゝ行き交ふめる袂どもの、とり〴〵になまめかしう覺えて、先こそ野邊の遊はゆかしけれ。やう〳〵咲くと見し間にうつろひもて行くを眺めつゝ、散る花の心のいそぎを知る〳〵も、菅の根の長き日影にならひて、物おだしう、萬の事も忘るゝ樣にて、徒にのみ過いなんは、一あやなの業なめりと思ひとれど、遠き野山を分けむことは、知らぬ霞の心もおぼつかなくてあるに、猶思ひたつ事の侍るめるついでに、かみつけ野の伊香保なる出湯あみてんとて、母刀自のそゝのかし伴ひ給ふれば、彌生の十日まり一日になん出で立つ。又親とか云ふべくおぼゆるわたりより、送り聞えて、伊香保風引き給ふなよ、猶雪も消えぬあたりと云ふをなどありて、

りてむと思ひなりしより、今年文化といふ年の四とせ、ながつきとをかまりみかの夜、清水の濱臣、しのばずの池のみぎはなる、さゝなみの屋のおばしまにより居て、月影にたどたどしき筆をとりて、そのよしいさゝか書きつくるになん有りける。

ものつくりいでたるなむをさ〳〵聞えぬ。いとちかきころ、なにがしのおもとが松陰日記とかいふなるふみかきつゞれるを、今の世のめつらしき事には常々いふめれど、あまりくだくだしきに過ぎて、ひとわたり見るだに目のいとまたへがたくおぼゆるを、それはた此頃の女房、たれひとりまねびも得つべきあらむ。こゝに此一巻かき日記せし武女といへるは、享保のころほひ、いとさかえ花やぎたまへるそれの殿の、うつくしみ時めかさせたまひし白拍子にてありしとぞ。それがはじめをはりさだかにも聞きつたへねばしらず。今この筆ずさびを見るに、たゞに言葉うるはしく書きあやなせるのみにあらず、その心高くおもひあがりて、されたる口つき、かの紫の物語、淸原のさうしなどを、よく腹にあぢはへずして、いかでかはかくまでうまくしもいひおほすべきや。よりて思ふに、いにしへのあそびくゞつどもにもおとらじ、今の世のなま歌人たちにもまさるべくなんおもひめでられぬる。かくあまりにをかしくもめづらしくもおぼゆるからに、いとまのひま〳〵、引歌や何やと、赤き青き墨して、かたにかしらに筆そへおけるを、さらに淸くかきあらためて、板にさへゐ

いでやむかしよりあそびくゞつやうのものの、言の葉の道にその名きこえ傳れる、世々に數少なからずなむありける。そがなかにも、おふけなく勅撰をけがせるたぐひをいはゞ、古今の白女、後撰の檜垣、後拾遺に宮木、詞花に蹊、續詞花に阿古麻呂、千載は戸々、新古今は妙、玉葉は初若など、又さらぬ後の冊子どもにも、撰集抄に江口の尼がくちすさびを載せしより、盛衰記の侍從、湯谷、平家物語の祇王、承久記の龜菊、曾我物語の虎がともがら、皆人にもしられ、時にもゆるされしなるべし。しかはあれど、たゞ一つ二つよみ出でたるが、人の耳にとまり、鳥のあとに殘りつたはれるのみにして、はかぐ\しくしるしおける物らも見きゝおよばず。さるはおのづからみやびたる世のならはしにひかれて、をりにふれしすさびわざなるべければこそあれ、たれかは歌の林を分け、詞の泉をくみて、深くしも心に思ひいれたるならむや。かの檜垣のおうながやうに、家集さへ今に殘せるは、まれらなる事になむ。こちよりて二三百年がほど、みやび事のやうく\おとろへ來にしよりぞ、宮のうち、殿のおまへなどに、めしまつはせる女房だちすらも、物がたりぶみめける

り給へり、と妹のいふ。

庚子道の記　終

料の新

かたしろ―形代、身の形を作り罪咎を祓ひ負ふせて流しやるもの

はゝこ―ひきよもぎ

ときめきして―どき〳〵して

ものぐるはしき―氣がふれたる

ねびまさりて―立派に成人して

うちいでん云々―言葉を掛けんも恥しくてや

あさましきまで―餘りなるまで

つら―頰

はなせまりて―悲しさのこみ上げたるをいふ

やなども思ふらんよ。明日は府にまゐれば、公私の用意ありとて、男のかぎり、皆戸塚の宿にといそぐまゝに、一人のどかにも行きがたくて、同じ樣にやどりにつきぬ。三日の夜より雨ふり出でて、つとめても猶やまず。金川、河崎、品川などいふ驛々もたど過ぎにすぎ來て、芝にまゐる。こゝより大路のさま、たかき賤しき袖をつらね、馬車たてぬきに行きかひ、はえ〴〵しく賑へるけしき、七年のねぶり一ときにさめし心地して、うれしさいはん方なし。その夜は御館にありて、三月五日といふに、ふるき家居にはかへりぬ。いふかひなけれど、親族のかぎり、近はをばいとこなど待ち集りて、とりどりに何事をいふもまづおぼえず。幼き妹の一人ありしも、いつかねびまさりて、髮などあげたれば、我方には見わすれたるを、かれよりうちいでんもつゝましくやありけん、をばの後にかくれて、なま恨しとおもへる氣色に見おこせたるまゝ、猶心得ずして、そこにものし給ふはいづれよりの客にかおはす、ゆゝしげなることには侍れど、過行きはべりし母のおもかげに、あさましきまで似通ひ給ふめるはと問へば、かれはうつぶしになりて、つらももたげず、をばもはなせまりてものいひやらず、皆はと笑ふにぞ、はじめて心づきぬ。かくて盃あぐるほど、老たる父のさゝ目にいまずが、やがてまゐ

や也
くぎぬき—柵の類
かしこき蔭—枕草子の文に取る、力と頼みたる意
ふくだみたる—ぶく〳〵になりたる
あえてけり—びつしよりになりたり
あそびくゞつ—遊女、傀儡師、本文の筆者武女は遊女の流也
節はさつき—枕草子「せちは五月にしくはなし」とある文による
空さへ醉へる—菅家文草卷五、花時天似醉序に「春之暮月月之三朝、天醉于花、桃李盛也」
巳の日のはらへ—上巳の節
鹽木—鹽を燒く

れかゝりて、いかに見ぐるしからむと、汗あえてけり。さはいへあそびくゞつの類は、人のほかなる定ありとて、いさゝかのさはりもなく通し給ひつ。嬉しとやいはまし、悲しとやいはまし。今日は坂あまたこゆるに、山駕籠も不要なりとて、歩み苦しき石の上を、徒歩にてたどりけるまゝ、いといたう勞れ困じぬ。畑、湯本、風祭、小田原、節はさつきとかや。されど彌生の三日こそ心もはなやぎて、桃のにほひに空さへ醉へるけしきは、あやめの長き根も、かけて及ぶまじうおぼえたれ。早川の瀬わたるほど、巳の日のはらへおもひいでて、

早川にくだす鹽木をあまの子の身のかたしろと人や見るらん

川をわたれば、酒匂といへる里なり。こゆるぎの磯ちかき苫屋の内にも、ひゝなあそびするをとめどもは、桃、山吹の花などこちたきまで瓶にさし、けふの日のくるゝををしと思へる樣なり。野に出でてはゝこなどつむもあるは、今日のもちひの爲なるべし。七年のむかし此所を過ぎけるは、九月九日にて、別れ來し親はらからのことなど思ひ出でて、悲しかりしに、今日は一二日のうちに逢ひ見ん事をおもへば、うれしきあまり、心さへときめきして、それとなくうち笑みがちなるを、かたへなる人らは、ものぐるほしきに

行き歸りみしまの神の宮よりもふりぬるものは我身なりけり

はこね山に入るに、初音が原といふ所をすぐ。枯れたる杉のむらだてるうちに、鶯のひなどもの巢だちたるが、多くなくをきくに、春ははやおくれたれど、猶めづらしき心地す。何某の僧正にきかせ奉らましかば、郭公ならでも覺すらんよなどいひて、すける人々は歌よむもあるべし。みつやなどいふあたりは、綠の林しげりたる陰をたのみて、世に知らぬ者の、旅行く人をわづらはせしこと、昔は有りしにこそ。今は里人の家居もあまたたち續きて、道ひろき御代なれば、心ゆるして、馬の上、輿の内などにある限りは、ねぶりてさへも行くなり。山中といふ所に糸櫻の見ゆるを、

玉くしげ箱根の山のいとざくらあけなばいかゞ夜のみぞ見む

といへば、月の夜などはこの歌もあはれならんとて笑ふ。げに旅にていひ出づることは、常のに今ひときは劣りて我さへ覺ゆれど、後引きなほさんもものうくて、さて置きしなり。午の時ばかり關にいたる。山のかひにはくぎぬきしわたし、關屋には弓やなぐひなどきら〳〵しう置かせたれば、ことなき身にも胸つぶれ、手足さへぞふるふ。かしこき影とたのみつる笠も扇もとられたれば、つくろはぬおもてに、ふくだみたる髮のこぼ

とりの様になむ有りける」といふを解して、定家卿伊勢物語勘物に「事凡卑也不可用之」といへるをいふ　さはりがち―見角さはり多くて、此時月経なりし也、和名抄に「月水俗云佐波利」　みしま―見、三島　何某の僧正―金葉、權僧正永縁「きくたびにめづらしければ時鳥いつもはつねのこゝちこそすれ」この歌によりて初音僧正とよばれし事袋草子に見ゆ　緑林―賊を緑林といふ事漢書光武紀に見ゆ、世に知らぬものは即ち賊にて、見て文のあ

名づくと也

屋のむねより云云—「賀茂大神をさし奉るなるべし、そのよし山城風土記に委しく見ゆ」と原本の頭註にいへり

おほよすげし—年が上なりし

殘月云々—元政法師身延道記に、此詩七言古詩にて、起句「殘月送」吾清見關、面頭猶見三穗邊」とあり

こゝろぶと—心太、ところてん

奥—奥州

折—今の時候

今めきたる—當世風の

すそご—上をぼかして下の濃き染め方

鹽尻といふ名の云々—伊勢物語に富士を形容して「なりはしは

深草の上人の、母をぐし奉りて身延へまうで給ひしに、「殘月我をおくる清見が關」とつくられしは、からうたなれど、えんに聞きなされて、まづ思ひ出でらる。今は波のみ關もりて、むかしのあとはなけれど、猶心はとまるなり。蒲原へかゝる山道の左のかたに、岩もる雫のしたゝるを、清げにものにうけて、こゝろぶと賣る者あり。此水は九郎義經の硯の水といひつたへぬ。冠者にて奥へ下り給ひし時、此水のもとにて、都への文など書い給ひきと、まのあたり見しやうにいふを、皆人いみじがりて、折はまだ寒けれど、心わかう水のむもありけり。浮嶋が原より、富士の山ちかく見ゆ。いたゞきには雲のたなびきて、肩のほとりより雪いと白うかゝり、裾はすべてみどりに見ゆめり。今めきたるすそごの几帳など立てたらん樣の、筆にも言葉にもいひつくしがたきけしきなり。鹽尻といふ名の、あてにも聞えぬを、京極中納言のにくしと思ひ給ひけんも理なりや。

　ちりつもる山てふ山をかさねてや名高きふじの峯となりけむ

かくて千本の松原を見やりつゝ、沼津の宿に屋どる。二日は關をこゆとて、夜ぶかく宿をたちて、星の光やゝしらむころ、伊豆の國府につく。三嶋の神の御社の前にしばしいこふほど、女はさはりがちにてえ詣でず、心ばかりのぬさ奉るついでに、

すゞろなるめ云云―飛んだ思ひをする。めに目を見るの目と海布とを掛く

世の中の云々―白氏文集太行路「水能覆舟、若比人心、是安流」の意にとる

神の御厨―祭祀の料とすべき神社所有の財産をいふ

ふんやのすけ云云―圖書助相當正六位下

もたる―持ちたる

三保は姫神―或書に引ける駿河風土記に依るに、祭神御穗津姫命、御穗津彦命。御穗津彦は大己貴命、御穗津姫は其妃なりといふ、二神出雲國三穗ケ崎よりここに遷座し給ふ故に三穗の神と

より見し樣は、海原の中にさゝやかにさし出でたる所なれば、さこそ心ぼそう、すゞろなるめのみ見るらんと思ふに、そこに到りて見れば、さもあらざりけり。波の音風の聲などこそ騷がしけれ、それも世の中のわたり苦しきにくらべては、いつもなぎたる心地こそせめ。神の御厨の、昔より寄せられたるあれば、朝夕のけぶりたゆることなしとぞ。宮司は太田といへるが、ふんやのすけにて、六位のものなり。娘一人もたるを、いたうかしづける樣なり。客人のある時は、必ず此娘に箏すゝめて、其夜もひきけり。呂律のしらべにこそあらね、筑紫箏の賤しげなるも、鄙には有りがたう、珍らしう聞ゆ。三保は姫神におはすればこそあれ、彼屋のむねよりおよび給ひけん神などのあたりならば、親のいかに心もとながらんとをかし。娘は已に三つ四つもおよすけしやうに覺えたれば、嫗にやなりにけん、いかに緣などさだまりて、子などもたるか、それと迯にものなど聞えしことはなかりしも、旅寐の物寂しきにつきて、かゝる人の上さへ思ひ出でられてこそなつかしかりしか。三月朔日、江尻をいでて、興津のあひだ、かの名だたる松原見えたり。

淸見がた霞のまより見わたせば浪にたゆたふ三保の松ばら

きわざを、唯木の端などの樣に思ひたらんこそ、いとほしけれ。精進物のあしきを食ひ」
々

たゞ春の日に—新古今春上、壬生忠見「やかずとも草はもえなんかすが野はただ春の日にまかせたらなん」

けそう—顯證、あらは

かんざしも云々—禮內則に「女子十年不出(中略)十有五年而笄二十而嫁」

面影に立つ—其樣子が目の前にちらつく

家もひろく—一門も榮えはびこり

みやま木の中に櫻の咲きたるを見つけたるは、誠にしるべ得たる心地して、めづらしくも哀にもぞ覺ゆる。散りて谷川にながるゝ樣、はためでたし。

　雲と見え雪とちり行くはてはまた花のなみたつ宇都の山がは

丸子の宿のうしろの山に、火の高くもゆれば、うちおどろかれて、あれは如何にと問へば、蕨のため燒くなりといらふ。たゞ春の日にと思はるゝに、風さへ吹けば、いと心もとなし。

　春の野に下もえいそぐ早蕨をさのみは人のやかずもあらなん

阿部川のほとりより暮れかゝりて、賤機山もけそうには見えず。

　鶯のこゑのあやめもわかぬまではやくれそむるしづはたの山

こよひのやどりは江尻といふ所なり。そのかみかんざしもせざりしほどにて、伯父なりける僧にぐして京へのぼりし時、此宿に伯父の僧のしれる人あるが、三保の松原見せし事ありき。家のうしろより舟さし出でて、富士は更なり、伊豆、駿河、海越に信濃の山山さへ見えわたる景色、今も猶面影に立つ心地す。松原のうちには、三保の御神のみやしろおはす。祝などの妻子具したるが、家もひろく、從者などの多くて住むなり。よそ

あうよりて—奥の方へよりて

式—延喜式神名帳

花のたよりにつけて—社頭に花の咲き匂へるにつけて始めて神社のあるに心づきしと也

柳さび、もろ眉—ともに烏帽子の名、柳佐比は無位社人の著用、諸眉は攝家等の公達著用

宇都の山越—伊勢物語の趣にとる

精進物云々—枕草紙「思はん子を法師になしたらんこそはいと心苦しけれ、さるはいと頼もし

はもらしつ。ふせ屋の板敷に尻かけて、しばしおくるゝ人まつほど、

　大井川みづおとたかきよひ〳〵は岸のとまやに夢もむすばじ

とおもひやらる。島田の入口ひだりのかたへ、並木の櫻うゑわたして、あうよりて玉垣しわたしたる社の見ゆるを、いかなる神にかおはすると問へば、大井の神とをしへぬ。いづれの神をまつりけん、式などにのり給へるかしらず。幾度か廣前をすぎながら、花のたよりにつけて、今日なん見いでたてまつりたる、

　なほざりのぬさとは見えず神垣にはるの手向し花のしらゆふ

瀬戸川をわたるに見ゆるを、烏帽子山とをしふ。柳さびなどのいやしきにはあらで、もろ眉のかすみにこもりたるが、いとをかしと覺ゆ。宇都の山越に、修行者二人三人あひたり。むかし物語のけしきにはあらで、馬に乗りて行くなりけり。法師などは、いつも徒歩にてやつれたらむが様よくやさし。此行者どもは肥えあぶらづきて、常に精進物のあしきをくふとは見えざりけり。彼にそゞろなる文などことづけたらば、物ゆかしがりて、己まづ開きても見るらむとおもひやるも、罪ふかくや。山の峽に菫のさきたるを、

　やよ菫こゝろにまかす旅ならばひとよはねなんうつの山べに

圓位上人―西行法師、天龍のわたりにて乘合の人にうたれたるよし、西行物語に出でたり

毛をふき―漢書武帝紀「吹レ毛求レ疵」

承久のむかし―承久三年七月中御門前中納言宗行此宿の柱に、題したるをいふ

光行朝臣の云々―海道記に「さよの中山にかゝる（中路）此所はその名ことに聞えつる所なれば、一時のほどに百たびたちとまりて打ながめゆけば」云々とあるをいふ

水おちて―東坡後赤壁賦「山高月小水落石出」

べし。見附の宿、

さらでだに毛をふき疵を求む世に見附といへる里の名ぞうき

懸川葛布おほし。

かけ川にさらす葛布かずならぬ身のうはぎにといざ求めてん

承久のむかしを思ひいづるに、菊川いとあはれなりや。袖しきかぬるとよめる歌のあるに、けふは雨さへ降りて、げに私の旅ならば、やどらまほしきなり。

今もなほかやがのきばに雨もりてむかしおぼゆる菊川のやど

小夜の中山は名高きところなれば、今いふもさらなり、光行朝臣のかき給へるものにも、いと面目あるさまに見ゆ。

齡はまだ三十がほどに往くと來と八度こえけり小夜のなか山

夕ぐれ大井川の水まさりぬれば、駿河へわたらで、金谷にやどる。

晦日、雨はれて日うらゝかになりぬ。河原へ出でて見るに、やゝ水おちて石いでたり。されどもとつ瀬わたるほど、今やさかまく水におちいらましと、おそろしさいはんかたなし。辛うじてむかひにつきぬ。後思ひ出づるだに、筆ふるへて、そのをりの事大かた

いぎたなく―寐坊なること、玆は寐ざう惡き義に聞ゆ

濱松の音は―「ざゝんざ」とはやす也、足利義教公富士見に下向の時、こゝの松のもとにて積松の音はざゝんざとうたひて酒宴せりしより名づけて、颯々松といひ、野口村の田圃の中にありといふ

じちえう―實要まじめ

源内侍―源氏紅葉賀に見えたる女

みさかなには―催馬樂呂、我家「わいへんは、とはりちやうをもたれたるを、大君きませむこにせん、みさかなに何よけん、あはびさだをるぜよけむ」

道につかれて人々のいぎたなくしたるを見て、忍びやかにかくつぶやけば、例の口さがなさよとて、今宵も制す。引馬野ははやくより濱松ともいふなり。げに濱べの松どもの、おほく生ひたりしが、風にふかれて颯々となる音のいみじうめでたく聞ゆ。人のかしづくむこぎみなどの來り給ふに、酒のみたちて、濱松の音はとをのこどものうたふは、この所よりのことならんかし。

濱松にあらしふく夜はことさらに大君きませいざ二人寐む

女ともだちのわかくじちえうなるは、かほうちあかめて、なほわびし、かゝるそゞろごとは、源内侍などこそいひつれと惡むに、あらず、よのつねの人こそものはぢはすべかめれ、あそびの者の上らうらしきは、いまやうならずとて、みさかなになによけん、あはびさだをかかぜよけんと歌へば、何につけても皆をかしやとて、ほゝとさへ笑ふ。

二十九日、濱松を夜深に出でぬ。雨ふり出でて、よこざまにしぶくめり。あけぬ程、わびしさいはんかたなし。天龍川わたるとて、

舟さして雲の水脉ゆくこゝちしぬ名もおそろしき天のなか川

圓位上人のはづかしめられ給ひけんむかし人はいかに、棹の雫ならでもたもとは濡れぬ

濱名川―夫木、澳、土御門院小宰相、第二句入汐さむきと有り
荒江―荒非
客舍云々―原句「客舍幷州已十霜、歸心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却望幷州是故鄕」
をこなり―馬鹿らし
舟こぞりて―同舟の人一同、伊勢物語の句による
曳馬の宿―濱松
ねのび―子日寐伸

小宰相の君の歌に、「濱名川入しほ遠き山おろしにたかしの沖もあれまさるなり」とよみ給へるも、此所なるべし。たかしの濱、高砂の沖などは、和泉にあるをぞ歌にはよめる。また濱名の橋は入江にかけられし橋なれば、濱名川とよみ給へるもいかにぞやなどいふ者のありし。さはれくだれる世の人のいかで古への事をばさだむべき。荒江ふねにてわたる。けふは風もなく、わづらはしからず。唐に賈島といへる人の、幷州といふ國に久しう住みなれて後、都にかへりのぼりける時、桑乾といふわたりすとて、思ひつゞけたりしからうたの、今身のうへにあひたるをふと思ひいでて、いといたうあはれにて、いくたびか誦しけるに、文字五つ六つかへたれば、惡う聞ゆるも一つは興あり。

客舍尾州已七霜　歸心日夜憶東陽　無端更渡新江水
却望尾州是故鄕

かく誦するををこなりとて、舟擧りて笑ふ。なにかさのみはおとしめ給ふらん、才も不才もみな故鄕ひとつはもたるをといふを、又笑ふもをかし。舞坂につきぬ。なほ行き行きて曳馬の宿にやどる。

ひめ小松ひくまの野べのかり枕けにねのびする人ぞおほかる

と論じて通る人もありと也、詞の文句に取る
たかし山—夫木、爲家「たかし山ゆふこえはてゝやすらへばふもとの濱にもしほやく見ゆ」
白菅—枕冊子、「濱は白のわたり」今の白須賀
荒江—今の荒井
ろく—祿、褒美
かづけさせ—賜ひ
板田のはし—萬葉十一「をはりだの板田のはしのこぼれなばけたよりゆかんなこひそわぎも」

　道いそぐをちかた人もとまりけりたかしの山の花のしたかげ

潮見といへる坂の上よりは、遠江のうなばらはる〴〵と見わたさる。たかし山ふもとの濱とよめるは、此わたりなるべし。馬おふ男のかたりけるは、十年ばかり昔の事なりけり、難波よりあづまへかよふ舟の有りしに、この白菅のみなとちかくにて、あらき風にあひ、舟は岩にあたりてくだけつるに、帆ばしら楫などの折れたるにとりつきて、十一人乗りたるもの、一人もしづまでたゞよへるが、日數十九日經しとぞ。二十日にあたるあした、荒江の沖にてつりするものどもの見つけて、あはれがりて、おのが舟にたすけ乘せ、關所にまゐりてかう〳〵と申しつれば、よくもつかまつりぬとて、公まできこえ上げ、ろくなどかづけさせ給ひけり。さてかの舟人どもの中にも、老いたるが一人なくなりて、殘はみな事なくながらへつゝ、今なほ難波にかへり住みて、年毎にかの釣人のもとに消息し、むくいすとなん。げにかばかりの不思議の命もあるものにやあらん。濱名の橋は跡だにさだかならず、過來し里の名に橋本などいふ所のあるや、昔のなごりならむ。板田のはしならば、せめてけたよりも行かんを。

　名のみなほ聞きこそわたれ東路のはまなの橋は跡だにもなし

にかきつばたいとおもしろく咲きたり云々

ひぢかさ雨―俄か雨、六帖「いもがかど行過ぎかねつひぢかさの雨もふらなんあまがくれせん」久方の雨といふ枕詞より轉訛せるならん

難波わたり―更科日記にも「難波わたりにくらぶればなどめでたくうたひたり」と見ゆ、古謠也

だみたる―訛りたる

ひたゝけぬ―濁みなくなりたる意

しり給ふ―治め給ふ

草のかきはも云云―治平の世にさる事あらんや

かきつばたへだつもあやし心にはかけつるものをぬまの八橋

二むら山はあとなりけん、宮路山は此あたりなるべけれども、矢矧の里すぐるほどより、名さへなつかしからぬひぢかさ雨とかふり出でて、簑つけし馬いづらなど、従者ども立ち騒ぐほど、いぶせき籠のうちにありければ、ものも覺えず。藤川といふほどより、日もくれしなるべし。御油の宿に宵すがりて著きぬ。こゝには女どものあまたありて、たはれ男の心とるけしきなり。難波わたりなどうたかにもあらで、たゞだみたる聲して、さかしらに口迅なるものいひ聞ゆ。

おのづからみもひたゝけぬ旅やかた恥しと思ふ人しなければ

あなかま、女のほこりかなるは、人のにくむにをといふ。二十八日つとめて御油をいづ。吉田といふ所の橋をわたれば、左にをかしき山の見ゆるを、人にとへば、石巻山とぞいふ。このあたりしり給ふ君のうへに、もし不思議の事あらんとては、此山の鳴る事ありとぞ。草のかき葉も言やめし世に、ある事にかはとあらがうて過ぐる人もあり。高師山は文字にかきけるがいみじう目だたし、いづれの山に何をか教へて、さる名をばおひにけん。又みやこさへまだしと思ふに、山の櫻咲きたるもあやし。

がはなる」
くたさん―けたさん
やさしう―恥しく
琵琶の音に云々―治承三年妙音院太政大臣師長公を尾張國井戸田へ流罪の事、又熱田明神公の琵琶の音に感じたる事など盛衰記、平家物語等に見ゆ
古き道の記―増基法師の遠江の道の記、藤原孝標女の更科日記などに見えたるをいふ
つく―ことづく、依頼す
八橋―伊勢物語三河の國八橋といふ所にいたりぬ（中略）その澤

熱田の鳥居濱にいづるほど、夜あけにけり。井戸田といふ所は、いにしへやごとなき人の、しばし住み給ひしあとなり。琵琶の音に神のめでたまひけんなど、いとかしこし。鳴海をすぐとて、

うきにさへなれて鳴海のあまたゝび浦の濱路を行き通ひぬる

といへど、今は浦づたふ道はおきて、上野の道のなほ上をぞゆきかふことになんなりぬる。尾張と三河とのさかひ、志賀須香といふわたりせしよし、古き道の記どもに書けれど、今はさるわたりありとも見えず、境川とて細きながれのあるに、土橋ひとつかけたり。これまでおくりにとて來し人のかへるに、尾張にその人のもとにとて、文かきてつく。

うかりしも今ぞ戀しきしかすがに住みこし里を出ぬと思へば

としごろ尾張をすみうくのみ思ひしに、三河にかゝる程は、さすがに名殘も惜しかりけり。ふみのことばにも、志す故郷にとくつきてなど書きしを、れいのわびしき心よと、あとにさへ言ふなるべし。八橋は中將のいこひ給ひし所なり、今もかきつばたの咲くにかあらん、道のついでならねば、よそになして過ぎゆくものから、

女は云々―禮檀弓下「婦人不ㇾ越ㇾ疆而弔ㇾ人」
あまの子―朗詠「白浪のよする渚に世をすぐすあまの子なれば宿もさだめず」
さそふ水―古今雑下、小町「わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」
うちとけて―後撰戀五、「こひしくばかげをだに見て慰めよわがうちとけて忍ぶ

庚子道の記

武女

女は疆をこえずとこそ、ふるき書にもいへ。されどそはうるはしき人の上なめり。あまの子のよるべなき身は、さそふ水にまかせて、西へ流れ、東へさすらひて、つひの終さだめかねぬるぞ、あはれにあさましきわざなる。しかりとて如何はせむ。此春は故郷のあづまの花に催されぬ。七年あまりなれし人々のなごりも大かたならねど、なほおやのおはさん方に心いそがるゝを、かのうちとけて忍顔なる心になんあると、人の思ひくたさんも、さすがにやさしう、はたわづらはしきすぢなりけり。かくいふまでは、なほ尾張のくに名古屋なりき。二月二十日あまり七日のあかつき深く旅立ちしに、細うかすかなる月の、霞のそこに見えたる、れいよりもことにあはれなり。

あすもまた見つゝを行かん月ながら此あかつきは涙おちけり

さゝなみの屋のあるじ、ふみのうみにあさりして、よにめづらしき玉に貝に、かづきいづるわざにいそしかるが、このごろひとつの玉をなむえたりける。そのたまは、わたつみの神のいつけるとしもなく、あまのあかるたまのつくれるにもあらず、となかのいくりにまじりたりければ、なみ〴〵のあまならましかば、たゞに見過すべきを、しらなみのやへをりの上をかしこしともせず、やしほぢのしほのうづしほをわけ、千ひろのそこひをきはめてしも取り得たる眞玉になむ有りける。かくいそしきあまにしもあらざらましかば、もにうづもれて、知る人もあらじを、よにあらはれいでしは、この玉のさきはひといふべくなむ。にしごりのをぢのはしがきにつきぬれば、なにをかいはむ。たゞことゝはぬま玉にかはりて、よろこばしさのひとことを、ことあげするのみ。

橘　千蔭

らずといふを、かへさひよみてあぢはふれば、げにも詞の源をよく汲み知りて、清きみづぐきの跡をぞとゞめたる。今このなずらひをいはむには、いにしへの女房のなかにこそもとむべけれ。さるは蜻蛉紫にほはしき筆ずさみにもはぢず、また更科十六夜のあてなる口つきにもおとらぬは、いとこそめづらかなれ。そも〳〵いかなりし人のむすめぞと問ふに、そはくはしくもしらねど、そのかみよるべなき露の世をかこちて、はかなきふせやの月にうたへるうかれめの流なりきとなん聞きつるはといふ。さはいへ、むぐらにとぢられたらむあたりに、かくまでかぐはしき花はいかでかおひいでけむ。もしはもとのねざし賤しからぬが、よにはふれたる、玉淵がむすめの類にはあらぬにや。

平春海

庚子道の記 序

水上すみてながるゝ河も、おちゆくすゑとなりては、やうくあらぬ塵芥にけがれて、ついにもとの清きすがたをうしなふ事あり。詞の道もまたかくのごとし。上れる世のみやびかなりし手ぶりも、あまたの年なみをわたりては、いつしかとさとびたるならはしこそ多くはいで來にたれ。かれいにしへはみなもとなり、今はすゑなり。その源にありては、もとめずともおのづからに清みゆくながれに從はむ事はやすかるべきを、後にありては、あくたをはらひて、ことさらに清き瀬をたづぬるわざなれば、いとかたしともかたしや。わが友清水濱臣のぬしは、詞の學に廣く、文つくるみやびに心ふかき人なるが、この比たけ女が道の記を得て、おのれにかたらく、女房の日記といふもの、今の世にもやむごとなき殿のあたり、おくまりたる宮のうちなどよりもれつたへたるには、心にくきかたに人のおもへるたぐひもこれかれあれど、よく見もてゆけば、これはしもと取り出でていふべきは猶少し、しかるを此道の記を見るに、いたくも書きけるかな、世のかいなでの類にはあ

井上氏名通、京極備中州刺史家臣儀左衛門之女、幼而慧敏、讀書賦詩、兼通和歌、夙以雅才聞焉。刺史母夫人召之武江、使侍左右有年、英才名籍甚、一時喧傳。先妣素善倭歌、聞通之才喜寄書、唱酬往來、交情甚厚。母夫人下世之後、嫁三田茂左衛門、歸于讚州丸龜、此一冊其紀行之作也。女子之有才藻、而閨操貞正、若通者近世所罕覩也。況先妣之遺愛莫過焉。故書之以傳之云。

元祿庚辰仲秋日　　跡部良顯跋之

六角通御幸町西街
皇都書林　柳枝軒茨城信清　繡梓
正德六年丙申正月穀旦

けざやか―けは發語、さやか、はつきり
そこのほど―あの邊
心ときめきして―胸もどき〳〵して

すめずこがれ行く。さこそいへ、近づきゆくまゝ、もとみし方の山どもかず〳〵見えて、いとうれし。備前の國にゆく舟路なりといふ方も見ゆ。沙彌島、鹽飽島など、そのかみ朝夕に聞きし所ども、いまぞ目にちかく左右に見る。君の御城、山の間よりはるかにさし出でたる、みどりの松、白き壁、けざやかにて、九年を隔てゝ今またあふぎ見る、めづらしく、嬉しさたとふべき物なし。そこのほどぞ我親の住家ならむと、益本と共に見て歡ぶ。はや岸に著きなむとおもふに、又汐のみつるほどを待つとて、眞島の島のかげに舟とめて、ゆふべを待つほど、千歳をすぐすこゝちす。いつしか父母妹などに逢見んほど、いかならんと、心ときめきして、なにも〳〵思ひわかれざるまゝ、硯もとりやりて、はらから共にとくつきなん事をのみいふ。

井上氏女通書

歸家日記 終

ありとあるーあるかぎりの
しぞくー退く
ふようー役に立たぬ
さきこえ給へー其旨御聞かせ下さい
うしー憂し、牛

間にあまたの所を吹過ぎぬるを、けふは追風もなければ、一里ばかり行くも、あるかぎり力を出して艪を押すなり。揖保の郡網干といふ所も、我國の君領じさせ給ふ地なり。その前なる海をもおし渡る。くれ行く程に、汐よくなりぬ、追風の吹きなば、唯一わたりのほどに、わが御國につきなんものをといへど、たゞ和ぎに和ぎてしづまれば、ありとあるをのこども、艪を取りて歌うたひつゝ、よもすがら漕ぎ行く。あかつき近くなるまま、又引汐になりぬといふ。舟はこぐ方にはゆかで、流にひかれてしぞくやうなれば、力を盡してもふようなり、爰に船繫ぎてんといふ。大きなる舟の、右のかたに漕ぎくるより、こなたの船にいふやう、船つなぎ給はゞ、我もこゝにとまり侍りなん、あかつきに出で給ふをりは、さきこえ給へといふ。心得さふらふとて、かなたこなた錨おろす音してしづまりぬ。いづくの誰としらぬものの、たがひにかくいひあへるも、なさけ有りておほゆ。

二十九日、夜明けてみれば、牛窓なりといふ。

　世を渡る身をうし窓の明けくれを漕行く舟のうへにてや見ん

今日はいとゝく讃岐につきなんといへど、なほ同じさまにて、風なかりしかば、棹もや

無人岸上說無心

なほおなじさまにて、飛ぶが如くに過ぎ行く。暮れはてゝ星の影浪にうつりて、玉のよるとぞみゆる。高砂といへど、くらくて能くも見えず。

なみの音松のひゞきも高さごの尾上のかねは聞きもわかれず

爰を過ぐる頃、風すこしなぎて、浪もやゝ靜になりぬ。とくゐじまに到りなむとてこぎ行く。風かはりて、西の方より吹出で、此舟ゐじまにも、え行きつくまじといふを聞きて、益本も立出でて見る。かしこにいとくろう見ゆるは何ぞと問ふに、舟の泊りたるにやといふ聲す。近くなるまゝにみて、舟にはあらず、小さき島とぞいふ。此かげにしばし風しづめてといひて、錨おろして舟をとゞむ。例は舟いるべき湊にしもあらねば、なほ漂ひやまず。とばかり有りて、風又北になりぬとて、喜びてこぎ出す。明方ちかく繪島にいたりぬ。

松が枝のみどりを浪にうつしてや繪島が磯の名をとゞむらん

二十八日、斯て夜も明けぬ。風は何方よりも吹かで、帆もむとくなればとて、引き卸してこぎ行く。やうやく室津にいたりて、汐むかひぬれば、しばし止る。昨日は一ときが

例は—ふだんは

むとく—一向效能なし

汐むかひ—汐の舟に向ひ來るをいふ

かならずいへ―こゝが須磨ですと必ず教へよ

わかぬまに―わからぬ内に

ほのか―帆、仄か

ともすれば―やゝともすれば

津の國のいく田の森にいまもなほとふ人ありや秋のはつかぜ

須磨、明石を過ぎん時、かならずいへと、女していはすれば、ほどなく須磨の浦といふ。風いとあらくふき出でて、浪も高し。

打ちそふる浪の音にもしられけりすまの浦かぜ秋立ちぬとは

そこともわかぬまに、はやく明石にて侍ふといふに、おどろかれて、

いとはやも須磨の浦波うちすぎてあかしの沖に出づるふな人

いと遙かにみえしあはぢ嶋も、いつしか後に成りぬ。

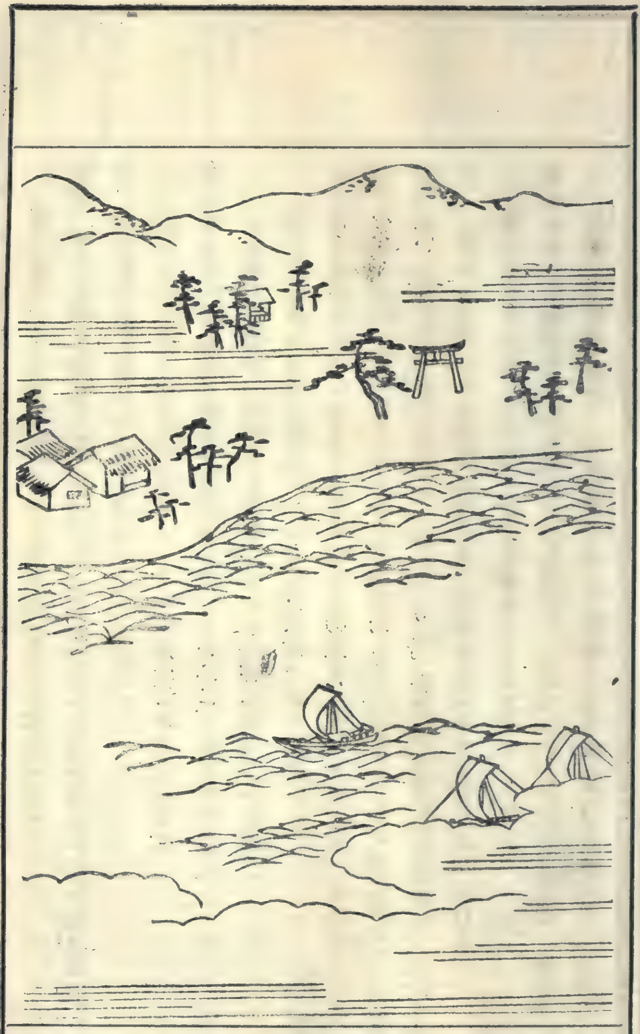
行く舟のほのかにみえしあはぢ嶋せとの追風ふき過ぎにけり

瀬戸をすぐれば、際もなくたゝへたる海のおもて、はるばるおそろしげにて、ひまなく起つ波いと高くうち重りて、日もくれかゝりぬ。舟はともすれば打ちかへしつべく、浮沈みて、乗る人もたふれまろびなんとす。友舟もみなちりぢりにふかれ行く。

舟人もむねうちさわぐなみかぜは響のなだに心して吹け

女はわがきぬのすそを捉へてよりふしぬ。

乘レ風一葉幾浮沈　萬疊奔波蒼海深　這裏雖レ持二古賢敬一



まどろみたる―うと〳〵と眠りたる

月も出しほの―月の出づる頃しほの満ち来るをいふ

いふ風ふき出でなんやと危がりいふ。舟もかなたこなた漂ひめぐりて、しづ心なし。戌のすぐる頃、雨はれ風やみて、神もとほく去りぬ。いでやさま〴〵に世を渡るわざどもの、やすからぬ中にも、かた時がほどに心を摧き、身を危くして、うきものは舟人なりとぞおもひしらるゝ。雲さり星見えて、更行くまゝになほよく晴れわたりぬ。すこしまどろみたるに、暁ちかく月も出でぬ。

浪まくらあかつきちかき山の端に心ぼそくもいづる月かげ

なにはがた風待つふねのかぢ枕いくよあし間に浮寐しつらん

明け行くまゝに、例の舟出しつべきよそひするを、又此度もいかゞなどおもふに、誠にこぎ出しぬる、いとうれし。風も僅かに吹きて、おもふ様にはあらざめれど、あまり久しきにわびて、先武庫までとこゝろざして出で行くなり。

ふき送るなにはの浦のおひ風に月も出しほのあけがたの舟

ひる過ぐる頃、武庫につきぬ。風又かはれり、しばしこゝろみむとて、舟とめて追風まつ。申の時ばかり風よくなりぬとて、又こぎ出でて行く。北の風つよく吹きて、帆は斜になびきて、船も傾きながら、疾くはしり行く。生田の森も此あたりにや、とはまほし。

六十四卦―易の卦

心あらん人に見せばや―「津の國のなにはあたりの春の曙」

くし―屈し

上におぼえて―上に鳴ると思はれて

おとらじと―我劣らじと

そこらとよみあへる―大勢騒ぎ合ひたる

かに腹だちて、いみおそれ侍りなむとてわらふ。げに六十四卦の變通さま〴〵なるも、時といふ事ひとつをなん、大事にし侍ると聞きしかば、などいひ慰む。かくて叉あすの曉を待見むといふ。いつしか明けなんと思ひて、苫の隙よりみれば、曉かけて出づる月影、うす曇りて、浪にうつりぬるも、春の曙の心地して、なほ心あらん人にみせばやとぞ思はるゝ。やゝよこ雲のたなびくころ、かなたこなたの舟ども、例の聞きわかぬ事どもいひかはすめるは、すはや出でぬるならんと、頭もたげたれば、益本も外に出でて見きくに、なほ西の風のみ吹きて、舟出す事叶ふまじとぞ、おの〳〵いふ聲す。こは如何なるにかと、心もくしはてゝおもへど、すべきかたなし、けふも猶かくて暮すは。

廿六日なり。夕つかた遙かに見えし山の端、雲おこりて、海のうへやゝくらくなり行くと見るは、夕立のこなたに來れるなり。墨の如くなる雲、俄におそひ來りて、神なり光みちたる、たゞこの舟どもの上におぼえて、すさまじきけしきなれば、舟どももおとらじと、とま引きおほひもあへぬに、雨降り出でて、風ふきまぜて、物の音も聞えわかず、浪もいとたかく打ちそひて、舟の内にもりくるとまの雫、いとわびしさ、いはむ方なし。舟子ども小舟に乗りて、綱引きなほし、錨おろしそへ、そこらとよみあへる、はやちと

鳴神―雷

かくてをあらんは―をは強勢の助辭、こんな事をして居るは

ながめふしぬ―物思ひに沈みて臥したり

ひま―すきま

そこはかとなき―これととりとめもなき

ゆゝしき―忌々しき

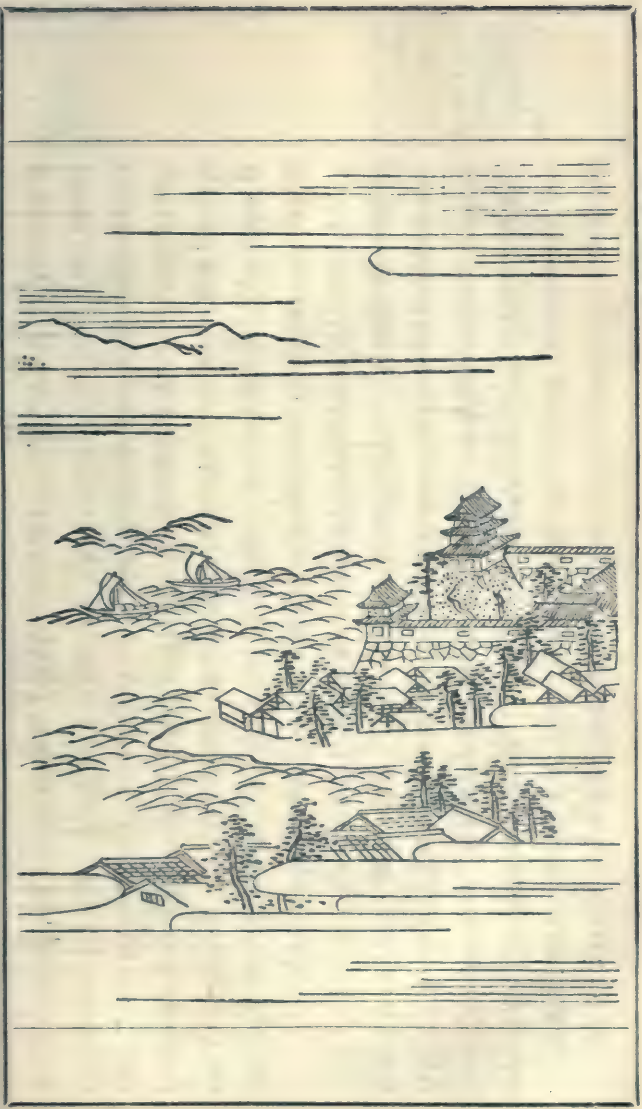
二十五日、いつも明方には東の風ふき侍るまゝ、舟出してんとて、苫おしやり、帆柱立てゝ、錨引きあぐる音など、鳴神の落ちかゝるかと覺えて、おどろ〳〵しく騷ぎのゝしる。かくしてこぎ出づるにやと思へば、舟子どもともへにやゝ立ちて見居りて、風なほむかひぬ、かくては武庫までも得行きつくまじとて、又錨おろしてとゞまりぬ。一夜のほどだにあるを、終日かくてをあらんは、如何にわびしからまし、古郷にもこれをば知らで、雲のけしき風の音づれにも、心をくだき給ふらんなど思ひやりて、ながめふしぬ。

　なには江や蘆のうらはに舟とめてたよりの風をまつぞ久しき

　身のうきを恨みてもまた難波なる蘆のかりねの長からぬ世に

たま〳〵物のひまより見れば、こなたへ向きてくる舟どもの、まほに吹かせたる、心よげにて、はや著きぬなりと喜びて、帆を引きおろすなど、羨しく、我もいつかふるさとの地にかく著きなまし、又遙かなる波の上なれば、思ひかけぬ風など吹きたらば、此下にや落入りなんなど、そこはかとなき事ども、煩はしくいひつゞくれば、益本は、かくなおほしそ、其時きたりぬれば、思ひの外にかゝるせも有りける物をとおほし喜ぶまで、すみやかに事なり侍るものを、さるゆゝしき事仰せらるゝを、舟子どもに聞かせ侍らば、い





すゐばん―水飯、水づけのめし

くま―隈、入り込み

さをの歌―欸乃、卓氏藻林に「棹紅聲」といへるによるにや

夕だつ―夕立降る

たきたるが、苫の隙よりほのかに見ゆるもをかし。歸り入りてするばんなどくひて、みなみないぬ。

二十四日、今日はとくより舟にのるべしといへど、潮まだし、午の過ぐるほどといへば、ためらひ居るほど、物賣る者よびて、あづまにも故郷にも、幼なき子供のもてあそびにおくるべき物など見る。しばしありて、汐みちぬ、舟出すべきよし、舟人きていふ。益本も出できて、是より打ちつれて、舟に乘る。あるじの人ふたりも、おくりして舟にきたり、いとまこひ、行くさきの祝などいひて立歸らる。やをらこぎ出したり。

ふるさとに待つらむ親にしらせばやけふ此浦を舟出しぬとは

しばらく漕ぎゆきて、すこしくまある入江に舟とめぬ。まだ未の過ぐるほどなり。風あしければかくなんといふ。いとせばき所にかゞまり居る。是を常の住家とせば、いかにわびしからましとぞ思はるゝ。あまた泊りする舟どもならびゐて、さをの歌うたひ、かひ吹きなどす。わづかに見出したれば、よべとまりし方は、早多く隔りつ、其かたは夕たつけしきに見ゆ。いくらばかり來つらむといへば、こぎ出でし所よりは三里ばかりまゐり候といふ。かたしく袖の枕の下に、なみの音たかく聞ゆるも、哀れにおそしろ。

こちたきまで—仰山なほど

うらがはしく—亂雜にて

こたみ—この度

そこ〲—どこそこ、何々の殿様

下をゆくは、柱にさはりもやせんと危けれど、近くなるまゝに、廣らかに見えて、安くとほりぬ。やゝこぎわたりて、心ざす岸につけて、皆おりぬ。宮居も程ちかければ、すなはち詣でて神樂奉る。いまだ火ともさぬ燈籠ども、こちたきまで懸けならべたり。まゐる人男女いとおほし。明後日わたりぬべきよういして、やかた車などはしらせて、童べおとななども、あまたひきるありく、いとらうがはしく、傍にさけて是を見つゝ、元の舟に乗る。こぎ歸りつゝ見渡せば、なほ岸の上に在りつる人ども多く車のつなに取りつきて引くめり。これよりよき物見なりとて、其かたにしばらく舟とめて見やれば、童べのさかしき、太鼓うついとはやき拍子にのりて、さま〲に物狂はしきまで、をどりさわぐを、大人など居てはやし興ずるなり。やゝ久しく奏でて、もとの道に引き入るゝけしきなれば、こなたも舟こぎ出して、こたみはもときし中島のうしろのかたを漕ぎかへるといふめれど、水のうへはたゞ同じ雲の浪とのみおほえて、いづち行くらんもおもひわかたず。西の國々領じ給ふ君々の御屋敷ども、岸にならべてさし出引入り、とり〲に作られたる、きら〲しく嚴重に見ゆ。そこ〲の舟ども、御みづからのめすなどは、なほうるはしく、幕のもん鮮やかにいちじるし。暮れかゝるまゝに、おほくの舟どもに火

去速、夜雲收盡月行遲」
あるじ―饗應
えさらぬ―止むを得ざる
あさて―明後日
目もおどろかる―見てもびつくりする
こゝら―澤山
さなん―左様に

心ぼそく哀れなり。かくてとらの時すぐるころ難波につきぬ。舟とめて、こゝに君の御家あづかりたる人のかたへ、かくと案内きこゆるに、きのふ今日かねて待ち居侍るとて、こなたへと有れば、いとうれしくて、乗物して、此人のかたに至りぬ。待ちとりて、夫婦もろ心にいたはり、あるじしていこはせらる。

廿三日、けふはえさらぬ事あれば、あす舟にのるべしとて、今宵はこゝにやどる。益本は隣なる屋に、壁ひとつ隔てゝやどれり。あづまに遣すべき文ども書くと聞きて、わらはも只一つ急ぎ書きてやる。此所までたひらかにまゐり著きぬるよしを聞え奉るなり。あさてなん此近きあたりなる天滿天神の祭なり、こよひより御試樂にわたるありといふ。夕かゝりて、あるじの女房のさそはるゝにより、我もつねに仰ぎ奉る御神なれば、いとよき事なりとおもひて、ともに詣で侍る。さをさしのぼるほど、面白きわたりにて、こころ慰むわざなり。目もおどろかるまでおほかる舟ども、かなたこなたの岸によせならべて繫ぎ置きたる、よきもあしきも、大きなるも小さきも、こゝらつどへる中をこぎとほる。こなたの舟は逍遙の爲に作れる、やかたなどちひさくをかしげなれば、かしこにもさなん思ふらんかし。なには橋とかや、さまぐ\なる名の橋ども、かずぐ\多かる

われも浮世に―金葉集、行尊「早き瀬にたえぬばかりぞ水車われも浮世にめぐるとぞ知れ」

しぞく―退く

むつかし―氣がくさ〳〵する

よきよ―よけよ、避けよ

秋の水云々―朗詠「秋水漲來船

をまき入るゝが巧みなるも、いみじう面白し。われも浮世にめぐるとぞいはまほしき。むけに近きほどを漕ぎゆけば、いとよく見ゆ。岸のうへに御家の士など番する所にや、りんどうの御紋の幕うちて、ならびゐたるもあり。御城は河水に臨みて築かれたるそこなれば、浪のおし動すやうなるも、たぐひなく見所おほきあたりなり。浪にひかれて下り行くまゝ、岸のうへなる家ども、あとの方にしぞく様なるもをかし。商人の家、民の家ども、町をたててはるかに續きたり。暮れ行くほどに、火の光星のごとくにて、松の間よりみえかくれす。かなたこなたと、里の名ども聞過ぎぬ。八幡山もまぢかく仰がれさせ給ふ。わが氏の御神と心に仰ぎ奉る。あつかりし名殘むつかしければ、河水をくませてのむに、猶ぬるければ捨てつ。舟のそよ〳〵となるを聞きて、戸を開きてみれば、蘆の茂りたるを分け行くなり。月はまだ出でざれど、星の光にていづくもよく見ゆ。帆かけたる舟ども、おほく引きのぼすが、こなたざまにくるをば、よきよとにや、舟人のたがひに呼ばはりたるも、なに事をいふならんとおそろし。蚊のいとおほくて、扇をはなたず手馴しをれば、打ちまどろむべき暇もなし。益本は積みたる物どもの上にのぼり居て、秋の水みなぎり落ちてと靜にうたふほど、山の端ならで出づる月影も澄みわたりて、

ちから車―荷車

ゆふつけ鳥―鶏、此歌清少納言の「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」による

心ゆく云々―思ふ存分御馳走したきもの也

ふべき針など殊におほかるは、是ぞ女の目とゞむべき所なる。繪をかく者どももあまた見ゆ。ちから車にかけたる馬牛、隙なく行逢ひたる、うるさくいぶせし。こゝは逢坂山といふ名、何となくなつかしく覺ゆるにも、例の、

　逢坂のせきならなくに今は世をへだてはてぬる君ぞかなしき

　關の戸もさゝで行きかふ逢坂はゆふつけ鳥のそらねだになし

なほしばし行く。舟どもおほく浮べ、あるひは岸によせたる堤を過ぎて、かりに宿りに入りて、舟にのるべきよそひして、これより河舟にて下る。夕つかた淀のわたりを過ぐ。こゝは石川主殿頭殿の御領なり。此御よめの君は、過ぎにし我君の御子と聞えさせて、故日向守殿の北の方にてわたらせ給ふが、男君はやくかくれさせ給ひて、今は御子達などの、おとなびさせ給へるを、御なぐさめにて、すぐさせ給ふ。ちかき比までまゐりなれて、御心ざしことに、御惠ふかゝりしも、露わすられず。かねて此あたりを過ぎなん事をおぼし宣はせて、思ふまゝなる世ならましかば、諸共に行きて、心ゆくばかりあるじせばやなど、さまぐ\に語らはせ給ひたる、おもひつゞけられて、こぎ行く舟もしばしよどみなむと、いと御なごりをし。水車のめぐりて、御城の内へかけられたる筧に、水

たけく—心健く、立派に

今井—兼平、義仲の最後に殉じたる忠臣

とぢめ—最後の場合

えんに—艷に　つややかに

景氣—けしき、別にけいきと原本に振假名せり

えならぬ—言ふにいはれざる。

ふし見—臥、伏見

させ給はましかば、いかならん巖をもたけく分けのぼらましと思ふにも、

　石山のやまより深くいりてだにかくれし月をまた見ましかば

粟津の森とかや聞きて、木曾義仲の討取られたまひけん昔をさへおもひやらる。今井が塚とて松一もと見ゆ。さるとぢめに至るまで、心をかへずして、ともに亡びけん、ものゝふの本意なるべし。君をいさめて正しき道におもむかしむるは、なほいと難きわざにこそ。比叡の山見ゆ。三井寺も近きあたりにありといふ。膳所とかや、河水に影うつせる城いとうるはしく、日にかゞやかされたる汀をまぢかく過ぎ行く。水の面廣々として、近くなるまゝに、いひ知らずえんに面白き景氣をふくめる事、かず〳〵なり。日もいとよく晴れわたり、秋のなかばの月かげ此水にうつりたらんほどを思ひやるさへ、えならぬ心地す。

　行くさきのまだ遠ければ草枕ふし見のさとに夢もむすばず

大津より伏見にいたるほど、商家軒をならべて、家々におとらじと、かず〳〵の物どもをかけ竝べて賣る。あづま人を惑すべき、たくみなるうつは物ども多きもをかし。晝やどる所に、物うる女ども多くつどひ來りて、なに〳〵めせなど勸むるも賑はし。物縫



紫式部の云々—紫式部石山寺に籠り湖上の秋月を見て源氏物語を書けりとの傳說による

みねど—峯、見ねど

おもひ—思

山よりふかく云々—續古今十六「都にて待つべき人も思はへず」

歸家日記　下

廿二日、朝たちて、野路の篠原の名もなつかしく行過ぎぬ。

いとはやも露ぞこぼるゝ秋立つときのふか聞きし野路の篠原

勢田の長橋を渡るほど、左のかたなる石山を見やりて、ゆかまほしき心地す。紫式部の物語かき給ひけん、はるかなる昔なれど、おもひ見る程は、今其をりの目のまへに浮べるやうにおぼえて、

勢多橋上輿簾裏　遙見石山思古人
光源氏語麗還新　紫式部名高且遠
天色水容明若鏡　殘峯秋月浮華洛
　　　　　　　　巡麓江湖通大津
客心對此洗埃塵

世に殘すことをしきけば石山のみねどこひしきいにしへの人

行成卿の女のおもひにて、かしこにこもり給ひし頃、「山よりふかく入りやしなまし」となげき給ひけん。われは我君の三日月とともにかくれさせ給ひし、見るだに二たび見え

といへば、山ならねど此さとにももえ出でて、かくあさましく、灰になしけるよ、恐ろしき物は火なりと思へば、水と風とも又おそろし、人をすくふものといへど、過ぐれば又人をそこなふめり。三上山のあたりをみやりつゝ、草津川を渡る。草津の驛にいたりて今宵はこゝにかり枕の夢をむすぶ。

さ月―五月

なつ衣―たつの枕詞

めもあやなり―美しくて目もちらつく樣也

玉も石も云々―書經胤征「火炎崑岡玉石倶焚」

人生何事多艱險　千里往來山又河　九載遠親今漸近

再經鈴鹿思蹉跎

まだあづまに侍りしさ月の中ごろ、佐渡守殿御國へ歸らせ給はんとて、對馬守殿の御前に御暇乞とて入らせ給ひしをりに、妾もかしこに侍ふときかせ給ひて、めし出でて、過ぎにし方のこと、歌の御物語など仰られたるついでに、古郷に歸り侍るときくは、いつ頃とさだめぬるぞと問はせ給ひたるを、秋の頃にてや侍らんと申したりし、思ひの外にいそぎ立ちて、けふ其御國の近きあたりを過ぐれば、

なつ衣たつ日をはやくしらませば秋とは君に答へざらましかにか坂とかや、山の中をめぐり行きて、土山に至りて、今宵はこゝに宿かる。

二十一日、水口の市店に出づれば、商人の家々、いとうるはしき組葛籠の調度ども多く並べ置きたる、めもあやなり。小さくをかしきを少しかひ得て、みつゝ行く。石邊とかいか所に、晝のほど立ち寄る。此逆旅過ぎし卯月の頃、おほくやけ侍りといふ。げに皆かりそめに圍ひたる所のみ、長くつゞきて、あはれに見ゆ。よき家どもはみなやけぬ。小家がちなる所のみ殘りて、僅に人とゞめ、もの商ふなり。げに玉も石もともにやくる

おもの—食膳
わたり—あたり、邊
民の—市のの誤か、毎日立ちながら四日市とはこれ如何にとの洒落
つと—土産
名高き地藏—關の地藏
いくそ—幾十
禪山

おもの出す。やがてこゝを出でゆけば、板橋土橋小川など多かるわたりなれど、此頃のてる日に水みなかわきたり。四日市といふ所にやどる。日毎にたつ民の、など四日とかぎりてつけたるさとの名ぞ。

二十日、四日市を出づ。つゑつき村といふ坂をすぎて、石薬師にいたる。ぐしたる女などまうで侍るなり。それよりおりて庄野といふ。こゝに小き俵ををかしげにむすびて、焼米すこしばかり入れて、童べのもてあそびに賣るを、そのかみ家に在りし時、あづまのつとに人の得させたる、今思ひ出づれど、今日はさる物もみえず。いとながき橋を渡る。龜山を過ぎて、城いときよらに見ゆ。ゆき〳〵て鈴鹿の關にいたりて、晝の程しばらくいこふ。今は關の戸ざしもなくて行きかふめり。名高き地藏ありとて、人々詣でぬる、みづからは心もおもむかねば、物ごしにみやりて過ぎぬ。坂の下より、すゞか山のけはしきを登る。河音さやかなるは、八十瀬の浪のこゆるにやとおもはる。田村堂のあたりといふ頃、おもき荷どもおほく擔ひもてくる人々に行逢ひたる、せばき道なればいとあやふし。

鈴鹿山こえていくそのとし月をふりにし道にまたかへるらむ

あき物—商ひ物

みかは—見、三河

はま楸—海邊に生ずる一種の植物、普通「久し」の縁語にいへど、こゝは「しをれ」の縁とせり、原本「しほ」の假名を用ひ、「汐にいひ掛けたる心なるべけれど、しをるの假名は「を」也

音もたてつべし—聲をたてておいおい泣き出しさう也

逆旅—やどや

わびて—閉口して

町たてわたしたる、あき物する家どもも、さま〴〵行きかふ人の目とゞむべき物どもかざり置きて、いみじう賑しきあたりなり。矢矧を過ぎて、よべ聞きし八つ橋もちかきほどと聞く。

いにしへの跡とみかはの八つ橋に其名ばかりを戀ひや渡らむ

池鯉鮒より鳴海にいたる。

はま楸しをれしたびの衣手にうたてなるみのうら風ぞ吹く

日頃むつまじかりつる女どちのあたりもなつかしく、はるかにもへだたりつるかな、又いつか逢見るべきなど思ひ出づるに、音もたてつべし。

別れこしほどもはるかになるみ潟なきて千鳥の友したふなり

今宵はあつたの宮の逆旅にやどかる。小刀やうのものもてきて賣る者おほし。

十九日、しばし行きて舟にのりて、桑名に至るほど七里なりといふ。追風吹きてとくつきぬ。又かりそめの宿に立ちいる。家作いとおもしろし。水に臨みてたてたる所なれば、行きかふ舟を見おろして、すゞしげなり。城もむかふざまにまぢかく見ゆ。されど海より吹來る風のなまぐさきにわびて、とく爰を出なんといふ。所の肴はまぐりなど調じて

すきもの—風流人

せちにゆかしがれば—無性に見たがりはしがれば

思の外なる云々—思ひ掛けぬ所に縁づいて

むかしの跡—伊勢物語、業平が「からころもきつゝなれにし妻しあればはる〴〵來ぬる旅をしぞ思ふ」の舊跡

過ぎがてに—心ひかれて行過ぎ難く

强呼旅客家々女　紛面朱唇巧納交　寓舍今宵何處好
共言有酒有嘉肴

今宵は赤坂にやどる。あるじの女房すきものにて、我何となく硯にむかひて、物かきすさむをゆかしがりて、人靜まりて、若き女の宵より來りてつかふるに案內させて出できたりぬ。なにやかや物語りして、手習の反古どもをせちにゆかしがれば、詩や歌や書いてやる。喜ぶことかぎりなし。其身の有樣など語りて、はやうかゝる事ども、及ばずながら心よせ侍りつるを、思の外なるよすがにつきて、かくかしましき市の中の住居、ほいにもあらず思ひ侍るなどいふ。おやの里はいづくぞといへば、三河の國八つ橋のあたりと答ふ。今もむかしの跡はありやと問へば、八つ橋の柱にやかたばかりに殘れるを、其跡と申しつたへ侍る、業平の塚も侍るとかたる。業平はそこにて終り給ひしとも見えざめるを、さる人の過ぎがてにながめ給ひけん跡なれば、後の世までのしるしにし置き侍るにやと思はる。やゝありて歸りぬ。鳥もほどなくあかつきを告渡れば起出でて。

十八日、例の明ほののころほひ、やどりを出づ。よべの女ども、名殘惜めり。ひぢ河といふ里の名を聞渡りて、岡崎にいたる。この國の御城うるはしく見ゆ。驛亭長くつゞきて、

かゝるすぢ—亡君を偲ぶ事
前坂—継坂
新居—荒井
ぐせる—供に連れたる
とほつあふみ—遠江
景色—傍訓原本による
吉田—今の豊橋
たくみ—大工
とよみ—大さわぎし

なほかゝるすぢの事のみ、先ふとうちおぼえらるゝまゝに。

十七日、明けはなるゝ程に宿を出づ。前坂といふあたりを行き、新居へとて、今切のわたり舟よばせてわたる。風いとはげし。ほどなく岸にいたりつきて、爰にても又番し給ふ所によりて、御印奉り、例の女よび出でて、我もぐせる女も、髮ねんごろに見せて、いづくも違ひなしとて、益本が姓名などたづね聞きて、とほし給ひつ。濱名の橋は名のみして、今は渡るべき橋もなし。松左右にうゑられたる山道をゆく。高師山もこゝなり。

高師山松ふく風のおととほく聞きし濱名の橋も絶えけり

白須賀といふあたりを過ぐれば、なほ山路なり。汐見坂をこゆるに、とほつあふみの海原はる〳〵と見わたさるゝ景色いと面白し。晝のほどしばし休む所、二川といふ。吉田の市店を過ぎて、いと長き橋に至る。只今わたるはし、漸古くなれりとて、作りかへらるゝなり。大きなる木ども引きかけ、けづりまろばして、たくみどもをはじめ、人多くつどひて、とよみあへり。いま渡る橋にも、人々集りて是を見る。御油より赤坂にゆく。客亭いとにぎはゝしく立並びて、家々の女ども旅人を呼びいれとゞむる聲喧しく、小田の蛙の夕暮になく心地す。



民の云々—詩經大雅烝民篇「民之秉彝、好是懿德」

やをら—靜に

厲掲—原文に註せる如く詩經により出たる句にて、厲は衣を持ちて深き處を渉るをいひ、掲は衣をかゝげて淺瀬を渉るをいふ

ゆやが言の葉—「如何にせん都の春もをしけれどなれしあづまの花や散るらん」

らせ侍るは、民のつねをとれる此懿徳をよみすとかや、いとたふとし。見附に往くほど、橋どもおほく渡る。坂も又多し。

　人しれぬかよひ路ならば東路のみつけの里の名をやいとはん

今宵は濱松にやどらむとて行く間に、天龍川ふたつ有りて、まづ舟にて渡る。水淺くて船行なやみければ、皆おりたちて、舟ばたをとらへておし出す。やをらふかき所に浮み出でて心よく渡りぬ。後の河は徒わたりなり。鳳凰臺に題せし詩を思ひ出でて、をこがましけれど、

　天龍河上天龍去　龍去河留二水流　二水中分成㆓大小㆒
　小斯厲掲大斯舟　詩匏有苦葉篇深則厲淺則掲

池田の宿とかや。長者のすみけんむかしの跡も、此ちかきあたりと聞けば、ゆやが言の葉おもひ出でて、

　我も又なれしあづまのはなのはる春におくれて今かへるなり

橋ども有りてわたる。濱松にやどりぬ。

　はま松のかはらぬ色をみても猶かれにし君が蔭ぞかなしき

ふり―古り、降り

西山の飢―伯夷叔齊が首陽山に入りて蕨を採りし故事

其所の物―其地の名物

かくと―乞食して親を養ふ孝行の者なりと

雨さへやかさねて袖を絞るらんふりにしかたをしたふ涙に

むら雨のすぎゆく跡を山かぜのはらへば落つる松の下つゆ

かりねせしふもとのさとの草枕夢ぞ残れるさよの中山

なほ険しきをのぼりくだるに、このたびは日坂といふ。蕨もちひ家毎に賣るは、西山の飢をたすけんとにや。むかしより其所の物となれるをば、何にてまれ買ふものなりとて、をのこども食ふめり。掛川にいたる。是は井伊伯耆守殿の領じさせ給ふ所なり。大手の門などきらくしく見ゆ。此北の方は、故君の御妹の姫にてわたらせ給ふ。あづまにて、近き頃まで見え奉るたびには、いと御なさけ有りて、おほせられつる事ども思ひ出で奉る。袋井といふ所にしばし立寄りてやすむ。さきにのり物のすだれの前にはしり行きて歌うたふ者あり。物狂にやと見れば、皆いふ、かれがやうに乞食しても、親をば養ふ、我等にはまされり、孝の志を感じさせ給ひて、此あたりを過給ふ國々の君などまで御覽じつけて、かくと聞かせ給ふは、みな物たまはらせらる、さればこの里の内をはなれずして、おや子のかて、心やすくて過しぬるなどいふを聞きて、あはれなれば、物とらせて過行きぬ。誠におほくの行きかふ人、貴も賤も、おやに孝なると聞きて、感じて物と

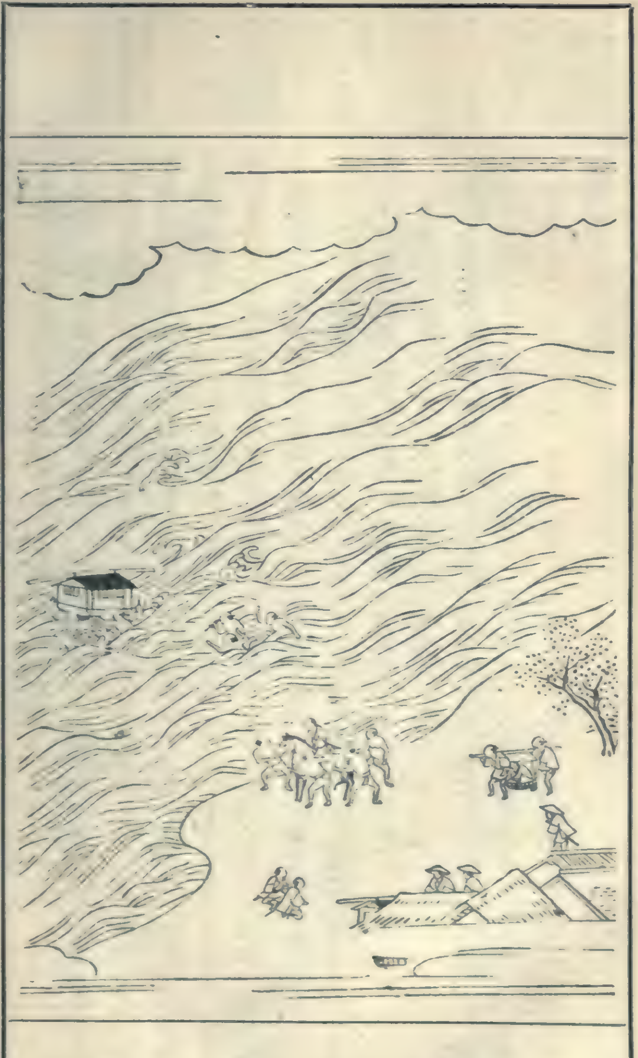
ころじにて―困りきり
三井寺―謡曲
ねびまさりて―大人ぽくなりて
半蔀、うき舟―材を源氏物語に取りたる謡曲
あたらしき―惜き
命なりけり―西行「年をへてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山」
つれなく過ぎし―命をもちこたへて無事に過ぎし
所せく―あたり狭きまで

いとゞなほ月に昔を思ひ出でてすみこしかたの影ぞわすれぬ

よしあしもおもひわかれず。益本にも、此月のおもしろくあはれなるに、詩一つ作れと硯ざし出でてすゝむれど、馬上にていたくこうじにて侍れば、ゆるし給へ、其かはりにはとて、拍子とりて、三井寺うたふも、珍らしく面白し。はやくまどの内にすみける程、をり〳〵聞きしが、其ころはまだわらはにてぞ有し。いたう聲もねびまさりて、年月の隔りし、いとゞ思ひしらるゝ。源氏物語ぞ猶えんに面白きといへば、半蔀、うき舟など謡ふ。聞きもわかぬ従者どもは、はやくいね給ひねかし、明日は又とく出で立ちなんをと思ふべかめればとて、あたらしき夜のさまかなといひつゝ寐ぬ。

十六日、金谷の宿を出でて、菊川と聞くも、其かみの事おもひながさるゝあたりなり。佐夜の中山にかゝりては、まづ命なりけりといひけん、げにさもこそありけれ。我も武藏野の露とや消えんと、いとはかなく心細かりつる身の、十とせばかりのほど、つれなく過ぎし月日の、けふまた爰を經て、ふたゝび古鄕に歸り侍るにつけても、なほ過ぎさせ給ひしきみの御言の葉のみ、かず〳〵思ひつゞけらるゝこと多くて、袖のみ濡るゝ折しも、村雨さへふり出でて、木々の下露も所せく落ちそひたり。





おのがどち―自分同士
聞きわたる―兼ね兼ね聞きたる
さらん時―其樣なる時
おくれぬ影―つき從ふ影
もりかねて人だのめなる―月影の漏り兼ねて人にたよりになる思あらしむる

うつの山ふもとに秋のちかければ露もをかべの里といふなり
せとの染飯とて從者ども取りもたり。藤枝ときけど、紫に匂ふ花もなし。嶋田を志して行く。早苗のみどり色まして、見るまゝに秀でゆくを、輿かく者ども、おのがどちいふを聞けば、今年のなりはひこそいとよく侍れ、雨風の時に順へばなるべし、刈りをさめん秋の稻穗もたのもし、かくゆたかなる年に逢ひ侍らんは、我等が幸なりなど、よろこびつゝ行くをきくも、いと嬉しくめでたし。聞きわたる大井川にもいたりぬ。頃日は水あせ石出でて、河原のみおほく續きて、なほ廣く見ゆ。さいつ頃の長雨に、嶋田、金谷まで、ひとつになりて、水のたゝへたるなどかたるを聞く。さらん時のさま思ひやるもいとおそろし。瀨ふたつ渡りて、むかふの岸に著きぬ。

　東路のなごりはいとゞ大井川このせや渡るかぎりなるらん

今宵は金谷にやどる。日は入りぬれど、なほ暑ければ、庭に水そゝがせなどして、障子あけて見出せば、月いとよく差入りて、たびの空にもおくれぬ影あはれなり。つき山のかたこぐらくしげりたる、もりかねて人だのめなるにも、住み來しかたのみ面影にたつ心地して、

府中—今の靜岡

おりはへて—續り延べて

待つらんさと—我を待つらん里、故郷

すぎやう者云々—伊勢物語に宇都の山にて修驗者に逢ひ都へ手紙を事づてし事見ゆ

しとぎ—米の粉にて作れる餅

はやく—昔

歸家日記中

十五日、江尻を出でて行き、狐崎を過ぎて、梶原がむかしをかなしむ。府中よりまりこに行くとて、あべ川といふ川渡る。しづはた山を見て、

なつ衣たれきて見よとおりはへて曉はた山にかゝるしら雲

鞠子河の橋わたりて、宇都の山にのぼるほど、待つらんさとを思ひやりて、

古郷のおやの夢にやかよふらん今日こえかゝるうつの山みち

すぎやう者にことづてけん、はるけき古のあとと思ふもなつかし。

つたかへでそれとはなしに夏草のこずゑもしげるうつの山越

坂くだるほどに、十團子といふ物を家々の軒のつまにかけならべて賣るなり。しとぎのちひさき丸を、十づついとに貫ぬけるは、玉を綴りたらんやうなり。旅人買ひもていきて、わらはべに取らするとぞ。はかなげなる物から、はやくよりする事にて、今にかはらぬ樣なるもあはれなり。晝たちよるやどは岡部なり。

むづかし―面倒臭し

翩躚―天人の舞を形容せる也

とぞふと思はるゝ。清見寺の門の前におろしたてゝしばしいこふ。益本よりきて、寺に入りてみ給ひなんや、いとよき景色なりなど聞ゆれど、のぼる事もむづかしければ、此すだれごしに、わづかに門より見入れ侍るのみ。むかひの家々膏薬うる所おほし。これよりなほ山路をわけ行くに、三保の松原はるかに見ゆ。あまつ乙女の羽衣かけしといふあたりもゆかしく、げにや天人もかけりつべき所のさまなり。

山行直下海邊好　三保松原與浪連　仙女羽衣空去後　斜陽掛處憶翩躚

うどはまの疎くは人にみえじとやたつ白浪のまなくよすらん

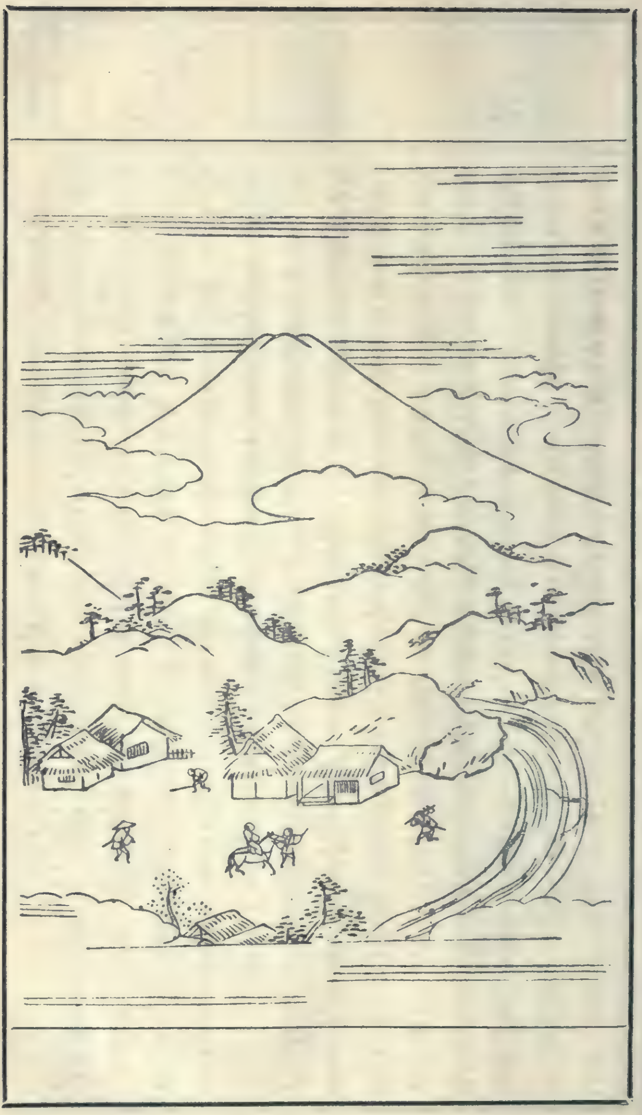
伊原川とかいひて、ちひさき川をわたる。江尻にいたりて宿をかる。

時しらぬ高根—富士、能の引歌による
ひとりどり—一人一人か
ゆきかひ—往返
しほたるゝ—見すぼらしく暮す、海士の縁語
みし人の面影とめよ—新古今、下に「清見潟袖にせきもる浪の通ひ路」

富士河のみなぎる浪は時しらぬ高根の雪や今もとくらん

其後また少し小き河をわたる。是を問へばうる井川といふ。蒲原、由井をすぎて薩埵山をこゆ。中比まで、此あたりこよなう險しく、かたつかたは壁のごとく立ちたる山の、かたつかたは海にて、唯ほそき道一つなれば、人も馬も、わづかにひとりどりならでは通り難し。親しらず子しらずとかいひて、親子といへど、相かへりみる事あたはざりしといふ。然るを近き世に、此山をかくひらき平らげさせ給ひて、萬の人のゆきかひたやすくなれるは、道廣き御めぐみなりかし。田子の浦にしほたるゝあまの家ども、まばらにあやしげなる戸口より立出でて、磯邊にながめ居たる、汐汲まむとにやと見るに、さもせず、貝拾ふにこそ。げにさま〴〵いとまなきしわざもあはれなり。沖津にいたり、清見がたを過ぎて、こゝは昔の人の心とゞめし、から歌やまと言の葉のすぐれてたへなる多ければ、なか〳〵拙き言の葉の見苦しからむをば、打寄する沖津なみもすゝぎがたくやと、引きこめて、たゞみし人の面影とめよと、ひとりごとして過ぎ侍るまゝ、心のうちに、

いのちあればけふ又こゝにきよみ潟浪たちかへる汀をも見つ



は富士のねいつとてかかのこまだらに雪の降るらん」伊勢物語
みな月の―萬葉「富士のねに降り積む雪はみなづきのもちに消えては其夜降りつゝ」
かげろふ―かげる、雲にてかくる
さへよ―さへぎりかくせよ

と昔の人の詠めけん雪さへ今も見ゆれば、其世のふるごともいとゆかし。

いづくよりふる白雪のつもりけん雲もおよばぬ富士の高根に
降りかふるほどや來ぬらんみな月のもちにも近きふじの白雪

仰見士峯高倚レ天　雲端玉立德容鮮　千秋雪色映二東海一
一抹烟光讓二淺間一　神秀豈爭二他列嶽一　仙蹤猶在二我危巓一
鄕人若問二途中事一　好把二此山一比二聖賢一

高根よりこなたに横たはれるは、足高の山といふ。かく名高くはれ〴〵しきあたりに、いかではひよりけんとをかし。富士山神嶽くづし給ひたるとか、かたはになりては立てるかひなくこそ。けふは日照りていと暑し。峯のごとくなる雲、とほく見ゆめれど、かげらふべくもなし。

やくかごと苦しかりけりみな月のてる日をさへよ夕立のくも

足柄山に雲のかゝれるも見ゆ。

よそにして過行くせきの跡なれや雲のみこゆるあしがらの山

富士河舟にて渡る。水いとはやくしてあやふげなり。

惡き女、女子が男子と僞りて關を越ゆる事ありしを改むるための老女なるべし
だみたる聲—よこなまりたる聲
かくする—とかくするのと字脱か

三島の—見て三島の

かしこにのみあくがれ—富士にのみ奪はれ
時しらぬ—「山

かにより來て、だみたる聲にて物うちいひ、かくするも、こゝろづきなく、いかにする事にかと恐ろし。居ならびたる人々、老女にくはしく問ひ聞きて、御印にたがふことなしとて、益本に關とほしぬるよしのたまふ。げにいづくもあやまりなしとおもふ物から、かくいかめしきあたりに立ち出でぬれば、なほ如何ならんと、胸つぶるゝ心地しつるに、いとうれしくて、人々よばせて過ぎぬ。峠にいたりて髮あげぬ。やゝ下り行く坂になりぬるもうれし。三島を過ぐるとて、明神の御前にしばしやすむ。

　誠あるこゝろばかりを手向くるをぬさと三島の神やうくらん

今宵は沼津にとゞまる。

十四日、明がたにやどりを出づ。家々旅人の朝たつけしきしるく、女どもの立出で送るなど見ゆ。馬どものいばえわたしたるに、殘りの夢もさめぬ。浮島が原に出でて、

　不二のねは夏なき山か吹きおろす朝かぜ寒しうきしまがはら

江戸を出でてより、日ごとに見やらるゝ富士の高根の、うすみどりにて、たぐひなき山の姿の、はるかに雲を出でたるが、我がゆく方に相向へる、心はかしこにのみあくがれつゝ、今日はいとゞ近づきもて行くまゝに、はれ〴〵しく目をそらになして、時しらぬ

ひさごをすてし―許由が人より瓢を貰ひ木の枝に掛け置きたるに、風の爲に鳴りしかばうるさくして之を捨て、また手にて水を掬ひし故事
楊朱が云々―淮南子「楊子見二岐路一而哭レ之、爲下其可二以南一可中以北上」
道もさりあへず―道もよけきれぬ程の人出なり
ありつる―例の、前に殿より賜はりたる
むくつけゞなる女―うす氣味の

箱根山上幾崢嶸　古木回巖雲霧生　地利自然如レ設レ險
人瞻二君德一共和平

畑といふ茶店にしばし立ち寄る。山の巖を手水ぶねの如くしなして、落ち來る水をうけ入れたり。瀧の如く流れたる、いといさぎよく見えければ、よりて掬ぶとて、

山水を手にむすびてぞ思ひしるひさごをすてし人のこゝろを

山の上なる湖水を見る。もと行きかよひし箱根路とてさししめす。今は楊朱が哭しけん岐のごとくにて、いとふように見ゆめり。權現の宮とかいふ松の間にしろき壁など見ゆ。今日はさるべき日にや、近き三島のあたりよりとて、人々多くかしこに詣でぬる事、道もさりあへず。水のほとりの河原に石をつみて、小さき塔のかたちに作りて、念佛などとなふる僧有り、地藏堂二つ三つ見ゆ。そこを過行きて、關所にいたりぬ。ありつる御しるし、益本もてまゐりて、かくとあない聞ゆるほど、輿たてゝ待つ。こなたへとて、番する所ちかくよせたれば、そこなる人々、老いたる女よばせて、われも從者の女も、彼に逢ふべきよしのたまふなりと、益本いふにより、對面しぬ。髮筋など懇にかきやりつゝ見る。むくつけゞなる女の、年老いぬれどすこやかにて、いと荒ましきが、近や



> 時宗―曾我五郎
> かき―乗物をかつぎ
> 外郎―明の歸化人員外郎
> 夜をこめて―まだ夜の明けぬ内に
> 面かげ覺えて―樣子が思ひ出されて
> はこね山の歌―はこ、ふた、あけ凡て縁語にて綾なせり
> あふぎたふれ―仰のきて倒れ、道の險しきさま
> かはゆく―可哀さうに

夕かゝりて酒匂河わたる。いかなるにか水まさりて、乗物も漂ひながら、人あまたかき渡して、事なく心ざす岸につきぬ。今夜は小田原に宿りぬ。此處に外郎がつたへし透頂香おほし。

十三日、今日は箱根山こゆべしとて、とく夜をこめておきつ。よこ雲たな引くほど、箱根山をこえかゝる。左も右もかさなれる峯々そびえて、谷ふかく、落合ひたる水の岩間を行きなやみて、むせぶ音なども、恐ろしきまでに聞ゆ。松柏いと茂りたる簏の梢より、朝霧のたち渡りたるを見るに、そのかみ下りしをりの面かげ覺えて、

　はこね山ふたゝびこえて見つるかなふもとの霧のあけほのの空

登りもて行くほど、さがしく恐ろしき事かぎりなし。昔こえきたりし跡ともおほえず、なつかしからぬ邊なりや。年ふりにたる大きなる巖ども、家のごとくにてさし出でたるも有り。のほる所はあふぎたふれぬべく、下る坂にはまろびや落ちぬべきと危く、心をくだく事たび／＼なり。常の言草にわらはべもいふなる、かしの木坂さるすべりとて、ことに險しきは、けに猿もあしを止めがたくやとぞ見ゆる。重き荷など負せたる馬ども、いとゞおやふけにかはゆくみゆ。

なさこと　夏畦云々―孟子「脅肩諂笑病于夏畦」

ぐし―連れ

よつの海―四海、天下、「四海波靜にして吹く風枝を鳴らさず」

白浪―盜賊、海づらの緣にて特に此語を用ふ

いさご地―砂地

殊絁―絁は纚の俗字にて粗緒の稱也、絕の誤ならんか

墨の如くにて、汗おしのごひたる、暑さたへがたげなるは、夏畦よりもやめりと、苦しきたとへに曾子ののたまひし、げにもと覺ゆ。今夜は戸塚といふ所に宿る。海づら近く、ならはぬ旅寐なり。まして女ぐしたれば、益本もいと心ことに、戒めありきて、戸ざしよく固めよなどいふ。されど今正しき道の末とほりて、武藏野の草ふす風枝をならさず、よつの海靜に治まれるをりなれば、白浪のたちよるべき恐もなし。

十二日、あけぼのの程に、やどりを出づ。

露むすぶ草の枕のかりぶしにやがて明け行くしのゝめの空

藤澤より相摸河渡りて、大磯こいそを過ぐ。浪の音松の風にひゞき合ひて、いと高く聞ゆ。沖より汐風の吹上げたるといふ、こまかなるいさご地にて、いと歩みがたげなり。松の葉ごしに浪のよるなど、繪にかきたる樣にてをかし。晝やどる所大磯なり。親の敵討ちて本意とげたる曾我十郎が、はやく隙をうかゞふ便りとて、かよひなれけん女とらと聞えしも、此あたりに住みけるとか語りつたふ。

大磯歌舞地　昔日各爭姸　虎媛其殊絁　十郎亦偏憐

墮樓觀石氏　宴席殆和田　不是時宗至　使讎獨戴天

打驚きて—ふと目覺めて

おまし—座敷

むかふざま—向ふの方

末の松山—「君をおきてあだし心を我が持たば末の松山浪もこえなん」

素餐—徒に祿を食みて何の功も

川とかいふ驛に出づ。しれる人々自ら送り給ふも有り、人おこせたるもあり、うちつれていづる。商人の家ども、町たてわたし、作りならべたるあたりを打過ぎゆけば、海の面はる〴〵と見やらるゝ、いとめづらかなり。送の人々にも、是より歸り給ひねといふも、又逢見る事も有るまじくやと、いと名殘をし。益本に物聞えかはして、是よりみな歸り給ひぬ。晝つ方、ゆく〳〵うち眠られたるに、なほ有りし御かた〴〵の、御そばにさぶらふと覺えて打驚きて、「心ばかりや通ふらし」の御言の葉も、忘れがたく思ひやりまゐらせて、此方をおぼしめしおこせるにやと、

したひくる君がこゝろか止め來しわがたましひか通ふまぼろし

晝つかた立寄りたる宿いと涼しげなり。おくなるおましに居て、外のかたを見やれば、雲につらなりたる海原、むかふざまにたかく見えて、げに末の松山をもこえつべく、浪のたちかへるなど面白くて、爰に住む人さへぞ羨しき。それよりいで行けば、さつき頃早苗とりつらんと見ゆる田面に、綠の稻葉いとうるはしく、まだ穗に出でぬほどなり。草ぎる者の笠のみ見ゆ。田歌いとをかしく歌ふ。げになりはひのたやすからぬ營みも、見るごとには一しほに思ひ知られて、素餐のとがおそろし。又山際に畑うつ者の、身の色は

歌はこゝに擧げず

さうぞきかへ―著かへ、さうぞきは裝束の動詞

益本―井上市兵衛の諱

いかでかは―如何で斯る便宜を得んや

馬のはなむけ―餞別

すがく〳〵しく―さつさと

聞ゆる物から―聞えはするものの

ひざう―非常

にはもらしつ。夜ひとよ認めて、曉がた、名殘をしとて、一ところにより臥すほどもなく明けぬれば、いそぎ起出でて、旅衣さうぞきかへ侍るほど、かたみの袖の雫は、かきながすもたましひの消ゆる心地すれば、其ほどの事ども、皆とゞめつ。妾をゐてのぼるは、弟の益本なれば、萬にうしろやすく頼もしき事限りなし。是も君の惠によらずば、いかでかは。まだ明けはてぬ程に來て案内して、とくたち給ひねといそがし侍れど、上下のある人々馬のはなむけとて、盃出して、とりぐ〳〵に名殘つきせずしたひ給ふめれば、すがく〳〵しく出もやられず、馬のたかくいばえたるなど、はなやかに聞ゆる物から、いとかなし。

昔是來時飛二雨雪一　旅人瞳ㇾ指望二江東一　今將歸日苦二炎熱一

西馬回ㇾ頭斷二暑風一

たび衣わかるゝ袖に雲のなみけぶりの浪をたちやかさねん

女のひざうをいましめ給ふなる箱根、今切二ところの關通すべきよしの御しるし、きのふ益本に下し賜りぬ。元祿二年己巳夏、六月十一日出でたちて、とほき古郷にとて歸り侍る。御門出づるほどなど、物もおぼえず、みな簾のもとによりて暇乞し給ふ。芝のさと品

しまつ島―うに掛る枕詞
よをうみの云々―世を厭ひて尼となりて、倦みと海、海士と尼と掛けたり
苔の衣―法衣
ものが云々―めいめい散り〴〵に分れ行きたる人々
そこら―澤山
うしろみ―旅立の世話焼き
かしこければ―畏多ければ其御

のいかばかり大事とおほしかしづきつるものを、かく人とならせ給へるを御覽ぜさせたらましかばと、おもひ出で奉れば、いとゞ別れまゐらせなん事、あかず口をし。侍らふ人々に、

恩情何淺九年好　別恨難ㇾ堪萬里身　想見歸家隔ニ山海一
月前相望淚痕新

ふる里にひとりかへらばしまつ鳥うきねをのみぞ鳴きわたるべき

をさなくより仕うまつりて、かしらの雪となるまで、かた時さらず賴みきこえまゐらせし老びと、それより若きも、法の道に心ざし、あるはかゝるみぎはによをうみのあまとなりて、心ふかく行ひ居たまへるなどぞ、ことに妾が別をもかなしみ給ひて、かゝるはかなき言草をいひすて侍るを見ても、いとゞ苔の衣の袂はかわきだにせず、心よわきけしきもあはれなり。其外日頃おなじみやづかへにてなれ睦じかりつる人々の、おのがちりぢり行きあがれぬるなど、俄にかくと聞きて、驚き思ひて出できたる、そこら集ひて、とり〴〵にうしろみ物したゝめ、何くれといとなみ出でたる、いと嬉しくたのもし。今宵はかなたこなたと文どももおほく、御歌の御返しなどつかうまつる。かしこければこゝ





―例の如く我を待ち給ふ
斧の柄云々―昔の王質山に入りて仙人の棋を圍むに見とれ遂に斧の柄をくさらせたりといふ故事
一つ心云々―自分一人の思ふまゝにもならず
あとをだに云々―跡を來て見る事も出來ずとは思ひも掛けざりき
同じ云々―我と同鄕に親しき緣故ある人などは今一層涙を流すも多かり
ゆゝしきまで云々―涙のあまり忌々しき程こぼるゝを
およすげ―成人

りて、なほそのかみ御前に侍ひし心地のし侍るべきを、女にてさへあれば、一つ心にまかせぬぞかなしき。

あは雪のきえにし君があとをだに來つゝ見じとは思ひかけきや

苔の下にあはれとや見る今はとてかけはなれゆく袖のしづくを

靈魂何處去遊衍　仰見蒼穹俯見泉　今別高墳歸舊里
空留涕涙石碑前

立ちかへるべき心地もせず、闇き夜にまどへるが如くになん。頃日まゐりしは、宗の君のおまへにてぞありし。石川の君の御家にわたらせ給ふ御方よりもめせば、參りて日頃さぶらひぬ。いづくも〳〵、いまはとかけはなるゝほどの御名殘をおぼしめしなやませ給ふも忝なし。侍らふ人々も、袖引きわきがたきまでぬらしそへ給ひつ。同じ古鄕にしたしきゆかり持たるなどは、今一きは瀧まさるもおほかり。邦君の北の方の御まへに、今日の晝つかたまで侍らひて、なにくれと仰せらるゝ事どもつきせず、御衣かづけさせ給ふほどなど、ゆゝしきまでこぼれ落つるを、御袖のうへにも露かゝる御けしき、いと忝なく見奉る。御子達の日にそへて美しうおよすげさせ給ふを見奉るにも、祖母ぎみ

去をいふ

夢うつゝの云々―夢やら現やらその區別もつかず

有りし云々―亡き方の御氣に入りなりし者ぞとて、特に懇にいろいろ御あり

もだたしき云云―自分の面目を施す樣に御とりなし下さる御惠

かきくらし―涙にくれて

せちに―切に

久しきながめも―久しき間ながめ暮したるも、ながめは「我身世にふるながめせしまに」などの例と等しく、物思に沈むをいふ

卯月の云々―四月の二十日頃より五月の晦頃迄

れい待たせ給ふ

ほしめしつるものをとて、かたじけなく懇に仰せまつはして、何事をも、おもだたしきさまに、おほしおきてたる御惠を見奉るにつけても、なほ來し方のかへらぬ昔となりぬる儚さのみ、かず／＼に思ひつゞけられて、かきくらしつゝ過すほど、月日のうつりかはりて、わかれ奉りしをりのへだたり行くも、かなしくおぼえらる。親の年老いて、いとせちにこひしと覺ゆめるは、げに周公の聖にてだに東山の三年をなげき給ふ、ましておろかなる心のやみに、九とせの久しきながめもことわりに悲しくて、古郷をかへりみんと思ひなりぬるを、止めまほしく思ほしたる御かた／＼の、御心どもの淺からぬ御言の葉のなさけも、かず／＼に忘れがたきふしども多かれば、草まくら思ひたちぬる御なごりをしみまゐらせんと、彼方此方に、四日五日のほどと思ひてまゐるに、今一日今一日と、せちにとゞめさせ給ひて、卯月の二十日頃より皐月のつごもりつ方まで、外にさぶらふ。れい待たせ給ふらんと思ひ奉る主君もなければ、家路忘れて斧の柄くたしけん人の心地して歸るを、こなたにも獨り御心ほそくてながめ給ふ女君、おそかりつと待ちうらみさせ給ふ。故君の御はかに參りて、是やかぎりと御いとま申す程のいと悲しさ、物にも似ず。この御國にだに侍らましかば、かくかひなき御跡にも、たえず詣でまゐる

武藏鐙―古へ武藏より産したる名物、かけはなるといふに掛けたる文飾
おぼしわきて―思ひ分け給ひて
思し至らぬくまなく―御考の屆かぬ限もなく
になう―二つなく、此上なく
年なみの云々―月日の經過したるも
別れ奉り―元祿二年二月三日、使者養性院の逝

歸家日記上

井上通女

年經てすみし武藏鐙、さすがにかけはなるゝ東路のなごりをしく、かなしさをかきあつめて見むもよしなしや。一とせ故君の仰を承り、御言の葉のふかきめぐみによりて、身の拙きをも思ひわかで、はるけき海山のさかしきをしのぎてまゐれる心ざしを、淺からずおぼしわきて、御側にのみ朝夕ならさせ給ひて、よろづに御心をくはへて、思し至らぬくまなくいたはり仰せらるゝをば、いかでかはいとゞおろかにも思ひ奉らむ。いとになう賴みきこえ奉りて、十とせにちかき年なみの立ち重なれるも、たゞ昨日今日の心地ぞする。飽く世なうれつかうまつりし御かげに、かく〳〵俄なるやうにて別れたてまつりしかば、夢うつゝの境も思ひわかたれず、いとゞうき身を用なきものに思ひすて侍るを、とゞまらせ給へる御子達、御はらからを始めまゐらせて、有りし御心に叶ひてお

京書林衣棚二條下町　山形屋善兵衛
江戸日本橋南一丁目　小川彦九郎

享保二年丁酉八月

東海紀行終

りて心をなやまして

心ならぬ—意のまゝならぬ

胸うちつぶれて—胸がどき／＼して

奉り—其書付を關所の役人に

袖にふけ—新古今、下の句「思ふ方より通ふ浦風」

しはぶきやみ—咳嗽、せき、風邪か喘息なりしなるべし

るもしらず、けふは師走の三日に成りぬといふ。いとよく晴れて鮮かなる日のかげ、障子にうつりたるを見て、かゝるをり道ゆかばよかるべきに、心ならぬ宿かなといふ折ふし、使かへり來れり。いとゞはやかりしなど、くち／＼にいふ聲す。とく出でて見よといふほども、心もとなしや。かぎりなく嬉しき物から、なほいかならむと胸うちつぶれて、文箱あけたるに、いさゝかの咎もなく、よく書きかへて賜はれり。かゝる苦みおぼしやりたるにやと、其方にむかひて喜ぶ。扨奉りたれば、此たびはたがふ所なければ、とく／＼と許さる。いとうれしくて、此程思ひ暮しぬる、心ひらけたる心地して、いそぎ舟にのりぬ。風もあらけれど、近きわたりなれば、何ともおもはず。舟よりあがりて、今宵濱松にとまりぬ。なほ今朝の事いひて悦ぶ。此程の事ども、とり／＼言ひあへり。

　いさめしを袖にはふかくうちよする浪にこたふる濱松のかぜ

彼定家卿の、「袖にふけさぞな旅寐のゆめもみじ」といへるを、ふとおもひ出でて、かくいへり。

四日、五更出でて、明け離るゝほどに、天龍の川舟にてわたる。それよりしはぶきやみに懸りて、ものかくこと父のいさめければ、筆もとらずなりぬ。

めたるとによりて、手形に女と少女と區別して認むべく、筆者は少女なるを知らずして單に女と書きし故通行の許可を得ざりしと也

心もとなき―待遠しく氣にかゝる

我來し方―今迄自分が旅行し來りし道程

いばえて―嘶きて

取り集めて―何もかも一所にあ

み有りければ、ゆるし給はで、空しくもとのやどりに歸りぬ。いかゞ悲しくつらくて、いかでさる事しらざりけんと、我身さへ恨しくて、

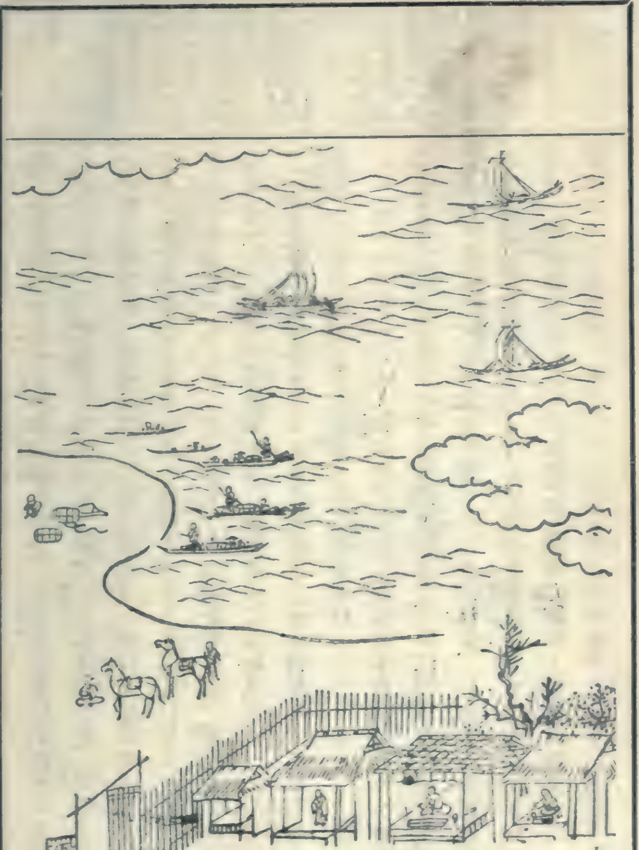
たびごろもあら井の關をこえかねて袖による浪身をうらみつゝ

自經萬里走君命　今日已來荒井關　未識少長因袖分

空留旅館我心艱

急ぎ使したてゝ、御印取りかへ給はらんと、難波へいひやる。爰にみな〳〵とゞまりて待つ程、心もとなき事數しらず。我來し方をおもふに、さかしき道も多かりき、かの使いかで怖しきめにやあふらん、やすらかにいつか歸り來んなど、しづこゝろなく思ひつづけらるゝ。もし事たがうて、是より歸りなば、いかにうからまし、はる〴〵來しかひも無くやなんど、おもひつゞくれば、そゞろに涙落ちて、燈さへ暗くおぼゆるに、雨いといみじく降りて、よろづ物わびしさ、いはん方なし。大路もほどなければ、五更より旅人うちむれ行くおとして、かれこれよびかはし、馬のいとたからかにいばえて、くつはづらの音などきこえたる、羨しく、たゞ何につけても、女の身のさはりおほく、はかなき事ども、今さら取り集めて過すほどに、明暮もおもひわかず。かくて幾日過ぎぬ





杜若—伊勢物語に出でて以來、八橋と杜若とは必ずつきものとなりたる也
ゆかりの色—紫色、杜若の花の色をいふ
いひしが聞きし—原本の句讀による、これ迄從者の言葉と見るべく、或はいひしがにて句、聞きしさるあとと接續するか、何れにても多少の誤あるが如し
よゝ—泣聲に節節の意を掛く、竹の子、よゝ、ね、凡て緣語
こゝもと—こゝらあたり
少女と云々—袖のあけたるとつ

ぬ。夜あけていとよく晴れわたりたるに、昨日の雪にやあらん、むかふなる山の峯々いと白くみゆ。八橋は爰わたりとこそ聞きつるにといへど、從がふ者ども、さ承りしは、一里程あなたに、澤ははたけのやうになり、橋はくひばかり殘りて、杜若もいづちいにけん、ゆかりの色もなければ、御覽ずべくもなしといひしが聞きし。さる跡こそなほゆかしけれと思へど、かくいへば見ずして過ぎ行きぬ。岡部を過ぎて來るほどに、竹のあるもとに、幼き子ども集りて、あそびゐたるを見て、

うき節もまだしらなくに竹の子のよゝとは何をなくねなるらん

赤坂にとまりぬ。うちとけ寐られざりければ、

ふしわびぬよひ〳〵毎のやどかりて夢もむすばぬ草のまくらに

二十七日、曉いで行く。けふは潮見坂とて、遠江の灘など見ゆる、いとおもしろき所をこそ過ぐるなどいふめれど、物へだたりたれば、いとよくも見えわかず。高師山、濱名の橋など、音に聞きつる、こゝもとにやと覺束なきものから、誰にかは問はん。未の時ばかり、荒井にやどかりて、難波にて賜りし御印、關所に奉りしに、わきあけたる少女と書きわくべき事を、えしらで、たゞ女とのみ書きて奉り、扨御印のことばにも、女との

おとすゞか―音も鈴の如くなる鈴鹿
ついまつ―たいまつ、炬火
はだれに―まだらに
あやうき家―あやしき家の誤か、あやしきは賤しき意
さゆらん―つめたき事ならん
いとはしく―いとはしくてとある方普通のいひざまなるべし
いさしらず―いさは否の意の副詞、濁みて讀む
ものしたゝめ―食事をすまし

り。

すゞか山雪さへふりぬ我こまの黒かりし毛もかはるばかりに

あらし吹く谷のいはまにむせびつゝおともすゞかの山川の水

二十五日、まだ夜ふかく出でぬ。ついまつともして行くに、大路ははだれに、雪今もふり、一里ばかり行きて、夜もほの〴〵と明けぬ。松の上などはさらなり、刈田の跡、あやうき家のかきさへ、いとをかしと見ゆ。このもかのも、たゞ白妙なるが、朝の光にまじはりあひたる、たとへん方なく、我世の外にゆくこゝちす。古郷にてはまれなる雪ぞかしと、珍かなるものから、從者のあしもと如何にさゆらんと、いとはしくて、とく晴れよかしと思はるゝ。巳過ぐる頃、雪やみて、日はなやかにさしいでたれば、道もいととくかわきぬ。皆々よろこびてゆく。申の時すぐる程、桑名より船にのる。暮れかゝりて、星の光あざやかになるに、黒き雲むら〳〵たゞよふ。人々此わたり風ふけば、あやふしとて、空をみつゝこがれ行く。我は何事もいさしらず、たゞ人のいふを聞き臥せり。風もいでこず、いとのどかにて、子の時ばかりに熱田につく。やがてものしたゝめなどして、宿をいでゆく。まだ夜ふかければ、何方もみえず。鳴海、矢作などいふを聞きすぎ





さること云々—物見なども氣が落著くまじ、まづ此度は見合せん

はいなし—つまらぬ、下になどと補ひて見るべきか

役—集韻に「同役」

りぬ。こゝにも又御家のあづかり出できて、何やかやとねぎらふ。彼方へのものことづて、馬人などの事いひ紛れくらしつ。しれる人かれこれ來て、かゝるついでに物見などいとよき事なりなどそゝのかせど、行先おほく、心は思ふ方にのみさきだちぬれば、かかる旅ぢにて、さることいと心も長閑ならじ、まづ此度はなどいひて赴かず。それもことわりなれど、かゝる序もいとかたき事なればほいなし、かしがましきまでにいふめる。

二十三日、朝ぼらけに京都を立ちて、粟田口にいで、瀬田の橋をわたりて、行く〳〵見る。草津を過ぎて、いしべとかや、里の名さへ睦じからぬたびね、いとわびしきや。けふは逢坂の關もすぎぬといふ。

へだて來し古郷人をこふる夜のゆめぢは許せあふ坂のせき

二十四日、五更に出でて行く。殘りたる月いとさやかに、のり物のすだれにうつりたるも、めなれぬ事なればいとあはれなり。

鷄鳴旅店役行裝　殘月含レ寒映二曉霜一　長路漫々何日盡

朝々暮々是他鄕

水口より土山を過ぎて、鈴鹿の坂をこゆ。雪水に道なめらかにて、馬も人もわびしげな

いとまなしと云云—休む暇もなき樣に見ゆれど、兎角上り兼ぬるものなれば
さし—指定し
●
戀塚—小枝の淨禪寺にあり、羅山撰文の碑銘に「二汗而婦兮、惟孝惟義、石可レ泯兮、貞名不レ已」詩は此文によれり、俗に袈裟御前の墓をいふ
心がらにや—氣のせいにや、
雁塔—塔
つき—適
いふもさらなりや—いふ迄もなき事なり

闕所の御しるし給はらんとて、爰に二日ありて、二十日の未過ぐるほど、河舟にてのぼり、さしひくさをも牽綱も、いとまなしと見ゆる物から、上りかねたる習ひなれば、二十一日の晝頃、淀までからうじていたりぬ。

　夜もすがらさをさす舟にさへられて枕のしたにむせぶ川波

伏見までとさしけれど、あまりに舟に佗びて、淀よりあがりぬ。それより鳥羽にかゝる。

秋の山をすぐるとて、

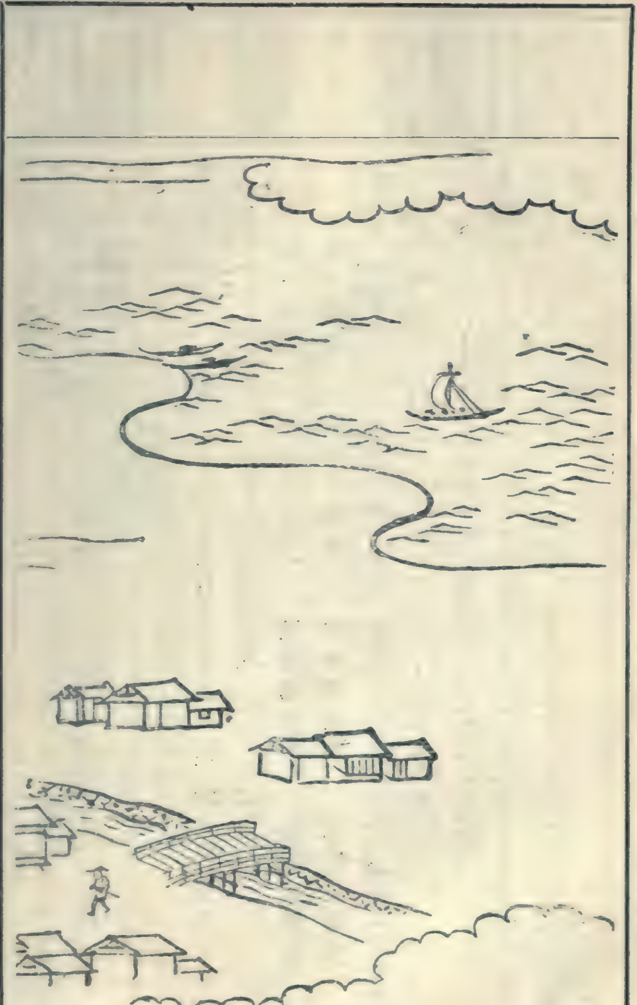
　いたづらに過ぎぬる秋の山おろし音も烈しくなりにけるかな

鳥羽の戀塚にて、

　停レ駕猶憐戀塚前　貞名勒レ石艸芊々
　天命如何使二渠然一　若人自是再難レ得

夕べがかりて都にいる。木草の色まで、心がらにや、めづらかに見え渡さる。東寺よりいるなれば、雁塔のけはひ、いとけざやかにて、名に高きもげに理とみゆ、つき〴〵しく立てならべたる家どもの軒の、つまうるはしく、出入る人もおのれ〳〵とほこりかに賑はしきは、をさまれる御代のさま、いふもさらなりや。三條河原町といふ所にやど





牽綎—和名抄に「音支訓二豆奈天一、挽レ船繩也」

かけても思はざりしに—兼ては見べきものと思ひも掛けざりしに

しほむかひぬ—潮に向ひて舟進み難しの意ならん

蓬窻—舟のまど

難波津—大阪

みつの浦—見つの意に古名三津を掛く

かれ殘りたるよし—「津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり」新古今、西行

こぎ行く舟の牽綎なれば、

所がらさぞな今宵はあかしがた月にぞをしむ舟の牽綎を

かれは淡路島と、人のいふを聞きて、

時しあればけふみて過る淡路島あはれかけても思はざりしに

申の時ばかりに、兵庫につきぬ。まだ日も高きといへば、唯今行けばしほむかひぬとて、錨をおろして泊りぬ。聞きなれぬ浪の音も、怖しくあはれにて、

乘レ寒一葉浮　倏忽過二他州一　風響驚二鄕夢一　波聲動二旅愁一

蒼蒼天與レ水　浩浩月如レ流　枕袖蓬窻裡　不能只自羞

十八日、兵庫をいでて、午の時過ぐる比、難波津をけふこそみつの浦につきぬと、悦びてあがりぬ。爰にかれ殘りたるよしなめりと、人のいふを聞きて、

冬がれのけしきもよしや津の國の難波わたりは春ならねども

と戲にひとりごちて、のり物してやどりに入りぬ。君の御やどもあづかりて、父の友なる人、こゝにものしたるなど出でて、何くれと父にものきこゆ。かれ是聞きつけて、多く來れば、いとまなく暮しつ。

ぎ、こゆるぎは磯に係る序詞
杜工部―杜甫
此たびは―菅家「此たびはぬさも取りあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」の句を用ふ
すぐる―上に宵の字など脱せるか
いざよひ―十六夜
しづこころなき―心配にて心の落着かぬ
五節の君の云々―源氏物語「琴の音にひきとめらるゝ綱手なはたゆたふ心君知るらめや」

がくれ行く、はたあはれなり。杜工部が渭水のことば思ひいださる。浪まくらのつれづれ、そこはかとなき海のもくづかき集めて、いさゝか此たびは取りあへぬ太麻にたむけ、十六日のすぐるころ、舟にのりぬ。風はげしくて舟たゞよふ。

しるべせよ浪間をわけて行く舟のこゝろしられぬ八重の潮風

いざよひの月浪にうつりて、玉のごとくに見えたるが、風にくだけて、

風ふけば月にみがける白玉もくだけて浪のたつにぞ有りける

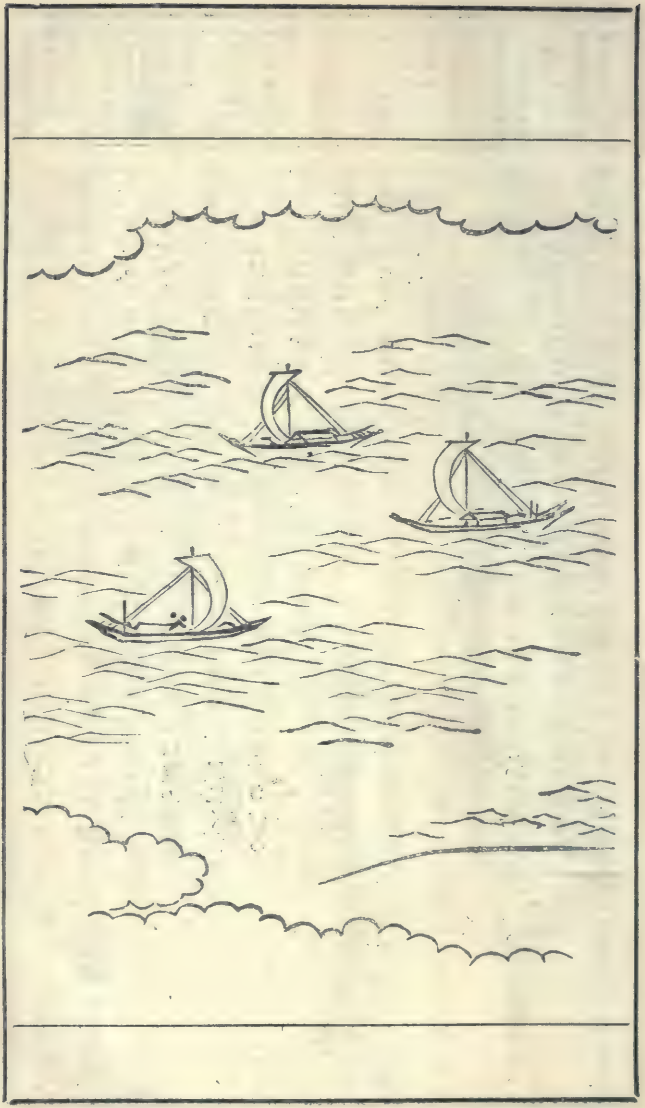
かくて子の時ばかりに、室津とかやに著きぬ。十七日、朝なぎに室を出でて走りゆく。今日ぞ聞きつる響の灘をすぐ。風もなほ昨日よりあらしとて、舟どものゝしる。舟のうちしづこゝろなきまぎれに、かねて思ひし須磨の浦も見えずなりければ、

かゝらずばいかに見てましすまの浦恨を波によせてこそ行け

松の音いとたかく聞ゆ。五節の君の、ひきとゞめらるといひけむこそ、いと思はるゝ。

琴の音をまつにこめてや今も又たゆとふ舟をひきとゞむらん

明石をすぐるころ、風すこしやはらぎぬ。今宵の月影いかにをかしからむと思ひながら、





東海紀行

井上通女

天のやはらぐ始のとし、霜をふみて、かたき氷にいたる比ほひなれば、年ふる丸龜を舟よそひして、あづまの方におもむく。難波へとて漕ぎ出る。親はらからよりはじめ、友とせし人など集りゐて、ころもでの上たゞならぬ理なり。されどかうかしこく忝き君の召にしたがふなれば、何か別れのかなしからむ。しかのみならず、御いつくしみ有る仰ごとのかず〳〵、身におはねば、ころもにも堪へざる心地す。かぞいろよくその身をいたせなどの、身にしみて、つたなく愚かなる心のかぎりを盡さんとぞおもはるゝ。父親をもてくだり給ふなれば、長き途もうしろやすく、太山によりかゝりたるとかやいふなるべし。いつしかとくはだつる心のみさきだちて、こゆるぎのいそぎに、あらき波風をしのぎて出づれば、たゞよひながらいと走りゆきて、故郷の方はや遠ざかり、しま

天のやはらぐ始のとし―天和元年
霜をふみて云々―詩經「履霜堅冰至」の句による、舊暦霜月卽ち十一月頃の謂ならん
ころもでの云々―袖に涙のかゝるも理なり
かぞいろ―父母
などの―などのたまふ言の葉の
父親をもて―父親をもゐての誤寫か
いそぎ―磯、急

寂しさや―謡曲「そも〳〵此すまの浦と申すは寂しき故に其名を得る」といふに想を取れり
路通―美濃の人一旦乞食の境界に落ちしを、芭蕉取立てて僧とし、門人となしたり
越人、如行、前川、荊口―何れも門人の名
伊勢の遷宮―二十一年目の九月晦日の夜に行はる

　寂しさや須磨にかちたる濱の秋

　浪の間や小貝にまじる萩の塵

其日のあらまし、等栽に筆とらせて寺に残す。路通も此みなと迄出むかひて、美濃の國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合せ、越人も馬をとばせて如行が家に入り集る。前川子、荊口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふが如し。且悦び且いたはる。旅のものうさも未だやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮をがまんと、又舟にのりて、

　蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

おくの細道　終

歸山―本名瑜珞山なるを海路と誤り、遂に轉じて歸山と稱すとぞ

明夜の陰晴云々―孫明復八月十四日夜詩「銀漢無レ聲露暗垂、玉蟾初上欲レ圖時、清樽素瑟宜二先賞一、明夜陰晴未レ可レ知」

ますほの小貝―ますうの貝にて赤き貝の汎稱、西行「汐そむるますうの小貝拾ふとて色の濱とはいふにや有るらん」色の濱は即ち種の濱也

でにけり。鶯の關を越えて、湯尾峠を越ゆれば、燧が城、歸山に初雁を聞いて、十四日夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。その夜月殊に晴れたり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路のならひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて、松の木の間に月のもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥濘をかわかせて、參詣往來の煩なし。古例今にたえず、神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、亭主かたりける。

　月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず雨降る。

　名月や北國日和定めなき

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云ふもの、破籠小竹筒など、こまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹著きぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり、爰に茶を飲み酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしき感に堪へたり。

五十丁―寺領の入口より山中の寺迄の行程

邦機千里―機は畿の誤、京都の地をいふ、經詩「邦畿千里維民所止」

そこ〳〵―住所をいふ也

名月は云々―八月十五日の夜は敦賀湊にて賞せんとて旅立つ

あさむつ―淺生津又淺水とも書く、今麻生津といへり

ゆ。今既に別に望みて、

　物書いて扇引きさく餘波かな

五十丁山に入りて、永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦機千里を避けて、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆゑある事とかや

福井は三里ばかりなれば、夕飯したゝめて出づるに、たそがれの路たど〳〵し。爰に等栽といふ古き隱士有り、いづれの年にか江戸に來りて予を尋ぬ。遙十年餘り也。いかに老いさらぼひて有るにや、將死にけるにやと、人に尋ね侍れば、いまに存命して、そこそこと敎ふ。市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顏へちまのはひかゝりて、雞頭箒木に戸ぼそをかくす。さては此うちにこそと、門を叩けば、佗し氣なる女の出でて、いづくよりわたり給ふ、道心の御坊にや、あるじは此あたり何がしと云ふものの方に行きぬ、もし用あらば尋ね給へと云ふ。かれが妻なるべしと知らる。むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと、頓て尋逢ひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにとたび立つ、等栽も共におくらんと、裾をかしうかゝげて、路の枝折とうかれ立つ。

漸白根ケ嶽かくれて、比那ケ島あらはる。あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穗に出

雙鳧云々—前漢書蘇武別李陵詩「雙鳧倶北飛、一鳧獨南翔、子當留此館、我當歸故鄕」
書付—笠に同行二人など書くをいふなるべし
鐘板—又雲板ともいふ、金銅に作り形雲の如く、禪家にて食時のしらせにうつもの
終夜—此歌蓮如上人の歌なるべき由菅菰抄にいへり
無用の指—莊子「所謂枝於手者樹無用之指也」

し。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此寺にとまりて、

終宵秋風聞くやうらの山

と殘す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞きて衆寮に臥せば、明ぼのの空近う讀經の聲すむまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追來る。折ふし庭中の柳ちれば、

庭掃いて出でばや寺に散る柳

とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨てつ。

越前の境、吉崎の入江を舟に棹さして、汐越の松を尋ぬ。

終夜嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松　西行

此一首にて數景盡きたり。もし一辯を加ふるものは、無用の指を立つるが如し。

丸岡天龍寺の長老、ふるき因あれば尋ぬ。又金澤の北枝と云ふもの、かりそめに見送りて、此所までしたひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞

むざんやな—謡曲「あなむざんやな斎藤別当にて候ひけるぞや」の句に取る
大慈大悲—觀世音菩薩

此一村云々—貞室が初の點料が久之助の父にある事を恥ぢ、特に此一村の人に對しては點料を請けずして俳諧の判を爲したりと也

むざんやな甲の下のきり〴〵す

山中の溫泉に行くほど、白根が嶽跡に見なしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり、花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ふとや。那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さま〴〵に、古松植ゑならべて、萱ふきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

溫泉に浴す。其功有馬につぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ

あるじとするものは久之助とていまだ小童也。かれが父俳諧を好み、洛の貞室若輩のむかし、爰に來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸りて貞德の門人となつて世に知らる。功名の後、此一村判詞の料を請ずと云ふ。今更むかし語りとはなりぬ。

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島と云ふ所にゆかりあれば、先立て行くに、

ゆき〳〵てたふれ伏すとも萩の原　曾良

と書置きたり。行くものの悲しみ、殘るもののうらみ、雙鳬のわかれて雲にまよふが如

すける名—風流人といふ名

實盛—又眞盛とも書く、篠原の合戰に討死したる齋藤別當

卯の花山、くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大阪よりかよふ商人何某といふ者あり、それが旅宿を共にす。一笑と云ふものは、此道にすける名のほの〲聞えて、世に知る人侍りしに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに。

塚も動け我泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あか〱と月は難面もあきの風

小松と云ふ所にて

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

此所の太田神社に詣づ。實盛が甲錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝朝臣より賜はらせ給ふとかや。げにも平士のものにあらず、目庇より吹返しまで、菊から草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打たり。實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて此社にこめられ侍るよし。樋口の次郎が使せし事ども、まのあたり縁起にみえたり。

白波の云々—古今「白なみのよする汀に世をすぐすあまの子なれば宿も定めず」あまの子は遊女の稱、子より此と捺して世のあさましうと續けたる也

衣の上の云々—芭蕉が僧形なるを見て依頼せる也

くろべ—黒部川、越中三日市と魚津との間を流る

擔籠の藤浪—擔籠は多古、多胡とも書く名所也、拾遺集、人丸「多胡のうらの底さへ匂ふ藤波をかざして行かん見ぬ人のため」

て、此關迄をのこの送りて、あすは古郷へかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也。白波のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定なき契、日々の業因いかにつたなしと、物いふをきくまゝ寐入りて、あした旅立つに、我々にむかひて、行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍らん、衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へと、泪を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にてとゞまる方おほし、只人の行くにまかせて行くべし、神明の加護かならず恙なかるべしと云捨てゝ出でつゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば、書きとゞめ侍る。くろべ、四十八ケ瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古と云ふ浦に出づ。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に尋ぬれば、是より五里、磯傳ひしてむかふの山陰にいり、蜑の苫ぶき幽なれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじと、いひおどされてかの國に入る。

わせの香や分入る右は有磯海

西施」、淡粧濃抹両相宜」はぎぬれて—脛濡れてなるべし

ーぶりー—振、両越の境、越後に属し高田侯の封

六日云々—七月七日七夕の前夜の感じ

寐たるにの下—一本「一間を隔てて表の方に若き女」とあり

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭禮

象潟や料理何くふ神まつり　曾良

蜑の家や戸板を敷きて夕涼　美濃の國の商人　低耳

岩上に鵙鳩の巣を見る

波こえぬ契ありてやみさごの巣　曾良

酒田の餘波日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞く。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天の川

今日は親しらず子しらず、犬もとり、駒返など云ふ北國一の難所を越えて、つかれ侍れば、枕引きよせて寐たるに、西の方に若き女の聲二人ばかりときこゆ、年老たるをのこの聲も交り物語するをきけば、越後國新潟と云ふ所の遊女なりし。伊勢參宮すると

暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光数をつくして、今象潟に方寸を責め、酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひ、いさごをふみて、其際十里、日影やゝかたぶく比、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蜑の苫屋に膝をいれて、雨晴るゝを待つ。其朝天能く霽れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟をうかぶ。先づ能因島に舟を寄せて三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干滿珠寺と云ふ。此處に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其陰うつりて江にあり。西はむやむやの關路をかぎり、東に堤を築いて、秋田に通ふ道、遙に海北にかまへて、浪打入る所を汐こしと云ふ。江の縦横一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

方寸を責め—菅菰抄に方寸は土地などはかる語、責むは労ふ意にて、はるばるの旅路もはや行先象潟ばかりに成りたりとの意と解せり

闇中に莫作—摸索の誤か、くらがりにてさぐり知る意

雨も又奇云々—東坡西湖の詩「水光瀲灔晴偏好、山色空濛雨又奇」の句

花の上こぐ—西行「きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり船」

西施—支那の古美人、東坡西湖の詩下の二句に「欲把西湖比

干將莫耶―古への二名劍

歌の哀―金葉集「行尊大峯にて思ひかけず櫻の咲きたりけるを見てよめる、もろ共に哀と思へ山櫻花より外に知る人もなし」

錢ふむ―菅菰抄「此山中の法にて地へ落ちたるものを取る事能はず、故に道者の投擲せし金銀は小石の如く錢は土砂にひとし、人其上を往來す」

を淬すとかや、干將莫耶のむかしをしたふ、道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰をかけて、しばしやすらふほどに、三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積む雪の下に埋れて、春を忘れぬ遲ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかをるがごとし。行尊僧正の歌の哀も、爰に思ひ出で、まさりて覺ゆ。惣て此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめて記さず。坊に歸れば、阿闍利の需に依て、三山順禮の句々短冊に書く。

涼しさやほの三日月の羽黑山

雲の峯いくつ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道のなみだかな　曾良

羽黑山を立て、鶴ヶ岡の城下長山氏重行と云ふもののふの家にむかへられて、俳諧一卷有り。左吉も共に送りぬ。川舟に乘つて酒田の湊に下る。淵庵不玉と云ふ醫師の許に宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

あるじ—饗應

月山、湯殿—月山は頂上にて、西の中腹庄内の方なるをば羽黒山、東の中腹最上の方なるを湯殿山といふ

木綿じめ—紙捻にて作りたる修驗袈裟

龍泉に云々—史記註の晉大康地理記に「汝南西平縣有龍淵水、可用淬刀劍」

別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊において俳諧興行。

　有りがたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣づ。當山開闢能除大師はいづれの代の人と云ふ事をしらず。延喜式に羽州里山の神社と有り。書寫黑の字を里山になせるにや。羽州里山を中略して羽黑山と云ふにや。出羽といへるは、鳥の毛羽を此國の貢に獻ると風土記に侍るとやらん。月山、湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ修驗行法を勵し、靈山靈地の驗效人貴び且恐る。繁榮長にして、めでたき御山と謂ひつべし。

八日、月山にのぼる。木綿じめ身に引かけ、寶冠に頭を包み、强力と云ふ者に導かれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏んでのぼる事八里、更に日月行道の雲關に入るかとあやしまれ、息たえ身こゞえて、頂上に臻れば、日沒ちて月顯る。笹を鋪き篠を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿山に下る。谷の傍に鍛冶小屋と云ふ有り。此國の鍛治、靈水を選んで爰に潔齋して劒を打つ。終に月山と銘を切て世に賞せらる。彼龍泉に刃

のらんと―舟に

蘆角一聲―古風の俳諧をたとふ

いな船―古今集「最上川のぼれば下るいな船のいなにはあらず此月ばかり」

し、人々のすゝむるによりて、尾花澤よりとつてかへし、其間七里ばかり也。日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り土石老いて、苔滑に、岩上の院々扉を閉ぢて、物音きこえず、岸をめぐり、岩を這うて、佛閣を拜し、佳景寂寞として、心すみ行くのみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

最上川をのらんと、大石田と云ふ所に日和を待つ。爰は古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ、蘆角一聲の心を和げ、此道にさぐり足して、新古ふた道にふみ迷ふと雖も、道しるべする人しなければと、わりなき一巻殘しぬ。このたびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてん、はやぶさなど云ふおそろしき難所あり、板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをや、いな船とはいふならし。白糸の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人堂岸に臨みて立ち、水みなぎりて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云ふ者を尋ねて、別當代會覺阿闍利に謁す。南谷の

雲端につちふる—杜甫「已入風磴霾雲端」—旋風などの土を巻上げて降すをいふ

不用—不用心、山賊などの害をいふ

ねまる—寝はちばふ、何れ此國にてはすわる義といふ

かひや—諸説あれど、こゝは飼屋にて、蠶室の義なるべしといふ、萬葉「朝霞かひやが下になく蛙忍びつゝありとつげんともがな」

まゆはき—草の花(うまごやし)と女の化粧道具の名とを兼ぬ

よこたへ、樫の杖を携へて、我々が先に立ちて行く。けふこそ必ず危き目にもあふべき日なれと、辛き思をなして後について行く。あるじの言にたがはず、高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて、夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分け〳〵、水をわたり、岩に蹶いて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、此道必ず不用の事有り、恙なうおくりまゐらせて仕合したりとよろこびてわかれぬ。跡に聞きてさへ、胸とゞろくのみなり。

尾花澤にて清風と云ふ者を尋ぬ。かれは富める者なれども、志いやしからず、都にも折々かよひて、流石に旅の情をも知りたれば、日比とゞめて、長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまるなり

這出でよかひやが下の蟾の聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがたかな　曾良

山形領に立石寺と云ふ山寺あり、慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地也、一見すべきよ

衡、康衡、忠衡のよく父の遺命を奉じ難に殉じたるをいふ
國破れて―杜甫春望詩「國破山河在、城春草木深」
兼房―増尾十郎といふ、義經記に「十郎權頭兼房白き直垂に褐の袴著て白髪まじりのもとどり引き亂し」云々
封人―境を守る役人
よしなき―つまらぬ

國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時の遷るまで泪を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

兼ねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢と成るべきを、四面新に圍んで、甍を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨のふり殘してや光堂

南部道遙にみやりて、岩手の里に泊る。小黒崎みつの小島を過ぎて、なるこの湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。此道旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸うとして關をこす。大山に登つて日既に暮れければ、封人の家を見かけて舍をもとむ。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿するまくらもと

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

見佛聖―元亨釋書「見佛居奥州松島（中略）精勤苦錬一十二年、其間誦法華一萬六萬部、其後不計數、稱鳥國鹽云々」

雉兎芻蕘―樵人や草刈り木こり、「孟子、文王之囿方七十里、芻蕘者往焉、雉兎者往焉」

こがね花咲く―萬葉集、大伴家持「すめらぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花咲く」

まどしき―貧しき

三代―清衡、基衡、秀衡

金鷄山―秀衡築立に擬鑑の地

義臣―鎌倉より義經追伐の際、秀衡の遺子國

十一日、瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其後雲居禪師の德化に依て、七堂甍改りて金壁莊嚴光を輝し、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日、平和泉を心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兎芻蕘の往きかふ道、そこともわかず、終に道ふみたがへて石の卷といふ湊に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金花山、海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつゞけたり。思ひかけず斯る所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸うまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ道まどひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まゝの萱原などよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふところに一宿して、平泉に至る。其間廿餘里程とおほゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野に成りて、金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。康衡が舊跡は衣ケ關を隔てゝ、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。

浙江—支那銭塘に在り、水勢曲折して湖頭に激起するを以て此名ありといふ、こゝは比喩として用ひたる筆元より也

窅然—深遠なる貌、美人の形容

大山ずみ—正しくは大山つみ、大山祇神とて山を掌る神の名

江上—江のほとり

を入れて、江の中三里浙江の潮をたゝふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯たるがごとし。其氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神のむかし、大山ずみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきて、海に出づる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有り。將松の木蔭に世をいとふ人も稀に見え侍りて、落穂松笠など打ちけぶりたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく、立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求れば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　　曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解いてこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり。

はねをかはし云云—長恨歌「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」

つなでかなしも—實朝「世の中は常にもがもななぎさこぐあまの小舟の綱手悲しも」

九仭—仭は八尺、甚だ高き形容

あらた—あらたか

和泉三郎—名は忠衡、秀衡の三男にて、よく父の遺命を守り、義經に從ひて高館に戰死す

誠に云々—六韜「[illegible]道可操衆、[illegible]從之」

ことふりにたれど—事新しくいふ言もなき事なれど

扶桑—日本

ひ皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくの如きと悲しさも増りて、鹽がまの浦に入相のかねを聞く。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に、籬が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて、肴わかつ聲々に、つなでかなしもとよみけん心も知られて、いと哀なり。其夜目盲法師の琵琶をならして、奥淨瑠璃と云ふものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕ちかうかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。早朝鹽釜の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仭に重り、朝日あけの玉がきをかゞやかす。かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ我國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り、かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進と有り。五百年來の俤、今目の前にうかびて、そゞろに珍らし。渠は勇義忠孝の士也、佳命今に至りてしたはずといふ事なし。誠に人能く道を勤め義を守るべし、名もまた是にしたがふと云へり。日既に午にちかし、船をかりて松島にわたる。其間二里餘、雄島の磯につく。

抑ことふりにたれど、松島は扶桑一の好風にして、凡洞庭西湖に恥ぢず、東南より海

かきと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」

十編菅菰—方角抄「みちのくの十ふの菅菰七ふには君をしなして三ふに我ねん」

壺碑—一本、下に「市川村多賀城にあり」の句あり

數里—里數の誤か

獦—惠美の朝臣名は朝獦（アサカリ）

師堂天神の御社など拜みて、其日はくれぬ。猶松島鹽釜の所々畫に書きて送る。且紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に十編の菅あり。今も年々十編菅菰を調じて國守に獻ずと云へり。

壺碑

つぼの石ぶみは高さ六尺餘、横三尺計歟。苔を穿ちて文字幽也。四維國界之數里をしるす。「此城神龜元年按察使鎭守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣獦修造也十二月朔日」と有り。聖武天皇の御時に當れり。むかしよりよみ置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至つて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて、末松山といふ。松のあひあ

下りし人―和漢三才圖會「孝義任陸奧守時、剪之用爲名取川橋」

松は此たび―後拾遺、能因「武隈の松はこのたび跡もなし千年を經てや我は來つらん」

あやめ葺く日―五月五日

さだかならぬ名どころ―其位置の明瞭に世に知られざる名所

みさぶらひ―古今大歌所御歌「みさぶらひみ

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目覺むる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずと知らる。先能因法師思ひ出づ。往古むつの守にて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠まれたり。代々あるは伐り、あるは植繼ぎなどせしと聞くに、今將に千歳のかたちとゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。

武隈の松見せ申せ遲ざくら　　擧白

と云ふものの餞別したりければ、

櫻より松は二木を三月越

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめ葺く日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衞門と云ふものあり。聊心ある者と聞きて、知る人になる。この者年頃さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらるゝ。玉田よこ野つゝじが岡はあふひ咲くころ也。日影ももらぬ松の林に入りて、爰を木の下と云ふとぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。藥

の芳話の徳を慕ひて死後百姓相圖りて其平生遊憩の處に建てし碑、之を望む者皆涙を流したるよりいふ

消入るばかり—苦痛の甚しきをいふ

道祖神の社—八雲御抄に「或說に云ふ、實方笠島の道祖神の前を下馬なくして通り給へりければ、神前にて馬たふれて、實方卒すと云ふ、今に實方の廟其社の傍にありといへり」

形見のすゝき—西行「朽ちもせぬ其名ばかりを止め置きて枯野の薄かたみとぞ見る」

乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日のことなり。其夜飯塚にやどる。溫泉あれば、湯に入りて宿をかるに、土座に筵を敷きて、あやしき貧家なり。灯もなければ、ゐろりの火かげに寢所をまうけて臥す。夜に入りて雷鳴り雨しきりに降りて、臥せる上よりもり、蚤蚊にさゝれて眠らず、持病さへおこりて、消入るばかりになん。短夜の空もやうく明くれば、又旅立ちぬ。猶夜の餘波心すゝまず、馬かりて桑折の驛に出づる。遙なる行末をかゝへて、斯る病覺束なしといへども、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縱橫に踏みて、伊達の大木戸をこす。鐙摺白石の城を過ぎ、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんと、人にとへば、是より遙右に見ゆる山際の里を、みのわ笠島と云ふ、道祖神の社、かたみの薄今にありと敎ふ。此頃の五月雨に、道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに、蓑輪笠島も五月雨の折にふれたりと、

笠島はいづこ五月のぬかり道

檜皮―日和田
かつみ―昔より眞菰の事といへども、花かつみとて花を稱する點より見れば、或は花菖蒲の類かともいへり
黒塚の岩屋―安達原にある有名なる處
しのぶ文字摺―「みちのくのしのぶ文字ずり誰ゆゑに」の歌を始め、古來最も有名也、其石の圖本文庫「東遊記」に載せたり
大手―追手、城の正面
二人の嫁―佐藤武信忠信二人の妻、兄弟戰死の後甲冑を着して歸れる老母を慰めしが、その姿の木像を安置し甲冑堂といふ
墮涙の石碑―晋

等窮が宅を出でて五里ばかり、檜皮の宿を離れて、あさか山有り、路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈る頃もやゝ近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ふぞと、人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね、人にとひ、かつみ〳〵と尋ねありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。あくればしのぶ文字摺の石を尋ねて、忍ぶの里に行く。遙山陰の小里に、石なかば土に埋れてあり。里の童の來りて教へける。昔は此山の上に侍しを、往來の人の麥草をあらして、此石をこゝろみ侍るをにくみて、此谷へつき落せば、石の面下ざまにふしたりと云ふ。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわたしを越えて、瀬の上と云ふ宿に出づ。佐藤の庄司が舊跡は、左の山際一里半ばかりに有り。飯塚の里鯖野と聞きて、尋ね〳〵行くに、丸山といふに尋ねあたる。是庄司が舊館也。麓に大手の跡など、人の教ふるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先哀なり。女なれどもかひ〴〵しき名の世に聞えつる物かなと、袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を

はいかで都へ告げやらん今日白川の關はこゆると」

秋風―能因「都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白川の關」

青葉の梢―頼政「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白川の關」

古人云々―淸輔の袋艸子にある竹田太夫國行の話

會津根―會津の山

かげ沼―後世鏡沼といふ所にして、笠石と須賀川の間なる新田也、近年又鏡田ともいふ

橡拾ふ―山家集「山深み岩にせかるゝ水ためんかつかつ落つるとち拾ふほど」

どめおかれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴著かな

とかくして越行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津根高く、右に岩城相馬三春の庄、常陸下野の地をさかひて、山つらなる。かげ沼と云ふ所を行くに、今日は空曇りて物影うつらず。須賀川の驛に等窮といふものを尋ねて、四五日とゞめらる。先白川の關いかにこえつるやと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懐舊に腸を斷ちて、はかぐしう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて一巻となしぬ。此宿の傍に大きなる栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有り、橡拾ふ深山もかくやと閒に覺えられて、ものに書き付け侍る。其詞、

栗といふ文字は、西の木と書きて、西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用ひ給ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

妙禪師云々―昔孤抄に「仏禪寺は中華宋朝の僧にて、高峯と云ふ山に籠り、生涯戸を閉ぢて出でず、法雲は法運の誤なるべし、石室に籠り、馬糞を焚き、芋を煮て食ひし僧云々」

殺生石―玉藻前となりし狐殺明に射殺され、後百年餘にして其靈化してなりたりといふ石、其石に觸れば生物皆死す、蓋し砒石の類なるべしといふ

清水ながるゝの柳―西行「道の邊に清水流るゝ柳かげ暫しとてこそ立ちとまりつれ」

いかで都へと―拾遺集「便あら

石上の小庵、岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室をみるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に殘し侍りし。是より殺生石に行く。館代より馬にておくらる。此口付のをとこ、短冊を得させよと乞ふ。やさしき事を望みはんべるものかなと、

野を横に馬ひきむけよ郭公

殺生石は溫泉のいづる山かげにあり、石の毒氣いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ、眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は、蘆野の里にありて、田の畔に殘る。此所の郡守戸部某の、此柳見せばやなど折々にのたまひ聞え給ふを、いづくの程にやと思ひしを、今日此柳のかげにこそ立ちより侍れ。

田一枚植ゑて立去る柳かな

心許なき日かず重なるまゝに、白川の關にかゝりて、旅心定りぬ。いかで都へと、便求めしもことわりなり。中にも此關は三關の一にして、風騷の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裝を改めし事など、清輔の筆にもと

に續けてなれぬ旅人の意に解す
獨—一人
玉藻の前—和漢三才圖會に詳也
修驗—山伏
足駄を拜む—行者堂は役小角を祀る所、小角の像は必ず木屐を著けたる形に作る也
佛頂和尚—もと東都深川長慶寺に住し、後此雲山寺に隱棲せる禪僧
おくある—奥深き

方に音信る。思ひかけぬあるじの悦び、日夜語りつゞけて、其弟桃翠などいふが、朝夕勤めとぶらひ、自の家にも伴ひて、親屬のかたにもまねかれ、日をふるまゝに、一日郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。夫より八幡宮に詣で、與市が扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡とちかひしも、此神社にて侍ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠宅に歸る。

修驗光明寺と云ふ有り、そこにまねかれて行者堂を拜す。

　夏山に足駄を拜む首途かな

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚の山居の跡あり。

　竪横の五尺にたらぬ草の庵
　むすぶもくやし雨なかりせば

と、松の炭して岩に書き付け侍りといつぞや聞え給ふ。其跡見んと、雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人多く道のほど打さわぎて、おぼえず彼麓に至る。山は奥あるけしきにて、谷道遙かに、松杉黑く、苔したゞりて、卯月の天今なほ寒し。十景盡る所、橋をわたりて山門に入る。さてかの跡はいづくの程にやと、後の山によぢのぼれば、

つ暁髪を剃て黒染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍て黒髪山の句有り。衣更の二字力ありて聞ゆ。

二十餘丁山を登りて瀧有り、岩洞の頂より飛流して、百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入りて瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申し傳へ侍るなり。

　暫時は瀧にこもるや夏のはじめ

那須の黒羽と云ふ所に知る人あれば、是より野越にかゝりて、直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず、いかゞすべきや、されども此野は縱横にわかれてうね〳〵しき、旅人の道ふみたがへんあやしう侍れば、此馬のとゞまるところにて馬を返し給へと、かし侍りぬ。ちひさきものふたり馬の跡したひて走る。獨は小娘にて、名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名のあやしかりければ、

　かさねとは八重撫子の名なるべし

頓て人里に至れば、あたひを鞍壺に結付けて馬をかへしぬ。黒羽の館代淨坊寺何がしの

髮を剃て云々―芭蕉の僧體なりし事は、前の野ざらし紀行に見えたり、當時俳人の姿態也

夏―結夏の略、結制又は安居といひ、舊四月十五日より九十日間僧の籠り居て修行すること

いかゞすべきや―やゝためらふ語詞なり、以下返し玉へまで野夫の語

うね〳〵しき―道のうね〳〵と曲りたること、那須野の道多きは古今有名也、一本「うひ〳〵しき」とあり、下

室は出入口なき家
詠習し―室の八島のけぶりと歌に詠み習はし
桑門―沙門、僧
剛毅云々―論語「剛毅木訥近レ仁」
此御光―徳川家康公の威光
八荒―八方荒遠の地

なり。

三十日、日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう、我名を佛五左衛門と云ふ、萬正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、一夜の草の枕も打解けて休み給へと云ふ。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなすことに心をとゞめて見るに、唯無智無分別にして正直偏固の者也。剛毅木訥仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書きしを、空海大師開基のとき、日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今此御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵のすみか穏かなり。猶憚多くて筆を擱きぬ。

　あらたふと青葉若葉の日の光

　剃り捨てゝ黒髪山に衣がへ　　曾良

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

曾良は河合氏にして總五郎と云へり。芭蕉の下葉の軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松しま象潟の眺共にせんことを悦び、且は羇旅の難をいたはらんと、旅立

—三月二十七日　いつかは—いつかは再び訪むべき

呉天云々—三體詩「五天到日頭應白」の句に出でたるべく、呉天窮地と相對したる用例もあれど、こゝは五天の誤か

身すがら—身一つ、著のみ著のまゝに、

さりがたきはなむけ—辭退のならぬ餞別の物

わりなけれ—つまらぬ話なれ

曾良—信州諏訪の人、芭蕉が門人

無戸室に入りて云云—日本紀神代巻に出づ、無戸

さまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、船に乗りて送る。千住と云ふ所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ。

行春や鳥啼き魚の目は泪

是を矢立の初として、行く道なほすゝまず。人々は途中に立ちならびて、後かげの見ゆる迄はと見送るなるべし。今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひ立ちて、呉天に白髪のうらみを重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、若し生きて歸らばと、定めなき頼みの末をかけ、其日漸く早加といふ宿にたどり著きにけり。痩骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴かた雨具墨筆のたぐひ、あるはさりがたきはなむけなどしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

室の八島に詣づ。同行曾良が曰く、此神は木の花さくや姫の神と申して、富士一體なり。無戸室に入りて燒給ふ誓のみ中に、火々出見尊生れ給ひしより、室の八島と申す。又煙を詠習し侍るもこの謂なり。はたこのしろといふ魚を禁ず。緣起の旨世に傳ふ事も侍る

月日は云々―李白、春夜宴桃李園序「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客」

江上の破屋―江戸の芭蕉庵

道祖神―みちを守る神

三里―膝の側なる灸穴の稱

面八句―連歌百韻の懐紙の第一面の八句の稱、彌生も末の七日

おくの細道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり、予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず、股引の破をつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかかりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅にうつるに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸置き、彌生も末の七日、明ぼのの空朧々として、月は有明にて光を

　ゆく駒の麥になぐさむやどり哉

卯月の末庵にかへり、旅のつかれをはらすほどに、

　夏衣いまだ虱をとりつくさず

野ざらし紀行終

圓覺寺―鎌倉、大顚和尙は俳名を幻呼といひ、其角が師とする所といふ
梅戀ひて云々―大顚師の遷化は一月にて芭蕉が之を聞き得たるは四月なれば此句あり

菜畠に花見顏なる雀かな

水口にて、二十年を經て故人にあふ。

命ふたつ中に生たるさくらかな

伊豆の國蛭ヶ小島の桑門、是も去年の秋より行脚しけるに、我名を聞きて草の枕の道連にもと、尾張の國より跡をしたひ來りければ、

いざともに穗麥くらはん草枕

此僧われに告げて曰く、圓覺寺の大顚和尙、ことし睦月のはじめ、遷化したまふよし、まことや夢のこゝちせらるゝに、先づ道より其角がもとへ申しつかはしける。

梅戀ひて卯の花拜む涙かな

杜國におくる

白芥子にはねもぐ蝶の形見哉

二たび桐葉子がもとに在て、今やあづまに下らんとするに、

牡丹蘂深く分け出る蜂の名殘哉

甲斐の山中に立よりて、

とりにて若狹に向ひ祈りしに水出でし故事により、每年二月十二日の夜水取の式ありといふ
氷の僧—一本「こもりの僧」
鶴をぬすまれし—林和靖の梅鶴の故事による

京に登りて、三井秋風が鳴瀧の山家をとふ。

、水取や氷の僧のくつのおと

梅林

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

樫の木の花にかまはぬすがた哉

伏見西岸寺任口上人に逢ひて、

我衣にふしみの桃のしづくせよ

大津に至る道山路を越えて、

山路來て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松は花よりおぼろにて

晝の休らひとて、旅店に腰をかけて、

躑躅生ひてその陰に干鱈さく女

吟行

にや」といふに依ればこれにて一句

市人よ云々―笠はかぶり蓋、傘はさしがさ、「笈日記に抱月亭と前書ありて、市人にいで是うらん笠の雪、翁、酒の戸たゝく鞭のかれ梅、抱月、と脇あり」と抄に見ゆ

うしの年―貞享二丑年

二月堂―四絹索院と號し、本尊は觀音にて若狹の井あり、若狹の國遠敷明神に奉る水を汲む、一年旱して水なく、荒僧井のほ

草まくら犬もしぐるゝか夜の聲

雪見にありきて、

市人よ此笠うらう雪の傘

旅人を見て、

馬をさへながむる雪のあした哉

海邊に日を暮して、

海くれて鴨の聲ほのかに白し

爰にわらぢを解き、かしこに杖を捨て、旅寐ながらに年の暮ければ、

としくれぬ笠著て草鞋はきながら

といひ〳〵も、山家にとしを越して、

誰が聟ぞ齒朶に餅おふうしの年

奈良に出づる道のほど、

春なれや名もなき山のうすがすみ

二月堂に籠りて、

一寸―抄に「按ずるに杜子美白小詩に天然二寸魚、されば一寸は冬なるべし」
なか〳〵に云々―華美を極めしよりも寧ろこの荒涼の景に心とまれり
竹齋―至て貧しく狂歌を樂しみたる醫師といふ
狂句凩の―抄に「狂句は字餘り

秋風や藪もはたけも不破の關

大垣に泊りける夜は、木因が家をあるじとす。武藏野を出づる時、野ざらしを心に思ひて旅立ちければ、

死にもせぬ旅寢の果よ秋のくれ

桑名本當寺にて、

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

草の枕に寐あきて、まだほのぐらき中に、濱のかたに出でて、

あけぼのや白うを白き事一寸

熱田に詣づ。社頭大いに破れ、築地は倒れて草村に隱る。かしこに繩をはりて、小社の跡をしるし、爰に石をすゑて、其神と名のる。蓬しのぶ心のまゝに生ひたるぞ、なかなかに目出度よりも、心とまりける。

しのぶさへ枯れて餅かふやどり哉

名護屋に入る。道の程諷吟す。

狂句凩の身は竹齋に似たる哉

坊が妻―抄に「按ずるに、よし野には喜藏院南陽院などいへる妻帶の寺ありとぞ」

とく／＼の清水―西行「とくとくと落つる岩間の苔清水くみほす程もなき住居かな」

扶桑―日本

義朝殿に云々―守武千句に「月見てや常磐の里へ歸るらん」といふ前句に「義朝殿に似たる秋風」と附けたるをいふ

　砧打つて我にきかせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方、二丁ばかり分け入る程、柴人の通ふ道のみはつかに有て、さかしき谷を隔てたる、いと尊し。彼とく／＼の清水は、むかしに變らずと見えて、今もとく／＼と雫落ちける。

　露とく／＼試みに浮世すゝがばや

若是扶桑に伯夷あらば、必ず口を嗽がん。もし許由に告げば、耳を洗はん。

山を登り、坂を下るに、秋の日既に斜になれば、名ある所々見殘して、先づ後醍醐帝の御廟を拜む。

　御廟年を經て忍ぶは何をしのぶ草

大和より山城を經て、近江路に入つて美濃に至る。今須山中を過ぎて、いにしへ常磐の塚あり。伊勢の守武がいひける、義朝殿に似たる秋の風とは、何れの處か似たりけん。我もまた、

　義朝のこゝろに似たり秋の風

不破、

得萱草言樹之背―萱草はうきわすれぐさ、背は北堂にて母の住む所

所は―一本「所にいたる此所は」

牛をかくす―大木の形容

斧斤の罪―伐採の厄

廬山―白樂天の草庵を營みて住みし有名の地

をほどきて、母の白髪拝めよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと、暫く泣きて、

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

大和國に行脚して、葛城の郡竹の内といふ所は、彼の千里が舊里なれば、日頃とゞまりて足を休む。藪より奥に家あり。

綿弓や琵琶に慰む竹の奥

二上山當麻寺に詣で、庭上の松を見るに、凡そ千年もへたるならん、大さ牛をかくすともいふべけん。かれ非情と雖も、佛縁にひかれて、斧斤の罪をまぬかれたるぞ、幸にして尊し。

僧あさがほいく死にかへる法の松

獨よし野の奥にたどりけるに、誠に山深く、白雲峯にかさなり、烟雨谷を埋んで、山賤の家處々にちひさく、西に木を伐る音東に響き、院々の鐘の聲は、心の底に答ふ。昔より此山に入つて、世を忘れたる人の多くは、詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の廬山といはんも、亦むべならずや。或坊に一夜をかりて、

浮屠—塔婆の梵語、轉じて僧の意に用ふ、一本浮屠の上に「髪なきものは」とあり

西行ならば云々—西行江口の遊女との唱和をいふ

古郷—伊賀

北堂の云々—母も死して亡きをいふ、詩經「焉

びず、襟に一嚢をかけて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり、俗に似て髪なし。我僧にあらずといへども、浮屠の屬にたぐへて、神前に入る事をゆるさず。暮れて外宮に詣で侍りけるに、一の華表の陰ほのぐらく、御燈處々に見えて、また上もなき峯の松風、身にしむばかり、深き心を起して、

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐

西行谷の麓に流あり、女どもの芋洗ふを見るに、

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

其日のかへるさ、或茶店に立寄りけるに、てふといひける女、あが名に發句せよと云うて、白き絹出しけるに、書付け侍る。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舍をとひて、

蔦植ゑて竹四五本のあらしかな

長月の初、古郷に歸りて、北堂の萱草も霜枯果て、今は跡だになし。何事も昔にかはりて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、只命ありてとのみ言うて、詞はなきに、兄の守袋

小萩がもと―源氏物語桐壺「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」

性のつたなき―うまれつきの不運

杜牧が早行―「垂鞭信馬行、數里未雞鳴、林下帶殘夢、葉落時忽驚、霜凝孤雁迥、月曉遠山橫、僮僕休辭險、何時世路平」

富士川の邊を行くに、三つばかりなる捨子の哀げに泣くあり。此川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨置きけん、小萩がもとの秋の風、今宵や散るらん、明日やしをれんと、袂より喰ものなげて通るに、

猿を聞く人すて子に秋の風いかに

いかにぞや、汝父ににくまれたるか、母にうとまれたるか。父は汝を惡むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。只是天にして、汝が性のつたなきを泣け。

大井川越ゆる日は、終日雨降りければ、

秋の日の雨江戸に指折らん大井川　　千里

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

二十日あまりの月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて、數里いまだ鷄鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りて忽ち驚く。

馬に寐て殘夢月遠し茶のけむり

松葉屋風瀑が伊勢に在りけるを、尋ね音信れて、十日ばかり足をとゞむ。腰間に寸鐵を帶

路粮を云々—江湖風月集三山僊溪湖和尚の偈「路不レ賚レ粮笑復笑、三更月下入二無何一」
江上の破屋—深川芭蕉庵
秋十とせ—賈島の詩「客舍幷州已十霜、歸心日夜憶二咸陽一、無レ端更渡二桑乾水一、却望二幷州一是古鄕」
莫逆の交—心持のしつくりと合ふつき合ひ

野ざらし紀行

松尾芭蕉

千里に旅立ちて路粮をつゝまず、三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を立ちいづる程、風の聲そゞろ寒げなり。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却りて江戸をさす故鄕

關越ゆる日は、雨降りて山みな雲に隱れたり。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

何某千里といひけるは、此度路の助となりて、萬いたはり心をつくし侍る。常に莫逆の交深く、朋友信ある哉、此人。

深川や芭蕉を富士に預け行く　千里

元和二年十一月日　　羅浮子

丙辰紀行終

舌本こはし—したの根のこはばるをいふ、世說文學下篇に「三日不レ讀道德經便覺ニ舌本間強一」
むばら—うばら、荊棘
江山のたすけ—自然の景が詠懷を誘ふをいふ
東西南北人—四方周遊の人
張翰—晉の吳縣の人、洛に在りて秋風に故鄕の鱸魚膾を思ひ家に歸りし有名の人

夜風波内相舟。只有ニ舊時今不レ改。山雲湖影日悠々」一二は孫興公が天台山の賦の事を用ひ、三四は登覽の景をいひ、五六は懷古の感慨をのべ、尾句は景情を合せていふ。此詩を作りし時は、余が年二十七八にてやありけん。久しく公務の暇なくて、吟咏する事もなし。古人三日の間にも舌本こはしとこそ言ふに、まして余が筆硯塵積りて年經ぬれば、口中のむばら、いかでか詞林にまじはらむ。しかれども江山のたすけもあれかしと思ふ心のゆくにまかせて、紀行の詩、今日までにて若干首に成りぬ。

艮嶽從來守ニ紫宸一　先王立作ニ國家鎭一　雲波五色三津浦
星斗千年七社神　湖水朦朧空得レ月　山櫻寂寞自過レ春
好風美景非レ無レ意　吾亦東西南北人

大津

大津をすぎて相坂にいたり、肩輿より淸水の流を見て、

九陌大津隈　怱々繁ニ往來一　一亭群馬聚　十里遠帆開
鮒上ニ任公釣一　鱠傳ニ張翰盃一　潺湲相坂水　烏帽掃ニ塵埃一

伯林維經—伯林は晉太子申生をいふ、維經は首をくゝりて死すること

南董が筆—董狐が筆と同義なるべし、歷史を掌るものゝ直筆して忌み憚るなきをいふ。

野より潜に出でて、和州、伊賀、伊勢を過ぎ、濃州不破關にて尾州の兵を召集め、皇子の兵と戰勝ちて、近江の瀬田まで攻のぼり給ふ。皇子みづから此橋の邊に陣をとつて合戰ありしが、大弟の兵勝つに乘りて、皇子敗北して、竹中に入つて伯林維經の跡をふめり。大弟は清見原天皇是なり。壬申の亂とは此時の事をいふなり。懷風藻は勝寶年中に編集せしが、其中に、「大友皇子は天智帝の長子なり。壬申の役に、天命遂げずして薨じぬ」といへり。舍人親王は、皇考王父のために文を婉して、南董が筆をいかゞ思ひけん。懷風藻は、親王の時を去る事遠からざれば、其事の實を隱さるゝにや。近比大明に、燕王が建文を殺して、白帽子を戴けるも、異域同日の物語なるべし。

勝敗興亡憂更憂　千年人事落㆓楸枰㆒　積骸爲㆑塚血爲㆑水
都入㆓勢田橋下流㆒

比叡山

湖水の邊より比叡山を見て、いつぞや人の和韻をし侍る詩を、爰にしるして云ふ、「興公昔作㆓四明遊㆒能使㆓遺文後世留㆒杉洞窟深蛇蟒動。竹生島泛浮萍幽。三朝烟草君王殿㆒

方壺—海中にある仙山、列子に見ゆ

蒙塵—天子戰亂を避けて京師の外に出で給ふこと

内相—惠美押勝

大弟—大海人皇子、後に天武天皇

石部より草津にいたりしに、馬につきたる奴隷共の語りしは、近江國は本より相撲の者多く有りて、石部、草津、出合ひ相撲をとるに、石部勝つ時もあり、草津勝つ時もありといふを聞きて、事のおこりを人の尋ねしかば、當麻の蹶速、野見宿禰より初めて、那都羅、善雄力を比べ、俣野、河津に至るまで、其名聞え侍る、年中行事にも、相撲の節會とて、内裏にも行はせ給ふなど、やう〳〵物語りし行くほどに、勢田になりぬ。相撲の詩を作れと、人のいひければ、

氣似烏兎出二野堣一　力如三黿背戴二方壺一　龍紋絶臏今猶レ古

聞否少年相撲徒

勢田

勢田は古戰場なり。承久の役には、二皇輿の敗績して、外に蒙塵ありし事を悲しみ、孝謙の御宇には、内相が奔らんとするに橋絶えて、高島にて亡びし事を喜ぶ。是のみならず日本紀を見れば、天智帝崩御あらむとする時、大弟は沙門とならせ給ひて、吉野山に入らせ給ふ。大友皇子その時は太政大臣にてありしが、天智の譲をうけられしに、大弟吉

崔嵬―山路の險しき形容

學而の篇―論語の最初の篇

行李東西久旅居　風光日夜憶郷閭　梅花繫馬土山上
知是崔嵬知是岨

水口

去歳八月四日、大相國二條の御所を出御ありて、翌日此所に著かせ給ふ。其日より打續き雨ふりければ、三日逗留ましく／＼けるに、夜更るまで御前に余も侍りし時、學而の篇をよめと仰せければ、跪づき開きはんべりしに、「能竭其力能致其身」とある所を、みづから御讀ありて、能といふ字に心をつくべきなり、なほざりにては忠孝たち難し、親には力をつくし、君には身をいたすといつぱ、いづれかまされるといふ評論あるべしと仰せけるに、余もかの趙苞が故事を引て答へ奉りしが、只今忘れ難くて、すゞろに袂をしほり侍る。

愛生從子親　義立自君臣　侍讀古年雨　涙痕今日人

草津

鈴鹿御前―坂上田村麿勅を奉じて鈴鹿の山の鬼女を征し囚とせしが後山に逃げ入りしを田村麿追到して夫婦になる、この鬼女即ち鈴鹿姫なりとの俗傳

白波―河の波に盗賊の意を兼ぬ

終朝咀嚼齒牙餘

鈴鹿

關地藏より鈴鹿の坂の下まで、あまたの河あり、八十瀬の河とは是なり。爰にまします明神は、天武天皇の行逢ひたまへる老人にて侍らん。世の婦人小子の口遊める鈴鹿御前の物語とやらむは、おぼつかなし。此所にありし鬼を、苅田丸か討從へたりといふ、是も又おぼつかなし。むかしより山賊ある所と言ひ傳ふれば、それを鬼とは言ふにや。伊勢三郎も鈴鹿の山賊なりけるとなむ。

九折盤紆鈴鹿坡　行人征馬恐蹉跎
秖今四海恩風遍　八十瀬河無白波

土山

土山といへど山はなし。鈴鹿より西の坂を下りて、二里ばかりにあり。釋詁毛傳などに石山を土の山とよみ、土山をいしの山とよむ事を思ひて、

盧家塾をせよかしと、心あらん人の腹ふくるゝほど思へども、いひ入るべき穴をはらずや。

一地余生承顧恩　溫公曾比藥師尊　若磨此石作鍼去　甘草人參不足言

庄野

石藥師の西、龜山の東に、庄野あり。此所の民家に、火米をちいさき俵に入れて、毎戸ならべておく。其俵の大さこぶしの如く、又は槌の如くなるもあり。輪子のせいに包み、縛へてあるを、旅人買取りて、家づとにすといふ。先年余が僮僕、馬のあとにかけて來りしを見て、昔の伏波は薏苡を一車にのせ、伯顏は梅花を轎頭に挿みしに、今此小俵あまた取來るこそ、ほゝゑむばかりをかしくて、彼法道仙人越智の大德が俵米を飛せし事も、思ひ出られてありしが、今又都にのぼり、苞苴の物とし、我をまつ小兒の歡笑を見むとのみにて行きぬ。

唐人詩句漢人書　記得燒耕火米畬　可慰孩提求口實

腹ふくるゝ云々—徒然草「おぼしき事いはねば腹ふくるゝわざなれば」

輪子のせい—輪子は絹布の名、せいは精巧の略稱か

伏波—馬援也、南士の薏苡を一車に載せて還る事後漢書馬援傳に見ゆ

苞苴—いへづと、みやげ

方輿—土地、地は方にして物を載するの義

浮圖—塔

退凡下乗—卒塔婆也、徒然草に「外なるは下乗、内なるは退凡」

曾高—曾祖父、高祖父

庠序學黌—共に學校の稱

延天—延喜天曆、醍醐村上兩皇の年號

二仲—春秋二期の中日

螭首龜趺—支那の古制による墓碑をいふ

曾聞二帝此停レ車　憾在二吾邦未一レ見レ書　今問二先蹤一人不レ識
誰賡二風土一補二方輿一

石薬師

四日市場より三里ばかり西に、薬師の石像ある所を、石薬師と名づく。余が心に不圖思ふやう、浮圖をかさね、五輪をきざみ、退凡下乗をたて、佛菩薩を石にて造るは、所々多けれど、碑銘墓誌石表などは一もなし。嵯峨の二尊院に、源空沙門が行狀なりとて、苔蘚の間に、文字纔に残りて侍る。誠に今の人の祖先を問ふに、曾高の名をだにも知らず、遠きを追ふの心なきこそ、かなしき事なれ。諸州諸郡をありき見侍りしに、寺院佛閣は、いかなる小民村里にもあまた侍れども、庠序學黌とては名をだにも聞かず、ましてむかしの礎もなし。延天の比までは、都には大學を建て、國郡には國學を立て、二仲の釋奠行はれしに、いつの時にかかく捨れけるぞや。足利の學校さへ、近比まで誰にても得業の人居侍りしに、此四五十年より、僧法師の住所のやうになりぬ。浮圖五輪のために石を刻まんよりは、螭首龜趺を建てよかし、蕃神黠胡の爲に堂を造らむよりは、精

東征功就凱旋時　宿所會徵宮饗姫　誰道馬嵬坡下鬼
一朝來此立靈祠

桑名

熱田より海路七里渡りて、伊勢國桑名に至る。むかし淸見原天皇、吉野より潜幸ありし時、皇后も伴ひたまひて、天皇は此所より美濃國不破關に赴かせ給ひ、皇后は此地に留まり給ふ。天皇大友の王子と位を爭ひ、不破の關にて、東西の兵相戰ひしに、天皇利を得させたまひて、位につかせ給ふ、天武天皇是なり。皇后は天智天皇の娘、大友王子と連枝にてまします。女主にて、後に持統天皇と申しゝなり。桑名におはせし頓宮、今はいづれの所なる事を人に問へども、知れる者なし。又聖武天皇の時、藤原廣繼、西國にて野心をおこすと聞えければ、官軍をつかはし、退治し給ふ。天皇は伊勢太神宮に參詣ましまして、祈らせ給ひ、それより此桑名に渡御ありて、美濃にかゝり、近江路を經て還幸なりぬ。その間に、廣繼伏誅のよし、捷書を馳せて奏しける。日本紀續日本紀を見侍りし事を、聊か爰にしるしける。

馬嵬坡下鬼—楊貴妃の靈魂、貴妃馬嵬山下に殺されたるよりいふ

淸見原天皇—天武天皇

連枝—御兄妹

頓宮—かりみや

在五中將の歌―伊勢物語「からころもきつゝなれにし妻しあればはる〴〵きぬるたびをしぞ思ふ」八橋にて業平がかきつばたの五文字を頭に置きて詠める歌

六々歌中―三十六歌仙中

おほやう―概ね

八橋

三河國八橋は、杜若の名所なる事、在五中將の歌にてかくれなし。今岡崎より池鯉鮒にいたる道より、北の方一里ばかりに、それなんむかしの八橋なりとて、所の人、遙かに指をさして教へ侍る。久しく田となりて、今は杜若なし。三四年前、余が作りける詩にも、「古人遺跡鐵鑪歩。只有三河杜若名」となん。

六々歌中第幾仙　風流千歳慕幽玄　世間一瞬皆陳迹
杜若爲薪澤作田

熱田

日本武尊、東よりかへり給ふ時、尾張の稻種宿禰がむすめ、宮簀媛が家に宿しましますより、此社の神といはひ申すなり。然るに世俗の說に、熱田を蓬萊といふなれば、楊貴妃を祭るといふ。されば宋大史が日東の曲にも、國に楊妃が祠ありといへり。此社のみならず、巫覡の託宣、世間の傳說は、おほやう覺束なき事多かる。

川流無晝夜　人物有西東　一枕還鄕夢　家書久不通

長澤

昔在轅門見玉鞍　豈圖今日淚闌干　林間應是甘棠意
遺愛歲寒千百竿

矢矧

矢矧は岡崎の西一里ばかりにあり。建武の時、足利氏鎌倉にありて、天子の命に違ひしかば、新田氏節刀使を奉りて東征し、此所にて鎌倉の軍兵と戰ひ勝ちて、鷺坂まで逃るを追打つて、官軍利を得し所なり。後に箱根、竹下の戰に、官軍敗績して、中書王の走り給ひし事こそ、まことに不幸ならずや。

森々白刃是昆吾　波激河邊千萬夫　恩賜旌旗如日色
東隅雖得失桑楡

蛟と、子(周處を指す)と幷せて三害となすと歎ずるを聞き、虎と蛟とを殺し、自ら善行を積めりといふ

留侯が一篇—留侯張良子房が下邳圯上にて黄石より一篇の兵書を傳へられし故事

甘棠意—後人が遺德を慕ふをいふ、周の太保召公奭南方を巡行して文王の政を宣ぶる時甘棠(コリンゴ)樹下に宿りしが、後人召王を慕ふ餘り其樹まで愛したる故事

昆吾—古への名劍の名

失桑楡—日暮に失ふ、後に失ふ、後漢書「失之東隅、收之桑楡」の翻案

菅野眞道が史―續日本紀也、眞道は山守の子、百濟辰孫王の後也、其續日本紀を修して奉りしは延暦十六年伊勢守の時にして、弘仁の始め參議常陸守に至りて致仕す

翠華―鳳輦をいふ

周處が云々―周處は三國時代の人、甚だ粗暴なりしが、父老が南山の白額の猛虎と、長橋下の

三河國

しほ見坂より二河の間に、纔なる溝あり。是なん遠江三河の境なりといふ。いつぞや菅野の眞道が史を見侍りしに、持統天皇、三河國行幸ありとしるせれど、いづれの郡鄕、いづれの村里といふ事を知らず。眞道は光仁桓武の時なれば、世久しく知らざるにや、事略して書きもらせるにや、口惜し。

先王若要慰民生　定有壺漿簞食迎　遺恨翠華巡狩跡
未聞行在頓宮名

吉田

江戸より京までの間に大橋四あり。武藏の六鄕、三河の吉田、矢矧、近江の勢多なり。ひとり矢矧のみ土橋なれば、洪水によりて絕ゆる事もあり、此比新に板橋となりけるにや。爰にしも、誰か周處が三害をやめて、留侯が一篇を傳へむや。

行々何日窮　相送數州風　馬過曉霜上　龍横道路中

山看の韻―山は刪、看は寒の韻
三百篇―詩經
楚人の詞―楚辭
八句―律詩

波浪雲天倶一色　東南溟海更無山　聖門有術人何敢
潮見坂頭停馬看

律にかゝはらず、快活のやうなれども、山看の韻、世俗の思ふ所、通韻は廣きが故に易く、切韻は狹き故に難しとなん。三百篇、楚人の詞には、協韻のみ多かり。いかんぞ聖人の删修、屈宋が文を慕はずして、沈約江老のいやしきを學ばむとや。世間流布の韻鏡にも、協通の音を專とし、洪武正韻、洪武韻府にも、むかしにかへり、中比の韻をあらためたらず。志あらん人の、いかでか我に同じからざらん。しかはあれど、初學の律偶に拘る者は、先なやみて後に得べき事とおほえ侍る。されば不律にあらんよりは、先づ律をまもるべし。絶句を學ばむよりは、先八句を作るべし。意到らず、風高からざれば、古にあらず。句到らず、情深からざれば、律にあらず、是詩學の捷徑なりと、さる人の語りしは、誠にけにもとおほしくて、耳にとゞまり侍る。

天地豈識幾層瀾　舒卷古人方寸端　滿目不遮潮見坂
大鵬飛盡水漫々

治亂興亡非我事 征鞍暫憩且嘗茶

今切

遠州荒井の濱より奥の山、五里ばかり海となりて、大船も出入る事、むかしは山に續きたる陸地なりしが、中比山より法螺の貝おびたゞしくぬけ出でて海へ入りける。其跡かくの如く海となりて、今切と名づくるよし、古老言ひ傳へたり。我國は、伊弉諾伊弉冊のうみ給ひ、大巳貴、少彦名の造られけるといへば、其むかしはいかゞ侍りけむ。もろこしの華山を、巨靈が擘開して、水をやりける事も侍るにや。

一葉扁舟寄旅身 瀨波通信遠州濱 海山何借巨靈手
我國元來造化神

潮見坂

白須賀より西のかたへのぼる一の坂あり、大洋眼前にあれば、潮見坂となづく。余嘗て詩を作りて云ふ。

決雲兒―隱

湯谷―又熊野、侍從と號す寵を平宗盛に專らにせり本文矢島大臣といふは即ち宗盛

春蒐冬狩跡猶遺　霜露淒々野草衰　鴻鴈自來還自去
更無人放決雲兒

池田

美濃の青墓、遠江の池田、駿河の手越、いづれも長者遊君ありて、むかしは往還の武士、輕薄の少年、鞍馬を門につなぎ、千金笑ひを買ふ所なれば、かの江口の津にも、いかで劣り侍らん。矢島大臣のめされし湯谷も、此池田の宿のむすめにてはんべる事、世にかくれなし。今は此宿、天龍の河の東のはたに、形ばかり殘りて、わづかなる小民ども、渡りを守りて居侍りける。大天龍小天龍とて、二の河ありけるが、新田左中將の、尊氏と戰ひ負けてのぼられける時、うき橋の桁のなかりけるを、飛越えられけるも、爰のことなり。江都が輕捷の有りけるにや。濱松のそばなる細流を、小天龍の事なりと、今ぞいふめる。

池田驛長本倡家　處子嬋娟天下誇　腰似楚王宮裏柳
面如巫女廟前花　古今不盡洪河水　淵瀨相移兩岸沙

かてゝ—加へて
茯神—茯苓をいふ、本草に「多年樵砍之松根之氣味抑鬱未絕、精英未淪、其精氣盛者發泄於外、結爲茯苓、故不抱根、離其本體、有零之義也、精氣不盛、止爲附結本根、既不離本、故曰茯神」
芒碭—山の名、前漢書高帝紀に「隱於芒碭山澤間」

西坂

西坂を新坂とも書けり。此所の民、わらび餅を賣る。往還のもの飢をすくふ故に、いにしへより、新坂のわらび餅とて、其名あるものなり。或は葛の粉をまじへて蒸餅とし、豆の粉に鹽かてゝ旅人にすゝむ。人その蕨餅なりと知りて、其葛餅といふ事を知らず。諸越に、茯神を買うて老芋を得たる人もありけるとかや。

婆叫焦兮婦喚烘　停人部食在途中　憑誰救得西山餓
馬首吹來餅餌風

中泉

見附、濱松の間に、中泉といへる所は、鳧雁の多き所にて、遊獵によろしき地なれば、大相國年毎に放鷹せさせ給ひてありしが、余も御供に待りしに、「芒碭雲一去。鴈鶩空相呼」と、此たび打誦すべしとは思ふべしやは。駿遠二州、今は中將殿の知らせ給ふ國なれば、封建のむかしも、今にあらざらめかも。

徒杠輿梁—徒杠は徒歩して渡るべき橋、輿梁は車馬の通るべき廣き橋、孟子「歳十一月徒杠成、十二月輿梁成、民未病涉也」

賣炭翁—白居易の詩に出づ

掲厲—もすそをかゝげて徒渉すること

圓位法師—西行

いのちなりけり—上句「年を經てまた越ゆべしと思ひきや」詩に西行壽とあるはこの歌をいふ也

となりて、一里ばかりが間にわかるゝ事もあり。さればいにしへより、徒杠輿梁もなり難き故に、往來の人馬、川の瀬を知らざれば、金谷に待つもあり、島田にとゞまるもあり、渡りかゝりて溺るゝ者もあり、辛うじてむかひの岸に至るもあり。島田の民おのが家は漂ひ流るれども、旅客の嚢をむさほる故に、洪水をよろこぶ。賣炭翁が單衣にして、年の寒きを待つが如し。河水の家を流し、田をそこなふ故に、防鴨河使、防葛野河使を置かれし昔の事も、唯今思ひ出でざらんや。

尋常掲厲必過腰　吒馬呼奴魂欲銷　來往就中何處苦
無舟無筏復無橋

小夜中山

圓位法師が、「いのちなりけり佐夜の中山」と詠ぜしは爰にての事なり。

坂道升降是早天　夢殘馬上不成眠　此山無限西行壽
能使詠歌千古傳

焼津と名づけ、草をはらひたまふ所をば、草薙と名づけて、何れも駿河國にあり。

欲爲黎民解倒懸　東征到處幾山川　腹間一自蛇龍動
雲氣吹消蔓草烟

宇都山

在原業平この山を過ぎし時、蔦楓いとしげりて道もなし、修行者にあひて、歌をよみて言傳てける事、人のあまねく知れる事なり。俗者内屋ともかけり。

山中回首費吟呻　遺愛蔦楓秋又春　今古冥々名與境
業平謌後更無人

大井川

大井河は駿河と遠江との境なり。明日香川ならねど、霖雨ふれば淵瀬かはる事たびくなれば、東の山の岸を流れて、島田の驛河原の中にある事あり、西の方に流れて、金谷の山にそふ事もあり、一すぢの大河となりて、大木沙石を流す事もあり、あまたの枝流

焼津—今音便にて「やいづ」と呼ぶ、焼津は静岡の西にあり、草薙は静岡の東にあり、其間相距る五六里、古來此事に關し諸説紛々たり
倒懸—非常の苦しみ
歌—「駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」伊勢物語
明日香川ならねど—「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬となる」

鶴岡—鎌倉

はき—佩用し

遠かたや—祝詞の句

田の縁起を、社僧江戸へ持下りしを見侍る。神功皇后の縁起二巻、譽田の宗廟の縁起三巻、永享年中普廣院寄進せらる。五巻ともに土佐が繪にて、宗廟の三巻は、普廣院親筆に事書をうつされけり。唯今爰の八幡を見て、かの縁起の事を思ひ出し、聊しるし侍る。

無方變化本非恒　五彩靈鳩金色鷹　神不惑人人却惑
唯嫌巫祝有依憑

久佐奈岐

延喜式に、駿河國草薙神社といへるは是なり。むかし日本武尊、吾嬬國に下り給ひし時、この所にて夷賊おこり、原野に火を放ちて尊を燒殺さんとしければ、尊はき給へる劍をぬき、遠かたやしげきがもとをやい鎌の利鎌をもちて打はらふ事のごとくと、唱へ祓ひて、劍をふりたまひければ、あたりの草盡くなぎはらはれて、夷賊の方へ烟なびきて、尊は恙もましまさず。さてこそ初は天のむら雲の劍と申せしを、草薙の劍とは名づけけれ。尊これより奥へ下りて、東夷をたひらけ、のぼり給ふ時に、かの劍を熱田の神宮へをさめ給ふ。我國歷代傳寶の三種の神器の其一なり。其尊を燒むとしける所をば、

蘭若—寺

密家—眞言宗

宇佐—豐前
箱崎—筑前
男山—京都
譽田—河內、は
むだとも訓ず

臨濟寺

蘭若隔レ林隣ニ府闠一　遊人眼裡對ニ孱顏一　立談不レ及ニ世間事一
亦是浮生半日閑

建穗寺

此寺は、むかし役行者の草創せしやうにいひ傳へたり。中比より、密家の者移りゐて、今にいたるまであり。

此地元來法界宮　水雲心性似ニ虛空一　吟眸所々不レ知レ暮
石徑霜深古寺楓

八幡

此神の垂跡、國々にあり。殊にいちじるきは、宇佐、箱崎、男山、譽田、鶴岡、その外もあまた多し。此駿河國に勸請しけるは、いつの時の事にか侍るやらん。此秋河內の譽

甲乙人—たれかれ

廷尉—源義經

讒人遺誡云々—詩經小雅巷伯に「彼譖人者、誰適與謀、取二彼譖人一、投二畀豺虎一、豺虎不レ食、投二畀有北一、有北不レ受、投二畀有昊一」とあるによる

逃出でて、駿河國清見關にいたる。折節的場より歸りける甲乙人行きあひて、怪しみ思ひ、矢を射かけ追ひければ、梶原、狐崎にて返し合せ、蘆原小次郎、飯田五郎、吉香小次郎とあひ戰ひて、景茂うたれぬ。國内の兵ども、集まり攻めければ、景國、景宗、景則、景連も死にぬ。景時、景季、景高は、うしろの山にてうたれしを、山中より其首をさがし出して、道路に梟しける。梶原は辯口ありとて、武將の近習なりしが、廷尉の事を常にあしく申せし事、人のあまねくいふ事なり。

源君兄弟本連枝　何事一朝恩愛衰　猶有二讒人遺誡在一
不レ投二豺虎一死二狐崎一

淺間

和歌に、志豆機山とよめるは、是なりと聞えし。醍醐帝の時、富士本宮を爰に遷して、新宮と申すよしかたり侍る。

乘レ輿時々詣二淺間一　黄昏唯見一僧還　風光應二是靈神愛一
前有二清流一後有レ山

久能宮—德川家康を祀る
辭國中春—國喪、家康の薨じたるをいふ
六經—詩、書、易、春秋、禮、樂の六經典

何求無垢在南方

久能宮

寂然長隱久能宮　明德惟馨神國風　億兆小臣望不及
帝鄕路遠白雲中　何圖忽辭國中春　哀慕憑誰寫御容
臣妾叩頭將伏拜　雲車高駕鼎湖龍

駿河文庫

餘烈遠遺賢聖風　能令術業有專攻　誰言馬上治天下
只聽爐前讀雪中　寒水月明千歲意　日星道行六經功
請君更勿問他事　人是儒門五尺童

狐崎

源賴家の、梶原平三景時を誅せんとせられければ、正治二年正月、梶原、相摸國一宮を

り子』續拾遺集に出づ

漁人云々―もと古老の傳說に出で、謠曲羽衣の種を參照すべし

補陀洛―普觀音化現の地名なれば、とりて觀音所在の地の名とする也

藥科―駿河の地名

池魚の殃―類燒の殃

これなるべし。三保は駿河國有度郡にあればなり。

綽約冰肌神女容　聞レ名自レ古問二遺蹤一　漁人洗レ耳是何曲

仙袂飄々風入レ松

久能山

この山の狀を見るに、海岸孤絕の所にて、觀音老人堅坐の地なれば、補陀洛山とも申すなり。一里あまり東に寺あり、久能寺となづく。聖一國師藥科の產にて、この寺の堯辨法師を師とし、台教を學びしが、入宋の後、達磨宗を傳へて、東福寺の第一祖たり。世の人猶も久能の爾長老とて稱しける。宋より渡しける瑪瑙の羯鼓を、此寺へ送られける。又源豫州も、薄墨といへる橫笛を寄進せられしが、いづれも池魚の殃にうせけるとなん。寺僧の書置けるとて、勸進帳のありけるを見侍りしに、あら〳〵かくなむありける。其外推古天皇の御時草創せしなどあれど、大やう疑はしければ、よく心をとめず忘れ侍りぬ。

遠尋二幽寺一到二斜陽一　過客居僧談兩忘　身是此山淸淨色

孔明、傳說—共に古への賢人、其淸節を喩ふるなるべし

坂上將軍—田村麿

有度濱に云々—下句「振りけむ袖やけふのはふ

嵓々海畔岻　鹵裡若煎烹　昔汲孔明井　今調傳說羹

淸見關

延暦の比、奥州の逆賊高丸、駿河國までせめ入り、この關に陣をとりしを、坂上將軍打破りて、高丸奥へ逃退きし事、久しければ語りも傳へ侍らず。此所に寺あり、京なる惠日山の爾長老の弟子開聖、この寺を開き、淸見寺と名づけ、又は巨鼇ともいへり。近比妙心寺に屬するやうに聞え侍る。

經歷巨鼇山　入門心自閑　禪徒今住寺　寇賊昔攻關

三保窓檻裡　大洋机案間　起鞭征馬去　斜日照人顏

三保

此所にまします明神は、神籍にのする所の美穗神社是なり。羽衣の松とて、むかし天より乙女のくだりて、此松に羽衣を忘れしを、漁父のひろひ得たる事、いづれの文に有るやらんと、人の尋ねしに、かの能因法師が、「有度濱に天の羽衣むかしきて」と詠めるは

と危く思ひ、船中の人は目まひ魂の消ゆる心地ぞしける。

往來停馬此踟蹰　天下滔々豈獨吾　河畔爲通名利路
涪陵慙愧一樵夫

薩埵山

尊氏、直義、中あしくなりて、此所にて合戰ありし事をおもひ出でて、

弟兄爭國亂如麻　萬馬奔馳薩埵涯　一樹東西枝指後
海山風雨棣棠花

興津

興津は、多胡の浦の事にて侍るべし。湯井より薩埵を過ぎ、爰に至るまでに、海濱鹵斥の地にて、小民賤女の鹽燒くしわざを見るに、老杜が「汲井歳榾々。出車日連々」といへるは、げにさる事にや。盤中の飡の皆辛苦なる事も思ひ合せられて、いよ〳〵ありがたくぞ覺えはんべる。

棣棠花—詩經に「棠棣之華鄂不韡韡。凡今之人莫如兄弟」

老杜—杜甫、杜牧を小杜といふに對する語

に見えたる「六月雪花鋪二素巍一、何所深林覓二白龍一」をいふ

峛崺—山卑くして長き貌、楊雄「觀二東嶽一而知二衆山之峛崺一也」

仁者樂—論語「仁者樂レ山智者樂レ水」

桑六十一離籠」といへる九萬里なり。「天台四萬八千丈。若在二吾邦一立二下風一」といへるは瑾雪嶺なり。巧拙は具眼の人の知る事なれば、書きならべて置き侍るなり。其外騒人墨客の、詠じもらせるはあるまじきにや。此比人の作れるとて、「青天忽見素羅笠擔中十五州」といふ句を聞きはんべるぞ珍らしきにや。我輩の今更口をひらかむ事は、人の涎を舐つて事あたらしきやうなれど、さりとていはざらんも懶惰のおそれあれば、聊か申しつゞけ侍る。かの「不レ與二淨雲一齊一」といへるは此たかきにや。「嵌空大始雪」とあるは此雪にや。「衆山之峛崺なるを知る」は、此山に登りての事にや。天下をすこしきに歩する人もあるべきにや。「蓮花は早く崆峒は薄し」といへるも、此山に對しての事にや。

一山高出二衆峯巓一　炎裡雪冰雲上烟　大古若同二仁者樂一
蓬萊何必覓二神仙一

富士川

我國に名を得たる大河はあまたあれど、殊に富士川は海道第一の急流なり。舟に乗りて渡るに、渡守ちからを出して竿をさし、艪をおし出すとき、岸より見るものは、あはや

義楚が帖―義楚六帖
羽客―仙人
役處士―小役角
錫飛―僧の遊行するをいふ
畫眉脩―脩はながしと讀ず、美人によそへたる形容
呼作―よびなすと讀ず
景濂―宋濂の字、詩句とは前

事は、義楚が帖にあらはし、「六月雪花飜素義。何所深林覓白鷴」といへるは、宋濂が曲にあらずや。加之羽客釋流の此山に跡を殘す事は、役處士がはじめて攀躋りしより以來、空海、圓珍、岩石をきざみて佛軀を彫るもの山上に多かり。白衣天女の形をあらはし、淺間大神の跡を垂れまします。誠に我朝無雙の名山なり。近代叢林の詩僧、この山を題せし中に、「富士千仞雪崚嶒。幾度思登病未能。送汝錫飛三伏裏。歸來分我一壺冰」といへるは信義堂なり。「大地撮來無寸土。當空還見此山成。海濶纔浸半邊影。多少漁舟載雪行」といへるは乾峯なり。「絕頂雪殘春夏秋。暮烟一抹畫眉脩。吾疑上有望夫石。不耐閑愁獨白頭」といへるは岩惟肖なり。「六月雲間積雪新。東遊未踏玉嶙峋。畫師今有移山力。一洗京塵困暑人」といへるは惺瑞岩也。「富士峯高宇宙間。崔嵬豈獨冠東關。唯應白日青天好。雪裡看山不識山」といへるは彥希世なり。「富士耳聞身未遊。畫圖相對興悠々。東關千里吟鞍上。晴雪趁人三五州」といへるは沅南江なり。「五須彌外有須彌。呼作士峯吁是誰。六月雪飛寒徹骨。擘開芥子欲藏之」といへるは澤天隱なり。「莫言北闕隔東關。富士朝々如對顏。四海一家皆帝力。千秋白雪御前山」といへるは三横川なり。「士峯秀出海之東。名在景濂詩句中。若把白鷴論白雪。扶

を惜み、領巾（ひれ）を振りしは最も有名の史話

文粋―本朝文粋

土人畜獸類　風俗混魚鱗　寄語一漁叟　天涯奈汝身

富士沼

相國の御前にて、平家物語の事のありしに、平氏鳥の羽音に驚きてにけ去りしは、富士沼の事にて、今の善德寺は其所なり。齋藤別當が、東國に精兵の多き事を語りしによりて、平家の兵ども臆病神のつきて、かくの如くありけるなり。御前に侍りける某を御覽じて、猛士をして敵の美を談ぜしむる事なかれと、兵法にいへるは是なりと仰せける事も、只今の樣に玉音耳にとゞまりて覺え侍る。

闔國中分源與平　東方氣勢盡豪英　何須疇八公山上
竿是旌旗木是兵

富士山

富士山の名、ひとり我朝に鳴るのみならず、遠く中華まできこゆ。赤人が歌は萬葉にのせ、都良香が記は文粋に見えたり。徐福藥を尋ねてこの山にとゞまり、是を蓬萊山と名づくる

養レ虎遺レ患—自ら求めて禍に罹る喩、史記項羽本紀に出づ

役優婆塞—役小角、優婆塞は佛信者たる俗人の稱

脫屣—讓位、捨てて顧みざるの義に出づ

天氣—陛下の仰せ

松浦佐用姫—大伴狹手彦の妻、宣化帝の二年狹手彦任那に往くに、佐用姫別離

に、治承壽永の比、兵を起し平氏を攻滅し、安德帝福原を落ちさせ給ひて、西國にてうせ給ひし事を思ひ出でて、

包レ羞忍レ恥左遷身　養レ虎遺レ患只此人　吹起多年東國燼
福原城闕作ニ烟塵一

大島

術ありとて賴むべからず、役優婆塞が鬼神をつかひしも、廣足が讒によりて流され、力ありと賴むべからず、鎭西の八郎が大弓をひきしも、信西がはかりごとにてうつさる。されば此島は伊豆の沖にありて大島と名づけ、いにしへより風浪のたよりまれなれば、遷客投荒の所とす。近比仙洞の脫屣ましまさゞりし時、宮女の和姦の罪によりて幽閉し、死を賜ふべきなど、天氣しきりにありしを、大相國寬仁の心ましく〱しかば、申宥められて、あまたの宮女を流し遣はされし新島も、此澳にあり。彼松浦佐用姫が、玉島山にひれふり、御息所の淡路の武島に住み給ひしも、かくやらんと人々いひあへり。

迢々南海濱　集レ日不レ知レ津　小角來驅レ鬼　八郎謫化レ神

驪山—温泉を以て有名なる支那の山

日本紀のこゝろ—日本紀神代卷に木花開耶姫が自ら「妾是天神娶ニ大山祇神一所生兒也」といへる事見ゆ

かくや姫—竹取物語中のヒロイン、時の天子是に戀してならず、姫遂に昇天するに當り不死の藥を帝に奉る、帝是を日本最高の山上に焚かしむ、爾來烟たえず、これ即ち富士山といふと、元より一編の小說のみ

絶境靈蹤亘ニ古今一　尋レ名吾輩亦登臨
走湯權現救レ人處　便是驪山神女心

三島

伊豆の三島は、むかし伊豫國より遷して、大山祇神をいはひまつる。いつぞや相國の御前にて、三島と富士とは父子の神なりと、世久しくいひ傳へたりと沙汰ありければ、さては富士の大神をば木花開耶姫と定め申さば、日本紀のこゝろにも協ひ申すべきなり。竹取物語とやらんにいへるかくや姫は、後の代の事にてや侍らん。凡そ三島といへるは、豫州攝州この國と、三所にあらはれましますよし、神名帳にありと覺え侍る。

祭儀如レ在幾千年　青幣相連引ニ白綿一
天下神明垂跡處　流行似レ得ニ地中泉一

蛭小島

平治の亂に、兵衛佐源頼朝この所に流されて、廿餘年の間、仇を報いむ事を謀りし

脩途—長途

歸耕—官を辭して家に歸り田間に耕すをいふ

伊豆箱根—伊豆の走湯權現と箱根權現

蘋蘩の禮—祭祀の禮

たゞ—直ちに

緣記にありと申しき。

長坂脩途不可攀　惟天設險甲東關　回頭木末侍吾僕
信足湖邊濯溶顏　鯨背浪高伊豆島　馬蹄雲起筥根山
相逢盡道歸耕事　歳々年々幾往還

雪か花かあけぼのかすむ筥根路を越ゆれば峯のあとのしら雲

走湯山

走湯山は、伊豆の山の事にて侍る。爰にまします神をば、走湯權現とぞ申しける。昔鎌倉右大將、伊豆箱根を信じ、常に蘋蘩の禮をいたし給ふ。二所參詣といへるは是なり。此ところに出湯あり、石ばしる瀑の如し。走湯の名も溫湯によりての故にや。又一里許西に溫泉あり、その所を熱海と名づく。人のよろづの病あるもの、浴すればたゞ驗あり、先年余も人にさそはれて湯に入り侍りし。其湧く所を見るに、潮の進退によりて、岩の間より烟むしあがりて、人の近づくべくもあらぬほどあつきに、熱湯わき出でて、流れ走るを、筧をかけて家々にとり、槽に湛へて人々に入らせけり。

虎ー事本文鼎第一種に收めたる曾我物語に詳也

於菟ー虎の異名、名の虎を本物の虎にとりなしたる也

望夫ー神異經に「武昌貞婦望夫化而爲石」といへる故事

大磯

此所に曾我十郎が妾虎が舊跡ありとて、一の石を人々集まり見て、もたげ、轉ばかしなどして、むかしより虎石と名づけ、今にあり。

十郎慷慨愛於菟　血氣武人犀甲軀
妾婦當時誓星否　隕成此石似望夫

箱根

永仁四年に、此山の鐘を鑄て、銘をきざみし其序に、「當山蓋山嶽之神秀者也。孝謙皇帝御宇天平寶字年中。萬卷上人草創。擇地三所權現松壖竝甍」といへり。中比炎上せしを、北條氏再興して、十二州の鎭守とす。山上に湖水あり、神靈のすむ所なりとて、いにしへより人のつゝしみ畏れて、今に入る事も侍らず。舟を浮べて、めぐりありく事はありとなん。後別當の語りしは、仙人四代この山に住みて、駒形の深祕をあらはし、役小角も爰に來りて其跡をのこし、熊野權現と此神と一體にてまします、くはしきことは

三尺水ー鋭き刀刃をいふ

包桑計ー包は苞なるべし、身を安固に保つ計をいふ、易經「其亡其亡、繫于苞桑」

つい松ーたいまつ

滿目鎌倉城郭亡　雲烟漠々樹蒼々　逍遙昔聽遊龜谷
報賽今無詣鶴岡　草偃匣中三尺水　苔深墓上五更霜
君公不識包桑計　千載英雄淚濕裳

江島

藤澤より馬にまたがり、海濱近き所にて、漁父の舟をかり、江島に渡りて見れば、あなたの海の岸の下に、大なる岩窟あり、つい松をともして、深く入るほどに、百歩あまりにてやみぬ。むかし龍神の棲みける所となんいひ傳ふる。この島の辨財天女は、世にかくれなき事なり。

借問島中人　不知此孰神　蜿々遺蹤在　君其問水濱
江島從來神女居　風鬟霧鬢駕雲輿　遊人若有登仙意
水宿應傳柳毅書

神世いかに今むつましみわたつ海の八重の鹽路に言傳やらん

一秦—秦の始皇帝儒經を焚き儒者を穴にしたるにも喩ふべしと也
芸亭—藏書の室
祝融—火災
陽侯—水災
先聖、先師九哲—孔子、顏回、及び孔門十哲中顏回以外の人々
あらまし—豫定

朝文粹、續日本紀などのたぐひ、其外人家に所々ありけるも、一部と調ひたるは稀なり。一切經も取りほごして、纔殘りて金澤にあり。古記典籍の厄に逢る事、いにしへより今に至るまで、幾度といふ事を知らず、蘇我氏が亂は、我朝の一秦とも申すべき。宅嗣が芸亭は名をだにもきかず、宇治の寶藏、蓮華五院の寶藏なども、跡さへぞなき。誠に祝融に奪はれ、陽侯におぼるゝのみならず、兵燹にほろび馬蹄にふみ散らさる。心あらん人、むかしを思ひ出でざらんや。されば人の語りしは、先聖先師九哲の影、六經の註疏、今に足利にあり、小野篁が東國へまかりける時に、足利に讀書の堂を作りしが、今に殘りてあるぞ是なるとなん。余もまかりて見むとのみあらましにて年月をすごしぬ。

懷古涙痕羈旅情　腐儒早晩起二蒼生一　人亡書泯幾同歲
境致空留金澤名

鎌倉

鎌倉にいたりて、あなたこなた見ありき侍りしに、賴朝の墓とて人の數へければ、鴨の長明が草も木もなびきし秋の霜きえて、といへる事を思ひ出でて、

悲願雖扶女　哀鳴屢繫猿　始知蓮社內　更有國師尊　余入寺時庭前有猿

隅田河

都鳥は角田河の物なれば、好色の人、とりて家に飼ひて侍るを見るに、まことにはしとあしとあかき鴫の大さなる、この鳥、蛤を好みてよく食ひけるなり。

漾々溶々一葉身　河邊秋景只懷春　自從在五詠歌後　流水飛禽愁殺人

金澤

金澤の絕景は、東州の佳境にて、事好むもの、丹青の手をかりて屛風に寫し、市杵島、天の橋立にも、いかでる劣かべきなど、もてなしあへり。北條氏天下の權をとる時に、文庫を建て、金澤文庫といへる四字を、儒書には黑印をおし、佛經には朱印をつきて藏め置きける。越後守平貞顯、この所にて清原教隆に、詳書治要を讀ませける。余が見侍りしも、文選、淸原師光が左傳、教隆が群書治要、齊民要術、律令義解、本朝文粹、續本

好色の人—好事家
在五詠歌—在五中將業平「名にしおはばいざこととはん都鳥我が思ふ人はありやなしやと」
丹青—畫家
市杵島—嚴島、市杵島大明神を祀るよりの稱

蚩尤—黄帝と涿鹿の野に戰ひし凶惡の者

沙門活命謀—坊主の世渡りのはかりごと

給孤園—孤兒院養育院の類
飛廉—風の神

此社は、平親王が屍骸をうづみし所にて、其靈をまつると語りつたへ侍る。

昔聞鐵額是蚩尤　何事將門廻二逆謀一　草木山川無二寸土一
一堆埋レ骨幾春秋

愛宕

いづれの時にか、京なる愛宕を、遠江國なるこ坂に勸請し、それより駿河國うつのやに移し、又武藏國にうつして侍りし。是は勝軍地藏の法おこなはるとて、ことに武士の崇敬する故に、始はわづかなるほこらなりしを、漸くつくりひろげて、今は大廈になりぬ。

京洛移遷坐二武州一　築レ壇構レ閣陟二山丘一　誰知幣帛神封物
却作二沙門活命謀一

增上寺

髣髴給孤園　飛廉倒二大門一　遠公名已久　善導法猶存

相如子虛賦中の假託人物

五作－前漢武帝五作宮に行幸したる故事

大士の日－觀音の縁日

馬こそ云々－馬頭觀音より思ひ寄りたる洒落なるべし

萩蔬任見宜應採　耕穡於時亦不妨　仁愛只今覃物處
豈論五作與長楊　幸逢四海爲家日　處々風烟似故鄕

春風にまたおひそふる若草の色や霞にまがふむさし野

淺草

爰に寺あり。たふとき觀音ましますとて、人の多く參詣すと申しければ、大士の日、人にさそはれ余もまかりける。げにも人のいふやうに、男女の群集する事、京の清水よりもおほく見えける。むかし此所より牛鬼の出でて走りありきし事を、心に不圖おもひ出でて、馬こそ大士の化現なれ、何とて牛は出でけるぞとをかしかりき。爰の觀音院しる人なりければ、しばし立よりてやがてかへりぬ。

法威能救衆生憂　小白華山彼岸舟　若把馬郎令渡水
應同海底有泥牛

神田

月の入るべき―「武藏野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ」
蒼莽―青々としたる草原
ならせ給ふ―將軍出でまし給ふ
照射―ともし、火をともして鹿を寄せ之を射ること
芻蕘―草刈り木こり
豫遊―帝王の游幸、之は將軍の事にいへり
子虛烏有―司馬

丙辰紀行

林道春

武藏野

名におふむさし野は、月の入るべき山もなしといへば、まことにそくばくの蒼莽をすぎて又蒼莽なり。此國の稻毛、葛西、越谷、岩筑、河越、鴻巣、忍なども、皆むさし野の内にて侍る。いづれも御獵場なれば、毎年爰にならせ給ふ。

國野同レ名稱二武藏一
尋常旅客宿レ春糧
雨餘草色連二天地一
郊外雲烟沒二邑莊一
富士雪遙花稍小
筑波陰茂薺猶長
殘星點々夜叢火
微月纖々照射光
共往芻蕘多幾許
齊飛鳧雁百千行
豫遊衆習二驅馳範一
養放皆知二鷹鶻方一
雲夢青丘倶芥蔕
子虛烏有本荒唐
斑鳩入レ網風前霰
白鴿罹レ黏泥上霜
暴虎何曾逢二太叔一
非熊庶幾載二師望一

あらしふく松帆の浦の霧晴れて浪よりしらむ有明のつき

又繪島と云ふ磯を見るに、山の重りて島のあれば、

幾重とも波路はるかにたゝみなす山や誠の繪島なるらん

須磨の浦にて、

須磨の浦里のうしろの山柴やあまの鹽やく煙なるらん

暮れかゝる程、波の荒くなるに、和田の岬を漕ぎ廻り、生田の森を船より見渡して、

漕ぐ舟の夕なみあらく成りにけりさぞな生田の杜のあき風

去る四月、丹後を出船して九州を歷、歸陣の時は南の海を廻りて、七月二十三日と云ふに、難波に著きぬ。思遣れば、限なき日の本をも、半ばかり廻り來にける事と驚きて、

難波江の道にひかれて遙かなる豐あし原を廻り來にけり

九州道の記　終

たぐへて一共に其音を立てて聞ゆ

兎角ありて波間に船を出して、播磨の室まで行く道に、坂をこえ、杓子と云ふ在所あり、その近きあたりに鍋の島と云ふあれば、

　鹽はたゞよき程なれや鍋のしま杓子をなかへ入れて見つれば

廿一日、明方を待ちて船を出し、家島を漕ぎめぐるとて、

　いかばかり船よそひして漕ぎよせんわが家島と思はましかば

姫路と云ふ城を船に見て過行く程に、飾磨川近きわたり、海の面濁りたるを、船人に尋ねけるに、水上に大雨ふり侍ればかやうにありと云ふ。

　水上に幾むらさめかしかま川濁は海に出でて來にけり

かやうに打詠め、響の灘を漕ぎ過ぎて、高砂の浦に船をかけて、其夜は泊り侍りぬ。（にけりイ）

　高砂の尾上のかねも松かぜも響の灘のなみにたぐへて

是より松帆の浦見物せんとて、廿二日の曉、夜船こがせて行くに、明石のわたり追風を片帆にうけて、遙々と淡路島に寄りて、

　行く船の追かぜきほふ明石がた片帆に月をそむけてぞ見る

さて松帆の浦近くなれば、船を寄せて見るに、明方の月浪に浮びて見えけるに、（侍りイ）

船を云々―船をこゝに泊めても又直に出帆すべきと也
うしまど―憂なし、宇島門

し、たゞの海に泊り侍りて、夫より備後の津、公儀御座所に參上して、十八日朝、鞆まで越し侍るに、竹田法印、假初の宿なれど、亭などありて涼しき由あれば、立寄りて簟に終日ありて、暮方に船を出すべき由を云へば、發句所望なり。

名殘ある月やともづな港ぶね

夫より終夜船を急ぎて行くに、明方の程に、備中國にありと云ふ彌高山、慥にはなけれども、嶺つゞきの中なりと云へば、

曙やふもとをめぐる雲きりにいや高やまの姿をぞ見る

十九日、備前の中ひらとと云ふ所に泊り、夫より暮れ程に宇島門に著きて、船をかけても軈て出すべき由をいへば、上りもせで、舵枕の月を見るに、物憂き旅寐なれば、

船にねて何をたのまん月にさへ猶うしまどの泊りなりせば

夫より月の夜船に乘りて行くに、蟲明の瀬戸といへば、

秋風の身にしむ夜半は鳴く音をも聞くばかりなる蟲明の瀬戸

風あらく成りて、楯の浦と云ふ所に上り、人里もなき所に旅寐し侍り。

夕波のたての浦よりゆみはりの月も光を放つとぞ見る

心づきなき—氣が進まぬ、面白くない

出して—子息への引出物として

しでの山云々—時鳥をめいどの使といふ俗説による也

延年—舞樂の一種

ば、立出でて更くる迄見るに、鹽干鹽滿目の前に變りて、汀二三町許りも遠近になりぬ。「みつ潮はたゞ大うみの泉哉」とは、宗祇賢作なり。理なるかな。又大聖院良政發句所望ありて、十三日、一會あり。當社に鏡の池と云ふあれば、

影うつす月やかゞみの池の水

十四日にも棚守連歌興行すべ由きあれども、魂祭る日に當れり、心づきなきやうにや有るべきとて、辭退しけるに、さらば發句許りをと所望なり。思ひがけぬに時鳥の鳴きければ、

秋や又葉山しげやまほとゝぎす

かやうに申し遣しけるに、さらば晩に饗すべき由あれり、行きけるに、色々の肴求めて盃出されて、子息少輔三郎出座ありて亂舞あり。脇指を出して罷り歸りしなり。宿りける所は奧坊といひける。今宵の魂祭の手向など構へ置かれけるに、又時鳥の二聲三聲鳴けるを、爰にはいつもかやうにて有るかと尋ねしに、珍らしき事なりと云ふ。一首をよみて遣しける。

しでの山送りや來つるほとゝぎす魂祭る夜の空に鳴くなり

十五日、宮島神前にて、延年と云ふ事ありと云へば、見物して夜半ばかりに船をいだ

十日、山口を出で、國府天神へ著きて、まりふの浦近き田しみ迄、船のまはるを待ちて休み居たるに、當社の供僧圓樂坊、發句所望ありて、一面なりとも連ぬべしとて興行あり。入相の時分より初まりて、夜半過るほどに百韻滿じける。其時船著きたる由注進あり。天神の御計ひとて、衆徒喜ばけれる。

色わけよまつこそ風の手向け草

田しみの港にて、まりふの浦を見るに、網の多く掛け干してあれば、

眞砂地にあみ張り渡しもて遊ぶまりふの浦の風もたえつゝ

十一日曉、田しみを出でて、その日は上の關と云ふ所に船をかけて、明行く空をも待たで、鹽に引かれて船出を催し行くに、岩國山と云へば見遣りて、

あらきその道なりとても歸るさは岩くに山も踏みならしてん

夫より嚴島近くなりて、社頭を見るに、鳥居は海の面二町許りと覺しくて立ちたり。廻廊も柱も皆鹽に浸りてあり。船より見て、

遠島の下つ岩根のみやばしら波の上よりたつかとぞ見る

此歌を書きて、當社宮司棚守左近將監かたへつかはしける。兎角ありて月になり侍れ

まつ—待つ、松

鹽—潮

夏草に花のかならずたもとかな　　　松

すゞしき夜半の狹衣の月　　　由己

しら露のすだれのひまを傳ひ來て

七月四日、關白殿せきの渡より御歸陣なり。船にて參陣せしほどに、馬などもなし、船にて南の海を見巡りて上らんと定め侍るに、秋風日々に荒くなり、出船ならで六日まで逗留し侍りて、思ひつゞけ侍りける。

あきと吹く風やせきの渡とまり舟

六日にも、未だ船の出で難き風なれば、周防山口見物のため、在所の荷を負ふ馬借出して、船來と云ふ在所まで行きて、七日に山口に到りぬ。今夜は七夕の逢ふ夜なりと思ひ出でて、曉方のねざめに、

七夕のわかれの袖にくらべ見よ露ながら假す旅のころも手

假す―七夕に手向くるを假すといひ習へり

八日、所々の寺社見廻りて、同國國府の天神まで立出づべき用意せしに、當所本國寺住持、一會興行すべしとて、頻りに留められ侍れば、力なく其日は逗留して、九日に、

もる月も今一しほの木の間かな

どつこも—何處も
居たむなき—居ともなし

敷島の道すなほなる御代に逢ひてめぐみ久しき箱崎の松

卒因二和歌韻一

始識逢レ君情所レ鍾　向來相約對二閒窻一　帝都門外莫レ言レ遠

千里同風一樹松

しら波のうつかた山のしほ風に涼しさ添ふる夕立のあめ

發句

遠じまに立ちくはゝるや雲の峯

六月廿五日、一折張行すべしとて、溝口大炊允所望に、

なみの音も秋風ちかし西の海

「あまさかる鄙の住居と思ふなよどつこも同じ浮世ならずや」と千宗易より云ひおこせける返事に、

あまさかる鄙には猶ぞ居たむなきどつこも同じ浮世なれども

廿七日、關白殿花瓶あまた取出されて、草花を生けられたる御座敷にて、俄に一折催されて、發句仕うまつるべき由あれば、

當座─即席の歌會

いもじ─鑄物師

箱崎の八幡の内、關白殿御座所になりて、各參上せしに、しるしの松によせて祝言の心を、各によませられけるに、

つるぎをばこゝに納めよ箱崎の松の千とせも君が代の友

關白殿、箱崎の松原にて涼まるべき由ありて、各召具せられ、しばし御遊興の事あり。おほみき參り、謠どもありて、御當座ありしに、

立出づるそでのみなとの夕すゞみかたしく程の浦風ぞ吹く

くれ果てゝ歸らせ給ふ折に、松原に名殘思ふ歌、人々仕まつるべき由あれば、

松原にとまりがらすの聲をさへ羨まれぬる歸るさの道

六月十日餘りの程に、香椎の浦見にまかりて、

うなばらや鹽路はるかに吹く風の香椎のわたり浪立つらしも

歸るさには、船をば遙かなる干潟の崎へ廻して、韛濱へ徒歩にて行きて、

いにしへは爰にいもじの跡とめて今も踏見るたゝらはまかな

對馬の守護、宗對州より、此歌一首贈られて、歌發句所望あり。既にはや出船のよし使の云へば、當座に書付けて遣りける、

宗養―慶長中の連歌師にて宗牧の門人

張行―會合を興行すること

入韻―又脇ともいふ、發句即ち連歌の最初の五七五句の次なる七七をいふ

廿八日、姪濱といふ所に到り、夫より生松原見に罷りて、

すゞしさを風のたよりに言問はん今いくかあらばいきの松原

姪濱にて、或人、宗養の執筆せられし連歌の懐紙を見せて、奥書所望せしに、

是もまたながれて末のみづぐきの跡のかたみと書きぞ加ふる

六月三日、姪濱興德寺住持耳峯玄熊和尚、和漢興行あるべきとて、發句所望ありしに、公儀此所まで御成の沙汰あれば、張行は成り難かるべしと、發句を書き遣はして、入韻所望せしに、

風かをる南をまつのとほそかな

社同六月梅

同八日、利休居士へ關白殿渡御ありて、暫し御物語ありて後、一折と催されて發句仕まつるべきよしあれば、箱崎八幡の心を、

神代にもこえつゝ涼し松の風

雲間に遠きなつの夜の月　松

ほのかにも明行く空の雨晴れて　日野新大納言

跡の下—異本「あり」て二字无

所にあり—所なりの意

主に—買ひ求めて其刀の持主に

なかご—刀身　めいの濱—銘と姪との假名違ひ

此所彼處見巡りて歸りける道に、刈萱の關の跡ありとて數へけるに、今度の陣衆名乘らせて歸さるゝ事ある山を傳へ聞きて、

名乘らせてやう〳〵とほす陣歸り兵粮米やかるかやの關

この次に、竈山はいづくぞと、案内者に尋ねしに、歸るさの右に高き山あり、是なんそれと云ふ。昔は竈門山寶重寺とて、山伏のすみける所にありけるを、近き年比より高橋と云ふ者、城郭にこしらへて有りけるが、去年島津出でて、あたり近き岩屋の城、攻落せし時分、あけにけるが、此頃山伏の歸住と申せしに、五月雨の名殘、雲の掛りて見えければ、

立つゞく雲を千里のけぶりにてにぎはふ民のかまどやまかな

可也山にて、

茂り行くかやの山べに入りしかば秋より露に濡れて臥すらん

姪濱より、人の安吉の脇差おこせて、目利して銘なども能く侍るならば、主に成るべきとて文あり。その返事に、

脇ざしの代をしとへば安よしのなかごたどしきめいの濱かな

ひしきもの—敷物に鹿尾菜を掛けていふ

飛梅—菅公左遷の時「こち吹かば」の詠を遺して家を出でしが、其梅やがて筑紫まで飛び行きたりとの傳說

日高く侍りければ、博多見にまかりけるに、爰は袖の湊と里人の数へければ、

　いざさらば共にぬらさん旅ごろも袖のみなとの浪のまくらに

　日も暮れぬいざ船寄せて寐もしなんひしきものには袖の湊を

廿六日、宰府は天神の住み給ひし所と聞き及びしまゝ、見物の爲まかりけるに、彼宮寺は七年ばかりさきに炎上して、形ばかりなる假殿あり、舊跡の有樣、松杉の多く切られたるに、さすが所々に殘り、後は青山聳えて、右の方七八町ばかりも有るらんと見えて觀音寺あり、寔に西都とも云ふべき所なり。飛梅も古木は燒けて伐りけるに、若ばえの生ひ出でてあるを見て、

　鶯のはねをやとひて飛梅のかごにはいかで乘らで來にけん

夫れより染川を里人に尋ねて見に行き侍るに、思ひしには替りたる小川の淺き流なり。打渡りて、

　老の波むかしに返れそめかはや色になるてふ心ばかりも

思川にて、

　暮るゝ夜の螢やしるべおもひ川

社僧—神社を預る僧

一句—「しまより續く」が「山より續く」と一句

とめて—求めて

戒定惠—持戒禪定智慧の略、佛者の修すべき三德也

山の宮司の坊に宿りて、當社大明神の由來など尋ねけるに、春日鹿島當社、同じ御誓の神なりと物語り有り、緣起など取出して見せらるゝ次に、「波あらき潮干の松のかつら潟しまより續く海の中道」これ當社の御歌のよし、社僧の語られける。又香椎の神詠には、「山より續く」と一句變りたるなどと有り。立出でて見侍りけるに、砂の遠さ、三里ばかりも海の中を分けて、島に續き侍り。取分きて細き所は十町ばかり、廣さは十四五間ばかりも有りと見えたり。文珠などもおはしませば、橋立の事など思ひ比べられき。當社は安曇磯良丸と云ひて、神功皇后異國退治の時、龍宮より出でて、兵船の楫取して、海上のしるべせし神なり。しば〳〵打眺めて、

三笠山さしてや通ふ志賀のしま神の惠みのへだてなければ

名にしおふ龍のみやこの跡とめて波を分行くうみの中みち

此の兩首を書きて奉納して、廿五日朝凪の程に、箱崎に渡りて見るに、松原はる〴〵續きて、八幡宮は外面に向ひて立ちたり。戒定惠の三學の箱を、昔埋まれたる所に、印の松とて古木あり、立寄りて、

そのかみに納め置きつる箱崎の松こそ千代のしるしなりけれ

もじ―文字、門司

我は忘れず―上の句「千早ぶる金のみ崎をすぐれども」

豐前國門司の關にて、

ふるさとに言傳てやらんひと筆もかきや絶えなんもじの關守

兵粮船多くつどひて有るを見て、倉梨の濱は當國なれば、

米船は國々よりもつきにけり上げても積まむくらなしの濱

豐前の柳浦名主とて、發句所望せしに、

豐くにの山口しるき早苗かな

同月廿三日、赤馬關を出でて行きけるに、雨の名殘にや、波風のあらき故に、小倉に泊りて、明くる夜を籠めて舟よそほひして、筑州箱崎をさして行くに、船人の是なん金が御崎と云ふ、昔鐘を求め船に載せて來り、汀近くなりて取落して、今に有りと云ふ、日和のよき時は、龍頭など見ゆる由を語る。勅撰名寄には、金と云ふ字を書きたりと覺えけるが、鐘にて有るべきなどと友達などもに語りける次に、萬葉に、「我は忘れずしかのすべ神」とやらん詠みたる事を思ひ出でて、

くれ渡る鐘の御崎を行くふねに我はわすれずふるさとの夢

かやうに云ひ戲れ漕行くほどに、夕浪荒くなりて、やう〳〵志賀の島に著きて、金剛

つとめて―翌朝

豐浦宮―仲哀天皇皇居の跡

馬だらひ―豆は馬の食料なるより地名に言ひ掛けて戲れたる也

もなしなど、船人わび合へり。さらば徒歩にて關の渡まで行くべき由云ひあひて、馬などかり出して、十一日、瀬戸崎を出でて、大寧寺、大内義隆の果てられしところと聞きし程に、立寄りて一見し、夫より深山を分けこえて、同國妙榮寺と云ふにとまりぬ。住持の和尚出でられて、終夜佛法の物語などありて、つとめての朝出でて行くとて、

かたちなき夢てふものを心とも法の筵にふしてこそ知れ

心法無形通貫十方とやらん云へば、思ひよれりき。きこえ難くや。豐浦宮を過ぐるとて、

水もらぬ池のこゝろの深きをもとよらの宮の鼓にぞ知る

手洗と云ふ在所にて、かれいひ食ひ侍らんとて、假の宿りに上るとて、下々足を洗ふに、豆のいできて痛きなど云ふを聞き侍りて、

さし入れて洗へる足の豆おほみ馬だらひとや人の見るらん

關の渡に著きて、阿彌陀寺に參り侍るに、其側に寺あり、所の人は内裏となん云ひ傳へ侍る。寺僧に案内して、安德天皇御影、其外平家一門の像ども見侍りける。彼僧昔今の短册など見せられしに、知りたる人の歌どももありし程に、

もしは草かく袂をもぬらすかな硯のうみのなみの名殘に

うたかた—泡沫

とうに—とはにの假名にて遠く遙かにの意ならんか

ゑひ心地—船酔

朝け—朝あけ、早朝

誰も世の無常なる事を思ひ出でて、

　皆人のいのち長門とたのめども世はかりしまの波のうたかた

同じき國浦、小畑と云ふ湊に、唐船の著きてあるよしを、船人のうちに語る者ありければ、さらば見物せんとて、遙かに船を寄せ、しばし留めて、

　我もまた浦づたひしてこぎとめぬもろこし船の寄りし湊に

あこの浦波の高く聞えければ、

　小鼓のとうに調やあはすらんうつ音たかしあこのうらなみ

十日、瀬戸崎と云ふ所を出船せしに、風荒くて、高浪なかば船をも越し侍るばかりなり。召具したる者ども、ゑひ心地たゞならで、色を失へる體なれば、さらば漕ぎ返すべきよしを云ひて、山かけて舟の入る程、二十町ばかりには過ぎず、されども千里をも行く心地なんしける。辛うじて宿りける在所に歸りけるに、猶風荒くなりて、草木をも吹きしなりて、海の面はふすまを張りたるやうなり。何人の乘りたるは知らねども、先へ出でたる船は波に沈みたるなど云へば、命一つを拾ひたる心地して、其夜は寢ての朝けも、きのふの名殘にや、なほ雨風やまず、波の音高しほに競ひて見ゆれば、船の出づべきやう

まぶ—金壙

さゝ島—笹島、八雲御抄にも石見の名所と見ゆ、湯津の大濱にあり

一折—折とは百韻を懐紙四枚つゞき表裏に記したるものの稱

　これやこのうき世を巡る舟のみち石見のうみのあらき波風

夫よりやがて銀山をこえて見るに、山吹と云ふ城、在所の上にあるを見て、

　城の名もことわりなれやまぶよりもほる銀を山ぶきにして

宿りける慈恩寺、發句所望、庭前に楓のあるを見て、

　深山木のなかに夏をやわかかへで

溫泉の津まで出でて、寶塔院にやどりけるに、先年連歌の一巻見せられし事などあれば、かたみに百韻を連ね侍りぬ。

　浪の露にさゝ島しげる磯邊かな

五日、出船するに、跡にても一折張行すべき由にて、發句所望なれば、當座に、

　浮草のねに引かれ行くあやめかな

七日、濱田を出でて行くに、高角と云ふ所なりと云ふを、舟より見やりて、「石見がた高つの松の木の間よりうき世の月を見果てぬるかな」と人丸の詠ぜしことを思ひ出でて、

　移り行く世々を經ぬれど朽ちもせぬ名こそ高つの松の言の葉

兎角して長門國にいたり、磯の上島々を見わたして行くに、かり島と云ふ所ありと聞き

この神の云々―「八雲たつ いづも八重垣妻籠に八重垣造るその八重垣を」の歌をいふ

わり無く―むしやうに、何でも彼でもと

この神の初めてよめる言の葉をかぞふる歌や手向なるらん

「逮二于素盞烏尊到一出雲國、初有二三十一字詠一」とあれば、やう〳〵字の數を合するばかりを、手向にしたりと云ふ志ばかりになん。此短册を千家方へつかはしけるに、兩司なれば、一方へは如何と主人の云ひけるに、俄かの事なれば、同歌を書きて遣りける。

又當社本願より發句の所望なれば、

卯の花や神のいがきのゆふかづら

かやうに書きやりけるに、千家方より、今の發句は北島にて連歌たるべし、吾方にては百韻興行すべしとて、船に乘る所に追付きて、發句所望なり。忙しきに成り難きよし、度々申せしかども、ところの習ひにや、わり無く申されける程に、人の心を破らじとて思ひめぐらすに、折節時鳥のなのりければ、

ほとゝぎす聲の行衞やうらの波

廿九日、石見の大浦と云ふ所に泊りて、明る朝、仁間と云ふ津まで行くに、石見の海あらきと云ふ古ごとにも違はず、白波かゝる磯やまの、巖そばだちたるあたりを漕ぎ行くとて、

衣あぶらんほどの宿求めてとゞまりける。

　千早ぶる神のやしろや天地とわかちそめつるくにの御柱

廿八日、佐陀を出でて、秋鹿と云ふ所にて、湖水の小舟に乘りて、平田まで行くに、生浦なりと船人の云ふを聞きて、

　磯まくら怨やおふの浦ちどり見果ぬゆめの覺むる名殘に

かやうにして暮れかゝる程に、杵築の社に至りて、寶前を初め末社等、こなた彼方見巡りて尋ぬるに、當社兩神官千家北島、いづれも國造となん云ひける、その家々も見物して、其後旅宿をかり出でて椎葉ばかりに盛りたる飯など食ひて、休み居たるところに、若州の葛西と云ふ者尋ぬ來り、對面しける。太鼓うつ人にて、若き衆多く同道ありて、一番きくべきよしあれば、さらばとて催しけるに、兩國造方より、所につきたる肴樽など、使にて贈られける程に、笛鼓の役者ども來込みで、夜の更くるまで亂舞ありけり。思ひがけぬ事どもなりき。

廿九日、朝なぎの程に、まはしつるもの共歸り來て、急ぎ舟にのれ、日もたけにけりと云へば、心あわたゞしくて、

神官―一本「神司」

かり出て―もとめ借りて

椎葉ばかりに云云―粗餐をいふなるべし「家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる」

若州―若狹

兩國造―千家、北島

戰のうらなひ

所せくて—狭く窮屈にて

らうがはしき—亂雑なる

かゝ—母に掛けたる戯

杵築宮—出雲大社

かち—徒歩

たゝずまひ—姿

佐陀の大社—出雲八束郡神名山の麓

神人—一本「社人」

軍書に「欲必則莫令卜問軍吉凶」とあれば思ひよれり。かやうにして湊と云ふ所より、辰時ばかりに出船して、其日の暮程に、但馬因幡の境、居くみと云ふ所に船どまりしける。旅宿いと所せくて、上中下、らうがはしきかり枕し侍りて、

主従はたびにしあれば里の名の居くみにしたる假のやどかな

廿六日、伯耆國みくり屋より船を出して、出雲國仁保の關に上り、見物し侍りて、それより磯づたひを行くに、錦の浦と云へば、暫し船を停めて、

船よするにしきの浦の夕なみのたゝむや返る名殘なるらん

かやうに口ずさみて、其わたり近き、加々と云ふ所、漁人の家に留まりぬ。

哀れにも未だ乳をのむ蜑の兒のかゝのあたりや離れざるらん

廿七日、雨風あらきゆゑに、加々より船出なり難かるべきよしを船入申し侍れば、さらば徒らに暮さんも物うしとて、船をば浪間を待ち、廻し侍るべき由申して、杵築宮見物のため、かちにてたどり行く。道の程三里ばかり經て、木深くて山のたゝずまひたゞならぬ社有るを見廻りて、神人と覺えたるに尋ね侍りしに、是なん佐陀の大社なり、神體は伊弉諾伊弉册の尊と敎へけるに、しかじか物語し侍るに、日もたけ雨も痛く降れば、

博陸殿下―關白をいふ
鉾楯―衝突
家を遁れ―作者幽齋は
松井の城松倉―今の丹後久美濱の地にて宮津を去る九里、天正慶長の際細川氏の被官松井佐渡守康之二十年の館所たりし也
足うら―又あうち、古代足をふみて爲したる一

九州道の記

玄旨法印

今年天正十五、三月の初、博陸殿下、九州大友島津わたくしの鉾楯を止めらるべきために、御進發の事あり。息與一郎、同玄番允參陣の上、家を遁れ入道せし身なれば、供奉の事にても無かりしを、遙かなる御陣のほどを、いたづらに在國もそらおそろしき心地して、四月十九日に、船をば熊野郡まで廻して、廿一日、田邊を出でて、其日は宮津にとゞまり、廿二日、松井の城松倉に著きて、明けなば立出づべき旅裝せしに、雨ふり出でて、終日晴間なかりしかば、松井子禪門と云ふ、出でて抑留し、盃かずく〵出してなぐさみ暮し、其夜は止りて、廿四日、いとよく晴れて、風も追手になると云へば、立出でんとて、足占山の近かりければ、

かならずの旅の行衞はよしあしもとはで踏み見る足うらの山

廻國雜記終

ちか―近、千賀

なづめる―行きなやめる

埋れ木―名取川の底に埋れて永き年月を經たる木材

ながれての世―後世、川の緣語

松しまや松のうは風ふきくれてけふの舟路はちかの鹽がま

つゝじが岡を越行きけるに、蕨を見て、

名にしおふつゝじが岡のした蕨ともに折しる春の暮かな

轟の橋を過ぎはべるとて、

かち人も駒もなづめる程なれやふみも定めぬとゞろきの橋

名取川にてよめる二首。

人しれぬ埋れ木ならば名とり川ながれての世になど聞ゆらん

いつの世に現はれそめて名取川みがくれ果てぬ瀬々の埋れ木

ひくはぬるとも花の蔭にやどらん」

相坂の山路—關の清水、杉立木など何れも相坂の關の名物也

みかさと申す—古今集「みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」

みるめ—水松、見る目

をしまぬ—尾島、惜しまぬ

さくら狩あめのふることと思ひ出でてけふしも濡す旅衣かな

關の清水といへる所を過ぎけるに、杉むらの侍りければ、旁た相坂の山路思ひ出でられて、

あふ坂の山にはあらぬ杉むらに立ちより關のしみづをぞ汲む

かくて宮城野に到りぬ。一村雨し侍りければ、暫く木蔭に立ちよりて、過ぐるを待ち侍りける間に、

木の下に雨やどりせむ宮城のやみかさと申す人しなければ

奥の細道、松本、もろをか、赤沼、西行歸などいふ所々を打ち過ぎて、松島に到りぬ。浦々島々の風景言葉も及び難し。兼ねて聞き侍りしは物の數にても侍らず。皆々歸りかね侍れば、

此浦のみるめにあかで松しまやをしまぬ人もなき名殘かな

籬が島を見渡せば、藤つゝじなど咲きあひて見え、風景多かりければ、

まがき島たが結ひ初し岩つゝじいはほに掛る磯のふぢなみ

これより鹽釜の浦に渡り侍るとて、舟の中にて、

かすみの色ばかり―潮は滿ちずして

まつ―松、待つ

日なみ―日數、なみは「末の松山波も越えなん」など末の松山の緣語

あらまし―豫定

雨はふり來ぬ―拾遺集、「よみ人しらず「櫻狩雨はふりきぬ同

かくしつゝ故鄕人にいつかさて逢隈がはの逢瀨にはせむ

しほの山といふ所は山中にて侍る。是より海邊へは十里ばかり侍るとなん。

うら遠き山はかすみの色ばかり滿みてくもれるしほの山かな

衣の關にてよめる。

みちのくの衣の關を來て見れば霞も幾重たちかさねけん

武隈の松蔭に暫く立ちよりて、ふりぬる身のたぐひなりと、思ひよそへてよみ侍りける。

いたづらに我も齡は武隈のまつことなしに身はふりにけり

末の松山遙かにながめやりて、さても遙々と來にける事など思ひつゞけて、いつの間に春も末になりぬらんと思ひわびて、

春ははや末の松山ほどもなく越ゆるぞ旅の日なみなりける

又同じ所にて、

人なみに思ひ立ちにしかひあれやわがあらましの末の松山

けふの道に、實方朝臣の墳墓とて、しるしのかたち侍る。雨は降りきぬと詠じける故事など思ひ出でてよめる。

實際に越ゆる
おくれて―先立たれて
一樹のかげ云々―「一河の流一樹の陰も他生の緣」といへば死したる妻の身の上もなつかしく思ふ
花かつみ―菖蒲ならんといふ、かつの緣語
淺くは―「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を我が思はなくに」の歌による

白川入道妻におくれて、なげきの中に侍るとて、禮にも來侍らず、孫をもてさま〳〵禮儀をいたし侍りき。かの入道、歌數寄のよし傳へ聞き侍りければ、いひ遣はしける。

　立ちよるも一樹のかげの契とて散りにしはなの跡も懷かし

こゝを立ちて、矢つぎといへる所へ趣き侍りける道に、うたゝねの森といひて、いと木深き林侍り、やう〳〵花の散り過ぎけるを見て、

　ちる花をたゞひとときの夢とみて風に驚くうたゝねの杜

かくて人忘れずの山といふ所にて、矢つぎの別當坊に一兩夜泊りて、

　あづさ弓矢つぎの里のさくらがり花にひかれて送る春かな

是より田村といへる所にまかりける道すがら、樣々の名所ども多かりけり。いひ捨てし歌など記すに及ばず。淺香の沼にて、

　花かつみかつぞうつろふ下水の淺香の沼は春ふかくして

淺香山にてよめる。

　ちり積る花にせかれて淺かやま淺くはみえぬ山の井の水

阿武隈川をすぎ侍るとて、

うらぶれて―衰へしは―〳〵として

こけの衣云々―柳は枯れて若芽も生えず、苔をかりて緑の色をなすと也

もちせよ―守らせよ

かへらん物か―登歸るべけんや

聞きしにこゆる―聞きしに今や

宇津宮を立ちて行く道に、鹽谷と云へる所侍り。暮れ行くまゝに、里々の烟立つを見て、

旅ごろもうらぶれて行く鹽の屋に烟さびしき夕がすみかな

狐川といへる里に行きくれてよめる。

里人のともす火かけもくるゝ夜によそ目怪しき狐川かな

朽木の柳といへる所に到る。古への柳は朽果てゝ、その跡に植ゑつぎたるさへ、又苔に埋もれて朽ちにければ、

みちのくの朽木の柳いとたえてこけの衣にみどりをぞ假る

是よりいな澤の里、黒川、よさゝ川など打過ぎて、白河二所の關にいたりければ、幾木ともなく山櫻咲き滿ちて、心も詞も及びはべらず、暫く花の蔭に休みて、

春はたゞ花にもらせよ白河のせきとめずとも過ぎんものかは

同じ心を、あまたよみ侍りける中に、

とめずともかへらん物かおとにのみ聞きしにこゆる白河の關

白河のせきの並木のやまざくら花にゆるすな風の通ひぢ

くる―來る、繰る

すくも―或説に漁人が藻屑などにてかりそめに焚く藻屑なりといふ、歌は地名をこの義にとりていへる也

尋常なる―上品にて愛すべき

はづれ―物の隙よりちらちらと

　ひとしほのみどりに靡く糸は實にはるのくるてふ片柳かな

道すがら故郷の花を思ひやりて、

　あづま路の春をしたはゞ故郷のはなは我をやうらみはてまし

すくもの渡といへる所を行き侍りける。朝霞いと深くなびき合へるを見て、

　里人のよはにたく火の煙かとすくものわたりけさ霞みつゝ

三月二日、とね川、青柳、さぬきの庄、舘林、ちづか、うへのの宿などうち過ぎて、佐野にてよめる。

　古へのあとをば遠くへだてきてかすみかゝれる佐野の舟橋

宇津宮慈心院と云へる聖道所に、花あまた侍り。人々誘ひ侍りければ、社參のついでに門外まで見やり侍りけり。いと尋常なる住居にて侍り。見などのはづれ見えければ、ゆかしく覺えて、歸りていひ遣はしける。

　立寄りてみる程もなき木のもとの心にかゝるはなのしらゆき

このあたりの人、百韻興行して、社頭に奉納すべき宿願ありて、發句を乞ひ侍りければ、

　ちらぬ間はあらしや花の宮木もり

菊―聞くに掛く

色、聲―花の色、鳥の聲

なゝつのさとり―七覺山の名に取る、七覺は擇法、精神、喜、除、捨、足、念これ也

さだか―明か

今宵の月―十五夜の月

樣々の風情をこしらへ侍りき。このあたりに菊島といへる名所はべり。一首所望し侍りしかば、

さき匂ふ花のはる風うらやみて秋をよそにも菊が島かな

けふの道に、笛吹川と云へる川はべり。馬上にてよめる。

はる風に岸なる竹もおとそへぬふえふき川の波の調べに

同じつゞきに、花鳥の里と云へる所をすぎ侍るとて、

色にそみ聲にめでつゝやすらひて永き日暮す花とりの里

是より七覺山と云へる靈地に登山す。衆徒山伏雨庭歴々と住める所なり。曉更に至るまで、管絃酒宴興をつくし侍りき。宿坊の花やう〳〵さき初めけるを見て、

つぼみ枝の花も折知るこの山になゝつのさとり開きてしがな

翌日この山を出でて、同じ國吉田と云へる所に到る。富士の麓にて侍りけり。今夜は二月十五日、いと霞みて、ふじの根さだかならざりければ、

きさらぎや今宵の月の影ながらふじもかすみに雲がくれして

片柳と云へる所を通るとて、

らんとて歸雁の如く霞をわけて歸る途に秋に聞く初雁の名の里ははて如何したる事ぞと也

かひある—國の名の甲斐に掛く

さして—日かげ、しは附様にかゝる語
たるひ—垂氷、つらゝ
何か—何ぞ

かし尾と云へる山寺に一宿し侍りければ、かの住持の曰く、後の世のため一首を殘し侍るべきよし、頻に申し侍りければ、立ちながら口に任せて申し遣はしける。かし尾と俗語に申し習はし侍れども、柏尾山にて侍るとなん。

　かけたのむ岩もと柏おのづからひと夜假寐に手折りてぞしく

花藏坊と云へる山伏の所に、十日ばかり留まりけるに、武田刑部大輔禮に來り侍りき。盃とり出して暫く遊覽し侍りければ、愚詠を所望（のよしなイ）しければ、翌日使を遣はすついでに、

　消えのこる雪の白根を花とみてかひある山の春の色かな

又この國の鹽の山、さしでの磯とて、並びたる名所侍りければ、

　春の色も今ひとしほの山見れば日かげさし出の磯ぞかすめる

この二首を遣はし侍りき。其後さしでの磯にて、鶯を聞きてよめる。

　はる日かげさして急ぐかしほの山たるひとけてや鶯のなく

宿坊の軒に梅いと面白く咲き薫りて、月影朧なる夜もすがら、假寐の夢も忘れ果てゝ、

　梅かをり月かすむ夜の旅まくら夢にみやこを何か忍ばん

武田が館、梅あまた侍り。宿所の事は憚ありとて、祖母の比丘尼の寺へ招引し侍りて、

勸進—寄附金を集むること

名のみして—猿といふ名のみありて

そは—岨、山の險しき道

水の月—五百の猿猴井中の月を見、樹枝を執り手尾を相接して之を取らんとし枝折れて一齊に死すといふ僧祇律の比喩

斷猿啼—猿とぎれとぎれに啼く

今はとて—今はもはや故鄉に歸

あひ難き此いはどののかみや知る世々に朽ちせぬ契有りとは

猿橋とて川の底千尋に及びはべる上に、三十餘丈の橋を渡して侍りけり。此橋に種々の說あり。むかし猿の渡しけるなど里人の申し侍りき。さる事ありけるにや信用し難し。この橋の朽損のときは、いづれに國中の猿飼ども集まりて、勸進などして渡し侍るとなん。然あらばその由緒も侍ることあり。所から奇妙なる境地なり。

名のみして叫ぶも聞かぬさるはしの下にこたふる山川の聲

同じ心をあまた詠じ侍りけるに、

谷ふかきそはの岩ほのさるはしは人も木末をわたるとぞ見る

水の月なほ手にうときさるはしや谷はちひろのかげの川瀬に

此所の風景、更に凡景にあらず、頗る神仙逍遙の地とおぼえ侍る。

雲霞漠々渡長梯　四顧山川眼易迷　吟步誤令疑入峽

溪限殘月斷猿啼

同じ國初鴈の里と云へる所を過ぎはべりける折節、歸鴈のなきけるを聞きて、

今はとてかすみを分けて歸るさにおぼつかなしや初鴈の里

後朝―きぬ〴〵と讀む、男女の逢ひたる翌朝

坊主―坊の主人住持

夢中戀

さめてこそ思のたねとなりにけれかりそめぶしの夢の浮橋

後朝戀

かき遣りしなみだの床のあさねがみ思ひの筋は我ぞまされる

大石信濃守父の三十三回忌とて、さま〴〵の追修を致しけるに、聞き及び侍りければ、小經を花の枝に付けて贈り侍るとて、

散りにしは三十三とせの花の春けふこの許に問ふを待つらん

むさし野の末に濱崎といへる里侍り、かしこに罷りて、

むさしのを分けつゝ行けば濱崎の里とはきけど立つ波もなし

此程なが〳〵住みなれ侍りける旅宿を立ちて、甲州へ赴き侍りけるに、坊主の殊の外に名殘を惜み侍りければ、暫く馬を控へてよみ遣はしける。

旅だちてすゝむる駒のあしなみも馴れぬる宿にひく心かな

かくて甲州に至りぬ。岩殿の明神と申して靈社ましくけり。參詣して、歌よみて奉りける。

和—和歌

かの老僧扇の賛を所望しはべりき。彼繪は山路に雲霧を分けはべる行人、橋に行きかゝりたる所、

同遊相引歩徐々　靄霧阻山前路虚　獨木橋邊人不見

松間鐘動夕陽初

同じ心を和にて書き添へ侍りける。

山もとの村の夕ぐれこととへばまだ程遠しいりあひの聲（鐘イ）

野遊の序に、大石信濃守が館へ招引し侍りて、鞠など興行にて（しイ）夜に入りければ、二十首の歌をすゝめけるに、

初春霞

かさならぬ春の日數を見せてけりまだ一重なる四方の霞は

歸鴈幽

霞みつゝしばし姿はほの見えて聲より消ゆる雁の一つら

浦春月

もしほやく浦わの煙つらき名を霞みてかくせ春のよの月

一句此地上遊軿　雲水森然山有靈　殘夜無眠聽春雨

蕭々深院短檠青

次の夜、雲散じて月いと面白きに、軒近く梅の薫りければ、和漢第三まで獨吟、

まくらとふ梅に旅ねの床もなし

月引古鄕春

山とほくかすむ方より雪きえて

翌日、雨に降りこめられて、野邊の興も叶ひ侍らざりければ、徒然とながめ暮し、花鶯を友として口ずさみける。

旅亭春雨日如年　埆野道遙絕往還　贏得嘯吟戰閑緒

黄鸝交語問詩筵

又の日雨晴れて雪になりければ、霞立消えて餘寒甚しく侍りければ、

淡雪のふりさけ見ればあまのはら消えて跡なき朝がすみかな

十玉が方より、紅梅の色こきを始めて見せければ、

こゝろざし深く染めつゝながむれば猶くれなゐの梅ぞ色そふ

遊軿―遊行に用ふる軽き車
短檠―ともしび
和漢―普通の連歌と漢詩の聯句とを混和したるもの、其第一句が普通の發句なるを和漢といひ、詩句を第一にせるを漢和といふ
日如年―日の長き形容「日長如小年山靜似太古」の句による
黄鸝―うぐひす
ふりさけ見れば―降る空を遥かに遠く眺むれば

たるより名とせるならん、但爰は只武藏野に掛けたる洒落

横斜―月に映じてなゝめにうつる梅の影

一もとならぬ―「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ思ふ」の歌にとる

けれは、

寒鶯幽谷棲㆓吾家㆒　一曲朝來出㆓靄霞㆒　簷外壓㆑梅半籬雪
何時乘㆑月見㆓横斜㆒

武藏野に出でて、酒など飮みて遊びけるに、始めて雲雀の揚るを見て、

若草の一もとならぬむさしのにおつる雲雀も床まよふらん

淺ましげなる田夫の家に、一兩日泊りはべりけるに、野孃草席などいひし姿なりければ、感緒に堪へず口にまかせける。

吾此幽棲似㆓謫居㆒　從㆓渭城別㆒絶㆓音書㆒　淡雲流水隨㆓行處㆒
自爨㆓黄粱㆒手煮㆑蔬

旅宿に梅の咲きたりけるを、一枝手折りてよめる。

むめが香を宿すのみかは春風の都を移すそでとこそなれ

餘寒ことの外にはべりける朝、鶯のなけるを聞きて、

花ゆゑにたにの戸いでし鶯も梅もゆきにや冬ごもるらん

武州に山家の勝地侍り、まかりて十日ばかり逍遙し侍りけるに、ある夜筆に任せ侍りし。

風騒人―詩歌風流の士
黄鳥出幽谷―詩經の句にとる
脊令枝―鶺鴒なるべし、詩經「鶺鴒在原兄弟急難、毎有良朋況也永歎」に出づ
青陽―春
むさし鐙―あぶみの輪の中の鐙の短くして左にも右にもかけかへらるゝ樣にしたるものをいふ、此種のあぶみ武藏より出し

邊塞曾無風騒人　窓梅牆柳獨其春　爲誰黄鳥出幽谷
淑氣迎晴一曲新
野水海漂鴻雁影　天風頻動脊令枝　春來其曾知歸路
舊里山花落後時

これも、骨肉の事どもゆかしく思ひやりて、

正月朔日試筆の歌、

あづまよりけふ立つ春は都にて花さくころぞわれを待ちえん

今朝雪太降、祝豊年之嘉瑞、裁短篇一章矣。

青陽朔旦日　瑞雪示豊年　料識萬邦土　歡娛正決然

同じき六日、雪聊か融け侍りければ、武藏野に出でて若菜をもとめて、

武藏野にけふつむ若菜行末の限りしられぬ世のためしかも

此野より歸るとて、馬上にて、ある同行に申しかけける。

のる駒にむさし鐙をかけぬればさすがに名ある野にも泥まず

或所にまかりて、一兩日すみ侍りけるに、山深き所なれば、鶯も花も未だ春を知らざり

ぬる玉―夢をいふ

まくらより跡より―前よりうしろより

つもりの怨めし―津守の浦といふ語路より怨めしき思の積りたる意にいへる也

連枝―兄弟

念なくて―無念にて

ぬる玉は又もかよはで夜もすがら閨もるあられ枕もるなり

寄琴戀

ひく琴に我音をそへてたぐへやる風は心のまつよりぞ吹く

寄夢戀

人しれぬ枕のしたの海河にかけてかひなき夢のうきはし

濱邊旅泊

夢ぞなきもしほの草のまくらより跡より波のあらき濱べは

老後懷舊

見し人のなきはつもりの怨めしく殘るかひなき老の波かな

ある時、故鄕にあまた侍る連枝の事など思ひやりて、

雲路隔蹤鴻雁行　他鄕何耐想家鄕　暗香吹斷故園雪
唯有梅花似洛陽

春色やうやく搖き、何處も風まづ送れる日、その興多く侍れども、更に詩人墨客の、是を賞する類侍らぬことのみ念なくて、

中原―支那本土の稱、都の地をいへるなるべし
居諸―月日、日居月諸といふ詩經の句に出づ、居諸共に助詞
投錫―錫杖をすて置きて外出もせず
記―記憶す

朧前惆悵憶二中原一

武州大塚といへる所に住み侍りける時、近衛前關白殿下より、初めて御書到來（音イ）し侍り。此を開きて、一度は喜び、一度は戀慕の憂へに沈みて、

從二象一君別始看レ書　異國天涯千里餘　忽憶二歸期一涙先落
侍レ春遊子數二居諸一

連日雪痛く降り侍りければ、野遊の興さへかなひ侍らで、いとゞ都の事ども思ひやりで、

向來投レ錫掩二幽扉一　平野陰崖片雪飛　想見舊庭殘朧底
記レ春草木記レ吾非

越年の式、右にいへる如く、ためしなき有樣どもなり。さるから營む事侍らぬのみ、心安く侍りけり。早梅を翫びて、春の至れる事を覺え侍るばかりなり。

歳晏無レ營旅客情　在身寒餓憶二華京一　柴扃半掩夜來雪
一點（ほとりイ）梅開（花イ）使二我驚一

焚火のもとにて、十五首の歌よみ侍りけるに、

疎屋聞霰

鄙懷—いやしきおもひ、自稱
轉飄蓬—轉はうたゝと訓ず、宛然風にひるがへるよもぎの如しと也

すみよしの神代も遠き言の葉の盡せぬ種や松となるらん

或人、旅天の鄙懷を一絶吟じ侍るべきよし所望しければ、扇に書きてつかはしける。

一別長天西又東　殘生蹤跡轉飄蓬　傍山臨水勞吟歩
詩肺辛酸難得工

これかれ爐下に集りて閑吟のついでに、

野徑乾草

かげろふの野の冬枯れ見渡せばあるか無きかの雪のした草

従門歸戀

うしつらし眞葛に閉づる松のかどあと吹き送るそでのおひ風

鶴翔天

澤べより雲井に昇るあしたづの聲も知られてたかきそらかな

舊里の音信もなきことを述懷して、徒然のあまりに、寒梅を尋ねにまかりて、ある夕暮月に乘じて、

冷衣歩月出寒村　幽處探梅風雪昏　郷信不臻春信到

つれなしと人をばなどかゆふしでの我に靡かぬ神やうらみん

述懐涙

うき身には伴ふ人もうとき世に忘れずそでをとふなみだかな

ある江山を過行きけるに、遠村に鐘のひゞきて、勤の聲幽かに聞えければ、

西泊東漂分幾州　天涯流落屢吟遊　疎鐘遥度野村晩

清梵聲殘江寺秋

閑緒を慰めんがために、夜坐して十五首の歌よみ侍りけるに、

宿鳥驚雪

月にだに驚くもりの村がらすねぐらの雪に聲さわぐらし

澤畔水鳥

あしがもの青羽は霜につれなくて澤べのみくさ枯れも殘らず

契不來戀

契りしも今はかひなく更過ぎて鐘より後は我ぞねをなく

社頭松

○語　人をばなどか云云—人をば何ぞ恨まんゆふ掛けて祈りても我に靡かず我願を叶へぬ神を恨まんと也

度—わたると訓ず

閑緒—つれ〴〵なる思

つれなくて—色かはらずして

ねをなく—音に立てゝ泣く

野老―又解に作る、知名抄に「味苦小甘無毒、焼蒸充糧」地名の所澤に掛けたることいふ迄もなし

夕ぐれ―言ふを掛く

人頼め―人に頼みに思はすること

老のかず云々―年の暮をしたひ惜むは春を迎ふると共に老の數の添はれば也と

けるに、薯蕷といへる物肴に有りけるを見て、俳諧、

野遊びのさかなに山の芋そへてほり求めたる野老澤かな

此所を過ぎて、くめ〳〵川と云ふ所はべり。里の家々には井なども侍らで、只この川を汲みて朝夕用ひ侍るとなん申しければ、

里人のくめ〳〵川と夕ぐれになりなば水は氷りもぞする（こそせめイ）

或夜、ちご若衆など隣國より知るよしありて、訪らひ來はべりて、酒宴の隙に二十首の歌すゝめ侍る中に、

樵路雪

をりたかん心を賤がたのまずば拾ふにたへじ雪のした柴

深夜寒月

更行けばながれぬよはもなき月をこほれる影ぞ人頼めなる

惜歲暮

老のかずそはで春まつ身なりせば何かは年の暮をしたはん

祈不逢戀

川千鳥

はまな川や風さえぬらん行返り氷をつぐるさよ千鳥かな

懸樋水

柴の戸ははや出でかでのふゆされにかけひの水も氷閉ぢけり

爐火似春

うづみ火の灰かき分けて向ふよは春のひかりを手に任せつゝ

依涙顯戀

せき兼ぬる我こころも手のなみだ故人のうき名も流れやはせん

山海眺望

わたつ海の波の千里を隔て來て山にもみるめ刈らぬ日は無し

旅天歳暮、いつしか引きかへたる式にて、雪月の夜、寒梅に對して偶作、

歳云晩矣若吾何　白髪蒼顏愁又加　風雪還如慰旅懷

野梅映月影横斜

ところ澤と云ふ所へ遊覽にまかりけるに、福泉といふ山伏、觀音寺にて竹筒をとり出し

出でかでの―外出し難き

流れやはせん―流るゝかも知れず

みるめ―海松、見る目

旅天歳暮云々―此題になりていつしか歌が詩に變り、雪月の夜云々といふ意にて此題の詩を作ると也

うけのつな手―うきを附けたる網の綱

危樓朝上―たかどのに朝に上れば

待つ日のみ云々―待つ日數のみつもりて雪は降る事おそし

浪上千鳥

網人のうけのつな手をよそに見て千鳥も友をひくなみ路かな

初尋緣戀

たよりふく風になびかば初尾花ほのめかしつゝいざ試みん

同じ宿坊にて、よもすがら爐邊に嘯吟して、

寒燈挑盡夜沈々　獨臥空牀思不禁　爲我詩神如有感

松風生硯助愁吟

雪のあした、ある所の高閣に登りて偶作、

危樓朝上百花鮮　交友無憐詩酒筵　此地逍遙似何處

亂山疊嶂雪嬋娟

十玉が同宿十仙といへる者、連歌に數寄はべりて、切々に興行し侍りけるとなん。或る時發句所望しければ、

待つ日のみ山につもりて雪おそし

人々十五首の歌よみ侍りけるに、

ふりまがふ云々—雪と鷹のしらふとまがふ故、鳥も捕へられんと也

つがはぬ—一つがひとならぬ、ひとりぼつちの

みつせがは—三途川

底日—いづれの日ぞ、いつの事やら

むつの花—雪の異名

雪中鷹狩

ふりまがふ雪の野原にたつ鳥はしらふの鷹に身をや捨てなん

池水鳥

池みづにつがはぬをしや友とみてかたわれ月の影に鳴くらん

契二世戀

沈むべき後をも知らでみつせがは水もらさじと契るはかなさ

或夜故郷の人を夢に見侍りて、さめて後名残多かりければ、

客牀夢覺故人歸　空夜悽然獨濕衣　不識回期其底日

洛湯千里信音稀

十玉が坊にて、三十首の歌詠み侍りけるに、

冬地儀

おしなべて草木にかはる色もなし誰かはむつの花とみるらん

月前雪

すむ月のみふね靜かによわたるや千さと晴れ行く雪の白なみ

脚氣—江戸名所圖會にこの歌をひきて「此和歌に脚氣を詠ぜられしは、家筲或は家器に作るを正字とす、此地の農家古來より飯器を收むるの具なりといふ」といへり

わか草の妻もこもらぬ冬されにやがてもかるゝのび留の塚

これを過ぎて、ひざをりと云へる里に市はべり。暫らく假屋に休みて、例の俳諧を詠じて、同行に語り侍る。

商人はいかで立つらん膝折の市に脚氣をうるにぞ有りける

ある所に一宿し侍りけるに、たて侍りける屏風、扇づくしにて侍り。その中に骨ばかり書きたる扇侍りけり。其上に書きておき侍る。

破扇本來非破扇　銀錢工有飾丹青　今何零落只殘骨
見此人間生滅形

ある僧和韻とて、後日に人の見せ侍りける。

取破扇猶見玉扇　從來正色又非青　雖今玆殘骨零落
豈比人間八苦形

或時旅宿にて、二十首の歌皆々よませけるに、

曉更雪

草も木も我がまだ知らぬ種ながら花に明け行くしのゝめの雪

山やあらし―京都大堰川の水上が嵐山なるよりいふ

これにて百韻―この句を元にして百句を作る

うとふやすかた―善知鳥、大きさ小鴨ばかり、陸奥外ケ濱に住むと傳ふる水鳥

けふはな燒きそ―伊勢物語「武藏野は今日はな燒きそ若草のつまも籠れり我もこもれり」

　打渡す大井河原のみなかみに山やあらしの名をやどすらん

この里に月よしと云へる武士の侍り、聊か連歌などたしなみけるとなん、雪の發句を所望し侍りければ、言ひつかはしける。

　庭の雪月よしとみる光りかな

これにて百韻興行し侍りけるとなむ。これより武士の館へまかりける道に、うとふ坂といへる所にてよめる。

　うとふ坂越えてくるしきゆく末を安方となくとりの音もがな

すぐろといへる所に到りて、名に聞きし薄など尋ねてよめる。

　旅ならぬ袖もやつれて武藏のやすぐろのすゝき霜に朽ちにき

又野寺といへる所爰にもはべり。これも鐘の名所なりといふ。この鐘、古へ國のみだれに依りて、土の底に埋みけるとなん。そのまゝ掘り出さざりければ、

　音にきく野寺をとへば跡ふりてこたふる鐘もなき夕べかな

此あたりに野火留といへる塚ありけり。けふはな燒きそと詠ぜしによりて、烽火忽ちに燒止りけるとなむ。夫より此塚をのびとめと名附け侍るよし、國の人申し侍りければ、

斜陽—夕日

跡いとふ—足跡をつけるをいとふ

消えにける玉—別れの悲しさに消え入りしたましひ

白沙翠竹斜陽幽

十玉が坊にて、人々に二十首歌よませ侍るに、

閑庭雪

跡いとふ庭とて人のつれなくばとはぬ心のみちもうらみじ

霰妨夢

ふし詫ぶる笹のしのやの玉霰たまさかにだにみる夢もなし

年内待梅

春をまつこゝろより咲くはつ花をいつが冬木の梅にうつさん

別後切戀

消えにける玉の行方とけさは見よわかれし君が道しばのつゆ

河越といへ所るにいたり、最勝院といふ山伏の所に一兩夜やどりて、

限りあればけふ分つくす武藏野のさかひもしるき河越の里

此所に常樂寺といへる時宗の道場はべる。日中の勤め聽聞のために罷りける道に、大井川といへる所にて、

鵜のゐるかげ—鵜は黒き鳥故その影よりくろす川の名は出來しかと也

矢倉—物見櫓

千峯萬壑雪團々

くろす川といへる川に、人の鵜つかひ侍るを見て、

岩がねにうつろふ水のくろす川鵜のゐるかげや名に流れけん

故郷の事など思ひ出で侍りて、曉まで月に向ひて、

吾郷萬里隔音容　一別同遊夢不逢　客裡斷腸何時是

西山月落曉樓鐘

佐西を立ちて、武州大塚の十玉が所へまかりけるに、江山幾度か移り變り侍りけん。其夜のとまりにて、

山擘峻險海波濶　到處多其行路難　疎屋終宵風雪底

凍雞喚夢月西寒

或時大石信濃守といへる武士の館にゆかり侍りて、まかりて遊び侍るに、庭前に高閣あり、矢倉などを相かねて侍りけるにや。遠景勝れて、數千里の江山眼の前に盡きぬとおもほゆ。あるじ盃を取出して、暮すぐるまで遊覧しけるに、

一閑乘興屢登樓　遠近江山分幾刻　落雁叫霜風颯々

夕けぶりあらそふ暮を見せてけり我が家々のむね岡の宿

堀兼の井、見にまかりてよめる。今は高井戸と云ふ。

俤ぞかたるにのこるむさしのや堀かねの井に水はなけれど

むかし誰心づくしの名をとめて水なきのべを堀かねの井ぞ

やせの里は、やがてこの續きにて侍り。

里人のやせと云ふ名や堀兼の井に水なきを詫びてすむらん

是より入間川にまかりて詠める。

立ちよりてかけをうつさば入間がは我年波もさかさまにゆけ

此河につきて樣々の說あり。水逆に流れ侍るといふ一義も侍り。又里人の家の門、裏にて侍るとなん。水の流るゝ方角案内なきことなれば、何方を上下と定め難し。家々の口は誠に表には侍らず。惣じて申し通はす言葉なども、かへさまなる事どもなり。異形なる風情にて侍り。佐西の觀音寺といへる山伏の坊に至りて、四五日遊覽し侍る間に、瓦礫ども詠じ侍る中に、

南歸北去一季闌　露宿風飧總不レ安　贏得行唫乘二詩景一

堀兼の井―其舊跡定かならず、まづは今入間郡堀兼村の東南淺間塚の邊なるをそれと定むべく、こゝに高井戸といへるは正しからぬ由吉田氏の地名辭書にいへり、尚本文庫江戸名所圖會卷三、百三十一頁なる其條を參照すべし

やせ―瘠せを地名に掛けし戯ならん

案内なき―わからぬ

かへさま―反對、入間樣とて凡て物を反對にいひなすことあり、狂言記入間川もその一例也

瓦礫―拙劣なる詩歌といふ謙辭

水なかば―池水半氷の題にて「池水をいかに嵐の吹き分きて氷れるほどの氷らざるらん」といふ歌の趣なるべし、半澤の名に因みたる洒落

いはこすげ―岩小菅、いはずと掛く

水なかば澤べをわくやうす氷

名に聞きし霞の關をこえて、是彼歌よみ連歌など言捨てけるに、

吾妻路のかすみの關にとし越えばわれも都にたちぞ歸らん

都にといそぐわれをばよも留めじ霞のせきも春を待つらん

此關を越えすぎて、戀が窪といへる所にて、

朽ちはてぬ名のみ殘れる戀がくほ今將た問ふも契ならずや

或人の許にまかりて遊び侍りけるに、題を探りて三十首歌よみ侍りけるに、

深夜寒月

春あきにあかしなれぬる心ざし深きしも夜の月ぞ知るらん

松雪夕深

嵐さへうづもれはてゝふる雪に松のしるべもなき夕べかな

思不言戀

さすが又斯とはえこそいはこすげ下に亂れて詫ぶとしらなん

むねをかと云へる所を通り侍りけるに、夕の煙を見て、

安驚—いづくんぞおどろかんと訓ず
さむしろ—狹筵

靈山—靈鷲山によそへていふ也

小町—小野小町

うつろふ—小町の「花の色はうつりにけりな徒に我身世にふるながめせしまに」の歌

おぼつかな流れも分かぬ川水にかけならべたるふたつ橋かな

宿相州大山寺、寒夜無眠、而閑寂之餘、和漢兩篇口號。

蓑笠何堪雪後峯　山限無舍倚孤松　可憐半夜還鄕夢

一杵安驚古寺鐘

わが方を敷しのべどもゆめぢさへ通ひかねたる雪のさむしろ

この山を立出でて、靈山と云ふ寺に到る。本尊は藥師如來にてまします。俳諧歌をよみて同行の中へ遣はしける。

釋尊のすみかとおもふ靈山に藥師ほとけもあひやどりせり

日向寺といへる山寺に一宿してよめる。

山かげや雪氣の雲に風さえて名のみ日なたと聞くも賴まず

熊野堂といへる所へ行きけるに、小野と云へる里はべり。小町が出生の地にて侍るとなん、里人の語りはべれば、疑はしけれど、

色みえでうつろふと聞く古へのことばの露か小野の淺ぢふ

半澤といへる所に宿りて、發句、

もる—守る

先のたび—前回

名は光り—名は有名となりしの意を、劔、氷の縁にていへるにや

き—来、着

立ちつゞく松の葉ごしのなみわけて月のみ舟もうきしまが原

足柄山を越ゆとてよめる。

足柄の八重やま越えてながむれば心とめよとせきやもるらん

やまびこ山にて、

こたへする人こそなけれ足びきの山びこ山はあらし吹くなり

先のたび渡りける鞠子川又通るとて、俳諧、

まりこ川又わたる瀬やかへり足

八幡といへる里に神社侍り、法施の序に、

あづさ弓八幡をこゝにぬかづきぬ春はみなみの山に待ちみん

劔澤と云へる所にて、氷を見てよめる。

此ごろは水さび渡れるつるぎざは氷りしよりぞ名は光りける

蓑笠の森とて、社頭まし〱けり。暫らく法施はべりて、

天がしたまもらん神のちかひとや爰にき宿るみのかさのもり

ふたつ橋といへる所を過ぎ侍るとて、

なづめる―道に行きなやめる

かつら山云々―古今集「みやまには霰ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり」の歌に因る

うき雲のおしたか山ははやけれどなづめる駒ぞ進むともなき

桂山をこえ侍れば、何れの木末も落葉して、物さびわたり見えければ、

冬がれに名のみ残りてかつら山まさきもつたも色ぞまれなる

すはま口と云ふより、富士の麓に到りて、雪をかき分けて、

よそに見しふじの白雪けふ分けぬこゝろの道を神にまかせて

富士のむら山とて、大嶽の麓にはべり。所々に紅葉の殘れるをながめて、

高根には秋なきゆきのいろ冴えてもみぢぞ深きふじのむら山

田子の浦を、はる〴〵とながめやりて詠める。

千里より千里に續くふじの根の雪のふもとや田子の浦なみ

ふじのなる澤をよめる。

久かたの天の川瀬のこゑなれや雲間にむせぶふじの鳴る澤

三保の入海をながめ侍りて、

浮雲のみほのいりうみ見渡せば松の上こすおきつしらなみ

浮島が原をながめ侍れば、松原遠く暮れかゝりて、やう〳〵月すみ上りければ、

あけて―箱の縁語

あし―葦、悪

一夜この所にとゞまりて、旅泊の愁緒かへりて其興も多かりけり。終夜まどろまん隙も侍らざりければ、

あしのやは波をまくらに敷たへの床にはゆめのたちも歸らで

是より箱根三島などへ參詣せんとて、風祭の里と云へる所にて、渡し舟さしよせける時、

舟出せんみなとへ近き里の名もげに白波の風祭かな

箱根山に行き暮れて、今夜は社參に及ばず、翌朝まうでて、落葉を見て、

こがらしの錦をたゝむ箱根山あけて見るにぞ紅葉なりける

あらし吹くをのへの紅葉散り亂れ錦をたゝむはこねやまかな

かくて三島にまうでて、

波たゝぬ御代にといのる三島江のあしてふことをはらへ神風

矢立の杉とて大木あり、軍陣へ出づる武士共、此木に矢を射たてゝ吉凶を見侍るよし傳へければ、

ものゝふのためしにひける梓弓やたての杉やしるしなるらん

あしたか山をながめて、

虎―大磯の虎、曾我十郎の妾

心なき―下の句「鴫立つ澤の秋の夕暮」

すゞかけ―篠懸、修驗者の衣の上をおほふもの

おひつなかいつ―物の遊び方ならん、なかいつ未詳「か」の字衍なるか

咲くと見えちると見ゆるや風渡る花水がはの波のしらたま

大磯の宿といへる所は、古へ虎と云へる好色の住みける所となん。ある同行に戯に申しきかせける。

今は又とらふすのべとあれにけり人はむかしの大いその里

鴫立澤と云ふ所に至りぬ。西行法師こゝにて、心なき身にも哀れはしられけりと詠ぜしより、此所をかくは名づけけるよし、里人の語り侍りければ、

哀れしる人のむかしを思ひ出でて鴫立つ澤を泣く〳〵ぞとふ

梅澤の里を過ぎ侍るとて、

たびごろも春まつこゝろかはらねば聞くもなつかし梅澤の里

まりこ川にて、俳諧、

すゞかけの括をあげて鞠子川おひつなかいつけふは暮らさん

小田原に著きはべれば、早川の浦とて、水上は大河にて、海邊に續きたるによりて、かやうに申し侍るとなん。

末とほくながれ出でたるはやかはの浦や千尋の波路なるらん

しけるに、この僧色々に思案して申すやう、暫く相待ち侍れ、住寺に申し試みんとて、僧立入りぬ。やゝありて立歸りて云ふやう、此の玉簾、當寺の靈寶として、毎年三月十五日に取出すより外には、堅く禁制し侍れども、拙老經廻の義前後その例あり難く侍れば、衆僧談合しはべりて、一見を許し侍るべきよし申す。誠に不思議なる機緣なり。簾の長さ三尺四寸、廣さは四尺ばかりにて、水精の細さ、世のつねの簾よりも猶細く、形は見えはべらず。玉妃のその古へに、九花帳にかけ侍りけん事など思ひやり侍れば、千古の感緒今さら肝に銘じて、皆人袖をぬらし侍りき。

　遠き世のかたみをのこす玉すだれ思ひもかけぬ袖の露かな

藤澤の道場、聞えたる所なれば、一見しはべりき。ある寮にて茶を所望し侍り。暫く休みけるに、池にもみぢの散りけるを見て、

　澤水もかげは千いろの木の葉かな

道場の前に古りたる松に藤のかゝりければ、

　紫のいろのゆかりのふぢさはにむかへの雲をまつぞ木高き

こゝを立ちて、小田原といへる所にまかりける道に、花水川といへる河を渡りて、

拙老―筆者の自稱

九花帳―長恨歌の句「九華帳裏夢魂驚」

聞えたる―世に聞えたる、有名なる

むかへの雲―佛菩薩來迎の瑞雲、紫の雲にていへり

五山—建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺

しほみちて—潮滿ちて、しほは染色にいふ語にて紅葉の緣語

計らひにて侍らましかば—取計らふ範圍內ならば

由井が濱にまかりて、鳥居など見侍りて、暫く皆々あそび侍りけるに、

くち殘るとりゐの柱あらはれて由井の濱べにたてるしらなみ

この序に建長圓覺以下の五山を順見し侍りて、これより瀬戸金澤と云へる勝地の侍るを尋ね行くに、瀬戸の沖に漁舟あまた見えけるを、

よるべなき身のたぐひかな波あらき瀬戸の汐合わたるふな人

磯山づたひ、殘りのもみぢ見所多かりければ、

冬さればせとの浦わのみなと山いくしほみちて殘るもみぢぞ

金澤にて、時宗の庵の侍りけるに、立ちよりて茶を所望しけるに、庭に殘菊の黃なるを見てよめる、

誰こゝにほりうつしけん金澤や黃なる花さくきくのひともと

此の在所に稱名寺といへる律院はべり。殊の外なる古所にて、伽藍などもさりぬべき樣なる所々順禮し侍りけり。三重の塔婆に詣でけるに、老僧に行き逢ひぬ。この塔の由來など尋ねければ、これにこそ楊貴妃の玉の簾一かけ安置し侍れ、我が計らひにて侍らましかば、一見させはべるべき物をとて、懇切なる芳志ぞ見え侍りき。既に下向せんと

となりかくなり—あゝなりかうなり、様々にして

やまがらや—鳥の名、喜びて胡桃をとついばむよりいふ

階弟—戒弟にて法弟の義なるべし

冬がれの木立さびしきうめがやつ紅葉も花もおもかげぞなき

うりが谷、

ひと夏はとなりかくなり暮過ぎて冬にかよれるうりが谷かな

霧がやつ、

この里のふる非のもとの桐がやつおちばの後は汲む人もなし

胡桃が谷、

住みなれし鎌くら山のやまがらやくるみが谷に秋をへぬらん

べにが谷を通りて、化粧坂を越えんとて、俳諧、

かほにぬる紅が谷よりうつりきてはやくも越ゆる化粧坂かな

鶴が岡の八幡宮に參詣し侍れば、傳へ聞き奉りしにも勝れたる宮だちなり。誠に信心肝に銘じて貴く覺え侍る。抑當社別當祖師隆辨僧正經歴年久し。その階弟道瑜准后、號をば大如意寺といひ、兩代彼職に補し侍りき。由緒無雙なることを思ひ出でて、神前に奉納の歌、

神もわが昔の風をわすれずばつるがをかべのまつと知らなん

みえず—餅は、上なる「つきて」も下なる「喰せ」も共にもちの縁
ひだるさ—ひもじさ、空腹
尾上—山
折しもあれ—まして今秋の候に際して

もちる坂といへる所にて、俳諧の歌、

　行きつきて見れども見えずもちる坂唯わらくづに足を喰せて

すりこばち坂といへる所にて、又俳諧歌をよみて、人に見せ侍りける。

　ひだるさに宿いそぐとや思ふらん道より名のるすりこばち坂

はなれ山といへる山あり、誠につゞきなる尾上も見え侍らねば、

　朝まだき旅立つさとのをちかたに其名もしるきはなれ山かな

鎌倉中、あなたこなた順見し侍りて、先づ谷々を人に尋ね侍り。龜がゐの谷にてよめる。

　いくちとせ鶴が岡べにともなひてよはひ爭ふ龜がゐのやつ

扇が谷にて

　秋だにもいとひし風を折しもあれ扇がやつは名さへすさまじ

うつし給の扇がやつや是れならん月はうなばら雪はふじのね

さゝめがやつ、

　霜さやぐさゝめがやつのふしの間に一夜のゆめも嵐ふくなり

梅が谷、

見て、

　やかぬより藻鹽の煙名にぞ立つ舟にこり積む芝のうらびと

此浦を過ぎて荒井といへる所にて、

　蘆まじりおふるあらゐの打ち靡き波にむせべる岸のまつかぜ

まりこの里にてよめる。

　あづまぢのまりこの里に行きかゝり足も休めずいそぐ暮かな

駒林といへる所に到りて、宿をかり侍るに、淺ましげなる賤の伏屋に、落葉所をせき侍るを、ちと掃きなどし侍りける間、たゝずみて思ひつゞけける。

　つながれぬ月日しられて冬きぬと又葉をかふる駒ばやしかな

新羽を立ちて鎌倉に到る道すがら、さま〴〵の名所ども、委しく記すに及び侍らず。かたびらの宿といへる所にて、

　いつ來てか旅の衣をかへてまし風うらさむきかたびらの里

岩井の原を過ぐるとて、

　すさまじき岩井の原をよそに見て結ぶぞ草のまくらなりける

ためにもす木

あらゐ—荒藺

かゝり—まりの縁語

所をせき—あたりを狹くする程積り

つながれぬ—駒の縁語

結ぶぞ—岩井の水は掬ばず草の枕を結ぶと也

さゝえ―酒筒
言とはん―次の歌も共に伊勢物語の「名にし負はゞいざこととはん都鳥我が思ふ人はありやなしやと」の歌に取る
舟こぞりても―舟に乘りたる人一同、伊勢物語「舟こぞりて泣く」の語にとる
霜ののち―「歳寒うして松柏の凋ぶに後るゝを知る」の語によ る、あらはれにけりは忍びたる節操がなるべし
瀬―淺き所、ふかめての緣語
鹽木―鹽をやく

同行の中に、さゝえを携へける人ありて、盃酌の興を催し侍りき。猶行き〳〵て川上に到り侍りて、都鳥尋ね見んとて人々誘ひける程に、まかりて詠める。

言とはん鳥だに見えよ隅田川みやこ戀ひしとおもふゆふべに

思ふひとなき身なれども隅田川名もむつまじきみやこ鳥かな

やう〳〵歸るさになり侍れば、夕の月ところがら面白くて、舟をさしとめて、

秋のみづすみだ川原にさすらひて舟こぞりても月を見るかな

次の日、淺草を立ちて新羽といへる所に趣き侍るとて、道すがら名所ども尋ねけるうちに、忍の岡といへる所にて、松原の有りける陰に休みて、

霜ののちあらはれにけり時雨をば忍びのをかの松もかひなし

こゝを過ぎて、小石川といへる所にまかりて、

我かたを思ひふかめて小石川いつをせにとか戀ひわたるらん

鳥越の里と云ふ所に行きくれて、

暮れにけり宿りいづくと急ぐ日になれもねに行く鳥こえの里

芝の浦と云へる所に至りければ、鹽屋の煙うち靡きて物寂しきに　鹽木運ぶ舟どもを

頼めもおかぬ―秋を待て必ず來らんと頼ましめても置かぬ

なみだのそでや云々―思川の水源は涙に溜るゝ袖ならんとの洒落

古への塚―梅花無盡藏に「河邊有柳桜、並吉田之子梅若丸墓也、其母北白川人」

聞き渡りても―話を聞きても

悪業をも慙愧懺悔して、今の娘の菩提をも深く弔ひ侍りけると語り傳へけるよし、古老の人申しければ、

　罪とがのくつる（つくろイ）世もなき石枕さこそは重きおもひなるらめ

當所の寺號淺草寺といへる、十一面（千手イ）觀音にて侍り。たぐひなき靈佛にてましましけるとなん。參詣の道すがら、名所ども多かりける中に、まつち山といふ所にて、

　いかでわれ頼めもおかぬ東路のまつちの山にけふは來ぬらん

　しぐれてもつひにもみぢぬ待乳山落葉を時とこがらしぞ吹く

淺茅が原と云へる所にて、

　人目さへ枯れてさびしき夕まぐれあさぢが原の霜を分けつゝ

おもひ川に至りてよめる。

　うき旅の道にながるゝ思ひがはなみだのそでや水のみなかみ

かくて隅田川のほとりに至りて、皆々歌よみて披講などして、古への塚の姿哀れさ、今の如くに覺えて、

　ふる塚のかけ行く水のすみだ川聞き渡りてもぬるゝ袖かな

中比—中古、平安朝時代

合圖の事あれば—打合はせある事なれば

つや〳〵—つくづく

不思議—怪しき、不都合なる

惡趣—惡道、地獄

出立ちて—裝ひて

淺草といへる所に泊りて、庭に殘れる草花を見て、

冬のいろはまた淺くさのうら枯に秋のつゆをものこす庭かな

この里のほとりに、石枕といへる不思議なる石あり。そのゆゑを尋ねければ、中比の事にやありけん、なまざぶらひ侍り、娘を一人もち侍りき。容色おほかた世の常なりけり。彼の父母、むすめを遊女にしたて、道行く人に出でむかひ、彼の石のほとりに誘ひて、交會の風情を事とし侍りけり。かねてより合圖の事あれば、折を計らひて、彼の父母枕のほとりに立寄りて、共寐したりける男の頭を打碎きて、衣裝以下の物を取りて、一生を送り侍りき。さる程に彼の娘つや〳〵思ひけるやう、あな淺ましの事や、幾ばくもなき世の中に、かゝる不思議の業をして、父母もろともに惡趣に墮して、永劫沈淪せんことの悲しさ、先非に於きては悔いても益なし、是より後の事さま〴〵工夫して、所詮我れ父母を出しぬきて見んと思ひ、ある時道行く人ありと告げて、男の如くに出立ちて、彼の石にふしけり。いつもの如く心得てかしらを打碎きけり。急ぎ物ども取らんとて、引被きたる衣をあけて見れば、人ひとりなり。怪しく思ひてよく〳〵見れば、我が娘なり。心もくれ惑ひて、淺ましともいふばかりなし。それより彼の父母速かに發心して、度々の

いかにせむけふを限りの秋ながらわが歸るさの行方知らねば

旅のそら我はいつともしらつゆをかたみに置きて歸る秋かな

十月朔日、よみて人につかはしける。

春といふ名にはふれども神無月しぐれてかすむ山の端もなし

けふよりは春と冬とのかみなづきけに定めなき初しぐれかな

けふ小春の驗にや、聊か長閑に侍りければ、皆々稲穗の湖水に浮びて、舟の中にて酒など興行し侍りき。ふじの根湖水に映れる心を、皆々よむべきよし申しければ、

水うみの波間に影をやどしきて又たぐひある富士をみるかな

稲穗をたちて行きける道に、いろ／＼の名所ども侍り。いひ捨ての發句歌など、あまた侍りしかども、途中のことなれば記すに及ばず。あやしの橋といへる所にて、

川かぜのわたる霧間にほの見えてあやしの橋の末ぞあやふき

岩つきと云へる所を過ぐるに、ふじの根には雪いと深く、外山には殘る紅葉色々に見えければ、よみて同行の中へ遣はしける。

ふじの根の雪に心をそめてみよとやまの紅葉いろふかくとも

春といふ名―十月の晴天を小春日和といふ

岩つき―岩槻、又岩附に作る、武藏南埼玉郡

―虫の音も共にかゝる、

あやなーあやなく、砧は衣をうつものなるより、其縁にてあやといふ也

少人ー稚兒、美少年

山もにしきー「錦を着て故郷に歸る」の語に因る

隙ぞなきー時雨は晴れもし曇りもすれど袖の涙は晴るゝ隙なし

或時題をさぐりて歌よみけるに、菊、

　むらさきにうつろふ菊の花は又あらぬ種より咲くかとぞ見る

又砧を、

　秋風に人の夜さむをうちそへて砧にあやな寐ざめをぞする

ある少人の許より、暮秋紅葉といへる題をたびて、歌よみてと侍りしかば、その使を待たせてよめる。

　歸るさをおもひたつ田の秋とてや山もにしきの折を知るらん

ある夕ぐれに、雁なきて秋風物すごく吹きなしければ、

　雲路行くかりがねさむみ秋ふけて夕べのやまにかぜ渡りつゝ

國々あまた過行き侍りけれども、富士の高根猶同じさまに見え侍りしかば、

　身にそふる俤なれやいづかたに行けども近き富士の高根は

晴れくもる時雨の空に向ひて、旅客の愁の泪に思ひよそへて詠める。

　うき秋のなみだの袖は隙ぞなきしぐれは空にはれくもれども

九月盡にある旅宿にて、

ある野徑を分行きけるに、浅茅いと深かりければ、

　ふるさとの庭の浅茅もかくやとて分けわぶる野を哀とぞ見る

九月廿八日、稲穂の別當が坊にて、湖水をながめて、

　山色湖光秋又窮　郷書曾不レ託二飛鴻一　砧聲近報孤村晩
　旅懐何堪憂患躬

下總の國兒の原と云へる所あり。いかなる故に、かゝる名の所は侍りけるぞと、里人に尋ねければ、この在所、白波青林横行の地たるによりて、ある少人の通りけるに、衣裝など剝ぎとるのみならず、剰へ殺害し侍りき、夫より此所をかやうに號し侍るよし語り侍れば、今更の心地して、塚のほとりに立寄りて、思ひつゞけて廻向し侍りける。

　佳人落レ命荒原上　蘚底古碑空刻レ名　勿レ恨青林犯二花影一
　浮生有レ限辱象レ栄

　白波にうき名をながす兒の原戀路にすつる身とも聞かばや

草の原さま〴〵枯渡りて、蟲の音所々に残りけるを、

　むしのねの稀に成り行く野邊見ればひとりは枯れぬ霜の下草

火には紅葉がなる

白波青林―盗賊

今更の心地―しみじみと今まのあたりその悲劇を見るが如き心地

青林犯花影―ぬす人が美少年を殺したること

ひとりはかれぬ

忍びかねたる—忍びかねて鳴く

玉づさ—手紙、歌は蘇武の雁信の故事、萩の露の玉に掛けたる文飾

なるこ—鳴子、鳥獸を驚かすため田畠に仕掛けて音を立つる板

かゞり云々—篝

旅宿にて、夕鹿といへることを、人々によませ侍りける次に、

山かげや木の葉時雨れて暮るゝ日に忍びかねたる小男鹿の聲

雁のわたりけるを聞きてよめる。

萩のはに有りと知らでや玉づさを翅にかけて渡る雁がね

曉虫といへることを、

きり〴〵すよわる寐覺の有明に枕さびしき床のうへかな

旅の宿さびしさの餘り、これかれ題を探りて歌よみけるに、鹿、

なるこにはおどろく鹿の妻戀ひの絆になどか離れざるらん

つくばねの麓を立ちて、他國へ移りける道にて、菊紅葉おもしろき所にいたりて、

旅のそらうつろひかはり行く道に紅葉も菊もをりを知れとや

つくば川をわたりけるに、いざゝの橋を過ぐるとて、

渡りきて末たど〳〵しつくばがはいさゝの橋にかゝる夕ぐれ

爰をすぎて、鵜飼川といへる所に、もみぢ盛に見えければ、立寄りて、

かゞりをば紅葉ぞてらす鵜かひ川水すさまじき瀬々の秋かぜ

籠居―とぢこもり居て
築波山―筑波山
竟日―終日
このもかのも―古今集「筑波ねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし」
戀ぞつもりて―「筑波ねの峯より落つるみなの川戀ぞつもりて淵となりぬる」

九月廿三日、欲レ詣二築波山一、疾風迅雨太矣。仍籠二居草廬一而口二號一絶一。

蕭條竟日鎖二柴門一　風雨似レ憐二吾脚跟一
還恨楓林斷二秋色一　明朝山上祭二吟魂一

翌日築波山に參詣し侍りけるに、初雪ふりて、もみぢば薄紅に見えければ、

いづれをか深し淺しとながめましもみぢの山のけさの初雪

神前にして詠じて奉りける。

さはりなくけふこそ玆につくば根や神のめぐみのはやま繁山

誠にこのもかのもと詠ぜしも理にて、山々の紅葉、譬へん方もなく侍らず。道すがら口ずさびける歌、

つくば山このもかのもの紅葉ばに時雨もしげき程ぞ知らるゝ

みなの川は此山の陰に流れ侍り。戀ぞつもりてと詠ぜし歌を思ひ出でて、

つくば根の紅葉うつろふみなの川ふちよりふかき秋の色かな

又山に八重重と云へる靈石はべり。云ひすての發句、

きてぞ見る紅葉のにしき八重がさね

めかれせず—目を離さず

常陸帶—古人常陸の國にて男女の仲らひをトふ爲、其名を書きて鹿島の神前に掛けし布の帶

この旅宿にて、人々月の歌よみける中に、

　めかれせず月にかゝるは心にてそらに雲なき秋の夜半かな

宇津宮を立ちて、きぬ川と云へる所にて詠める。

　もみぢ散り山はにしきをきぬ川にたち重ねたる波の綾かな

常陸國に到りぬ。小栗といへる所に熊野の御社おはしましけり。法施の序によみて奉る。

　たちそひて守る心のみちなれやいづくに來ても三熊野の神

櫻川を渡りければ、紅葉うつろひて波に映じけるを見てよめる。

　秋の色にうつろひきてもさくら川もみぢに波の花をそへつゝ

同じ國山田慶城といへる山伏の坊に宿りてよめる。

　めぐり來てけふは吾妻の常陸帶結びそへてや草まくらせん

この坊に逗留の間、歌あまた詠みける中に、夕時雨と云へる題にて、

　紅葉ばを染むるのみかは夕しぐれ我が淋しさも色まさりけり

又夜時雨といへる心を、

　色みえぬしぐれのいとや山姫のよるのにしきを織り亂すらん

いかにせん云々―又いつと書になる場合にても秋の別れは一方ならず悲しきものなるを、再會期し難きこの別離の悲しみをいかにせん

宇津宮―宇都宮

短尺―短冊

き―來、紀

うつ―鬱つ、宇都

名殘もけふ明日ばかりにて侍れば、夜の更け行くをも知らず遊びけるに、五更の鐘既に告げ渡りければ、歸りて長門竪者して申しおこせける。

いかにせんまた頼みある世なりとも秋の別はおろかならめや　　藤乙丸

かへし、

わかれ路の露とも消えん時しもあれ秋やは人にとのみ歎きて

添へてつかはしける歌、

忘らめやひと夜の夢のかりまくら人こそかりに思ひなすとも

同じ國宇津宮につき侍り。粉川寺といへる所に聖道所あり、此坊に留まり侍りき。此寺の稱號いかなる由來にかと思ひ侍りければ、紀伊の國粉川寺を移し侍るとなん。彼の本寺門跡管領の在所なれば、不思議なる機緣にて侍るよし申しきかせて、短尺を遣はしける。

契りあれやあづま路とほくきの國にあらぬこ川の寺に宿れる

ある夜きぬたの音を聞きて、

ねざめうき旅のよどこを思ひやれこころもをうつの宮の里人

昌深―一本「昌源」

老弱―老若

やま水の音をねざめのしぐれにて老のなみだは僞りもなし

ある夜月いと面白かりけるに、別當坐禪院法印昌深方より詠みて給ひける。

さても猶思はぬ袖のかりねゆゑこよひや都つきのやまざと

とりあへずかへし、

言の葉の光りを添へて見る月によしや都のあきもしのばじ

一山の老弱酒宴を興行して、稚兒童數輩集まりて、色々曲を盡し侍りき。宴席終りて、藤乙丸といへる少年、休所へ禮に來りて、暫く物語りし侍りて歸り侍りけるが、次の日言遣はしける。

音にぞと云ひしもさぞな相見ての心づくしを誰かしらまし

藤乙丸かへし、

相見しは夢かとばかりたどれるをうつゝに返す言のはの末

ある夜又彼の兒おとづれ侍りて、餘りに月の面白さに誘はれ侍る由申して、しばし物語し侍りけるに、一首よみ侍るべきよし、强ひて所望しければ、とりあへず。

月見つゝ思ひいでなばもろ共にむなしき空やかたみならまし

いづくに―いづこよりも

先達―登山の案内

ふりにける―老いたる身を厭ふとも黑髮もやがて雪となるらんと也、ふりは古りの意にて、雪の緣語

この山の上三十里に中禪寺とて、權現ましましけり。登山して通夜し侍る。今宵は殊に十三夜にて、月もいづくに勝り侍りき。渺漫たる湖水はべり。歌の濱といへる所に、紅葉色を爭ひて月に映じ侍れば、舟に乘りて、

しき島のうたの濱邊に舟よせて紅葉をかざし月を見るかな

翌日中禪寺を立出でける道に、かつちりしける紅葉の、朝霜のひまに見えければ、先達しける衆徒長門の竪者といへる者にいひ聞かせ侍りける。

山ふかき谷の朝しもふみ分けてわがそめいだす下紅葉かな

かくしつゝ下山し侍りけるに、黑髮山の麓を過ぎ侍るとて、吾人言捨どもし侍りけるに、

ふりにける身をこそよそに厭ふとも黑髮山もゆきを待つらん

同じ山の麓にて、迎ひとて馬どもの有りけるを見て、

日かずへて乘る駒の毛もかはるなり黑髮やまの岩のかけみち

又本坊坐禪院に歸り著き侍りて、さま〴〵遊覽あり。ある夜時雨を聞きて、

越えゆかんをのへの雲もさきだちて山めぐりする初時雨かな

軒近く瀧落ち侍り、さながら寐覺の時雨に聞きまがひ侍りければ、

さそはれて—歸る夕の鳥に

重陽宴—九月九日

こゝのかさね—九重

山菅の橋—又神橋(ミハシ)といふ、鉢石町の西、大谷川の激流に架し、廟寺に入る第一阻たり

さそはれて我もやどりに急ぐなり歸る夕べのとりはみの里

九月九日、野を分けつくして山に到りけるに、菊いと面白く咲きて、感緒きはまりなし。重陽宴には菊を擬し侍りて、

けふは又野を分け過ぎて仙人と成りてや菊の花をかざさん

長月のこゝのかさねをおもひ出でてころもにうつす菊の白露

佐野の舟ばしをよめる。

かよひけん戀路を今の世がたりに聞きこそ渡れ佐野の舟橋

日光山に登りてよめる。又むかしは二荒山と云ふとなん。

雲きりもおよはで高き山の端にわきて照りそふ日の光かな

此の山にや、山菅の橋とて深祕の仔細ある橋侍り。委しくは緣起に見え侍る。又顯露に記し侍るべき事にあらず。

法のみづみなかみ深くたづねずばかけても知らじ山菅の橋

瀧の尾と申し侍るは、無雙の靈神にてまし〳〵ける。飛瀧のすがた目を驚かし侍りき。

世々を經てむすぶ契の末なれやこの瀧の尾のたきのしら糸

河な―河名、菜

あからさまに―むきだしに

さしはりて―さしはへての誤か、さしが戸を鎖すの縁語なることといふ迄もなし

つみためて洗ふ河なのさとびとよ誰あつものの供へにやなす

この所より右の方に、鋸山といへる山あり、峯のあらしに雲晴れて、あからさまに其のみね見ゆ。段々ありて、誠にのこぎりの様になん侍れば、俳諧、

宮木ひく峯のあらしに雲晴れてのこぎり山はかゝりとぞ見ゆ

これより舟に入りて、三崎と云へる所に上りて、

あはれとも誰かみさきの浦づたひ潮なれごろも旅にやつれて

浦川の港と云へる所にいたる。こゝは昔頼朝卿の鎌倉にすませ給ふ時、金澤榎戸浦河とて、三つの港なりけるとかや。

えの木戸はさしはりてみず浦かはに門をならべて見ゆる家々

鎌倉にて第三まで獨吟。

霧ふかし鎌くらやまのほし月夜

あさなく鶴が岡のまつかぜ

葛の葉の色づく野澤みづかれて

鳥はみと云へる所を過ぎ行きけるに、日暮れ侍れば、

那古の觀音に詣でぬかづき終りて、夕べの海面をながめやるに、寺僧の出來て、あれ見給へ、入日を洗ふ沖津白波とよめるは、この景なりと云へり。されど、それは津の國住吉郡なこの浦をよめるとかや。其のなこの浦に難波津を守れる人の住みしによりて、その浦を津守の浦といひ、又其の子孫の氏によびて津守氏ありとかや。今はなこの浦の所に、さだかに知れる人なしとなむ。この歌何地にして詠めるも知り難けれど、寺僧の云ふに任せてしるす者なり。まことに今も入日をあらふ沖つ波、眼前の景色えも云ひがたし。

那古の浦の霧のたえまにながむれば夏もいり日を洗ふしら波

今宵はこゝに通夜し、明くるあした、名にしおふ野島が崎を見れば、朝霧こゝかしこに立消ゆるさまたゞならず。

あま小舟見えつかくれつ朝あけの野島がさきの霧のむら〳〵

勝山と云へる所にて、

駒はあれどかちよりぞ行く勝山の里にこはたぞ思ひやらるゝ

河名と云へる所にて、里人の菜を洗ふを見て、

ぬかづき―叩頭し

入日を洗ふ―新古今春上、後德大寺左大臣、「なこの海の霞の間より眺むれば入日を洗ふ沖津しら波」

名にしおふ―名だたるの意に用ひたり

こはた―木幡、萬葉「山科の木幡の山を馬あれどかちより吾が來汝を思ひかねて」拾遺集「山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ來る君を思へば」

さくらの云々—今は秋なれば紅葉したる櫻の葉をこれも春の花の名殘と見はやすとの意

ふと—上總君津郡富津、又古戸（フツト）に作る

神野山—又鹿野山に作る（カノウサン）と稱し、清澄と共に有名なる靈場也

たれときほし—誰時星、あけの明星

昔もし云々—「天つ風雲の通ひ路ふきとぢよ少女の姿しばし止めん」の歌による

村々—幾群も幾群も

吉野郷といへる所あり、宗尊親王、芳野の花をこゝに移して植ゑさせ給ふと云傳ふ。

花ざかり思ひやられてみよし野のさくらの紅葉これも名殘と

ふと、木更津、吾妻など云へる所を打過ぐるとて、思ひ續けし事、口に任せて俳諧、

爰にふときさらづの里すぐれども猶もあづまの中とこそきけ

神野山といへる道場にまうでて、

なく鹿の野にも山にもきこゆなり妻戀ひわぶる秋の夕暮

安房國清澄山にまうで、通夜し侍るあかつき、

曉のたれときほしもきよずみの海原とほくのぼるやまかな

東の方へ下山し、天津といへる所にて、

昔もし雲の通ひぢ吹きとぢば少女のすがた今も見ましを

前原といへる所にて、

まへ原の里のうしろの山おろし舟にもみぢの錦つむなり

磯村といへる所は、名にしおひて、磯傳ひの村なれば、

海ちかくいそ傳ひゆくいそむらに村々見ゆるあまの釣舟

短檠―短きともし火の臺
故人―舊友人
寒垣―あれたる寂しきまがき
落日天邊雁陣斜―夕日落つる西の空に一行の雁の斜に渡るを見る
こゑを帆に―古今集「秋風に聲を帆に上げて來る船は天の戸渡る雁にぞありける」
さくら井―咲くらん、櫻井

夕鹿

我かたを戀ひつゝ聞けばさを鹿の妻とふこゑもうき夕べかな

旅店にて愁懷のあまり、夜更るまで短檠に對して、

孤館殘燈欲五更　暗蛩切々夢難成　故人記取不平事
日々寒垣想洛城

山を越過ぎて浦近くながめやりけるに、遠景限りなく見え侍りければ、感興にたへず、和漢兩篇口に任せける。

客旅倚添雙鬢花　江山阻跡故人遐　孤帆明滅暮煙外
落日天邊雁陣斜

からろおす船を友とやこゑを帆にあげて落ちくる天つ雁がね

上總國千種の濱といへる所にて、色貝を拾ひて、

野路つゞくちぐさの濱のうつせ貝うみさへ秋の色に出でけり

櫻井の濱といへる所にて、さくら貝を拾ふとて、

春はさぞはな面しろくさくら井のはまにぞ拾ふおなじ名の貝

ふるさと近き―宛然故郷の軒端に近しとの意ならん
まくずうらや―くず葉は風にうらがへれど我は故郷に歸らんことと遠き野にさまよふ身なれば也
尾ばなが袖―すゝきの穗
安達がはら―奥州にあり、鬼の傳說にて有名なる所、鬼のしこぐさは紫苑
都のかげ―都に殘るとかはりなき月の影

萩見ればふるさと近き軒端かな

かくて、こほりの山を立出でてゆく道に、葛のいと繁く侍りけるを見て、

我がかたに歸らんことも遠き野のまくずうらやむ秋風のくれ

又すゝきを分け侍りて、

思ひいづる故郷人のこゝろかとまねく尾ばなが袖もなつかし

同じ野を分けすぎけるに、紫苑といへる花を見て、

尋ねみん安達がはらのしるべかも此野にあへる鬼のしこぐさ

宮城野の萩とて人の見せければよめる。

みやぎ野の木の下ぶしの假まくら眞萩をりしき獨りかもねん

ある旅宿にて、明方に雁のなきけるを聞きて、

しのゝめの横雲まよふみね越えてともにたなびく天つ雁がね

ある人すゝめ侍りけるに、

旅天月

よな〳〵の月は都のかげながらやつるゝそでに面がはりして

言捨てども—「言捨てしかどもそが中を」などあるべき所
いづ—出づ、伊豆
士峯—富士山
皎—「てり」又は「さえ」と訓ずべからん
もよふされても—誘はれて、蟲の音によりて悲の情を催して

尋ねきてこゝに三島のおなじ名を思ひぞいづの國つかみかぜ

ある夜皎わたるに、士峯の雪嬋娟たりければ、

富士の根の麓に月はかげしろし空にさえたる秋のしらゆき

蟲の音物すごき夜、寐覺がちにて、

かりねとふ草の枕のむしのねにもよふされてもなき明しつゝ

ある夕つ方、初雁の聲を聞きて、

おくれゐて聞きこそわぶれ初雁のみやこにいそぐ夕暮のころ

おなじ時、發句、

雁なきて秋かぜたかき雲路かな

色こき蔦の、夕日に映じけるを見て、

色うすき秋の日かげは紅のながめもかはる蔦かづらかな

野外の萩やう〳〵散りがたに見えければ、遠山には、木々の梢色づき渡りけるを見て、

のべの萩ちれば外山の錦かな

旅館の萩をながめ侍りて、

せしかば岡部を以て呼びしならん」
淺間川―利根川なるべし
古川―古河（コガ）なるべし
川をさ―川の長
なか田―古河の南一里半、利根川の左岸にあり
時しらぬ山―伊勢物語「時しらぬ山は富士の根いつとてかかのこまだらに雪のふるらん
及ぶばかり―とどく程
こほりの山―下總香取郡なる郡といふ所にや

誰が世にかうかれそめけん朽ちはてぬ其名もつらき村君の里

淺間川を渡るとて詠める。

名にしおふ山こそあらめ淺間川行く瀬の水も烟たてつゝ

古川といふ所にて舟にのりて、

こがくれに浮べる秋の一葉舟さそふあらしを川をさにして

河舟をこがのわたりの夕波にさしてむかひの里やとはまし

なか田と云へる所にて、初めて富士をながめて、

言のはの道もおよばぬ富士の根をいかでみやこの人に語らん

夕あけぼのに、眺の變れることを、

おもかげのかはるふじの根時しらぬ山とはたれか夕あけぼの

彼嶽は、遠く行くに隨ひて、空にも及ぶばかりに侍りければ、

遠ざかりゆけば間ぢかく見えてけり外山を空に登るふじの根

下總國こほりの山といへる所に、伊豆の三島を勸請し奉りて、大社まし〳〵けり。彼の別當の坊に暫く逗留し侍りける中に、歌など度々言捨てども、少々記し置き侍りける。

との境の川

けふの限り—今日一日分け行きて夕になりたれど未だ野のはてとはならずと也

あやしの—賤しき

岡部の原—武州大里郡にあり、今岡部村といふ、新記に「岡部村は曾根好忠の歌に、武藏野の岡部の里とよみし所たるべし、かの源平の頃、名に聞えし六彌太忠澄亦此に住

武藏野にて殘月をながめて、

　山遠し有明のころひろ野かな

おなじ野をわけくれて詠める。

　草のはらわけもつくさぬ武藏野のけふの限りは夕べなりけり

この夜は此野に假寐して、色々の草花を枕に片しきて少しまどろみ、夢のさめければ、

　花ちりし草の枕の露のまにゆめ路うつろふむさし野のはら

　武藏野の草にかりねの秋の夜は結ぶゆめぢもはてやなからん

此の野の末にあやしの賤の屋に泊りて雨を聽きて、

　たびまくら都にとほきあづま屋を幾夜か秋のあめになれけん

岡部の原といへる所は、かの六彌太といひし武夫の舊跡なり。近代關東の合戰に數萬の軍兵討死の在所にて、人馬の骨をもて塚につきて、今に古墳數多侍りし。暫く囘向して口にまかせける。

　なきをとふ岡べの原のふる塚に秋のしるしのまつかぜぞ吹く

村君といへる所を過ぐるとて、

手ふりにぞ―手ぶらにて手をうちふりての意か、輕き從者を手ふりといふ例古文に散見せり
鵜のまねしたる―諺「鵜のまねする烏水におぼる」
宮木―宮を作る料の木
大が―大鋸の意にて下に「ひく人」といへり
名のみ立ち―烟は立たずして名のみ世に高く立ち
月さへ云々―月をさへもなほやつして姿を見すぼらしくせしむる雨よ
あい川―鮎川
髮長川―又神流川、神名川に作る、上野と武藏

杖をだに重しといとふ山こえてなぎなた坂を手ふりにぞ行く

上野國大藏坊といへる山伏の坊に、十日餘り留まりて、同國杉本といふ山伏の所へ移りける道に、烏川といへる川に、鵜烏など相交りて侍りけるを見て、又俳諧、

とりもえぬ魚のこゝろを恥ぢもせで鵜のまねしたる烏川かな

大が松といへる所を過ぎ侍るとて、

名のみして宮木にもるゝ大が松ひく人なしにとしや經ぬらん

この所より、信濃の淺間の嶽近々と見え侍ると聞きしにも過ぎて、其風情勝れ侍りき。

今はよに烟をたえてしなのなるあさまの嶽は名のみ立ちけり

杉本に十日許り逗留し侍りき。八月十五夜、淡雨滂々として、いとゞ旅店の物うさも、一入の心地して、

身こそかく旅の衣に朽ちはてめ月さへなほもやつすあめかな

此の坊を立ちて、宮の市、瀬下の原、鹽川、白石、板倉野、あい川、髮長川など樣々の名所を行き〳〵て、をしまの原といへる所に休みてよめる。

けふこゝにをしまが原をきてとへば我まつしまは程ぞ遙けき

わきて—特に
大井—一本「大川」
あぢ酒—うま酒
あるじ顔—主人顔

見て、

　わきてこの浦の名にたつくじら波曇るうしほを風も吹くなり

安田、山室、三桶、澁川、大井、木落など打過ぎて、漆山を越ゆとて、

　初秋の露にぬるてふうるしやま今ひとしほぞかぜもすゞしき

壺池といへる里にしばし休みて、或人に遣はしける俳諧歌、

　あぢ酒をすゝむる人もなきやどに水のみわくやつぼいけの里

これより、くつぬぎといへる里を過ぎ侍るとて、

　我もまたあしを休めてたちぞよる水かふ駒のくつぬぎのさと

ふくろふといへる里にて、寐覺に思ひつゞけける。

　この里のあるじ顔にも名のるなり深き梢のふくろふのこゑ

相股、湯の原、池の原などいふ所を分け行き侍りけるに、道の邊の尾花を眺めやりて、

　すむ水はありとも見えぬ池のはら尾花さわぎてたかき波かな

此原を打過ぎて、薙刀坂といへる所をこえ侍るとて、又ある同行にいひかけ遣はしける俳諧歌、

にかゝる所の俗稱
砥並—今外波に作る

さほの山べ云々—佐保の山邊は遠けれど其所在地たる大和といふ名の川ぞと也、舟のさをと續けて佐保に掛けたるは假名違ひ也
塔頭—塔中、寺の地中の小院
點して—割當て、て
葉もりの神—柏の葉守にありて之を守るといふ神

いへる所にて、

ゆく末をいそぐとすれど跡にのみ心をかくるこまがへりかな

大和川にて詠める。

こぐ舟のさほの山べはとほけれど名に流れたるやまと川かな

七月十五日、越後の國府に下著。上杉兼てより長松寺の塔頭貞操軒といへる庵を點して、宿坊に申付け、相摸守路立まで迎へに來たり。七日逗留、毎日色をかへたる遊覽ども侍り。爰を立侍るとて、二首の詠を殘しとゞむ。

千歳へんしるしを見せてこの宿の軒端にたかき松のむらだち

日數へてなれぬる旅のなか宿も名殘はつきじ都ならねど

府中を立ちて長濱といへる所に休みて、

行末のみちをおもへば長はまの眞砂を旅のうきかずにして

柏崎を過ぎけるに、秋風いと烈しく吹きければ、

おしなべて秋風吹けばかしは崎いかゞ葉もりの神は住むらん

あふみ川、かさ島など打過ぎて、鯨波といへる濱を行きけるに、折節鯨の潮吹きけるを

ねりあひ―礪波合、練合

岩くら川―中新川郡常願寺川の一名

すゞみとりて―涼を取りて

うとき―さゝざる

地獄を廻り―地獄廻りとて恐しき地獄の樣を作りたる也

する〳〵と―故障なくやす〳〵と

風波見―風浪どいふ所より有名なる親不知の險

ねりあひといへる里に、野人ども物語りしけるを見て、ある同行にざれこと歌を、

　足よわき老のちからに作ひておきなもこゝにねりあひのさと

岩くら川といへる大川侍り、故郷なる谷近きその名を思ひ出て、

　故郷のやまにちかしとこひわたる岩くら川の影もなつかし

大森といへる所を過ぎけるに、殘暑未だ散じやり侍らねば、吾人木陰にすゞみとりて、

　風はもり照る日はうとき大森のかげに立ちよる初秋のそら

かくて立山禪定し侍りけるに、先づ三途川に到りて、思ひつゞけらる。

　この身にて渡るもうれしみつせ川さりとも後の世には沈まじ

翌日下山の序に、もろ〳〵の地獄を廻りけるに、熱湯の體火炎などとり〴〵に淺ましかりければ、

　しでの山そのしな〴〵や湧き返る湯だまに罪の數を見すらん

禪定する〳〵と遂けて下向し侍る道にて、

　都をば遠くこしぢにかへる山ありとなぐさむ旅のそらかな

宮崎を立ちて、境川、たもの木、風波見、砥並、黒岩などいふ所を打過ぎ、駒がへりと

思ふしるし―三輪の神詠「我庵は三輪の山本戀しくは尋ね来て見よ杉立てる門」の歌による
鞠の庭―蹴鞠の庭にかゝりの木とて柳櫻など植うる也
みちのくの云々―萬葉集「大君の御代安かれとあづまなるみちのく山にこがね花さく」の歌による
くゑのやち―一本くゑのやつ、鹿島郡久江也、「ゑ」は「え」の假名なるべし
八千たび何をくえ―くえ は悔、古今集「さなきだにくいの八千たび悲しきは流るゝ水のかへり来ぬ也」
その名―流れ

叉杉の屋といへる所を通るとて、

待つ人の思ふしるしは見えねどもとはではいかゞ杉のやの里

よつ柳といへる所に、柳のあまた侍りければ、立寄りて、

里人の鞠の庭にはしめねどもいとなつかしきよつやなぎかな

小金森といへる所に、しばらく休みて、

みちのくの山に花さくこがね森この里までもたねやまきけん

藤井といへる所は、浦近き里なりければ、波を見てよめる

浦ちかき宿をしめて春ならぬ藤井のさとも波になれつゝ

くゑのやちといへる所にてよめる。

心からうきすまひにも馴れぬらん八千たび何をくえの里人

石動山に參詣して法樂し奉る。

うごきなきみ世にかはりて石動の山とは神や名づけそめけん

かくて越中國に至り、ながれの森といふ所にて、

年なかばながれの杜に立ちよれば老の涙もその名なりけり

劍―今は鶴來町といふ、白山谷の咽喉に當り、金澤の南四里にあり山間の一驛也

さび―寂れ、錆

伏見云々―「菅原や伏見の里」とて離れぬ地なれどこゝの菅原は伏見なるにはあらずと也、伏見、かりねは縁語也

旅ならぬ身もかりそめの世なりけり憂もつらきもよしや吉岡

下白山といひて、本の白山の麓に、劍といへる所侍り。そのかみ劍とび來しより、此の名をのこしけるとなん。

しら山の雪のうちなる氷こそふもとの里のつるぎなりけれ

今宵は矢矯の里といへる所に宿りけるに、曉の月をながめて、

こよひしも矢はぎの里にゐてぞ見る夏もすゑなる弓張の月

明れば、野の市といへる所を過ぎ行きけるに、村雨に逢ひ侍りて、

風おくる一村雨に虹きえて野の市人はたちもをやまず

津幡といふ里に宿りけるに、住む人も稀にて、殊の外に閑素に侍りければ、

旅人の枕の上におくたちのつばたのさとはさび渡りけり

同じ國高松といへる所に行暮れて、煙のたつをながめやりて、

すむ人のたのむ木蔭やそれならん煙にくるゝ高松の里

これより能登國に到り侍りて、菅原といへる所にて、

伏見にはあらぬ野山を分過ぎて今宵かりねを菅原の里

島に假宮を立てたり

よろこびをくはふる—加賀

妹背山—大和に妹脊山といふがありて、其間を吉野川が流るゝ也

白山禪定—白山に上りて禪定を行へるをいふ、禪定は定に入りて佛道の修行をなすこと

　行き暮れてふめば危きいふり橋いのちかけたる波の上かな

同じ國もとおりを通り侍りけるに、人のきぬを織りけるを見侍りて、

　誰かもと織そめつらんよろこびを加ふる國のきぬのたてぬき

汐ごしの松を尋ね侍りて、

　年なみの外にもたかき汐ごしの松の昔ぞくみて知らるゝ

佛の原といへる所を過ぎ侍るとて、

　わがたのむ佛の原に分け來てぞ行ふ道のかひも知らるゝ

吉野川といへる所にいたりて詠める、

　妹脊山ありとは聞かず爰にしもよし野の河の名に流れつゝ

白山禪定し侍りて、三の室に至り侍るに、雪いと深く侍りければ、思ひ續け侍りける。

　白山の名にあらはれてみこしぢや峯なる雪の消ゆる日もなし

下山の折ふし、夕立し侍りければ、

　ゆふだちの雲はしちねの雪げかな

是より吉岡といへる所に暫く休みて、

つるが—弦、敦賀

しらきと—越前南條郡日野川—に白鬼女（シラキニヨ）川といふ、是れを「しらきと」ともいひしならん

いさしらきと—いさ知らずより地名しらきとに續く

さつきの後—「さつきまつ花立花」などいひて、橘は五月のものとす、上の句は、我もさつきの後に旅立ちて來れる身なりとの意

相馬の將門—相馬は猿島なるべし、將門下總猿

越前國敦賀に著きけるに、浦のけしき面白く侍れば、暫しながめ侍りて、

はるは又たちぞかへらん梓弓つるがの浦のおきつしらなみ

しらきとの橋といへる所にて、里人に尋ね侍れども、答ふる者も侍らずして、

里の名もいさしらきとの橋ばしら立寄りといへば波ぞ答ふる

又同じ並びに、高木の里といへる所に、柳の侍りける蔭に、我人涼みて物語りし侍りける間に、

里のなを名のるたかぎの柳かげ秋かぜしのぶ夕すゞみかな

加賀國にいたり、立花といへる所に宿をかり侍りて、

旅立つもさつきの後の身なりけりわれに宿かせたちばなの里

洲濱川といひて、其の姿さながら庭などに造りたる洲濱に少しも違ひ侍らず、そのまはり四五町にも餘りぬらんか、奇妙なる姿なり。里人の申し侍りしは、相馬の將門作りたりしなど語り侍りき。信用に足らず。

すはま川誰がすみすてし遣水の跡とか見まし庭のおもかげ

これよりしきち、いみなみ打過ぎて、動橋とて危くいぶせき橋に行きかゝりぬ。

曾遊―前遊びたること
老衲―老僧
和韻―客詩
同朋―兄弟弟子
濱ひさぎ―濱楸 楸は梓の類にて幹直立し梢聳くさす
わたなか―海中、海の上
つれなく―昔にかはらず、戀の縁語

遠去二城門一成レ客來　巖房何處擁二蘿苔一　曾遊此地都如レ夢
老衲相迎攀二小臺一

翌日未明に出侍るあひだ、和韻を見るに及ばず、無念の至りなり。行印法印といへる法師侍り、專順法眼が同朋なり。古へ連歌の席にて度々逢ひ侍りき。朽木より供し侍るが、善光寺參詣の望ありなとん。小濱に暫く休みて、波をながめて、彼の法印に申しかけける。

かけ涼し立ちよる波の濱ひさぎ

まさご露けき夏のむらさめ　行印法印

同じ國三方といへる所にて、渺々たる海路をながめやりて、

あま小舟わたなかの浪に漕出でてみかたの海を四方に見る哉

かくて、こひの松原打過ぎて、浦見坂といへる所にて思ひつゞけゝる。

とはゞやなたが世にたれをうらみ坂つれなく殘る戀の松ばら

この所々を打過ぎて、はたおりの池といへる所に休みて、

蟬の羽の衣に夏はのこれども秋の名にたつはたおりのいけ

代もと祈る人の子の爲」の唱和をいふ
蓬蓽—陋屋、自宅の卑稱
柴の庵暫し—西行「いづこにも住まれずば只住まであらん柴の庵のしばしなる世に」
あだし世—定めなき世
伊勢—天照大神
法樂—獻詠
くる—來る、かつらのつるを手操る意の緣語
われ人—我も人も、皆々
申し付け—宿を
順禮—諸國の神佛を巡拜すること

ばかりの名殘さへ、立別るゝは心細きを、あだし世の習ひといひ、身既に老後の事なれば、立歸り住居すべしともたのまれず、池の邊にたゝずみて、

住みなれしこの山水のあはれわが誘はれ出づる行方しらずも

大原まで皆々うち送りに來侍る中に、乘々院法印(常親)神明の拜殿にて、破子など携へ侍りて、數刻興を催し侍りき。此社頭は伊勢にて渡らせ給ひけるとなん。西山の大原を思ひ出でて、神殿に法樂し奉りける。

大原の神はあま照るかげながらたのむはる日もおなじ光りを

葛川を一見して詠める。

しら露の玉まく葛のかつらがはくる秋にしもわれはかへらん

今宵は朽木に泊りて、いつしか故郷も遠ざかりて、われ人心細く侍れば、

うき世をばわたりすてゝも山川や朽木の橋に行きかゝりつゝ

これより若狹國小濱にいたる。曹源院といへる禪院に宿す。兼ねてより武田大膳大夫入道申し付られしとなり。彼の寺は先年順禮の時も立寄りける由申す人あり。よくも覺え侍らず。爰に老僧侍り、聊か文才などあるよし見えければ、筆にまかせて、

思ひやれはじめてかはす言の葉のふじの煙にたぐふものとは

御使を待たせて取りあへず、

ふじのねの雪もおよばずあふぎみる君が言葉の花にたぐへて

禪閤(房嗣)今年は八十五にてましく〱けり。此度の行末樣々留めさせ給ひけれども、我身すでに耳順の齡に及び侍れば、行歩もいよく〱叶ひ難し、かくて徒らに明し暮さん事もそら恐しく侍れば、嚴命に應じ侍らぬ事のみ心苦しく侍れども、既に相定め侍る上は力及ばず。さるほどに馬のはなむけとて、骨肉皆々來り集り給ふ。禪閤より使を賜りて、老屈の仕儀にて合期し難く侍れども、餘りに名殘も切に侍れば、是まで皆々の跡を慕ひ侍るよし承りて、盃酌の席に出で給ふ。やゝありて盃のひまによみて賜ひける歌、

身は老いぬ又あひみんも難ければはけふや限りの別れなるらん

あはれさ肝に銘じて、滿座の老少感涙にたへず。返歌すべきよし侍りしかば、かの在中將が老母、長岡にての故事、ふと心に浮び侍れば、

君がため千世もと祈るしるしあらばさらぬ別れを神も憐れめ

同十六日早朝に、長谷の蓬蓽を立出でて、大原越に趣きけり。年月馴れし柴の庵、暫し

たぐへて―比しては

耳順の齡―六十歳、論語「六十而耳順」

應じ侍らぬ―背く

馬のはなむけ―送別

骨肉―みうちの者

承りて―仰せありて、自他混合せる一種の云ひざま也

在中將が母―伊勢物語「老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まくほしき君かな」「世の中にさらぬ別のなくもがな千

廻國雜記

道興准后

あらまし―豫定
祝著―よろこび
瓦礫―自詠の謙辭
たぐへて―一緒に添へて

（土御門）文明十八年六月上旬の頃、北征東行のあらましにて、公武に暇の事申入れ侍りき。おのおの御對面あり。東山殿（義政）ならびに室町殿（義尚）に於て、數獻これあり。祝著滿足是に過ぐべからず。翌日東山殿へ二首の瓦礫をたてまつる。

　千さとまで思ひへだつなふじのねの煙のすゑに立ち別るとも
　旅衣たつよりしぼるむさし野の露やなみだのはじめなるらん

御返し

　思ひたつ富士のけぶりの末までもへだてぬ心たぐへてぞやる
　立ちかへる程をぞたのむ武藏野のつゆわけ衣はるかなりとも

室町殿此御贈答を聞し召し及び侍りて、下されける。

たのむ―頼む、田の面
とみ―頓、急用
水茎の跡―文字
朱買臣―呉の人家貧にて妻にも捨てられしが、後貴く天子に用ひられ、會稽太守の印綬を懐にして故郷に歸り、家人親戚を驚かす、漢書列傳に出づ

とゞ烈しくなりまされる。懐土の心に催されて、つく／＼と都の方を眺めやる折しも、一行の雁がね、空に消えゆくも哀れなり。

　歸るべき春をたのむの雁がねもなきてや旅の空に出でにし

かゝる程に、神無月の二十日あまりの頃、はからざるにとみの事ありて、都へ歸るべきになりぬ。其の心の中、水茎の跡にも書きながし難し。錦を衣る境は、固より望む所にあらねども、故郷に歸るよろこびは、朱買臣に相似たる心地す。

　ふるさとへ歸る山路の木がらしに思はぬほかの錦をやきん

十月二十三日の曉、既に鎌倉を立ちて都へ赴くに、宿の障子に書きつく。

　なれぬれば都をいそぐ今朝なれどさすが名殘の惜き宿かな

東關紀行終

松の社蓬の寺—神社佛閣
三が二—三分の二
烏瑟—梵語烏瑟膩の略、肉髻と譯す、項上に肉あり髻の形をなす佛相の一
白毫—佛相の一、兩眉の間に白毫あり、光を放つ
十二樓の構—寺の壯麗を崑崙仙宮の十二樓に比す
權化—佛菩薩のかりに人間とあらはれたる者
よすが—よるべ、たより
蘇武、李陵—共に漢書列傳に見えたる有名なる武人

れたる松の社蓬の寺、まち〳〵にこれ多し。其の外由比の浦といふ所に、阿彌陀佛の大佛を造り奉る由語る人あり、やがて誘ひて參りたれば、尊くありがたし。事の起りを尋ぬるに、本は遠江の國定光上人といふものあり。過ぎにし延應の頃より、關東の貴き賤しきを勸めて、佛像を造り堂舍を立てたり。其の功既に三が二に及ぶ。烏瑟高くあらはれて、半天の雲に入り、白毫新にみがきて、滿月の光をかゞやかす。佛は則ち兩三年の功速に成り、堂は又十二樓の構へ望むに高し。彼の東大寺の本尊は、聖武天皇の製作、金銅十丈餘の盧舍那佛なり。天竺震旦にも、類なき佛像とこそ聞ゆれ。此の阿彌陀は、八丈の御長なれば、彼の大佛の半よりもすゝめり。金銅木像のかはりめこそあれども、末代にとりては、此も不思議と謂つべし。佛法東漸の砌に當りて、權化力を加ふるかとありがたく覺ゆ。かやうの事どもを見聞くにも、心とまらずしもはなけれども、文にも暗く武にも缺けて、遂に住みはつべきよすがもなき、數ならぬ身なれば、日を經るまゝには、唯都のみぞ戀ひしき。歸るべき程と思ひしも、空しく過行きて、秋より冬にもなりぬ。蘇武が漢を別れし、十九年の旅の愁、李陵が胡に入りし、三千里の道の思ひ、身に知らるゝ心地す。聞きなれし蟲の音もやゝ弱りはてゝ、松吹く峯の嵐のみぞ、い

宮城野の木の下露は雨にまされり」の歌より取れるか
なにがしのいり—いりの語未詳
殿殿あるか
ひとつ—同じ
玉よする—浦の序詞
九つの云々—九世の末葉
隴山の跡—朗詠集に「隴山雲暗李將軍在家」の句に出て、李廣の故事によりて將軍となりしをいふならん
本社—京都岩清水八幡宮
二階堂—永福寺、其舊跡大塔宮土牢の北方

然も慰むやとて、和賀江の月島、三浦の岬などいふ浦々を行きて見れば、海上の眺望哀れを催して、來し方に名高く面白き所々にもおとらず覺ゆ。

さびしさは過ぎこしかたの浦々もひとつながめの沖の釣ふね

玉よする三浦がさきの波間より出でたる月のかげのさやけさ

抑鎌倉の始めを申せば、故右大將家と聞え給ふ、水の尾の御門の九つの世のはつえふを猛き人にうけたり。去りにし治承の末に當りて、義兵を擧げて朝敵をなびかすより、恩賞頻りに隴山の跡を繼ぎて、將軍のめしを得たり。營館を此の處に占め、佛神を其の砌に崇め奉るより以來、今繁昌の地となれり。中にも鶴岡の若宮は、松柏の緑いよ〳〵しげく、蘋蘩の供かくることなし。陪從を定めて四季の御神樂怠らず、職掌に仰せて、八月の放生會を行はる。崇神のいつくしみ、本社にかはらずと聞ゆ。二階堂は、殊にすぐれたる寺なり。鳳の甍日に輝き、鳧の鐘霜に響き、樓臺の莊嚴より始めて、林池のありどに至るまで、殊に心とまりて見ゆ。大御堂と聞ゆるは、石巖のまびしきをきりて、道場のあらたなるを開きしより、禪僧庵を並ぶ。月おのづから祇宗の觀をとぶらひ、行法座をかさね、風長へに金磬の響をさそふ。然のみならず、代々の將軍以下造り添へら

掛けまくも—口に掛けて申さんも、ゆふだすきは掛けの枕詞
驪山宮—白氏文集「高々驪山上有宮、朱樓紫殿三四重」
錢塘の水心寺—錢塘は今の浙江省杭州府の地、水心寺はその附近の寺なるべし、或は朱嘉徵の詩に「湖心寺」といへるものか
暢臥房—臥は師の誤か、白氏文集に「六月灘聲如猛雨、香山樓北暢師房、夜深起倚欄干立、滿耳潺湲滿面涼」
涙催す—上句「吹きまよふみ山おろしに夢さめて」
みかさ—古今集東歌「みさぶらひみかさと申せ」

かさなれる粧、唐家驪山宮かと驚かれ、巖室石龕の波に臨める影、錢塘の水心寺とも謂つべし。嬉しきたよりなれば、憂き身の行方しるべせさせ給へなど祈りて、法施奉る序に、

　今よりは思ひみだれし蘆の海のふかきめぐみを神にまかせて

此の山も越えおりて、湯本といふ所にとまりたれば、大山颪烈しく打ちしぐれて、谷川漲りまさり、岩瀬の波高く咽ぶ、暢臥房の夜のきゝにも過ぎたり。彼の源氏物語の歌に、涙催す瀧の音かなと云へる、思ひよられて哀れなり。

　それならぬたのみは無きを故郷の夢路ゆるさぬ瀧のおとかな

此の宿をも立ちて、鎌倉に著く日の夕つかた、雨俄に降りて、みかさも取りあへぬ程なり。急ぐ心にのみすゝめられて、大磯江島唐土が原など聞ゆる所々をも、見とゞむるひまもなくて、打過ぎぬるこそ、いと心ならず覺ゆれ。暮れかゝる程に、下り著きぬれば、なにがしのいりとかやいふ所に、あやしの賤が庵を借りてとゞまりぬ。前は道に向ひて門なし、行人征馬簾のもとに行違ひ、後は山近くして窓に臨む。鹿の音蟲の聲、垣の上にいそがはし。旅店の都に異る、さまかはりて心すごし。かくしつゝ明し暮す程に、徒

彼も此も―松も舟も

夜のやどり云々―寢室も異樣にあやしく夜具も無き程なりとの意ならん

縛戎人―白氏文集縛戎人の詩の題をいふ

いとふありか云云―歌はしき宿りのさまは永く心に殘らん

能因入道云々―古事談、袋草紙其他に散見せる有名なる話、本文は主として源平盛衰記の文に因れりと見ゆ、歌は「天下るあらひと神の神ならば雨下し給へ天下る神」但、この本歌は金葉集其他「天の川苗代水にせき下せ天下ります神ならば神」

見わたせば千本の松のすゑ遠みみどりにつゞく波のうへかな

車返といふ里あり。或家に宿りたれば、網釣など營む賤しきものの住家にや、夜のやどりありかことにして、床のさむしろも闕けるばかりなり。彼の縛戎人の夜半の旅寐も、斯くやありけんと覺ゆ。

これぞこの釣するあまの苫びさしいとふありかや袖に殘らん

伊豆の國府に到りぬれば、三島の社の御しめ內拜み奉るに、松の嵐こぐらくおとづれて、庭の氣色も神さびわたれり。此の社は、伊豫の國三島大明神を遷し奉ると聞くにも、能因入道伊豫守實綱が命によりて、歌よみて奉りけるに、炎旱の天より雨暴に降りて、枯れたる稻葉も、忽に綠にかへりける、現人神の御名殘なれば、ゆふだすき掛けまくもかしこく覺ゆ。

せきかけし苗代みづのながれ來てまたあまくだる神ぞこの神

限りある道なれば、此の砌をも立出でて、猶行き過ぐる程に、筥根の山にも著きにけり。岩が根高くかさなりて、駒もなづむばかりなり。山の中に至りて湖廣く湛へり、筥根の湖と名づく。又蘆の湖といふもあり。權現垂跡の基、けだかく尊し。朱樓紫殿の雲に

何なる故にかと覺束なし。

富士の嶺のかぜにたゞよふ白雲を天津乙女のそでかとぞ見る

浮島が原は、何處よりもまさりて見ゆ。北は富士の麓にて、西東へ遙々と長き沼あり、布を引けるが如し。山の緑影を浸して、空も水もひとつなり。蘆刈小舟所々に棹さして、群れたる鳥多くさわぎたり。南は海の面遠く見わたされて、雲の波煙の波いと深き眺なり。すべて孤島の眼に遮るなし。纔に遠帆の空につらなれるを望む。此方彼方の眺望、何れもとり〴〵に心細し。原には鹽屋の煙絶え〴〵立ちわたりて、浦風松の梢に咽ぶ。此の原昔は海の上に浮びて、蓬萊の三の島の如くにありけるによりて、浮島となん名づけたりと聞くにも、自から神仙の棲家にもやあらん、いとゞ奥ゆかしく見ゆ。

影ひたす沼の入江に富士のねのけぶりも雲もうきしまがはら

やがて此の原につぎて、千本の松原といふ所あり。海の渚遠からず、松遙かに生ひ渡りて、緑の蔭きはもなし。沖には舟ども行違ひて、木の葉の浮けるやうに見ゆ。彼の「千株の松下雙峯寺、一葉の舟中萬里身」と作れるに、彼も此もはづれず、眺望いづくにも勝りたり。

孤島云々—海上ひろ〴〵として一つの島だになし

蓬萊の三の島—史記に「海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛洲、僊人居之」

きは—際涯

千株云々—白樂天香山寺隱居中の句にて、朗詠集山寺に出づ

かけても思はざりし—思ひも掛けざりし、かけても は雫の縁語
待ちつけん—待ちあはせん
さむしろ—寒き狭筵
隠士—白樂天
衣を片しきて—相手なしで獨りねるをいふ
時わかぬ雪—年中時の見さかひもなく降る雪
なべて—凡て、そつくり
こよなう—このうへなくまさりて
富士の山の記—本朝文粹十二に出づ

に出でぬ。釘が崎といふなる荒磯の、岩のはざまを行過ぐる程に、沖津風烈しきに、打ちよする波もひまなければ、急ぐ汐干の傳ひ道、かひなき心地して、ほすまもなき袖の雫までは、かけても思はざりし旅の空ぞかしなど、打ち眺められつゝ、いと心細し。

　沖津風けさあらいその岩づたひ波わけごろもぬれ〳〵ぞ行く

神原といふ宿の前を打通る程に、後れたるもの待ちつけんとて、或家に立入りたるに、障子に物を書きたるを見れば、

　旅ごろもすそ野の庵のさむしろに積るもしろき富士のしら雪

といふ歌なり。心ありける旅人のしわざにやあるらん。昔香爐峯の麓に、庵をしむる隠士あり、冬の朝簾をあけて、峯の雪を望みけり。今富士の山のあたりに、宿を借る行客あり、さゆる夜衣を片しきて、山の雪を思へる、彼も此も共に心すみて覺ゆ。

　さゆる夜に誰こゝにしも臥しわびて高嶺の雪を思ひやりけん

田子の浦に打出でて、富士の高嶺を見れば、時わかぬ雪なれども、なべて未だ白妙にはあらず、青うして天によれる姿、繪の山よりもこよなう見ゆ。貞觀十七年の冬の頃、白衣の美女二人ありて、山の頂に並び舞ふと、都良香が富士の山の記に書きたり。如

空にうかれしたまぼこ—空にうかれし魂より玉鉾といふ道の枕詞に續けたる也
過ぎうくて—景に見とれて行き過ぎ難く
思出—後に思出す材料
清原滋藤云々—源平盛衰記二十三の文に因る、そこには寒の字冷に作る
せきとは知らで—今は昔の關の跡もなければ
まろぶし—ごろね

見るには、いと哀れに覺ゆ。

哀れにも空にうかれし玉ほこの道のべにしも名をとゞめけり

清見が關も過ぎうくて、須臾やすらへば、沖の石むら〳〵汐干にあらはれて波に咽び、磯の鹽屋ところ〳〵風にさそはれて、煙たなびけり。東路の思出ともなりぬべきわたりなり。昔朱雀天皇の御時、將門といふ者、東にて謀反おこしたりけり。之を平げんために、民部卿忠文を遣しける。此の關に到りて止まりけるが、清原滋藤といふもの、民部卿に伴ひて、軍監といふつかさにて行きけるが、「漁舟の火の影は寒くして波を燒き、驛路の鈴の聲は夜山を過ぐ」といふ、唐の歌を詠じければ、民部卿涙を流しけると聞くにも哀れなり。

清見潟せきとは知らで行く人も心ばかりはとゞめおくらん

此の關遠からぬ程に、興津といふ浦あり。海に向ひたる家に宿りて侍れば、磯邊に寄する波の音も、身の上にかゝるやうに覺えて、夜もすがら寐られず。

清見潟いそべ（興津イ）に近きたびまくら（いはまくらイ）かけぬ波にも袖はぬれけり

今宵は更にまどろむ間だになかりつる、草の枕のまろぶしなれば、寐覺ともなき曉の空

にも出せり

せにせん—最頂上とせん

梶原—景時

年々に—古事談に「顯基中納言（中略）爲常之時常詠白樂天詩古墓何世人、不知姓與名、化爲道傍土、年々春草生」

羊大傅—羊祜字は叔子、民人悉く其德に化し、死後其碑を望む者涕泣せざるなく、杜預困つて墮涙碑と名づく

かたへ—傍輩

ひとまども—一先づ

黃河—黃瀬河の誤か、中鑑に依れば狐崎

さしあたりて—今眼前に

と詠める、心とまりて覺ゆれば、其の傍に書きつけし、

　我もまたこゝをせにせん宇津の山分きて色あるつたのした露

猶打過ぐる程に、或木蔭に石を高く積みあけて、目にたつさまなる塚あり。人に尋ぬれば、梶原が墓となん答ふ。道の側の土になりにけりと見ゆるにも、顯基中納言の口ずさみ給へりけん、年々に春の草のみ生ひたりと云へる詩、思ひ出でられて、是も亦舊き塚となりなば、名だにも殘らじと哀れなり。羊大傅が跡にはあらねども、心ある旅人は、此處にも涙をや落すらん。かの梶原は、將軍二代の恩に驕り、武勇三略の名を得たり。傍に人なくぞ見えける。如何なることにかありけん、かたへの憤深くして、忽に身を亡すべきになりにければ、ひと晌も延びんとや思ひけん、都の方へ馳上りける程に、駿河の國黃河といふ所にて討れけりと聞きしが、さは此處にてありけるよと、哀れに思ひ合せらる。讃岐の法皇配所へ赴かせ給ひて、彼の志度といふ所にて崩れさせ御座しける御跡を、西行修行の序に見參らせて、

　よしや君むかしの玉のゆかとてもかゝらん後は何にかはせん

と詠めりけるなど承るに、まして下ざまの者のことは申すに及ばねども、さしあたりて

思ひ入りたる―深く思ひ込みたる

堪へたる―堪能なる、達したる

苦行―易行とあるべきか

叔齊―兄伯夷と共に周の粟を食ふを恥ぢて首陽山に蕨をとりて食ひ、遂に餓死せる有名の人

許由―堯天下を己に禪らんとすと聞きて耳を潁水に洗ひ、去つて箕山に隱る、常に手にて水を掬べるを、人一瓢を遺しゝが、それを樹に掛け置きて風に鳴りしを煩しがり取捨てし事、高士傳に出で徒然草

一人の僧あり、畫像の阿彌陀佛を掛け奉りて、淨土の法文などを書けり。其の外に更に見ゆる物なし。發心の始めを尋ね聞けば、我が身はもと此の國のものなり、さして思ひはなれイ入りたる道心も侍らぬうへ、其の身堪へたるかたなければ、理を觀ずるに心闇く、佛を念ずるに性懶し、難行苦行の二つの道ともに缺けたりと雖も、山の中に眠れるは、里に在りて勤めたるに勝れる由、或人の敎につきて、此の山に庵を結びつゝ、數多の年月を送る由を答ふ。昔叔齊が首陽の雲に入りて、猶三春の蕨を採り、許由が潁水の月にすみし、自から一瓢の器をかけたりと云へり。此の庵のあたりには、殊更煙立てたるよすがも見えず、柴折りくぶる慰めまでも、思ひ斷えたるさまなり。身を孤山の嵐の底にやどして、心を淨域の雲の外にすませる、言はねどしるく見えて、なかなかあはれに心にくし。

世をいとふ心のおくや濁らましかゝる山邊のすまひならでは

此の庵のあたり、幾程遠からず、峠といふ所に到りて、大きなる卒塔婆の年經にけると見ゆるに、歌ども數多書きつけたる中に、

吾妻路はこゝをせにけん宇津の山あはれも深しつたのした道

あと千歳―誰の跡はいつ迄も殘る、源平盛衰記に「水茎の跡は千代もありなんとは是やらんと」

一筋ならず―幾筋も〳〵

すながし―洲流、今すみながしといふものにて衣裁蒔繪等の仕方の稱

紅葉みだれて―古今集「龍田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなん」

業平が云々―伊勢物語に「京にその人の許にとて文書きてつく」とあるをいふ

さへ、跡なくなりにけるこそ、はかなき世の習ひ、いと哀に悲しけれ。

書きつくる形身も今はなかりけりあとは千歳と誰かいひけん

菊川を渡りて、幾程もなく、一村の里あり、こはまとぞいふなる。此の里の東のはてに、少し打登るやうなる奥より、大井川を見わたしたれば、遙々と廣き河原の中に、一筋ならず流れ分れたる川瀬ども、とかく入りちがひたるやうにて、すながしといふものをしたるに似たり。なか〳〵渡りて見んよりも、よそめ面白く覺ゆれば、彼の紅葉みだれて流れけん龍田川ならねども、しばしやすらはる。

日數ふる旅のあはれはおほゐ川わたらぬ水もふかき色かな

前島の宿を立ちて、岡部の今宿を打過ぐる程、片山の松の陰に立寄りて、餉など取出でたるに、嵐冷じく梢に響きわたりて、夏のまゝなる旅衣、うすき袂も寒く覺ゆ。

これぞこのたのむ木のもと岡部なる松のあらしよ心して吹け

宇津の山を越ゆれば、蔦楓は茂りて、昔の跡絶えず。彼の業平が修行者にことづてしけん程は、何處なるらんと見行く程に、道の邊に札を立てたるを見れば、無緣の世捨人ある由を書けり。道より近きあたりなれば、少し打入りて見るに、僅なる草の庵の中に、

の目うつりなからずば、是も心とまらずしもあらざらましなどは覺えて、

浪のおとも松の嵐もいまの浦にきのふの里の名殘りをぞ聞く

事の儘と聞ゆる社おはします。其の御前を過ぐとて、聊思ひつゞけられし。

ゆふだすきかけてぞ頼む今思ふことのまゝなる神のしるしを

小夜の中山は、古今集の歌に、横をり臥せると詠まれたれば、名高き名所なりとは聞き置きたれども、見るにいよ〳〵心細し。北は深山にて、松杉嵐烈しく、南は野山にて、秋の花露稠し。谷より嶺に移る道、雲に分け入る心地して、鹿の音涙を催し、蟲の恨み哀れ深し。

踏み通ふみねのかけはしとだえして雲にあととふ小夜の中山

此の山をも越えつゝ、猶過ぎ行く程に、菊川といふ所あり。去し承久三年の秋の頃、中御門中納言宗行と聞えし人の、罪ありて東へ下られけるに、此の宿にとまりけるが、「昔は南陽縣の菊水、下流を汲みて齡を延ぶ。今は東海道の菊川、西岸に宿して命を失ふ」と、或家の柱に書かれたりけりと聞きおきたれば、いと哀れにて、其の家を尋ぬるに、火のために焼けて、彼の言の葉も殘らずと申すものあり。今は限りとて殘し置きけんかたみ

は今も今の浦と呼ぶ

事の儘—神名帳「達江國佐野郡己等之麻知神社」

ゆふだすき—木綿襷、かけての序、かけては堅くあてにしての意

横をり臥せる—古今集東歌「甲斐根をさやも見しがけゝれなく横をりふせる佐夜の中山」

宗行云々—事は東鑑承久三年七月の條に詳也

堂を造るべき由、心の中に申し置きて侍りけり、鎌倉にて望む事叶ひけるによりて、御堂を造りけるより、人多く參るなんとぞいふなる。聞きあへず其の御堂へ參りたれば、不斷香の煙、風にさそはれうち薫り、あかの花も露鮮なり。願書とおぼしきもの、斗帳の紐に結びつけたれば、弘誓の深きこと海の如しと云へるも、頼母しく覺えて、

頼母しな入江に立るみをつくし深きしるしのありと聞くにも

天龍と名づけたる渡あり、川深く、流はげしく見ゆ。秋の水張り來て、舟の去ること速かなれば、往還の旅人、容易く向ひの岸に著き難し。此の川水まされる時、舟なども自から覆りて、底の水屑となる類多かりと聞くこそ、彼の巫峽の水の流れ思ひよせられて、いと危き心地すれ。然はあれども、人の心に比ぶれば、靜なる流ぞかしと思ふにも、喩ふべき方なきは、世に經る道の嶮しき習ひなり。

此の川のはやき流れも世の中の人のこゝろのたぐひとは見ず

遠江の國府今の浦に著きぬ。此處に宿借りて、一日二日止りたる程、海人の小舟に棹さしつゝ、浦のありさま見めぐれば、潮海湖の間に洲崎遠く隔りて、南には極浦の波袖を濕し、北には長松の嵐心を傷ましむ。名殘多かりし橋本の宿にぞ相似たる。昨日

…の心願

聞きあへず—其話を聞きおほせぬ内に

あかの花—閼伽は水の梵語、佛前に供へたる花の意ならん

弘誓の云々—法華經「弘誓深如海、歴劫不思議」

みをつくし—澪標、水脈を示すため水中に立つる木標

巫峽の水—白氏文集太行路「巫峽之水能覆舟、若比君心是安流」

國府—見附と稱する一小町也

今の浦—今は一面の田となり、海は遠く南方二里に去れり、名

一夜—昔一度
君—遊女
夜もすがら—朗詠三善宰相「向晚簾頭生白露、終宵床底見青天」
心にくゝ—奥ゆかしく
舞澤—今の舞坂也、眞淵の考照岡部日記に見ゆ
たまらず—漏りて
此の本意—今度鎌倉に下る所以

　行きとまる旅籠はいつも變らねどわきて濱名の橋ぞ過ぎうき

さても此の宿に、一夜とまりたりし宿あり。軒ふりたる萱屋の、所々まばらなる隙より、月の影曇りなくさし入りたる折しも、君ども數多見えし中に、少しおとなびたるけはひにて、「夜もすがら床の下に晴天を見る」と、忍びやかに打ち詠じたりしこそ、心にくゝ覺えしか。

　言の葉の深きなさけは軒端もる月のかつらの色に見えにき

名殘多く覺えながら、此の宿をも打ち出でて、行き過ぐる程に、舞澤の原といふ所に來にけり。北南は渺々と遙にして、西は海の渚近し。錦花繡草の類は、いとも見えず、白き眞砂のみありて、雪の積れるに似たり。其の間に松絕え〴〵生ひわたりて、潮風梢におとづれ、又あやしの草の庵所々見ゆる、漁人釣客などの栖にやあるらん。末遠き野原なれば、つく〴〵と眺め行く程に、打連れたる旅人の語るを聞けば、何時の頃よりとは知らず、此の原に木像の觀音おはします、御堂など朽荒れにけるにや、かりそめなる草の庵の中に、雨露もたまらず年月を送る程に、一年望む事ありて、鎌倉へ下る筑紫人ありけり、此の觀音の御前に參りたりけるが、若し此の本意を遂げて故里へ向はゞ、御

豊川といふ宿の前を打ち過ぐるに、或るもののいふを聞けば、此の道をば、昔よりよくるかた無かりし程に、近頃より、俄に渡津の今道といふ方に、旅人多くかゝる間、今は其の宿は、人の家居をさへ外にのみ移すなどぞいふなる。舊きを捨てゝ新しきに就く習ひ、定まれることと云ひながら、如何なる故ならんと覺束なし。昔より住みつきたる里人の、今更ゐうかれんこそ、彼の伏見の里ならねども、荒れまく惜しく覺ゆれ。

　おぼつかないざ豊川のかはる瀬を如何なる人の渡りそめけん

參河遠江の境に、高師の山と聞ゆるあり。山中に越えかゝる程に、谷川の流れ落ちて、岩瀨の波ことぐ\しく聞ゆ。境川とぞいふ。

　岩づたひ駒うちわたす谷がはの音もたかしの山にきにけり

橋本といふ所に行き著きぬれば、聞きわたりし甲斐ありて、氣色いと心すごし。南には潮の海あり、漁舟波に浮ぶ。北には湖水あり、人家岸に連れり。その間に洲崎遠くさし出でて、松きびしく生ひつゞき、嵐しきりに咽ぶ。松の響波の音、何れと聞き分け難し。行く人心を傷ましめ、泊る類夢を覺さずといふことなし。湖に渡せる橋を濱名と名づく。舊き名所なり。朝立つ雲の名殘、何處よりも心細し。

よくる方云々—必ず經由すべき道なりしが

ゐうかれん—其所に居著かずして他にさすらひ出で

伏見の里云々—古今集「いざここに我世は經なん菅原や伏見の里のあれまくもをし」

聞きわたりし—久しく評判に聞き居たりし

きびしく—びつしりと繁く

泊る類—泊る程の人、

集其他に散見せり
はむのが原ー本野原
槃甸の一千餘里ー朗詠に「秦甸一千餘里凜々氷鋪、漢家之三十六宮澄々粉飾」
かつ〴〵ー不十分ながら、まア〱兎に角
歌ー詩經召南當に「蔽芾甘棠、勿レ翦勿レ伐、召公所レ茇」
彼の前の司ー秦時

茂れる篠原の中に、數多踏み分けたる道ありて、行末も迷ひぬべきに、故武藏の前司（泰時）道のたよりの輩に仰せて、植ゑ置かれたる柳も、未だ蔭と頼むまではなけれども、かつ〴〵まづ道のしるべとなれるも哀れなり。唐土の召公奭は、周の武王の弟なり。成王の三公として、燕といふ國を司りき。陝の西の方を治めし時、一つの甘棠のもとを占めて、政を行ふ時、官人より始めて庶の民に至るまで、そのもとをうしなはず、あまねく又人の患をことわり、重き罪をもなだめけり。國民擧りて其の德政を忍ぶ。故に召公去りにし後までも、彼木を敬ひて敢て伐らず、歌をなん作りけり。後三條天皇東宮にておはしましけるに、學士實政任國に赴く時、「州の民は縱令ひ甘棠の詠をなすとも、忘るゝこと勿れ多くの年の風月の遊」といふ御製を賜はせたりけるも、此の心にやありけん、いみじく辱なし。彼の前の司も此の召公の跡を追ひて、人をはぐくみ物を憐むあまり、道の邊の往還の蔭迄も思ひよりて植ゑおかれたる柳なれば、之を見ん輩、皆彼の召公を忍びけん國の民の如くに、惜みそだてゝ、行末の蔭と頼まんこと、その本意は定めて違はじとこそ覺ゆれ。

植ゑおきし主なきあとの柳原なほその蔭を人やたのまん

玉くしげ—蓋、み、あけ等に掛る枕詞
在原業平云々—伊勢物語に出づ、かれいひはほしいひ
彼草—かきつばた
源義種—義は繁の誤、又本文の事は拾遺和歌集に「源のよしたねが參河の介にて侍りけるむすめのもとに母のよみ遣しける」とあり、本文のとまりける女は都に止まり殘りし女の意なれど、其誤なる事此序によりて知るべし
女—源平盛衰記に「遊君力壽」といへり、大江定基との事、今昔物語、古今著聞

玉くしげ二村山のほの〴〵と明けゆくすゑは波路なりけり

行き〳〵て、三河の國八橋のわたりを見れば、在原業平杜若の歌よみたりけるに、皆人かれいひの上に涙落しける所よと思ひ出でられて、其のあたりを見れども、彼草と思しきものは無くて、稻のみぞ多く見ゆる。

花ゆゑに落ちし涙のかたみとや稻葉の露をのこしおくらん

源義種が、この國の守にて下りける時、とまりける女の許に遣はしける歌に、

もろともに行かぬ三河の八橋を戀ひしとのみや思ひわたらん

と詠めりけるこそ、思ひ出でられて哀れなれ。矢矧といふ所を出でて、宮路山越え過ぐる程に、赤坂といふ宿あり。此處に在りける女ゆゑに、大江定基が家を出でけるも、哀れに思ひ出でられて、過ぎ難し。人の發心する道、その緣一にあらねども、飽かぬ別を惜みし迷ひの心をしもしるべとし、誠の道に赴きけん、有り難く覺ゆ。

別れ路に繁りもはてゞ葛の葉のいかでかあらぬ方にかへりし

ほむのが原に打ち出でたれば、四方の望かすかにして、山なく岡なし。秦甸の一千餘里を見わたしたらん心地して、草土共に蒼茫たり。月の夜の望、如何ならんと床しく覺ゆ。

八雲たつ—いつも八重垣妻籠に八重垣つくる其八重垣を

願文—本朝文粋巻十三に出づ

なるみ潟—成る、鳴海潟

まり行く聲々も、心すごく聞ゆ。或人の曰く、この宮は素盞男尊なり、初は出雲の國に宮造りありけり、八雲立つと云へる大和言葉も、此より始まりけり、その後景行天皇の御代に、この砌に跡を垂れ給へりと云へり。また曰く、此宮の本體は、草薙と號し奉る神劍なり、景行の御子、日本武尊と申す、夷を平げて歸り給ふ時、尊は白鳥となりて去り給ふ、劍は熱田に止り給ふとも云へり。一條院の御時、大江匡衡といふ博士ありけり。長保の末に當りて、當國の守にて下りけるに、大般若を書きて、この宮にて供養を遂げける願文に、「吾が願既に滿ちぬ、任限亦滿ちたり。故郷に歸らんとする期、未だ幾何ならず」と書きたるこそ、哀れに心細く聞ゆれ。

　思出のなくてや人のかへらまし法のかたみを手向けおかずば

此宮を立ち出でて、濱路に赴く程、有明の月影ふけて、友なし千鳥時々おとづれわたれる、旅の空の愁、すゞろに催して、哀れかた〴〵深し。

　故郷は日を經てとほくなるみ潟いそぐ潮干のみちぞくるしき

やがて夜の中に、二村山にかゝりて、山中などを越え過ぐる程に、東やう〳〵白みて、海の面遙かにあらはれわたれり。波も空もひとつにて、山路に續きたるやうに見ゆ。

まりて、夜更る程に、川端に立ち出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀬にうつろひて、照る月なみも數見ゆばかり澄みわたれり。二千里の外の故人の心、遠く思ひやられて、旅の思ひいとゞおさへ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、「花洛を出でて三日、株瀬川に宿して一宵、しば〳〵幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ、かつ〴〵遠情を先途一千里の雲に送る」など、或家の障子に書附くる序に、

知らざりき秋のなかばの今宵しもかゝる旅寐の月を見んとは

萱津の東宿の前を過ぐれば、そこらの人集りて、里も響くばかりに罵りあへり。今日は市の日になん當りたるとぞいふなる。往還のたぐひ、手毎に空しからぬ家土産も、彼の見てのみや人に語らんと詠める、花のかたみには樣變りて覺ゆ。

はなならぬ色香も知らぬ市人のいたづらならで歸る家づと

尾張の國熱田の宮に到りぬ。神垣のあたり近ければ、やがて參りて拜み奉るに、木立年ふりたる森の木の間より、夕日の影たえ〴〵さし入りて、朱の玉垣色を變へたるに、木綿しで風に亂れたることがら、物に觸れて神さびたる中にも、塒あらそふ鷺群の、數も知らず梢に來居るさま、雪の積れるやうに見えて、遠く白きものから、暮行くまゝに靜

照る月なみ―拾遺「水の面に照る月波を數ふれば今宵ぞ秋のもなかなりける」に取る

二千里云々―白樂天「三五夜中新月色、二千里外故人心」故人は舊き友人

見てのみや人に語らん―「櫻花手ごとに折りて家づとにせん」古今集

木綿しで―垂れ下れる御幣

ことがら―事柄、有樣

霜にかはらん行末も、はかなく移る月日なれば、遠からず覺ゆ。

　かはらじな我がもとゆひにおく霜も名にしおひその森の下草

音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の下の岩根より、流れ出づる清水、あまり涼しきまで澄みわたりて、實に身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ち寄りて涼みあへり。班婕妤が團雪の扇、秋風にかくて暫し忘れぬれば、末遠き道なれども、立ち去らんことは物憂くて、更に急がれず。彼の西行が、

　道のべに清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立ちとまりつれ

と詠めるも、斯樣の所にや。

　道のべの木陰の清水むすぶとてしばし涼まぬ旅人ぞなき

柏原といふ所を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底におとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、哀れに心細し。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板廂年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の、荒れにし後はたゞ秋の風と詠ませ給へる歌、思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、いやしき言の葉を殘さんもなかなかに覺えて、此處をば空しく打ち過ぎぬ。株瀬川といふ所にと

爐条雪撥」篇看これよる

はかなく移る月日なれば―挿入の副詞句、行末の遠からずと續けて心得べし

おひそ―負ふ、老曾

班婕妤が云々―涼しき風に扇も暫し忘れしといふ迄也、團雪の句班婕妤の作怨歌行より出で、朗詠にも「班婕妤團雪之扇代岸風」「兮長忘」の句見ゆ

荒れにし云々―上句「人すまぬ不破の關屋の板廂」新古今

風情も云々―趣ある歌思も生じ難ければ

南山の影―新撰朗詠、白氏の句「影浸南山青滉瀁、波沈西日紅涸淪」

基手―歌のちらし書き

飛鳥の川の淵瀬―古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日の瀬になる」

七の翁云々―古今著聞集巻五に見えたる、承安二年三月十九日前大宮大進清輔朝臣、寶莊嚴院にて行へる和歌の尚齒會の事にて、本文の歌は古今集雜にあり、その會の時宮内のかみが取りて詠したる也

遺愛寺の云々―朗詠に取りたる白氏の句「遺愛寺鐘欹枕聽、香

こそとまりけるが、今は打ち過ぐる類のみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變り行く世の習ひ、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけめと覺ゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより荒れのみまさる野路の篠原

鏡の宿に到りぬれば、昔七の翁の寄合ひつゝ、老をいとひて詠みける歌の中に、

鏡山いざ立ちよりて見て行かん年へぬる身は老いやしぬると

といへるは、この山のことにやと覺えて、宿も借らまほしく覺えけれども、猶奥ざまに訪ふべき所ありて、打ち過ぎぬ。

立ち寄らで今日は過ぎなん鏡山知らぬおきなの影は見ずとも

行き暮れぬれば、むさ寺といふ山寺のあたりにとまりぬ。まばらなるとこの秋風、夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空におとづれて、彼の遺愛寺の邊の草の庵の寐覺も、かくやありけんと哀れなり。行末遠き旅の空、思ひつゞけられて、いといたう物悲し。

都出でて幾日もあらぬ今宵だにかたしきわびぬ床のあき風

此宿を出でて、笠原の野原打ち通る程に、老曾の森といふ杉村あり。下草深き朝露の、

書に蟬丸の詠として「逢坂の關の嵐のはげしきにしひてぞ居たる世を過すとて」
延喜の第四の宮―同書に「敦實の式部卿の宮の雜色にてなんありける、其宮は宇多法皇の御子」とあるより來れる誤傳
今日を―榮花物語及び千載集には「今は」
滿誓沙彌云々―萬葉集「世の中は何に喩へん朝開きこぎいにし船のあとの白浪」比叡山にて云々は袋草紙に「惠心院にて」とあるを誤れるか
ところせし―一ぱいに置きたり、びつしよりと濡れたり

皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮を造られけりと聞くにも、此の程は舊き皇居の跡ぞかしと覺えて、哀れなり。

さゝ波や大津の宮のあれしより名のみ殘れる志賀のふるさと

曙の空になりて、勢多の長橋うちわたす程に、湖遙かにあらはれて、彼の滿誓沙彌が、比叡山にて、此の海を望みつゝ詠めりけん歌、思ひ出でられて、漕ぎ行く船の跡のしら波、誠にはかなく心細し。

世の中を漕ぎ行く船によそへつゝ眺めしあとをまたぞ眺むる

此の程をも行き過ぎて、野路といふ所に到りぬ。草の原露しげくして、旅衣いつしか袖の雫ところせし。

あづま路の野路の朝露けふやさは袂にかゝるはじめなるらん

篠原といふ所を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見えわたる。向ひの汀、綠深き松の群立ち、波の色もひとつになり、南山の影をひたさねども、靑くして滉瀁たり。洲崎所々に入り違ひて、葦蒲など生ひわたれる中に、鴛鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。都を立つ旅人、此の宿に

野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽なる砌に至る每に、目に立つ所々、心とまるふしぶしを書き置きて、忘れず忍ぶ人もあらば、自ら後のかたみにもなれとてなり。

東山の邊なる住家を出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒引きわたる望月の頃も、漸く近き空なれば、秋霧立ちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿附鳥かすかにおとづれて、遊子猶殘月に行きけん、函谷のありさま思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關の邊に藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心をすまし、大和歌を詠じて思ひを述べけり。嵐の風烈しきをわびつゝぞ過ぐしける。或人の曰く、蟬丸は延喜第四の宮にておはしける、故に此の關のあたりを、四ノ宮河原と名づけたりと云へり。

いにしへのわらやの床のあたりまでこゝろをとむる逢坂の關

東三條院（圓融院女御詮子）石山に詣でて還御ありけるに、關の清水を過ぎさせ給ふとて、詠ませ給ひける御歌、

あまたゝび行きあふ坂の關水に今日をかぎりの影ぞかなしき

と聞ゆるこそ、如何なりける御心の中にかと、哀れに心細けれ。關山を過ぎぬれば、打出の濱粟津の原なんどきけども、未だ夜のうちなれば、定かにも見わからず。昔天智天

意にせし故事

陶潜五柳―陶淵明宅邊に五柳樹あり自ら五柳先生傳を作る、貧素の生活をいふ

山かさなり―朗詠の「山重江深」の句にとる

駒引きわたる―八月十五日（後には十六日）信濃の勅旨牧の馬を六十疋朝廷に奉るをいふ、古今集貫之「逢坂の關の清水に影見えて今やひくらん望月の駒」

木綿附鳥―鷄

遊子云々―孟嘗君の故事

蟬丸―逢坂の關に住みし盲人、琵琶の名手にて其博雅三位との關係今昔物語に見ゆ

嵐の風云々―同

徒に云々―こゝにありても只空しく明し暮すのみにて別段に爲出づる事もなきのみならず、又格別どこを一生の住みはて所と定めたるにてもなき有樣なれば
白樂天の云々―白氏文集送蕭士遊黔南詩の句「身似浮雲鬢似霜」
金帳七葉の榮―金帳は張の誤、金日磾と張安世との族七代榮華を

東關紀行

源親行

齡は百歳の半に近づきて、鬢の霜漸く冷しと雖も、爲す事なくして、徒に明し暮すのみにあらず、さして何處に住みはつべしとも、思ひ定めぬありさまなれば、彼の白樂天の、身は浮雲に似たり、首は霜に似たりと書き給へる、哀に思ひ合せらる。固より、金帳七葉の榮を好まず、たゞ陶潛五柳のすみかを求む。然はあれども、深山の奥の柴の庵までも、しばらく思ひやすらふ程なれば、怱に都の邊に住ひつゝ、人なみに世に經る道になん列れり。是即ち身は朝市にありて、心は隱遁にある謂れなり。かゝる程に、思はぬ外に、仁治三年の秋八月十日あまりの頃、都を出でて、吾妻へ赴くことあり。まだ知らぬ道の空、山かさなり、江かさなりて、杳々遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、屢前途の極りなきに進む。終に十餘りの日數を經て、鎌倉に下り著きし間、或は山館

海道記終

南浮—南閻浮提の略、吾人の住する世界の總稱

狂言—たはむれの言葉、「狂言綺語の戯も讃佛乘の因」

順逆の二緣—順緣と逆緣、悟道に至る積極的の與件と消極的の與件

はじめとする人、此時に生れて此緣にあひたり。故に慈父の長者は貧しき子供の爲に福德の經を說いて、化一切衆生とこしらへ、みな皆令入佛道とよろこび、悲母の教主はよわき子どもの爲に誓願を發して、此願不滿足と舌を拭ひ、誓不成正覺と口をはく。こゝに知ぬ、此南浮は西方の出門なりといふことを。道心はたとひ堅からずとも、慙悔の箒をつかねて常に心を清めん。然らば則さくら花枝にこもり、春の候を迎へて開きなんとす。佛種胸にうづもれ、終のときに臨みて宜しくきざすべし。抑これは羇中の景趣にあらず、存外のあさき狂言なり。然り而して魚にあらずば魚の心を知るべからず、我にあらずば我志を悟るべからず。駿蹄の千里に馳するも、駑駘の咫尺に蹇ぐも、志のゆくほどは至る所違はず。大鳳の雲にかけるを羨みて、小鳥の籠に遊ぶばかりなり。此品家を出でし始、道に入りしとき、身のあはれに催されて、人の嘲をかへりみず、愚懷のために是を記す。他興の爲にこれを書かず。あざける人、あはれむ人、順逆の二緣ともに一佛土に生れて、一切衆生をすくはんとなり。

開くべき胸のはちすのたぐひには春まつ花のえだにこもれる

かはらじな濁るもすむも法の水ひとつ流れと汲みてしりなば

電泡の身―いなづまの如く又水のあわの如きはかなき身

四生―卵、胎、濕、化の四種生をいふ

六趣―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上

敎木龜眼―法華經の「如一眼之龜値浮木孔」の語に依るにや

たゞに―眞心に念せず聞かず只空に

當來―來世

べからず、電泡の身にはいくばくの歎ぞや。樂めども慠るべからず、幻化の世にはいくばくのあやまりぞや。たのしみは大驕慢のあたなり、仇はすなはち惡趣に引落す。貧は又道心のさまたけならず、則ち善所に引上げ、たのしみは先生の怨敵なり、貪著身を縛りて四生の牢獄にこむ。貧は今生の知識なり、愛欲心をゆるして三界の樊籠を出す。此故に世を厭ふ人は、沙門となづけて樂しめる人とす。我等八苦の病は重けれども、念佛の藥に癒へぬべし。名利の敵はうかゞふとも、非人の身を敵とせし、上界天人の快樂も心にくからず。過去生々に幾度かうけたる、國王大臣の果報もうらやましからず。流來世々のいくたびか得たる六趣の栖は、疎みはてたる所なり。九品の宮こそ未だ見ねば戀しけれ。こひ〳〵ば誰か參らざるべき。たま〳〵人身をうけたるは、梵天の糸に針をつけ得たる時なり。佛法の敎木龜眼の語に信じ得る時なり。是だにもありがたしと思はば、十方佛土に又二つなき一乘妙法に生れ遇ひて、十惡をうとまず引接を垂れたまふ阿彌陀佛を念じ奉るは、口のあればたゞに唱へるたるか、耳のあればたゞに聞居たるか、あなあさましのやすさや。無始生死の間に塵の結緣つもりて秦山となる。露の功德たまりて蒼海と湛へて、善根林をなし、機感時を得て、今生を生死の終りとし、當來を解脫の

鏡―地獄の閻魔の帳の鏡はよく生中の所業を現すといふ

ます―増す歟

泥梨―地獄

非の舌をまく。悪行はぢを顯す、鏡の中の影、自業のむかへは陳じがたし、札上の文。嗚呼十八猛鬼の忿怒といかれる聲、天雷の落ちかゝるが如し。六十四眼の睚眦とにらめる、熱鐵の迸しるに似たり。逃げんとすれども逃ぐるにむなし、刃のふる所。よけんとすれ共よけられず、焔にむせぶ時。心うきかな、猛火の薪となりて、萬億歳罪根山の林夏久し。寒嵐の水に沈んで、無量劫業報池の水春に別れたり。我等が前罪こゝに謝せずば、後悔又いかゞせん。心あらん人たれか悲しまざらんや。

みねばにやいたき心も無るらんきくも身にたつつるぎばの枝

たゞし極樂西方にあらず、己が善心のますにあり。泥梨地の底にあらず、己が悪念の心地にあり。彌陀うとき佛にいまさず、みづからが本有の眞性にあり。獄卒しらぬ鬼にあらず、みづからが所感の業胤にあり。雪つもりて山をなす、春の日に當れば消えて殘らず。金くだけて灰にまじる、水に入れて汰ばうする事なし。罪雪ならば善心あらはれぬべし。迷へるときは目をふさぎて、我身をだにも見ず。悟るときは眼を開いて、人の體を見る。障子を隔てゝあなたは、十萬億土と思へども、引あけたればたゞ一間のうちなり。佛性の水煩惱の風に氷れども、おもひとけば水とは誰か知らざらん。貧くとも嗟く

惑を斷じて眞如を證する十階段の稱

具轉の浮身―三界の輪廻にはだされて彼岸に至らぬ凡夫の身

三毒の酒―不善の行爲の根本たる貪欲、瞋恚、愚癡をいふ

分段の有爲―娑婆世界、浮世

聞つれなくして―聞きても一向平氣にて

財は惜めども云云―大集經の偈「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者」

單己―只一人ばつち

琰王―閻王

つく。信力よわき者には、他力を與へてこれを救ふ、倒れふしたる赤子を親の抱くが如し。念緒つよき、願緒にすがりて自らすゝむ、驥につく蠅の千里にかけるが如し。されども具轉の浮身は、一榮の肴にすゝめられて、三毒の酒に醉臥す。世路の險難に疲れて、佛界の正道にまよはす、妻子をおもふ心冥にくらまされて、心佛の光を隔てたり。菩提の鹿は罪業の山にかくれて、斷れどもいまだ出でず、煩惱の虎は功德の林を別れて、追へどもかへらず。睡眠の閨には、あかつきの鐘の聲うち驚かせども、諸行無常の告をさとらず。遊戲の床には、暮の日さし驚かせども、分段の有爲のことわり辨へず。老少不定の悲は、眼にさへぎりて、雲の如くに騷げども、心空にして思はず。先後相違のわかれは、耳にみちて風の如くにひらけども、聞つれなくしてあはれまず。老たるは老たればいよ／＼餘命を惜み、若きは若ければ實に將來を期す。其間山水遙に流れて、遂に泉にかへる。風煙命滅して忽に冥途にまどひ、又貯へ持つ財は惜めども荷はず、養ひ居る僮僕は哭すれども隨はず、終に天使にめされて地獄に落ちぬれば、冥路山さかし、嬰兒の歩みにたゞよひてひとり行く、黄泉水はやし、單己のわたりに溺れて身を流す。かなしきかな／＼、獄卒の呵責にかゝりて後悔魂をくだき、琰王の斷罪にをのゝきて前

第一義空—聖者が自覺し得る絶對境を空に喩へていふ也

大悲弘誓の網—「弘誓深如海歴劫不思議」

淨刹—寺

みのり—御法

十念の來迎—南無佛の十唱によりて佛來りて淨土に迎ふる義なるべし

十地證王—心の

はれ、第一義空の水心にすめり。此故に無始來の眠は夢長くさめ、六趣輪の冥は盲眼ひらけたり。彼無常念王の古郷を忍ぶちぎり、娑婆にあつく、法藏因位の舊臣を顯はれん志、我等にふかし。此に依て九品覺王の善政をたるゝ一念、奉公の輩ならびに平等引接の賞にあづかりて、諸天薩埵の僉議を爲す。六賊重罪の犯、却つて皆空無漏の旨を奏す。七寶の高臺には四十八願の主、五劫思惟の光を放ちて、念佛の者をてらし、二脇片座には、三十三尊大悲弘誓の網をたれて、苦海の沈沒をすくふ。故に三世の佛の濟度にもれたる五逆の罪人も、願海不捨の舟に棹さして彼岸にわたり、十方土の淨刹にすてられたる此界の惡從も、大雄起世趨にかゝりて西天に飛ばん。哀れとく生れて道に入らばやな。

波風もみのりの聲をとく聞きてみるめくるしき海を出でばや

迷ひきて又まよひこんかりの宿にながく歸らんみちに歸らん

東國にさまよひ行く子あり、本の都を別れて假の宿にふせり。西刹に訪尋ぬる母います。あはれ〳〵もとめて彼國に導くを其母といます。佛は三字の名號を子どもに授けて、三因佛性のかくれたるをよび出し、十念の來迎を最期にちぎりて、十地證王の位に

風樹—「木靜ならんと欲すれども風止まず、子養はんと欲すれども親待たず」の語による

木方初發—五行の木は東方に配すればいふ

金刹極證—五行の金は西方に配するを以て西方極樂淨土の義にいへる也

珍本覺—本覺は衆生が本來有する覺體にして自性淸淨の心體をいふ

だめて哀を垂れ給へ、悲母の目前に中懐を謝して、白髪をおとし、愚子が身の上には本望を遂げず、黒衣をきる事を。夢の間の笋は、たとひ一旦の雪にもとめ失ふとも、覺路の蓮は、かならず九品の露に開きおくらん。子養は子のこゝろざしにつくす、風樹は風の恨のこす事なかれ。

いかにせん結ぶこのみをまたずして秋にはよそのおつる山風

東國はこれ佛法の初道なれば、發心の沙彌殊更に修行すべき方なり。この故に木方初發の因地より萌して、金刹極證の果門を開かんと思へり。觀よ夫けがらはしき濱路を過行くだにも、白砂なほおもしろく見ゆ。まして極樂金繩の道に思ひやるもゆかしけれ。金樹七重の風、無苦の聲をしらべ、紫蓮千葉の色に染む。功德の池には水煩惱のあかを洗ひ、善根のはやしには樹菩提の果をむすぶ。ゆゐたる宮殿は十方に飛んで居ながらすぐ。ことに利生を約諾す。生る人はみな說法集會の場にまじはりて、無量の命を延年し來る。むかしは悉見佛聞法の室に誇りて、不退の樂に世會す。久遠世々の父母は、珍本覺の如來に顯はれ、過去生々の妻子は、なつかしくて新來菩薩にむすびたり。法喜禪悅の味は口のうちにみち、端嚴殊妙のかざりは身の上に具はれり。凡そ三十一金の月胸に

嬰兒にかへりて—諺に「年寄り小供」
抖擻—行脚
母山の云々—母は病みて齢も既に八十となり
子石の云々—子も衰へて年既に五十なり、半白は頭髪半ば白き意にて五十才をいふ
朝に云々—朝夕機嫌を伺ひ孝養を盡す
先報—前世のむくい

に老たる母あり、嬰兒にかへりて愚子をしたひ待つ。異郷にうかれたる愚子は、萬里をへだてゝ母を思ひおく。抖擻の爲に暇をこひて出しかども、我を棄つとや恨むらん。無爲に入るは眞實の報恩なれども、有爲のならひは疎きにうらみあり。本よりおもはず、東部の經廻を。今はいよ〳〵急ぐ、西路の歸願。彼最後の今に逢ふ事は、先世の縁なれば、坐したりとも違ひなん、違ふともきたりなん。たゞ契りの淺深によつて、こゝろざしの有無にまかせたり。かなしむらくは、親も老たり子も老たり。いづれか先だち、いづれか後れん。たゞなげく所は、母山の病木八旬の涯に傾きて、一房の白花いまだ開けざるに、子石のかれたる苦み、半白の波に溺れて、一滴の雫いまだ汲まざることを。朝に省み夕に定む、心ざし遂げずしてやみなば、佛に祈り神にいのる、功それいかゞせん。我きく佛神は孝養のために擁護のちかひをおこし、經論は報恩のために讃嘆の言葉をのべたりと。壯齡のむかしは將來を恃みて天に祈りき。衰邁の今は先報をかへりみて身をうらむ。もしこれ不信の雲に蔽はれて、感應の月顯はれざるか。もしこれ過去の福因をうゑずして、現在の貧果を得たるか。先報によるべくば、佛の誓ひ頼むや否や。誓願に依るべくば、我孝なんぞ空しき。信否ともに感じて、妄恨みだりにおこる。天眼あひな

し、諸種の機類に應じ、隨時隨處に無量の色身を變現し種々の法を說きて諸の生類を濟度するをいふ也

五更になりぬれば—あすの五更となりたれどの意か、五更は午前四時

菖蒲の一夜のまくら—五月五日の夜は菖蒲を枕とする也、但こゝは季節に應じたる文飾にて、下の結びの緣語と見るべし

さすがなごり—凡てしほの緣語

れば、遊覽の心ざし切々なれども、經廻わづか一旬にして、上洛すでに五更になりぬれば、名殘のむしろをまきて、出なん事を急ぐ。時に晩鐘のうち驚かせば、永しと思ひつる夏の日も、今日はあへなく暮れぬ。一樹の陰の宿緣淺からず、拾謁のむつび芳約深き人あり。

　きてもとへけふばかりなる旅ごろもあすは都にたち歸りなん

返し

　たび衣なれきてをしき名殘にはかへらぬ袖もうらみをぞする

五月のみじか夜、時鳥の一聲の間にあけなんとすれば、菖蒲の一夜のまくら、再會不定のちぎりを結びて出でぬ。

　かりぶしのまくらなりとてあやめ草一よのちぎり思ひ忘るな

湯井の濱を歸りゆけば、浪のおもかげ立ちそひて、野にも山にも離れがたき心ちして、

　なれにけり歸る濱路にみつ潮のさすがなごりにぬるゝ袖かな

人を頼みてくだるほどに、たのむ人俄に上りなんとすれば、身を無緣の境にすてゝ、志を有緣のみちに(便宜あらば善光寺へ參るべきよし思へり)とげばやと存ずれども、花京

烏瑟—梵語烏瑟膩の略、肉髻と譯す、項上の肉隆起して髻の形をなす佛の三十二相の一

踔躒して—すぐれこえて

魯般—昔の人、巧に機械を作る

發露—信心の念のあらはれ出づること

三壺—海中の三神山、方壺、蓬壺、瀛壺

法性、寂光—法性は諸法の體性にて眞理と同義に用ひらる、寂光は寂光土にてたゞ佛のみ住する法身土の稱

應身—諸佛三身の一にて、諸佛その妙用を現は

行いて、大御堂新御堂を拜すれば、佛像烏瑟のひかり、瓔珞眼にかゞやき、月殿畫梁のよそほひは、金銀色をあらそふ。次に東山の裾にのぞみて、二階堂を禮す。是は餘堂の踔躒して、感歎及びがたし。第一第二の重檐には、玉のかはら鴛の翅をとばし、兩目兩足のならびたまへし臺は、金の磐鶴燈をかゝげたり。大方魯般意匠窮つて、成風天に望むに涼しく、毗首手功をつくせり。發露人の心に催ほす。見れば又山に曲木あり、庭に恠石あり、地形のすぐれたる佛室と云つべし。三壺雲に浮べり、七萬里の浪池邊によせ、五城霞に峙てり、十二樓の風、階の上にふく。誤りて半日の客たり、疑ふらくは七世の孫に逢はん事を。夕に及んで西に歸りぬ。鶴岡にとて鳩宮にまゐらず、朱の玉垣金鏡に映じ、白妙の錦幣風にそよめき、銀の鐺は朱檻をみがく、錦のつゞれは花にひるがへる。しばらく法施奉りて、瑞籬に候すれば、神女がうたの曲は、權現垂跡の隱敎にかなひ、僧侶の經のこゑは、衆生成道の因緣を伸ぶ。彼の法性の雲の上に、寂光の月老いたりといへども、若宮の林の間に、應身の風あふぎてあらたなり。

雲のうへにくもらぬ影を思へども雲よりしたにくもる月かな

月の光にたゝずみて、石屋堂の山の木末はるかに眺めて、いぶせく歸りぬ。適下向な

しきみ—閾

おろ〳〵—纔に

龍蹄—駿馬

春日山—春日明神は藤原氏の氏神なるより、鎌倉の將軍が藤氏の出たるをいへる也

徵集—租稅

つゞめ—節し

風の如く—屏風の如くの誤か

く相語る。其後立出て見れば、此所の景趣は海あり山あり、水木たよりあり、廣きにもあらず狹きにもあらず、街衢のちまたは方々に通ぜり。實に此聚をなし邑をなす鄕里、都を論じて望まづ珍らしく、豪を選び賢をえらぶ門欜、しきみをならべて地又賑へり。おろ〳〵將軍の貴居を垣間見れば、花堂高くおし開いて、翠簾の色喜氣をふくみ、朱欄妙にかまへて、玉砌のいしずゑ光をみがく。春にあへる鶯の聲は、好客堂上の花にあざけり、あしたをおくる龍蹄は、參會門前の市に嘶ゆ。論ぜず、本より春日山より出でたれば、貴光たかく照して萬人みな瞻仰、士風塵をはらふ。威驗遠く誡めて、四方ことごとく聞きにおそる。何ぞ況んや、舊水源すみまさりて、淸流いよ〳〵遺跡をうるほし、新化榮鮮にひらけて、紫藤はるかに萬歲をちぎる。凡そ座制を帷帳の中に廻して、徵集郡國の間につゞめたり。しかのみならず、家室は扃をわすれて夜の戶をおしひらき、人倫は心を調へてほこるともほこらず、惠政の至り治まりてみゆ。

夜の戶ものどけき宿に開くかなくもらぬ月のさすにまかせて

此緣邊に付て、おろ〳〵歷覽すれば、東南の角一道は、舟檝の津、商賣の商人、百族にぎはひ、東西北の三方は、高卑の山風の如くに立廻りて所をかざれり。南の山の麓に

き日の傾く頃
おきたる—上に都にと補ふ、又はおききたるの「き」字脱か
日をまつ—日を數へて我歸り來るを待つ
鷄鳴八聲—鷄のいく聲も鳴きしきること
周覽云々—回覽したき心を起したれど
たがひてなければ—掛違ひて不在なれば
かたつ貝—あはび也、あはぬといふ序
往事云々—白居易の詩句に「往事渺茫都似夢」の句

りて、大伴の浦に似たり。千萬宇の宅軒をならべて、大淀のわたりに異ならず。御靈の鳥居の前に日をくらして後、若宮大路より宿所につきぬ。月さしのぼりて、夜も半に更にければ、おきたる老人おぼつかなくおぼえて、

　都には日をまつ人をおもひおきてあづまの空に月を見るかな

鷄鳴八聲のあかつき、旅宿一寢の夢さめて、立出見れば月の光屋上の西に傾きぬ。

　おもひやる都はにしにあり明の月かたぶけばいとゞ戀ひしき

十八日、此宿の南の軒端に高き丸山あり、山の下に細き小川あり。峯のあらし聲落ちて、夕の袖をひるがへし、灣水ひゞきそゝぎて夜の夢をあらふ。年頃ゆかしかりつる所か、いつしか周覽相催ほし侍れども、未だ旅なれば、今日は空しく暮しつ。相知りたる人は一兩人侍るを、賴みて物など申なんと思ふほどに、たがひてなければ、いとゞたよりなくて、

　たのめつる人は渚のかたつ貝あはぬにつけて身をうらみつゝ

さらぬ人は多けれども、うとければ物いはず。其中にふるき得意一人ありて、不慮の面談をとぐ。往事の夢に似たる事を憐みて、次に昔に變る事を歎く。互に心懷を述べて暫

弘經—經文の教を世に弘通すること

忍體—原本疑とも見ゆ、一本「あまくだるてい」と訓ず、忍は說文に「心疑也、从𢇁三心」とあり、又事忍にて義の正字となす說もあれど、何れもこれに當らず、可勘

きね—女のかんなぎ

貴からず—「山高きを以て貴しとせず、木あるを以て貴しとなす」

さきあがる—浪の打上るを花の樣にてさきといふ

申の斜—四時過

夜をあかし日をくらす。其時女の形出來りて、夜毎に聽聞して、あくれば忽然としてうせぬれば、其行方をしらず。僧これを怪しみて、糸を構へて密に裾につけにけり。あくる朝に糸をたどして見れば、海上に引かれてかの山に至りぬ。巖穴に入つて龍尾につけたり。神龍顯形して後、僧に恥ぢてこれを入れずといへり。それ權現は利生の姿なり、化現せば何ぞ姿にはよからん。弘經は讀誦の僧なり、經を貴みば何ぞ僧を厭はんや。深き誓は海に滿てり、波に垂るゝ跡は、忍體は天に知れたり、雲にひゞく聲、されども神慮は人しらず、きねがならはしに從ひて、ふし拜みてとほりぬ。

江のしまやさして鹽路に跡たるゝ神はちかひの深きなるべし

路の池に高き山あり、山の峯禿にて、貴からずといへども、恠石ならびて興なきにあらず。步みをおさへて石を見れば、昔かの掘穿ちたる礒どもなり。海も久しくなれば、干るやらんと見ゆ。腰越といふ平山のあはひを過ぐれば、稻村といふ所あり。險しき岩の重なり臥せる濱をつたひ行けば、岩にあたりてさきあがる浪の、花の如くに散りかゝる。

うき身をばうらみて袖をぬらすともさしもや波に心くだかん

申の斜に湯井の濱に落著きぬ。しばらく休みて此所をみれば、數百艘の舟ども綱をくさ

もとより―末の露本の雫の本歌に因る

鵲のわたし守―七夕に鳥鵲羽を並べて橋とし、牽牛織女二星を渡り會せしむとの傳説による。

八千歳のかげ―椿、莊子「大椿八千歳」の語による

十八公―松、字を分解していへる古語、吳志に「丁固仕ニ孫晧ー爲ニ司徒ー、吳書曰、初固爲ニ尚書ー、夢ニ松樹生ニ其腹上ー、謂レ人曰、松字十八公也、後十八歳、吾其爲レ公乎、卒如レ夢焉」

れぬ。たゞ煩惱のうらみのみさる事をかなしみ、愚痴の心を知らざる事を恨むべし。はやく別を惜まん人は、再會を一仙の國に約し、恩をこひん人は、追福を九品の道に訪ふべし。

今更になになげくらん末の露もとより消えん身とは知らずや

大磯の浦小磯の浦を遙々と來れば、雲のかけはし波の上に浮みて、鵲のわたし守、あまつ空にあそぶ。あはれさびしき旅の空かな。ながめなれてや人はゆくらん。

大磯やこいそのうらのうら風にゆくとも知らずかへる袖かな

相摸川を渡りぬれば、懷島に入る。砥上が原を出でて、南のうらを見やれば、浪のあやおりはへて、白き色をあらひ、北原をのぞめば、草の緣そめなし、淺黃さらせり。中に八松と云ふ所あり。八千歳のかげにたちよりて　十八公の榮をさかりにす。

やつ松のやちよの影に思ひなれてとがみが原に色もかはらじ

固瀬川を渡りて、江尻の海汀をすぐれば、江の中に一峯の孤山あり。孤山に靈社あり、江尻大明神と申す。威驗ことにあらたにして、御前を過る下り船は上分を奉る。法師は參らぬと聞けば、その心を尋ぬるに、むかし此邊の山寺に禪僧有て、法華經を讃誦して、

維し日―未詳
往生―極樂淨土に往きて新に生るゝ意
九品―上品上生より下品下生に至る九種の極樂の階級
虎賁―古人の勇者
北邙―古支那の地名、墳墓多き山

此つきにあひ尋ぬれば、一條の宰相中將（信能卿）美濃國遠山といふ所にて、露の命をかしてける。それ洛中に別れて維し日、家を離れしうらみ、いよ〱惡業のなかだちたりしかども、旅のみちに手をひらけしときに、家を出でしよろこび還つて善緣のすゝめにあへり。掌を合せ念を正しくして、魂ひとり去りにけり。臨終の義を論ぜば往生ともいふべし。西方には聖衆定めて九品の寶蓮にみちびくらん。彼羽化をえて天闕にあそびしは、八座のむしろ家門の塵を打拂ひ、虎賁を兼ねて仙洞にはしる。累葉の花寶枝の風に綻びき。傷哉、平日の蔭盛にして、未だ西天の空に傾かざるに、壽堂の扉ながく閉ぢて、北邙の地に埋むことを。花の床を何かざりけん、跡にとまりて主なし。親族は悲しめどもよしなく、旅に出でてひとり心ざしぬ。楊國忠が他界にうつりし、知らず人の恨をなす事を。平章事の遠山にほろびし、おもひやりき、身の悲みをふくみなんことを。かの東平王の舊里をおもふ、墳上の風雨になびく、誠にさこそと哀れにこそは覺ゆれ。

おもひきや都を夜半にわかれぢの遠山野邊に露きえんとは

それ人のうまれたるは、庭におつる木葉の風に動くが如し。風やみぬれば動かず、死と思へば、旅に出づる行客の宿にとまるが如し。こゝに別れぬといへども、かしこには生

月に喘ぐ—「呉牛月に喘ぐ」のことによる
潯陽江—琵琶行「潯陽江頭夜送客」の句
羽林—近衛
射山—藐姑射山の略、仙洞御所をいふ
連枝—兄弟
魮鯛—比目魚、夫婦の契にいふ

る疎人は契を同驛を筵にむすぶ。かの草につなぐ疲馬は、胡國を忍びて北風に嘶え、野にやすむ群牛は、呉地にならひて夜の月に喘ぐ。棹歌數聲、舟船を明月峽のほとりによせ、松琴角曲、琵琶を潯陽江の汀に聞く。一生のおもひ出、今夜の泊にあり。

行きとまる磯邊の浪のよるの月たびねの袖にまたやどせとや

十七日、逆川を立ちて平山を過ぎて、高倉宰相中將（範茂）苦峯山のうみじり、急河と云ふ淵にて底の水屑と沈みにけり。つら〳〵そのむかしを思へば、あはれにこそおぼゆれ。日本國母の貴光をかゞやかす、光の末に身をてらし、天子聖皇の恩波をそゝぐ、波の雫に家をうるほす。羽林の花新に開け、春にあへるにほひ天下に薫し。射山の風あたゝかに煽ぐ、時にあたるひゞき遠近にふるふ。圖らざるや、榮木山風たゝきて、苑花塵となり、逝水ながれ急にして、其身泡と消えんとは。連枝の契かたえ早くをれぬ、家苑の地あと空しく殘れり。魮目のむつび一頰をならべず、他鄕の水おちて歸らず、一生こゝにつきぬ。此川は三家の水口たるか。言ふことなかれ、水こゝろなしと。波の聲鳴咽して哀傷をなす。

流れ行きて歸らぬ水のあはれにもきえにし人の跡と見ゆらん

この山を越えけるとき、山神おきなに化して歌を教へたりけり。あしがらといふは是なり）時に萬仭峯高し、樹根にまとうて腰をかゞめ、千里巖さがし、苔の鬚をかなぐりて脛をのゝく。山中を胡馬がへしといふ。馬もしこゝに留まらましかば、此山をば鞍馬とぞいはまし。これより相摸國にうつりぬ。

秋ならばいかに木葉の亂れましあらしぞ落つるあしがらの山

關下の宿をすぐれば、宅をならぶる住民は、人を宿して主とし、窓にうたふ君女は、客をとゞめて夫とす。あはれむべし、千歲の契を旅宿の一夜の夢にむすび、生涯のたのみを往還の諸人の望にかく。翠帳紅閨、萬事の禮法異なりといへども、草菴柴戸、一生の觀念これ同じ。

さくらとてはなめく山の谷ほこりおのがにほひも春は一とき

道は順道なれども、宿を逆川といふ所にとまる。（潮のさすとき、水の上ざまに流るれば、逆川といふ）北は片岡田疁うちすきみて、薄の燒をれ青葉にまじり、南は滿海蒼波わきあがりて、白馬ならび渡る。しかのみならず、前汀東西素布を長帶の浪にあらそひ、後園町段綠衫を萬葉の竹にかり、時に暮行く日脚は、景を遠島の松にかへし、來り宿

脛をのゝく―道の險しきに戰慄す

翠帳紅閨―下に「に比しては」と補ふ
草菴柴戸―下に「の輿も」と補ふ

素布、綠衫―浪の白き竹の綠なるを布帛に喩へていふ

眞をうつしても由なし、一生いくばくならぬ魂を訪ひて足りぬべし。二世のちぎり空しからじ。

思へばなうかりし世にもあひ澤の水のあわとや人の消ゆらんけふ足柄山をこえて、關の下の宿にとまるべき日暮、烏むらがり飛んで林頭に鷺ねぐらをあらそへば、山の此方竹の下といふ所にとまる。四方は高山にて、一川谷にながれ、嵐落ちてまくらを洗ふ。聞けばこれ松の音霜さえて袖にあり、拂へばたゞ月のひかり寐覺のおもひにたへず、ひとり起居て殘の夜をあかす。

見し人にあふ夜の夢のなごりかなかげろふ月に松かぜのこゑ

ふくる夜のあらしの枕ふしわびぬ夢もみやこに遠ざかりきて

十六日、竹の下を立ちて、林中をすぎて遙々と行けば、千束のはしを獨梁にさしこえて、足柄山に手をたてゝ登れば、君子松いつくしくて、貴人の風過ぐる笠をとがめ、容雲梢にかさなりて、故山の頂あらたに高し。朝の間雨ふりて、松の風聲の虚名をあらはす。ほどなく日岳口の東にのぼりて、雲はやく驛路の天に晴れぬ。彼山祇のむかしの歌に、遊女が口につたへ、嶺の猿の夕の啼は、行人の心をいたましむ。(むかし青墓の宿の君女、

獨梁—丸木橋

聲の虚名—松風の音雨に似たるをいふ

家の貫首—一家一門の主長
萬機の云々—朝廷の政務をとりさばきたり、線をとゝのへは機の線にていふ
入木のとりの跡—巧妙なる筆跡とりのあとは文字、入木は王羲之の故事にて書道をいふ
九夜のゆめ—長夜の夢
有爲のさかひ—有爲轉變して定めなき浮世
死出山路云々—大集經の偈頌、「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者」
冥吏呵責—地獄の責苦

君恩あくまでうるほして降雨の如し。人望かた〴〵に開けて、盛りなる花に似たりき。中に黄門都護は家の貫首として、一門の間に揵をおし開き、朝の重臣として萬機の庭に線をとゝのへき。誰か思ひし、天俄に災をくだして天命をほろほし、地忽ちに夭をあげて地望を失はんとは。あはれなるかな、入木のとりの跡は千歳の記念にのこり、歸泉の靈魂は九夜の夢に迷ひにき。されども善惡心に強くして、生死はたゞ恨なりと思へりき。つひに十念相續して他界にうつりぬ。夏の終秋のはじめ、人醉ひ世にごりし、其間の妄念はさもあらばあれ、南無西方彌陀觀音、その時の發心等閑ならずば、來迎たのみあり。これやこの人々の別れし野邊とうちながめて過ぐれば、淺茅が原に風たちて、なびく草葉に露こぼれ、無常の鄕とはいひながら、無慚なりける別れかな。有爲のさかひと思へども、憂かりける世の中かな。官位は春の夢、草の枕にながく絶えぬ。樂榮は朝の露、苔のむしろに消えはてぬ。死出山路には隨はぬならひなれば、後世の恨もいかゞせん。東の道にひとり出でて、あやふき武士に誘はれ行きけん、心のうちこそあはれなれ。かの冥吏呵責の場には、ひとり自業自得の斷罪に舌をまき、此妻息別離の跡には、各不意不慮の横死に涙をやる。生きての別れ死しての恨み、二つながらをいかゞせん。

十五日、木瀬川を立て遇澤といふ野原をすぐ。此野何の里ともしらず。遙々とゆけば、納言はこゝにてはやく暇候ふべしと聞えけるに、心中に所作ありと、しばらくと乞ひうけられければ、なほ遙かに過ぎ行きけん、まことに旅の空はいかゞ物あはれなるべき。況や馬鬼の道に出でて牛頭の境にかへらんとする涙の底にも、都に思ひおく人々や心にかゝりて、ありやなしやのことの葉だにも、今一度きかまほしかりけん。されども隅田川にもあらねば、言問ふ鳥のたよりだにもなくて、此原にてながく日の光にわかれ、冥道にたちかくれにけり。

都をばいかに花人はるたえてあづまのあきの木の葉とは散る

やがて按察使左兵衛督（有雅卿）、おなじく此原にて、すゑの露もとの雫と後れ先だちにけり。それ人つねの生なし、家つねの居なし、是は世のならひ事の理なり。されども期來て生て謝せば、理をのべて忍びつべし。緣つきて家をわかれば、ならひを存じて慰みぬべし。別れし所はうき世なり、城の外の荒々たる野原のたびの道、沒せん時は未しき時なり、恨をふくみし悄々たる秋の天の夕の空、誠に時の災孽の遇にあへりといへども、こゝにこれ先世の宿業のむくゆる酬なり。抑かの人々は官班身を名譽のきゝをあぐ。

き羽、劒に掛りて命を失ふの録

所作—作すべきこと

馬鬼の云々—死出の途に上るをいふ

ありやなしや—伊勢物語隅田川にての「名にし負はゞいざことゝはん都鳥我が思ふ人はありやなしやと」の歌にとる

花人—華冑の意

すゑの露—「末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらん」

生て謝せば—死せば、「て」は「を」の誤なるべし

言葉を存す―言葉の存するを解すべし

魂は云々―身は生きながら魂消ゆる思ありしならん

亀毛の命―とても望みがたき命、経に決してあるまじき事の喩に「亀角兎毛」といへり

つるぎ羽―をし二羽一つがひのつよ

南州の不定は期をしらずして命をたのむ。まことに今日ばかりと思へども、心のうちを推すべし。おほかたは昔語にだも、あはれなるには涙をのごふ。何ぞいはんや、我も人も見し世の夢なれば、おどろかすにつきて哀れにこそ覚ゆれ。さても峯の梢を拂ひしあらしの響に、及ばぬ谷の下草までも吹きしをられて、かずならぬ露の身もおき所なくなりにしより、かくいひて命を惜みてうせにし人の言葉を存ず、厭ふ身は今まで有りて、よそに見るこそあはれなれ。此歌の心を尋ぬれば、納言浮島が原を過ぐとて、物を肩にかけのぼる者逢ひたりけり。問へば按察使光親卿の僮僕、主君の遺骨を拾ひて都にかへると、泣く／＼いひけり。其を見るに身の上の事なれば、魂はいきてよりさこそは消えにけめ。本より遁れまじきとは知りながら、自ら虎口より出でて亀毛の命もや得ると、なほ待たれけん心に、今は終にと聞定めて、げに浮島が原より、我にもあらず馬の行くにまかせて、此宿に落つきぬ。今宵ばかりの命、枕の下のきり／＼すと共にちぎりあかして、かく書留めて出られけんこそ、あはれをのこすのみにあらず、亡き跡まで情も深く見ゆれ。

さぞなげに命もをしのつるぎ羽にかゝるあはれはうき島が原

蟷螂—叶はぬ事の喩に「蟷螂斧を振ひて隆車に當る」といふ

勝母の閭—淮南子說山訓「曾子立レ孝不レ過二勝母之閭一」勝母は母に勝つ意なれば其名を惡みて入らずと也、下文插註やゝ違へり

太行路—白樂天「太行之路能摧レ車、若比二君心一是坦途」

かの中納言—行宗

あまつひめ戀し思ひのけぶりとてたつやはかなき大ぞらの雲

車返といふ所をすぐ。此所はもし蟷螂が道にあたりて行人をとめけるか。又もし遊兒が土城をつくりて孔子にこたへけるか。（むかし小童部の路中に小家を造りてあそびけるに、孔子のとほるとて、車にあやふし、そこのけといさめられけるに、小童部の云ふ、車は家のあり所をよきて過ぐべし、未だ聞かず家の車にさることをと、孔子これを聞いて、車をめぐらしてかへりにけり）もし又勝母の閭ならば、曾子にあらずとも、誰もいかゞ通らん。（曾子は孝ふかき人にて、不孝のものの居たる所は、車をかへしてとほらず）險阻の地なれば、大行路といひつべし。（よの道はさがしくて、よく車をくだく）されども騎馬の客なれば、うちつれて通りぬ。

むかし誰こゝに車のわづらひてながえを北にかけはじめけん

木瀬川の宿にとまりて、萱屋の下に休む。又かの中納言和歌一首よみて、一筆の跡をとどめられたり。

けふすぐる身をうき島が原にきて露の道をぞ聞きさだめつる

これを見る人、心あれば皆袖をうるほす。それ北州の千年はかぎりを知つて壽をなげく、

貴妃―楊貴妃、長恨歌に明か也

かきぐして―書き具へて

出でぬる―竹取物語には「思ひしりぬる」

雁札―手紙、蘇武の故事

何―原本のまゝ

彼、これ―楊貴妃、赫奕姫

夜のころもをかへす―夢に見んとて寝するまじなひ也

す。鶯姫は竹林の子葉なり、毒の化女として一人の心をなやます。方士が大眞院をたづねし貴妃がさゞめごと、二たび唐帝のおもひにかへり、使臣の富士のみねにのぼり、仙女がわかれの書、なか〳〵和君の情をこがせり。翁姫天にあがりけるとき、帝の御ちぎりさすがにおぼえて、不死の藥に歌をかきぐしてとゞめ置きたり。其歌に云ふ、

　今はとてあまのはごろもきる時ぞ君をあはれと思ひ出でぬる

みかど是を御覧じて、わすれがたみは見るもうらめしとて、怨戀にたへず、青鳥をとばし雁札を書きそへて、藥をかへしたまひけり。其返事、

　あふことの涙にうかぶ我身にはしなぬくすりは何にかはせん

使節智計をめぐらして、天に近き所は此山にしかじとて、富士山に上りてやきあけければ、藥も文も煙とむすほれて空にあがりけり。これより此峯に戀の煙をたてたり。何此山をば不死の峯といへり。しかるを郡の名に付けて富士とかくにや。かれも仙女なり。これも仙女なり、ともに戀しき袖にたまれる、彼は死して去り、これは生きて去る。同じく別れて夜のころもをかへす。すべてむかしも今も、好女は國をかたぶけ人をなやます。愼んで色にふけるべからず。

恨歌「一笑生百媚」

先生、他生—過去の世、未來の世

月卿、雲客—雲の上人、朝廷に仕ふる高貴の方

鶯姫—竹の緣にて赫奕姫の別名にいへるならん

たまき—環

飛車—空をかける車

開城の云々—帝姫を天にやらじと種々防禦の手を盡すこと竹取物語に見ゆ、開は闕の誤か

が、天上にうまれて後は、宿世の恩を報ぜんとて、しばらく此翁が竹に化生せるなり。あはれむべし、父子のちぎりの他生にも變ぜざることを。これよりして青竹の節の中に黄金出來て、貧翁たちまちに富人となりにけり。其間榮花の家、好色のみち、月卿ひかりをあらそひ、雲客色を重んじて、艶言をつくし、懇懷を抽んで、つねに赫奕姫が室屋に來會して、絃をしらべ歌を詠じてあそびたりける。されどもおきな姫難詞をむすびて、うちとくる心もなし。時の帝此よしを聞しめして、召しけれどもまゐらざりければ、帝御狩あそびのよしにて、鶯姫が竹亭に御幸したまひて、鴛のちぎりをむすび、松のよはひをひきたまふ。翁姫おもふ所有つて、後日をちぎり申しければ、帝むなしく歸りたまひぬ。かたへの天これを知りて、玉のまくら金の釵、たまきいまだ手なれざるさきに、飛車くだりて天にあがりぬ。開城のかためも雲路にえきなく、猛子が力も飛行にはよしなし。時に秋の半、月のひかりくまなきころ、夜半のけしき風おとづれ、物をおもはぬ人も物思ふをりふし、きみのおもひ臣の懷舊、おなじく袖をうるほす。かの雲をつなぐにつなぎ得ず、雲の色慘々としてくれの思ひふかし。風を追ふともおはれず、風の聲颯々としてよるの恨みふかし。花民は奈木の孫枝なり、桀の君臣として萬民病をいや

隔つ」と桓公に從ひて孤竹を伐ち、冬になりて歸路途を失ひ、老馬を放ちて之に隨ひし故事
名高き山―富士山
程―間、道程
つく―築く
眼をいたゞきて―仰ぎ見る狀
ほれたり―惚れたり、うつとりとせり
採竹翁云々―竹取物語の筋に多少の趣を添へたり
雙娥―兩方の眉、娥は蛾の誤にて詩經の「蛾眉螓首」に出づ
一たび云々―長

音に聞きし名高き山のわたりとてそこさへふかし富士川の水

浮島が原をすぐれば、名はうきしまと聞ゆれど、まことは海中とはみえず、野徑とは見つべし。草むらあり、木の林あり。はるかに過ぐれば、人煙片々と絶えて又たつ。新樹程をへだてゝ隣たがひにうとし。東行西行の客はみな知音にあらず、村南村北の道にただ山海を見る。（山の頂に二泉あり、湯のごとくわくと云ふ。むかしは仙女が此みねにあそびて、つねにあり、ひがしふもとに新山といふ山あり、延暦年中に天神くだりてこれをつくといへり）すべて此みねは、天漢の中に沖りて、人衆の外にみゆ。眼をいたゞきて立つ、魂恍々とほれたり。

いくとしの雪積りてかふじの山いたゞき白きたかねなるらん

問來つるふじのけぶりは空にきえて雲になごりの面影ぞたつ

むかし採竹翁といふものあり、女を赫奕姫といふ。翁が家の竹林に、鶯の卵子の形にかへりて巣の中にあり。翁養うて子とせり。人となりて貌よき事たぐひなし。光ありてかたはらを照す。嬋娟たる兩鬢は秋の蟬の羽、婉轉たる雙娥は遠山の色、一たび咲めば百の媚なり。見聞く人皆はらわたを斷つ。此姫は先生に人として翁に養はれたりける

晴の天の雨—松籟颯々として雨の如きをいふ

先後のあはれ—遍正の歌「末の露本の雫や世の中のおくれ先だつためしなるらん」

巫峽の水云々—白居易太行路篇の句「巫峽之水能覆舟」

山路の雪—管仲

とめて、身をばとゞめず。

忘れじな波のおも影立ちそひてすぐる名殘のおほわだのうら

湯居の宿を立ちて、はるかに行けば、千本の松原といふ所あり。老のまなこは極浦の浪にしをれ、朧なる耳は長松の風にはらふ。晴の天の雨には、翠蓋の笠あれば袖をたくらず。砂の濱の水には、白花ちれども風をうらみず。行々あとをかへりみれば、前途いよいよゆかし。

聞きわびぬちどの松原ふく風のひとかたならずわれしをる聲

蒲原の宿にとまりぬ。菅菰の上にふせり。

十四日、蒲原を立ちてはるかに行けば、前路に進みさきだつ賓は、馬に水かひて後河にさがりぬ。後程にさがり來るおのれは、野に草しきてまだ來ぬ人をさきにやる。先後のあはれは、行旅のならひにも思ひしられて、うち過ぐるほどに、富士川をわたりぬ。此河中にこそ石を流す、巫峽の水のみ、なんぞ舟を覆がへさんや、人の心は此水よりさかしければ、老馬をたのみてうち渡る。老馬々々、なんぢは智ありければ、山路の雪のみにあらず、川のそこの心もよく知りにけり。

海老—えび
愚老—自稱
幻中の一瞬の身—身命のはかなきをいふ
ゆるいろ—搖る色
ひるま—干る間、晝間
人をしきる—しきりに人を悩す
眼うけぬべし—見とれて目も恍氣となるらん

關屋の邊に布をたゝみといふ所あり。むかし關守の布をとりたるが、つもりて石になりたるといへり。

吹きよせよ清見うら風わすれ貝拾ふなごりの名にしおはゞや

かはらばやけふみるばかり清見潟おほはじ袖にかゝる波ぢは

海老はなみにおよぎ、愚老は汀にたゞよふ。ともに老いて腰かゞまる。汝は知るや生涯浮べる命、今いくほどと我は知らず、幻中の一瞬の身。かくて興津の浦をすぐれば、鹽竈の煙かすかに、浦人の袖うちしほれ、邊宅には小魚をさらして、屋上に鱗をふけり。松のむら立なみのゆるいろ、心なき心にも心あらん人に見せまほしくて、

たゞぬらせゆくての袖にかゝる波ひるまの程はうら風もふく

岫崎といふ所は、風飄々と飜りて砂をまはし、波浪々とみだれて人をしきる。行客ここにたづさはりて、しばらく寄引く浪間をうかゞひて急ぎ通る。左は嶮岳の下岩のはざまをしのぎ行く。右はかすかなる浪の上をのぞめば眼うけぬべし。はる〴〵と行くほどに、大和田の浦に來りて、小船の沖中にたゞよへるを見る。飄帆飛んで萬里風便をたのみて白煙にいり、鰐波動きて千雲夕陽をあらひて紅藍にそむ。海館のうちに此所をのみ

退之が所謂「衣食於奔走」の意
命をたばふ―命をかばふ
水にうつる影―海月の文字より鏡花水月の喩を取れる也
足をつまだつ―道の歩行に難むをいふ
ふけらず―耽る程の美景ならず

此もともに同じ。これのみかは、山にあせかく樵夫は、北風をになひて夕にかへり、野にあしなえぐ商客は、白露をはらうてあかつきに出で、面々の樂まち〱なりといへども、各の苦は、皆これ渡世の一事なり。

　人ごとにはしる心はかはれども世をすぐる道は一つなりけり

此浦を遙かに見渡して行けば、海松は浪の岩根に根をはなれたる草、海月は潮のうへに水にうつる影、ともにこれ浮世を論じて人をいましめたり。

　浪のうへにたゞよふ海の月も又うかれゆくとぞ我をみるらん

淸見が關を見れば、西南は天と海と高低ひとつに眼をまどはし、東北は山と磯と嶮難おなじく足をつまだつ。磐の下には波の花風に開きて春のさだめなく、峯の上には松の色みどりを含みて秋を恐れず。浮天の波は雲を汀にて、月のみふね夜出でてこぎ、沈陸の磯は磐を道にて、風の使脚あしたに吹きて過ぐ。名を得たる所かならずしも興を得ず、耳に耽る所かならずしも目にふけらず、耳目の感ふたつながら得るは此浦にあり。浪にあらひてぬれ〱や口に道をとへば、松風むなしくこたふ。岸柳にくるしみを尋ぬれば、槿花變じて石あり。

千眼―千手觀音

舞樂を云々―この舞を駿河舞といふ事音家抄に見ゆ、寺を久能山とも有度山ともいへり

廻雪―舞容の巧なる形容、洛神賦に「飄々兮若流風之廻雪」

ところは―下に脱文あるか

身を助けん云々―漁夫は生計の爲に骨折り、魚は生を保たんが爲に餌の鉤を呑みて死す

世をはしる―韓

舟に乘つて此地にくだり給ひけり。其舟善神となりて、山路の大阪に石舟護法と號す。彼海岸山の千眼は、南方より北を飛んで、有緣を此山に導く。宇渡濱の品天面を地に得て、舞樂を此濱に學べり。むかし稻河太夫といふ人、天人の濱松の下に樂をしらべて舞ひけるを見て、まなび舞ひけり。又人の見るをみて、鳥の如くに飛んで、雲に隱れにけり。其跡を見れば、一の面形を落せり。太夫これを取りて寺の寶物とす。よつてその寺に舞樂をしらべて、法會を始行す。其太夫が子孫舞人氏とす。二月十二日常樂會とて、寺中の大營なり。その後天人歸り、廻雪は春の花の色、みねにとゞまり、曲風は歲月のところは、よつて此濱をすぐれば、松に雅琴有つて浪につゞみあり、天人の樂今聞くに似たり。

袖ふりし天津をとめがはごろものおもかげにたつ跡のしら浪

江尻の浦を過ぐれば、靑苔石におひ、黑布磯にはる。南は澳の海、淼々と波をわかして孤帆天にとび、北は茂松鬱々と枝たれて、一道つるをなす。漁夫の網をひく、身を助けんとして身をくるしみ、游魚の鉤をのむ、命を惜みて命をほろぼす。人いくばくの利をか得たる。魚いくばくの餌をか求むる、世をはしる思ひ、命をたばふこゝろざし、彼も

まだきに―まだ其季節ともならぬ內より既に

上仙の藥―不老不死の仙藥

かひ―甲斐ありての意に國の名を掛く

四明―天台宗の本山たる比叡山の最高峯、この峯四方の展望明かなればいふとも、又支那の四明山に擬しての稱ともいふ

十二廻中―一年十二ケ月中

安居一夏の行―夏行ともいひ、夏九十日間僧侶の室に籠りて修行するをいふ

木容―木像

手越の宿にとまりて足を休む。

十三日、手越を立ちて、野邊をはる〲と過ぐ。梢を見れば、淺緑の夏のはじめなりといへども、草むらを望めば、白露まだきに秋の夕に似たり。北に遠ざかりて雪白き山あり、問へば甲斐の白峯といふ。年來聞きし所、命あれば見つ。およそ此あひだ、數日の心ざしを養ひて、百年の齡を延べつ。かの上仙の藥は、下界のためによしなき物をや。

　惜からぬ命なれどもけふはあれば生たるかひの白ねをも見つ

宇度の濱をすぐれば、浪の音風の聲、ことに心すむ所なり。濱の東北に靈地の山寺あり、四方高く晴れて、四明天台の末寺たり。堂閣繁昌して本山中堂の儀式をかり、一乘讀誦の聲は十二廻中に聞絶ゆる事なく、安居一夏の行は、採花汲水のつとめ驗をあらそふ。修する所は中道の敎法論談を空假の頤に決して、利する所は下立の衆生歸依を遠近の境にいたす。伽藍の名をきけば行基菩薩の建立、土木の風情、本尊の實を尋ぬれば觀世音と申す。補陀落山の聖容、出現の月あきらかなり。大かた佛法興隆のみぎり、數百箇歲の星漢霜ふりたり。僧俗止住のみね、三百餘宇の禪房霞ゆたかなり。雲船の石神山腰に護りて惡障をふせぎ、大形の木容は寺內に納めて善業をなす。千手觀音かの山より石

扶持—供給の義
李將軍—李廣草中の石を以て虎となし、之を射て矢石に徹したる故事
赤羽—太陽
夢に云々—伊勢物語「駿河なる宇津の山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」の歌にとる

衣かさぬといへども、懐中の扇を手にうごかして、微風の扶持可なり。かくて森々たる林をわけて、峨々たる峯を越ゆれば、貴名の譽は此山にたかし。大かた遠近の木立に心をわけられて、一方ならぬ感望に思ひみだれて過ぐれば、朝雲峯くらし、虎李將軍が栖をさり、暮風谷寒し、鶴鄭大尉が跡にすむ。既にして赤羽西にとび、眼にさへぎる物とては、檜原槇の葉、老の力こゝに疲れたり。足にまかするものは、苔の岩根、蔦の下道、嶮難にたえず。しばらくうち休めば、修行者一兩客、繩床そばにたてゝ又休む。

　立かへるうつの山ぶしことづてよ都こひつゝひとり越えきと

行々おもへば、すぎ來ぬる此間の山河は、夢に見つるか現にみつるか、昨日とやいはん今日とやいはん。むかしを今とおもへば我身老いたり、今を昔とおもへば我心わかし。古今をへだつるものは、わが心の中懐なり。生死涅槃猶如昨夢といへるも、あはれにこそおぼゆれ。昨日過ぎにしあとはけふの夢となり、今日此所をすぐる、明日いづれの所にして、今は昨日といはん。誠にこれ過ぎぬるかたの歳月を、夢よりゆめにうつりぬ。

昨日今日の山路は、雲より雲に入る。

　あすや又きのふの雲におどろかんけふはうつゝのうつの山越

貴も下賤もの意

中呂の節―四月

播豆藏―今の初倉

さかし―流れ急なり

肱を云々―坂路を登る姿の形容

れぬべく覺ゆれ。

心あらばさぞなあはれと水ぐきの跡かきわくるやどのたび人

妙井渡と云ふ所の野原をすぐ。中呂の節にあたりて、小暑の氣やう〳〵催せども、いまだ納涼の頃ならねば手に掬ばず。

夏ふかき清水なりせば駒とめてしばし涼まば日はくれぬべし

播豆藏の宿をすぎて大堰川をわたる。此川は川中に渡りおほく、又水さかし。流をこえ島をへだてゝ、瀬々かた〴〵にわかれたり。此道を二三里行けば、四望かすかにして、遠情おさへ難し。時に水風例よりも烈しくて、白砂霧の如くにたつ。笠をかたぶけて駿河國にうつりぬ。前島を過ぐるに浪はたゝねども、藤枝の市を通れば花はさきかゝりたり。

前島の市には波のあともなしみな藤枝のはなにかへつゝ

岡部の里邑を過ぎてはるかに行けば、宇都の山にかゝる。此山は山中に山を愛するたくみのけづりなせる山なり。碧岸の下に砂ながうして巖をたて、翠嶺の上に葉おちて壤をつく。肱を背におひ、面を胸にいだきて、漸くにのぼれば、汗肩袒の肌にながれて、單

唐名

萬歳の山のこゑ—漢の武帝の故事によりて天子の萬歳を壽高く呼ぶを嵩呼又は山呼といふ也

麗水蜀川の貢—各地よりの貢、支那の地名を借りたる迄にて別の意義なし、能後に此例多し

刹利、首陀—刹利は刹帝利種の略、印度四姓中の第二位にて、武力に由り所在に土国民庶を領し政治を行ふを分とするもの、首陀は四姓中の最下級にて賤業を以て職とす、

風あれて海内の波さかへりき。闘亂の亂將は花城よりみだれ、合戰の戰士は夷國より戰ふ。暴雷雲を響かして、日月光をおほはれ、軍慮地を動かして、弓劍威をふるふ。其あひだ萬歲の山のこゑ、風忘れて枝をならし、一淸の河の色、波あやまつて濁をたて、茨山汾水の源流たかく流れ、はるかに西海の西にくだり、鵷相羽林の花族、遠く落ちて、東關の東にちりぬ。是のみにあらず、別離宮の月の光、所々にうつりぬ、雲井をへだてゝ旅の空にすみ、鷄籠山の竹の聲、方々にうれへたり、風のたよりを絕えて外土にさまよふ。夢かうつゝか、むかしも未だきかず。錦帳玉端の床は、主失せて武客の宿となり、麗水蜀川の貢、數をつくして邊民のたからとなりにき。夜晝たはぶれて衿をかさねし鴛鴦、千歲比翼ちぎりいきながら絕え、朝夕にうやまひて袖をさめし僮僕も、多年知恩のこゝろざし思ひながら別れぬ。實に會者定離のならひ、目のまへに見ゆるに。刹利も首陀も、かはらぬ奈落の底のありさま、あはれにこそおぼゆれ。今は歎くとも、たすくべき人もなければ、涙をさきだてゝ、心よわくうち出でぬ。その身にしたがふものは甲冑の兵、こゝろを一騎の客にかく。其目にたつものは、劍戟のつるぎ、魂を寸神の胸にけす。せめて命のをしさにかく書付けられけんこそ、するすみならぬ袖の色もあら

まに叶ふとて此名あり
中丹—まごころ
三輪山云々—三輪の神詠「我庵は三輪の山もと戀しくば尋ね來て見よ杉立てる門」
秦蓋—松、秦の始皇の泰山を封じたる時疾風暴雨に逢ひて松にかさやどりし其樹を五大夫に封じたる故事
商絃—商は五音の一、松風の樂を奏するをいふ
宗行卿云々—東鑑承久三年七月の條に出づ「昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、今東海道菊河、宿西岸而失命」とあり、本文なるは誤
黃門—中納言の

社の後に小川をわたれば、佐夜中山にかゝる。此山口をしばらくのぼれば、左に深谷右も深谷、一峯ながきみちは、堤のうへに似たり。兩谷の梢を眼下に見て、群鳥の囀るを足の下に聞く。谷の兩片は高く、又山の間をすぐれば、中山とは見えたり。山はむかしの山、九折の道ふるきが如し。梢はあらたなる梢、千條のみどりみな淺し。此所はその名殊に聞きつる所なれば、一時のほどに百般立ちとまりて打眺めゆけば、秦蓋の雨の音は、ぬれずして耳をあらひ、商絃の風の響は、色あらずして身にしむ。

　わけ登るさよの中山なか〳〵に越えてなごりぞ苦しかりける

時に胡馬ひづめ疲れて、日烏翅さがりぬれば、草命をやしなはんがため、菊川の宿にとまりぬ。或家のはしらに、故中御門中納言宗行卿、かく書付けられたり。「彼南陽縣の菊水、下流を汲んで齡をのべ、此東海道の菊河、西涯に宿りて命を全くせんことを」殊に哀れとこそおぼゆれ。身は累葉の賢枝にうまれ、其官は黃門のたかき階にのぼる。雲のうへの月の前には、冠の光をまじへ、仙洞の花の下には、錦の袖の色をあらそふ身たり。榮分にあまりて時の花と匂ひしかば、人それをかざして、近きも從ひ遠きも靡きしも、かゝるうきめ見むとは思ひやはよるべき。さてもあさましや、去る承久三年中旬、天下

みちことなればの「こ」文字を脱するか
天中川—天龍川
扒—剖分する義の字、水をかき分くる意にて「かい」と訓ずべきか、又は扒の誤にて「さらへ」といふ農具にや
王覇—字は元伯、漢の潁陽の人、光武の呼沱河に至りし時、河水流澌りて渡るべからざりしを、衆を驚かさん事を恐れて、氷堅くして渡るべしと奏せしが、前んで河に至るや、河水果して合へり、本文之に因る
事のまゝ—神名帳に「遠江國佐野郡己等之麻知神社」とあり、願ふこと事のま

ば、見るに從ひて珍らしく、天中川をわたれば、大河にて水面三町ばかりあれば、舟にて渡る。はやく波さがしくて、棹もさしえねば、大なる扒をもちて、横ざまに水をかきて渡る。かの王覇が忠にあらざれば、滹沱河凘りむすぶべきにあらず、張博望が牛漢浪にさかのぼりけん、浮木の舟のかくやとおぼえて、

よしさらば身をうき木にて渡りなんあまつみそらの中川の水

上の野原を一里ばかりを過ぐれば、千草萬草露の色なほあさく、野煙徑風の音まだよわし。あはれ同じくは、此道の秋の旅にてあれな。

夏草はまだうらわかき色ながら秋にさきだつ野邊のつゆかな

山口といふ今宿を過ぐれば、路は舊によつて通ぜり。野原を跡にし、里村をさきにして、うちかへ〳〵過ぎ行けば、事のまゝと申す社に參詣す。本地をば知らず、佛陀にもいますらん、薩埵にもいますらん。中丹をば神かならず哀みたまふべし。今身もおだやかに、後身もおだやかに、杉のむら立は三輪山にあらずとも、戀しく尋ねてもまゐらん。願ふはたゞ畢竟空寂の法味を納受して、眞實不虛の感應をたれたまへ。

思ふことのまゝにかなへば杉たてる神の誓のしるしとぞ見ん

唐艪おす聲―白居易河亭晴望詩の「秋雁艪聲來」の句による
濱松の浦―今米津濱とて濱松市より約一里の海濱をいふにや
濱渏云々―小波の寄せては珠と碎くるをいふ、沙汰は沙と沙金とをよろげ分くる意の字
きして―指して、向ひて
相生―木火土金水の五性に相剋相生といふ事あり、水と木とは相生也
ふちとなれば―

湖上はるかに浮んで、波のしわ水の顔に老いたり。西にのぞめば、湖海ひろくはびこりて、雲のうきはし風のたくみにわたす。水郷のけしきは、彼も是も同じけれども、湖海の淡鹹は氣味これことなり。浥のうへには浪に翥ぶみさご涼しき水をあふぎ、舟の内には唐艪おす聲秋の雁をながめて夏の空にゆく。本より興望は旅中にあれば、感腸しきりに廻りて、おもひやみ難し。此所をうち過ぎて、濱松の浦にきたりぬ。長汀砂深くして、行けば歸るが如し。萬株しげくして、風波聲をあらそふをみれば、又湖を呑めば即ち曲浦の曲より吐出し、濱渏球を沙汰れば、則ち疊巖の疊にくだきしく。優なるかな艷なるかな、忘れ難く忍びがたし。命あらば□年か再び來つて此浦にすぎん。

　波ははま松には風のうらうへに立止れとや吹きしきるらん

林の風におくられて、廻澤の宿をすぎ、はるかに見わたして行けば、岳の邊には森あり、野原には澤あり。峯に立つ木は枝をうへにさして生ひたれども、水にうつる影は梢をさかさまにして互に相違せり。水と木とは相生中よしと聞けども、うつるかげは向背して見ゆ。時既にたそがれになれば、夜の宿をむかへて池田の宿にとまる。

十二日、池田を立ちてくれ〴〵行けば、林野同じさまなれども、ところ〴〵みちとなれ

究、三戸の人、越王勾踐に事へ偉功を立てゝ後舟に乘じ湖に浮ぶ、本文扁舟の泊は此故事によりて扁の義にいへる也
みるめは云々―水松心なけれど色黒くして浪と區別明かに、却て心ある蜑が毛白くして砂とまぎらはし
七編のこもむしろ―「みちのくの十符の菅ごも七ふには君をしなして三ふにわれねん」
深漏―夜更け
水驛―古へ水路の海にありて舟を備へ置きし所

峯に廻りて兎景はじめて幽なり。浦吹く松風は、臥しもならはぬ旅の身にしみ、巖をあらふ浪の音は、聞きもなれぬ老の耳にたつ。初更の間ひごろの苦みにわかれて、七編のこもむしろに夢見るといへども、深漏はこよひのとまりの珍らしきに目さめて、數隻の松の下にたてり。磯もとゞろに寄る浪は、水口かまびすしく罵れども、晴曇りゆく月は、雲のうす衣をかうぶりて忍びやかにすぐ。彼の釣魚のかけは波の底に入て魚のきもをこがし、夜舟の棹の歌は、枕の上におとづれて、客のねざめに伴ふ。夜も既に明け行けば、星の光はかくれて、宿立つ人の袖は見え、餘所なる聲によばれて、知らぬ友にうちつれて出づ。しばらく舊橋に立ちとゞまりて、珍しきわたり興すれば、橋の下にさしのほる潮は、かへらぬ水をかへし、上さまに流れ、松をはらふ風のあしは、頭をこえてとがむれどもきかず。大かた驛中の贈答は、此所に儲けたり。誰か水驛の跡をいはん。

　橋本やあらぬ渡りと聞きしにもなほ過ぎかねつ松のむらだち

　浪まくらよるしく宿のなごりには殘してたちぬまつのうら風

十一日に橋本をたつ。橋のわたりより行々たちかへり見れば、あとに白浪の聲は、すぐるなごりをよびかへし、路に青松の枝は、あゆむ裳を引きとゞむ。北にかへりみれば、

石利―石ころ

たかし―高し、高志

聲を呑みて―戰戰兢々たるさま

韓康―漢の覇陵の人、字は伯林、藥を長安市中に賣り價を貳にせざる事三十年、時に女子あり從ひて藥を賣る、其韓伯林たるを知らるゝや、飄然去つて覇陵山中に隱る、本文獨往の栖は、此故事により幽閑なる山里の義とせるならん

范蠡―周代越の

やがて高志山にかゝりぬ。石利を踏んで大敵山をうち過ぐれば、燒野が原に草薬萌出でて、梢の色煙をあぐ。此林地を遙かに行けば、山中に堺川あり。これより遠江國にうつりぬ。

下るさへたかしといはどいかゞせん上らん旅のあづまぢの關

此山の腰を南にくだりて、遙かに見おろせば、青海浪々として白雲沈々たり。海上の眺望は此所に勝れたり。漸く山脚に下れば、匿穴の如くに掘入りたる谷に道あり、身をそばめ聲を呑みて下る。くだりはつれば北は韓康獨往の栖、花の色夏の望貧しくして、南は范蠡扁舟の泊、波の聲夕の關に樂ぶ。鹽屋には薄き煙靡然となびきて、中天の雲片たり。濱膠には決れる潮涓焉とたまりて、數條の畝磧々たり。浪によるみるめは、心なけれども黒白をわきまへ、白洲にたてる鷺は、心あれども毛砂にまどへり。優興にとどめられて、しばらく立てれば、此浦の景趣はひそかに行人の心をまどふ。

行き過ぐる袖もしほやの夕けむりたつとて蜑の淋しとや見ん

夕陽の景の中に、橋下の宿にとまる。此泊は鼇海南に湛へて、遊興をこぎゆく舟にのせ、驛路東に通りて、譽號を濱名の橋にきく。時に日車西に馳せて牛漢漸くあらはれ、月輪

德にとふ─とぶと讀り「德」の義に解すべきか、又何かの誤にや
星躔─星の循行する軌道
石瀨─石多き瀨
ひなのすみか─鄙の住家

の輕仙に、鼻酸持鉢忽に智行の德にとふ。巨唐に名をあけて、本朝に譽を留むる、上人誠に貴し。誰かいはん、初發心の道に入る聖なりとは。これ則ち本來佛の世に出でて人を化するにあらずや。行々むかしを談じて、猶々今にあはれむ。

いかにしてうつゝが道を契らまし夢おどろかす君なかりせば

かくて本野が原を過ぐれば、惆かりし蕨は春の心を生替りて、秋の色赫けれども、分行く駒は鹿の毛に見ゆ。時に日重山にかくれて、月星躔に顯はれぬ。曉をはやめて、豐川の宿にとまりぬ。深夜に立出でて見れば、此川は流れ廣く水深くして、誠にゆたかなる渡なり。河の石瀨に落つる浪の音は、月の光にこえたり。川邊に過ぐる風の響は、夜の色白し。又汀ひなのすみかには、月より外に眺めなれたるものなし。

しる人もなぎさに浪のよるのみぞなれにし月の影はさしくる

十日、豐川を立ちて、野くれ里くれ、はる〳〵と過ぐれば、峯野の原と云ふ所あり。日野の草の露より出でて、若木の枝にのぼらず、雲は峯の松風に晴れて、山の色天と一つに染めたり。遠望の感情つきがたし。

山の端は露より底にうづもれて野ずゑの草にあくるしのゝめ

しつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」と詠める故事を
「春やむかしの春ならぬ」の歌句によりていへる也
蜘手に—伊勢物語八橋の記事に「水はくもでに流れて」とある文にとる
斜脚—斜めなる日あし
酉金—西方
遊女—力壽
三州吏—三河守大江定基力壽に別れて後發心して入宋、皇帝に謁し圓通大師の號を賜ふ

渡る。八橋よ八橋よ、蜘手に物思ふ人は、むかしも過ぎきや。橋柱よはしばしらよ、おのれも朽ちぬるか。空しく朽ぬるものは今も又すぐ。

すみわびて過ぐる三河のやつ橋を心ゆきても立ちかへらばや

此橋の上に、思ふことを誓ひて打渡らば、何となく心もゆく樣におぼえて、遙に過ぐれば、宮橋といふ所あり。數雙のわたし板は朽ちて跡なし、八本の柱は殘りて溝にあり。心のうちに昔を尋ねて、言のはしに今をしるす。

宮橋の殘るはしらにこととはん朽ちていく世かたえ渡りぬる

けふのとまりを聞けば、前程なほ遠しといへども、暮の空を臨み、斜脚既に酉金に近づく。日の入る程に矢橋の宿に落ちつきぬ。

九日、矢橋を立ちて赤坂の宿を過ぐ。むかし此しゆくの遊君、花顏春こまやかにして、蘭質秋かうばしき女ありけり。貌を潘安仁が弟妹にかりて、契を三州吏の妻妾にむすべり。妾は良人に先だちて世を早うし、良人は妾におくれて家をいづ。しらず利生の菩薩の化現して、夫を導けるか。又しらず圓通大師の發心して、妾をすくへるか。互の善知識大なる因緣なり。彼の舊室妬が呪咀に、抃舞惡怨かへりて善教の禮をなし、異域朝嘲

夫の辭
楊岐が路—楊朱のわかれ道を見て其以て南すべく以て北すべきを思ひて哭したる故事、淮南子に出づ
逆旅—はたごや
呉山の云々—險しき山坂といふにもあらず、廣き大道ながら息は苦しくはずみたりとの意なるべし、周行は詩經巻耳の語にて大道をいふ
雨をきく—松籟の雨の如きをいふ
千年の貞—朗詠「一千年色雪中深」
一兩—一つ二つ
花はむかしの—伊勢物語業平のこゝろにて「からころもきつゝなれにしつましあれ

けりを恥ぢ、楊岐が路に泣きて、騷人のうらみをいだきけんも、身のたとへにはあらねども、逆旅にして友なきあはれには、何となく心ほそく、空に思ひしられて、

露の身をおくべき山の蔭や無きやすき草葉もあらし吹きつゝ

湖見坂といふ處をのぼれば、呉山の長坂にあらずといへども、周行の短息はこゝにあへたり。數歩を通じてながき道にすゝめば、宮道二村の山中を賒に過ぎて、山はいづれも山なれども、優興は此山にひく、松はいづれも松なれども、木立は此松に止れり。翠を含む風の音に雨をきくといへども、雲に舞ふ鶴のこゑに晴の空を知る。松性々々、汝は千年の貞あれば、面がはりせじ、再往々々、我は一時の命なれば後見期しがたし。

けふすぎぬかへらば又よふたむらのやまぬなごりの松の下路

山中に堺川あり、身は河上に浮んでひとり渡れども、影はみなそこに沈みて我とふたりゆく。かくて三河國にいたりぬ。雉鯉鮒が馬場を過ぎて、數里の野原に一兩の橋を名つけて八橋といふ。砂に睡る鴛鴦は夏を辭し去り、水にたてる杜若は時を迎へて開きたり。花はむかしの色かはらず咲きぬらん。橋も同じ橋なれども、幾度作りかへつらん。相如が世を恨みしは、肥馬に乗りて昇僊にかへり、幽子身を捨つる、窮鳥に類て當橋を

前と後來と

當來—未來、來世

朝には云々—朝夕潮の干滿の甚しきをいふ

西天—西方の天

一生の歡會—朗詠に「翠帳紅閨萬事禮法雖」異、舟中浪上一生之歡會是同」の句にとる

名をきくしま—蓬萊

煩惱は家の犬—寶物集に「煩惱は家の犬打てども去らず、菩提は山のかせき、つなげども不」留」涅槃經に「又如家犬不」畏」於人」とあるに出づ

友をそむきて—下にひとり在るにと補ふ

漁夫があざけり—楚辭屈原の漁

れば、馬をはやめて行く。西天は溟海漫々として、雲水蒼々たり。中上には一葉の舟幽に飛んで、白日の空にのぼる。彼侲男の船中にてなどや老いにけん、蓬萊の島は見ずとも、不死の藥をばとらずとも、波の上の遊興は一生の歡會なり、是延年の術にあらずや。

老せじと心をつねにやる人ぞ名をきくしまのくすりをも得れ

猶此干潟を行けば、小蟹ども己が穴々より出でて蠢きあそぶ。人馬の足にあわてゝ、横にをどり平ざまに走りて、我があなく\へ逃入るをみれば、足の下にふまれて死ぬべきは、外なる穴へ走りて命いき、外に恐れなきは、足の下なる穴へ走り來て踏まれて死ぬ。憐むべし、煩惱は家の犬のみにあらず、愛著は濱の蟹ふかき事を。是を見てはかなく思ふ、我々かしこしや否や。生死の家に著する心は、蟹にもまさりてはかなきものか。

たれもいかに見るめあはれとよる浪の漂ふ浦に迷ひ來にけり

山重りてまたかさなりぬ、河阻りて又へだたりぬ。ひとり舊里を別れて、遙に新路におもむく。知らず、いづれの日か故郷にかへらん。影をならべゆく道づれはあまたあれども、心ざしはかならずしも同じからねば、心に準ずる氣色は、友をそむきて似たれども、折にふるゝ物のあはれは、心なき身にもさすがに覺えて、屈原が澤に呻ひて漁夫があざ

例の切「老」即ち老衰病疾をいふ也

夏引の—糸より幼きに掛る

示現利生の垂跡—本地印度の佛の形を此土の神と現じて生民に利益を與へたるをいふ

阿字門を觀ずれば—阿字は梵語の第一字母にして阿字本不生の深理を示顯するものなりと稱ず、この本不生の阿字を觀ずるを「阿字觀」といひ、之に證達せるを阿字門に證入したる者といふ也

羊質未參—不才にして未だ道に參せず

旬旅、旬り—録

ども、主孝の志おのづから相成るものか。

　山田うつ卯月になれば夏引のいとけなき子もあしひぢにけり

幽月景あらはれて、旅店に人しづまりぬれば、草の枕をしめて、萱津の宿にとまりぬ。

八日、萱津を立ちて鳴海の浦に來ぬ。熱田宮の御前を過ぐれば、示現利生の垂跡にひざまづきて、一心再拜の謹啓に頭をかたぶく。暫く鳥居に向ひて、阿字門を觀ずれば、權現の砌ひそかに、寂光の色に口。夫れ土木霜降つて、瓦上松風天に吹くといへども、靈驗日新にして、人中の心花春の如くに開けたり。しかのみならず、林の梢枝をたるゝ幡蓋社頭の上におほひ、金玉の榱端をうつ。金色を神殿の面にみがく、かの和光同塵は來際をかざる期なき事を憐む。羊質未參の後悔に向前のうらみあり、後參の未來に向方のたのみなし。願はくは今日の拜參をもちて、かならず當來の良緣とせん。路次の便詣なりといふ事なかれ、此機感相叶ふ時なり。光をまじふるは冥を導く誓なり、明神定めてその名に應じたまはゞ、長夜の明曉は神にたのみあるものをや。

　光とづる夜のあまの戸はやあけよ朝日こひしき四方の空見ん

此浦をはるかに過ぐれば、朝には入海にて、魚にあらずば游ぐべからず、晝は鹽干潟な

河伯、山祇—河の神、山の神、山川の地形をいふ、朗詠に「草木扶疎春風梳」山祇之髮」魚鼈遊戲秋水蕃」河伯之民」

つながぬ駒云々—美景に心のはださるゝ喩

難面—しやアしやアとしたる、諺に「蛙のつらに水」

さして—格別、棹の緣語

桑の下宅—貧しき農家、桑戸、桑樞といふ類

潦倒たる—老ぼれたる、龍鍾潦倒の略、この語は反切による有名なる謎にて、龍鍾の切「瀧」潦

夜陰に市腋と云ふにとまる。前を見おろせば海さし入て、河伯の民うしろにやしなはれ、見あぐれば峯峙ちて、山祇の髮風にけづる。磐をうつ夜の浪は千光の火を出し、木々になく曉の鼯は孤枕の夢を破る。此所に留まりて心はひとりすめども、明け行けば友にひかれ打出でぬ。

松がねのいはしく礒の波まくら臥しなれてもや袖にかくらん

七日、市腋を立ちて津島の渡と云ふ所を舟にて下れば、蘆の若葉あをみわたりて、つながぬ駒も立ちはなれず。菱の浮葉に浪はかくれども、難面きかはづはさわぐ氣もなし。とりこす棹のしづく袖にかゝりたれば、

さして物を思ふとなしにみなれ棹みなれぬ浪に袖はぬらしつ

渡りはつれば、尾張の國にうつりぬ。片岡には朝陽の影うちにさして、燒野の草に雉なきあがり、小篠が原に駒あれて、泥みしけしき引きかへて見ゆ。又園中に桑の下宅あり、宅には蓬頭なる女、賓にむかひて蠶養をいとなみ、園には潦倒たる翁、鋤を持て農業をつとむ。大かた禿なる小童部といへども、田を習ふ心ざし、たゞ足を泥とする思のみあり、若くしてより業を習ふ有さま、あはれにこそ覺ゆれ。實に父兄の敎つよしまざれ

て後、孟嘗君の客能く雞鳴を爲して函谷關を夜中に出でたる故事
仁者、智者—論語の「仁者樂山智者樂水」の語に取る
東作—農作
西收—秋の取入れ
劉寛—漢の華陰の人、字は文饒、性仁厚也、桓帝の時南陽太守に遷る、吏民過あれば但蒲鞭を用ひて辱を示すのみ終に苔を加へず
蒲鞭云々—朗詠「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不驚」

ば過ぎて漸く下れば、巌扉けづりなせり、仁者の栖、しづかにして樂み、澗水掘ながす、智者の砌、うごけどもゆたかなり。かくて邑里に出でて、田中の畔を通れば、左に見右に見、立田渺々たり。或は耕し己がひき〳〵に論じ、畦畝あぜを並べて、苗を我とりどりに藝ゑたり。民の煙は父君心體の恩火よりにぎはひ、王道の徳は子民稼穡の土器より開けたり。水龍は本より稻穀を護りて夏の雨をくだし、電光はかねてより九穂をはらみて三秋をまつ、東作の業力をはけます、西收の稅たのもしく見ゆ。劉寛が刑を忘れたり、蒲鞭定めて螢に成りぬらん。

苗代の水にうつりて見ゆるかないなばの雲のあきのおもかけ

日數ふるまゝに古鄕も戀しくて、立ちかへり過ぎぬる跡をみれば、いづれか山いづれか水、雲より外に見ゆるものなし。朝に出でて夕に入る、東西を日の光にわきまふといへども、晩ればとまり明くれば立ち、晝夜を露命に論ぜん事は難し。おのづから一歩を捨てて萬歩をはこばゝ、遠近かぎりありて往還を期しつべし。只あはれむ、遙に都鄙の中路に出でて、前後の思に勞する事を。

ふるさとは山のいくへにへだて來ぬ都の空をうづむしらくも一

嵇康が姿—松をいふ、朗詠に「千丈凌レ雪聽レ喩ニ嵇康之姿一、百歩亂レ風誰破ニ養由之射一」

蜀人の錦—紅葉をいふ

山里江複は常路に有り—宋詩「山重水複疑レ無レ路」の句の翻案か、山里は山重の誤にや

虛弓—弓張月

竹は吾友—朗詠に「唐太子賓客白樂天、愛爲ニ吾友一」友の字原本丈とあれど今改む

函谷の鷄の後—關所の門も開き

山よりは伊勢の國にうつりぬ。重山雲さかし、越ゆれば千丈の屛風彌しげく、群樹煙ながし、褰ぐればまた萬尋の帷帳ます〳〵あつし。峯には松風かた〳〵に調べて、嵇康が姿しきりに舞ひ、林には葉花稀に殘りて、蜀人の錦は纔にちりぼふ。是のみにあらず、山姫の夏の衣は、梢の緣にそめかけ、樹神の音の響は、谷の鳥にこたふ。此路を何里ともしらず越え行けば、羊腸坂きびしくして、驚馬石に足なえたり。すべて此山は、一山の中に數山をへだてゝ千巖の峯にさはり、一河のながれ百瀨に流れて衆客の歩みに足をひたせり。山里江複は常路に有りといへども、萬里の行者はなかばもいたらず。

　鈴鹿川ふるさと遠く行くみづに濡れていくせの浪をわくらむ

薄暮に鈴鹿の關屋にとまる。上弦の月峯にかゝれり、虛弓いたづらに歸雁路にのこり、下流の水谷に落ち、奔箭すみやかにして、虎に似たる石にあたる。爰に旅驛漸くにかさねて、枕を宿緣の草にむすび、雲衣曉にさむし、袖を岩根の苔にしく。松は君子の德をたれて、天の如くおほへり、竹は吾友の號あれば、風に臥して夜をあかす。

　鈴鹿山さしてふるさとおもひねのゆめ路のすゑに都をぞとふ

六日、孟甞君が五馬の客にあらざれば、函谷の鷄の後、夜をあかしてたつ。山中なか

存外—原本「本のまゝ」と傍注せり

ゑぐ—野菜の名、根に小さき芋ありて味ゑぐきものといひ、又、芹の一名ともいふ

蓑毛—鷺の頸に亂れ垂れたる羽毛

白檜のかげ—白檜といふ星の名古樂府に見ゆ、夜間の意なるべし

緑林—盜賊

廬山の云々—白氏文集十七、廬山草堂雨夜獨宿の詩にて「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草菴中」とあるをいふ

旅衣まだ著もなれぬ袖のうへにぬるべきものと雨はふりきぬ

田中うち過ぎ、民宅打過ぎて、はる〴〵と行けば、農夫並び立ちてあら田をうつ。聲は行雁のなき渡るが如し。卑女うちむれ、前田の面にゑぐつむ。存外しづくに袖をぬらす。そともの小川には、河ぞひ柳に風たちて、鷺の蓑毛うちなびき、竹の編戸の垣根には、卯花咲きすさびて、山時鳥忍びなく。かくて三上の嶽を望みて、野洲河をわたる。

いかにしてすむやす川の水ならんよ渡るばかり苦しきやある

若椙と云ふ所を過ぎて横田山を通る。此山は白檜のかげにあらはれて、緑林の人をしきる所とも聞ゆれば、益なく覺えていそぎ行く。

はや過ぎよ人のこゝろのよこた山みどりのはやし陰に隱れて

夜景に大岳といふ所にとまる。年比うちかなはぬありさまに思ひとりて、髮をそりければ、いつしかかゝる旅寐するも哀にて、かの廬山の草菴の夜雨は情ある事を樂天の詩に感じ、此大岳の柴の宿の雨には何事を貧道の歌にはづ。

すみぞめの衣かたしき旅寐しついつしか家をいづるしるしに

五日、大岳を立ちて遙に行けば、内の白河外の白河と云ふ所を過ぎて、鈴鹿山にかゝる。

不定の再覲—再び老母に見えん事のいつと定めなきをいふ

湯井—由井、鎌倉西郊の海岸

萍實、桂花—太陽、月

今日明日とも知らぬ—いつ死ぬかも知れぬ

あふみ—逢ふ身、近江

形をほゆ—「一犬形に吠えて萬犬聲に吠ゆ」の語に依る

一生の新賓なれば、感恩おさへがたし。感思の中に愁傷の交る事あり、所謂母儀の老を口、又いとけなきを都にとゞめて、不定の再覲をちぎり置く。無狀かな愚子が爲體、浮雲に身を乘て旅天にまよひ、朝露の命にて風のたよりにたゞよふ。道を同じうするものは、我を知らざる容なり。語は親昵に契りて、いづちか離れなんとする。長途に疲れて十日あまり、窮屈しきりに身をせむ。湯井の濱にいたりて一時半偃息、しばらく心をゆるぶ。時に萍實西にしづむ、舊里を忍びて後を期し、桂花東にひらけ、外鄕に向つて中懷を惱ます。仍三十一字を綴りて、千度思ひ萬度懐ひて、旅の心ざしをのぶ。此は是文を以てさきとせず、歌を以て本とせず、たゞ興にひかれて、物のあはれを記するのみなり。四月四日の曉、都出でし朝より雨にあひて、勢田の橋のこなたにしばらくとまりて、雨じたくしてゆく。今日明日ともしらぬ老人を、ひとり思ひおきてゆけば、

　思ひおく人にあふみのちぎりあらば今かへりこん瀬田の長橋

橋のわたりより雨まさりて、野徑の道芝露殊に深く、八町畷を過ぐれば、行人たがひに身をそばめ、一邑のさと通れば、亭犬頻に形をほゆ。今日しもならはぬ旅の空に、雨さへいたく降りて、いつしか心のうちもかき曇るやうに覺えて、

いかる—下に相貌と補ふ
後路山さかりて—來りしうしろの路は山に距てられ遠くなりて
斜陽—夕日
臘雪—去冬の雪
むかしの跡—伊勢物語「駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人に逢はぬなりけり」
行々として—古詩十九首劈頭の句
抖擻—行脚

通りぬ。小關をうち越えて、大津の浦をさして行く。關守の門をだに顧れば、金剛力士忿怒のいかろ、眼を驚かし、勢田の橋を東にわたれば、白浪瀧落ちて流眄とながれ、又身をひやす。湖上に船をのぞめば心興にのり、野庭に馬をいさめて手に鞭をかなづ。漸くに行くほどに、都をはるかに隔てぬ。前途林幽なる、纔に青蒼栫にみゆ。後路山さかりて、白雲路をうづむ。既に斜陽影くれて、暗雨しきりに笠にかゝる、袖をしぼりて、はじめて旅のあはれを知りぬ。其間山館に臥して露より起く、曉の望蕭々たり。煙高卑千巖の路をうづみ、水に臨みてまた水に臨む。波の淺深、長堤の汀にすゝむ。濱名の橋の橋下には、往事をちかひてこゝろざしをのべ、清見がせきの關屋には、あかぬ名殘をとゞめて歩をはこぶ。富士の高根に煙を望めば、臘雪宿して雲ひとりむすび、宇津の山路に蔦を尋ぬれば、むかしの跡夢にして風の音おどろかず。木々の下には、下ごとに翠帳をたれて、行客の苦みをいこへ、夜々の泊には、とまり毎にこも枕をむすびて、旅人の眠をたすく。行々として重ねて行々たり、山水野塘の興こそ觀をまし、歷々として更に歷々たり、海村林邑の感いやめづらかなり。此道若四道の間に逸興の勝れたるをかね、又孤身が抖擻の今旅はじめなれば、遇孤たる舊客猶ながめを等閑にせず。況や

鹿遊苑、築渦州─共に佛典に出て、中心樞要の地たるに喩ふ

百歩の柳─史記に「楚有養由基者、善射者也、去柳葉一百歩而射之、百發而百中之」とある故事

去年云々─鎌倉の事は舊數年來耳に聞き口に上せ心に思ひながら未だ旅程に登らずとの意なるべし

五更─午後四時、早朝の意

あへずして─名殘も惜みあへずして

九重の寶塔─東大寺の塔

松─たいまつ

て装とす、出家の身なり。藁沓をふんで駕とす、遁世の道なり。そも〱相摸國鎌倉の郡は、下界の鹿遊苑、天朝の築渦州なり。武將の林をなす、萬榮の花萬にひらけ、勇士道に榮えたり、百歩の柳百たび中り、弓は曉月に似たり、一張そばだちて胸をたふし、劍は秋の霜の如し、三尺たれて腰すゞし。勝鬪の一陣には、爪を楯にして仇を雌伏し、猛豪手にしたがへて直に雄稱す。干戈威をいつくしくして、梟鳥敢てかけらず。誅戮にきびしくして、虎おそれをまし、四海の潮の音は、東日に照されて浪をすませり。貴賤臣妾の往還する多く、驛の路隣をしめ、朝儀國務の理亂は、萬緒の機かた〱に織り、去年質耳外に聞をなして、おほくの歳をわたり、舌の端脣して、いくばくの日をか送るや。心の船洋爲に漕ぎ、未だ海道萬里の波に棹さゝず。乘馬あらましに馳す、いまだ關山千程の雲にむちうたず。今便人の芳緣に乘じて、俄に獨身の遠行を企てり。貞應（後堀河）二年卯月の上旬、五更に都を出でて、一朝に旅立つ。昨日はすみわびて、厭はしかりし宿なれども、今立別るれば名殘をしく覺えて、しばしやすらへども、鐘の聲明けゆけばあへずして、いつまた粟田口の堀道を南にかいたをりて、相坂山にかゝれば、九重の寶塔は北の方にかくれ、又相坂を下に松をともして過行けば、四宮河原のわたりはしょのめに

憂を忘れん—諺に「酒は憂の玉箒」

しらぬ翁—我容貌の我知らず老いたるをいふ

鶴髪—白髪の髪

衣の裏の珠—佛法に所謂衣珠喩、如來の方便開示によりて大乘の果を證得する喩

旦暮の露の身—よ老いて死の近りたるはかなき身

遺忘とおこたる—音訓を重ねていへる也、以下にも此類例多し

鶏眼—鳥目、ぜに

廖牙—米、其白きを喩へいふ

見てか志をやしなはん。樽の酒も酌む事を得ざれば、心に常に醒々たり、いかゞ憂を忘れんや。然る間、歳の水早く流れて、生涯はくづれなんとす。留むとすれども留まらず、五旬の齢の流、車坂に下る。朝に馳せ暮に馳す、日月の廻の駿駒の隙、鏡の影に對居て、しらぬ翁に恥ぢ、鑷子を取つて白絲をあはれむ。是によりて、佛のうへには齢をおどろかす老をつけ、鶴髪のほとりに早落をいとふ花、露におどろき霜を厭ふこゝろざし忽に催して、僧を學び、佛に歸する念やうやくにおこる。名利は身に棄てつ、稠林に花ちりなば、學樹の菓は熟するを期すべし。薜蘿は肩にすがり、法衣の色そみなば、衣の裏の珠は悟る事を得つべし。旦暮の露の身は、山かけの草をおき所とすれども、朝霞は望絶えて、天を仰ぐに空し。世を厭ふ道は貧道より出でたれども、佛を念ずる思は遺忘とおこたる。四聖の無爲を契りしも、一聖猶頭陀の道にとゞまりき。ひとへに己が有爲をいとひ貪り、己いよ〳〵坐禪の窓にいそがし。然して曹瞞が酒も人を醉してよしなし、子牢が賄は心に賄へて身の樂みとせり。鶏眼なけれど、天命の路に杖つきて歩みをたすく。廖牙はかけたれども、地恩の水に口すゝぎて渇をうるほす。空腹に一盃の粥をすゝれば餘味あり。薄紙百綴の衿、寒に服すれば肌を暖むるに足れり。檜笠をかぶり

性器に底なければ云々―天性しつかりしたる所なく、藝能を修むるに身に留まらずとの謙辭
投身の云々―身を淵に投ずるの決心もつき難し
蕨を折りて―首陽山に蕨を折りたる伯夷叔齊の故事
臨める―目前に差迫りたる
窓の螢も云々―車胤の故事、學習せざるをいふ

海道記

源光行

白河のわたり中山の麓に、閑素幽栖の侘士あり。性器に底なければ、能をひろひ藝をいるゝにたまるべからず。身運は本より薄ければ、報をはぢ、命をかへりみて、恨をかさぬるに所なし。徒に貪泉の蝦蟇となりて、身を藻によせて力なき音をのみなき、空しく窮谷の埋木として、意樹に花たえたり。惜からぬ命のさすがに惜ければ、投身の淵は胸の底に淺し。存ずるかひなき心は、なまじひに存じたれば、斷腸の棘は愁の中に茂り、春は蕨を折りて臨める飢をさゝふ、伯夷が賢にあらざれば人もとがめず。秋は菓を拾ひて貧しき病をいやす、美子が藥も未だ飢ゑたるをば治せず。九夏三伏の汗は拭ひて苦しまず、手中に扇あれば、涼を招くにいとやすし。玄冬素雪の嵐は凌ぐに能はず、身のうへに衣なければ、寒をふせぐにすべなし。窓の螢も集めざれば、目は暗きが如し、何を

日記紀行集 目錄

べき語句を掲げ、其下に一線を加へたるもの卽ち校訂者の加註にして、然らざるは原本所載の頭書と知るべし。

大正四年五月

校訂者　塚本哲三

著せるまでの記錄也。其大部分は地理歴史に關する考證にして、紀行文としては格別面白きものにもあらざれど、古文學に志すものの必らず熟讀すべき重要なる記事甚だ多し。羇旅漫錄は曲亭馬琴の筆に成り、享和二年五月九日江戸を立ちて、東海諸國を經、京阪に遊び、同八月廿四日歸來せる間の各地の隨見隨聞の筆錄也。一種の隨筆とも見るべく、普通に所謂紀行文とは自ら其趣を異にせり。小說家としての馬琴の筆が絢爛莊麗の趣多きに反し、淡々として奈良茶漬の如き本篇の文字は、亦これ格別の風味たらずんばあらず。加之東海及京阪地方の人俗風俗を知るに於て、寔に絕好の資料といふべし。

校訂の一般方針は他の本文庫本と異ならず。然して海道記、東關紀行、廻國雜記、九州道の記の四種は專ら群書類從本に據り、野ざらし紀行は翠園抄、おくの細道は菅菰抄を主なる參考本として用ひ、頭註も多くは其所說に從へり。其他の各書何れも流布の版本に從ひて、なるべく原本の形式をも破らざらん事に努め、羇旅漫錄の如きは原本の頭書をもそのまゝ採錄し、校訂者加ふる所の頭註とは記載形式を異にして之を掲ぐる事となしたり。註解す

ことを得ざれども、この三大家が口を極めて賞讃せるが如く、其天才的筆致と奇警なる觀察眼とを有したりし點に於て、遠く平安朝に於ける淸女の壘を摩するものと謂つべし。

伊香保の道行きぶりは眞淵門下の才媛倭文女の作に係り、十八歳の時母と共に伊香保に遊べる紀行文にして、其歌文集文布中に收めたり。行文流麗優雅、前の二閨秀の述作と相並びて、寔に女流文學中の華と稱すべし。

旅のなぐさ、岡部日記、後の岡部日記の三篇は何れも加茂眞淵の作也。旅のなぐさは一に西歸と稱し、京都より鄕里遠江に歸りたる時の紀行なるが、其年代詳ならず、紀行文としてよりも、途中に於ける名所舊蹟の考證として其價値を認むべきもの也。岡部日記は某年江戸より故鄕に歸りたる時の紀行にて一に東歸と稱し、後の岡部日記は某年の秋重ねて江戸より遠江に歸りたる時の紀行なり。三篇を通じて地名其他の考證の讀者を利するもの多く、文亦一種莊重の趣ありて、紀行文中の逸品たるを失はず。

菅笠日記は本居宣長の吉野花見の紀行にして、明和九年三月五日伊勢を出で、同月中旬歸

作を添へたり。文詩と共に淡々の中亦捨て難き妙味を藏す。
野ざらし紀行と奥の細道とは共に俳界の巨人松尾芭蕉の述作に係り、前者は貞享元年江戸を出で、東海道筋を京に上り、甲斐を經て歸來せる俳諧紀行、後者は元祿二年上磐奥羽より北陸の諸國を經て美濃に出でたる紀行也。芭蕉の俳句と俳文とは共に一流中の一流として世に定評の存する所、今敢て屋下屋の讃辭を贅する要なからん。
東海紀行と歸家日記とは共に井上通女の作にして、前者は天和元年通女が十六歲の秋讃州丸龜を出でて江戸に到れる日記、後者は多年江戸にありし著者が、其仕へし主君養性院の逝去の後、三田茂左衞門に嫁し、鄕里丸龜に歸れる際の紀行にして、詩あり歌あり、文圓轉活達にして而も雄渾の趣を備へ、著眼亦甚だ凡ならず。蓋し女流作家中の白眉として推すべきもの也。
庚子道の記は武女といへる白拍子の作にして、享保五年庚子尾張より江戸に歸れる折の日記也。淸水濱臣標註を加へ、千蔭、春海敍文を添へて出版せり。武女の傳は其詳細を知る

行詳解」の卷末に於て之を詳論せり。文は前者よりも餘程立ち優れて圓轉の妙に富み、所謂雅文の趣に近くして、漢文より來れる佶屈聱牙の口調少なし。思ふに紀行文學中の一流として數ふべきものならん。

廻國雜記は道興准后の作にて、文明十八年六月京を出で、北陸東海の諸州を歷遊せる紀行文也。詩あり、歌あり、俳諧あり、以て當時の文學を窺ふの一資となすべく、殊に歷史地理の資料として最も貴重なるものの一に居る。

九州道の記は玄旨細川幽齋の作る所、天正十五年四月居城田邊を出で、九州に到り、歸路山口、宮島、姬路等を巡遊し、大阪に到れる紀行也。幽齋は當時歌人中の巨匠にして、夫の古今傳授をも受けたる人なれば、此片々たる一紀行文も、亦當時の文學を代表せる述作の一として數へざるを得ず。

丙辰紀行は林道春の作にして、元和二年丙辰江戸を出で、東海道より關西地方を經て比叡、大津に到れる紀行にて、其間の名所五十二箇所を擧げ、其地の史實典故を錄し、詩歌の述

緒　言

海道記以下十六編の著名なる日記紀行文を萃めて本書一卷を爲す。之と倂せ讀むに、曩に本文庫第一輯中の一編として刊行せる「平安朝日記集」を以てせば、各時代に於ける日記文學紀行文學の大半を窺ひ知るに足らん。

海道記は貞應二年の卯月上旬、京都を立ちて、東海道を經、鎌倉に到れるまでの紀行にして、作者に關し古來諸說あり、最も有力なるは鴨長明說と源光行說となれど、共に事實と齟齬せる點少なからず、殊に長明說は其根據薄弱なるが如し。今姑く一般に比較的事實に近しと認められたる光行說に從ひて、更に後考を俟つ事とせり。文は漢籍と佛典とより脫化したる一種の通俗文にして、文學的價値は餘り豐富なりとも稱し難けれど、其最も時代的色彩鮮かなる點に於て、亦讀書子の逸すべからざる好篇也。

東關紀行は仁治三年の秋京都より鎌倉に到れる間の紀行文にして、作者は古來源光行の子親行なりと稱せらるれども、これはた疑はしき點少なからず。鳥野幸次氏、其著「東關紀

日記紀行集

全

